

博士論文

建築家・野口孫市とその作品に関する研究

林 和 久



野口孫市

(1869~1915)

目次

序章	1
0. 1 明治後期という時代	1
0. 2 近代日本における建築家第2世代の人々	2
0. 3 野口孫市研究の背景と目的	3
0. 4 野口孫市研究の方法的な視座としての「建築術」	4
0. 4. 1 建築技術	4
0. 4. 2 建築を生み出す思考や方法	4
0. 5 野口孫市研究の方法と本論文の構成	6
0. 5. 1 第1部 野口孫市の人とその時代 (第1章～第3章)	8
0. 5. 2 第2部 野口孫市の建築術 (第4章～第7章)	9
0. 5. 3 結章	13
0. 6 既往研究との関係	13
0. 6. 1 建築史研究者による研究・論説文献	14
0. 6. 2 住友関係者による研究文献および資料	14
0. 6. 3 野口孫市の姉・野口幽香に関する研究文献	15
0. 6. 4 日建設計による研究文献および資料	15
第1部 野口孫市の人とその時代	19
第1章 野口孫市の人物像成立の背景	20
1. 1 江戸から明治への時代の激動期、姫路藩に生まれる	20
1. 1. 1 姫路藩士の父と、儒学者の娘であった母	20
1. 1. 2 姉・野口幽香 -近代日本の幼児教育の祖-	21
1. 1. 3 姉と弟、そして『衣喰住之内家職幼絵解図』	23
1. 2 少年期～青年期の野口孫市がいた場所	26
1. 2. 1 生野鉦山にて - 野口姉弟の遊び場だったムーセ邸-	26
1. 2. 2 姫路城、そして後の神戸中学と京都の第三高等学校	29
1. 3 結婚そして岳父・久保田讓	33
1. 4 東洋的な知的鍛錬の遺風と西洋の実践的自由思想	34
1. 5 旧姫路藩のネットワーク	38
1. 6 野口孫市の人物像	39

第2章	建築家への助走	4 6
2. 1	西洋建築についての学習と研鑽	4 6
2. 1. 1	工科大学造家学科の教授陣と第1世代の建築家たち	4 6
2. 1. 2	野口孫市の卒業設計	4 9
2. 1. 3	野口孫市の卒業論文	5 1
2. 1. 4	大学院時代の野口孫市による西洋建築の透写習作	5 5
2. 1. 5	欧米建築視察巡遊	6 5
2. 2	「日本」への視線	7 2
2. 2. 1	日本の伝統的な「造り」から学ぶ	7 2
2. 2. 2	日本各地の「風景の読み込み」	7 5
2. 3	明治生命保険大阪支店と札幌電話交換局	8 3
2. 3. 1	明治生命保険大阪支店の設計	8 3
2. 3. 2	博物館明治村に保存された重文・札幌電話交換局	8 6
2. 4	構造技術者としての野口孫市	9 0
2. 4. 1	濃尾地震	9 1
2. 4. 2	庄内地震	9 3
2. 4. 3	サンフランシスコ地震	9 6
2. 5	住友よりの招聘	9 9
2. 5. 1	二人の住友家建築顧問 一山口半六と辰野金吾	1 0 0
2. 5. 2	住友入社	1 0 2
第3章	住友春翠と住友本店臨時建築部の創設	1 0 6
3. 1	第15代住友吉左衛門友純 一 雅号：住友春翠	1 0 7
3. 2	春翠の国際関係への視野 一 実兄・西園寺公望と春翠の海外巡遊	1 0 9
3. 3	住友春翠の人と美意識	1 1 5
3. 3. 1	江戸期から明治期の春翠の住友入りまで	1 1 5
3. 3. 2	経営者としての春翠	1 1 6
3. 3. 3	高い美意識の持主としての春翠	1 1 8
3. 4	三井・三菱との比較	1 2 8
3. 5	住友本店臨時建築部の創設	1 3 0
3. 5. 1	尾道会議と住友銀行の設立	1 3 0
3. 5. 2	住友本店臨時建築部の設立	1 3 2

第2部 野口孫市の建築術・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 139

第4章 住友家須磨別邸 ―日本人にふさわしい洋館を―・・・・・・・・・・・・・・・・ 142

4. 1	住友家須磨別邸の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	143
4. 1. 1	須磨について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	143
4. 1. 2	須磨別邸の沿革と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	144
4. 1. 3	関西の迎賓館として・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	147
4. 2	配置計画における西洋的な建築手法・・・・・・・・・・・・・・・・	149
4. 2. 1	敷地全体に描かれていた1次骨格としての幾何学・・・・・・・・	149
4. 2. 2	西欧における幾何学的なアーバン・デザイン手法・・・・・・・・	151
4. 2. 3	敷地全体に散りばめられた「春翠のお気に入り」・・・・・・・・	152
4. 3	全体構成にみる日本的な建築手法・・・・・・・・・・・・・・・・	154
4. 3. 1	日本庭園の構成手法から・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	154
4. 3. 2	「庭屋一如」について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	155
4. 3. 3	屋根の構成に見る日本建築の手法・・・・・・・・・・・・・・・・	157
4. 4	風車型平面計画と3つのゾーニングそして3本の塔・・・・・・・・	160
4. 4. 1	2次骨格としての風車型平面計画・・・・・・・・・・・・・・・・	160
4. 4. 2	外部空間の3つのゾーニングとその場所的意味・・・・・・・・	163
4. 4. 3	水平性と3本の塔・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	166
4. 5	“Comfort”という空間性能・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	170
4. 5. 1	「四角塔」の内部・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	170
4. 5. 2	半屋外空間としてのテラス・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	171
4. 5. 3	1階大食堂と2階客室・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	172
4. 6	英国ルネサンス風を基調とした内装デザイン・・・・・・・・	173
4. 7	須磨別邸の工法と意匠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	177
4. 7. 1	本館の工法と意匠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	178
4. 7. 2	附属屋の工法と意匠・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	184
4. 8	野口孫市が設計していた他の洋館邸宅群・・・・・・・・	186
4. 8. 1	旧・伊庭貞剛邸「活機園」・・・・・・・・・・・・・・・・	187
4. 8. 2	旧・田辺貞吉邸・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	190
4. 8. 3	鶴崎平三郎邸と志立鉄次郎邸・・・・・・・・・・・・・・・・	192
4. 9	明治期洋風建築のなかでの須磨別邸の歴史的位置づけ	196
4. 9. 1	須磨別邸以前もしくは同時代の洋風邸宅建築	196
4. 9. 2	須磨別邸以降の洋風邸宅建築	197
4. 10	当時の英国の建築的潮流と米国東海岸からの影響	200
4. 10. 1	英国の建築的潮流から	201
4. 10. 2	米国東海岸から	203

第5章 中之島図書館 ―場所と幾何学―	208
5.1 中之島図書館の誕生から現在まで	210
5.1.1 中之島図書館誕生の背景 ―住友家の寄贈	210
5.1.2 近世大坂の懐徳堂に始まる自由な学堂の系譜	212
5.1.3 時と共に	214
5.2 都市的な意味をつくり出す	219
5.2.1 大阪そして中之島	220
5.2.2 明治～大正期の大阪の都市インフラと日本銀行大阪支店	222
5.2.3 西洋的なアーバン・デザインによって生み出された都市的意味	226
5.3 建築的思考としての「場所と幾何学」	232
5.3.1 中之島図書館を訪れる人々が体験する建築的経験	234
5.3.2 「経験の器」の骨格としての幾何学	237
5.3.3 バロック階段について	248
5.3.4 「場所の意味」を確定する西洋古典建築の装飾技法	250
5.3.5 中之島図書館における野口の建築思考	252
5.4 中之島図書館の工法と意匠	256
5.4.1 中之島図書館新築工事仕様書	256
5.4.2 石・煉瓦・鉄・木材などによる混構造	258
5.4.3 明治期の鉄骨構造	260
5.4.4 石による外壁ディテールと意匠	263
5.4.5 工人たちとの協働	265
5.5 他の西洋古典様式建築群	268
5.5.1 住友総本店仮建物	268
5.5.2 住友銀行の支店建築	271
5.5.3 心齋橋	276
5.5.4 大阪倶楽部	278
(補) 当時の英国・米国に見るパラディアニズム	282
(補一) 英国のパラディアニズム	284
(補二) 米国のパラディアニズム	286
第6章 日暮別邸 ―簡素であること―	292
6.1 日暮別邸の設計者の特定について	293
6.2 近代工業の島にあるが故の「簡素であること」という命題	296
6.2.1 四阪島への製錬所移転	296
6.2.2 四阪島の全体計画と「簡素であること」という命題の必然性	299

6. 3	「簡素であること」と「厳しい敷地条件」に導かれた建築	302
6. 3. 1	厳しい土地の持つ力から立ち上がった建築	303
6. 3. 2	燧灘を望む等高線に沿った平面計画とその骨格	306
6. 3. 3	動的な立体構成	308
6. 4	日暮別邸の外観における工法と意匠	310
6. 4. 1	洋館の屋根	310
6. 4. 2	ベイ・ウィンドウ	312
6. 4. 3	外壁の下見板張り	312
6. 4. 4	ガラス・ウォール	313
6. 4. 5	日暮別邸の設計と施工の体制	315
6. 5	日暮別邸の内部意匠	317
6. 5. 1	日暮別邸の核としての応接室と暖炉	318
6. 5. 2	階段デザインとマッキントッシュ	319
6. 5. 3	イングルヌック	320
6. 5. 4	食堂入口扉枠頂部および食堂暖炉デザインとマッキントッシュ	322
6. 5. 5	食堂の家具デザインとマッキントッシュ	323
6. 6	日暮別邸の設計に顕著に現れていた「編集的折衷」について	326
6. 7	野口孫市とマッキントッシュ	328
第7章	野口孫市の和風住宅建築	332
7. 1	野口孫市自邸	333
7. 2	平田讓衛邸	340
7. 3	住友家茶白山本邸	346
7. 4	八木甚兵衛と小川治兵衛	354
7. 4. 1	大工棟梁・二代目八木甚兵衛	354
7. 4. 2	庭師・七代目小川治兵衛	356
結章		360
8. 1	野口孫市の建築術の追体験	362
8. 1. 1	設計プロセスから辿る野口孫市の建築術	362
8. 1. 2	「使い手」の視点から	375
8. 1. 3	野口孫市の多元的な思考法	376
8. 2	「西洋」と「日本」	377
8. 3	モダニズムへの胎動	380
8. 4	歴史的な振り子のなかで	381

8. 5	野口孫市の逝去から住友本店臨時建築部を経て日建設計へ	3 8 3
8. 5. 1	野口孫市の逝去	3 8 3
8. 5. 2	住友本店臨時建築部から日建設計へ	3 8 5
補一 1	野口孫市の作品一覧	3 9 0
補一 2	野口孫市 年表	3 9 7
	野口孫市関係資料	4 0 1
	謝辞	4 1 0

序章

0. 1 明治後期という時代

明治とは、危機意識が濃厚に漂う時代であった。単に西洋列強のアジア進出という政治的脅威による危機意識に留まらず、自己の存在そのものの基盤が揺るがされる危機意識が社会を覆っていた時代だった。西洋の近代文明に呑み込まれることを避けることはできないという明確な自覚のもとに、自分たちが江戸期より拠って立ってきた文明や文化が基盤ごと揺るがされる時代だった。その時代を生きる人々にとって、政治的な危機意識よりもさらに深いところに明治の人々の危機意識はあったのである。その根源的な危機意識が、西洋文明を学ぼうとする彼らの原動力となっていた。

明治という時代をもし前期と後期に大きく分けるとすれば、明治の前期とは、あらゆる分野での第1世代の人々が西洋文明へのパースペクティブを切り拓いた時代であり、明治の後期とは、明治前期の人々が築いた基礎をもとに、受容した西洋文明を選択しさらに変容する血肉化の段階に入っていた時代だったと考えられるだろう。

建築分野においても、野口孫市（1869年生）という建築家が活躍した明治後期は、建築家第1世代である辰野金吾（1854年生）たちが切り拓いた道の足元に、やっと自分たちが踏み歩むべき大地が見え始めた時代となっていた。受容した文明を当時の日本社会に相応しいように応用する時代を迎えていたのである。ただその素地には、日本が江戸期から連綿として受け継いできた豊穡な文明の素地があった。蒔かれた西洋近代文明という種を、豊かな土壌であるその大地に発芽させる時代を迎えていたのが明治後期であった。日本という非西洋にあって、「豊穡な文明を持っていた江戸期」と「西洋近代」の二つの文明が出会ったことが、日本の西洋的近代化以降で初めての文化的成熟期を迎える基盤となったと言えるだろう。そしてその時代の近代化が生み出した文化や文明には、西洋文化の単なる習熟とは異なる独特の輝きを放つものがあった。下記に、野口孫市（1869年生）と同時代の生年で、各分野で活躍した人々を挙げる。

- 産業 : 豊田佐吉（1867年生）・島津源蔵（1869年生）
- 科学・生態学 : 長岡半太郎（1865年生）・南方熊楠（1867年生）
- 文学 : 夏目漱石（1867年生）・幸田露伴（1867年生）
- 教育 : 新渡戸稲造（1862年生）・津田梅子（1864年生）
- 芸術 : 黒田清輝（1866年生）・横山大観（1868年生）
- 哲学・民俗学 : 西田幾多郎（1870年生）・柳田國男（1875年生）

これら明治後期に活躍した人々は、それぞれの分野で近代日本の原点となるような基礎を築いた人々だった。しかし何故、この明治後期の時代に集中して現れたのだろうか。この問いかけは、野口を考えるうえでも重要な問いかけとなる。この問いに対する考察として、二つの直交するような精神の座標軸が想定できるだろう。一つの軸は、江戸期から明治期までを通じて底を流れるように継続されていた、儒学や朱子学などを基礎として事物の道理を探究する東洋的な知的鍛錬によって獲得された精神であり、もう一つの軸は、福沢諭吉の思想に代表されるされるような明治の思潮を導く西洋の実践的自由思想だった。この東洋軸と西洋軸による精神的に直交するような座標軸のなかで、前記の人々による様々な業績は生み出されていた。しかし、この2つ座標軸に同時に身を置くことは容易なことではなかったはずである。この時代の人々による2つの座標軸に身を置くことの苦悩が、彼らの大きな業績を生み出していたと、後の時代から見てはじめて分かるのである。

0. 2 近代日本における建築家第2世代の人々

「我々は何者か？」という自らへの本質的な問いかけが、明治後期の知識人の人々に共通して芽生えていたことは確かであった。野口孫市と同年代の帝国大学工科大学造家学科の卒業生にも、共通して明治後期の知識人に見られるこれらの特徴が同様に現れていた。具体的に名を挙げるならば、横河民輔（1864年生）、伊東忠太（1867年生）、長野宇平治（1867年生）、武田五一（1872年生）などである。

例えば伊東忠太による1902年3月から1905年6月までの3年余りにわたる中国・インド・トルコなどの大調査は、西洋文明が世界を覆いつつある時代のなかで、「東洋人である我々とは何者か？」という切実な問いかけを自らに課したものだ。また伊東の2年前に造家学科を卒業していた横河民輔は、米国で鉄骨構造を実地に研究し、帰国後は横河橋梁製作所や横河電機研究所を立ち上げ、米国的なプラグマティズムを日本に持ち込んでいく。伊東の1年後輩の長野宇平治は、西洋古典主義の精髓に遡及することを徹底し、三井銀行神戸支店（大正5年）や大倉精神文化研究所（昭和7年）では、ギリシャ古典さらにはクレタ美術にまで遡及する徹底した探求を続けていた。野口から3年後に造家学科を卒業した武田五一は、その卒業論文「茶室建築」で茶室を系譜論的に見る日本最初の建築論文を書き、欧州での新潮流である英国グラスゴー派や独・墺のゼツェッションなどの影響の濃い作品を多く生み出していた。

このように建築家第2世代は整理がつかないほどに多方面にわたっており、彼らには、第1世代による「西洋文明の単なる移入」には耐えられない次の世代として、第2世代の葛藤を看取することができる。ある意味では、ひとつの世代として整理がつかない程に多方面に拡散したことそのものが、この第2世代の特徴と言えるかもしれない。そこには、日本の近代化への新たなエネルギーを感知することもでき、この建築家第2世代の日本近代建築史上の意義は、近年注目されつつある（*1）。このような世代のなかに、野口孫市がいた。

0. 3 野口孫市研究の背景と目的

野口孫市については、日本近代建築史上で頻繁に言及されながらも、いまだ深く踏み込んだ研究がなされていなかった。前述の第2世代の建築家たちについて言えば近年、伊東忠太が注目され数々の研究がなされており(*2)、また武田五一についても深く研究が進められている(*3)。本研究は、同様に明治後期を中心に活躍した第2世代である建築家・野口孫市(1869~1915)に光を当てるものである。

野口は、その少年期に他の明治の建築家たちとは少し異なり、生野や神戸での西洋人との接触機会もある環境で育ち、類まれな画才と果敢な進取的精神に恵まれ、西洋建築についての膨大な量にのぼる学習を行っていた。野口は、帝国大学工科大学にて辰野金吾を師として学び大学院卒業後は逓信省に3年務め、その後、住友春翠を家長とする住友本店臨時建築部の初代技師長に迎えられ「住友の建築家」として活躍している。住友家は、江戸期よりオランダを通じた銅輸出などにより国際的視野を持っていたが、明治の元勳のなかでも特に国際性の高かった西園寺公望の実弟・春翠を嫡養子に迎えていた。住友春翠は国際性とともにより西洋・東洋の芸術的素養にも富んだ人物であり、春翠の理想とする建築的世界を実現するのが野口の使命となっていたのである。

住友は、野口を一年あまりにわたる欧米建築視察に派遣した。野口の帰国後、同時に設計に着手したのが、大阪府立中之島図書館と住友家須磨別邸であった。現在では国の重要文化財となっている中之島図書館は、野口の西洋古典主義建築様式の習熟の顕著な事例として知られ、また同時に設計していた住友家須磨別邸は、古典様式の中の中之島図書館とは全く異なる、当時の英国における建築の新潮流によるものだった。同時期に全く異なる建築様式で設計されていた二つの建築は、それぞれ高い完成度で実現されていた。本研究では、なぜこのようなことが可能であったのか、また野口は何を考えながら設計していたのかという疑問、すなわち野口が建築を設計し作りあげる「建築術」を追体験し再現する試みを出発点としている。またその追体験には、野口が生きた時代の社会や文化を背景とした素養や教育についての理解も不可欠となる。野口の建築家としての人物像の解読も行いたい。

野口は享年47歳で亡くなったこともあり、他の第2世代の建築家たちと比較してその残した作品の数は多くない。また「住友の建築家」という特殊性の故か、野口については、その重要性が語られながらも、従来までの日本近代建築史の中で、その正確な歴史的な位置づけに未だ欠けるきらいがあった。大学院卒業後19年の短い建築家人生の中で輝かしい業績を残した野口孫市につき、野口孫市の建築術とは何であったのかということ、そしてその背景となった野口の人物像から、その建築史上の意義を明らかにすることを本研究の目的とする。

0. 4 野口孫市研究の方法的な視座としての「建築術」

「建築術」という言葉は近年使われることはないが、明治26年、伊東忠太が造家学会で「建築術と美術との関係」と題する講演を行っていた事例がある(*4)。この講演における伊東の主旨は「建築術は美術と同様に芸術である」ことを述べることにあったが、そのなかで「建築」という言葉は「彫刻」や「絵画」と同様に芸術的作品そのものを示す言葉として使われていた。一方「建築術」という言葉は、「美術」と同様に「美」を対象とする人間の営為を抽象化した概念として使用されていた。

現在、“Architecture”という英語の日本語訳として「建築」という言葉が一般的に使われているが、この「建築」という日本語訳は、「建造物 (Building)」という意味と、伊東のように「建築術 (Architecture)」という意味の二つの意味を担って使用されている。伊東も“Architecture”を純粋に日本語訳にするならば「建築術」のほうがふさわしいと考えていたふしもあるが、結局、現在では「建築」という言葉が一般的に使われるに至っている。

本研究は、野口の設計した建築における価値全体をつくり出そうとした人間の営為としての野口の「術」に焦点を絞り込むことにあった。この焦点の絞り方には、野口に最もふさわしい光の当て方が必要である。

建築を設計することとは、何もないある土地の上に建築という「もの」を作り出す人間の営為の一環である。野口の建築術を考察する上で、その設計という営為の内容や方法を、次の二つの極から考えることがふさわしいと考えた。すなわち一つが建築技術であり、もう一つが建築を生み出す思考や方法である。野口におけるこの二つの極からなる建築の術は、楕円の図形に二つの焦点があるように強い相関関係があり、一方を欠いてはその全体としての建築術が成立することは不可能であると考えた。

例えば「医術」という概念が、「医者」と「医療」から成立していることから分かるように、「術」とはその営為を行う「主体」と不離の関係にある。従来「建築術」という言葉はあまり使われていなかったが、野口孫市という人物の建築家像を浮き彫りにするためには、「建築術」という研究の方法的な視座がふさわしいと考える。

0. 4. 1 建築技術

建設工事は、石造・木造・鉄骨造など種々の構造材料による架構技術や、様々な建築部材の材料技術を用いて作成される設計仕様書・工事仕様書等技術仕様書そして設計図面から成る設計図書全体に基づいて行われる。建築技術は、まず設計図書に表現されるのである。構造図や意匠図のみならず、電気設備工事・衛生設備工事・暖房換気設備工事などの設備設計工事の仕様書もその設計図書全体に含まれていた。

野口が生きた時代の建築技術は過渡期にあり、構造技術で言えば、伝統的構法である木構造技術が脈々と継承されるなかで、組積造から鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造への移行

期にあった。野口が大学院で構造学を専攻していたことから (*5)、野口が本来の軸足を置いたのは、この建築技術であったことが分かる。大学および大学院では濃尾地震や庄内地震の現地調査も経験し、住友本店臨時建築部時代にはサンフランシスコ地震の調査団にも加わっていた。また住友本店臨時建築部による工事の方式は施主による直営方式であったため (*6)、建設工事の総括責任者も野口孫市であった。

0. 4. 2 建築を生み出す思考や方法

野口が、明治後期から大正初期の時代に、上記の建築技術を使って何をどのように考え建築を設計し建築を作りあげていたのかという思考や方法も「建築術」のもう一つの大きな側面である。そこには、野口が生きた時代に顕著に現れていた課題、現代の我々が建築を考えるうえでも共通する課題、そしてそれら課題全体をまとめあげる方法などが建築思考もしくは方法という「建築術」として存在していた。0. 3にて記述した野口研究の目的として野口の建築術を追体験することを挙げたが、この思考もしくは方法を追体験することは、野口の建築史上の意義を明らかにするうえで重要なことと考える。

(1) 野口の生きた時代に顕著に現れていた建築様式という課題

それぞれの時代では、その時代特有の支配的である社会的・文化的な行動規範があり、それが人々の生活様式として現れてくる。明治という時代に生きた人々の生活様式は、江戸期以来の伝統的生活様式と明治維新後にもたらされた西洋文明による生活様式が、まだ意識のうえで分離されたまま混在しているという、現代に比べれば特殊な時代だった。

明治の時代では、まず和風と洋風といった様式の選択に加え、西洋建築様式のなかでも、どの建築様式を選択するかが大きな課題となっていた。建築様式とは生活様式を反映するものであり、生活像を選択するという意味で、想定する生活様式に最もふさわしい建築様式を選ぶことは、建築を設計するうえで最初に取り組むべき真摯な課題であった。

明治期の人々が江戸期から受け継いできた文化的基盤と西洋的な建築規範の関係については、野口が英語で書いた卒業論文のタイトルを“An Essay on the Future Domestic Architecture of Japan”としていたように、規範としての西洋建築を将来の日本の建築にどのように取り込むかという問題を切実な自身の課題としていたのである。野口の卒業論文のこの課題に対する提案は、住友家須磨別邸の設計において野口自身が具体的な建築として顕していた。この分析と考察は第4章で行う。

また野口は、膨大な量にのぼる西洋建築様式についての学習と1年余りにわたる欧米建築視察などで西洋建築様式についての素養を培っていた。これらの学習を通じ野口は、西洋建築様式のあらゆる手法を自家薬籠中のものとしていたのである。その西洋の建築手法群の武器庫の中から、それぞれのプロジェクトにおいてその状況に最も相応しい手法を選び

出し、新たな文脈の下で再構成していた。この分析と考察は、第4章・第5章・第6章を通じて行う。

野口が、西洋建築様式についての学習と研鑽を、どのようにその建築に反映していたのかを分析することは本論文の重要な課題の一つである。

(2) 現代の我々が建築を考えるうえでも共通する「場所の意味」という視点

建築は単独で存在できるものではなく、その建築が位置する都市的な文脈や周辺環境・自然環境のなかで位置づけられる。そのような都市的・環境的背景のなかではじめてその建築が存在することの意味が確定される。設計以前の敷地の分析や特性の把握は設計条件の一つとして不可欠であるが、設計する前提となる建築の都市的文脈や周辺環境は、その時代の状況によって大きく左右されるものである。野口が生きた時代、どのようにそれらを読み込み、そのなかで何を実現しようとしたのかを明らかにすることは、野口の建築思考を追体験するうえで重要な要素と考える。

また建築の利用者もしくは生活者としての私たちは、物理的な空間を経験することによって、その空間に特別の意味を見出し自分にとっての親密な場所を組織立てている。このことは現代においても変わるものではないが、その現れ方は、時代や文化によって異なってくる。野口は、明治の人々が豊かな経験を通じて具体的な自分の場所を体験することができるよう、その舞台となるべき建築を実現していた。言い換えれば、人々が場所の意味の豊かさを体感できる「器」としての建築をつくることだったといえるだろう。その在り様を分析することは、野口の建築思考を理解するうえで重要な要素と考える。

(3) 建築全体をまとめる方法

野口が膨大な西洋建築の学習と修練により培った西洋様式建築の様々な手法や装飾技法を、野口が日本人であることにより自身のなかに組み込まれていた無意識的ともいえる日本的な方法意識のなかで、どのようにして建築全体を組み立てていたのか、また建築が本来内在すべき様々な「場所の意味」を、全体としてどのように組み立てようとしていたのか。そして野口が日記に書いていたように「少しでも美しいものを作ろう(*7)」という意志を、野口が自家薬籠中のものとしていた当時の利用可能な建築技術を駆使してどのように形にしていたのか。これらは、建築思考と建築技術を結び付ける野口の建築術の核心ともいえる本論文の重要な課題であり、またその現れ方にも野口の建築術の特徴を見出すことができる。

0. 5 野口孫市研究の方法と本論文の構成

本論文の目的は、「野口孫市の建築術とはどのようなものであったか」という点にある。建築とは、「つくり手」という主体が「つくる意志」をもって「もの」に働きかけることで

為された「仕事」であるといえるだろう。建築という言葉が、その「できあがった仕事」を指すとするならば、「つくり手」という主体が「つくる意志」をもって創意工夫を凝らして「もの」をつくりあげるといふ営為があるはずである。この営為とは、「つくり手」の主体から見ればその本人がなせる「術」にほかならない。すなわち「術」とは、その営為を行う主体と切り離せない関係にある。またこの「術」には、その時代の「術」が成立する「場」としての社会的・技術的背景があることは言うまでもない。

前節で研究的方法的な視座としての「建築術」について述べたが、本研究では、野口の建築術を分析的に考察する方法として「野口の設計行為を追体験すること」に基本を置く。「追体験すること」とは、野口の設計意図がどこにあったか、野口がどのような方法によって設計を進めていたのかという「つくる営み」を明らかにすることであると考えられる。具体的には下記の方法で研究を進める。

- ① 現在残されている野口の設計による建築物を精緻に体験し観察する。建築物が残されていない場合は、復元模型製作に関与し疑似的な建築的経験を試みた。この筆者自身による実際の建築的な経験をもとにした分析・考察をこの研究の基本的な軸とする。
- ② 現在に残された設計図面や建築写真から、野口が何をしようとしていたのかを分析し読み取りを行う。
- ③ 野口が卒業論文や日記に残した文章から、野口が何を考えていたのかを読み取る。また設計仕様書などの技術的文献からも読み取りを試みる。
- ④ 野口が残した多量の西洋建築の透写習作から、野口が学習・研鑽を重ねていた対象について関心の在りかを読み取り、それらが作品にどのように生かされていたのかを探る。
- ⑤ 野口が活躍した時代の社会的・技術的背景をできる限り理解し、プロジェクトの具体的背景と「術」の関係をより深く考察する。

本研究は、第1部および第2部そして結章から構成する。第2部が具体的なプロジェクトを対象として「野口孫市の建築術とはどのようなものであったか」を分析・考察するものであり、前記の4項目をその方法の骨子としている。しかしその前に第1部として、野口の人物像、その素養や学習・研鑽などを概観する。「建築術」がその主体と切り離せない関係にある以上、その「つくる主体」の人格や建築家としての基盤形成がどのようになされていたのかを理解することは重要課題であると考えられるものである。

最後の結章では、第2部の各プロジェクトの分析・考察を統合して野口の設計行為を追体験することのまとめを行う。

0. 5. 1 第1部 野口孫市の人とその時代（第1章～第3章）

第1部では、野口が明治という時代にあって、どのような環境で生まれ育ちどのような教育を受けどのような修練を積んでいたのか、またどのような人々に影響を受けていたのかを記述考察する。また住友入社前の卒業設計や逓信省時代の仕事そして構造技師としての野口の側面についても、第2部で詳述する野口な主な仕事を解説するうえで重要なものであることから、第1部で記述する。また住友春翠の存在がなければ住友の建築家・野口孫市は成立していないことから、住友春翠と住友本店臨時建築部についても詳述する。野口は享年47歳で亡くなるという短い生涯ではあったが、そのなかで輝かしい業績を残しており、第1部を3つの章から構成し、その人物像も含めその建築術の時代的背景について浮かび上がらせることを第1部の目的としたい。下記の三つの章から構成する。

- 第1章 野口孫市の人物像成立の背景
- 第2章 建築家への助走
- 第3章 住友春翠と住友本店臨時建築部の創設

従来、野口孫市に関する資料は住友史料館に残されていたが、2014～15年、野口の長女・房の孫にあたる方および三女・好の子息にあたる方から、野口が残した西洋建築の透写習作、水彩画スケッチ、日記、写真など多くの資料が、住友史料館に寄贈された(*8)。

このご両名による野口孫市関係資料の目録一覧は巻末に掲げたが、本研究全体を通じて最も役立たせていただいた資料に、野口が膨大な西洋建築の書籍や写真・図面のうえに和紙をあて西洋建築の精髓を掴むために建築トレースを行っていた264点におよぶ建築透写習作がある。また日本各地や身近の情景を描いた375点におよぶ水彩画スケッチもあった。主に水彩画であるが、なかには鉛筆画、一部パステル画も含まれていた。さらに欧米建築巡遊時に野口が撮影した写真や購入した写真の20点、および野口自身の作品の写真も28点残されていた。野口自筆による建築図面も27枚残されている。他に断片的ではあるが日記や家族宛ての書簡、卒業証書や工学博士学位記、家族写真、第三高等中学校時代の生物学のノート、名刺、『Academy Architecture and Annual Architectural Review』の合本Ⅲ、Ⅵ、Ⅷ、Ⅸ、Ⅹの5冊および『建築書院編輯局撮影 日本家屋写真叢書』3冊などの書籍も含まれていた。また野口の父が子供たちのために買い求めた、歴史的価値もある貴重な明治期の浮世絵新版画家・曜齋国輝による『衣喰住之内家職幼絵解図』も含まれている。なお妻・良子による和歌の短冊29首も含まれていた。

この第1部は、ご遺族方からの寄贈資料と住友史料館に従来から保管されてきた資料、および東京大学大学院工学系研究科建築学専攻に所蔵されていた卒業設計と卒業論文を中心に資料として作成している。なお第3章の住友春翠に関する節では公益財団法人泉屋博古館による所蔵資料を使わせていただいた。

0. 5. 2 第2部 野口孫市の建築術（第4章～第7章）

本研究の主な特徴は、日本の明治後期～大正初期の近代建築史のなかで類まれな光彩を放っていた建築家・野口孫市に光を当て、前述の「建築術」という視座から、本節の序の①から⑤で述べた方法により、野口による建築設計、換言すれば明治後期の日本特有の状況のなかでの野口による構築という営為を、追体験し分析することにある。第2部では具体的にこの「野口の建築術とはどのようなものであったか」という問題設定に基づき、下記の四つの章から分析・考察を行う。

- 第4章 住友家須磨別邸 ー日本人にふさわしい洋館をー
- 第5章 中之島図書館 ー場所と幾何学ー
- 第6章 日暮別邸 ー簡素であることー
- 第7章 野口孫市の和風住宅建築

野口の建築術を一文で述べるならば、『その建築に関係する人々にとって価値ある建築の性格や意味が何であるかをまず考え、次に様々な場所の意味を生み出すために建築的思考モデルとして「型」となる基本骨格を組み立て、その後あらゆる建築設計手法を採り入れ編集・再構成し、当時の建築技術を総動員して建築を設計・建設していた。』と要約することができる。第2部の各章では、この野口の建築術を、具体例に基づき詳細に分析・考察するものである。

従来の西洋建築についての日本近代建築史では、導入された建築様式の説明や欧米の何々からの影響という外来の視点を国内の歴史展開の主要な動因とみなす歴史観が主流であった。野口に関する建築史的な評価も、明治以来の西洋様式建築の学習が習熟するに至った事例と説明されることが多い。しかし本研究は、野口の設計行為の内実に踏み込みその在りようを描き出すことに重点を置いている。当時の日本人建築家としての野口が西洋と日本との間の葛藤のなかで、どのように考えどのような実践的方法で建築を設計していたのか、すなわち「構築の営為」をどのように行っていたのかということを実験的に考察すること、すなわち「建築術」という視座を基点に置くことに重点を置いている。

第2部各章の具体的な西洋建築の代表作品には、結章の作品一覧で挙げた26作品のなかから住友家須磨別邸・中之島図書館・日暮別邸を選んでいる。その選定理由は次のとおりである。野口の西洋建築の作品群を大別すると、住友家須磨別邸を頂点とする洋館住宅建築群と、現在国の重要文化財に指定されている中之島図書館を頂点とする西洋様式建築群に分けることができる。野口の逝去後、日高胖が野口を追悼して編集した『野口博士建築図集』においても、総図番数78枚のうち図番1から47までの47枚を住友家須磨別邸に於て、図番48から64までの17枚を中之島図書館に於ていた。野口を最も良く理解してい

た日高も総図番数78枚中64枚をこの二つのプロジェクトにあてていたのである。明らかに日高もこの二つのプロジェクトが野口を代表する作品と認識していたことが分かる。

一方、日暮別邸については、追悼文のなかで日高は住友別子鉱業所接待館という正式名称で記載しているのみであった。日暮別邸は、そのプロジェクトの背景から「簡素であること」が重要命題として課せられた建築だったが、その結果、この時代では極度に装飾を削り落した建築となっており、装飾ではなく空間構成に重点を置く後世の建築思潮の先駆けともいえる事例となっていた。日高の時代としてはいわば特殊な事例であったと思われるが、現代の視点から見れば歴史的な重要性を認めることができる。

なお第7章では野口による和風建築に光をあてているが、和風建築においても野口の西洋建築と通底する特徴が現れており、野口の建築術を考察するうえで欠くことのできない課題であると考えた。

(1) 第4章 住友家須磨別邸 ー日本人にふさわしい洋館をー

野口が住友本店臨時建築部の初代技師長と成した最初の仕事が、住友家須磨別邸であった。野口は伊庭貞剛邸や田辺貞吉邸など住友幹部役員の邸宅建築も設計しているが、住友家家長の邸宅である須磨別邸は、野口が設計した邸宅群のなかでも、その規模・質において他の住友幹部役員の住宅とは比較にならないほどに群を抜いていた。須磨別邸をこの章の中心テーマに据えることで他の邸宅群の特徴も明らかにし、野口の洋風邸宅建築の設計術について分析・考察する。これらの邸宅群には、当時の英国における建築・美術関係の新潮流であったアーツ・アンド・クラフツの影響が見られるが、日本建築の手法も採り込むことによって日本人にふさわしい洋館を目指していた野口の強い意志も見ることができる。

須磨別邸は、第2次大戦の神戸空襲により灰燼に帰した。その70年後となる2015年、住友春翠生誕150年にあたり開催された「住友春翠展」に合わせ、公益財団法人泉屋博古館によって住友家須磨別邸復元模型を製作するプロジェクトが立ち上げられた。これは、住友本店臨時建築部での野口の後継者にあたる日高胖が編集した『野口博士建築図集』、住友史料館に残る資料、および野口の遺族の方々が保存されていた写真などの資料をもとに製作されたものである。神戸芸術工科大学名誉教授の坂本勝比古先生を筆頭監修者とし、京都工芸繊維大学の矢ヶ崎善太郎先生、住友史料館・泉屋博古館の研究者とともに筆者もその監修者の末席に加わった。この方々による「住友家邸宅建築研究会」が設置され、研究会の監修のもとに歴史的建築物の復元模型で高い水準にある景観模型工房によって製作された。第4章では、この住友家須磨別邸復元模型製作プロジェクトで得られた復元模型そのものの分析、およびその過程で得られた資料分析をもとに、須磨別邸に現れていた野口の建築術を考察する試みを行っている。

(2) 第5章 中之島図書館 ー場所と幾何学ー

現在、国の重要文化財となっている大阪府立中之島図書館は、住友家が大阪府に寄付した建物であり、住友春翠の意を受けた野口を技師長とする住友本店臨時建築部によって、住友家須磨別邸と同時期に設計された建築であった。日本近代建築史上、中之島図書館は明治期の西洋古典様式建築を移入し学習するなかで習熟を見せた作品として現在では評価されている。しかし後世の「習熟」という解釈以上に、野口がこの中之島図書館の建築がどうあるべきかと考えていた意図を理解することがまず重要である。そしてその目的を達成するため、野口が幾何学的な建築手法を組み込んでいたことも本研究では明らかにする。

中之島図書館が野口を代表する作品であることは前述のとおりであるが、この中之島図書館を中心とした第5章では、中之島図書館の建築に重点を置きながらも、他の事例も扱うことで、野口の西洋古典様式建築における建築術とは何であったのかをさらに浮き彫りにすることを試みる。野口の設計した西洋古典様式の建築群のなかでは中之島図書館のみが建設当初の姿を残しているが、住友本店臨時建築部の主な仕事は、住友総本店仮建物、そして日本各地に建てられる住友銀行の支店群であった。これらはすべて西洋古典様式で設計され建設されていた。しかしそのほとんどが現在では失われており、写真や図面に多少記録されているに留まっている。また住友家が完成に深く関与した心齋橋と大阪倶楽部なども、西洋建築様式を大胆に取り入れた建築であったが現在は失われており、その一部が写真や図面に残るのみとなっている。しかし、これらの他の西洋古典様式の建築群にも野口の建築術の特徴は顕著に現れていた。これらの建築についても分析的に考察しながら、野口の西洋古典様式建築のなかに顕れていた野口の建築術を明らかにする。

研究方法としては、本節の序文で挙げた①で記述したように、現在に残されている中之島図書館の建築をつぶさに体験しその体験を分析することから出発している。文献資料としては、日高胖の編集による『野口博士建築図集』、東京都立中央図書館木子文庫に残る一部の図面、大阪府営繕部建築課により補修工事のために作成された図面、大阪府による現況調査、大阪府立図書館に残る資料、住友史料館に残る工事仕様書などの資料、そして野口の御遺族が住友史料館に寄贈された写真などに準拠している。

(3) 第6章 日暮別邸 ー簡素であることー

瀬戸内海に面する新居浜の北方約20kmの燧灘のなかにある四阪島は、住友の命運を賭けてつくられた銅製錬所の島だった。この四阪島に建てられた住友家の接待館である通称・日暮別邸と呼ばれた建物は、近代工業を担う島であるが故の「簡素であること」が大きな命題とされた特殊な建築となっていた。野口の設計による日暮別邸の建築は、その厳しく限定された設計条件のなかで顕著な特徴を見せるものとなっていたのである。この第6章では、邸宅建築でありながらも第4章で扱った住友家須磨別邸を中心とする建築群とは大きく異なる特徴を示していた日暮別邸について、その後の建築的思潮を先取りしていたともいえる野口の建築術を分析・考察する。

なおこの章ではもう一つの目的がある。日暮別邸は現地調査が困難な孤島にあり、また野口についてあまり研究されてこなかったこともあり、現在まで日暮別邸の設計者の特定がなされていなかった。何人かの建築史家が訪れ「野口孫市の設計であろう」という推測はなされてきたが、図面や棟札などの決定的根拠に欠けるため、あくまで推測に留まっていた。この章では、既存の文献資料のなかに明確に示されていたその根拠を示すとともに、この時代にあっては設計者を野口以外に考えることができない建築上の特徴10数件を示し、日暮別邸の設計者が野口孫市であることを特定したい。

資料としては、住友金属鉱山株式会社の所蔵資料、別子銅山記念館所蔵資料、住友史料館と愛媛県教育委員会による調査資料、野口のご遺族が所蔵されていた資料、そして筆者を含む日建設計有志の現地調査に準拠している。

(4) 第7章 野口孫市の和風住宅建築

野口孫市は、洋風建築のみならず、和風邸宅建築も設計していた。建築、特に住宅は人々の人生の舞台であり、そこに住む人々の生活様式“Way of Life”が如実に表れてくるものである。前述したように、明治という時代に生きた人々の生活様式は、江戸期以来の伝統的生活様式と明治維新後にもたらされた西洋文明による生活様式が、まだ意識のうえで分離されたまま混在しているという、現代に比べれば特殊な時代だった。和もしくは洋のいずれかの生活様式を選ぶこととは、その邸宅を建てる人にとって切実な最初の課題だったのである。野口自身、武庫郡の住吉村に建てた自邸は和風で設計しており、住友春翠が本邸として茶白山に建てた邸宅も立派な日本庭園を有する和風の建築であった。

この章では、野口が設計していた和風邸宅建築を扱う。野口が設計していた和館の建築にも須磨別邸など洋館を含め野口の仕事全体に通じる野口の建築術の特徴が現れていたのである。その分析・考察に焦点を当てる。

なお野口による和風邸宅建築を考察するうえで欠くことができない存在が、大工棟梁・二代目八木甚兵衛であった。初代以来、八木甚兵衛は住友家のお抱えの大工棟梁として住友家の多くの建築に携わっていたが、建築家・野口孫市と大工棟梁・二代目八木甚兵衛の協働は、伊庭貞剛邸・平田讓衛邸・住友家茶白山本邸に見られた。またその時代を代表する庭師であった七代目小川治兵衛も、住友春翠の信頼が篤い日本庭園の庭師であり、茶白山本邸はまず小川治兵衛による日本庭園の作庭から始まっている。第7章では、この大工棟梁・八木甚兵衛と庭師・小川治兵衛についても触れる。

資料としては、住友史料館と公益財団法人泉屋博古館に保存されていた資料、野口のご遺族が所蔵されていた資料、矢ヶ崎善太郎による八木甚兵衛の研究、鈴木博之による小川治兵衛の研究などに準拠している。

0. 5. 3 結章

本研究の目的は、「野口孫市の建築術とは何であったか」という問題設定にあり、この課題に対する研究的な方法として「野口の設計行為を追体験すること」が基本にある。この結章では、野口の建築術全体を俯瞰しその問題設定に対し答えるものとしている。

また結章のもう一つの目的は、第1部と第2部を通じて明らかにされた野口孫市の建築術について、その建築史上の特徴や意義を考察することにある。そこには、明治という時代に特有の事情や日本という非西洋における西洋建築であったという特殊性も顕著に現れていた。日本の近代建築史上での野口孫市の位置づけを行い、野口の前の時代と後の時代の間であって、どのような歴史上での役割を果たしていたのかを考察する。

最後に、野口の逝去後も大きくその影響を及ぼしていた住友本店臨時建築部のその後について概観する。野口が初代技師長となった住友本店臨時建築部は、現在の日建設計の源流であった。野口の末裔としての日建設計について触れることで本論文の締め括りとした。

結章では最後に野口の作品全体を、公共的建造物・住友本店関係建物・住宅建築・倶楽部建築・住友入社以前の分類に分けて26作品の一覧を作成している。一般的に建築家の作品履歴には、その生涯にわたり作品傾向の変遷が見られるものであるが、大学院卒業後19年で建築家としての短い生涯を終えた野口には、作品傾向の変遷よりも最初からその逝去まで一気に多様な建築術を同時に見せていたところに特長があった。

なお、第1部・第2部を通じて述べてきた内容をまとめて概観するため、46年の生涯と各時期の作品を記した野口の年譜を作成した。

0. 6 既往研究との関係

野口孫市に関する研究は、いまだ十分な蓄積があるとはいえないのが現状である。そのような状況のなかで、野口孫市についてこれまで書かれた数少ない文献を分類すると、下記のようなようになる。

- (1) 建築史研究者による研究・論説文献
- (2) 住友関係者による研究文献および資料
- (3) 明治期の幼児教育学の祖である野口孫市の姉・幽香に関する研究文献
- (4) 日建設計による研究文献および資料

0. 6. 1 建築史研究者による研究・論説文献

野口孫市については、辰野金吾や伊東忠太そして武田五一など他の明治生まれの建築家たちに比べ研究されてきた実績は少ない。しかしそのなかでも野口孫市を最初に近代建築史上で明らかにした貴重な研究が、坂本勝比古による下記の文献によってなされていた。本研究の出発点とも言える文献である。

- * 『日本の建築 明治・大正・昭和 (5)商都のデザイン』 1980年 三省堂
- * 『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』1997年
- * 『日建設計の100年－その栄光と波乱の半世紀を探る－』2000年 建築と社会

野口については、他の建築史家では足立裕司、石田潤一郎、鈴木博之、藤森照信、浅野清が下記の文献で記しており、本研究を進めるうえで重要な文献とした。

- * 足立裕司著
『旧住友本店臨時建築部と日本のアール・ヌーヴォー (1)、(2)』
1989年 日本建築学会近畿支部研究報告集
1999年 日本建築学会計画系論文集
「野口孫市」 『新しい住宅を求めて 近代の住宅をつくった建築家たち』所収
1992年 KBI出版
- * 石田潤一郎著『関西の近代建築 ウォートルスから村野藤吾まで』
1996年 中央公論美術出版
- * 鈴木博之著『ジェントルマンの文化 建築から見た英国』
1982年 日本経済新聞社
- * 藤森照信著『日本の近代建築 (下)－大正・昭和篇－』 1993年 岩波新書
『近代日本の洋風建築 開化篇』 2017年 筑摩書房
- * 浅野清著『大阪府立図書館の建築』
1973年 大阪府立図書館紀要 第9号

0. 6. 2 住友関係者による研究文献および資料

前述の「0. 5 野口孫市研究の方法と本論文の構成」で記したように泉屋博古館による住友家須磨別邸復元模型製作が、本研究を進めるうえで重要な役割を果たした。この復元模型製作の報告書が下記である。この報告書の作成には筆者も参画していた。また泉屋博古館で開催された住友春翠生誕150年記念の展覧会で製作された図録も、住友春翠について充実した編集内容のものとなっており、本研究の住友春翠理解の基礎となっている。

- * 住友史料館・泉屋博古館編・発行
『「住友家須磨別邸復元模型」製作報告書』 2017年
- * 公益財団法人泉屋博古館学芸部編・発行 『住友春翠 ー美の夢は終わらない』
2016年

0. 6. 3 野口孫市の姉・野口幽香に関する研究文献

野口孫市の姉は、明治期の日本近代化のなかで幼児教育学の祖とされている野口幽香であった。幽香自身の手記に基づき下記の研究が東京女子大学の貝出寿美子によってなされている。野口孫市の父母や幼少期について知るうえで、貴重な文献となった。

- * 貝出寿美子著『野口幽香の生涯』
1974年 キリスト新聞社

0. 6. 4 日建設計による研究文献および資料

日建設計では、野口孫市から日建設計工務の設立までを記した『北浜五丁目十三番地まで』と、その後を記した『北浜五丁目十三番地から』がそれぞれ1991年・1993年に社史として出版された。このうち『北浜五丁目十三番地まで』を本研究の基礎資料としている。また、筆者執筆の下記の文献も本研究の基礎をなすものである。

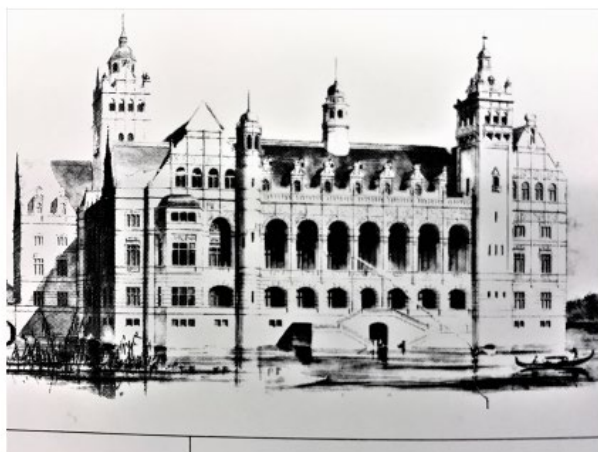
- * 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』 1991年 創元社
- * 林和久著『日建設計 115年の生命誌』 2015年 日建設計
- * 同上 『建築家・野口孫市と住友』 2017年 住友史料館報 第48号

註

- (* 1) 足立裕司が下記の論文で、最初に日本近代建築史上の第2世代の意義について指摘している。
『世紀転換期の日本近代建築に関する研究 ー武田五一と第二世代の建築家の思想と作品』
1992年 神戸大学学位論文

- (* 2) 倉方俊輔著
『「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」の主旨について - 伊東忠太「建築進化論」の特質に関する研究 その1』
2004年 日本建築学会計画系論文集 第581号 191~195頁
『「建築進化論」と設計活動との関係について - 伊東忠太「建築進化論」の特質に関する研究 その2』
2005年 日本建築学会計画系論文集 第589号 193~199頁
- (* 3) 足立裕司著 『武田五一研究(1)~(12)』
日本建築学会論文集(1985年~2017年)
- (* 4) 伊東忠太講演『建築術と美術との関係』
講演は明治26年3月8日(1893)
記録は『建築雑誌 第75号』 80~87頁
- (* 5) 野口を追悼して編集された『野口博士建築図集』の日高胖による序文に「・・・明治24年東京帝国大学工科大学造家学科に入り、同27年優等の成績を以て同科を卒業し、後大学院に入り耐震構造に就て研鑽する所あり。・・・」と記述されていた。詳しくは、第1部第2章の「2.4 構造技術者としての野口孫市」参照。
- (* 6) 官庁や財閥などの重要建築において、当時の設計や建設工事は直営方式で行われていた。施主のなかの担当部局が設計し、工事段階ではその担当部局が、基礎・煉瓦・石・大工・鉄骨等主体工事、電気や暖房等設備工事、内装などの工事を区分して各専門施工者に発注する方式である。また施主自ら、主要資材を吟味の上で調達・支給し、各請負者の間を調整しつつ施工を監督して工事を完成させるものだった。野口が技師長を務めた住友本店臨時建築部も、この直営方式で設計と建設を進めていた。
- (* 7) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録⑩-5
大正4年(1915)3月16日の日記に、「・・・自分ハ元来天才でない頭を持って、少しでも美しい物を作らうと云うので設計二時がかかる、手数が要る、幸二自分ハ其時と手数をかけて幾何学的頭脳を応用する事を得る地位に在るのは非常な幸福である、・・・」と書かれていた。
- (* 8) 野口孫市の長女・房の孫すなわち野口の曾孫にあたる尾形久美子氏と三女・好の息子すなわち野口の孫にあたる濱田信義氏から、野口の資料を、野口を源流とする日建設計にご寄贈いただくご提案があった。しかし野口は住友本店の建築家であったため、それらの資料は文化財的資料の保存と整理・研究の専門的機関である住友史料館に寄贈していただく方が相応しいと考え、住友史料館へのご寄贈を日建設計より紹介させていただいた。

第1部 野口孫市の人とその時代



第1部 野口孫市の人とその時代

建築術とは、その営為を行う「主体」と不離の関係にあると序章にて述べた。第2部では、具体的に野口孫市の建築術そのものについて記述・考察を進めるが、この第1部ではまず野口孫市という「人」に焦点を当てる。そこには、野口が生きた時代背景が色濃く現れていた。野口がその建築術を駆使するに至った「人」としての素地やその生きた時代を浮き彫りにすることは、野口が建築家として跳躍する基盤を明らかにするという意味で、第2部へと続く必須の課題であると考ええる。

次の三つの章から第1部を構成する。

第1章 野口孫市の人物像成立の背景

人は生まれた家庭環境や育った場所によって将来の人格の素地が形成される。野口の場合も、将来建築家になることを予感させるような家庭環境と場所に育っていた。第1章では、将来の野口の建築術を生み出す素地となった人物像の形成過程について、その事情を明らかにする。また、野口が生きた環境や時代背景に培われたその生涯にわたる人物像についても記述する。

第2章 建築家への助走

野口の建築家としての生涯にわたる課題は、西洋建築をいかに日本の気候風土や日本人の生活習慣に適合させるかという点にあった。従って野口の西洋建築に対する研鑽と日本人としての素養という二つの側面は、大きな意味を持つ。第2章の中心的テーマをこの二つの側面に設定し、まず野口が受けた建築教育と西洋建築に対する研鑽について詳述し、次に日本人の生活や自然環境への視線の当て方について記す。続けて具体的な建築家への助走についても記述する。

第3章 住友春翠と住友本店臨時建築部

野口の建築術を成立させる重要な要因の一つとして、住友春翠の存在があった。明治という時代の高い教養人であった施主・住友春翠がいたからこそ、建築家・野口孫市が成立したと言っても過言ではない。また春翠を中心とする住友の人々が設立した住友本店臨時建築部が、野口が建築家として活躍する舞台となった。第3章では、野口に多大な影響を与えた住友春翠の人物について記し、野口が初代技師長として率いることとなった住友本店臨時建築部の創設について記述する。

第1章 野口孫市の人物像成立の背景

第1章では、野口が建築家となる素地やその人物像が、どのように形成されたのかという疑問に焦点を当てる。野口は、実父や姉そして岳父にみられるような当時の先進的志向を持つ人々に囲まれるという人的環境のなかで生き、生野鉦山や神戸のような明治期の日本のなかでも西洋人との接触機会の多い場所に育っていた。また一方、国宝姫路城を頂く姫路や優れた伝統的建築物の集積している京都にも育ち学んでいる。最も重要な建築家としての素養を磨いたのが第2章で記す帝国大学工科大学造家学科で恩師・辰野金吾の薫陶を受けたことであったが、第1章ではその工科大学に入るまでの野口の人格形成期について主に焦点を当てる。野口には、日本人でありながら自然に身についたような西洋的な素地を思わせるところもあり、また日本人としての文化的素養にも秀でたところがあったが、第1章はそれらの素地がどのようにしてつくられていたのかという問題設定に対応する章としている。

本章の第1節では、野口の人物像形成の基礎となった家族など人的環境を記述し、第2節では、その育った場所的環境について記述する。第3節で、野口の建築家人生に大きな影響を及ぼした結婚について記し、第4節では、野口に関係の深い人々が強い影響を受けていた西洋の実践的自由思想につき触れる。第5節にて、野口が依拠していた東京における明治期の旧姫路藩の人的ネットワークについて記述し、最後の第6節で家庭人としての野口の人物像に触れ建築家・野口孫市の人柄を浮き彫りにしたい。

1. 1 江戸から明治への時代の激動期、姫路藩に生まれる

野口孫市は、明治2年（1869）4月23日に、廃藩置県が行われる前の姫路藩清水に生まれている。孫市少年の人柄には父母そして姉の人物像が大きな影響を与えており、この家庭に生まれたからこそ、後の建築家・野口孫市が誕生したとも言えるだろう。

1. 1. 1 姫路藩士の父と、儒学者の娘であった母

野口家は代々、播磨国姫路藩の砲術師範の家柄だった。幕末期各藩の砲術師範には、その当時の火薬等の化学知識そして銃や大砲などの機械技術など進んだ知識が必要とされていたが、さらに先進的な視野と知識の吸収に駆られた人達もいた(*1)。野口孫市の父・野(いやし 旧名・半蔵 1841～1886)もその一人で、砲術の勉学のみならず幼少の時から広く学問を好み、その英才の誉が藩中に聞こえていた俊英であった。幕末の動乱期、姫路藩は従来の身分格式にとらわれず広く人材を登用する方針に切り替えていた。野口家は五

人扶持の微禄な家柄であったが、野は若年の身ながら姫路藩主酒井公より京都にて諸藩の動向を探索する任務を命じられていたのである。各藩は新政府側につくか幕府側に残るかの選択を迫られており、京都には同じように全国各藩から派遣された俊英たちが他藩の動向を探索していた。野は土佐藩士の谷干城（のちに初代農商務大臣、学習院院長）や大垣藩砲術師範の井田讓（のちに生野県・長崎県などの知事を歴任、陸軍少将）らとの交わりを深めていた（*2）。ちなみに、谷と井田は江戸において儒学者・安井息軒の塾の門弟であり、同門には後に野口の岳父となる久保田讓の兄・久保田精一がいた（*3）。

野は、当時の姫路藩を代表する儒学者であった秋元三郎兵衛の次女・くりと文久二年（1862）結婚した。くり（1845～1888）は9歳にして父を失い、父の高弟であった姫路藩筆頭家老であった高須隼人の家で育てられていた（*4）。この高須隼人は、幕末動乱期にあつて姫路藩の存続のために中心的な役割を果たした人物だった。恩師の遺児を育てた高須としては、その愛娘のようなくりの婿として藩の俊英・野口野を選んだのは当然だったのかもしれない。野口孫市はこのように俊英の誉高かった野を父とし、儒学者の娘・くりを母とする家に生まれたのである。

父・野には多くの写本書籍の蔵書があり、中でも維新後は福沢諭吉に心酔していたと文献には記されている（*5）。国内外の事情に視野を広げようとする人物だったようであり、娘の幽香には当時姫路で最も先進的な塾であった田島藍水の塾で5歳から漢学と英語を学ばせていた。これは野口幽香についての文献には記されているが、弟の孫市については特に記されていない（*6）。しかし、やはり姉と同じような教育を父と母から授かっていたことは十分に推測が可能である。当時としては一般的な教育方法であった素読による東洋的知的鍛錬を受け、英語を学ぶことで西洋を学ぶ基礎を養っていたのだろう。

父・野は明治維新後、後述する生野鉦山での仕事を1年半で終え、明治8年11月より兵庫県学区取締、明治14年播磨国明石郡書記を務めたのち、明治15年（1882）より兵庫県学務課専務の任に就いていた（*7）。自主独立の理念のもとに西洋実学を奨励する福沢諭吉に心酔していた旧姫路藩の俊英・野は、明治新政府の兵庫県にとっては教育関係の要職にふさわしい人物であったと思われる。当時の教育関係者には福沢諭吉の影響を受けた人々が多く活躍していた。この父・野の人となりは、孫市の青年期の人格形成のうえで大きな影響を与えていたはずであるが、孫市が17歳の時に亡くなっている。

1. 1. 2 姉・野口幽香 ー近代日本の幼児教育の祖

野口孫市には妹の静（しづ）と3歳年上の姉・幽香（ゆか 1866～1950）がいたが、野口幽香は、近代日本の幼児教育の礎を築いた人物の一人として知られ、また明治後期から昭和の終戦直後にかけての社会事業家としても知られている。野口幽香については、幽香自身による手記『先君物語』をもとに、貝出寿美子著『野口幽香の生涯』が記されており、野口孫市の少年期を知るうえで貴重な文献資料となった。野口幽香は、20歳で父を亡くし

22歳で母を亡くしたこともあり、23歳で受洗しクリスチャンとなっている。

幽香は小学校卒業後、進歩的な父の勧めもあり男子生徒ばかりであった姫路中学に入学した。当時の教育界が女子教育を真剣に取り上げる方向に動いていた時でもあり、教育関係者の父を持っていたがゆえに幽香の姫路中学への入学は許可されたのだろう。しかし成績は男子生徒のなかでも上位優等であったものの、女子生徒が一人であることには無理があり退学している。19歳で東京の高等師範学校女子師範学科（女高師：現在の国立大学であるお茶の水女子大学）に入学し、24歳で迎えた女高師第1回卒業式では総代に選ばれていた。明治28年（1895）華族女学校に幼稚園が設立され、助教授として保母の仕事に従事しつつ、明治33年（1900）貧しい子供たちのための二葉幼稚園を設立した。明治38年（1905）華族女学校教授に就任。二葉幼稚園は大正11年（1922）二葉保育園と改称されていたが、ここに幽香は日本で最初の母子ホーム「母の家」を設立した。のちに正五位勲五等宝冠章を賜り、昭和17年（1942）から昭和22年（1947）にかけて皇后陛下に参殿御進講を行っている。終戦後は戦争孤児の収容に尽力したが、昭和25年（1950）に享年84歳で亡くなり東中野教会にて葬儀が行われた。生涯独身であった（*8）。



（図1-1）姉・野口幽香
1866～1950年



（図1-2）貝出寿美子著「野口幽香の生涯」
表紙写真は、貧しい子供たちのための二葉保育園

1. 1. 3 姉と弟、そして『衣喰住之内家職幼絵解図』

父母を早く亡くした幽香と孫市の姉弟は、生涯にわたり夫々の分野で活躍するお互いを誇りとしていたことが前記文献に記されている。孫市から幽香へは、欧米巡遊時の手紙をはじめとする多くの書簡が残され、(*9) 幽香からは、孫市の病床時に勇気づけの便りをほとんど毎日書き送っていた(*10)。孫市の長女・房の2歳の誕生日には、幽香から『衣喰住之内家職幼絵解図』が贈られ、その表紙裏には「この絵は房ちゃんのとうさんとをばのちいさいときにをばととうさんのおとうさんからおみやげにいただいたので房ちゃんの二つ目のおたんじょうびにおいはひのしるしにあげますだいじになさいよ/二度めの六月六日/東京をば/房子さま」と書かれていた。幽香と孫市一家の親密な関係がうかがうことができる。

野口野から姉弟に与えられ孫市の長女・房に伝えられた絵図は、房の孫すなわち孫市の曾孫にあたる尾形久美子氏に残されていたが、その絵図は現在、住友史料館に寄贈され江戸期大工職人の仕事が美しく描かれている貴重な絵図の資料として所蔵保管されている(*11)。



(図1-3) 曜齋国輝画 『衣喰住之内家職幼絵解図』

上の図が、野口幽香・孫市の姉弟に父・野口野が買い与えた、曜齋国輝(1830~1874)画の『衣喰住之内家職幼絵解図』である。家の建てられる過程が23枚から成る浮世絵に描かれたもので、建設工事の各工程の職人の仕事がありありと子供にも分かり易く描かれている。左上の最初は、建設工事はまず設計から始まることを描いているもので、施工

夫婦が大工にどのような家を建てるかを描かせている絵図に始まる。次に材となる木を山から切り出す図、順に木挽き、製材、杭打ち、建方、屋根・小舞竹壁下地、瓦葺・外壁仕上げの絵図となっている。これらは23枚中の8枚の図であり、他に左官・石工・鍛冶工・瓦製造・造作・襖障子張・織などの職種が描かれており、さらには織の材料を作る蚕について説明し木の割り方そして槌や天秤の原理などにも及ぶ徹底した図解となっていた。

この曜齋国輝の『衣喰住之内家職幼絵解図』は子供用となっているが、その具体的な記述内容は現代の大人でも感心するほどの内容のものである。孫市少年は、毎日姫路城を見上げながら、父からこのような絵図を与えられて育っていた。野口の建築についての関心や理解は、少年時代から養われていたのではないかと考えられる。

註

- (* 1) 本文で記したのちに生野県知事となる井田讓も、京都で他藩の藩士と交わることで各藩の動向の探索に当たっていたが、野口野と同じように大垣藩の砲術師範の家に生まれていた。また京都疎水をつくり野口孫市の工科大学での土木学の教授でもあった田辺朔郎の父も砲術を修めた人物であった。同様に、京都府議会初代議長で新島襄の同志社設立にも尽力した山本覚馬(1828～1892)も、会津藩の砲術師範の家に生まれていた。
- (* 2) 貝出寿美子著『野口幽香の生涯』 8～9頁
1974年 キリスト新聞社
- (* 3) 尾形久美子所蔵『久保田家関係資料』中の『豊岡誌巻中』 31～32頁
豊岡藩士・久保田精一は、明治元年に山陰道鎮撫使の西園寺公望に従い因幡・伯耆・出雲を歴巡した。明治14年には旧豊岡藩主や士族が協同して設立した宝林義塾の塾長を務め、のち豊岡の教育界に大きな役割を果たしている。幕末期の江戸では安井息軒に師事し、但馬に帰ったのちは池田草庵の青谿書院で学んだ。
図1-20の「近代日本の形成者として各界で活躍した池田草庵の弟子たち」の表にも、「教育界」の欄に名前が挙げられている。本文にあるように久保田精一は、野口孫市の岳父・久保田讓の兄であった。野口野⇔谷干城・井田讓⇔久保田精一⇔久保田讓という関係が、孫市が久保田讓の娘と結婚する背景にあったのかもしれない。また同じ兵庫県出身の教育関係者ということで、野口野と久保田精一は、直接に知己を得ていたことも十分に考えられる。

- (* 4) 前掲書『野口幽香の生涯』 8頁
- (* 5) 前掲書『野口幽香の生涯』 11頁
「彼は福沢諭吉に心酔し、その写本も多かったので、幽香は福沢諭吉の『世界国
尽くし』等、時代の新知識に、父の写本を通じて接する機会に恵まれた。この
ように幽香は幼児より新しい時代の息吹に接し、内外事情に視野を拡げられるよう
な環境に育てられたのである。」
- (* 6) 前掲書『野口幽香の生涯』 10～11頁
- (* 7) 前掲書『野口幽香の生涯』 13頁
- (* 8) 前掲書『野口幽香の生涯』 62頁
- (* 9) 濱田信義氏寄贈の住友史料館資料に、その裏に「姉上様」と書かれた米国巡遊中の孫
市から幽香に送られた写真がある。
整理番号⑬3-8、13「Niagara Falls/姉上様」
整理番号⑬3-28「大西洋/姉上様」
- (* 10) 前掲書『野口幽香の生涯』 61～62頁
- (* 11) 尾形久美子氏寄贈の住友史料館資料 整理番号90
『衣喰住之内家職幼絵解図』 曜齋国輝画

図版・写真

- (図1-1) 貝出寿美子著『野口幽香の生涯』より 表紙見開き
- (図1-2) 同上 表紙写真
- (図1-3) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 資料目録90

1. 2 少年期～青年期の野口孫市がいた場所

一般的に人格の形成について、特に少年期から青年期にかけて育つ場所には、場合によりその後の人物像への少なからぬ影響をみることがある。少年期から青年期にかけての野口孫市がいた場所には、大きく二つの特徴があった。一つは、一般の人々がまだ西洋人との接触機会が少なかった明治期の日本で、生野鉾山や神戸のように西洋人や西洋文化と普通に接する環境で育ったこと、もう一つの特徴は、少年時代に住んだ姫路城周辺や、高等中学校の時代に住んだ京都のように優れた伝統的建築物を身近に見ることのできる環境に育ったことである。

将来建築家になる画才に恵まれた孫市少年にとっては、これら住んだ場所の二つの特徴には何か示唆的なものがあるようにも思われる。

1. 2. 1 生野鉾山にて — 野口姉弟の遊び場だったムーセ邸

前述のとおり野口家は砲術師範の家柄であったため父・野は、鉾山技術に必要とされる砲術の火薬や機械等の技術を見込まれ、明治7年(1874)5月生野銀山鉾山寮に職を得た。明治初期の生野県知事には、野がかつて京都で親交を得た旧大垣藩砲術師範の井田讓が就任していた。明治7年には井田は既に陸軍少将になっていたものの、井田の関係で野が生野銀山に職を得たのかもしれない。野が砲術師範として火薬や機械等の技術を持っていたことは、同じく旧大垣藩砲術師範であった井田は熟知していた筈である。

生野鉾山は国が保有する重要鉾山であり、明治政府により、生野で採れた鉾石を飾磨津(現・姫路港)に運搬するための広幅で長距離の馬車道が整備されていた。日本で最初の高速度産業道路といわれている。また北西へ13km離れた神子畑鉾山と生野を結ぶ道には、現在では国の重要文化財となっている日本最初の鑄鉄橋も架けられていた。後に住友の別子銅山支配人となる広瀬幸平も新政府の鉾山司の役人として生野鉾山に1868年から翌年にかけて勤務していた(*1)。住友史料館の末岡照啓副館長は、明治期の鉾山業は当時の先端技術の集積であったとし、生野鉾山を「日本のマザー・マイン」と位置付けている。『住友の歴史 下巻』には、明治期鉾山業の重要性について下記のような記述がある。

すなわち鉾山業は、採掘という採取産業と、製錬という装置産業が結びついたもので、これに鉄道・海運という運輸業や、蒸気機関のちには電力(発電所)というエネルギー産業がともなった。鉾山の銅製品から電線・伸銅業が、機械修理・製作部門から機械工業や製作所が、土木部門から建設業が、木炭・坑木部門から林業が、石炭や亜硫酸ガスの合成技術から化学工業がそれぞれ派生していった。

現在につづくほかの企業グループをみても、三井は神岡鉾山(岐阜県)、三菱は吉岡鉾山(岡山県)、古河は足尾銅山(栃木県)日立は日立鉾山(茨城県)DOWA

(藤田)は小坂鉱山(秋田県)から工業化がはじまっている。いずれも明治維新後の官業払い下げによるものでその鉱山業の歴史は浅い。住友だけが、江戸時代からの鉱山業者であり、みずからその誇りを持っていた(*2)。

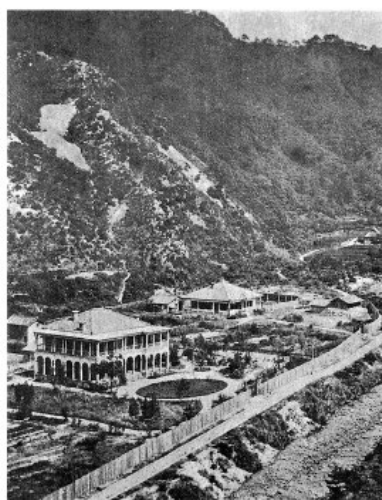


(上 図1-4) 生野鉱山坑道口
(右上 図1-5) 菊の紋章のある生野鉱山門柱
(右下 図1-6) 国の重要文化財である神子畑鉄橋
明治18年(1885)完成

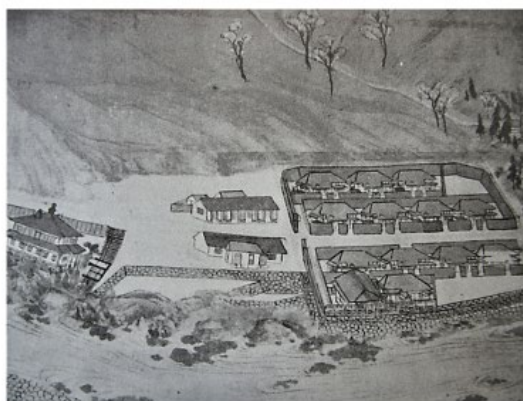
広瀬幸平はその官営の生野鉱山で、フランスから招聘されていた鉱山技師 Coignet (コアニエ)にから西洋の近代採鉱法を学び、後年広瀬が別子銅山に西洋技術を取り入れ近代化を図る原点とした(*3)。その生野鉱山で、Coignet とともに鉱山技師として技術指導にあっていたのが Mouchet (ムーセ)であった。両者はともにフランスの名門国立鉱山学校エコール・ド・ミーヌで学んでおり、エリート鉱山技師であった。この学校は、現在でも優れた指導者を輩出し続けている(*4)。現在の愛知県犬山市の博物館明治村に保存されている西郷従道邸は、フランス人レスカス(*5)の設計によるものであるが、ムーセの家族が住んだ二番館もこのレスカスが設計したと伝わっている。このムーセ邸住宅は現在、旧・生野鉱山に近い朝来町の旧・神子畑鉱山に移設され大切に保存されている。

ムーセと野口野は気心が通じるものがあったようで、野口一家は、その親切なフランス人鉱山技師ムーセの家族と親交を結ぶこととなった。幽香8歳、孫市5歳の時であった。孫市姉弟は、ムーセの息子シャル(幽香と同年生)娘マリー(孫市と同年生)と毎日のようにこの洋館で遊んでいたという。またムーセ夫人は、フランス料理をはじめイチゴミルクやチョコレートなどを作って母・くりと孫市姉弟にふるまい、母・くりには編み物も教えたと前記文献には記されている。後年、父・野亡き後、母・くりは姫路の小学校で洋式編み物を教え野口家の生計を保っていた(*6)。明治8年11月に野は兵庫県より学区取締を任命され、野口の家族は一年半いた生野を去り姫路に帰ることとなった。5歳から6歳にかけての孫

市少年にとり、西洋の人や文物に親しく交わったこの1年半の経験が、後年の孫市が臆することなく欧米の新しい建築を学び取る原点となっていたことが推測される。



(図1-7) 生野鉱山異人館官舎
手前の大きな一番館にCoignet夫妻が住み、
奥の方形の二番館にMouchetの一家が住んでいた



(図1-8) 右は生野鉱山明治政府吏員の官舎
ここに野口一家も住んでいたと思われる
左は異人館三番館



(図1-9) レスカス設計と伝わるムーセ邸
明治5年(1872)もしくは翌年完成



(図1-10) ムーセ邸の外部回廊となっているベランダ
孫市やシャルルが走り回って遊んでいたのだろう

1. 2. 2 姫路城、そして後の神戸中学と京都の第三高等学校

明治8年(1875)11月、野口野が兵庫県より学区取締役を拝命したことにより、野口一家も再び姫路に戻った。前記の幽香に関する文献では、姫路教員伝習所附属小学校に幽香が生野より転校したとの記録があるが、孫市が通ったのもこの小学校であったと思われる。この時期は学校行政の変動が激しい時期であり、学校名が頻繁に変わった。この小学校は、明治9年には兵庫県姫路師範学校附属小学校に改名され、明治11年には城東小学校に改名された(*7)。この小学校は現在まで続いており、姫路城の外堀から約400mの東に位置している。ちなみに姫路城天守閣から西北約250mの堀には清水門があり、孫市が生まれた姫路市清水とは、その城門を出た付近だったと考えられる。生野から姫路に帰った後の居住地についての記録はないものの、孫市少年は、この姫路城を常に間近かに見る地で過ごしていたのである。

現在の日本人にも言えることだが、初めて西洋のゴシック教会大伽藍やバロック宮殿などに接すると、その建築的迫力に思考停止状態に陥ることがある。姫路城は、日本最大の城郭であり、その美しさと圧倒的な存在感は群を抜くものがあった。野口が西洋で大建築を眼にしたとしても、少年時代に毎日見ていた姫路城の記憶は、それら西洋の大建築に気後れすることなく冷静に接することができる素地となっていたのではないだろうか。国宝・姫路城は、法隆寺と同時に日本で最初の世界遺産に指定されている。明晰な頭脳を父から引き継ぎ、後述するように秀でた画才に恵まれた孫市少年にとっては、後に建築家になる重要な素養として姫路城があったのではないかと考える。



(図1-11) 国宝・姫路城
城東小学校は写真の右端が切れたあたりにあった

明治15年(1882)孫市13歳の時に、父・野は兵庫県より学務課専務を申し付けられ、野口の家族は神戸下山手通6丁目番外200番邸に移り住んだ。その後ただちに孫市は、後年の兵庫県立神戸高校の前身・神戸一中の元であった葺合にある神戸尋常中学に入学した(*8)。下山手通6丁目から葺合までの片道3.5kmを毎日歩いて通っていたのである。

明治元年(1868)明治政府は、江戸幕府が欧米諸国と締結した安政五か国条約のため、平清盛の時代「大輪田の泊」と呼ばれていた兵庫の津から3.5km東に離れた寒村であった神戸村に、外国人居留地と大きな船舶を付けられる港をつくることになった。神戸は文明開化とともに出来た港湾都市であり、外国人居留地として都市インフラなども立派に整備された町でもあった。当時の英字新聞には「東洋における居留地として最も良く設計された美しい街である。」と紹介されている(*9)。外国人居留地としての神戸の特徴に、海岸通の外国商館などが立ち並ぶ居留地とともに、山手に日本人と外国人がともに住む「雑居地」があったことが挙げられる。英国領事ガールは花隈の山手1番に住み、外国人は諏訪山山麓の現・相楽園付近や旧北野村付近に散在して住んでいた(*10)。この神戸の「雑居地」性は、生麦事件など不穏な情勢があったため日本人と外国人の隔離を旨とした横浜居留地とは異なる大きな特徴であった。野口一家が住んだ下山手通6丁目は、現在の県庁付近であり、北の諏訪山や南の花隈の中間にある。孫市少年は、外国人が居ることが当然の町で中学校時代を送ったのである。また東にある葺合の中学校への通学路でも、多くの外国人や洋館を見かけていたであろう。



(図1-12) 神戸の居留地と雑居地の分布

白い矢印は諏訪山を示し、その南東の小さないくつもの黒丸は、外国人の雑居地を示す。この付近に野口一家が住んでいた。右手の山麓沿いにある黒丸群は北野の外国人雑居地を示す。



(図1-13) 明治7、8年頃の神戸外国人居留地

(図1-14) 海岸通にあったウォルシュ・ホール商会
明治5年(1872)



孫市が多感な少年時代を、西洋人がいることが当然であり洋館も多く見られた神戸で過ごしたことは、生野鉦山でのムーセ邸での経験に加え、当時の日本人が持っていた西洋への違和感や畏怖感を抱くことなく素直に西洋文明に接することができる基礎となっていたで

あろう。孫市少年は、小学校時代は姫路城という日本文化の精髓に毎日接して暮らしており、中学校時代は、当時でも稀な言わば「日本の小さな西洋」で育っていたのである。

野口は、明治19年(1886)大阪の第三高等中学校に入学した。在学中の明治22年(1889)に、第三高等中学校は京都へ移転している。野口は明治24年(1891)に卒業し東京の帝国大学に入学したが、第三高等中学校はその3年後の明治27年(1894)に第三高等学校と名称が変わった。第三高等中学校の起源は、1869年に大阪で設立された舎密局に求められる。舎密局とはオランダ語“chemie”(化学)から採られたもので、大阪府管轄の理化学学校であった。1880年には「大阪中学校」と呼ばれ、唯一の官立中学校であり、そのカリキュラムは後の日本の中等教育の在り方に影響を及ぼしたといわれている。その後、大阪中学校を拡張・改組して大学相当の教育機関(カレッジ)に発展させることが構想され、明治18年(1885)7月、野口入学の前年、大阪中学校は「大学分校第三高等中学校」と改称された。野口が入学し卒業したのは、この「大学分校第三高等中学校」であった。なお、1838年に設立された緒方洪庵の適塾を起源とし1931年に創設された大阪帝国大学は、「大学分校第三高等中学校」とは起源を別とする。

1886年当時の大阪は、経済の衰退から脱却し紡績業などを中心に工業化に向かい始めた時期であった。その活気が蘇りつつあった大阪で3年を過ごし、後の京都での2年間では、京都でしか体験できない多くの日本の伝統建築に接していたのではないだろうか。後年、京都の母校近くにあった吉田神社を描いた数枚のスケッチを残している。

孫市が第三高等中学校に入学した明治19年(1886)、父・野が肺炎にて逝去した。享年46歳。そして、その2年後の明治21年(1888)母・くり逝去。享年44歳。



(図1-15) 野口孫市による京都・吉田神社
水彩画スケッチ



(図1-16) 野口孫市による
京都吉田山北薬花場の水彩画スケッチ

註

- (* 1) 朝尾直弘監修・住友史料館編集『住友の歴史〈下巻〉』154～155頁
2014年 思文閣出版
- (* 2) 前掲書 『住友の歴史〈下巻〉』 152～153頁
- (* 3) 前掲書 『住友の歴史〈下巻〉』 154～155頁
- (* 4) 兵庫県朝来町 監修・発行
『兵庫県指定有形文化財（建造物） ムーセ旧居・旧神子畑鉦山事務舎 二度目の移築まで』 2004年 21頁
- (* 5) 前掲書の17頁には、レスカスは（築道家、土質家）と紹介され「レスカスは生野鉦山から姫路飾磨港までの生野鉦山寮馬車道の基本設計も担当した」と記されている。また「生野在勤 明治5年2月～明治5年9月 期間 7ヵ月」とある。
- (* 6) 前掲書『野口幽香の生涯』 13頁
- (* 7) 前掲書『野口幽香の生涯』 13～14頁
- (* 8) 前掲書『野口幽香の生涯』 62頁
- (* 9) 坂本勝比古著『明治の異人館』 49頁
1965年 朝日新聞社
- (* 10) 前掲書『明治の異人館』 47～48頁

図版・写真

- (図1-4) 筆者撮影
- (図1-5) 筆者撮影
- (図1-6) 筆者撮影
- (図1-7) 兵庫県朝来町 監修・発行
『兵庫県指定有形文化財（建造物） ムーセ旧居・旧神子畑鉦山事務舎 二度目の移築まで』より 5頁
- (図1-8) 同上 8頁
- (図1-9) 筆者撮影
- (図1-10) 筆者撮影
- (図1-11) 筆者撮影
- (図1-12) 坂本勝比古著『明治の異人館』 47頁
- (図1-13) 同上 図版188
- (図1-14) 同上 図版199
- (図1-15) 吉田神社 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録5
- (図1-16) 京都吉田山北薬花場 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録5

1. 3 結婚そして岳父・久保田讓

野口孫市は明治27年(1894)、久保田讓の娘の良と結婚した。久保田讓(1847～1936)は但馬の豊岡藩士の二男として生まれ、但馬養父の池田草庵の塾・青谿書院で学んでいた。その後、慶應義塾に学び福沢諭吉の薫陶を受け文部省に入省しており、文部省草創の頃から文部行政に携わり文部官僚の道を歩んだ人物であった。明治22年には欧米に派遣され、帰国後は文部次官など要職を歴任し、明治36年(1903)には文部大臣に就任している。野口孫市と良が結婚した当時は、貴族院議員に勅選されていた(*1)。

久保田の文部省会計局長時代の部下に、学制改革で建設が急がれていた高等中学校(後の旧制高等学校)の建築設計に携わっていた文部省の官僚建築家・山口半六がいた。山口半六については、第2章で詳説するが、野口は、その建築家人生に大きな影響を与えることとなった山口半六と久保田讓の縁で出会っていたと思われる。

久保田讓が娘婿の野口を既に建築界の重鎮となっていた部下の山口に紹介したことは、新婚早々の野口が大学院時代に設計した明治生命保険大阪支店の監理業務を山口が引き受けていたことから推測することができる。また野口の住友入りに、山口が深く関与していたであろうことは第2章で詳説する。



(図1-17) 岳父・久保田讓
(1847～1936)



(図1-18) 野口孫市夫妻結婚記念写真

ところで、どのようにして野口孫市が久保田讓の娘の良と結婚することになったのだろうか。久保田讓の兄・久保田精一は、「1. 1の註(*3)」のとおり、孫市の父・野が京都時代に親交のあった井田讓・谷干城と久保田精一は江戸の安井息軒の塾で同門であり、既に井田や谷を通じて、京都で野口野との知遇を得ていたことも考えられる。また明治15年から数年の間、兵庫県の教育関係の要職にあった野口野は、但馬の教育界を導いていた久保田精

一と直接の知遇を得ていたかもしれない。また岳父・久保田讓と実父・野口野は、国と県という立場こそ違え、ともに日本の教育を改革しようとする使命感を持つ兵庫県出身の同時代人であった。また両者は、共通して福沢諭吉の思想に影響を受けた人たちでもあった。実父・野の没後も、その関係が孫市に及んでいたことが想像される。

野口の生まれた播磨と久保田の生まれた但馬は、古来よりの「播但道」によって経済的に繋がり強い地理的關係にあった。生野鉦山の鉦石を姫路港に運搬するための日本最初の馬車道が敷設されていたことにもあらわれている。両地域は意識的に近い關係にあり、但馬の学業に優れた子弟が姫路中学に学ぶこともよくみられた。貴族院議員になっていた久保田讓が野口を娘婿に選んだ理由には、単に帝国大学の一介の優秀な学生であるという以上の背景があったはずと思われる。この結婚が建築家・野口孫市の運命を大きく変えることとなった。

註

(* 1) 安田清編『豊岡市出身 郷土人物略伝』 56～58頁
1957年 豊岡市

図版・写真

(図 1 - 1 7) 尾形久美子氏より筆者受領

(図 1 - 1 8) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録③5

1. 4 東洋的な知的鍛錬の遺風と西洋の実践的自由思想

序章にて挙げた野口と同時代の各分野で活躍した人々は、何故どのようにして、この明治後期の時代に集中してあらわれたのか。この投げかけた問いに対する考察として、二つの対極的もしくは直交するような座標軸を想定したい。一つは、江戸期から明治期までを通じて底を流れるように継続されていた東洋的な知的鍛錬の方法であり、もう一つは、明治初期の文明開化の思潮を導き、野口孫市の実父や岳父の久保田讓にも大きな影響を与えていた福沢諭吉の思想に代表される西洋の実践的自由思想であった。この東洋軸と西洋軸による直交座標のなかで、前記の人々による様々な業績が現れていた。序章の例に挙げた12人のうち7人が欧米に留学していることも見逃せない事実であるが、一方留学とは無関係に、西洋文献に精通したうえで日本固有の実践的・文化的なものから偉業を生み出していた多くの人たちもいた。

明治期の教育制度は数々の試行錯誤を経ながら整備されたが、江戸期から明治期までを通じて15歳程度までの子供たちが行っていた学習法に「素読」があった。それは儒教の代表的な経書「大学」「中庸」「論語」「孟子」すなわち四書を、皆で声を出して読み暗唱する方法である。素読は、その意味の解釈には重きが置かれておらず、言葉の響きとリズムを感じながら何度も復唱し暗記することで、普段使っている言葉とは異なる次元の観念を子供達の心に刻印する方法だった。しかし成長するにつれ、折に触れ突如として、その形而上の意味を実感として体得することもあり得たのである(*1)。それは、抽象度の高い思考を形成する基礎となったのであり、東洋的な知的鍛錬の方法であった。明治の知識人に共通する果敢な行動力と思弁的な傾向はこのように獲得されていた。

幼・少年期に素読の基礎を終えた武士の子弟は藩校で学んでいたが、学ぶ気概のある青年達の中には、身分にとらわれず開かれていたより高度な漢学塾で学ぶ者もいた。例えば、野口の卒業証書に帝国大学総長として署名している濱尾新や、野口の岳父で後の文部大臣となる久保田讓が学んでいた但馬の青谿書院もその一例として挙げられる。「但馬の聖人」と謳われた池田草庵が開いていた青谿書院は、現在の兵庫県養父市宿南にあった私塾であり、儒学の朱子学と陽明学を基礎としながらも実践的な教育で知られていた(*2)。門人には、官界・教育界・経済界・医学界などで活躍した多くの人材を輩出している。



(図1-19) 但馬の養父にあった青谿書院



(図1-20) 青谿書院で学んだ人たち 筆頭から2・3番目に浜尾新、久保田讓の名がある

儒学には「窮理」という概念があるが、これは「理を窮め性を尽くし以って命に至る」とされるもので、事物の道理を探究することであった。この「窮理」は、現代の自然科学・社会科学や哲学の認識方法に近く、漢学塾や幕末期の蘭学塾にける思考の原点であり、東洋的な知的鍛錬の言わば上級編であった。明治の人々の精神には、儒学による倫理性とともに、「東洋文明軸」とでも呼ばれるべき思考の座標軸が確固として存在していたのである。

それでは「西洋文明軸」はどうであったか。儒学思想による教育が東洋的な知的鍛錬の遺風をもっていたとしても、明治の新時代にあって西洋文化の移入普及に力を注がなければならぬ時、強靱な障壁として立ち上がったのも、それまでの日本人に深く根を下していた封建意識としての儒学思想だった。明治初年においては、その強靱な封建意識から離陸すべき精神革命が必要とされていたのである。自由平等・独立自尊の理念を掲げ西洋的「実学」を奨励した福沢諭吉（1836～1901年）に、固定した閉鎖的な社会関係から脱出し、動的・開放的な社会関係にはぐくまれた「闊達な精神への革命」への先導者を見ることができる。前述した久保田譲や濱尾新も青谿書院で学んだのち、慶應義塾において福沢諭吉の薫陶を受けていた。明治の教育界では彼らのように慶應義塾出身の官僚が多く見られたが、兵庫県の教育行政の要職を担っていた野口孫市の父も、その蔵書のなかに福沢諭吉の多くの写本を有していたと文献には記されている（*3）。

野口はその思想を言葉に表すような文章を残していないが、その残した建築作品から彼の建築術を丁寧に分析すると、その建築術を言い当てるような記述が、丸山眞男の著書「福沢諭吉の哲学」にみることができる（*4）。

福沢の思惟方法に最も近く立っている西洋哲学を求めれば、なによりもプラグマティズムであろう。あらゆる認識の実践目的（「議論の本位」）による規定性を説き、「物の貴きに非ず其働きの貴きなり」として事物の価値を事物に内在した性質とせずして、つねにその具体的環境への機能性によって決定して行く考え方はまさにプラグマティズムのそれではないか。

丸山眞男は同じ著書のなかで、福沢諭吉の根底にある価値意識について、「パースペクティブの流動性」「判断の相対化による自己超越」「多値論理による寛容」「知性中心」「試行錯誤による不断の前進」にあると記述している（*5）。明治の人々には、それまでの儒教的価値観による判断や行動様式の固定化とは別の、自由度の高い座標軸の設定が迫られていたのである。

一人の人格の中で、二つの価値軸を同時に持つことはたやすいことではない。分野が科学や技術の場合は、その困難は比較的小さいものだが、人間存在そのものを扱う文学の場合は生易しいことではなかった。夏目漱石がロンドンで神経衰弱的な状況に陥ったことは、それを物語っている（*6）。建築の場合は、科学技術と文学の中間点のような位置にあり、存在的危機感が顕わになることはなかったが、しかし「我々は何者か？」という自らへの本質的な問いが芽生えていたことは確かであった。また一方、この時代の知識人が、西洋文明軸に加えて東洋文明軸も同時に保ち得たことで、実はこの時代の精神文化を豊かなものとしていたことも事実である（*7）。しかしこれは、現在の視点になってはじめて俯瞰できることであって、明治の人々は前期・後期にかかわらず、ただひたすらその時代と社会との格闘を続けていたのであった。

註

- (* 1) 安達忠夫著『素読のすすめ』42～43頁
1986年 講談社現代新書
- (* 2) 長部和雄著『池田草庵先生の風格とその儒学思想』20～21頁
1984年 青谿書院保存会
- (* 3) 貝出寿美子著『野口幽香の生涯』11頁
1974年 キリスト新聞社
- (* 4) 丸山眞男著『福沢諭吉の哲学』82頁
2001年 岩波書店
- (* 5) 前掲書 101頁
- (* 6) 吉本隆明著『漱石の巨きな旅』60～61頁
2004年 日本放送出版協会
- (* 7) 佐伯啓思『西田幾多郎 無私の思想と日本』48～49頁
この一例として考えられる西田幾多郎が、東洋の精神文化と西洋の精神文化を統合して「世界的なもの」としていたことについて、下記のような記述がある。
『西田の関心は、西洋哲学の限界を突き詰めて、もっと深いレベルにまでゆくことでした。そしてそのもっとも深いレベルで彼が見出したものは、「日本的」としかいいようのない(彼は、しばしば「東洋的」といっていますが)観念だったのです。だから「日本的なもの」への志向は西田哲学を日本の閉ざすのではなく、それどころか、それを「世界的なもの」にさえしているのです。』

図版・写真

- (図1-19) 青谿書院 講義の間 筆者撮影
床の間には、青谿書院の庭に設置された石碑の「青谿書院記」の拓本が掲げられており、またその上部には、池田草庵の肖像写真が掲げられている。
- (図1-20) 現在の青谿書院に展示されている主要な門人たちの一覧 筆者撮影
一覧の筆頭に記されている北垣国道(1836～1916)は、高知県・鳥取県の知事を歴任した後、明治14年(1881)に京都府知事に就任していた。京都府知事として北垣が明治23年(1890)に完成させた琵琶湖疎水は、帝国大学工科大学の教官であり野口の卒業証書にも署名していた土木技術者・田辺朔郎の設計と技術指導により完成されている。

1. 5 旧姫路藩のネットワーク

野口の三女・好の子息である濱田信義氏から住友史料館に寄贈された、明治27年1月の野口の日記には、この年の元旦に野口は旧姫路藩主・酒井忠興公に新年の挨拶を行ない、翌日の1月2日には古市公威の自宅に新年の挨拶をしていたことが記されている(*1)。またこの日記には、旧姫路藩士の集まりについても別に記されており、明治期の東京における旧姫路藩士の結束の固さを読み取ることができる。帝国大学入学で上京した野口が最初に頼ったのが、旧姫路藩士の繋がりであったことは想像に難くない。

野口孫市は、明治24年に住友よりの奨学金貸与の恩恵に浴することができた。住友家の奨学金と野口孫市を結びつけたのは、当時の帝国大学工科大学の学長であった古市公威だったのではないかと推測する。父の死後、大学卒業までの経済的負担は決して容易なものではなかったはずである。しかし明治24年(1891)10月の帝国大学工科大学への入学の折、帝国大学への住友奨学貸費生に野口孫市が選ばれていた。

住友家の明治以降の国家公共への寄附については、枚挙にいとまないが、帝国大学の優秀な学生にも奨学金の援助を行っていた。野口入学時の年度とは異なるが、住友の奨学金援助について「帝国大学第二年報」の明治20年(1887)「学生給費貸費及寄附金」の項目に、帝国大学の主要な動向を帝国大学書記官がまとめた年報資料に評議会の記録として下記の記載の例があった(*2)。

一月十二日

大阪府平民住友吉左衛門ヨリ奨学ノ為メ工科大学学生三名分の貸費金ヲ出シ卒業ノ後従事ノ職業等別ニ制限セス其貸与セシ学資ハ直チニ帝国大学ニ返納セシメ更ニ他学生ニ貸与セシコトヲ開陳セリ



図1-21 古市公威
(1854~1934)

古市公威は、元姫路藩士で姫路藩の推挙により新政府への貢進生(*3)に選ばれ大学南校に学び、フランスのエコール・サントラルを優等で卒業、帰国後は明治時代の土木工学の祖となった人物である。古市を推挙した姫路藩には、藩の重鎮である野口孫市の母・くりの養父・高須隼人がいた。古市にしてみれば、自分が学長を務める工科大学に姫路藩の俊英で聞こえた野口野と高須の養女・くりの子息が学資に困窮しながら学ぼうとしていることを知れば、放っておく筈はない。事実、古市公威は、学費に困っている多くの学生に対し各種の奨学金を斡旋する労を厭わない人物であり、多くの学生を感激させたと文献には記録されている(*4)。

註

- (* 1) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料番号 293-16-1
- (* 2) 谷本宗生著『帝国大学成り期の再考のための年報資料の翻刻』 39～60頁
2015年 東京大学文書館・東京大学史紀要
- (* 3) 明治3年(1870)の太政官布告により、当時の各藩は石高に依り1名から3名の優秀な人材を大学南校に貢進することが命じられた。
- (* 4) 故古市男爵記念事業会編・発行『古市公威』 228頁
1937年
「・・・大学当局は優秀学生を便利ならしむる為、貸費生の制度を設け、官私各方面に勧誘し、或は無条件の奨学資金を求め、或は卒業後就職予約の条件を以て貸費せしむる等、学資を補助して学生就学の便宜を講ぜられしが、先生は此点に関し工科大学学生の為、特に斡旋奔走の末、内務省海軍省通信省を始めとし、民間有力者より多数貸費資金の申込を受けられ、工科大学に於ては他の分科大学に比し最も多数の貸費生を養成することとなりしは、全く先生努力の外ならず、斯くして優秀学生の為非常の便宜を与えられたることは、当時工科志望学生の最も感激せし所なりき。」
(原文は旧漢字)

図版・写真

(図1-21) 筆者撮影

1. 6 野口孫市の人物像

序章で述べたように「建築術」という視点には、「術」という営為と不離の関係にある「人」という観点が欠かせない。野口孫市の建築術の基層にあったその「人物像」について、この第1章の最後の節にて記述する。

野口の人柄については、日高胖が『野口博士建築図集』の序文で「其の居常質簡潔を尚び居家恰も禅堂の観あり、齊整古樸の気室の溢る。その身を持すること此の如くなりしと共に又情に篤く後進を撫育し、・・・」と記している。確かに野口が残した資料からは、情の篤きに加え、人付き合いがよく家族思いで洒脱で豊かな人柄が浮かび上がる。次頁の(図1-

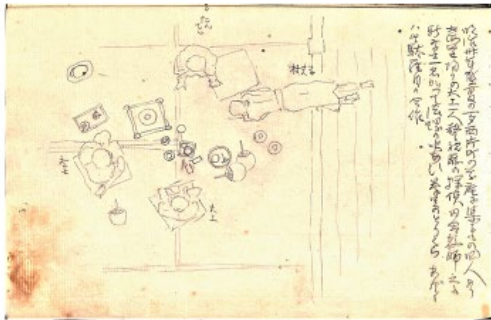
22)の添え書きには「明治三十年盛夏の一夕西片町の草庵に集まるもの四人あり、北海道帰りの大工一人、警視庁の探偵、田舎教師、之に新学士一名加って法螺の吹あい、拳足のとりくら、あげくは出駄羅目の合作」と書かれていた。夏目漱石は明治36年から39年にかけて同じ西片町に住んでいたが、まるで『吾輩は猫である』の主人の家に入出入りする寒月君や苦沙弥君を思いおこさせる。建築家らしく上から見た伏せ図で描いている。この新学士とは明らかに野口自身のことであり北海道帰りの大工とは逓信省の北海道の仕事で見知った大工であろう。野口の添え書きからは、漱石のようなユーモアと捻りのある洒脱さが感じられる。明治後期の知識人の一つの典型であったのかもしれない。

野口は俳句を愛好していた。(図1-26~30)の戯画に付けた川柳や、日々の暮らしや友人仲間について詠んだ俳句付きの水彩画スケッチからは、野口の格式張らない親しみのある人柄像が浮かび上がってくる。日高胖は、野口の早すぎる逝去を悼み『野口博士建築図集』の序文で次の六句を記して「追慕の情」を寄せていた(*1)。

花ざかり日本一も三日かな	明治四十四年四月	須磨にて
忽ちに雲起り雲消え麦青し	大正四年四月	住吉にて
春雨や雲わきいづる武庫の峯	同上	
秋風や博士も墓の飾りかな	大正四年夏	七里ガ浜にて
秋風や桐の葉たたく音高し	大正四年九月	入沢内科にて
生死のちまたに立つや秋の空	同上	

(図1-23)の添え書きには「病氣と云うと 不如帰の波さんも想像したが 今日須磨に御尋ねして御目に掛るとは イヤハヤ ッ」とある。この不如帰の波さんとは正岡子規であると推測する。明治28年に、正岡子規は関西では名医とされていた鶴崎平三郎の須磨浦寮病院に約1か月の間結核で入院しており、子規は須磨の風情を愛で多くの句を残していた。須磨にはいくつかの子規の句碑が残っている。子規は、松山へ帰ったのちも須磨を懐かしみ再び訪ねていた(*2)。子規は54の筆名を使ったといわれている。確認はできていないが、この「波さん」も弟子で須磨にも住んでいた高浜虚子の「浜」に掛けた「波」であったのかもしれない。子規は明治35年に35歳で逝去しているが、もし野口が子規に会っているとすれば須磨別邸の工事で野口が頻繁に須磨を訪れていたころであろう。

野口自身も結核に罹り、明治43年から1年半ほど鶴崎平三郎の須磨浦寮病院に入院していた。その時に見舞いに来た臨時建築部の部下4人を次頁の(図1-24)の戯画にしている。またこの4人は、(図1-28)に描かれている須磨浦五人男の4人かもしれない。野口はよくグレーのスーツを着用していたが、左から二人目の人物が野口自身のつもりだろう。

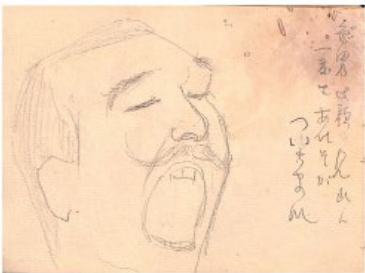


(左上 図1-22) 西片町の家での4人雑談風景

(右上 図1-23) 不如帰の波さん戯画

(左下 図1-24) 明治44年6月22日
見舞いに来た小寺・生野・
三木・瀧口諸君の戯画

(右下 図1-25) おそらく不如帰の波さんの
後ろ姿



(左上 図1-26) 「色男 此顔見れば 一度であいそがついちまい」 年代不詳

(中上 図1-27) 「たがために くしげづるにや 春のあさ」 同上

(右上 図1-28) 「須磨の浦 おとなふものは 黒白と 大小取交ぜ五人なりけり」 同上

(左下 図1-29) 「のどかさや 五月日出の すまのうら」 同上

(右下 図1-30) 「のどかさや 行こふ舟の 真帆かたほ」 同上

野口には、「具体的なもの」に精神的基盤を置く職人的で日本的な人物像が浮かんでくる。野口の帝大工科大学造家学科卒業の2年前に、伊東忠太が卒論で「建築哲学」を記しその後伊東が「建築論」を築いたこととは対照的である。野口自身が建築について語った言葉は、構造や工事仕様など技術分野に限定されており、「建築とは？」といった大上段の言葉は野口の日記やノートには残していない。そのかわり、西洋料理のレシピを細かく記述したノートは残していた。下の写真が、野口が残した料理のレシピノートである。いつ何故、野口が

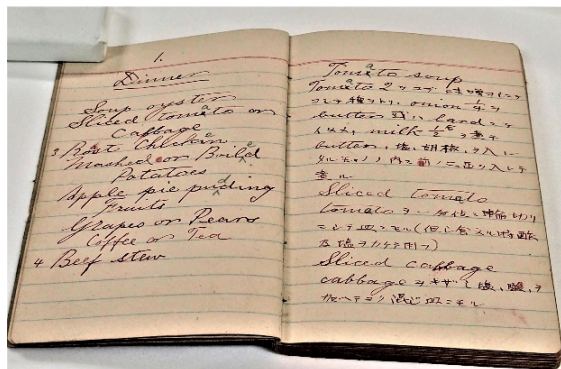


図1-31) 野口孫市の料理レシピノート

このノートを書いたのかは分からない。Breakfast, Lunch, Dinner のすべて英語のメニューで記されていることから推測すると、太平洋か大西洋上を洋行した折の船上での毎日の料理をメモしたものと思われる。しかし野口が料理のレシピを詳しく書き込んでいることから、野口の事物の背景を知ろうとするプラグマティックで分析的な好奇心が表れているようで興味深いものがある。

料理レシピノートや野口が残した具体的な景色などを描いた大量の水彩や鉛筆によるスケッチからも分かるように、野口は「具体性」の人であった。あくまで「具体的な生活像」に重きを置く人物であり、その「人」を語るうえで「家族」は重要な意味を持つ。



(左上 図1-32) 鶴沼館にて
(右上 図1-33) 野口孫市一家
長女・房子は東京の久保田家に
(左下 図1-34) 父・孫市より
長女・房子への手紙 2通
(右下 図1-35) 野口家の子供
たち

野口は明治27年(1894)に久保田讓の娘の良子と結婚した(*3)。野口は明治28年の盆休みの8月10日頃から8月17日頃にかけて良子と鶴沼・江の島に旅行しているとみられ、その折の12枚の水彩画のなかの2枚に良子と見られる女性が風景の中に描か

れていた。結婚の翌年の明治28年は、野口の大学院時代であり明治生命保険大阪支店の設計の区切りがつき、何がしかの設計料も入る目途が立っていたのかもしれない。後の柳田国男や武者小路実篤も宿泊している鶴沼最初の旅館である鶴沼館に宿をとっていた。前頁の(図1-27)の春の朝に髪をとぐ女性の後ろ姿も良子であろう。孫市の愛妻家ぶりがうかがえる。

孫市と良子の間には、三男三女の子供たちがいた。長女の房子は女学校に通うため、東京の祖父母の久保田の家に住んでいた。(図1-33)は、東京の房子に送るために撮影された武庫郡住吉村に住む野口一家と愛犬2匹の集合写真である。また(図1-34)にあるように、父・孫市は房子に頻繁に絵葉書を送っていた。野口の子煩悩ぶりがうかがえる。房子の孫が尾形久美子氏であり、写真中央の三女・好子の子息が濱田信義氏である。本論で紹介している膨大な量にのぼるスケッチや習作ドローイング等はこの御二人に残されていたもので、それらは現在、住友史料館に寄贈され大切に保管されている。



(左上 図1-36) 現在でいうドロップハンマー式の
檣で杭を打つ人々 明治30年頃
(中上 図1-37) 仕事帰りの職人の家族 同上
(中下 図1-38) 地引網を曳く人々 同上
(右 図1-39) 煉瓦工場で働く人々 奥に監査
している野口自身も描いている
(左下 図1-40) 井戸で水汲みの少女



野口の水彩画で、風景画以外でよく描かれていたのが「働く人々」であった。野口は働く人に対する敬意のような気持ちを常にもっていたようだ。第2部で述べる中之島図書館の棟札の裏に工人たちの名前を丁寧に書き込んでいたことも、その野口の基本的な姿勢の現れであった。上に紹介した水彩画でも、「働く人々」への共感が現れている。(図1-37)

の仕事を終えた職人の父とその父を迎える家族の姿に、野口の家族を大切する人柄と職人に対する謙虚な人柄が出ていて微笑ましいものがある。日高胖は野口を「情が篤い人」と表現していたが、この「仕事帰りの職人の家族」の鉛筆画スケッチにも成程と思わせるものがあった。

註

- (* 1) 日高胖記『野口博士建築図集』 序文
1920年 住友史料館所蔵
- (* 2) 須磨区役所まちづくり課製作
『須磨の近代史 - 明治・大正・昭和史話 -』 43～48頁
1998年 神戸市須磨区役所
- (* 3) 正式な名は「良（りょう）」であるが、この頃の習慣として女性の名に「子」をつけることが多かった。野口の長女は房、次女は澄、三女は好であるが、つねに「子」をつけて手紙などには書かれていた。従って野口夫人を「良子」と記載している。

図版・写真

- | | | |
|---------------|--------------------|-----------|
| (図 1 - 2 2) | 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 | 資料目録 1 |
| (図 1 - 2 3) | 同上 | 資料目録 3 |
| (図 1 - 2 4) | 同上 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 2 5) | 同上 | 資料目録 3 |
| (図 1 - 2 6) | 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 2 7) | 同上 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 2 8) | 同上 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 2 9) | 同上 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 3 0) | 同上 | 資料目録 4 |
| (図 1 - 3 1) | 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 | 資料目録⑬ 4 |
| (図 1 - 3 2) | 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 | 資料目録⑮ 1 |
| (図 1 - 3 3) | 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 | 資料目録 9 |
| (図 1 - 3 4) | 同上 | 資料目録 6, 8 |
| (図 1 - 3 5) | 尾形久美子氏からの寄贈により筆者所蔵 | |
| (図 1 - 3 6) | 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 | 資料目録 1 |
| (図 1 - 3 7) | 同上 | 資料目録 1 |

- | | | |
|---------|-------------------|---------|
| (図1-38) | 同上 | 資料目録1 |
| (図1-39) | 同上 | 資料目録78 |
| (図1-40) | 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 | 資料目録⑭49 |
| (図1-41) | 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 | 資料目録⑮1 |



(図1-41) 鶴沼夕陽 明治28年8月17日

第2章 建築家への助走

第2章では、野口孫市が住友本店臨時建築部の初代技師長となり建築家として活躍する前の、主に帝国大学工科大学の大学院時代のいわば「建築家への助走」の時代を概観する。

野口は工科大学造家学科に入学し西洋建築についての学習と研鑽を重ねていたが、その内容を本章の第1節にて記述する。第2部で述べることになる野口の建築術には、「西洋的なもの」と「日本的なもの」が折衷して現れるという顕著な特徴がみられた。第2節では、第1節の「西洋」についての学習・研鑽に対する、野口の「日本」への視線について紹介する。野口のなかでは、「西洋」と「日本」という二つの極がまるで楕円形を描くように作用していたが、その背景となった基礎的な学習と素養を第1節と第2節で明らかにしたい。

第3節では、住友に入社する以前の設計活動として、大学院時代に設計した明治生命保険大阪支店と、大学院卒業後に入社した逓信省での仕事について述べる。これらの仕事には、野口の建築術の特徴が既に顕著に現れていた。

建築家としての野口が最も重点を置いていたのが、建築技術であった。なかでも「構造」には最も重きを置いており、大学院で研究したのは耐震構造学であった。第4節では、この構造技術者としての野口に焦点をあてる。

最後の第5節では、住友よりの招聘がいかになされたのかについて述べる。そこでは恩師である辰野金吾ともう一人の大きな影響を受けることなる文部省の建築家・山口半六の存在が大きく影響していた。

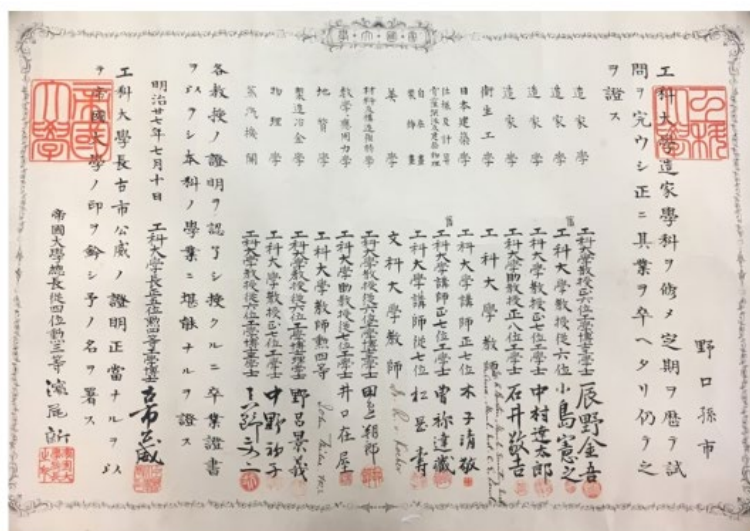
2. 1 西洋建築についての学習と研鑽

明治時代の工科大学造家学科にあっては、西洋建築の学習・習熟が第一義的な目的であった。本節では、野口の工科大学時代の西洋建築の学習と研鑽について主に述べる。まず辰野金吾をはじめとする教授陣について概観し、卒業設計と卒業論文について紹介する。また大学院卒業後も含め野口が西洋建築の手法を自家薬籠中のものとするために行っていた西洋建築の透写習作も西洋建築についての研鑽として大きな意味を持っていた。この西洋建築の訓練のような習作についても本節で扱い、さらに住友入社直前に機会を得た欧米の建築視察巡遊についても記述する。

2. 1. 1 工科大学造家学科の教授陣と第1世代の建築家たち

次頁の写真は、明治27年（1894）7月10日付の野口孫市の卒業証書である。第1章1.4の東洋的な知的鍛錬に関連して述べた青谿書院の門人・濱尾新と1.5で記した姫

路藩士・古市公威が、それぞれ帝国大学総長、工科大学長として捺印署名している。そして筆頭には、造家学の工科大学教授・辰野金吾の署名捺印がある。野口孫市は、明治24年(1891)に帝国大学工科大学造家学科に入学していた。



(図2-1) 明治27年7月10日付 野口孫市の卒業証書
筆頭に辰野金吾の署名があり、帝国大学総長・濱尾新および工科大学長・古市公威の署名がある。

明治10年(1877)の工部大学校に教師として着任したジョサイア・コンドル(1852~1920)が工部省との契約満了で明治17年(1884)に退官し、その後を引き継ぎ工部大学校教授に就任したのが、辰野金吾(1854~1919)だった。辰野は、英国でのロンドン大学等留学やウィリアム・バージェス建築設計事務所での実務を経験し、フランスやイタリアでの欧州グランド・ツアーを終えて帰国していた。明治19年(1886)には文部省管轄の帝国大学が設置され、工部省管轄であった工部大学校は帝国大学工科大学に改組され、辰野はその教授に就任している。また同年、「造家学会」も設立していた。

(図2-1)の野口の卒業証書に署名捺印している他の数名の教官たちを概観することによって、野口が大学時代に受けた建築教育を垣間見ることができる

辰野に次いで署名しているのが小島憲之(1857~1918)である。大学南校で学び、若年のころ横浜で外国人に英語を学んだ経験を活かし米国のコーネル大学建築学部に留学し卒業していた。米国の建築設計事務所での実務も経験しており、英語に堪能な建築家であった。辰野の留学は英国など欧州に限られており、小島は、米国について最初に野口の目を開かせた教官であったと推測する。

明治26年以降、帝国大学の制度改革により講座制が敷かれるようになると、造家学科は三講座制となり、分担教育の体制が整えられた。第一講座は、構造・材料・採光などで、中村達太郎(1860~1942)が教えている。第二講座が辰野で、建築設計を担当する中心的講座であった。第三講座の石井敬吉(1866~1937)が建築史と歴史的意匠を明治28年から担当している(*1)。

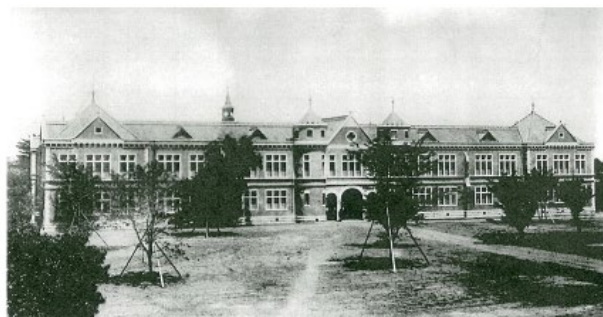
木子清敬（1845～1907）は、明治宮殿など皇室関係の造営で活躍していたが、木子家は代々宮中の修理職棟梁の家柄だった。辰野は、英国留学中に日本の伝統的建築から学ぶ必要を痛感し、明治22年より日本建築史の講義を木子に依頼していた（*2）。後述するように、野口の設計したものには和風建築もあり、また「和」と「洋」をあわせ持つような建築術を見せていたことから、木子の講義は野口にとって興味深いものであったと思われる。辰野と唐津藩の同郷で辰野の生涯の友であった曾禰達蔵（1853～1937）の署名も見られる。唐津藩士の家に生まれた二人は、唐津藩洋学校の耐恒寮に学び、その英語教師で後の総理大臣となった高橋是清の薫陶を受け、ともに工部大学校のコンドルのもとで学び、ともに工部大学校を第1期生として卒業していた（*3）。野口が在学していた時期の曾禰は、三菱社でコンドルと三菱1号館・2号館の設計に従事しており、野口にとっては、現役で活躍する建築家の講義には刺激されるものがあっただろう。

松岡壽の署名も見られる。辰野は欧州グランド・ツアー中のイタリアで松岡と出会ったが、松岡は、岡田信一郎基本設計を行い辰野が最終的な設計をした大阪中央公会堂の天井フレスコ画などでも知られている（*4）。この松岡に、野口は西洋画教育を受けていた。野口の生来の画才に加え、松岡の正統的な洋画教育が、野口の秀でた画力を磨き上げていたと思われる。同じく署名している田辺朔郎（1861～1944）は、日本の近代土木工学の礎を築いた一人として知られている。京都の琵琶湖疎水の設計者であり、日本初の水力発電所である京都の蹴上発電所の設計者でもあった（*5）。

野口は大学の3年間を同級生4人のなかで首席を通したが（*6）、同時に片山東熊のもとで現在いうところのアルバイトとして設計実務にも携わっていた。



（図2-2） 松岡壽が大正10年に描いた辰野金吾（1854～1919）



（図2-3） 辰野金吾設計による帝国大学工科大学本館 明治21年竣工

(図2-4)は、片山東熊を筆頭とする内匠寮の設計により直営工事で建設していた帝国京都博物館の工事現場で、野口が帝国大学の学生の時の2か月間「場所付雇」として働いていたことが記された工事録から編集された資料である(*7)。他の「場所付雇」は工手学校の卒業生である中堅技術者や大工・職工であり、明治のこの頃に帝国大学の学士になろうとする者が一時的であっても工事現場職員として働くことは珍しかったであろう。確かに工事現場では材料・工法についての具体的な知識が得られる。野口は、そのような建築についての具体的な知識を求めて帝国京都博物館の「場所付雇」として働いていたと思われるが、ここにも野口の西洋建築への強い学習意識をみることができる。

表1 場所付雇一覧

名前	雇用時期	解雇時期	備考
新海正綱	明治25年4月26日		工手学校造家学科卒
矢田鉄蔵	明治25年4月26日		工手学校造家学科卒
吉山義權	明治25年5月4日		
權村辨次郎	明治25年6月21日以前		大工
三谷金之輔	明治25年7月18日以前	明治26年5月5日	
福田安三郎	明治25年9月14日		工手学校造家学科卒
吉永佐兵衛	明治25年10月8日		
設楽貞雄	明治25年10月25日		工手学校造家学科卒
寺井米估	明治25年10月25日		職工として雇用
辻武美	明治25年12月23日	明治26年2月14日	
黒瀬信太郎	明治26年2月13日		書記・庶務を担当
矢野収蔵	明治26年5月15日		工手学校造家学科卒
野口孫市	明治26年8月24日	明治26年10月20日	帝国大学造家学科

(参照)『工事録』、『日誌』、『工手学校一覧』(工手学校 1908年)



(図2-4) 帝国京都博物館の『工事録』に残された「場所付雇」の記録から『工手学校一覧』などを参照して作成されたもの。最後に野口孫市の名が挙げられている。

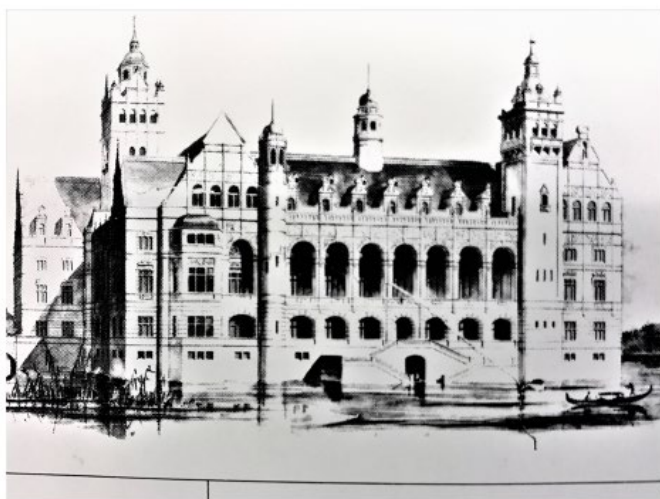
(図2-5) 片山東熊を筆頭とする宮内省内匠寮の設計による帝国京都博物館。明治28年(1895)。

2. 1. 2 野口孫市の卒業設計

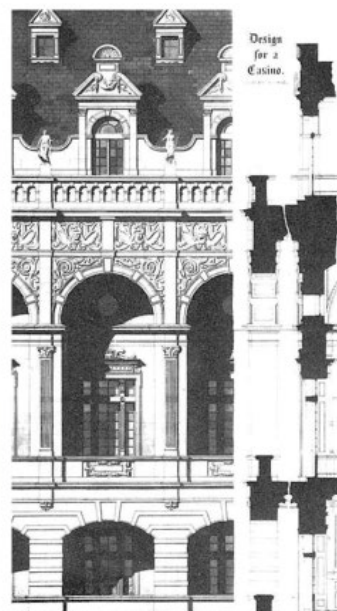
野口孫市による明治27年(1894)の卒業設計のテーマは、「カジノの為のデザイン Design for a Casino」であった。野口がこのテーマを選んだことにも興味深いものがある。Casinoは、もともとイタリア語の小さな家を意味する Casa から派生した言葉で王侯貴族が所有する社交娯楽用の別荘を意味していた。産業革命など時代の変遷とともに娯楽施設を備えた社交遊興の場としての性格を強め、当時の欧米では、特権階級のためのサロンという意味合いの建築であった。このテーマを選ぶことによって、宗教性を帯びたゴシック様式や官庁建築のような古典様式から逃れ、自由な様式によって設計することが可能となった。

ピクチャレスクなクィーン・アン・リバイバル様式による湖畔のカジノである。よく見ると湖にはヴェネチアのゴンドラのような船が浮かんでおり、湖畔という敷地設定をすることで、絵画的効果を一層引き立てる舞台を用意したようだ。その湖に面した立面の両端部には、切妻屋根端部のダッチゲブルを頂く左右非対称の立面が描かれている。どちらもそれ

ぞれに典型的なクィーン・アン・リバイバル様式によるものである。ところがその中央部は、古典様式による7連ローマン・アーチとなっている。これは2段のアーチで構成されており、下段が堅固な石造の壁面を小さく切り抜いたようなアーチであり、上段の7連アーチは大きなアーチと小振りの柱が精緻に組み合わせられた華麗なものとなっていた。7連のアーチの上部には細かな装飾が施されたパラペットが上端部を引き締めており、それぞれのアーチ位置の上部にはドーマーの切妻屋根端部の小さな装飾性の高いゲートルがリズムカルに並べられていた。そして7連アーチによって構成される奥行感ある正面テラスは、巧みに陰影効果を出しており全体を中央で引き締めるメイン・モチーフとなっている。さらに各所に配置された4本の塔は、すべて意匠が異なるもので、全体のスカイラインに豊穡なイメージを付け加えていた。



(上 図2-6) 野口孫市の卒業設計 立面図
(右 図2-7) 同上 矩計断面・詳細立面図



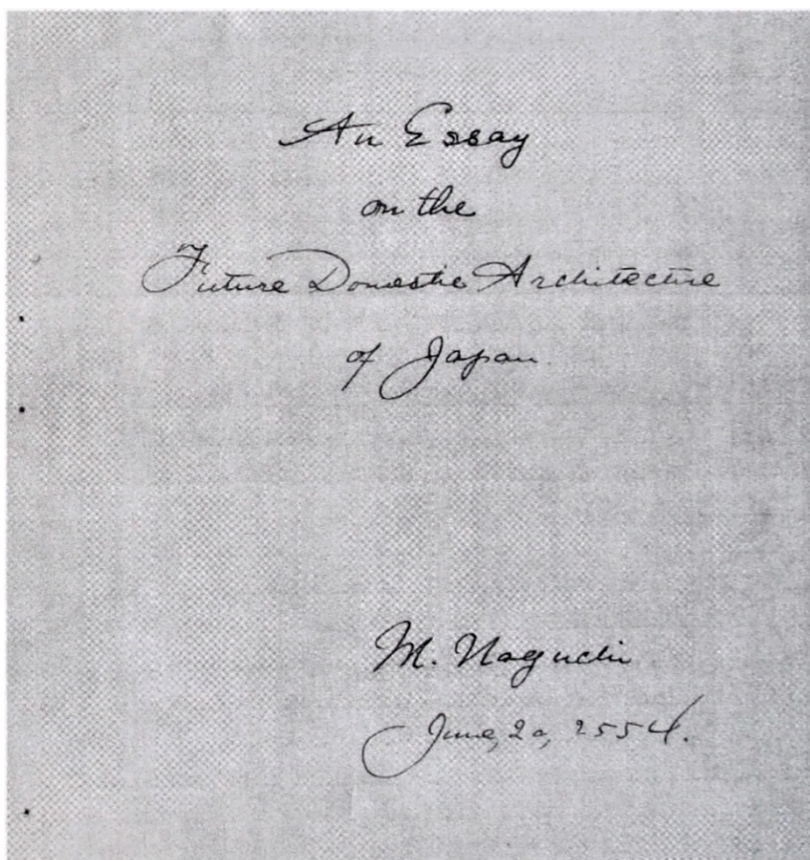
この卒業設計で特筆すべきことは、両端部のクィーン・アン・リバイバル様式と中央部の古典様式が、折衷するように組み合わせられていることにある。明治21年の辰野設計の煉瓦を用いた工科大学本館は、ヴィクトリアン・ゴシック系のチューダー風であり、野口の卒業設計と同年に竣工したジョサイア・コンドル設計による三菱1号館が、クィーン・アン・リバイバル様式で竣工していた。ドイツから招聘された建築家・エンデ&ベックマン設計による司法省(明治29年竣工)や裁判所(明治29年竣工)も煉瓦を用いたネオ・バロック等古典様式系のデザインを見せることになるが、野口が卒業設計をしていた明治27年はまだ完成していない。当時の英国では、リチャード・ノーマン・ショウがクィーン・アン・リバイバル様式に古典様式の要素を加味した建築を設計していた(*8)。野口の海外文献による知識欲には旺盛なものがあり、同時代的な海外文献によってその動向を知っていたのかもしれない。また、辰野が英国で師事したウィリアム・バージェスも、中世的な風合いをもつクィーン・アン・リバイバル様式で多くの建築を設計しており、この様式を熟知する辰野

の指導もあったのかもしれない。

この野口の卒業設計には後年の野口の特徴が良く現れていた。大学院時代に野口が設計した明治生命保険大阪支店にも、この卒業設計からの直接的な引用が認められる。辰野が明治生命保険大阪支店の設計で野口を推薦するにあたって、この卒業設計の存在は大きかっただろう。また、山口半六が住友に推薦する若い建築家を思い描いたときに、この卒業設計の建築家ならば推薦できるという思いもあったかもしれない。ともあれ野口の将来に大きな影響を与えた卒業設計であった。

2. 1. 3 野口孫市の卒業論文

野口孫市の卒業論文は英語で書かれており、そのタイトルは“An Essay on the Future Domestic Architecture of Japan”であった(*9)。それは、明治の開国以来西洋建築が溢れるように日本に流れ込むなかで、全く異なる建築様式を持っている日本の建築が将来どのようにあるべきかという課題を考察するものだった。論文の日付は、“June, 20, 2554”と皇紀で記されており、この皇紀2554年は明治27年(1894)に相当する。



(図2-8) 野口孫市の卒業論文の表紙

この論文では、特に住宅に焦点を当て“European Architecture”の何が“dwelling purpose”のために“directly applicable to Japan”であり、何が“applicable”でないのかについて、エッセイ風に考察が進められている。その考察の項目は、“Comfort” “Durability” “Beauty”そして“Sanitation”の4項目から成っていた。なかでも野口は“Comfort”の項目に重点を置いている。論文全体を通じて“Comfort”という言葉が頻繁に用いられており、また後の野口の設計活動にもこの“Comfort”を重視した特徴がよく現れているため、ここでは“Comfort”の項目を中心に紹介する。なお“Beauty”の記述についても紹介を行う。

“Comfort”

“Comfort”の項目の書き出しは、“What we call a comfortable house is one suitably arranged with respect to climate and domesticated habits.”で始まっており、洋風建築を日本の気候と生活習慣にいかにか適合させるかについて、この項目のテーマが据えられていた。

極度に寒くない冬と極度に暑くない夏という日本の気候から、日本では開口部を大きくとり、夏期の換気循環に重点が置かれていることを述べている。一方欧州では外壁に断熱性の高い材料を用い、冬期は熱を室内に保ち夏期は熱を入れないという特徴を挙げている。当時の日本人は、洋式の住宅について「夏は暑く冬は寒い」と批判していたが、野口は「経験してみるとそうでもないことが分かる」と記している。これは、野口の少年期の生野や神戸での西洋人との接触のなかでの洋風住宅の体験を思わせるものであり、野口の“Comfort”の記述が洋風の生活実感から出ているものであることをうかがわせる。

野口は、気候への対処の仕方は、洋式建築の煉瓦造・石造などの組積造と日本建築の木造という構造の違いに起因していることも述べており、構造や気候に起因する建築の特徴が、生活習慣における外部空間と内部空間の関係にまで及ぶ和洋の違いとして言及している。日本では大きな開口部によって室内から外部の環境を眺めることに快適さを覚えるものだが、西洋では開口部は光と必要な空気を部屋に取り入れるものであるとし、“the indoor comfort is essentially a more Northern idea, as contrasted with a sort of outdoor enjoyment which is a more Southern idea and Oriental.”と記述している。さらに“this character shall never be changed forever.”とも述べている。日本と西洋の建築構造と気候に起因する相違を、和洋の生活習慣の違いにまで言及し、日本人の生活習慣に合った建築をつくることの重要性を述べている点に注目すべきものがある。

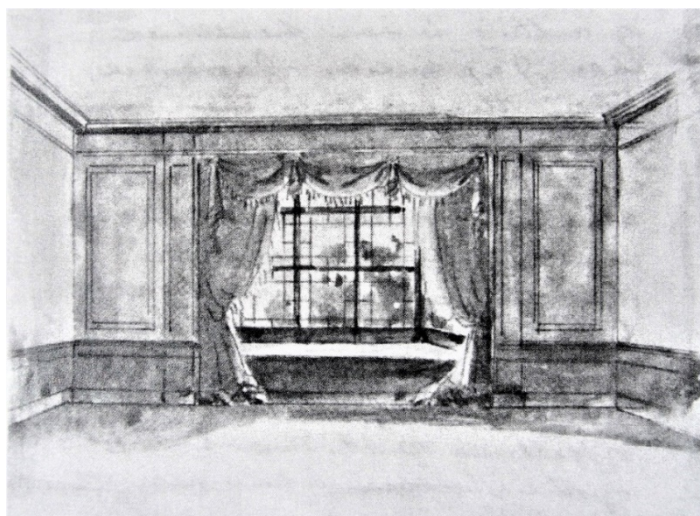
また耐力上の問題で開口部を大きくとれない組積造と、日本人が持つ外部への開放感という快適さの生活習慣を両立させる方法を野口は提案している。それが、ベランダ・ベイウインドウ・バルコニー・塔などである。これらは組積造でありながら、“The open character of these is certainly suitable for Japan and at the same time their strength are not injured.”であり、“These arrangements are sufficient or more to fulfill the requirement due to our open character.”と記していた。

さらに開放的な日本の建築が持つ夏期の快適さに加え、冬期の寒さに対処する方法として、暖炉の快適さや効用も強調している。暖炉には、“the comfort of giving home-like character to a room”が備わっているとし、家の廻りでは嵐が吹き荒れ窓ガラスの外は身を切るような寒さであっても“pleasure and comfort shall be gained by making a family circle round the fire place.”と暖炉の効用を述べている。ここでは、日本の火鉢ではなく洋式の暖炉を用いることを提案しており、“get the affluent pleasure of home- likeness.”とその心地よさを強調している。その言葉使いにも家族の暖かさを求める野口の人柄が現れていた。

野口は空間の大きさと快適さの関係についても言及していた。宮殿や邸宅の迎賓室のように公的な“dignity”が必要とされる場合は、十分な空間の大きさと高い天井高が相応しいとする一方で、書斎や家族の居間のようなプライベートな空間では“smaller size of room and lower height of ceiling really give the intimates an idea of repose which is very important to make the room home-like.”と述べていた。さらにベイウィンドウが一つの空間のなかに大小の快適な空間を組み合わせる効用があることについても述べており、天井の高い大きな空間に組み合わせられたベイウィンドウ空間の“the snugness or smallness of size.”という心地よさも述べている。

野口はこの論文で、“inglenook”という言葉は使っていないが、明らかに“inglenook”の空間をイメージした“Fire place in a recess is admired by English and windows are often introduced in the side of the recess, this is said to be combination of a fire place with a bay window and of course have more home-like character than fire place or bay window alone.”という記述も見られる。後の野口の邸宅建築における特徴が、既にこの論文のなかに見られた。

また野口は和と洋の座位形式の違いにも留意しており、和室の畳の上の座り方が脚の血液循環を損なうものであり、洋風の椅子式の生活が“more convenient, healthy and comfortable”であるとしている。しかし畳の上の座位形式も否定されるべきではなく、二つの座位形式の共存を下図のように提案していた。



(図2-9) 畳もしくはカーペット敷きのベイウィンドウ

これは、2フィートの床レベルを上げたベイウィンドウを畳敷きもしくはカーペット敷きとするもので、二つの座位形式を両立しようとするものであった。後の野口の和洋を折衷する建築術の先駆けを見るようで興味深いものがある。この提案によって、“the idea of repose lying upon mats”が得られ、また“the varieties arrangement by the difference of floor”も達成できるとしていた。

“Comfort”の項目の最後で、野口が“the style of living cannot stop the increase of the building of Western style.”と記述していたように、当時の社会のなかで西洋建築が広がる潮流には逆らえないことを認識したうえで、野口は気候や生活習慣に裏付けられた日本人の生活様式に立脚する西洋建築のあり方を“Comfortable”な建築として求めていることがうかがえる。この建築の「あるべき姿」や「快適さ」に求める志向は、卒業後の野口的设计活動の原点ともなっていた。

“Beauty”

野口は、日本人の性格による芸術的な嗜好は「簡潔さ“Simplicity”」にあるとし、欧州人の性格による芸術的な嗜好は「緻密な作り込み“Elaboration”」にあるとしている。日本人の基本的な嗜好は、和と洋の相互交流により多少の影響は受けるものの、「簡潔さ“Simplicity”」に対する日本人の嗜好は決してなくなるものではないと断言している。

野口は、東京における外国人建築家・日本人建築家によるルネサンス様式や伊・仏・英・独各国のゴシック様式建築、有栖川宮や北白川宮の皇室関係建築や渋沢邸などの邸宅建築を採り上げ、“Most of them, however, have no great difference, and is impossible to determine to which of French German or Italian they belong. Most prevailing style now to be seen in Tokyo is that lying between Italian and German Renaissance and that of the residences for high classes are French Renaissance.”と批評している。また建築に取り付けられている西洋風の彫刻やレリーフなどの装飾についても、一般的な日本人にとっての違和感を述べており、“I am educated rather more of the Western taste than of Japanese, yet found the decoration of the West as their painting and sculpture, too much or too troublesome.”と述べていた。和洋の装飾法の違いを具体的に例示することにより、西洋の「緻密な作り込み“Elaboration”」に対する野口自身の違和感も記している。

野口は、東洋と西洋の両者が統合された建築様式が、将来において新しい建築様式として生まれることもあり得るとしているが、“But the art of combining or amalgamating such exceedingly different styles is the work most difficult among different ones and perhaps it cannot be succeeded except by a man of genius.”と述べ、その困難さも指摘していた。その実現には天才的な才能が必要とされるものの、ある特定の人物による意図や作為のみでなされるものではなく、長い時間をかけて成長するように生まれてくるものであることも述べていた。真に日本的な性格を反映する洋式建築は、日本人建築家によってしか成し得ない

ものであり、それは西洋建築のデザイン要素を加減するような操作ではなく、全く新たな方法で達成されるであろうことも示唆していた。

2. 1. 4 大学院時代と推測される野口孫市による西洋建築の透写習作

野口は、後で述べる海外巡遊に依る以上に、膨大な量にのぼる洋書や欧米の建築雑誌により海外情報の収集も行っていった。野口が住友家に寄贈した蔵書目録が残っているが、英文・独文・仏文の書籍だけで百二十冊を超える記載があった。そのなかで注目すべきものに、購読していた英国建築・美術雑誌の記載がある。英国でのアーツ・アンド・クラフツ等芸術の最新動向を紹介し欧米で有名となっていた美術誌“The Studio”や、当時の建築を紹介していた“Academy Architecture and Annual Architectural Review”などがあった。

大学院時代と思われるが野口は、工科大学造家学科にあった書籍より、西洋建築手法を自家薬籠中のものとするためハードトレーニングのように膨大な量の西洋建築の写真や図面の上に和紙をあてその上から西洋建築の精髓を掴もうとトレースする習作を行っていた。そのすべての出来上がりのタッチは、野口そのものであり、どの線も生き生きとした見事なものであった。これらの透写習作からは、西洋建築を学び取ろうとする野口の真摯な息づかいを思い浮かべることができる。下記の透写習作には、例えば“B.N.Jul.14, 1882”というような記入が散見される。これは“Building News”の略であろう。

以下に紹介する透写習作の時期については明らかではない。しかし“Building News”の日付の多くが1880年代であったことを考慮すると、大学院時代の前後だったのではないかと推測する。ここでは大きく三つの分類、すなわち（1）各種建築様式の習作、（2）柱オーダーについての習作や塔・記念モニュメントなどの建築要素の習作、そして（3）様々な装飾技法に分けて、その一部を紹介する。

（1）各種建築様式の習作

透写を行う対象となった建築物は多岐にわたっているが、その興味の対象となった建築様式の種類から野口の関心のありかを探ってみたい。その建築様式の種類には、英国のカントリーハウ・ハウス等に見られるオールド・イングリッシュ様式、田園のコテージなどヴァナキュラーな風合いを持つ住宅建築、新古典様式による大規模建築、クィーン・アン・リバイバル様式やジャコビアン様式など当時の新潮流によるもの、そしてゴシック様式の教会などである。なおビザンチンやインド等の影響を受けた建築様式の習作も見られた。

オールド・イングリッシュ様式

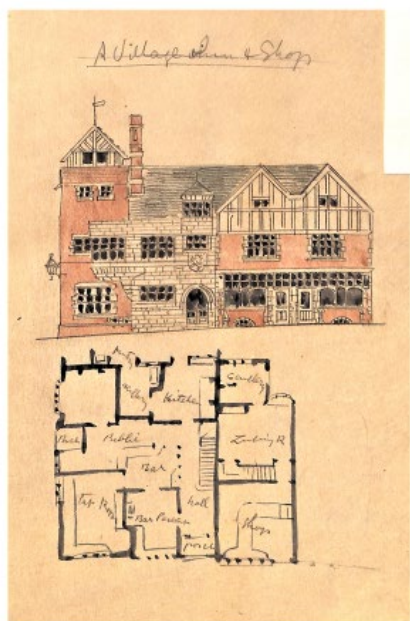
オールド・イングリッシュ様式は、主として木造のーフ・ティンバーもしくはティンバーと煉瓦や石などの組積造を組み合わせ、チューダー様式の窓、様々な大きさや形を持つ煙突やゲートルなどの多種の要素を自由かつ非対称的な構成で組み上げる、英国カントリー

ハウスなどによく見られる建築様式だった。英国の伝統的な息吹を感じさせるこの様式は、邸宅のみならず、街のパブやインそして小振りなホテルなどにも多く用いられていた。

後に野口は、住友家須磨別邸をはじめとする多くの邸宅建築を設計することになるが、その設計モチーフである多種の要素を折衷的に組み合わせる手法の源流を、このオールド・イングリッシュ様式にみることができる。



(図2-10) オールド・イングリッシュ様式の住宅 1
B.N. DEC 26, 1879との記入あり
(図2-11) オールド・イングリッシュ様式の住宅 2
(図2-12) ティンバー・スタイルの住宅



(左 図2-13) A Village Inn & Shop
(上 図2-14) Lakeside Hotel

ヴァナキュラーな風合いを持つ住宅建築

英国中部で多く産出される良質の石灰石によるプラスター・モルタルが外壁に塗り壁として用いられている、田園のヴァナキュラーな風合い持つ住宅建築である。野口は、住友家須磨別邸の外壁の大部分において、この塗り壁を用いていた。



(図 2-15) House at Northwood

(図 2-16) 連続したテラスハウス形式の住宅

新古典様式による大規模建築

ネオ・ルネサンス様式やネオ・バロック様式などその様式概念に微妙な違いがあるが、ここでは「新古典様式」と一括する。当時の英国における公共建築や官庁建築そして宮殿などの大規模建築に用いられた建築様式であった。



(上 図 2-17) Post Office

(右 図 2-18) 劇場風の建築立面部分の習作

野口による西洋建築の透写習作のなかで最も数が多かったのが、この大規模建築の建築様式だった。新古典様式による大規模建築に留まらず、多くの習作でその建築平面プランを描いていることに、その建築の全体構成を理解しようとする野口の意図がみてとれる。野口が熱心に各種の建築手法を自家薬籠中のものにしようとしていたことがうかがえる。

後に野口は、銀行など住友関係の建築物を多く設計することになるが、それらの建築物は、当時の西洋で大規模建築物の主流となっていたこの新古典様式がその基本となっていた。



(左 図2-19) Design for Interior of Exchange
B.N. May.27, 1881 の記述あり
(上 図2-20) 宮殿風建築物の習作

クィーン・アン・リバイバル様式やジャコビアン様式など当時流行の様式

当時の英国における、オールド・イングリッシュ様式と並ぶもう一つの折衷様式として、クィーン・アン・リバイバル様式が挙げられる。17～18世紀の英国やオランダの赤煉瓦建築、そしてフランスなどの影響を受けて生まれた建築様式で、デザイン要素は古典から引用されているもののディテールやプロポーションは自由に変形され、また対称性にも縛られていないフリー・スタイルとも呼べる建築様式であった。

日本ではやや後の時代になって、いわゆる「辰野式」として一般に風靡することになる建築様式である。野口は、辰野金吾が華々しくこの様式を日本で展開する以前に、卒業設計の“Design for a Casino”や、大学院時代に設計した明治生命保険大阪支店で、このクィーン・アン・リバイバル様式をみせていた。

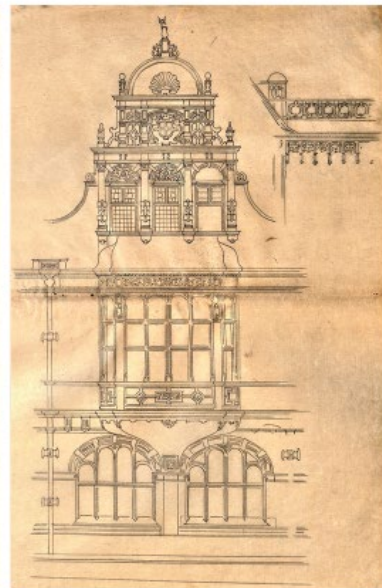
また当時の英国での建築的潮流のなかで見られた別の折衷様式として、ジャコビアン様式も挙げられる。これは、ドイツやフランドル地方のデザイン要素も英国の伝統的な建築に採り入れ建築立面では曲線を効果的に用いるものだった。野口は、このジャコビアン様式の建築も透写習作の対象としていた。



(左 図2-21) B.N. Nov.18, 1881 の記入があるPost & Telegraph office
 (右 図2-22) B.N. July.14, 1882 の記入があるRoyal Courts of Justice



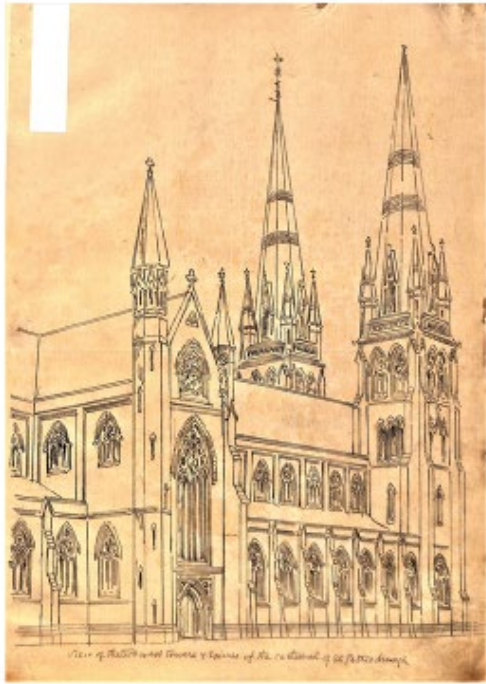
(左 図2-23)
 Passmore Forwards
 Public Library, Bow. E



(右 図2-24)
 ジャコビアン様式の
 建築立面習作

ゴシック様式の教会

野口は、ゴシック様式について、卒業論文のなかで“The Gothic style, as it is called Christian architecture, has great association with the religion. We are, therefore, obliged to exclude the Gothic style from our design.”と述べ、ゴシック様式を日本の建築に導入することへの躊躇を示していた。しかし、純粋に建築としてのゴシック様式には惹かれるものがあったようで、“Oxford Cathedral”の描き込みには目をみはるものがあった。



(図2-25) Church of St. Patrick Armagh



(図2-26) Oxford Cathedral

ビザンチンやインド等の影響を受けた建築様式の習作

インドを植民地としていた英国には、インドの建築的モチーフを新しいデザイン要素として導入する建築もみられた。野口はその絵画的な構成に興味を覚えたと思われ、習作を残している。またビザンチン風の建築立面の習作も残していた。



(図2-27) ビザンチン風の半円形破風を持つ建築



(図2-28) インド風の塔やアーチ装飾を持つ建築

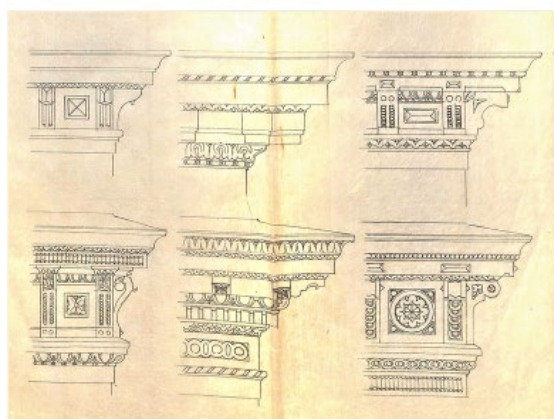
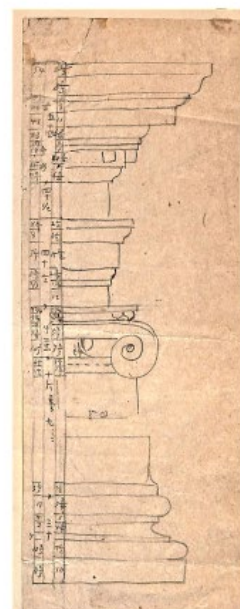
(2) 建築要素の習作

西洋古典様式建築の基本は、柱の各部の構成と柱の上に載るエンタブラチュアの各部の比例を決定することから始まる。野口はこのような古典様式建築の基本となる柱頭やエンタブラチュアの習作をいくつか残していた。

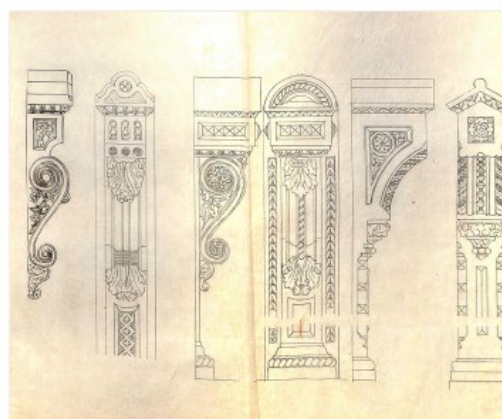


(上 図2-29) 柱頭部デザインの習作

(左 図2-30) イオニア式柱オーダーの分析



(図2-31) エンタブラチュア部デザイン習作



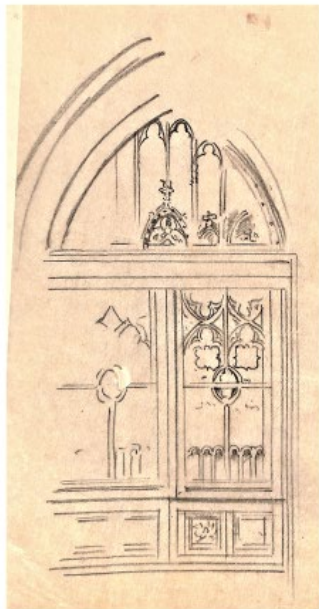
(図2-32) 持ち送り部デザイン習作

野口が後に設計することになる、住友家須磨別邸をはじめとする邸宅建築群や、中之島図書館や住友銀行関連の建築のすべてにおいて、室内各部の木彫装飾は非常に重要な役割を果たしていた。野口は、多くの木彫部デザインの習作を残している。



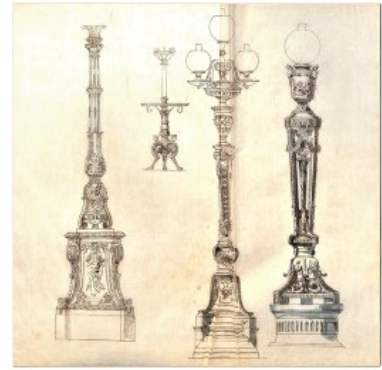
(左上 図2-33) 階段親柱 木彫デザイン習作
 (中上 図2-34) 扉三方枠上部デザイン習作
 (右 図2-35) 木部ディテールデザイン習作

野口は、後述する心齋橋の意匠設計において、その手摺部分にゴシック建築の石造トレサリーに用いられるクワットレフォイルと呼ばれる四つ葉クローバー形の意匠を採り込んでいたが、これ以外でゴシック様式を用いることはほとんどなかった。ただし、個人的にはゴシック建築の各部のディテールや形には愛着を覚えていたようで、ゴシック様式の部分詳細の習作をいくつも残していた。



(左 図2-36) ゴシック様式の窓習作
 (上 図2-37) ゴシック様式のトレサリーの習作

後年、野口が設計した中之島図書館の正面大階段両脇の大きなブロンズ製の照明器具の意匠は、非常にモニュメンタルなものであるが、野口は、様々なモニュメントや照明器具デザインについて入念な習作を行っていた。



(左 図2-38) Design for the Tri-century Armada Monument, Plymouth

(中上 図2-39) 噴水デザイン習作

(右上 図2-40) 照明具デザイン習作

後に野口が設計することになる多くの建築では、様々に視線を受け止める工夫を凝らした「塔」の存在が際立っていた。「塔」についても野口はいくつかの習作を残している。

「塔」については野口の卒業論文の“Comfort”の項目で言及していたこともあり、「塔」への野口の関心は高かったことが推測される。



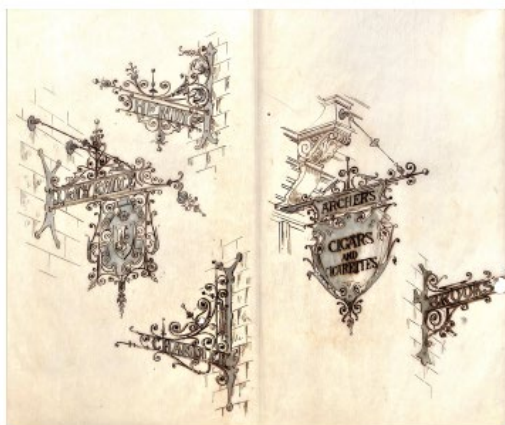
(左 図2-41) 塔の習作1

(中 図2-42) 塔の習作2

(右 図2-43) 塔の習作3

(3) 様々な装飾技法

野口は卒業論文で、西洋建築の特徴を「緻密な作り込み“Elaboration”」にあるとしていた。その“Elaboration”を体得するためには、膨大な西洋的な「手」の修練が必要であると野口は考えていたと思われる。例えば(図2-46)の帯状装飾デザイン習作でも幾枚もの習作スケッチを残している。また植物をモチーフとした装飾技法も、まるで自らに課すように幾枚もの習作を残していた。なお窓部のドレープ・デザインも、西洋建築のインテリアデザインには必修のテーマであるが、野口は熱心にドレープ・デザインの習作を描いていた。



(上 図2-44) 持ち出し鉄看板のデザイン習作
 (右上 図2-45) ドアノブデザイン
 (右下 図2-46) 帯状装飾デザイン習作



(左上下 図2-47) 各種装飾デザイン習作
 (右 図2-48) ドレープデザイン習作

2. 1. 5 欧米建築視察巡遊

『故工学博士野口孫市君小伝』（大正九年八月 日高胖謹識）には「同年（明治32年）住友家に聘せられ約一箇年海外に遊び帰朝後其臨時建築部に技師長となる」とあり、また住友史料館保存史料の『各店部処務報告書』明治33年度の「備員洋行ノ事」には「明治三十三年三月十三日囑託ニ依り本店、銀行建築取調ノ為メ出張中ノ野口孫市帰朝ス」と記録されている。野口は、明治32年（1899）の初めから明治33年（1900）3月13日まで約一年あまり欧米に建築視察巡遊を行っていた。

残念ながら野口の巡遊経路については詳しい記録は残されておらず、わずかに野口の子孫が住友史料館に寄贈された資料から辿るしかない。そこに残されていた写真やスケッチなどから、野口の足跡を辿れるのはニューヨーク、ボストン、ソルトレイクシティ、ナイアガラ瀑布、ヴェネツィア、フィレンツェ、パリ、ローマそしてエジプトである。日付や場所の記載はないものの、英国の田舎にあるゴシック風のチャペルや、パリのオペラ座のスケッチなどは残されていた。またイタリアで買い求めた「ヴェネツィアのサン・マルコ広場鐘楼回廊のブロンズ門」「フィレンツェのサン・ジョバンニ洗礼堂の天国の門」「バチカンのサン・ピエトロ大聖堂のシクトウス四世墓碑」など10枚の写真が残されている。



(上 図2-49) パリ 凱旋門

(左 図2-50) ゴシック風チャペル

住友本店理事であった田辺貞吉は、明治32年1月24日の日記に下記のように記していた（*10）。

重役会を本店に開く野口孫市（建築技師）を雇入る事に相成、重役及岡、植野、庵地、高木、野口等本家に於て洋食の餐を受く

野口の欧米建築視察巡遊に先立ち、大阪の長堀川に面した鰻谷の住友本邸で行われたこの晩餐会の記録からは、住友家家長・住友春翠をはじめとする住友本店の人々の野口への期待の大きさがうかがえる。春翠は、野口の欧米への巡遊出立に先立ち、春翠の野口に託する思いと春翠の欧米での経験を野口に語っていたであろう。

野口の足跡を推測する手がかりとして、住友春翠の欧米巡遊の記録が考えられる。春翠は明治30年4月から10月にかけて7ヵ月にわたり欧米を巡遊していたが、その詳細な記録が残されていた(*11)。ソルトレイクシティで野口は春翠と同じものを見、春翠と同様に野口はニューヨークから遠方のナイアガラ瀑布までわざわざ行っていることから推し量るものである。この春翠の訪れた地で、野口も訪れたと思われる重要な地が2か所ある。

その一か所がシカゴである。太平洋からサンフランシスコに入港しアメリカ大陸を鉄道で東部まで横断するにはシカゴを経緯しなければならない。当時のシカゴは、鉄道や水運の交通物流の拠点として、また五大湖周辺の工業地帯の中心地としてニューヨークに次ぐ大都市に発展していた。春翠はシカゴで、オーデイトリアム・ホテルに宿泊している。このアドラー・アンド・サリバン設計で1889年(明治22年)竣工のオーデイトリアム・ビルディングは、400室のホテルと4300席の劇場とオフィスを擁する、現在でいえば巨大な複合施設であった。宮内省内匠寮の片山東熊もこのホテルに宿泊したことが、春翠の記録に残されている。この建築は、外装は石張りで鉄骨構造であり、シカゴはアメリカでも鉄骨構造の先進地で知られていた。野口もシカゴを訪れ、このホテルに宿泊しこの躍動するような経済都市を体験したであろう。またシカゴで春翠は、資産家マーシャル・フィールドの寄附により保存活用されることになった美術館にも感銘を受けていた。春翠は帰国後、野口が設計する大阪図書館(現在の大阪府立中之島図書館)を寄贈することになるが、欧米巡遊に出立する前の野口に、春翠が自分のシカゴでの体験を語っていたことは想像に難くない。

もう一か所がスコットランドである。春翠は英国の北部のスコットランドに近いウィンダーミア湖を訪れていた。下記にその明治30年の記録の一部を示す。

・・・その夕(8月3日)リバプールに到つた。四日は棉花取引所、ドック等を見たが、炎暑甚しく春翠は再胃腸を害して、予定したマンチェスター、グラスゴーに遠く向ふに耐えない。安息を求めて、ウィンダーミア湖畔に向つた。六日はボートに乗って湖上を巡り、春翠は元気を恢復した。午後は小蒸気船を雇うて湖水の北端に上りグラスミアに赴いて詩人ウァヅワースの家を見た。七日午後三時半ウィンダーミアを立って十時半エディンバラに著し、二日を留まつて世界一といふ大橋フォース・ブリッジなどを見、・・・

ウィンダーミア地方やスコットランドなど北方の民家では、前節の野口の透写習作のなかの「ヴァナキュラーな風合いを持つ住宅建築」で示したような、外壁にラフキャストと呼ばれる左官塗り壁仕上げがよく用いられていた。

当時、エディンバラではフォース湾に架かるフォース・ブリッジという世界最長の鉄骨橋が1890年に完成していた。春翠は明治30年(1897)8月にウィンダーミア湖畔で2日間休養を取った後、この橋を見るためにエディンバラを訪れている。野口の書籍リストには”The Forth Bridge”と記載された本があり(*12)、野口もこの世界最長の鉄骨橋に関心を抱いていたことは確実である。おそらく野口は春翠とおなじくエディンバラを訪れたと推測する。春翠はグラスゴーまでには行けなかったが、グラスゴーは明治期の日本の工業界とは強い繋がりのある現在以上に明治期の人々にはなじみのある都市だった(*13)。そしてグラスゴーは、建築家マッキントッシュ(1868~1928)に代表されるグラスゴー派の拠点でもあった。後の野口の仕事にはマッキントッシュの影響も色濃く見られ、エディンバラまで来ていれば、グラスゴー派の芸術家達が活躍していたグラスゴーに立ち寄りなはずはなかったと思われる。なおロンドンでの野口による記録はないが、ロンドンでは熱心に多くの建築を見て廻っていたことは想像に難くない。



(図2-51) ウィンダーミア湖上と思われる
ボート遊びの一行6人
丸印が野口孫市



(図2-52) 英国スコットランド地図

春翠は、6日間ニューヨークに滞在していたが、野口がニューヨークに滞在していたことは(図2-54)の写真からも明らかである。野口が訪れた当時のニューヨークは、すでに富の蓄積が加速度を上げて進んでいた時代だった。社会や経済のすべての面で大型化が進行し、都市内の高架鉄道による交通インフラや、ブルックリン橋(1883年完成)など都市インフラの整備により都市域の拡大も進行していた。野口はイースト・リバー河口付近のアップパー・ベイの船上から当時のニューヨークをブルックリン橋を入れて撮影している。

このような社会や経済の大型化の進行は当然ながら建築の大型化を伴っていた。この建築の大型化の時代を代表したのが、3人の建築家のパートナーシップで営まれていた当時世界でも最大規模の組織的建築設計事務所マッキム・ミード・アンド・ホワイトであった。

野口自身はマッキム・ミード・アンド・ホワイトの作品を見た記録を残していないが、後の中之島図書館などの仕事に、その影響が見られることが指摘されている（*14）。



(左上 図2-53) 船上にて
 (中上 図2-54) ニューヨークのホテル室内にて
 (右上 図2-55) ポストンのバンカーヒルにて
 (右下 図2-56) 湾上よりニューヨークを望む
 丸印は野口訪問の16年前に完成したブルックリン橋

なお、春翠が行かなかった所で野口が行った所にエジプトがある。野口は、エジプトのクフ王のピラミッドの頂上にまで登っており、ピラミッド頂上での写真と“LOOK-OUT FROM PYRAMID OF EGYPT”と記した鉛筆画スケッチを残していた。



(左 図2-57) ピラミッド遠景
 (中 図2-58) THE LOOK-OUT FROM PYRAMID OF EGYPT
 (右上 図2-59) ピラミッド頂上にて 左端が野口孫市
 (右下 図2-60) スフィンクス前にて 右の人物が野口孫市

辰野金吾はエジプトまでには行っておらず、伊東忠太がエジプトに行っている。伊東のエジプト訪問は1904年であり、野口はその4年前の1900年にエジプトに行っていた。

野口は、おそらく日本人建築家で最初にピラミッドの頂上にまで登った人物ではなかったかと思われる。伊東は、アジアからトルコなどの非西洋の建築を巡り、「日本人建築家としてどうあるべきか？」という命題に突き動かされるようにエジプトに行ったが、野口は、原初的な形態であるクフ王のピラミッドを見たいという衝動に駆られてエジプトにまで行ったのではないだろうか。クフ王のピラミッドは、巨大な幾何学によって構成されている。野口が、砂漠のなかに立つ原初的な幾何学形態を是非とも見たいという衝動に駆られていたとすると、彼の建築術の原点を垣間見ることができる。

註

- (* 1) 清水重敦・河上眞理著『辰野金吾』 97頁
2015年 ミネルヴァ書房
- (* 2) 前掲書『辰野金吾』 98～99頁
- (* 3) 前掲書『辰野金吾』 9～13頁
- (* 4) 清瀬みさを著『建築空間と装飾画—大阪市中央公会堂貴賓室における松岡壽の課題—』
2016年 同志社大学 人文学第198号 22～31頁
- (* 5) 鈴木博之著『小川治兵衛とその時代』 7～14頁
2013年 東京大学出版会
- (* 6) 住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 ⑩1
大正4年3月16日の「野口孫市日記」に記されていた。この年の10月に野口は亡くなっており、回顧するように綴ったものと思われる。ちなみに、野口の同級生は、矢橋賢吉・遠藤於菟・大澤三之助の3名であった。
- (* 7) 独立行政法人国立文化財機構 京都博物館編集
『重要文化財 旧帝国京都博物館建築資料調査報告書』 310頁
2014年 独立行政法人国立文化財機構 京都博物館
- (* 8) 片木篤著『アーツ・アンド・クラフツの建築』 56～61頁
2006年 鹿島出版会 SD 選書
- (* 9) 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵
- (* 10) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで —日建設計の系譜』 12頁
1991年 創元社
- (* 11) 住友春翠編纂委員会編『住友春翠』 312～334頁
1955年 住友春翠編纂委員会
- (* 12) 住友史料館所蔵『野口博士寄贈図書目録』
- (* 13) 日本はグラスゴーから軍艦・商業用船舶・蒸気車輛などを早くから輸入していた。新政府の国外視察の伊藤博文を含む岩倉使節団一行が1872年9月7日～14日グラスゴーとエジンバラを訪問し、造船所や機械工業の工場などを視察している。さらに土木技術者など技術者養成のための工部大学の教師採用にもあたり、グラスゴ

一大学に関係していた教師陣を多く採用した。幕末に長州藩から派遣された山尾庸三がグラスゴウのネピア造船所で働きつつ大学にも学んでいたが、山尾は、明治新政府で工部省発足に尽力し、東京大学工学部の源流にあたる工学寮を設立している。

- (* 1 4) 藤森照信著『日本の近代建築(下) -大正・昭和篇一』 59～64頁
1993年 岩波新書

図版・写真

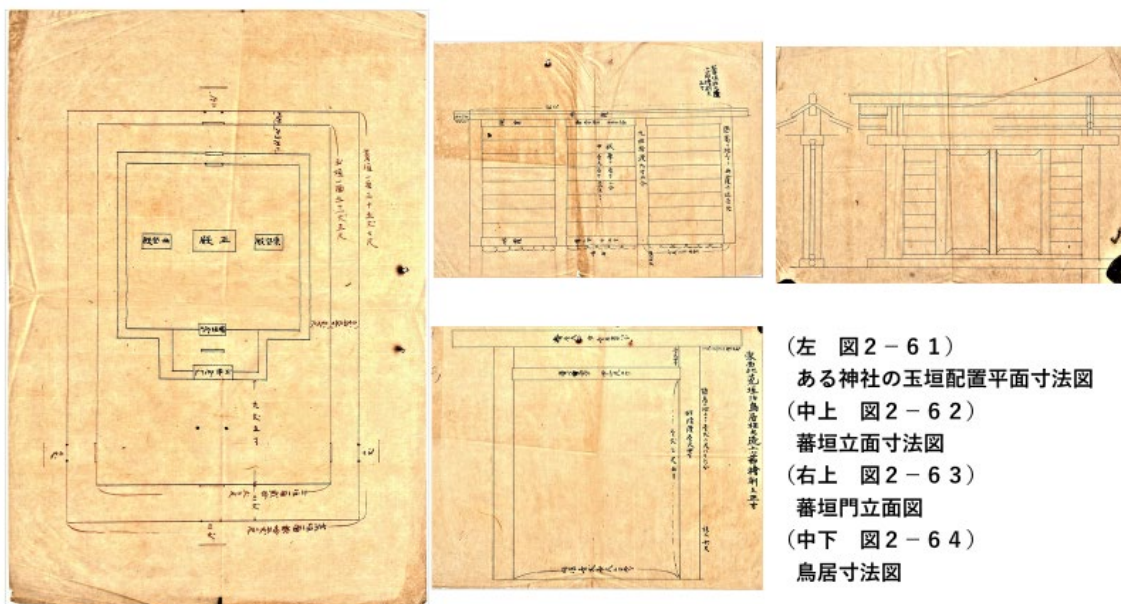
- (図2-1) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録番号①
幅60cm高さ40cmほどの大きさの卒業証書
- (図2-2) 清水重敦・河上眞理著『辰野金吾』より 表紙見開き
原画は辰野家所蔵
- (図2-3) 藤井恵介・角田真弓編『明治大正建築写真聚覧』 58
2012年 文生書院
- (図2-4) 独立行政法人国立文化財機構 京都博物館編集
『重要文化財 旧帝国京都博物館建築資料調査報告書』 310頁
- (図2-5) 筆者撮影
- (図2-6) 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵
- (図2-7) 同上
- (図2-8) 同上
- (図2-9) 同上
- (図2-10) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録⑧
- (図2-11) 同上 資料目録⑧
- (図2-12) 同上 資料目録⑧
- (図2-13) 同上 資料目録⑧
- (図2-14) 同上 資料目録⑧
- (図2-15) 同上 資料目録⑦-4
- (図2-16) 同上 資料目録⑦-6
- (図2-17) 同上 資料目録⑧
- (図2-18) 同上 資料目録⑧
- (図2-19) 同上 資料目録⑧
- (図2-20) 同上 資料目録⑦-5
- (図2-21) 同上 資料目録⑧
- (図2-22) 同上 資料目録⑧
- (図2-23) 同上 資料目録⑦-11
- (図2-24) 同上 資料目録⑧
- (図2-25) 同上 資料目録⑧

(図2-26)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑦-10
(図2-27)	同上	資料目録⑧
(図2-28)	同上	資料目録⑧
(図2-29)	同上	資料目録⑧
(図2-30)	同上	資料目録⑧
(図2-31)	同上	資料目録⑦-53
(図2-32)	同上	資料目録⑦-53
(図2-33)	同上	資料目録⑦-50
(図2-34)	同上	資料目録⑦-49
(図2-35)	同上	資料目録⑧
(図2-36)	同上	資料目録⑧
(図2-37)	同上	資料目録⑧
(図2-38)	同上	資料目録⑧
(図2-39)	同上	資料目録⑧
(図2-40)	同上	資料目録⑦-53
(図2-41)	同上	資料目録⑧
(図2-42)	同上	資料目録⑧
(図2-43)	同上	資料目録⑧
(図2-44)	同上	資料目録⑦-53
(図2-45)	同上	資料目録⑦-9
(図2-46)	同上	資料目録⑧
(図2-47)	同上	資料目録⑧、⑦-40
(図2-48)	同上	資料目録⑧
(図2-49)	住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈	資料目録55
(図2-50)	同上	資料目録62
(図2-51)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑬3-47
(図2-52)	『最新 基本地図 2014 世界・日本』 2013年 帝国書院	56頁
(図2-53)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑬3-48
(図2-54)	同上	資料目録⑬3-42
(図2-55)	同上	資料目録⑬3-44
(図2-56)	同上	資料目録⑬3-43
(図2-57)	住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈	資料目録41
(図2-58)	同上	資料目録60
(図2-59)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑬3-39
(図2-60)	同上	資料目録⑬3-40

2. 2 「日本」への視線

野口は膨大な量にのぼる西洋建築の習作ドローイングを残している。しかし日本の伝統的なものについても、その本質がどこにあるのかを求めるようなスケッチや水彩画を残していた。また西洋建築の習作画の数を上回る膨大な数の、日本各地の風景を描いた水彩画・鉛筆画スケッチを残していた。それらのスケッチ群は、海や川や山の自然景観・田舎家の風情・漁村の風情・春や夏の緑・秋の紅葉・冬の雪景色など極めて多彩であり、構図と奥行感そして色彩に日本的感性が息づいていた。野口は工科大学で主に西洋建築を学んでいたが、野口の「日本」についての研鑽やその素養についてここでは記述する。

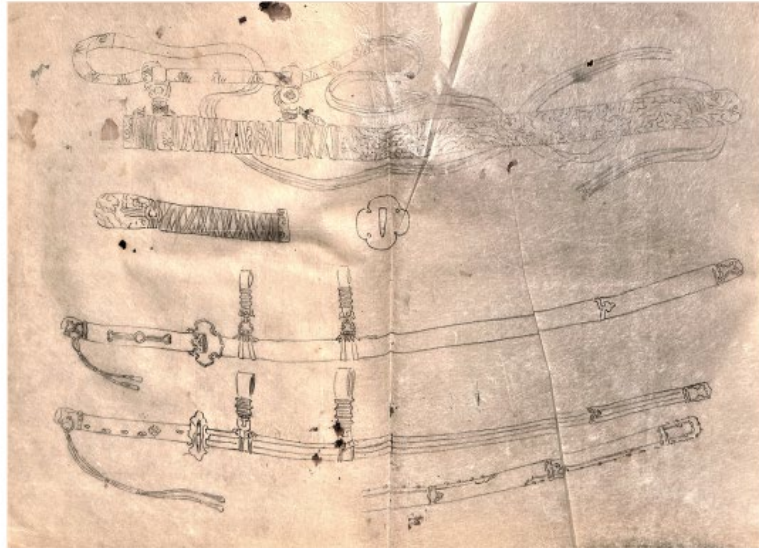
2. 2. 1 日本の伝統的な「造り」から学ぶ



上の図はある神社の玉垣に関する、現在で言うデザイン・サーヴェイである。神社には、伊勢神宮を頂点とする神明宮・稲荷社・八幡宮・天神社・出雲社など様々な系統があるが、この神社は鳥居の形状や板垣・門の構成などから見て明らかに神明宮である。野口は、この神社の玉垣について実測し図面を描いていたが、その意図は何であったのか。

たとえば伊勢神宮・内宮で垣内参拝をすれば、その玉垣内の緊張感からは只ならぬ気配が感じられる。その気配は、玉垣の高さと玉垣内平面の広さのプロポーシオン、正殿にむけて緩やかに昇る地面、鳥居の大きさ等々あらゆるデザイン要素が緊張感をもって統合されていることに起因している。野口もこの神明宮で只ならぬ気配を感じ、その気配が各部の寸法に起因していることに気づいたのであろう。普通の人間ならばその気配に荘厳な気分になるだけだが、野口はその気配が起因するところを分析するため、寸法実測していた。野口らしい実際的な関心のありようを示していた。

また下図は日本刀の鞘の美しさを分析するために、部材を分解し他の鞘の事例を並べながら野口が描いたものである。やはり事物の美しさが何に起因するのかについての野口の具体的な探求心をみることができる。



(図2-65) 日本刀の鞘を比較分析して描いた鉛筆画



(図2-66) 京都・御室仁和寺と双ヶ丘を描いた鉛筆画スケッチ

上の鉛筆画は京都御室の仁和寺である。この鉛筆画は、左にある宸殿・書院の勅使門の前あたりの位置から描いたものだが、前景に緑の量感を描き、双ヶ丘を背景として中央に中門そして右に五重塔が描かれている。景観全体の「場」と「個」としての建築がバランスよく取り合いを保ちながら構成されたドローイングだった。野口の鉛筆画・水彩画のすべての絵

には、この「場としての景」と「個としての建築など」が緊張感を持ちつつ均整をもって描き込まれていた。

同様のことは、下図の日光東照宮上神庫の水彩画にもみられる。背景の陽明門を杉木立の奥の霞の背景のなかに描き、前景の上神庫をディテールに至るまで丁寧に描き込んでいる。朱漆や金そして白漆喰などの素材感も見事に描き込まれていた。

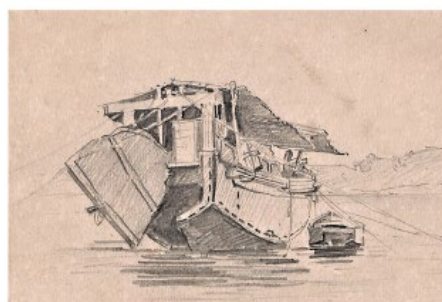


(図2-67) 日光東照宮上神庫

野口は、西洋建築の習作ほどには日本の建築物について意識的に習作を残していないが、折に触れ描き残したスケッチには、日本的な「造り」に対する強い関心と確かな素養をみることができる。



- (左上 図2-68) 大和国三輪神社
- (中上 図2-69) 奈良唐招提寺の校倉造の倉
- (右上 図2-70) 奈良唐招提寺・金堂の鷗尾瓦
- (右 図2-71) 和船の鉛筆画デッサン



2. 2. 2 日本各地の「風景の読み込み」

野口が残した日本各地で描いた水彩や鉛筆による風景画スケッチには、日付が記載されていないものも多く、描かれた時期については推測するしかないが、日付の記載されたスケッチから推し量ると大学院時代から住友入社後数年のものが多いと思われる。また大正期に入って結核で療養している頃に描かれたと思われるものや、長女や長男など成長した子供たちに宛てた言葉に添えた水彩画スケッチも残されていた。

野口の卒業論文のタイトルが“An Essay on the Future Domestic Architecture of Japan”であったように、野口の関心は、西洋建築が日本に大量に流れ込むなかで、全く異なる建築様式を持つ日本の建築が将来どのようなようにあるべきかというところにあった。洋風建築を日本の気候と生活習慣にいかにか適合させるかということに関心があり、その核心を「快適さ“Comfort”」に据え、日本の自然や人々の暮らしに基づく建築のあるべき姿を求めようとしていた。野口が残した様々な風景画スケッチには、その日本の気候風土のなかに生きる人々の生活が生き生きと描かれていた。建築家の「生活者への視線」と言えるかもしれない。

農村や漁村の風景や人々の営みが垣間見られる光景、街の人々の暮らしや当時の東京の風景、訪れた日本各地の様々な自然の風景、船舶や汽車など当時の西洋技術に向けられた関心そして動物や植物などの鉛筆画デッサンなど、その種類は多岐にわたっていた。

農村や漁村の風景

野口は茅葺の農家や里山を背景とする田畑のひろがりなど様々な農村風景を描いている。山村の水車小屋のスケッチや農家の庭先に鶏を描くなど、農村の風景のなかに人々の暮らしを思わせる風情が漂っていた。



(左 図2-72) 鶏のいる茅葺き農家
(中 図2-73) 瓦葺きの農家
(右 図2-74) 村の水車小屋

また漁村についても、漁村集落や働く人々、そして木造の帆掛け船や和舟などの漁船を幾枚も描いていた。



(左 図2-75) 漁港で働く人々と漁船
 (右上 図2-76) 漁村風景 明治44年5月25日の日付
 (右下 図2-77) 夕景の中の帆掛け船

人々の日々の営みがみえてくる光景

琵琶湖の昔からの漁法である築や、街の煙突から立ち昇る煙を描いたスケッチからは、そこで生きる人々の営みが見えてくるようである。また住居の台所を思わせる生活感ある室内の光景は、野口の関心のありかがみえてくるようで興味深いものがあった。



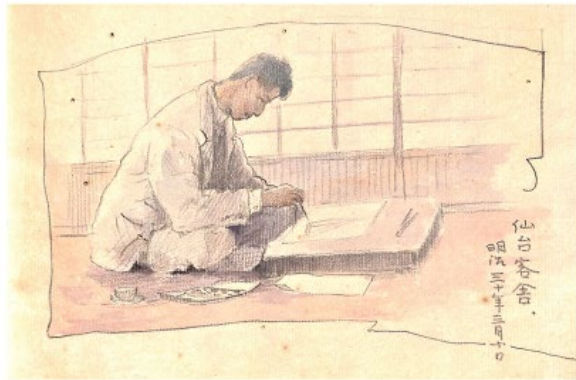
(図2-78) 仙台の煙突のある風景
 明治30年3月10日の日付



(上 図2-79)
 琵琶湖の伝統的漁法の築の風景

(左 図2-80)
 生活感ある室内の光景
 明治27年~28年の
 スケッチブックより





- (左上 図2-81) 車中の女性の光景
 (右上 図2-82) 仙台客舎にてコンパスを持つ自画像
 明治30年3月10日の日付
 (右下 図2-83) 宮川丸上等室光景
 明治31年9月12日の日付

街の人々とその風景

新橋停車場前の茶店にくつろぐ人たちや桑名の商店街の賑わい、彼岸の日に寺院に詣でる人々を描いたスケッチからも、街の人々の暮らしに向けた野口の視線が感じられる。



(図2-84) 桑名魚棚町の賑わい
 明治30年頃



(図2-85) 新橋停車場前の茶店
 明治28年5月5日の日付



(図2-86) 彼岸詣
 明治26年9月日付

当時の東京のスケッチも残していた。下図の2枚は赤坂見附周辺を描いたものである。



(図2-87) 弁慶橋
明治28年5月5日の日付



(図2-88) 閑院宮表門(赤坂見附)
明治28年8月5日の日付

訪れた日本各地の様々な自然の風景

野口は逓信省に入省後、明治29年から明治31年ごろにかけて、日本各地を出張していたとみられ、北海道をはじめとする日本各地の風景画スケッチを残していた。また富士山についても幾枚もの水彩画を残している。

明治24年の濃尾地震の現地調査で赴いた三重・岐阜・愛知など中部地方で描いた風景画も残っていた。震災調査で描いた震災記録のための多くのスケッチ群については、「構造技術者としての野口孫市」の項で詳しく紹介する。



(左上 図2-89)
武州金沢
明治29年5月10日の日付



(右上 図2-90)
夕景の富士山と灯台

(右下 図2-91) 里山風景
明治30年頃





(左上 図2-92) 会津若松天守台よりの眺望
明治31年正月の日付
(右上 図2-93) 陸前作並の雪景
明治28年11月15日の日付
(左下 図2-94) 宿より川を望む

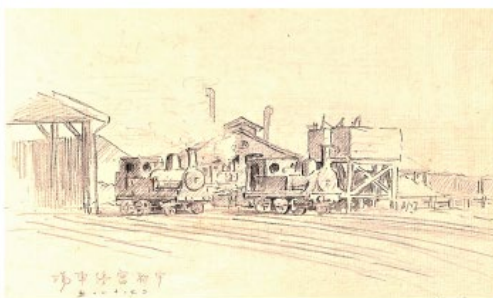
野口の風景画スケッチのなかで、水景を描く巧みさには目を瞠るものがあった。荒れ狂う海や鏡のように静かな海、逆光の夕暮れの海、新緑や紅葉のなかで流れ落ちる滝、川のなかにある小さな滝などの水景は、野口が特に得手としていた画題であったと思われる。流れる音が聞こえてくるような生き生きとした水の躍動感がみられ、また海と灯台の画題も多く描いていた。川で楽しそうに魚釣りをしている少年たちの姿も描いている。



(左上 図2-95) 荒れる海と灯台 明治27年~28年頃
(中上 図2-96) 紅葉と滝
(右上 図2-97) 日光山寂光之滝 明治29年5月3日
(左下 図2-98) 小さな滝 大正1年8月8日

西洋技術文明への関心

当時の蒸気機関車は、西洋技術文明を象徴するような存在であった。野口は、操車場の機関車のスケッチを水彩画と鉛筆画で残していた。また西洋技術による蒸気船と和舟の帆掛け船を比較するようにも描き「船の形は、人に見せるつもりで作られたのではないが、しかるに何とも言えぬ美などあり・・・」と一文が添えられていた。野口の建築に留まらない西洋技術一般への関心も窺うことができる。



(左 図2-99) 宇都宮停車場水彩画 明治27年~28年頃
 (中 図2-100) 宇都宮停車場鉛筆画 明治27年11月5日の日付記載
 (右 図2-101) 和船と洋船の比較についての水彩画スケッチ
 明治44年5月16日の日付

動物や植物などの鉛筆画デッサン

野口は、植物・動物・静物などのデッサン画も多く残していた。



(左上 図2-102) 愛犬の鉛筆画デッサン
 (左下 図2-103) 長女・房子のために描いた静物画
 於東京金富町久保田邸食堂と記載
 明治43年9月23日の日付
 (中上 図2-104) 樹木の鉛筆画デッサン
 (右上 図2-105) 水鳥の鉛筆画デッサン

第2部で扱う住友家須磨別邸の舞台となった須磨についても野口は、自分が将来において須磨別邸を設計することになるとは知る由もない頃に、多くのスケッチを描いていた。生まれ育った姫路と神戸の間にある古来の伝説に彩られた白砂青松の海岸には、野口が強く惹かれるものがあったのだろう。この「風景の読み込み」は、見事に須磨別邸の設計に生かされていた。そしてこの「風景の読み込み」については、中之島図書館や日暮別邸でも同様に行われていた。「図」としての建築が成立する舞台としての「地」である敷地の特性を読み込む習性は、野口の多くの風景画スケッチに現れていた。野口が愛した日本の自然景観や事物、そしてそこに生きる人々への共感が、野口の建築術の基礎となっていたことをこれらのスケッチ群からうかがうことができる。

野口が目指した「日本の気候風土と日本人の生活習慣に根ざした西洋建築」を実現するためには、日本の風景を読み込む視線と日本人が生き生きと生活している光景への視線が必須であったと思われる。

図版・写真

(図2-61)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑦-46
(図2-62)	同上	資料目録⑦-44
(図2-63)	同上	資料目録⑦-43
(図2-64)	同上	資料目録⑦-45
(図2-65)	同上	資料目録⑧
(図2-66)	同上	資料目録⑭-11
(図2-67)	同上	資料目録⑭-1
(図2-68)	住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈	資料目録5
(図2-69)	同上	資料目録5
(図2-70)	同上	資料目録5
(図2-71)	同上	資料目録54
(図2-72)	住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈	資料目録⑭-42
(図2-73)	同上	資料目録⑭-44

(図2-74)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑮-2
(図2-75)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録2
(図2-76)	同上		資料目録4
(図2-77)	同上		資料目録44
(図2-78)	同上		資料目録1
(図2-79)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑭-27
(図2-80)	同上		資料目録⑮-2
(図2-81)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録1
(図2-82)	同上		資料目録1
(図2-83)	同上		資料目録2
(図2-84)	同上		資料目録1
(図2-85)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑮-1
(図2-86)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録78
(図2-87)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑮-1
(図2-88)	同上		資料目録⑮-1
(図2-89)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録66
(図2-90)	同上		資料目録70
(図2-91)	同上		資料目録1
(図2-92)	同上		資料目録2
(図2-93)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑭-8
(図2-94)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録50
(図2-95)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑮-2
(図2-96)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録53
(図2-97)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑭-5
(図2-98)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録63
(図2-99)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑮-1
(図2-100)	同上		資料目録⑮-1
(図2-101)	住友史料館所蔵	尾形久美子氏寄贈	資料目録4
(図2-102)	同上		資料目録32
(図2-103)	同上		資料目録49
(図2-104)	同上		資料目録42
(図2-105)	住友史料館所蔵	濱田信義氏寄贈	資料目録⑭-31

2. 3 明治生命保険大阪支店と札幌電話交換局

明治生命保険大阪支店は、野口が大学院時代に設計した処女作である。また大学院を卒業して直後に入ったのが逓信省であり、そこでは札幌電話交換局の設計を行っていた。野口が住友本店臨時建築部の技師長として活躍を始める前のこの2つの仕事には、野口の特徴が既によく現れていた。ここでは本格的に建築家としての活躍を始める直前の野口の2つの作品をとりあげ、そこに現れていた野口の建築術の一端を概観する。

この2つの作品には、従来から疑問に思われてきたことがあった。明治生命保険大阪支店については、「何故大学院生の野口が設計する機会を得たのか？」という疑問であり、札幌電話交換局については、「設計者は野口孫市と推定」とされるに留まっているが確定はできないのかという疑問である。ここでは、近年発見された新しい資料からこの2つの疑問を解くことも行いたい。またこれらの疑問を解くことにより、当時の野口の状況をより鮮明に見ることができると考える。

2. 3. 1 明治生命保険大阪支店の設計

野口孫市は大学院在学中に、明治生命保険大阪支店を設計する機会を得た。この建物は、明治29年（1896）2月に着工し、明治32年（1899）に竣工している。しかし何故、実績もない大学院生がこのような機会を得ることができたのだろうか。明治生命保険は、建築に非常に重きを置く会社である。明治24年（1891）には、日本橋に辰野金吾に設計を依頼し新社屋を建設しており、明治28年（1895）には三菱2号館がジョサイア・コンドルと曾禰達蔵の設計により完成し本社を三菱2号館に移し入居している。さらに現在の馬場先門にある昭和9年（1934）に竣工した明治生命館は、当時の名だたる建築家たちを指名して行われた設計競技によって岡田信一郎の案が選ばれたものであり、現在では国の重要文化財となっている。このように建築に重きを置く明治生命保険が、その重要な大阪支社の建築を、何故まだ大阪の土地勘もなく東京の帝大の大学院生であった野口に設計を任せることにしたのかは疑問である。この疑問を、いくつかの事実を組み合わせることによって解いてみたい。

事実1： 明治生命保険は、阿部泰蔵（1849～1924）によって明治14年に創業された。阿部はその11年前の明治3年に慶應義塾で学業を終え大学南校の教授になっている。翌年、文部省の官吏となった（*1）。一方、野口孫市の岳父である久保田讓も、阿部とほぼ同年に慶應義塾を卒業し阿部と同年に文部省に入省している。

事実2： 山口半六は明治4年に大学南校に入学している。後にフランス留学から帰国した山口は、まず三菱社に入った。その後、山口は明治17年から明治25年にかけて

て文部省の官僚建築家として活躍し、辰野金吾とともに建築界の重鎮となっていた。文部大臣への建白書を辰野とともに明治20年に提出しているが、この建白書の署名の筆頭は山口半六であった(*2)。

- 事実3： 山口半六は、明治25年肺結核療養のため文部省を辞し、神戸の須磨で療養に専念しようとした。しかし病をおして明治27年ころより桑原政が設立した大阪の桑原工業所の建築部長として建築の仕事を行っている。ちなみに桑原は、帝国大学工科大学鉱山学科を第2回生として卒業し助教授も務めており、一時、住友の広瀬幸平の招聘により住友にも在籍していた(*3)。
- 事実4： 桑原工業所時代の山口半六が明治29年から明治32年にかけて行ったのが、野口が設計した明治生命保険大阪支社建設の工事監理だった(*4)。辰野金吾は、日本銀行本店工事で鍛え上げた工手学校出身の弟子・久保田小三郎を、山口半六の明治生命保険大阪支社工事監理のため、山口の下に久保田を遣っている(*5)。
- 事実5： 辰野金吾は、工科大学造家学科教授を務めるとともに、明治21年に日本銀行本店の設計者に選ばれ、明治29年に日本銀行本店を竣工させた。
- 事実6： 住友銀行初代支配人となる田辺貞吉の実弟に手島精一がいたが、手島は文部省会計局長の久保田讓の下で次長として務めていた。手島は、一時、広瀬幸平の招きにより住友本店副支配人も務めている(*6)。
- 事実7： 明治28年5月、住友の尾道会議が行われ、銀行の設立と住友本店・銀行本店を建設することが決定された。
- 事実8： 昭和11年に行われた建築学会の「回顧座談会」で、野口の造家学科での2年後輩にあたる鈴木禎次が、山口半六が辰野金吾を訪れたことを「山口先生が頼まれてきて、辰野さんが野口君を推薦して・・・」と回想している(*7)。野口と鈴木は親しい関係にあったことが野口の日記には記されていた(*8)。
- 事実9： 山口半六がパリに留学していた時代の1876年から1881年は、住友春翠の実兄・西園寺公望がパリに滞在していた1871年から1880年と重なっている。山口は官費留学生であり、西園寺はパリの日本人社会の中心人物だった。
- 事実10： 山口半六は、明治32年に正式に住友本店建築顧問に就任している。
- 事実11： 山口半六の死後、辰野金吾が明治34年に住友本店建築顧問に就任している。

明治生命保険大阪支店は明治29年2月に着工しているため、野口が設計していたのは明治28年であっただろう。このころの野口は、前述の卒業設計を終え、前年に結婚し大学院での2年目を迎えていた。以下は、上記の事実を組み立てた推論である。その推論とは「明治生命保険を創業した阿部が、明治28年、かつて勤めた文部省の建築家であり当時の建築界の重鎮であった山口半六に大阪支店の設計を依頼した。」というものである。山口はその当時大阪在住であり、阿部は大学南校で山口を一時的に教えていたかもしれない。阿部から設計依頼を受けた時点の山口は、文部省の上司であった久保田から前年に結婚した娘婿の

野口を紹介されていた。野口を紹介された時の山口は、その人物とともに卒業設計の秀逸さに印象付けられていたことだろう。一方、住友はその年の5月に、住友本店・銀行本店となる建物を建設することを決定し、そのための臨時建築部の長を嘱望できる若く優れた建築家人材を探し始めていた。その住友が、尾道会議の直後に、手島もしくは田辺を通じて人材選定の相談をしたのが山口半六であったと推測する。住友春翠の実兄・西園寺公望との面識もパリ時代にできていたと思われ、住友にとっては申し分のない相談相手だったはずである。山口は、既に辰野と並ぶ建築界の重鎮となっていた。しかも当時、山口は大阪に在住していた。

相談を受けた山口が直ちに思い浮かべたのが、かつての文部省の上司・久保田讓の娘婿である野口孫市だったのではないか。山口は、阿部から自分に設計依頼が来ていた明治生命保険大阪支店の仕事を「設計を野口に行わせその実力を確かめ、工事段階では自分が監理業務を行い責任を持って完成させる」と考えたのではないだろうか。建設技術が未発達の際において、工事段階での監理業務の重要性には現在以上の大きなものがあった。しかしまず山口は、このことを野口の大学院の師である辰野に相談しなければならなかった。親しい間柄にあった辰野を訪問したのが、前記の「事実8」である。相談を受けた辰野は快諾し、さらには、自分の懐刀である弟子の久保田小三郎を日銀本店工事が終わった時点で、山口の下に遣らうとまで考えた。山口は明治生命保険の阿部に上記の考えを伝えた。建築界の大御所二人がそろって野口を推薦し、まして山口が工事の責任を持つというのである。そして野口は、阿部のかつての慶應義塾そして文部省の同僚・久保田讓の娘婿であった。山口は住友のことまでは話さなかっただろうが、阿部は快諾したと思われる。以上が、「なぜ、大学院生の野口が、明治生命保険大阪支店を設計する機会を得たのか？」という疑問の答えである。



(左 図2-106) 大学院時代の野口孫市が設計した
明治生命保険大阪支店
竣工：明治32年（1899）

(下 図2-107) 野口孫市による戯画風の自画像
手前の建物スケッチが明治生命保険大阪支店

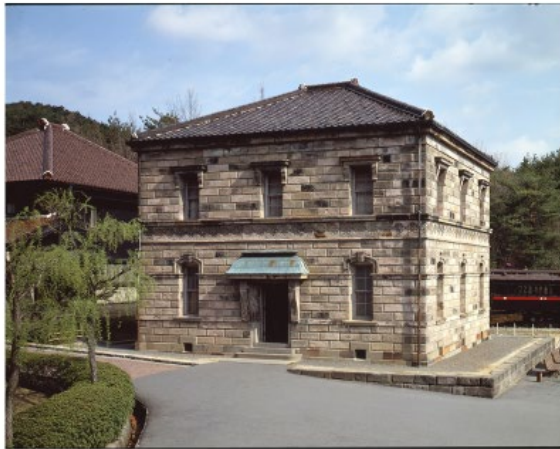


大阪市道修町に明治32年(1899)6月に竣工した明治生命保険大阪支店は、野口孫市特有のピクチャレスクな建築である。明らかに卒業設計からの引用が認められる。切妻屋根の妻面を大小取り混ぜてリズムカルなスカイラインを構成し、石と煉瓦によるストライプとアーチで全体を統一している。そして所々に塔を配しアクセントとしている。卒業設計では、両端部を煉瓦と石を取り混ぜたクィーン・アン・リバイバル様式とし中央部を石造風の古典様式としていたのに対し、明治生命保険大阪支店では、全体立面をクィーン・アン・リバイバル様式と古典様式を折衷したデザインで統一した。石と煉瓦の組み合わせによって全体を構成し、クィーン・アン・リバイバル様式のなかに古典様式的なデザイン・モチーフを織り込んだものとしたのである。当時の日本の洋風建築のなかにあっても、きわめて斬新なものだった。それは、師の辰野の助言もあったと思われるが、後の日本を一世風靡した「辰野式」を予感させるものだったとも言えるだろう。平成5年に発行された「目で見ると明治生命の110年」では、「大阪市内で最初の煉瓦建築であったため、当初は見学者が絶えなかったといわれる」と記述されている(*9)。

2. 3. 2 博物館明治村に保存された重文・札幌電話交換局

野口は、明治29年(1896)の工科大学造家学科大学院卒業後、逓信省に入省した。これは、野口本人の希望であったと同時に辰野金吾の指図であったとも思われる。辰野は、帝国大学工科大学造家学科(明治31年より建築学科に改称)の卒業生をどのように各省営繕や財閥営繕・建設会社などに振り分けるかについて裁量する大きな力を持っていた。その辰野の卒業生人事に関する裁量が、後の日本の建築界を形成したと言っても過言ではない。逓信省では、辰野と工部大学校造家学科を同期で卒業した四人のうち一人である工学士・佐立七次郎(1856~1922)が明治20年に技師となっていた。しかし野口の大学院卒業時は、佐立は自分の建築設計事務所を設立している。野口の先輩では、造家学科を1年前に卒業し陸軍省技師を経て明治31年(1898)に逓信省に入省した三橋四郎(1867生)がいた。後年の逓信省も優れた建築家を輩出しており、渡辺仁(1887生)・山田守(1894生)・吉田鉄郎(1894生)等を挙げることができる。国の重要な郵便・通信事業のための建築物であることから優秀な人材が集められたのだった。

野口は逓信省にて、函館や札幌の電話交換局の設計に従事していた。野口が設計した本格的な石造建造物である札幌電話交換局は、現在では国の重要文化財に指定され、愛知県犬山市にある博物館明治村に移設保存されている。この建物の竣工年は明治31年(1898)である。ちなみに「郵政百年史資料二十七巻 建築史料集」(昭和46年刊)では、この設計者を「野口孫市推定」としている。しかし、近年の住友史料館に寄贈された野口に関する諸資料から総合的に判断すると、札幌電話交換局は野口孫市の設計によるものであることに間違いはないだろう。



(上 図2-108) 博物館明治村にある札幌電話交換局
竣工：明治31年（1898）



(右上 図2-109) 函館電話交換局敷地 水彩画スケッチ



(右下 図2-110) 札幌郊外 水彩画スケッチ



(左 図2-111) 野口孫市の習作ドローイング

(中上 図2-112) 札幌電話交換局の胴蛇腹

(上 図2-113) 住友銀行神戸支店

明治36年

フリーズ部の軒蛇腹を示す

博物館明治村の札幌電話交換局の顕著な意匠上の特徴に、1・2階の中間で全周を廻る胴蛇腹の円形模様が連続する帯状装飾がある。野口の孫にあたる濱田信義氏が住友史料館に寄贈された野口設計の住友銀行神戸支店の写真のフリーズ部の軒蛇腹にも、同様の円形模様が連続する装飾帯を認めることができる。また同氏寄贈の野口の習作ドローイング中にも、円形模様などが連続する帯状装飾図が多数あり、野口がこの装飾法について研鑽を重ねていたことが分かる。習作ドローイングのなかには、一つの円の中のさらに詳しい装飾ディテールまで検討したものもあった。

また野口の曾孫にあたる尾形久美子氏が住友史料館に寄贈された野口のスケッチブックには、明治30年7月8日付の「函館電話交換局敷地」と題された水彩画が残されている。そしてさらに、同年7月13日付で「札幌郊外」と題された水彩画もあり、日付なしで「札幌博物場庭園」と題された水彩画もあった(*10)。同年7月11日付の室蘭での水彩画スケッチもあり(*11)、野口が北海道に行っていたことは確実である。野口の北海道でのスケッチと野口の意匠上の特徴を合わせて考えると、野口が北海道の函館と札幌の電話交換局の設計に従事していたことは間違いないだろう。なお、この設計を野口の造家学科の1年先輩にあたる三橋四郎とする説もある。しかし三橋は、卒業後まず陸軍省に入った後、明治31年に逓信省に入省しており、札幌電話交換局竣工年の明治31年と三橋の逓信省入省年を合わせて考えると、三橋の設計説には無理がある。札幌電話交換局は、野口の設計によるものであることは確実と考えられる。

札幌電話交換局の全体写真からは小振りの建築に見えるが、現地に立つと石造らしい重厚感ある均整のとれた建築であることが分かる。外壁は厚い石で築かれており、内部の床や間仕切壁そして小屋組は木造であった。1階の窓は、上部に葉飾りの要石のあるアーチとなっており、2階はまぐさ式の窓で彫刻的な小庇が付けられている。円模様の太い胴蛇腹の他に、1階外壁の窓台腰壁高さで全周を廻る帯、1階窓上部の弓型アーチ端部高さで全周を廻る帯など、単純な直方体の形状に微妙な陰影を加えた豊かさと節度のある建築としていた。



(左 図2-114) 開拓使時代の札幌 手前の貯木場から街づくりが始まった東西の大通りが現在の札幌大通り

(中 図2-115) 赤の丸印が現・NTT かつての札幌電話交換局の位置

札幌は、上の模型写真から分かる通り開拓使時代の都市構造を継承しており、現在の札幌大通りの東端に位置していた貯木製材場が都市建設の起点となっていた。当時の組積造の西洋建築は、明治21年(1888)に建った北海道庁本庁舎のみであり、迎賓館である豊平館や札幌農学校演武場・現札幌時計台などの洋館はすべて木造下見板張りの建築だっ

た。拓けゆく札幌の通信事業を担う重要な電話交換局は、信頼感ある石造の建築でなければならなかったのである。

註

- (* 1) 明治生命保険相互会社編・発行『目でみる明治生命の110年』 26～27頁
1993年 凸版印刷年史センター（財）日本経営史研究所
- (* 2) 清水重敦・河上眞理著『辰野金吾』 125～128頁
2015年 ミネルヴァ書房
- (* 3) 山本一雄著『日本最初の建築家 山口半六小伝』 124～126頁
1994年 住友史料館報 第25号
- (* 4) 同上 126頁
- (* 5) 工学院大学建築学部同窓会誌編集部編
『工手学校—日本の近代建築を支えた建築家の系譜—工学院大学』45～46頁
2012年 彰国社
- (* 6) 前掲書『日本最初の建築家 山口半六小伝』 121～122頁
- (* 7) 『建築雑誌』第50輯第617号 創立50周年記念誌 141頁
「回顧座談会」
1936年 建築学会
- (* 8) 住友史料館所蔵の濱田信義氏寄贈資料⑩-1の野口による明治27年10月7日の日記に、「西川虎吉鈴木禎次と共に十時頃出て浅草座に赴き、川上一座の演戯を観る」と記されていた。
- (* 9) 前掲書『目でみる明治生命の110年』 58頁
- (* 10) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈資料 資料目録1
- (* 11) 同上

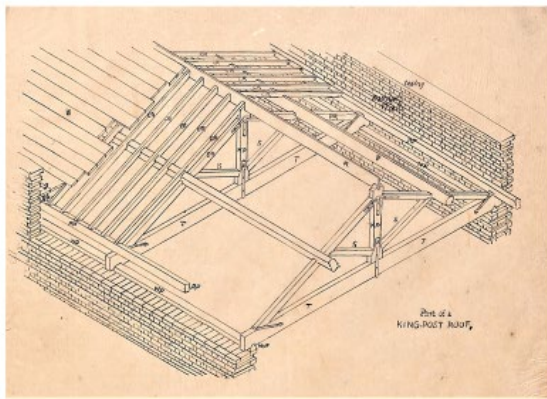
図版・写真

- (図2-106) 住友史料館所蔵 日高胖編『野口博士建築図集』
1920年
- (図2-107) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録1
- (図2-108) 博物館明治村撮影
- (図2-109) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録1

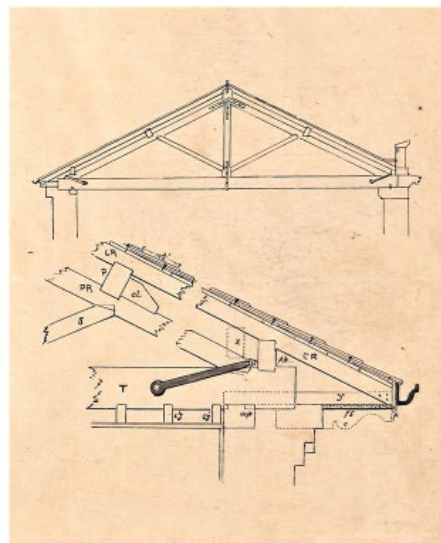
- (図2-110) 同上 資料目録1
- (図2-111) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録⑧
- (図2-112) 博物館明治村撮影
- (図2-113) 住友史料館所蔵
- (図2-114) 北海道庁旧本庁舎である北海道立文書館にある開拓使当時の札幌都市模型
筆者撮影
- (図2-115) 筆者撮影

2. 4 構造技術者としての野口孫市

現代の建築家は専門化した構造設計者との協働によって建築設計を行っているが、明治から大正初期の構造設計技術が未発達時代にあつては、建築家は構造設計技術も一人格のなかで修めた総合的な技術者でなければならなかつた。野口が大学院で建築構造学を専攻したことにはこのような時代背景があつた。下図は、野口の建築的習作トレースの中にあつた木構造トラスに関するものである。



(図2-116) KING-POST ROOF 習作



(図2-117) KING-POST ROOF 詳細習作

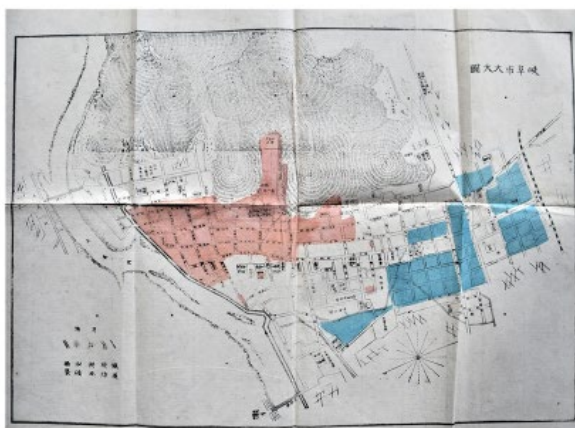
野口が技術志向の強い建築家であつたことは、大学院で構造学を専攻していたことに表れている。この節では特に、構造設計者としての野口に焦点を当て、大学から大学院時代そして設計実務の時代にも拡げて「構造設計者としての野口孫市」を取りあげる。なお野口は、当時の鉄骨構造技術などにも高い関心を払っていたが、ここでは震災という日本の宿命的課題に向き合っていた構造技術者の野口について記す。

野口が大学に入学した明治24年に濃尾地震が起こり、大学院に入った明治27年に庄内地震が起きている。この2つの地震につき野口は精力的な現地調査を行っている。また明治39年(1906)に米国サンフランシスコで起きた地震についても、日本よりの調査団に加わり調査報告を行っていた。ここでは、この3件の野口の地震調査について記述する。

2. 4. 1 濃尾地震

野口孫市が入学した明治24年(1891)10月28日午前6時37分、7000人を超す犠牲者を出した濃尾地震が発生した。この年の秋に入学したばかりの野口は、ただちに愛知県・岐阜県などに出向き、震災による被害を構造的な視点を含む広い視野から記録した多くの水彩画・鉛筆画スケッチや写真を残している。

地震の発生が朝食の準備で火を使っていた時刻であったため、岐阜市内では広域にわたる大火災がおきた。野口は「岐阜火災の図」という焼け跡の鉛筆画を描いている。この地震では、堤防の決壊による広域の浸水も市内別地区でおきており、野口はその岐阜市内の火災域と浸水域を示した資料も入手していた。



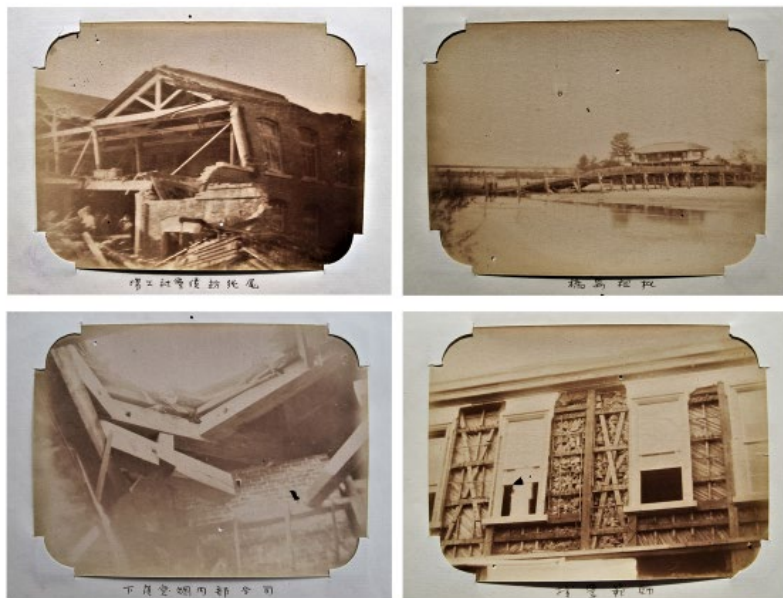
(図2-118) 野口が入手していた「岐阜大火災図」
赤が火災域を示し、水色が堤防決壊による浸水域を示す



(図2-119) 野口による水彩スケッチ
「岐阜火災之図」

橋の崩落や堤防の決壊箇所などの写真も残しており、名古屋市内では、名古屋城の渡り櫓の崩壊と石垣崩落などの損壊を水彩画に残した。また名古屋城のすぐ南にあった第三師団司令部では、その建物の内・外部にわたる構造クラックの状況を、水彩画・鉛筆画そして写真による記録として残している。煙突の落下についても写真とスケッチを残している。地震直後の緊急時に軍部で綿密な調査ができたのは、震災調査が辰野から学生に出された指示であったことによる。このほか震災調査では、尾張紡績会社や名古屋紡績会社の工場、愛知県尋常師範学校、名古屋尋常中学校などで行った記録も鉛筆画や写真で残している。

野口は大学院では耐震構造を専攻しているが、その専攻を選ぶにあたっては濃尾地震での経験が大きく影響していたと考えられる。



(図2-120)
野口撮影による震災
記録写真の一部

それぞれの写真には野口の
自筆でその場所が記されて
いる

- 左上：尾張紡績会社工場
- 左下：司令部内煙突落下
- 右上：枇杷島橋
- 右下：師範学校



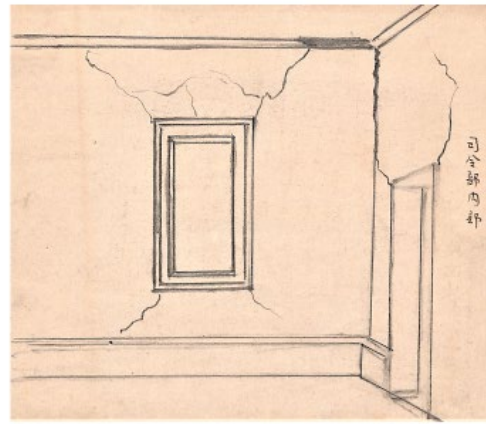
(図2-121) 名古屋城内渡り櫓



(図2-122) 尾張紡績会社工場 倒壊現場



(図2-123) 第三師團司令部 外壁クラック



(図2-124) 司令部内部 内壁クラック



(図2-125) 愛知県尋常師範学校煙突落下



(図2-126) 司令部内煙突落下

2. 4. 2 庄内地震

明治27年(1894)10月22日、山形県庄内平野の酒田市を震源とした激しい地震が発生した。工科大学大学院生であった野口は、直ちに現場に赴き「庄内地震被害調査報告」を作成している。その報告書は、震災予防調査会の委員であった中村達太郎と辰野金吾によって採り上げられ、明治28年(1895)の『建築雑誌 第百九号』に掲載された。

野口は、耕福寺や日枝神社など神社仏閣10件、裁判所や酒田小学校など諸官衙・学校等11件、民家数軒を調査し、それらの建築物の構造について記述をしたうえで、地震による損壊状況と損壊の主な特徴を丹念に記録していた。例えば日枝神社については下記のような記述で始まっている。

酒田町の西砂丘の上にある

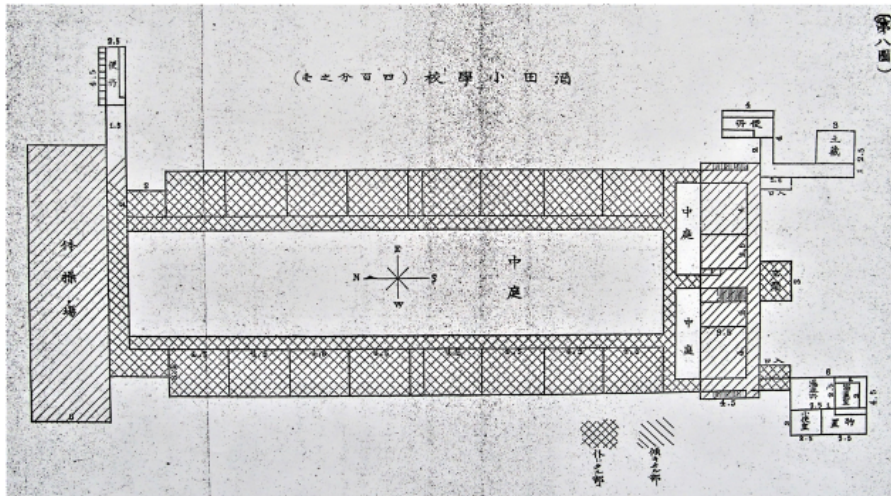
同拝殿は九間に十二間の大社なり 屋根は瓦葺にして総体に東に傾き今にも転倒せんとするの状あり 其向拝の部は向拝柱の破損により前方は墜落して惨状を呈せり
本社 拝殿の後方にあり拝殿に比すれば遥かに小なり破損の箇所は皆無なりと雖も全体に少しく東北に動き柱のあるものは原位置を距る三寸三分東北にあるものは二寸北方に動きたり

日枝神社の調査記述では、この後玉垣・水屋・納屋・東門・表門などにつき同様の記述が行われていたが、これらの建屋の傾き方向および倒壊方向を記録する調査図を作成していた。「要するに此境内の建築は其傾くもの倒るもの覆へるもの動くものを論せず盡く東或は東北の方向に於てしたり 而して茲に注意すべきは石燈にして本社拝殿間の二箇は悉く西或は西南即ち家屋と恰も反対の方向に於て倒れたること是れなり」とまとめている。



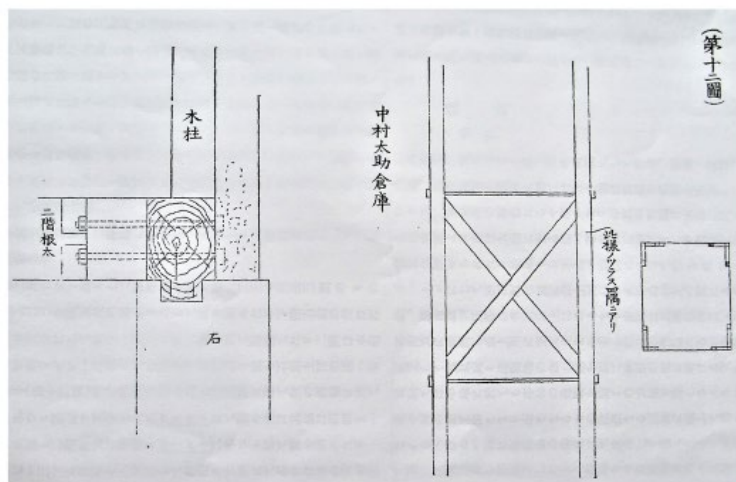
(図2-127) 日枝神社境内震災調査図 各建屋の傾き方向、倒壊方向を示す画面の右側が北

また酒田小学校では、平面図の上に傾いた部分と倒壊部分を図示する調査図を作成し、「正面は2階家で隅柱は7寸5分で東方に傾いたものの大破は免れたが、中庭をはさむ瓦葺の平屋教場は2棟とも東に倒れた。倒壊の主な原因は平屋部の地業工事が不完全であったことによる。」と報告していた。



(図2-128) 酒田小学校 震災損壊調査図
ダブルハッチは「倒レタル部」、シングルハッチは「傾キタル部」を示す

多くの建物が大きな損傷を受けるなかで損壊被害を免れた中村太助邸につき、詳しい調査図面を残している。隣家が倒れかかっていたにもかかわらず、中村邸が損壊を免れていた主な要因として、壁内に組み込まれた筋違トラスの効用および基礎部と木造の接合部のボルト等を使用した詳細を挙げていた。



(図2-129) 地震による損壊を免れた中村太助邸倉庫
右図は、1階石造・2階木造の倉庫の四隅の壁内トラスを示す
左図は、1階石造壁と2階床根太の接合部詳細を示す

最後の概論では、まず庄内平野の地盤の特性が河洲の埋め立て地であり砂質の土壌であることを次のように述べ、土質の相違により建物の損壊状況が異なることを述べている。

庄内平野の地たるもと最上川の河洲にして押切、新堀、余目、飛鳥、黒森、坂野辺等の諸村に於ては現今猶お新田の名称を附加して称呼しつつあり其最新の構造たるや明らかなり 平原の西端日本海に面するの処北は吹浦より南は大山に至る迄一帯の砂丘相亘りて中間最上川により僅に遮断せられたり 是即ち日本海の波濤によって作られたるサンドデューンにして酒田町は実に最上河口の北岸此砂丘の麓にあり

さらに現在で言うところの「地業工事」についても詳しく述べている。当時は「地形」と呼ばれていた。

酒田近傍家屋の地形は頗る粗雑を極め幹部構造の弱点よりも寧ろ地形の粗悪の為に損害を被りたる如き部分少なからず 彼の裁判所の第一公庭が他に比して殊に損害多かりしは余は之を不良なる地盤に適当なる地形の欠乏に帰せざるべからず

具体的な方策として、従来の丸石を用いる地業ではなく石・煉瓦・コンクリート等による地業を提案している。ただ木造家屋については、地震の水平動に柔軟に対処できる従来の構造も下記のように評価していた。

木造家屋が激烈なる水平動に会遇する時は大抵一尺以下の移動を生ずるを認めたり 然れども此移動を全く防止するは適幹部の構造に於て損害を増加するの恐れあるを以て余は其或る限り迄は自由に移動せしむるの利あると認めたり

特に木造西洋館に損壊被害が多くみられたことにつき、「構造に筋違を入れず只通し檣を入れたるのみなること」および「指し口の丁寧ならざること」の2点を指摘していた。また和洋の家屋全般について、筋違の有無が被害の程度を大きく分けていたことも記述していた。そして屋根材についても言及し「屋根は家屋の耐震力に大関係を有すること明なり 神社仏閣の如き頭大の瓦葺は最も家屋に害ありて杉皮、粉板の如きは最も耐震力に富めるものと云うべし」と指摘していた。

2. 4. 3 サンフランシスコ地震

明治39年(1906)4月18日、米国サンフランシスコで大きな地震が発生した。多くの建物が倒壊し、広域各所で火の手があがった火災は三日間燃え続け、約3000人の犠牲者を出したと言われている。野口孫市は、日本建築学会の震災地視察団に加わり5月に渡米、つぶさに実地調査を行い8月下旬帰国した。辰野金吾の首唱により400人の聴衆を前に幻燈機を用いて報告講演会を行ったが、その要旨は次のようなものであった(*1)。

まず「弾力性を異にする材料を混用せば、外力に遇うて両者の間に剪断力を起こし、且つ損害が必ず此の場所において起こるものなるが故に、弾力性の異なる材料を併用せんとせば、其の構造法によりなるべく弾力性の差の減少を図らざるを得ず。」と地震時において弾力性の異なる材料間に生じる剪断力について述べ、「木骨にて石又は煉瓦を張付けたるものは、弾力を異にするため皆剥落せり。鉄骨と煉瓦造とに併用したる場合も同じく煉瓦を剥落せしめ、窓のなき壁を煉瓦のみにて築造し窓なき部分を鉄骨になせるものあり、これも結果よろしからず。」とその場合の外壁材や窓の剥落について述べている。さらに「且つ米国の鉄骨には筋違なるもの少なく、各用材は、いずれも梁として働くが故に弾力一層その度を加う。これ耐震家屋として最も改良せざるべからざる要点なるべく、即ち、筋違を入れ各用材をして外力に対して抗張材、抗压材の二つとして働かしむに至らば、梁として用うる場合よりも大いに最弾力を減少し、石煉瓦の弾力に近からしむることを得べし。」と筋違の効用についても述べている。そして「ただ鉄筋コンクリート称道者の、セメントに包まれたる鉄は錆を生ぜずということは大いに疑わし。何となれば、破損の跡より鉄の腐食せるを発見したればなり。これは今後大いに研究を要する問題ならん。」と当時普及しかかっていた鉄筋コンクリート構造にも注意を促している。さらに次のように地震時における火災被害の大きさに言及している。

次に火災によりて生じたる損害について考究せんに、火災の原因は種々あれども、主として瓦斯に起因するものにして、其の火力の猛威なる往来のレールを波形に曲げ、鉄釘を溶解し防火シャッターも亦其の効なからしめ、且つ両方大道路に取囲まれたる防火構造の家が類焼したるなど、殆んどすべてのものを焼払わねば措かざるの有様なりき。……(中略)これを要するに、火災の害は常に震災よりは大なり。而して火災は殆んど常に震災にともなうものなり。故に耐震家屋は同時に耐火家屋たるの要あり。

しかして両者を兼備するは、鉄骨と鉄筋コンクリートとなり。故に将来において重要な建築においては鉄骨を使用し、筋違はなるべく多く使用し、すべての用材が抗張材と抗压材とよりなるようになし、煉瓦及び石等も各層毎に上階の分を支持するようになさば、非常なる地震に遇うも、その破損は一部に止まり、内部における生命財産は保護せらるるのみならず、被害の修理も頗る容易にしてその修理後の家の強さは被害以前と少しも相違なきようになすことを得。我々日本等の地震国においては最も適当なる建築法ならんと信ず。」

大正12年(1923)午前11時58分、東京では建物が地底から突然激しく揺さぶられた。その直後、ドーンという大きな音響とともに下方から突き上げられたかと思うと直ちに垂直に突き落とされるような衝撃が続き、強烈な上下動が襲ってきた。さらにその震動は激しさを増し、約15秒後には想像を絶する激しさとなった。折から昼食時で火を使ってい

たため、東京の方々に火災が発生し、低気圧の通過による強い東南風に煽られて猛火となった。その猛火はまたたく間に広域に及ぶこととなり、圧死者一万余名に対し焼死者9万余名と焼死者数が大きく上回ることとなった。計10万5000余名の生命が奪われた。言うまでもなく関東大震災である。

日本橋にあった住友銀行東京支店は、野口の時代に設計され、野口の大正4年の死後、その跡を継いだ日高胖によって大正6年(1917)完成していた。この住友銀行東京支店があった日本橋周辺は、この大震災で見渡す限りの焼野原となっていたが、この建物は構造的に何ら損傷なく、窓等外壁部に設置された防火シャッターにより、激しい猛火で内部を類焼することもなく、翌日から営業が可能な状態であった(*2)。野口の知見が生かされたのであった。



(左 図2-130)
関東大震災直後の住友銀行東京支店

(下 図2-131)
大地震により炎上するサンフランシスコ市街



註

- (*1) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで 一日建設の系譜』 327~329頁
1991年 創元社
- (*2) 実際には、政府により震災地区における銀行業務の一時停止命令が出され、翌日からの営業はなされなかった。

図版・写真

- (図2-116) 住友史料館 濱田信義氏寄贈 資料目録⑧
- (図2-117) 同上 資料目録⑧
- (図2-118) 尾形久美子氏より筆者受領
- (図2-119) 住友史料館 尾形久美子氏寄贈 資料目録26
- (図2-120) 尾形久美子氏より筆者受領
- (図2-121) 住友史料館 尾形久美子氏寄贈 資料目録12
- (図2-122) 同上 資料目録21
- (図2-123) 同上 資料目録11
- (図2-124) 同上 資料目録18
- (図2-125) 同上 資料目録89
- (図2-126) 同上 資料目録19
- (図2-127) 建築学会『建築雑誌百九号』
野口孫市著「庄内地震被害調査報告 (第一図)」
1895年
- (図2-128) 同上
「庄内地震被害調査報告 (第八図)」
- (図2-129) 同上
「庄内地震被害調査報告 (第十二図)」
- (図2-130) 住友銀行編『住友銀行 百年史』 1998年
- (図2-131) Wikipedia San Francisco Fire 1906

2.5 住友よりの招聘

明治29年から逓信省に勤めていた野口孫市は、明治32年に住友より招聘され、住友の嘱託として1年あまり建築視察のため欧米を巡遊していた。帰国後ただちに住友に入社したが、どのような経緯で逓信省に勤めていた野口が住友入りすることになったのだろうか。その経緯について、明確な文献は残されていない。しかし、いくつかの事実から推測は可能である。現在までの野口に関する文献でも推測がなされてきたが(*1)、もう少し詳しく考察を試みる

2. 5. 1 二人の住友家建築顧問 — 山口半六と辰野金吾

住友家は、明治28年(1895)年5月に広島県の尾道で第1回重役会議を開催し、住友本店・銀行本店となる建物の建設を決議した。詳しくは「第3章 住友春翠と住友本店臨時建築部の創設」で記すが、この決議が野口の運命を大きく変えることとなった。

住友家は、明治期の建築界の重鎮二人に相前後して建築顧問を委嘱した。一人は明治32年(1899)から住友家建築顧問に就任した山口半六であり、もう一人が、山口の死後、明治34年(1901)に就任した辰野金吾である。帝国大学工科大学は明治19年(1886)に設立されているが、その母体には二つの流れがあった。一つが辰野金吾に代表される工部省による工部大学校であり、もう一つの流れが文部省による大学南校であった。この大学南校の系譜を代表していた建築家が山口半六である。

山口半六(1858~1900)は、辰野金吾に次いで日本で二人目の造家学分野の工学博士号を授与されている。山口は、松江藩から貢進生に選ばれ大学南校に入学し(*2)、さらに明治9年(1876)文部省貸費留学生に選抜され、フランスに留学しパリのエコール・サントラル(*3)を卒業した。エコール・サントラルは、フランスの理工科名門校であり前述の日本土木工学の祖である古市公威や、古市の後任として第2代土木工学会会長に就任し河川土木に大きな業績を残した沖野忠雄(1854~1921)もエコール・サントラルを優秀な成績で卒業していた。ちなみに山口と沖野は、文部省貸費留学生同期で選抜され共にフランスに留学した生涯の友であった。山口は、明治14年の帰国後から明治17年まで三菱社に入り、その後明治18年(1885)文部省に入省、明治20年には文部省会計局技師となった。この時の文部省会計局長が久保田讓、次長が住友本店副支配人・田辺貞吉の実弟・手島精一であった。学制改革が急がれる中、山口は第一高等中学校(東京)第三高等中学校(京都)第五高等中学校(熊本)第二高等中学校(仙台)などの設計に文部省の官僚建築家として次々と携わっていた。明治23年には、文部省会計局に初めて建築掛が設けられ、その初代掛長となっている(*4)。文部省内での、山口半六と久保田讓の緊密な間柄を思い浮かべることができる。この翌年に野口孫市は工科大学に入学し、その3年後に久保田讓の娘・良と結婚した。山口半六と辰野金吾は連名で文部大臣へ西洋美術教育についての建白書を提出していたように、この二人は建築界の重鎮となっていた。久保田は、かつての文部省の部下であり建築家である山口に、娘婿候補の野口についてその建築家としての評価を尋ねていたのではないだろうか。また山口は、久保田の質問に答えるために懇意であった辰野を訪問し、完成したばかりの野口の卒業設計を見せられ、その秀逸さに瞠目したと推測する。

前述の「2. 3. 1 明治生命保険大阪支店の設計」で記したとおり、山口半六によって明治生命保険大阪支店の設計機会を得たと思われる野口は、その工事期間中は逓信省に勤めていた。一方、住友より臨時建築部の長にふさわしい建築家の選定について相談を受けて

いた山口が、最初に住友に野口の存在を伝えたのでないかと推測する。住友にしてみれば、山口から示唆された野口孫市とは、偶然ながら8年前に住友奨学貸費生に選定した工科大学の学生であった。

山口は、明治25年肺結核のため文部省を辞し神戸須磨の地で療養に専念しようとしたが、病を押して明治27年頃より再び建築の仕事を行っていた。この頃の仕事に、野口孫市設計の明治生命保険大阪支店の工事監理業務がある。そして山口半六の最も輝かしい業績である兵庫県庁舎の設計があった。しかし明治33年(1900)住友本店臨時建築部発足の2か月後の8月、享年43歳で亡くなった。住友の同年の書類に「本店建築顧問工学博士山口半六氏病没ス」と記録されている(*5)。山口半六の死を悼み『山口博士建築図集』が発行されたが、この発行人は山口半六の生涯の友であった沖野忠雄そして桑野政と野口孫市の3人であった(*6)。山口と同じく建築家であった野口が建築図集をまとめる中心的な役割を果たしたと思われる。野口の山口への「恩義の思い」には只ならぬものがあつたであろう。その「恩義」とは、野口孫市が住友に招聘されることになる端緒として、山口半六が住友の求めていた臨時建築部初代技師長にふさわしい建築家・野口孫市がいることを住友に最初に伝えたことである。



(図2-132) 山口半六
(1858~1900)



(図2-133) 山口半六の設計による兵庫県庁舎
明治32年に着工し、山口の死後の明治35年に竣工した

辰野金吾の側から、いくつかの事実をもとに当時の事情を推測してみる。住友本店から辰野には、何らかの「願い書」が出されていたのではないかと推測する(*7)。住友にしてみれば、野口を得るには辰野の同意を得ることが最大の課題であったはずである。辰野は明治31年(1898)から工科大学の学長に就任していた。また辰野は建築界の大御所であり、住友はその後も工科大学建築学科から優秀な卒業生人材を臨時建築部にも推薦してもらわねばならない。まして辰野は、住友と関係が深い鉾山学科を含む工科大学全体の学長にもなっていたのである。

住友からの要請を受けた辰野にとってみれば、親しい山口から内々に聞かされていた話であった。当時の建築家・辰野金吾にしてみれば、大きな財閥になりつつあった住友との縁ができるのは歓迎すべきことだっただろう。三菱には盟友・曾禰達蔵がいたために手出しは控えていたであろうし、三井では横河民輔が信頼を得ていた。辰野が建築家として行った仕事は、経済界では渋沢栄一など東京の新興の経済人に限られていたからである。そして大阪では、日本銀行大阪支店の工事に着工していた。後に弟子の片岡安（1876～1946）と辰野片岡建築事務所を設立することになるが、大阪も多くの仕事の機会があると読んでいたに違いない。その大阪の住友に、弟子の野口を送り込むのは良い話であった。辰野が、日本銀行本店工事で鍛え上げた弟子の久保田小三郎を、明治生命保険大阪支店の工事監理のため山口の下に送り込むことまでしたのは前述のとおりである。ちなみに久保田小三郎は、住友本店臨時建築部に入り野口孫市の下で大阪図書館の工事現場を取り仕切る重要な立場で完成させた後、辰野のもとに再び戻っている（*8）。辰野にしてみれば、とっておきの懐刀であった久保田小三郎を野口の下に遣ったのである。愛弟子・野口孫市に住友で立派な仕事を成させることは、辰野金吾にとっても大切なことであった。山口半六の死の翌年、明治34年（1901）に辰野金吾は住友家建築顧問を引き継いでいる。

野口孫市は運命的なものに導かれるように住友入りすることとなった。おそらくは前述の「1. 3 結婚そして岳父・久保田讓」で述べたとおり、父・野の関係がその死後も及んでおり、岳父となる久保田讓は野口孫市を知ることになったのだろう。久保田讓と強い繋がりのあった山口半六、そして野口孫市の師である辰野金吾、山口半六と辰野金吾の親しい関係といった様々な人々の歯車が回転し、野口孫市は逓信省を辞し住友入りすることとなった。

2. 5. 2 住友入社

明治31年ころの野口は逓信省技師として、北海道の電話交換局の設計などに従事していた。前述した札幌電話交換局は、着工が明治31年の年初であり同年の暮れに竣工しているため、この年の野口は頻繁に北海道に出張していたと思われる。

その年に野口は、住友よりの招聘の話をもとに山口半六から聞かされたと思われる。山口は、明治生命保険大阪支店の工事監理の件でたびたび野口に会っていたはずである。野口にしてみれば、当初は複雑な心境であっただろう。逓信省技師は、優秀な先輩たちも入っている工科大学造家学科の卒業生にとって誇り高い仕事であった。また、住友についてもほとんど知識はなく、大阪については、わずかに高等中学校の3年間を過ごしただけで、明治生命保険大阪支店の件で縁ができたばかりだった。しかし、山口から聞かされた1年間の欧米建築視察巡遊の条件は、野口にとって何ものにも替え難い好条件であっただろう。山口自身が5年間のパリ留学を経験し建築界で活躍していただけに、その山口からの話である欧

米巡遊への思いはより強いものであったと思われる。

野口が住友入りを決心するうえで、最も気がかりだったのが恩師・辰野金吾のことだったはずである。逋信省入りを推薦してくれた辰野にどのように話をするか戸惑った姿が思い浮かぶ。しかし辰野には、住友と山口からいわゆる「根回し」が行われており、野口は安堵して住友入りを受諾したと推測する。

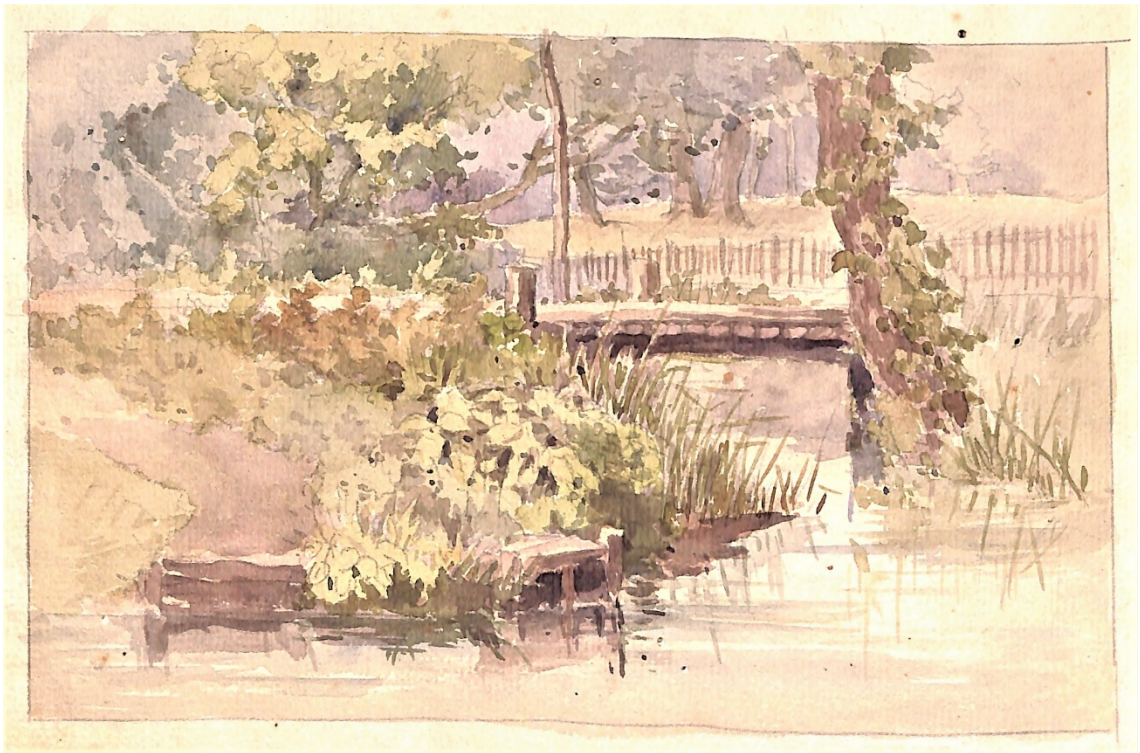
註

- (* 1) 坂本勝比古著『日本の建築 明治・大正・昭和 (5) 商都のデザイン』
120～121ページ 1980年 三省堂
石田潤一郎著『関西の近代建築 ウォートルスから村野藤吾まで』 36頁
1996年 中央美術出版
小西隆夫著『住友営繕のふるさと物語』 11頁
1993年 日建設計 社内報特別号
山本一雄著『日本最初の建築家 山口半六小伝』 128頁
1994年 住友史料館報 第25号
上記の4冊が、野口孫市・久保田讓・山口半六・辰野金吾の関係を述べている。
坂本勝比古の著書では、野口の住友入りについて「山口の推挙があり辰野の推薦があったのではないか」と推し量っている。
- (* 2) 兄の山口宗義も蘭学者の福地源一郎に学び、藩の貢進生に選ばれ大学南校に入学、その後大蔵省に入省し日本銀行理事を務めた。その三男は海軍中将の山口多聞。山口多聞の義兄に住友本社総理事を務めた小倉正恆がいる。
- (* 3) フランスの工学・技術系エリート養成のための国立高等教育機関。エコール・ポリテクニク、エコール・ド・ミーヌと並び、理工系3校のグランゼコール（国立理工科学院連合）の1つ。
- (* 4) 山本一雄著『日本最初の建築家 山口半六小伝』 124頁
1994年 住友史料館報 第25号
- (* 5) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで 一日建設計の系譜』 5頁
1991年 創元社
- (* 6) 前掲書 『日本最初の建築家 山口半六小伝』 130頁

- (* 7) 藤森照信著『近代日本の洋風建築 開化篇』253頁には、住友春翠から辰野金吾に宛てられた書簡と辰野からの春翠への返書が紹介されている。これらは明治36年1月付のもので、その内容は、工科大学を辞官した辰野に対し、今後とも建築顧問として尽力していただきたいというものだった。辰野は明治31年から工科大学学長に就任しているが、住友と工科大学との関係はそれ以前より深いものがあり、春翠と辰野間での野口の住友入りに関する書簡のやり取りも充分推測が可能である。
- (* 8) 工学院大学建築学部同窓会誌編集部編
『工手学校—日本の近代建築を支えた建築家の系譜—工学院大学』 49～50頁
2012年 彰国社
明治44年(1911)に竣工した辰野片岡建築設計事務所によるアールヌーボーと言われる松本健次郎邸の工事監理を久保田小三郎が担当した。

図版・写真

- (図 2 - 1 3 2) 『山口博士建築図集』 見開き
(図 2 - 1 3 2) 『山口博士建築図集』
(図 2 - 1 3 3) 住友史料館 尾形久美子氏寄贈 資料目録 1



(図2-133) 橋と小川 明治30年頃

第3章 住友春翠と住友本店臨時建築部の創設

世界の美術や音楽など芸術の歴史において、パトロネージなくしてその芸術は存在しなかったほどパトロン存在には大きなものがある。建築の世界でも、発注者やクライアントもしくは施主とも呼ばれる存在は、洋の東西を問わずこの事情が顕著であった。現代に近づけば近づくほど、パトロン個人としての具体的な存在感は薄れ、企業組織や行政組織などのいわば抽象的存在に変わってきたが、明治期にあっては、そのパトロンとしての個人の存在感には大きなものがあった。建築家側からは「施主」とも呼ぶこの存在のありようは、明治期から大正そして昭和前期までの日本の近代建築を見るうえで欠くことのできない重要な要素である。

第2部で採り上げる住友家須磨別邸、中之島図書館、日暮別邸そして住友家茶白山本邸のすべてが、住友春翠の発意によってプロジェクトが始まっている。しかも発注者としての春翠のそれら建築への関心や意向には極めて大きなものがあった。設計者であった野口は、春翠の意向や考えさらには美意識まで受け止めたうえで、自身の持つ建築術を最大限に駆使しなければならない状況に迫られていたのである。古来、優れた建築が生まれるための条件の一つとして優れた施主の存在が語られることが多い。第2部で述べるように野口が優れた建築を生み出した背景には、英明な施主としての春翠の存在があった。住友春翠は、建築家・野口孫市を考察するうえで欠くことのできない存在であり、野口の理解には春翠についての理解が不可欠である。

野口が住友入りをして初代技師長を務めた住友本店臨時建築部は、春翠が開催を命じた明治28年の住友家第1回重役会議においてその創設が決議されていた。住友本店臨時建築部は、春翠の意向が色濃く反映された建築組織であり、春翠の意向を建築として実現することを第1の任務としていた。その住友本店臨時建築部の創設の事情も野口を理解するうえでは必須の条件となる。

この第3章では、3.1にて公家に生まれた第15代住友吉左衛門友純（ともいと）である住友春翠の生い立ちから住友入りについて述べ、3.2で春翠の国際的な視野について述べる。3.3では、野口の建築の施主であった住友春翠の「人と美意識」について述べ、3.4で明治期の施主と建築家の関係について同様の財閥であった三井や三菱と比較することで住友本店臨時建築部の特徴について触れる。そして3.5にて住友本店臨時建築部の創設について記す。

第15代住友吉左衛門友純は住友春翠という雅号を好み、終生この雅号を通常の自身の呼称に使っていた。また彼に関する住友の文献でも通常の呼称として春翠という雅号を使っているため、以後この論文でも「春翠」の呼称を用いる。

3. 1 第15代住友吉左衛門友純 — 雅号：住友春翠



(図3-1) 第15代住友吉左衛門友純 雅号：春翠 (1864～1926)
大阪図書館、住友家須磨別邸を完成した頃の住友春翠

春翠は、元治元年（1864）12月21日に公家徳大寺公純（きんいと）の六男・隆磨として京都に生まれた。兄弟には、のちに明治天皇の信望が篤かった侍従長・内大臣となる長兄の実則、そして総理大臣となる次兄の西園寺公望などがいた。父・公純は、安政の大獄を耐え抜いた勤王の公家であり、春翠は、京都の生家「清風荘」で父と過ごし、文学と思想の薫陶を受けていた。明治16年（1883）に父・公純が没すると、翌17年に学習院に入学した。春翠を知る学習院関係者の「徳大寺隆磨は品行良く、体格も上等、容貌も美なる方にて、威格も備はり、学問も優等なり」という評判を得た住友は、自薦他薦で多くの候補があったなか、徳大寺隆磨を住友家の婿養子の第一候補とした。

明治23年（1890）住友家では12代友親、13代友忠があいついで亡くなる不幸にみまわれていた。13代友忠の死後、12代婦人の登久が14代を継いでいたが、12代の長女の満寿（ます）に婿養子を迎え、その人物に15代家長を相続させるための人選にあたっていたのだった。

本店支配人の伊庭貞剛が、隆磨本人および実兄の徳大寺実則や西園寺公望らと相談したが、きまじめな隆磨が態度を決めかねていたところ、伊庭は「住友の財産といったところで何程のものでもなく、たかが銅を吹いて儲けた位のもの故、潰してもらって結構です。」と答えて安心させたといわれている。明治25年（1892）4月、住友家の養嗣子となった隆磨は、翌明治26年4月26日に正式に家督を相続し、第15代住友吉左衛門友純となった（*1）。春翠、満28歳であった。

春翠は徳大寺家において既に「東洋」と「西洋」の教養を十分に身に付けていた。「東洋」の教養は言うまでもなく父・公純からである。四書五経をはじめとする漢籍や、日本書紀などの国学を学び、父の茶事・能楽・詠歌の相手を務め乗馬もたしなんでいた。また親類にあたる当代一流の篆刻家・小林卓斎から篆刻も学んでおり、「春翠」という雅号は、その篆刻家である小林から授けられている。春翠はこの雅号を好み、生涯この雅号を使い続けた(*2)。後の文献でも伝記『住友春翠』にあるように、すべて第15代住友吉左衛門友純についての表記は、この「春翠」の雅号を用いている(*3)。

一方、「西洋」の教養は次兄・西園寺公望から身に付けた。10年間のフランス留学から明治13年に帰国した西園寺公望から、西洋の教養と国際的な視野を授けられた。春翠における西園寺公望への敬慕は、その終生に及んでいる。

若き日々の春翠に大きな影響を与えたこの二人、父・徳大寺公純と兄・西園寺公望は、東洋と西洋とその影響を与えた分野で異なっていたが、国を思う志や個人の利益よりも公共の利益を第一に考える点では二人は共通していた。いわゆる「公」の理念である。春翠が家督を継いだ住友においても、その事業精神は「自利利他、公私一如」であり、春翠は住友に婿養子に入ったものの、住友の事業においても社会貢献においても、その精神には徳大寺家から住友家へ一貫するものがあつた。

春翠の書は当代でも一級のものであつたが、春翠は筆をとり画にも打ち込んでいた。丸山応挙や松村景文の花鳥画、狩野探幽の観音図などのコレクションから模写する一方、様々な姿態の寿老人を繰り返し描いていた。それらには「百寿老」の印があり、百図の完成を目指していたといわれる。

野口孫市も、「公」を重んじる福沢諭吉に心酔していた父・野から薫陶を受け、壮麗な姫路城を毎日見て育ち、天賦の画才に恵まれた若き建築家であつた。春翠と野口の邂逅は、奇しくも理想的な施主と建築家の出会いだったといえるだろう。



(図3-2) 明治25年(1892) 春翠結婚記念写真
前列左から：満寿夫人、春翠、登久
後列左から：広瀬宰平、4人おいて伊庭貞剛



(図3-3) 住友家鰻谷旧本邸 洋館部は
明治12年(1879)
初代・八木甚兵衛の設計施工

註

- (* 1) 末岡照啓著「実業家としての住友春翠」
公益財団法人泉屋博古館学芸部編『住友春翠 ー美の夢は終わらない』所収 10頁
2016年 公益財団法人泉屋博古館
- (* 2) 外山潔著「住友春翠 理想を求め続けた生涯」
前掲書『住友春翠 ー美の夢は終わらない』所収 18頁
- (* 3) 住友春翠編纂委員会編『住友春翠』
1955年 住友春翠編纂委員会

図版・写真

- (図3-1) 住友史料館所蔵
- (図3-2) 同上
- (図3-3) 同上

3. 2 春翠の国際関係への視野 ー実兄・西園寺公望と春翠の海外巡遊

春翠は、欧米では成功した実業家が私財を投じて慈善事業や公共施設事業を支えていることを学び、現・大阪府立中之島図書館である大阪図書館を大阪府に寄贈することを決意した。また須磨別邸では、英国艦隊将校一行をもてなし、英国王室コンノート殿下来臨の歓迎会を催している。そして外国領事を含む国内外の貴賓・紳士を招いて「住友の紳士招待会」を幾度も須磨別邸で開催していた。これらからは、国際的視野に支えられた春翠の「公」への使命感をうかがうことができる。また須磨別邸での自分の子弟の教育には、英国人のリチャードソン夫人を住み込みの家庭教師として招き、英語でその教育にあたらせていた。子弟の教育にもその国際感覚をうかがうことができる。

春翠がその国際的視野を得たのは、兄・西園寺公望の影響によるところが大きい。西園寺公望（1849～1940）は、徳大寺公純の次男として生まれ、2歳で徳大寺家と同じく清華家（*1）である西園寺家に養子に迎えられ家督を相続している。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督を務めるなどの活躍を見せたが、明治3年（1871）から明治13年（1880）までフランスに留学した。フランス公使館の嘱託という立場で、バカロレアに合格したのちパリ大学法学部（ソルボンヌ）で学び（*2）、のちにフランス首相となるクレマンソーなどとの親交も深めた。自由民権運動の思想的指導者・中江兆民などとの交友を深めているが（*3）、官費留学生の建築家・山口半六も同じ時期をパリに過ごしており、山口もパリ時代に西園寺の面識を得ていたのではないかと推測する。明治18年（1885）

ウィーン・オーストリア＝ハンガリー帝国公使、その3年後にはベルリン・ドイツ帝国公使兼ベルギー公使などを務め(*4)、明治27年(1894)には第2次伊藤内閣文部大臣、明治39年(1906)第1次西園寺内閣総理大臣、明治44年(1911)第2次西園寺内閣総理大臣を務めている(*5)。大正8年(1919)には、パリ講和会議の首席全権としてベルサイユ条約に調印。伊藤博文の腹心といわれながらも、国際的な視野を持ち学識が深く文化的にも洗練された人物であったといわれている。明治30年(1897)の京都帝国大学の設立、立命館大学の設立に寄与するなど教育関係にも力を注いだ。晩年は大正天皇・昭和天皇の輔弼として、首相指名の実権も持つ元老として亡くなるまで大きな政治力を持っていた。明治後期から昭和初期にかけて、日本が国粋主義・全体主義に陥りつつあるなかで、人民の平等と自他を互いに尊重する道徳を主張し、ファシズムの台頭や大陸侵略に断固として反対する毅然とした姿勢を保った政治家であった。

春翠は、海外公使の任務から帰国し政府中枢で働きはじめた西園寺のために、駿河台に邸宅を建てた。この設計は住友本店臨時建築部が行い、庭園は小川治兵衛が作庭している。また野口の没後ではあるが、日高胖率いる住友総本店営繕課(臨時建築部の後身)による設計、小川治兵衛作庭による静岡興津の坐漁荘も、大正9年(1920)春翠が建てた。ちなみにこの坐漁荘は、現在では博物館明治村に移設保存され、平成29年(2017)に国指定の重要文化財となっている。また、徳大寺家の清風荘も住友家が買い取り、住友家出入りの名匠である大工棟梁・2代目八木甚兵衛と庭師・小川治兵衛の仕事で清風荘を整備し、ここを西園寺の京都別邸とした。後に清風荘は、住友家より西園寺が設立に寄与した京都帝国大学に寄贈され、現在では京都大学の迎賓施設となっている(*6)。春翠は、立命館大学設立資金援助を含め様々に西園寺のため尽力していたが、それは兄・西園寺公望を深く敬慕していたことによる。西園寺は、住友家の須磨別邸にもしばしば逗留し、須磨の白砂青松の風光に親しんでいた。

西園寺から春翠への最大の恩恵は、春翠が国際的視野を得たことにあった。春翠は西園寺からの影響もあり、明治30年(1897)に4月から11月までの7ヵ月をかけて欧米を巡遊した。この年、西園寺公望は、前年の第2次伊藤内閣辞職のため暇を得、欧州の刻々と変わる複雑な政治情勢を掴むため5度目の洋行でパリに滞在していた。下記は、春翠の巡遊記録の一部である(*7)。

- | | |
|-------|---|
| 4月13日 | 横浜よりドーリック号で日本を発つ。 |
| 4月29日 | サンフランシスコに到着、パレス・ホテルに宿をとる。 |
| 5月1日 | カリフォルニア州商品陳列場、農産物陳列場、造幣局など見学。その後、金門橋、公園、クリフ・ハウスなどを見学したのち、日本人がその30年前に渡米して成功したワイナリーを訪問。 |
| 5月3日 | 造船工場のユニオン・アイアンワークスを見学。日本政府注文の軍艦千歳の建造中であった。 |
| 5月4日 | 連絡船でオークランドに渡りサザン・パシフィック鉄道の列車に乗る。 |

- 5月5日 ソルトレイクシティに到着、ナッツフォード・ホテルに投宿。翌朝モルモン教徒の大寺院を訪問。世界最大のオルガンを見学（野口も同様）、オーデトリウムの音響効果を自慢して針を落としてその響きも聞かされた。
- 5月7日 リオグランド・ウェスタン鉄道でロッキー山脈を越え、鉱山業で栄えていたデンバーに入る。ブラウン・パレス・ホテルに宿泊。翌日、精錬所を詳しく見学。夜、バーリントン鉄道にてシカゴに向かった。
- 5月10日 シカゴに到着。オーデトリウム・ホテルに入った。医学博士・高峰讓吉の来訪を受ける。22階建ての高層ビルに登り全市を俯瞰し、7階建ての百貨店に入りその繁盛ぶりに驚いた。
- 5月11日 1893年にシカゴ大博覧会が開催されたジャクソン・パークに赴いた。博覧会時に建てられた美術館の保存活用資金のため富豪マーシャル・フィールドが多額の寄附をしたことを知り、「資産家のあるべき姿」として心を動かされる（*8）。午後、レール製造のイリノイ・スチール・カンパニーを訪問。
- 5月12日 パリ滞在中の西園寺公望が急病の知らせを受けた（*9）。
- 5月13日 ニューヨークへ急行することとし、午前11時シカゴ発のペンシルヴァニア鉄道でニューヨークに向かった。ロンドンにいた本店副支配人の鈴木馬左也はパリに駆け付け、鈴木より春翠に西園寺はさほど重態ではない旨の電報が入る。
- 5月14日 ニューヨーク着、ホテル・マジェスティックに入った。
- 5月15日 日本領事館、ウォール街の正金銀行を訪問。午後はブルックリン橋をケーブル車で渡り、午後7時半ナイアガラ瀑布へ向かう汽車に乗った。
- 5月16日 ナイアガラ瀑布見学。午後6時ニューヨークへ発ち翌朝ホテルに帰着。
- 5月18日 米国貿易商の来訪を受ける。夕刻、セントラル・パークをドライブ。
- 5月19日 ニューヨーク港よりパリス号に乗船して英国に向かった。春翠は当初、ニューヨーク滞在を40日ほどに予定していたが、公望病気の報を受け、1週間足らずのニューヨーク滞在となった。
- 5月26日 英国サザンプトン港に到着。ロンドンのバーリントン・ホテルに入る。
- 5月28日 朝ヴィクトリア駅からパリに向けて出発。午後8時にパリに到着。公望の寓居に近いホテル・グルブに宿をとる。夕食後、ただちに公望の病床に向かった。
- 5月29日 一日中、公望の傍らを離れなかった。公望の看護にはパリの美術商・林忠正（*10）夫妻とその弟が心を尽くして奔走しており、病床の公望の経過も良く春翠は安堵した。

- 6月6日 ヴィクトリア女王のダイヤモンド・ジュビリーに特派大使として出席する有栖川宮親王と随行の伊藤博文が英国よりパリに到着し、一行を出迎えた。
- 6月10日 日本より、春翠が貴族院議員に選ばれたことを受電、ただちに受諾の旨を返電した。
- 6月20日 公望の病状も回復に近く、ロンドンでのヴィクトリア女王のダイヤモンド・ジュビリーの挙行も近いため、パリよりロンドンに向かった。
- 6月22日 ヴィクトリア女王在位60年を祝賀するダイヤモンド・ジュビリーがセント・ポール大寺院で盛大に挙行された。春翠は傍らの建物に設けられた観覧席より、3時間半におよぶ有栖川宮親王と伊藤博文も交じる殿列を見物した。
- 7月3日 伊藤博文の日本への帰国を見送る。
- 7月19日 テームズ川右岸のリッチモンドに行き、ハンプトン・コート、キュー・ガーデンを訪問。各国の樹木を育てる温室に感嘆。
- 8月2日 前日までのロンドン滞在で、工場・造船所・倉庫など巡覧、また大英博物館やウィンザー城など名所を巡り、セント・ジェームス・パークやハイド・パークなどの散策も楽しんだ。また美術・骨董商や書店にも訪れている。
- 8月3日 バーミンガムを経て、リバプールに至った。
- 8月6日 ウィンダーミア湖にて休養する。グラスミアの詩人ワーズワースの家を見学。
- 8月9日 エディンバラにて世界一の大橋であるフォース・ブリッジを見た。
- 8月11日 シュフィールドで海軍兵器製造の工場を訪問、夕刻ロンドンに戻る。
- 8月18日 ロンドンを発ち、パリに再び到着。
- 8月23日 公望快気の祝宴が催され、公望は25日に帰国の途についた。
- 9月1日 パリを発ち、ベルギーのブリュッセルに到着。宮殿・公会堂・万国博覧会他を見学。
- 9月3日 アントワープにて美術館・ドックなどを巡覧。
- 9月4日 ケルン到着。
- 9月5日 ハンブルグに到着。
- 9月7日 ベルリンに到着、ポール・ホテルに宿をとる。
- 9月12日 ベルリンではポツダム宮殿・ステファン寺院など各所を巡り、ドレスデンに入る。
- 9月13日 ウィーンに到着。
- 9月17日 ヴェニスに到着、硝子工場・宮殿などを見学。
- 9月18日 フィレンツェに到着、絵画彫刻の名品に接し、諸寺院を見学。
- 9月20日 ローマに到着。
- 9月22日 ジェノバに到着、ドック・鉄工所などを見学。

- 9月25日 パリに戻る。公使などパリ滞在中に世話になった人々に感謝の宴をもつ。
- 9月30日 パリを発ち、リヨンに到着。
- 10月1日 マルセーユに到着。
- 10月3日 マルセーユ港よりエルネスト・シモン号にて欧州の地を離れる。
- 10月9日 スエズ運河を経て紅海に入った。
- 10月18日 インドのボンベイに到着。
- 10月30日 シンガポール到着。
- 11月1日 サイゴンに到着。
- 11月4日 香港に到着。
- 11月10日 上海に到着。
- 11月13日 午前7時、上海よりシモン号で神戸港に帰国。神戸港では西園寺公望はじめ住友家の一門・重役・神戸支店一同・友人などの盛んな出迎えを受けた。

第2章の2. 1. 5で野口の欧米建築視察巡遊についての記述で、「野口の欧米建築視察巡遊に先立ち大阪の長堀川に面した鰻谷の住友本邸で行われた晚餐会にて、春翠は野口に託する思いと春翠の欧米での経験を野口に語っていたであろう。」と述べたが、上記の春翠の巡遊記録から野口の欧米建築視察の経路につき、推測することが可能である。



(図3-4) 明治38年(1905)11月住友家須磨別邸における西園寺公望を中心とする家族の記念写真。

後列中央が西園寺公望、後列右端が住友春翠。西園寺公望は、翌年の明治39年1月7日に内閣総理大臣に就任しており、この撮影時には、すでにその総理就任が眼中に入っていた頃と思われる。前列右端が家庭教師のリチャードソン夫人。

註

- (* 1) 清華家とは、公家の家格を示すもので、太政大臣になることのできる7家を指し、久我・三条・西園寺・徳大寺・花山院・大炊御門・今出川の7家。
- (* 2) 岩井忠熊著『西園寺公望 ー最後の元老ー』 28頁
2003年 岩波新書
- (* 3) 前掲書 33～37頁
- (* 4) 前掲書 58～61頁
- (* 5) 前掲書 104～119頁
- (* 6) 鈴木博之著『庭師小川治兵衛とその時代』 99～129頁
2013年 東京大学出版会
- (* 7) 住友春翠編纂委員会編『住友春翠』 311～336頁
1955年 住友春翠編纂委員会
- (* 8) 1492年のコロンブスによるアメリカ大陸発見400周年を記念して、シカゴ・ダウンタウンからミシガン湖畔10km南のジャクソン・パークにおいて World's Columbian Exposition(コロンブス万国博覧会、通称：コロンビア博)が1893年に開催された。シカゴの高架鉄道であるシカゴ・ループはその前年に開通した。春翠はこのシカゴ・ループに乗ってジャクソン・パークまで行っている。万博のためにチャールズ・アトウッド設計のパレス・オブ・ファイン・アーツが建てられたが、万博後この建物は、マーシャル・フィールドの寄附によりコロンブス博物館となり保存活用されることとなった。その後マーシャル・フィールドの名を冠したフィールド自然史博物館となり、その博物館は1920年にシカゴのダウンタウンに移転した。その数年後、この建物はシカゴ科学産業博物館となり、現在に至るまで活用されている。なお、このコロンビア博会場中央の大きな池の中の島に日本政府による日本館・鳳凰殿が建てられた。池周辺にはアメリカン・ボザールの新古典様式的な建築が立ち並んでおり、対比的なこの鳳凰殿は注目を浴びた。フランク・ロイド・ライトは鳳凰殿の建築から影響を受けたとされるが、天才肌で自尊心の強いライト本人はこれを否定している。
- (* 9) 高熱を出したため風邪かと疑っていたが盲腸炎と診断された。患部の切開はせずに治療する方法がとられ、これに成功した。
- (* 10) 美術商の林忠正について、鹿島茂著『パリの日本人』
(2009年 新潮選書) では次のように紹介している。
「林忠正こそは、フランスに浮世絵を紹介し、ジャポニズムの隆盛をもたらした当事者であるばかりか、山本芳翠、黒田清輝とパリで親しく交わって、日本近代絵画の成立にも少なからず影響を及ぼした人物である。さらに1900年のパリ万博では日本館の事務官長もつとめ、世界に日本の美術や産品を紹介するのに貢献している。」

林忠正は富山藩から貢進生に選ばれ、大学南校に明治4年（1871）に入学していたが、同じ年度の大学南校入学者に山口半六がいた。両者は再びパリで同じ時期を過ごすことになったが、この時は建築家と美術商となっており、パリで両者は再会していると思われる。林は西園寺に大変世話になっており、林を通じて山口は西園寺の面識を得ていたかもしれない。ただパリの小さな日本人社会で、公使館囑託の西園寺と官費留学生の山口は、林の関与がなくとも面識を得ていたことは充分推測可能である。

図版・写真

（図3-4） 住友史料館所蔵

3. 3 住友春翠の人と美意識

この節では、まず住友家とはどのような歴史によって明治の住友に至っていたのかという春翠が登場するまでの舞台背景を3. 3. 1にて概観する。そのうえで具体的に、野口孫市にも影響を与えたであろう、経営者としての春翠を3. 3. 2で述べ、3. 3. 3にて高い美意識を持った芸術愛好家としての春翠について記す。

3. 3. 1 江戸期から明治期の春翠の住友入りまで

四国の愛媛県 JR 新居浜駅より南東約10kmの深山が連なる山中に、世界的にも稀な大鉱床を有する銅山があった。これが元禄4年（1691）の開坑から昭和48年（1973）の閉坑に至るまで、282年にわたり近世から近代への日本経済のなかで重要な役割を果たした別子銅山である。

江戸時代の別子の銅は、貨幣の原料として東アジアの貨幣経済を支え、長崎貿易の決済商品として遠く欧州まで知れわたっていた。18世紀末の日本は世界最大の銅産出国であり、国内の年間銅産出量5,300tのうち、1,300tを別子銅山が産出していた。この別子銅山は大規模なもので、堀子・銅吹き大工などの鉱山業に直接関わる人々約5,000人に加え、その家族や関係する商人などを含めると約1万人を越す人口を有する大鉱業集落であった。明治26年（1893）には峻嶮な山中を走る蒸気鉱山鉄道も敷設され、住宅・学校はもちろんのこと、病院や劇場まで備わった山上の都市だった。

住友の「銅づくり」は、別子銅山の発見から遡ること約70年前、京都で始まっている。鉱石中の銀・銅を分離抽出する「南蛮吹き」の革新的技術の確立に成功した蘇我理右衛門（1572～1636）の実子で、住友家に婿養子に迎えられた住友家第2代友以（1607～1662）が京都で銅吹業「泉屋」を開業したのが始まりである。寛永7年（1630）に水運の便利な大坂の地に本拠を移し、銅山経営から銅精錬業に至るまで大きな商いを拡げることとなった。寛文年間（1661～1672）には長崎と江戸にも出店を持ち、それ

ぞれ重要な役割を果たし、文化8年（1811）には江戸幕府より住友の苗字と銅山御用達の肩書公許も手に入れている。なお住友の初代は政友（1652年没）であり、僧侶を経て薬舗や出版を営んでいたが、「文殊院旨意書（もんじゅいんしいがき）」という商売の心得を残している。「浮利に走ることを戒め、堅実さを求める」という住友の事業精神はこの政友に始まった（*1）。

明治維新を迎えた別子銅山は、新政府により接収されるという大きな危機に直面した。別子銅山支配人であった広瀬幸平（1828～1914）は、別子銅山の接収に来た土佐藩士・川田小一郎に「新政府がこれを接収し、経験のない者に任せるといふのであれば、それは国益に反する」と説き、川田もその国益を第一とする精神に共鳴し新政府を動かした。慶應4年（1868）住友は別子銅山経営継続の許可を得る。この川田はのちに日銀総裁となった。また生野鉱山にも学んだ広瀬は、フランス人鉱山技師ルイ・ラロックを招聘し「別子鉱山目論見書」を作成させ、蒸気鉱山鉄道も整備した。このように広瀬は、別子銅山の近代化に大きく貢献したのである。また五代友厚とともに大阪経済の立て直しにも尽力し、（*2）大阪商法会議所の副会頭、大阪株式取引所の副頭取にも五代を補佐して就任している。

しかし春翠が住友に迎えられた頃には、別子銅山に大きな問題が起きていた。煙害問題である。明治期になると別子の山林は製錬燃料の供給のため伐採され尽くし、製錬で発生する亜硫酸ガスが環境を汚染するという深刻な問題が生じていたのである。



（図3-5）別子銅山図 明治7年（1874）村瀬雙石画。銅山越と呼ばれる地区を北に向けて描かれている。海際には、新居浜の町がある。上部の瀬戸内海には四阪島も描かれていた。



（上 図3-6）峻険な山中を走る
銅山鉄道
（下 図3-7）第一通洞南口

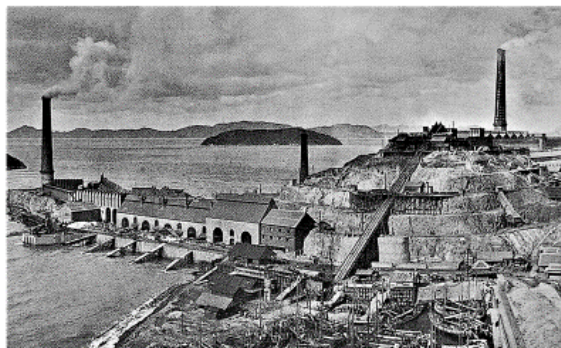
3. 3. 2 経営者としての春翠

春翠は、住友の事業経営を総理事など経営陣に委嘱していたが、重大な問題においては、経営陣に理念と規範を示し、家長でしか成し得ない果敢な決断を行っていた。その様子は、欧州における貴族のあり方「ノブリス・オブリージュ」を思わせるものがある。

経営トップでしか決定し得ない重要事項に「人事」がある。住友家に迎えられた2年後の明治27年（1894）、大きな功績があったものの老年に入りその強烈な自信と個性で別子職員内に批判と対立を起こしていた広瀬幸平を引退させ、広瀬の甥・伊庭貞剛（1847～1926）を支配人とし住友家諸事業を主宰させた。伊庭は広瀬と同じく近江の出身で、明治12年（1879）大阪上等裁判所の判事から、叔父・広瀬の勧めにより住友に入っていた。以後、伊庭は明治37年（1904）総理事を鈴木馬左也に委ねるまで、住友事業の発展に大きく貢献した。伊庭は、人格高潔にして「事業の進歩発展に最も害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である」と語り、58歳で大津石山の野口孫市設計による活機園に隠棲した。伊庭の跡を継ぎ総理事になった鈴木馬左也（1861～1922）は、明治29年（1896）に農商務省参事官より伊庭の勧めで住友入りしていた。鈴木は、住友入社相談をした西園寺のブレンである牧野伸頭に、春翠への強い信頼感を報告している。鈴木は春翠の欧米巡遊にも同行していた。同じく巡遊に同行した吉田真一も帝大法科大学を卒業した住友最初の大卒新入社員であり、品川弥二郎から春翠が紹介を受けた人物だった。春翠は伊庭とともに、優秀な人材を中央政府などに見出して獲得し、また配下の優秀な人材を海外に留学させ育成していた（*3）。まさしく野口孫市は、そのような春翠に住友本店臨時建築部の技師長として見出された人物であった。



（図3-8）新居浜港から銅鉱石を製錬所のある四阪島に運搬するための「曳かれ船」



（図3-9）明治41年（1908）当時の四阪島製錬所

春翠が家督相続して間もない明治26年（1893）9月、別子銅山のある新居浜では製錬所の亜硫酸ガスが農作物を枯らす煙害問題が発生し、農民暴動が起きていた。春翠にとり、事業が民衆に禍害を及ぼし損害を与え民衆の怨嗟の声を聞くことは、最も耐えがたいことであった。伊庭貞剛は、農民との煙害問題が損害賠償だけでは根本的な解決にならないとして、新居浜沖合約20kmの無人島・四阪島への製錬所移転を春翠に上申した。莫大な費用を要するものであり、引退した広瀬幸平は「新居浜をさびれさせてはいけない」と春翠に具陳書を出し移転反対を主張していた。しかし春翠は四阪島を視察し、産銅費用の見積書と移転

上申書を勘案した結果、煙害の抜本的な解決策と思われた四阪島への製錬所移転を裁決した。明治30年(1897)に四阪島製錬所の建設工事に着手し、明治38年(1905)に操業が開始されている。しかしながら四阪島への製錬所移転後でも、亜硫酸ガスの拡散による被害を抜本的に解決するのは困難であった。春翠の死後、昭和14年(1939)になって初めて、アンモニア水で亜硫酸ガスを回収し肥料を製造する技術が導入され、この煙害問題は解決された。なおこの亜硫酸ガスから肥料を製造する技術は、現在の住友化学の源流となっている。一方、荒れ果てた別子の山々には、毎年100万本から200万本の植林が行われ、この植林事業は現在の住友林業の源流となっている(*4)。この四阪島に、住友家接待館として建てられたのが、第6章において述べる「住友家日暮別邸」であった。

3. 3. 3 高い美意識の持主としての春翠

(1) 西洋美術コレクション

欧米の富豪の邸宅や特に英国上流階級によるカントリー・ハウスでは、絵画と建築が混然一体となって邸宅全体としての格調を生んでいた。建築は絵画に場所を与え、絵画は建築にその場所を作り出すインスピレーションを与えるものであった。「様式」とは、ライフ・スタイルそのものである。日本の近代以降の西洋建築様式による邸宅は多くあるものの、建築と絵画が一体となり日常生活の舞台を形成していた例は実は少なかった。邸宅主人の美術に関する教養が伴っていなければ、「本格的な洋館」には成り得なかったからである。

住友家須磨別邸は、西洋美術に高い見識を持つ住友春翠がその邸宅の主人であり、絵画と建築が一体となった「本格的な洋館」であった。当時の日本では稀な「邸宅美術館」と呼べる建築だったかもしれない(*5)。



(図3-10) 住友家須磨別邸広間
階段ホールには、ローランスの絵画が架けられていた。
右上のステンド・グラスは、宇野澤辰雄の製作による。

(図3-11)
ローランス
〈年代記〉
1906年



(図3-12)
鹿子木孟郎
〈加茂の競馬〉
1913年



須磨別邸における春翠の西洋絵画コレクションには、三つのポイントが挙げられる。最初にフランス正統派の作品、次にモネの作品、そして日本人洋画家のコレクションである。

19世紀のエコール・デ・ボザール教授・アカデミー・ジュリアン教授を務め正統的なリアリズムを追求していたジャン・ポール・ローランス（1838～1921）の作品〈ルターとその弟子たち〉が、広間階段の踊り場上に掲げられていた。ローランスは画題を歴史的なものに多く求めており、図に示した〈年代記〉も歴史を主題とした絵画であった。印象派の影響を受けつつもアカデミーの古典的な骨格を備えた次世代のエコール・デ・ボザール教授・ラファエル・コラン（1850～1916）の〈裸婦〉も春翠は所蔵している。春翠の支援を受けて、これらフランス・アカデミズム絵画の収集にあたっていたのは、ローランスの弟子・鹿子木孟郎（1874～1941）であった。鹿子木には春翠より、ヨーロッパでの名画の購入と名画の模写が依頼されていた（*6）。

春翠の印象派絵画コレクションでその購入にあっていたのが、西園寺公望に兄事していた美術商・林忠正（1853～1906）であった（前節註*10）。春翠はパリ滞在中に林から、クロード・モネ（1840～1926）の作品2点を購入した。図に示す1864年作〈サン＝シメオン農場の道〉と1876年作の〈モンソー公園〉である。前者は、モネが1859年にパリに来て数年の作品であり、1865年のパリ芸術アカデミーの公式展覧会であるサロン・ド・パリに初入選する前の作品である。モネは、1874年にサロンとは独立した展覧会を開催し〈印象・日の出〉を出展したが、これが後に第1回印象派展と呼ばれる歴史的出来事となった。後者の〈モンソー公園〉はその直後の作品といえよう。印象派画家・モネがいよいよ世に出始めた頃の作品であった。これらモネの画筆の進展を示す2点を春翠が購入していたのは、現代からすれば画期的なことであったことが分かる。当時の日本でモネを知る人はほとんどなく、当時日本にあった4点のうち2点を春翠が所有していた（*7）。



（図3-13）

モネ 〈サン＝シメオン農場の道〉
1864年

モネ 〈モンソー公園〉
1876年

林忠正は、まだ全く無名だったモネら印象派の若い画家たちに浮世絵を届け、時にモネは自作と浮世絵を林と交換していた。また林は、著名な美術評論家ゴンクールとも親交を結び、ゴンクールの日本美術に関する著作にも多大な貢献を行っていた。林の渡仏は明治10年であり、西園寺の方がはるかにパリ在住の先輩格であった。林は、西園寺の紹介によるものと思われるが有栖川宮や伊藤博文の通訳も務めており、西園寺には大変世話になっていた。林が一家をあげて西園寺の看病にあたっていたのも当然のことであり、その林の献身的な看病に、春翠は感謝の念も込めモネの作品2点を購入したのではないだろうか。

このモネの作品2点は、1階迎賓用大食堂北側の2本の柱によって両脇を区切られたアルコーブ空間の窓両側に、まるでモネの絵2点のために設計したように飾られていた。モネの絵が、野口に空間デザインのインスピレーションを与えたのである。



(図3-14) 黒田清輝
〈朝妝〉
明治26年(1893)



(図3-15) 藤島武二
〈幸ある朝〉
明治44年(1911)



(図3-16) 浅井忠
〈グレーの森〉
明治34年(1901)

春翠に、西洋絵画への関心をもたせ実際に購入し収集家への道へ歩ませたのは、やはり西園寺公望であった。西園寺は明治26年(1893)にフランス留学から帰国していた黒田清輝(1866~1924)の作品を、住友家の家督を相続したばかりの春翠に斡旋した。春翠が最初に買い入れた最初の黒田の作品は、パリのサロン・ド・パリに入選を果たし、明治28年(1895)の第4回内国勸業博覧会でも受賞した〈朝妝(ちょうしょう)〉であった。春翠は、明治31年の白馬会第3会展に出展した〈昔語り〉の製作費も支援し、完成後これを買っている(*8)。

浅井忠(1856~1907)の作品も購入し、浅井が明治39年(1906)に創設した関西美術院の教場建設の費用の大半も、春翠は支援していた。後にこの関西美術院からは、安井曾太郎や梅原龍三郎らを輩出している。浅井は、日本最初の官立美術学校だった工部美術学校画学科でフォンタネージに学び、のち明治美術会を創設して明治洋画を代表する秀

作を発表していた画家であった。東京美術学校西洋画科教授在職中、明治33年(1900)から35年(1902)までフランス留学し印象派や外光派の作品にも直接触れ、完成度の高い油彩画や水彩画を多数生み出した。春翠が購入した浅井作品の一例が、図に示した〈グレーの森〉である。柔軟な感性によって印象派を取り入れ繊細な光への配慮が感じられる潤いのある水彩画である(*9)。

春翠は、藤島武二(1867~1943)の作品も購入していた。藤島は黒田清輝門下の実力者として東京美術学校西洋画科教授で指導的立場にあった画家で、やはり文部省留学生としてパリとローマで学んでいる。〈幸ある朝〉はローマで描かれた作品である(*10)。

これらの温和で親密な画題と情緒的で明るく甘美な表情を持つ春翠の西洋画コレクションからは、春翠の美意識をうかがうことができる(*11)。そして野口の水彩画にも同様の美意識があらわれていた。両者の美意識は、見事に一致していたのである。

(2) 日本美術への造詣と茶人・春翠

欧米の邸宅やカントリー・ハウスでは絵画と建築が混然一体となって邸宅全体の格調を生み出していたが、日本の伝統的な邸宅でも、床の間・屏風・襖絵など美術が据えられる場の形式に則り、美術品と建築は一体となって邸宅の格調を生み出していた。日本では、季節や趣向にあわせ美術品を取り替えるという作法が、欧米の邸宅における美術品の在り方とは大きく異なっている。特に「茶室」という洗練された美意識が凝縮した空間では、掛け軸や茶道具そして生け花などの点景が「その時々」の創意として、その空間を差配していた。

春翠は、西洋美術館のような須磨別邸を作ったように、茶白山本邸という日本美術コレクションを収める伝統的建築も作り上げている。野口孫市は、その設計の初期段階で生涯を終えたが、茶白山本邸は、臨時建築部技師長を引き継いだ日高胖、大工棟梁の八木甚兵衛そして庭師・小川治兵衛によって完成された。



(図3-19) 伊藤若冲
〈海棠目白図〉江戸時代(18世紀)



(左 図3-17) 板谷波山
〈重文・葆光彩磁珍果文花瓶〉大正6年(1917)

(下 図3-18) 宮川香山
〈青華鳳凰形花入〉明治後期



(図3-20) 木島櫻谷
〈菊花図〉大正6年(1917)

茶白山本邸には、床の間が奥向きをあわせ10以上あり、それらすべてが季節や趣によって掛け替えられたため、掛軸の総数も相当な数にのぼっていた。特に幅2mにもなる大幅や三幅対の秀品も幾軸にもわたり所蔵されており、これらは表向きの書院を飾り、来客にあわせ趣向を凝らす用向きに使われていた。一例として伊藤若冲の〈海棠目白図〉をあげているが、近年その見事な筆致で注目を浴びている若冲も明治の時代ではあまり知られておらず、この作品はその若冲の初期の画であった。当時京都の近代日本画界を牽引していた木島櫻谷の、季節の花を上質な金地に趣向を変えて描かれた六曲一双の屏風四双も、茶白山本邸の完成に合わせて製作された。そのほか狩野探幽や狩野正信の画、千宗旦の書など多彩な所蔵も春翠の日本美術コレクションの一端である。春翠は、近代陶芸の巨匠・板谷波山（1872～1963）の重要なクライアントでもあった。また春翠は、宮川香山に江戸期の名工の仁清や乾山に做った作品や祥瑞写しなどを茶会用に依頼し、その香山作品の所蔵も約30点にのぼっていた（*12）。



（図3-22）
〈釉裏紅桃樹文瓢形瓶〉
清時代（18世紀）

（右 図3-21）
村田香谷 〈西園雅集〉
明治37年（1904）



（図3-23）〈文房諸道具〉
前漢時代（前2世紀）
～清時代（19世紀）



煎茶は、幕末から明治にかけて流行していた。中国文人趣味にもとづく煎茶席や、茗筵と呼ばれる複数の煎茶席と盆栽や美術品を一堂に集める煎茶会も春翠は度々開催していた。これは、中国的教養も持っていた西園寺公望、あるいは「春翠」の号を授けた篆刻家・小林卓斎の影響があったといわれている。しかし、なによりも春翠自身が文人的な資質を持っていたことが大きいであろう（*13）。

鰻谷本邸で開催する茗筵や、煎茶界著名人の追善茶会で見事な所蔵品を陳列して煎茶席を設けるなどして、春翠の煎茶趣味は広く知られるところとなり、明治43年（1910）の『大阪時事新報』では、春翠を関西における煎茶の総大将と評していた（*14）。

こうした煎茶趣味を通して、春翠は様々な文人達と交わったが、中でも村田香谷（1831～1916）とは特に深い文雅の交流を結んだ。図の〈西園雅集〉は、住友家に納められた村田の代表作である。北宋の文人貴族王詵の邸宅で、蘇東坡をはじめとする錚々たる文人16人が集まって雅会を開いた様を、濃厚な色彩と細密な筆致で描いている。明や清の時代の山水書画、田村能竹田の書画など多数の名だたる書画も春翠は所蔵していた。

また、春翠愛玩の文房器物も多く、図に示した文房諸道具の〈一角獣形鎮子〉は紀元前2世紀の前漢時代のもの、正面の〈石彫硯屏〉は18世紀の清時代のものである（*15）。なお煎茶席に中国古代青銅器は実にふさわしいものであるが、春翠は、中国古代青銅器の膨大なコレクションも有していた。これについては節を改め詳説する。

明治30年代から40年代にかけて春翠は清朝陶磁器と玉器を大量に購入していた。これらは、煎茶席だけでなく須磨別邸の洋館の調度品としても重宝されていた。机と椅子の生活で使われた清朝工芸は、洋館とも調和し欧米でも人気が高かったのである（*16）。



（左上 図3-24）
〈小井戸茶碗 銘 六地藏〉
朝鮮時代（16世紀）



（左下 図3-25）
〈大講堂釜〉
室町時代（16世紀）

（右 図3-26）
伝閻次平
〈国宝・秋野牧牛図〉
南宋時代（12～13世紀）



春翠の西洋絵画や文人趣味にくらべ、茶人としての素養は若い時から培われたものだった。父は裏千家の高弟に学び清風荘には茶室「保真齋」を建て、茶器の購入や茶室の設えに勤しむなど、公純は茶事を楽しむ生活を送っていた。春翠も、父・徳大寺公純について茶事に親しんでいたのである。13歳で早くも父の茶事の席に列し、15歳の誕生日には自ら手前も披露したといわれる。一方、住友家でも代々裏千家に学び、鰻谷本邸には今日庵を写した二畳台目の茶室好日庵があった。特に13代家長の友親は一翠軒と号して茶事に勤しみ、小井戸茶碗〈六地藏〉を初めとする数々の茶道具も揃えていた。しかし春翠は、住友家入りして明治の終わり頃まで中国文人趣味にもとづく煎茶を嗜んでいた。住友家と

いう新天地で、慣れ親しんだ日本的な茶の湯よりも、中国文物や西洋美術、近代工芸などに興味を惹かれたようだった(*17)。

明治の末年、春翠は50歳代になって再び茶の湯を嗜むようになった。大正6年(1917)に本邸を移すと、春翠の茶の湯は本格化し、鰻谷の好日庵を移築し茶室知足齋の造営も行っている。春翠の茶会で最も有名なものは、大正8年(1919)12月の茶白山本邸の好日庵で行われた友親追善茶会だった。この茶会では、友親の遺した銘器の小井戸茶碗〈六地藏〉を主役とし、この〈六地藏〉にふさわしい茶道具類の収集に心がけた。その一つが室町時代の名品〈大講堂釜〉である。三井の重役であり当代の数寄者として知られていた高橋箒庵の『東都茶会記』「茶白山好日庵」にも取り上げられ、春翠の茶会として最も有名な茶会となった(*18)。当時の日本のなかでも、第一級の茶人として知られていたのである。

春翠は、茶会においては数寄者との清遊を第一とし、道具の収集は二の次としていた。当時の富裕層や財界人のように競って茶道具を買い漁ることもなく、茶道具の収集においても春翠の清らかな茶風が顕れていた。そのようにして偶然のように手に入ったのが〈国宝・秋野牧牛図〉だった(*19)。

(3) 中国古代青銅器と春翠

春翠の収集品のうち、中国商周時代に製作された青銅祭器は、その質と量において、戦前より世界有数の青銅器コレクションとして知られていた。その収集は、明治30年代の早い時期から最晩年に至るまで続けられ、明治期のもの73点、大正期のもの90点がある。さらにそれらを紹介する私家版豪華図録を二度にわたり刊行したという点で、春翠の他分野の美術品とは一線を画していた。

そのコレクションには、商時代後期から西周時代前半期(前13世紀～前10世紀)にかけて製作された精緻な文様をもつ器が多くみられ、多種多様な器が存在し、貴重な歴史史料として評価の高い銘文をもつ器が多くみられる。このコレクションは、極めて体系的で学術的にも価値の高いものであった。

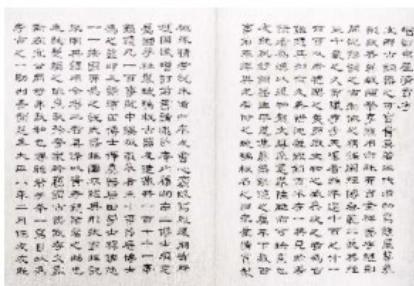
当時の日本では、誰も青銅器の実証的研究を行っておらず、文人趣味に基づいた煎茶の流行の中で飾られる中国文物のひとつとして、青銅器は専ら「古色鑑賞」すなわち表面の色合いの良し悪しを鑑賞する品に留まっていた。このような時代にあって、春翠の青銅器収集・研究は異彩を放つものであった。

私家版豪華図録『泉屋清賞』『増訂泉屋清賞』の序文で、自身の青銅器に対する認識、収集姿勢を記している。明治44年(1911)刊行の『泉屋清賞』の緒言では、中国古代青銅器は三千年にさかのぼる中華古代文明を象徴する唯一の実物資料であると述べていた。また大正8年(1919)に刊行した『増訂泉屋清賞』の序では、単なる美術鑑賞図録ではなく、器の考証を重視する姿勢を鮮明にしたことを表明していた。すべての器に対して

製作年代の考証を行い、銘文は拓本を掲載するとともにその解釈文を載せている。この書は、日本で最初の中国古代青銅器研究書といわれている（*20）。



(図3-27)
左：〈丁冉卣〉
商時代後期
右：〈竊曲文四足盃四足〉
商時代後期



(上 図3-28) 住友春翠筆
『増補泉屋清賞』序 大正8年(1919)
(左 図3-29) 〈夔神鼓〉商時代 前11世紀



(図3-30)
上左：〈鷓鴣卣〉商時代 前11世紀
上右：〈鳳柱斝〉商時代 前11世紀



(右 図3-31)
〈虎卣〉 商時代 前11世紀

春翠の中国古代青銅器のコレクションのなかに、現代中国においても国宝級のものが2点ある。ひとつは商時代後期の〈夔神鼓〉であり、高さ80cmを超える大型品であるにもかかわらず器の肉厚はわずか3mmという極薄で造られていた。当時の鑄造技術水準の高さを示す逸品である。もう一つは、やはり商時代後期に作られた〈虎卣〉である。虎が

尻尾と後ろ足で立ち上がり、前足二本で人を抱きかかえている様子を象った酒を運ぶ器で、虎及び人物の表面全体に均整のとれた文様がほどこされ、その隙間には破綻のない精緻な渦巻地文が充填されている。これも中国青銅器を代表する名品の一つとされている。

春翠の青銅器コレクションの意義は、その質と量には留まらない。春翠は、収集した青銅器を家の宝として秘蔵することなく広く公開していた。中国青銅器に対する認知度を高めようとしていたのである。春翠の中国青銅器収集は、単なる美術品の個人的鑑賞を目的としたものではなく、調査研究を基礎とした中国青銅器に関して啓蒙するという文化事業であった。その意義には高いものがある（*21）。

春翠の死の3年後の昭和4年（1929）、日高胖のもとで長谷部鋭吉が設計した銅器庫が京都有芳園に完成した。西園寺公望の揮毫による「泉屋博古」の額が正面に掲げられている。春翠亡き後も、青銅器の収集と研究は継続され、昭和35年（1960）からは泉屋博古館としてこれらの中国古代青銅器は一般に公開されることとなった。

これら春翠の中国青銅器コレクションからは、春翠の研究者的な気質をうかがうことができる。春翠は、欧米巡遊の間も西洋の建築書を数冊購入しており、西洋建築についても春翠自身の見識を持ち、その研究者の気質を野口孫市に対して示していたであろう。春翠は、建築家にとって単なる「美意識の高い教養ある施主」には留まらず、何事にもその本質的なところまで理解しようとする施主であった。

註

- (*1) 林和久著『日建設計 115年の生命誌』 10～11頁、19頁
2015年 日建設計
- (*2) 住友グループ広報委員会ホームページ『住友の歴史 広瀬幸平その2』
2017年6月6日閲覧 住友グループ広報委員会
- (*3) 末岡照啓著「実業家としての住友春翠」
公益財団法人泉屋博古館学芸部編『住友春翠 - 美の夢は終わらない』所収
10～12頁
2016年 公益財団法人泉屋博古館
- (*4) 前掲書『日建設計 115年の生命誌』 12～13頁
- (*5) 野地耕一郎・森下愛子著「西洋美術と近代工芸への眼差し」
前掲書『住友春翠 - 美の夢は終わらない』所収 58頁
- (*6) 前掲書 前掲章 63～68頁
- (*7) 前掲書 前掲章 59～60頁
- (*8) 前掲書 前掲章 58頁
- (*9) 前掲書 前掲章 63頁
- (*10) 前掲書 前掲章 65頁

(* 1 1)	前掲書 前掲章	6 5 頁
(* 1 2)	前掲書 実方葉子・森下愛子著「邸宅を飾る日本美術」	1 1 8 ~ 1 2 7 頁
(* 1 3)	前掲書 外山潔著「住友春翠 理想を求め続けた生涯」	1 8 頁
(* 1 4)	前掲書 外山潔著「文人への憧れ」	7 5 頁
(* 1 5)	前掲書 前掲章	7 8 ~ 8 3 頁
(* 1 6)	前掲書 前掲章	8 2 頁
(* 1 7)	前掲書 外山潔・森下愛子著「茶人 春翠」	1 2 9 頁
(* 1 8)	前掲書 前掲章	1 3 0 ~ 1 3 3 頁
(* 1 9)	前掲書 前掲章	1 3 7 ~ 1 3 8 頁
(* 2 0)	前掲書 廣川守著「青銅器収集の道」	8 4 ~ 9 2 頁
(* 2 1)	前掲書 前掲章	9 4 ~ 9 5 頁

図版・写真

(図 3 - 5)	住友史料館所蔵	
(図 3 - 6)	同上	
(図 3 - 7)	同上	
(図 3 - 8)	同上	
(図 3 - 9)	同上	
(図 3 - 1 0)	日高胖編『野口博士建築図集』	
(図 3 - 1 1)	公益財団法人泉屋博古館学芸部編『住友春翠 - 美の夢は終わらない』	6 1 頁
(図 3 - 1 2)	同上	6 7 頁
(図 3 - 1 3)	同上	6 0 頁
(図 3 - 1 4)	同上	5 9 頁
(図 3 - 1 5)	同上	6 4 頁
(図 3 - 1 6)	同上	6 3 頁
(図 3 - 1 7)	同上	1 2 5 頁
(図 3 - 1 8)	同上	1 2 7 頁
(図 3 - 1 9)	同上	1 1 9 頁
(図 3 - 2 0)	同上	1 2 2 ~ 1 2 3 頁
(図 3 - 2 1)	同上	7 6 頁
(図 3 - 2 2)	同上	8 3 頁
(図 3 - 2 3)	同上	8 0 頁

(図3-24)	同上	131頁
(図3-25)	同上	131頁
(図3-26)	同上	138頁
(図3-27)	同上	91頁
(図3-28)	同上	95頁
(図3-29)	同上	89頁
(図3-30)	同上	91頁
(図3-31)	同上	90頁

3. 4 三井・三菱との比較

住友の創業は江戸期に遡れるものの拠点は関西であり、東京の三井や三菱に比べれば明治期の財閥としては後発であった。三井や三菱においてもその建築家たちとの関係においては、住友と同様に施主の存在には大きなものがあり、住友の特徴を理解するうえで、他の2つの財閥における施主と建築家の関係を概観したい。

三菱では、明治18年の岩崎彌太郎の死後を引き継いだ弟の2代目総帥・岩崎彌之助(1851~1908)が、コンドルや曾禰達藏など三菱の建築家たちのパトロンに相当する。また三井では、若い時にアメリカ公使館に勤務し公使のハリスから英語を学んだ大番頭の益田孝(1848~1938)がいた。茶人としても鈍翁という号を持つ教養人だった益田は、三井本館の設計者として米国のプラグマティズムの理解者・横河民輔を選んでいる。

住友春翠が、岩崎彌之助や益田孝と異なる点が二つある。その一つは、春翠が勤王の公家の父・徳大寺公純から書画を含む東洋的教養と思想を学んでいたことである。幕臣であった益田や渋沢、そして兄・彌太郎とともに土佐の下級郷土から叩き上げた岩崎彌之助など、明治維新の激動の只中にあった人々とは、春翠の生い立ちに大きな違いがあった。春翠は、いわば生まれながらの「貴族的文化人」だったのである。もう一つは、その世代にある。住友春翠は1864年に生まれ、明治後期という日本近代化の本格的な始まりとなった時代に成人期を迎え生きた人だった。その明治後期という西洋文明の移入を俯瞰的に見る余裕が生まれていた時代の人であった春翠は、明治の第1世代ともいえる岩崎や益田とは異なる世代に属していた。もちろん春翠の世代として、三井にはマサチューセッツ工科大学を卒業した団琢磨(1858~1932)、三菱にはペンシルヴァニア大学ウォートン・スクールを卒業した岩崎久彌(1865~1955)がいたが、財閥草創期の「長」としての意味合いでは岩崎や益田に近く、その財閥の建築に与える影響力は岩崎や益田に近かった。しかし世代としては、明治後期に属していた。春翠は、日本の近代化が地に足をつけて着実に歩み始めた時代の人であり、「日本という自信」が生まれ始めた世代と言えるかもしれない。

三井が両替商から金融業そして商社に進展し、三菱が海運・造船業から商社・不動産業に発展したのに対し、住友の出発点は別子銅山などの鉱山業と銅をはじめとする製錬業にあり、製造業すなわち「ものづくり」が住友の原点にあった。製造業の基盤は「技術」にある。住友は江戸時代の創業以来、「技術」を基礎に発展していたのである。建築も「技術」が集成されたものであり「ものづくり」である以上、住友の重要な建築の設計・建設を担う臨時建築部は、自前の技術を基礎に発展すべきものでなければならなかった。住友には外部の人間に設計や建設を委託する発想は全くなく、いわゆる「住友の自前主義」が何事にも貫かれていた。明治7年（1874）にフランス人鉱山技師ルイ・ラロックを招聘した時も「別子鉱山目論見書」を作成させた翌年、住友はラロックを帰国させ、その別子銅山の将来計画書は日本人技術者の手で実行に移されている。

ちなみに当時の設計や建設工事は、官庁や財閥の重要建築においては直営方式で行われていた。施主のなかの担当部局が設計し、工事段階ではその担当部局が、基礎・煉瓦・石・大工・鉄骨等主体工事、電気や暖房等設備工事、内装などの工事を区分して各専門施工者に発注する方式だった。また施主自ら、主要資材を吟味の上で調達・支給し、各請負者の間を調整しつつ施工を監督して工事を完成させるものだった。野口が技師長を務めた住友本店臨時建築部も、当然ながらこの直営方式で設計と建設を進めている。

三井においても、横河民輔が明治25年に三井組嘱託となり明治28年（1895）には三井財閥の三井元方の技師長待遇で入社し、三井関連企業の設計と建設に携わっていた。三井は、後に関東大震災後の三井本店の建て替えにあたり、設計は米国の建築事務所トローブリッジ・アンド・リヴィングストンに依頼し、工事は米国で一流の建設会社であったジェームズ・スチュアート社に発注している。三井は海外の技術を直接的に導入することに積極的であった。

三菱は、明治23年（1890）軍の練兵場であった丸の内一帯の土地を政府より入札払下げを受託することに成功し、同年、現在の三菱地所設計の源流である「丸の内建築所」を設置し丸の内一帯の開発に着手した。それまで三菱ではコンドルを建築顧問としていたが、この時に招聘されたのが海軍技師だった曾禰達蔵であった。コンドルと曾禰は、明治27年（1894）に三菱1号館を完成させ翌年には三菱2号館を竣工させている。以後、曾禰が中心となり7号館まで建設することとなった。大正2年（1913）には、英国で日本人として初めてRIBAの建築家資格を取得し帰国後は海軍技師として活躍していた桜井小太郎（1870～1953）が、三菱合資会社地所部に入社し三菱の設計陣を代表する建築家となった。三菱は、桜井小太郎率いる設計部局が設計した丸の内ビルディングや、曾禰中條建築事務所が設計した郵船ビルディングの建設を、工期の大幅短縮のためニューヨークのフラー社に発注している。

住友では野口を技師長とする住友本店臨時建築部がすべての設計と建設を常に担当していた。海外の設計事務所や建設会社を使っていた三井や三菱との比較からは、住友の自前

主義をみることができる。春翠を中心とする住友内部での臨時建築部によせられた期待には、このように揺るぎないものがあったのである。

3. 5 住友本店臨時建築部の創設

野口孫市は、住友入りをして住友春翠に出会わなければ、逋信省の建築家として別の道を歩んでいただろう。そして春翠をはじめとする住友の重役たちが住友本店臨時建築部を創設しなければ、住友に招聘されることもなかった。建築家としての野口を考えるうえで、住友本店臨時建築部の存在は不離一体の関係にある。野口孫市が海外巡遊から帰国した後、ただちに住友本店臨時建築部が創設されたが、ここではその創設の経緯と背景を記す。

住友本店臨時建築部は、明治28年(1895)に尾道において開かれた住友家第1回重役会議において決議された「住友本店・銀行本店の建設」に伴って創設されたものである。3.5.1においてその尾道会議について記し、3.5.2にて住友本店臨時建築部の設立について具体的に記述する。

3. 5. 1 尾道会議と住友銀行の設立

尾道は、江戸時代から瀬戸内海を行き来する北前船が立ち寄る西日本屈指の湊町として栄えていた。朝鮮通信使の中継地として尾道の千光寺が通信使の客館として使われており、また広島銀行の前身である第六十六国立銀行も明治11年(1878)に尾道で創業していたことから、尾道は瀬戸内海の海上交通や流通経済の拠点であったことが分かる。

江戸時代の住友家は、銅鋳山業・銅精錬業を主な事業とするかたわら、長崎を通じて銅の輸出や外国産品の輸入も手がけ、また両替(*1)掛屋(*2)札差(*3)などの金融業にも進出し、早くから多角的に事業をいとなんできた(*4)。しかし明治維新の動乱期には、住友家はいったん金融業など関連事業を廃止し、別子銅山を中心とする銅産業に専念した。

明治6年、大阪では水運に恵まれた富島町の出店に3棟の土蔵倉庫を設けた。別子などへ送る荷物の倉庫として利用するためであったが、なお相当の余裕があったため穀物問屋から商品の保管を寄託され倉庫業もいとなんでいた。明治7年頃から、この倉庫業で寄託された商品を担保として貸金をおこなう業務も始めている。これを並合業という。明治21年には神戸支店でも並合業を始め、山陽鉄道が開通した明治25年(1892)には、尾道にも支店を設けここでも並合業を始めた(*5)。瀬戸内海の流通拠点に倉庫を持つのは当然のことであった。

山陽鉄道は、明治21年に兵庫・姫路間が開通し、明治22年に兵庫・神戸間が開通した。同年に東京の新橋と神戸間が結ばれたため、東京から姫路までは鉄道が繋がり、明治25年には尾道まで繋がった。なお広島にはその2年後に開通している。従来住友では、新居浜と大阪との往復にはすべて神戸港からの海路によっていたが、山陽鉄道の開通後は尾道と新居浜の間に汽船を往復させ、尾道が新居浜への玄関口となったのである。

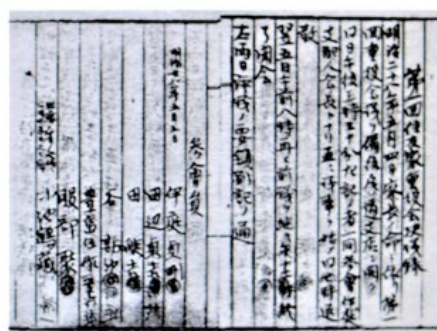
明治5年、紙幣発行特権を有するとともに普通銀行としても営業できる国立銀行制度が発足し、明治12年に新設が打ち切られるまで全国に153行が設立されていた。ちなみに中央銀行である日本銀行の設立は明治15年である。住友も銀行業進出の勧誘を受けたが、広瀬幸平は、旧幕府時代の両替商一般の気風に対し、「座して利を収めるものは商業者の本分にあらず」と銀行業の進出には応じようとしなかった。またこの当時は、別子銅山の近代化に全力を注いでいた時期でもあり、銀行設立の余力はなかった(*6)。

しかし並合業は順調に融資拡大を続けており、明治27年には融資残高が百万円にまで増加し、住友家における銅に次ぐ大きな事業となっていた。明治28年の日清戦争終結後、平和な時代になると企業の設立ブームが起き、鉄道や貿易などの新規設立企業からの資金需要が増大し、銀行設立の機運が高まっていた。しかしその融資資金を全額自己負担で賄うのは既に限界に来ていた。並合業の発展が限界に達していたのであり、是非とも銀行への改組が必要な段階に来ていた。この時期、住友家では春翠が家督を相続し広瀬幸平が引退していたが、これも住友銀行を設立するうえでは幸いした(*7)。

図3-33で示した書類は、明治28年(1895)に開かれた、後年「尾道会議」と呼ばれることとなる住友家第1回重役会議の決議録の冒頭部分である。「明治28年5月4日家長の命に依り第1回重役会議を備後尾道に開く」とある。住友春翠が開催を命じ伊庭貞剛が議長となったこの会議で、住友銀行の設立が決議された。その参会員の筆頭には伊庭貞剛の署名捺印があり、その次に初代住友銀行支配人となった田辺貞吉の署名捺印がある。この住友銀行設立決議と同時に決議されたことがあった。それは、住友本店・銀行本店となる建物を「建築工事は数年を期し、充分堅固、百年の計を為す建築」として建設することであった。この決議に基づき、住友本店・銀行本店を建設するための営繕組織、すなわち住友本店臨時建築部が創設されることとなった(*8)。



(上 図3-32) 昭和初期の尾道港



(右上 図3-33)

第1回住友家重役会(尾道会議)決議録

(右下 図3-34)

尾道会議が開かれた住友家尾道支店
並合業のための倉庫群があった。



3. 5. 2 住友本店臨時建築部の設立

明治33年(1900)3月13日、野口孫市が海外巡遊より帰国した。その翌日の3月14日、囑託の立場であった野口は住友に正式に採用され、明治33年6月1日、住友本店臨時建築部が設立された。技師長には野口孫市、技師には日高胖が就任し、他の職員については、明治34年1月31日現在の職員録で以下次のように記されている(*9)。

技手 : 金子新蔵、弓削鹿次郎(工手学校卒)、佐藤彰美(工手学校卒)、杉四郎
西山良太郎(工手学校卒)、光安梶之助(工手学校卒)、伴綽、
山本文助(工手学校卒)、村田正美(工手学校卒)、浅井定次郎、
中村実三(工手学校卒)、藤井與作(工手学校卒)、小原友輔(工手学校卒)、
井上準一郎(工手学校卒)、杉江逸(工手学校卒)、小寺弥一(工手学校卒)、
土木課兼務 技手: 大島操、丸山廉吉
須磨建築工場 技手: 田中勳(工手学校卒)
土木課: 長谷川仙之祐、高岩静(工手学校卒)、小池幸太郎、設楽貞一

住友において、臨時建築部が設立された目的は前述のとおり住友本店・銀行本店となる建物を建設するためであったが、最初に着手された仕事は、大阪図書館と須磨別邸だった。また住友各事業の著しい発展のため、銀行支店をはじめ倉庫・金属・電線などの工場の新増設の必要が優先された。明治41年(1908)に住友総本店仮建物が竣工しているものの、本来の臨時建築部設立の目的であった住友本店・銀行本店となる建物の設計に着手したのは、野口の死後5年を経過した大正9年(1920)のことであった。

「臨時」という文字が示すとおり、本来の目的である住友本店・銀行本店が完成した時点で、この設計組織は解散することを前提に設立されていた。当時では、重要なプロジェクトごとに「臨時」の建築部をつくるのが一般的な方法であった。国の事例として、国会議事堂の大蔵省臨時議院建築局や日本銀行の臨時建築部などを挙げることができる。日本銀行増築のために設立された長野宇平治率いる日本銀行臨時建築部は、その名のとおり昭和13年(1938)に解散している。

明治42年(1909)住友は、本店と銀行本店の区別を分かりやすくするため、住友本店から住友総本店と名称を改めた。建築関係の仕事の品質の高さで住友の内外に知られるところとなっていた臨時建築部は、明治44年(1911)住友総本店営繕課に改組された。「臨時」の文字が消え常置の設計監理組織となったのである。

(図3-35)は、住友本店臨時建築部一同による明治36年(1903)頃に撮影された集合写真である。その創業時の事務所となっていたのは旧・徳島藩蔵屋敷長屋門であったが、そこには「住友本店臨時建築部」と墨書された大きな表札が写っている。住所は、大阪市北区玉江町一丁目百四十番であり、堂島川玉江橋の西側で現在のリーガロイヤルホテル大阪の敷地東北の隅に位置していた。



(図3-35) 住友本店臨時建築部一同
前列左から3人目が野口孫市、その右隣が日高胖

この写真では、野口孫市自身が中央に写るのではなく日高を中央に位置させている。臨時建築部では折にふれ記念写真を撮影していたが、(図3-36)や(図3-37)の集合写真でも、野口と日高は部員一同の後方に位置して写っていた。これらの写真からは、野口が建築部員全体を協働者として重んじていた姿勢をみることができるのではないだろうか。以下、その創業当時の建築部員について記す。

日高胖は明治8年(1875)9月東京に生まれ、父は幕府直参旗本の日高吉三郎為善であった。父は24歳で御徒士奉行になり、安政6年(1859)の条約批准交換の際、遣米特使外国奉行らと米艦ポーハタン号にのり太平洋を横断し米国に渡っている(*10)。日高胖は、明治30年に仙台の第二高等学校を了え、東京帝国大学工科大学建築学科を明治33年7月に卒業し、臨時建築部創業の1か月後、住友に入社した。野口孫市が亡くなるまで野口を補佐し、野口の死後は臨時建築部技師長を引き継いだ。日高の野口に対する敬慕の念は深く、野口の死後『野口博士建築図集』を編集している。あたかも野口が恩人・山口半六のために『山口博士建築図集』を編集した如くであった。大正11年(1922)には、日高率いる臨時建築部が、大阪図書館の両翼部の増築を設計し完成させた。また、住友家茶臼山本邸、日本橋の住友銀行東京支店も野口の設計着手の後を引き継ぎ、完成させている。京都の住友家有芳園など日高の設計になるものは多いが、大正9年に始まった住友ビルディングの設計では全設計の監督および校査者として、長谷部鋭吉・竹腰健造による仕事を見守っていた。昭和6年(1931)に定年退官するまで31年間勤務し、住友営繕の名声をさらに高めた功績には大きなものがあつた。日高胖は、明治41年(1908)と大正7年(1918)の2回欧米視察に派遣されており、2度目の米国訪問では、当時のアメリカ建築家協会会長や米国建築界の最高峰であつたキャス・ギルバート、そしてマッキム・ミード・アンド・ホワイトの建築家たちとも晩餐・懇談している。また日高

は、構造設計に関する講演も建築協会で行っており、国際的な視野を持ち「技術」に重きを置く建築家であった。このことは野口と日高に共通する特徴である（*11）。

冒頭に記した明治34年の職員録では、技手など23人中14人が工手学校を卒業していた。工手学校とは、帝国大学総長の渡辺洪基や辰野金吾など工科系教授陣が、「日本の工業の隆盛を図るには、確かな技術教育に基づいた技術者の養成が必要である」という趣旨のもと、私費を出し合って設立した学校で、土木・機械・電工・造家・採鉱・冶金・製造舎密・造船の8学科からなる、中堅技術者育成のための日本最初の私立による工業実業学校であった。工手学校は、明治20年（1887）に創立、翌年に開校され、現在では工学院大学となっている。辰野金吾は同校造家学科の教務主任としてその教科課程を整備するなど尽力し深く関与していた。この工手学校造家学科には、意匠のみならず技術面・施工面を一体として考える辰野の思想がよく反映されていた（*12）。辰野は、日本銀行本店の直営工事において自ら工手学校で育てた卒業生を現場に従事させており、その辰野が育て上げた人材に山本鑑之進と久保田小三郎の二人がいた。工手学校第3回卒業生である久保田小三郎については、「2. 3. 1 明治生命保険大阪支店の設計」で記したとおり、山口半六のもとで明治生命大阪支店を完成させ、その後山口設計の「百三十銀行」の現場監理の仕事に従事しその完成後、住友本店臨時建築部に入社した。しかし大阪図書館の完成後は実質上、師・辰野のもとに帰っている。工手学校第1回卒業生の山本鑑之進も日本銀行本店工事の竣工後、関野貞設計の日本生命大阪旧館（1902年竣工）の工事監理の仕事に従事し、その完成後、住友本店臨時建築部に入社した（*13）。（図3-35）の写真には、この二人も写っている。山本は中列左から3人目、久保田は右から4人目である。工手学校の卒業生には、後に住友ビルディングの構造主査を務めることになる光安梶之助ほか多くの人材が、創立当初の住友本店臨時建築部に入社していた。

一人異色の人材がいた。2. 1. 1の工科大学造家学科の教授陣で記した木子清敬の次男・木子幸三郎である。明治7年（1874）東京赤坂に生まれ、明治34年東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、同年住友本店臨時建築部に入社している。臨時建築部では、主に須磨別邸の内装関係の図面に従事していた。（図3-36）の明治34年10月の須磨別邸の上棟式の臨時建築部一同の記念写真には写っている。しかし翌年、志願兵として入隊。除隊後は、東宮御所造営局に勤務し、明治40年（1907）には、父・清敬のいた宮内省内匠寮技師に任命された。木子家には、伝来の江戸中期以降の近畿地方寺社や御所などの図面そして明治宮殿や明治期の洋風建築など建築関係資料29,000点が残されていた。現在は、東京都都立図書館に寄贈され木子文庫となっている。このなかに、木子幸三郎がコピーして持ち帰った大阪図書館や須磨別邸の図面や写真が入っていた。これらは、現在に残る貴重な歴史的建築資料となっている。

このように住友本店臨時建築部には、多彩で当時の優秀な人材が集められた。創立当初からここまでの人材を揃えるには、辰野金吾の助力なくしては不可能であったと思われる。



(図3-36) 明治34年(1901)10月1日
住友家須磨別邸上棟式当日の臨時建築部一同記念写真
野口孫市は最上段部の左端、その右隣が日高胖



(図3-37) 明治37年(1904)2月末~3月始
大阪図書館開館当時の臨時建築部一同記念写真
野口孫市は中央奥円柱の下部前面、その左が日高胖。

註

- (* 1) 両替とは、異種の通貨間あるいは同一通貨で異なる単位の紙幣・硬貨を手数料を取り交換すること。
- (* 2) 諸大名は蔵屋敷を設け領国で産する米や物産物を売りさばいていたが、その売却、代金の收受および送金を委任された町人が掛屋と呼ばれていた。
- (* 3) 札差とは、旗本や御家人の扶持米の管理・販売を委託されるとともに、これを担保にして融資業務も行う業者のこと。
- (* 4) 住友銀行行史編纂委員会編『住友銀行百年史』 6~8頁
1998年 住友銀行
- (* 5) 前掲書 20~22頁
- (* 6) 前掲書 26~27頁
- (* 7) 前掲書 28~32頁
- (* 8) 前掲書 42~46頁
- (* 9) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』 14~16頁
1991年 創元社

- (* 1 0) 坂本勝比古著『日本の建築 明治・大正・昭和〈5〉 商都のデザイン』
1 2 3 ~ 1 2 8 頁
1 9 8 0 年 三省堂
- (* 1 1) 林和久著『日建設計 1 1 5 年の生命誌』 2 0 ~ 2 1 頁
2 0 1 5 年 日建設計
- (* 1 2) 河上眞理・清水重敦著『辰野金吾—美術は建築に応用されざるべからず—』
2 0 1 5 年 ミネルヴァ書房 1 0 6 ~ 1 0 7 頁
- (* 1 3) 工学院大学建築学部同窓会誌編集部編
『工手学校—日本の近代建築を支えた建築家の系譜—工学院大学』
2 0 1 2 年 工学院大学建築学部同窓会 3 6 ~ 5 1 頁

図版・写真

- (図 3 - 3 2) 尾道学研究所蔵
- (図 3 - 3 3) 住友銀行行史編纂委員会編『住友銀行百年史』 4 6 頁
- (図 3 - 3 4) 前掲書 4 3 頁
- (図 3 - 3 5) 住友史料館所蔵
- (図 3 - 3 6) 東京都立図書館 木子文庫所蔵
- (図 3 - 3 7) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈

第2部 野口孫市の建築術



第2部 野口孫市の建築術

序章にて建築術とはその営為を行う「主体」と不離の関係にあると述べ、第1部では野口孫市という「人」に焦点を当てた。第2部では、具体的に野口孫市の建築術そのものについて分析・考察を進める。

野口の作品は、結章の「補一 野口孫市の作品一覧」で26作品を示しているが、この第2部では、なかでも住友家須磨別邸、中之島図書館、日暮別邸そして野口の設計による和風住宅建築をとり上げる。これらの作品を選択した理由としては、序章の「0.5.2 野口孫市の建築術（第4章～第7章）」で述べたように、野口を最もよく理解する日高胖によって編纂された『野口博士建築図集』の考え方を基礎としている。『野口博士建築図集』では、総図番数78枚のうち住友家須磨別邸に47枚を当て、中之島図書館に17枚を当てており、計64枚を用いてこの2つの作品を紹介していた。明らかに日高は、この2つの作品を野口の代表作品として考えていたことが分かる。

一方、日暮別邸について日高は『野口博士建築図集』の追悼文のなかで、住友家別子鉦業所接待館という正式名称で記載しているのみであった。しかし日暮別邸は、このプロジェクトの背景から、当時としては極度に装飾を削り落したいわば「近代工業の島であること」を宿命とする建築となっていた。日高の時代としては特殊な建築であったかもしれないが、現代の視点から見れば歴史的な重要性を認めることができる。

第4章から第6章までは、野口の洋風建築をとり上げている。しかし野口の卒業論文からも認められるように、野口は「日本であること」にも大きな重点を置いていた。第7章では、野口の設計による和風住宅建築をとり上げる。

序章にて建築術は、「建築技術」と「建築思考」から成立しているとした。「建築技術」についてはかろうじて残されている設計図面や仕様書から分析・考察をすることは可能であるが、「建築思考」については、野口自身が書いた文章は卒業論文以外には残しておらず、野口の「建築思考」を野口の文章から辿ることはできない。野口は、住友本店臨時建築部という設計組織を率いた「実践の人」であって、建築理論を文章に残すような建築家ではなかった。野口が残した建築作品そのものを体験することから始め、野口の日記の断片やスケッチそして図面を分析することから、野口の「建築思考」を推測する方法をとっている。

建築技術

野口が初代技師長を務めた住友本店臨時建築部は、単に建築設計のみを行う組織ではなく、住友本店の直営工事方式によって行われる建設工事の施工も統括する組織だった。直営工事方式とは、発注者のなかの担当部局が設計し、工事段階ではその担当部局が、基礎・煉

瓦・石・大工・鉄骨等主体工事、電気や暖房等設備工事、内装などの工事を区分して各専門施工者に発注する方式であった。また施主自ら、主要資材を吟味の上で調達・支給し、各請負者の間を調整しつつ施工を監督して工事を完成させていた。そこでは、具体的に工事を遂行する職人に対し施工方法を充分伝達できるものでなければならなかった。高い建築技術水準の保持が必要であるとともに、工事監理者としての統括能力も必要とされたのだった。

その建築技術についての記述を試みる。野口が生きた時代の建築技術は過渡期にあり、構造技術で言えば、伝統的構法である木構造技術が脈々と継承されるなかで、組積造から鉄骨構造や鉄筋コンクリート構造への移行期にあった。この観点からも、構造方式や材料そして工法などについて各章にて記述を行う。研究方法としては、断片的に残された工事仕様書・設計図面・工事写真・建築写真そして住友史料館に残る文献などから行うものである。ただ研究対象としたそれぞれの建築技術について、その資料に制限があったのは事実である。中之島図書館は竣工後110年以上を経過しているため原設計図はほとんど現存せず、須磨別邸は戦災で焼失している。また和風住宅建築はいずれも現存しておらず残された図面も僅かという制約があった。中之島図書館と日暮別邸については、現在に残されている建築物から建設当時の建築技術を理解することに務めている。ただ須磨別邸については、残された図面や写真から具体的に須磨別邸の復元模型を作成する機会を得たことが建築技術を理解する基礎となっている。建築技術については、このように現在利用可能な資料から組み立てて行ったものである。

建築思考

建築史家の加藤耕一はその著書『ゴシック様式成立史論』で、建築史学の方法論について下記のように述べている(*1)。

建築史学におけるもっとも重要な歴史資料は建築遺構そのものである。その建築を建設する際の、石材を積み上げていく過程を追体験するようにして、すなわち建設のプロセスに従って建築の全体像を歴史的に理解することが、こと建築史学においては可能ではなかろうか。(中略) 建築作品の場合には、その表現行為、構築行為そのもののなかに歴史主体の設計意志が強く反映されており、その追体験による理解は、これまでの解釈学的建築空間論とは本質的に異なるものになるであろう。

野口が、明治後期から大正初期の時代に、前記の建築技術を使って何をどのように考え建築を設計し建築を作りあげていたのかという思考や方法も、野口の「建築術」のもう一つの大きな側面であった。この野口の建築思考についての研究方法の原点は、上記で引用した文章の「追体験」にある。中之島図書館や日暮別邸では、現在にまで残された建築物を実際に体験し、そこから野口の建築思考を追体験することを出発点とした。また須磨別邸では、復

元模型を作成することで、あたかもその場にいるような疑似的な追体験を出発点としている。この追体験については、明治という時代の社会的・文化的な文脈のなかにその主体を置くことがその意味を理解するうえでの必須条件となる。従って各章では、各プロジェクトの背景を詳細に記述している。なお研究方法としては、当然のことながら利用可能な建築図面や建築写真も使いながら分析・考察を進めた。

一般的な建築作品の分析については様々な方法があるが、ここで試みるのは作品分析というよりも、野口の建築的思考の軌跡を辿ることによって、その建築術が何であったのかを探ることである。その野口の建築思考を一文で述べるならば次のようになると考える。

①建築的思考モデルとしての基本骨格を組み立て、②あらゆる建築手法・建築技術を採用入れ編集再構成し、③人々にとって価値のある場所の意味や性格を生み出した。

①野口は、幾何学に代表されるような図式的モデルをまず仮説として形成し、その建築の骨格をその建築が成立すべき文脈のなかで作り出した。②そして野口が学習・研鑽や海外建築視察巡遊で自家葉籠中のものとしていた西洋のあらゆる建築手法や慣れ親しんだ日本の建築手法の武器庫のなかからその状況に最も相応しい手法を選び出し新たな文脈で再構成し、また当時の先端的な建築技術を駆使した。そのようにして、③野口が卒業論文で重視した“Comfort” “Durability” “Beauty” “Sanitation”といった性能や、「都市のなかの象徴性」といった夫々の建築が達成すべき場所性や意味、言い替えれば「経験の器」として建築がどのような価値を人々に提供できるかを追求したのだった。

第2部は下記の四つの章から構成し、建築術がどのように現れていたかを分析・考察する。

第4章 住友家須磨別邸 —日本人にふさわしい洋館を—

第5章 中之島図書館 —場所と幾何学—

第6章 日暮別邸 —簡素であること—

第7章 野口孫市の設計による和風住宅建築

註

(* 1) 加藤耕一著『ゴシック様式成立史論』 31頁
2012年 中央公論美術出版

第4章 住友家須磨別邸 – 日本人にふさわしい洋館を –

野口孫市が住友本店臨時建築部の初代技師長として、最初に同時に取り組んだ二つの仕事が、中之島図書館と住友家須磨別邸だった。野口は、須磨別邸をはじめとして住友幹部等の住宅を設計しているが、なかでも須磨別邸は規模や質において群を抜く建築であり、第4章では、この須磨別邸を中心に野口の邸宅建築に見られる建築術に焦点を当てる。

第1部の「2. 1. 3 野口孫市の卒業論文」で紹介したように、野口は日本の気候と日本人の生活習慣に立脚した西洋建築のあり方を目指していた。その具体例として野口は、耐力上の問題で開口部を大きくとることができない西洋建築の組積造と、日本人が木造建築で培われた外部空間への開放性に快適さを見出すという生活習慣を両立させる手法として、ベランダ・ベイウィンドウ・バルコニー・塔などの効用を提案していた。また論文では、“inglenook”という言葉は使っていなかったが、明らかに暖炉による“inglenook”の「快適さ“Comfort”」についても丁寧に記述していた。“Comfort”という言葉は、野口の論文のなかで重要な意味を持つ概念として使われている。これら野口が卒業論文で提案していた様々な西洋的な建築手法は、須磨別邸において具体的な邸宅建築のなかで実現されていた。

住友家須磨別邸は、野口が卒業論文で目指そうとしていた、日本人にとっての「快適さ“Comfort”」を本格的な西洋建築のなかで真摯に求めようとする邸宅建築として特筆に値するものと考えられる。また野口は卒業論文の“Beauty”の項において、東洋と西洋の両者が統合された建築様式が将来において生まれることもあり得るとし、それは西洋の建築様式と日本建築の単なる折衷を超えるものであろうとしていたが、その東洋と西洋が統合された建築への模索も須磨別邸に見ることができる。

第4章は下記の節から構成する。

4. 1 住友家須磨別邸の概要
4. 2 配置計画における西洋的な建築手法
4. 3 全体構成にみる日本的な建築手法
4. 4 風車型平面計画と3つのゾーニングそして3本の塔
4. 5 “Comfort”という空間性能
4. 6 英国ルネサンス風を基調とした内装デザイン
4. 7 須磨別邸の工法と意匠
4. 8 野口孫市が設計していた他の洋館邸宅群
4. 9 明治期洋風邸宅建築のなかでの歴史的な位置づけ
4. 10 当時の英国の建築的潮流と米国東海岸からの影響

4. 2と4. 3では、野口が中心的な関心を持っていた「西洋」と「日本」をどのように融合させ全体計画を作りあげるのかという課題に対し、野口が見せていた建築手法を分析的に記述する。次に4. 4～4. 6において、野口が卒業論文で重要な扱いをしていた“Comfort”という建築に求められる性能をいかに須磨別邸で実現しようとしていたのかを記述する。これらの「西洋」と「日本」という課題、そして“Comfort”という概念が、第4章の中心的テーマとなる。

序章において、建築術とは「建築技術」と「建築思考」から成るものとした。4. 2から4. 5までは主に「建築思考」に焦点を当てるのに対し、4. 7では「建築技術」に焦点を当てる節としている。

野口は、住友家須磨別邸をはじめとして、住友幹部役員等の住宅も設計していた。それらの役員の住宅の規模や質は住友家の邸宅と比較できるものではないものの、4. 8では、これらの他の洋館住宅建築を概観することで、野口が目指そうとしていた住宅建築のありようを捉えたい。

4. 9では、明治期の洋風邸宅建築のなかで須磨別邸が担っていた歴史的な位置づけにつき、須磨別邸が完成した前と後に時代を分けて概観する。

最後の4. 10では、当時の英国の建築的潮流と米国東海岸からの須磨別邸への影響について補足的に記す。明確な論拠を持って野口が影響を受けていたことを示すのは困難であるが、野口が行っていた同時代の欧米建築の学習と研鑽、そして1年あまりに及ぶ欧米の建築視察巡遊から推測するものである。

4. 1 住友家須磨別邸の概要

4. 1. 1 須磨について

(図4-1)の大正11年(1922)「神戸市須磨舞子全景パノラマ地図」に描かれているように、須磨から神戸にかけての風景の骨格は、六甲山系と瀬戸内海という二つの大きな要素によって形作られている。そして須磨は、その六甲山系と須磨浦が、ほとんど交差しようとする地点にある。

既に「万葉集」の時代、須磨の海人による焼塩(製塩)が繰り返し詠まれていた。須磨の地は、潮の香りとともに都から遠ざかる鄙びた旅情を抱かせる地であった。京都から太宰府へ向かう菅原道真を、土地の漁師が漁に使う綱を敷いて休ませたという綱敷天満宮の伝説も須磨にふさわしい。「源氏物語」須磨の巻は、この地に残る在原行平の故事を下敷きにしていた。さらに源平一の谷の合戦における「敦盛」など数々の物語に彩られた須磨の地には、古来「場所の持つ物語性」に人々の格別の思いが込められてきた(*1)。

明治22年(1889)に神戸からの鉄道が開設されると、山々を背景とする白砂青松の須磨海岸は、その温暖な気候も健康に良いとされ、皇室の離宮や外国商人の別荘などの保養地として有名になった。明治40年に宮内省が土地を入手し大正3年に完成した皇室の武庫離宮も須磨の高台にある。大正4年末の須磨には、外国人28戸63名が居住していたと記録されている。また結核療養などのためのサナトリウムも須磨の地に建設され、野口が療養していた鶴崎平太郎の須磨浦病院もこの地にあった。著名な別荘・邸宅では、西本願寺の大谷家別荘、藤田財閥の別荘、旧三田藩主九鬼邸、日本毛織や川西倉庫の川西清兵衛邸、ドイツの貿易商のデラキャンプ邸などが挙げられる(*2)。



(図4-1) 大正11年(1922) 神戸市 須磨・舞子全景パノラマ地図(部分)

4. 1. 2 須磨別邸の沿革と概要

現在、淡路島へ架けられた明石海峡大橋を望む神戸市立須磨海浜公園の西側の大きなエリアには、第2次大戦前まで、その瀟洒で典雅な姿で人々の賞賛を浴びていた住友家須磨別邸があった。この住友春翠が造営し終生愛した須磨別邸の敷地は、約15,000坪(約5ha)におよぶ広大なものであった。

(1) 須磨別邸誕生の背景

明治22年の鉄道開通で、貴人や富豪の間で、須磨はその邸宅・別荘地として高い関心を集めていた。住友家が須磨にはじめて土地を購入したのは、明治26年(1893)1月のことであった。春翠が住友家に入嗣して半年あまりのことであり、この最初の土地購入についてどれほど彼の意志が働いたかは分からない。しかし、以後も少しずつ用地買収が進められ敷地が大きく拡大したことから考えると、春翠は早い時期からこの地を気に入り、より本格的な邸宅を建設することを志していたと推測できる(*3)。最初に購入した1

300坪には、土地購入と同時に和館が建設された。下の地図は、明治43年時点の須磨別邸敷地を示すが、この時には既に約15,000坪の敷地となっていた。



(上 図4-2) 野口による水彩と鉛筆による須磨海岸のスケッチ画

(下 図4-3) 明治43年測図地形図より 住友邸敷地の西側に網敷天神 右上端図は現在の須磨

上図の野口のスケッチは、生まれ育った姫路と神戸の間にある須磨の風景に絵心を誘われて描いていたものである。住友に入社する前のことであり、まさか自分がこの地で須磨別邸を設計することになるとは思いもよらなかった頃のスケッチであった。しかしこの須磨の地には、人の心を惹きつけるものがあった。そして春翠も、それに引き寄せられるように須磨の地を愛した。

春翠がこの地に西洋風の別邸を建設することを決定づけたのは、明治30年(1897)の7ヵ月にわたる欧米視察であった。英国貴族の邸宅の自然を取り込んだ広大な庭園と品格ある邸宅建築、整然とした生活様式にひかれたといわれる。この欧米巡遊で西洋上流社会の社交や生活儀礼を見聞した春翠が、「西洋上流社会の生活様式による、英国流の国際的社交の場と子女教育の場が是非とも必要である」と痛切に思い本格的な洋館として建てたのが須磨別邸であった。春翠は、欧米流の社交の導入が、住友家のみならず今後の日本のために必要であるとも考えていた。そして明治26年には長女・孝が、明治29年には長男・寛一が生まれている。子供たちに西洋式の教育を施すことも重要と考えていた。春翠には、外遊で経験した欧米文化の長所を積極的に取り入れることで、日本の社会や文化をあるべき姿に変えてゆこうとする毅然とした姿勢を見ることができる。

春翠は、明治33年（1900）に帰朝した野口に、中之島図書館の設計と並行して、この須磨別邸の設計に直ちに着手するよう指示した。野口の欧米巡遊における主な目的は住友本店・銀行本店となる建物調査のためであったが、おそらく春翠は、野口が欧米巡遊に発つ前の明治32年の初頭に、この須磨別邸への彼の強い思いを語っていたことだろう。

（2）須磨別邸の概要

広大な須磨別邸の敷地は、大きく四つのゾーンに分けられる。その西南の須磨海岸に面するゾーンに建てられたのが本館と附属屋であった。ともに洋館である。本館は春翠夫妻の住まいであるとともに迎賓のための施設でもあった。一方、附属屋は子供たちと英国人家庭教師・リチャードソンのための住まいと学習の場であり、その建物も本館に比べ質素なものとしていた。このゾーンは西邸と呼ばれていた。

本館は、木造2階建半地下1階で、屋根は天然スレート葺き、外壁は日本で最初に輸入メラル・ラスを用いたモルタル仕上げで、延床面積は地上部のみで161坪・530㎡であった。附属屋は、同じく木造2階建で、屋根は天然スレート葺き、外壁は下見板張りのペイント塗装仕上げ、延床面積は67坪・220㎡であった。



（図4-4） 住友家須磨別邸復元模型 本館および附属屋（右端） 上部に温室が写っている

本館は、明治33年（1900）9月に現地に建築工場が開設され、上棟は明治34年10月であり、明治36年（1903）4月に竣工している。附属屋は、明治36年9月に

上棟し、同年12月に竣工した。設計の開始は、臨時建築部が創設された明治33年6月であり、中之島図書館と同じく直営方式で建設工事は行われ、設計と工事が並行して進められた。春翠は、ロンドンで植物園キュー・ガーデンの温室を訪れていたように西洋園芸にも深い関心をよせており、この須磨の敷地には、関西随一とされるボイラー設備を持つ47坪・155㎡の温室が建てられていた。

4. 1. 3 関西の迎賓館として

竣工以来、本館と庭園を会場に、外国領事など内外の要人たちや、近隣の須磨に邸宅を持つ名士達そして住友の職員まで様々な客人を招き園遊会が催された。「住友の紳士招待会」は、当時広く知られた社交の場で、須磨別邸は関西の公的迎賓館のような役割をはたしていた。招待されたある外国領事は「住友家の尽力によって、国の内外にわたる人々の親和が促進された」と述べている。外国要人が訪れたときには眼前の須磨海岸で漁師たちによる地引網を披露し喜ばせていたように、春翠のホスピタリティが客人に伝わるようなもてなしを行っていた。

なかでも重要な来賓が、大正7年(1918)7月に来臨した英国王室ヴィクトリア女王の三男であるコノート卿アーサー王子(通称:コンノート殿下)であった。コノート卿アーサー王子の4度目の来日であったが、須磨別邸において行われた歓迎の様子が英国の記録フィルムにも残されている。このときも地引網が披露された。

このほか、明治38年の英国東洋艦隊将校一行、明治44年の米国鉱業家一行来日の歓迎園遊会などを含め、外国領事歓送の宴や来日外国要人歓待の宴など枚挙にいとまがない。これらからは、春翠の国際関係への強い使命感をうかがうことができる。

大正8年(1919)11月には、皇太子時代の昭和天皇が、播磨での陸軍大演習のため須磨別邸を宿所とされ、庭には記念の松をお手植えされた。現在もそのお手植えの松は残っており、空に聳える大きな松に育っている。また、春翠の実兄である西園寺公望も、この須磨別邸を好みしばしば逗留していた。第3章の(図3-4)の西園寺公望を中心とする家族の記念写真にあるとおりである。

昭和20年(1945)6月15日、第2次大戦の神戸大空襲により、須磨別邸は春翠が収集していた名画コレクションともども全焼した。昭和22年には神戸市に須磨別邸敷地は寄贈され、昭和26年に神戸市須磨海浜公園として開園した。現在、この地には、国道に面した門柱の一部と石垣、海岸沿いの石垣、海岸に降りる石段および石造腰壁、海岸に面する四阿の石造基壇などが残るのみである。



(左上 図4-5) 現在の須磨海浜公園より淡路島に架かる明石海峡大橋(青印)を望む
 (右上・左下 図4-6) 現地に残る須磨別邸の遺構
 (右下 図4-7) 現在の皇太子お手植えの松と石碑

註

- (* 1) 神戸市立博物館編
『須磨の歴史と文化展 -受け継がれる記憶-』図録 58～59頁
2016年 神戸市立博物館
- (* 2) 前掲書 126頁
- (* 3) 公益財団法人泉屋博古館編 『住友春翠 -美の夢は終わらない』 36頁
2016年 公益財団法人泉屋博古館

図版・写真

- (図4-1) 神戸市立博物館編『須磨の歴史と文化展 -受け継がれる記憶-』図録
134頁
神戸市立博物館所蔵 清水吉康著作
神戸市須磨舞子全景『日本全国パノラマ地図 第4巻 山陽道パノラマ地図』

- (図4-2) 須磨海岸水彩画 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録 4
 須磨海岸鉛筆画 同上
- (図4-3) 公益財団法人泉屋博古館編 『住友春翠 一美の夢は終わらない』 37頁
- (図4-4) 泉屋博古館所蔵 住友家須磨別邸復元模型
 模型製作・写真撮影 景観模型工房
- (図4-5) 筆者撮影
- (図4-6) 筆者撮影
- (図4-7) 筆者撮影

4. 2 配置計画における西洋的な建築手法

須磨別邸の設計の原点は、「物語性」にあった。前節で述べたような物語に満ちた須磨の場所性から、野口が須磨別邸という建築の物語をつくりあげるために用いたのは、西欧式デザイン手法としての「幾何学」であった。そこでは、1次骨格と2次骨格とも呼べる、2段階の幾何学的操作を行っていた。この節では、その1次骨格の幾何学について述べ、他節にて2次骨格について述べる。

4. 2. 1 敷地全体に描かれていた1次骨格としての幾何学

約15,000坪(5ha)の全体敷地は、中央で敷地を南北に分ける国道と、東西に分ける小川により、四つのゾーンに分かれていた。東邸と呼ばれる須磨海岸に面する東南のゾーンには、当初の土地購入時に建てた和館が移設されており、さらに大正5年(1916)、新しい日本家屋126坪(417㎡)および附属建物等が建てられた。西邸と呼ばれる西南のゾーンは、4.1.2の概要で述べたとおりである。

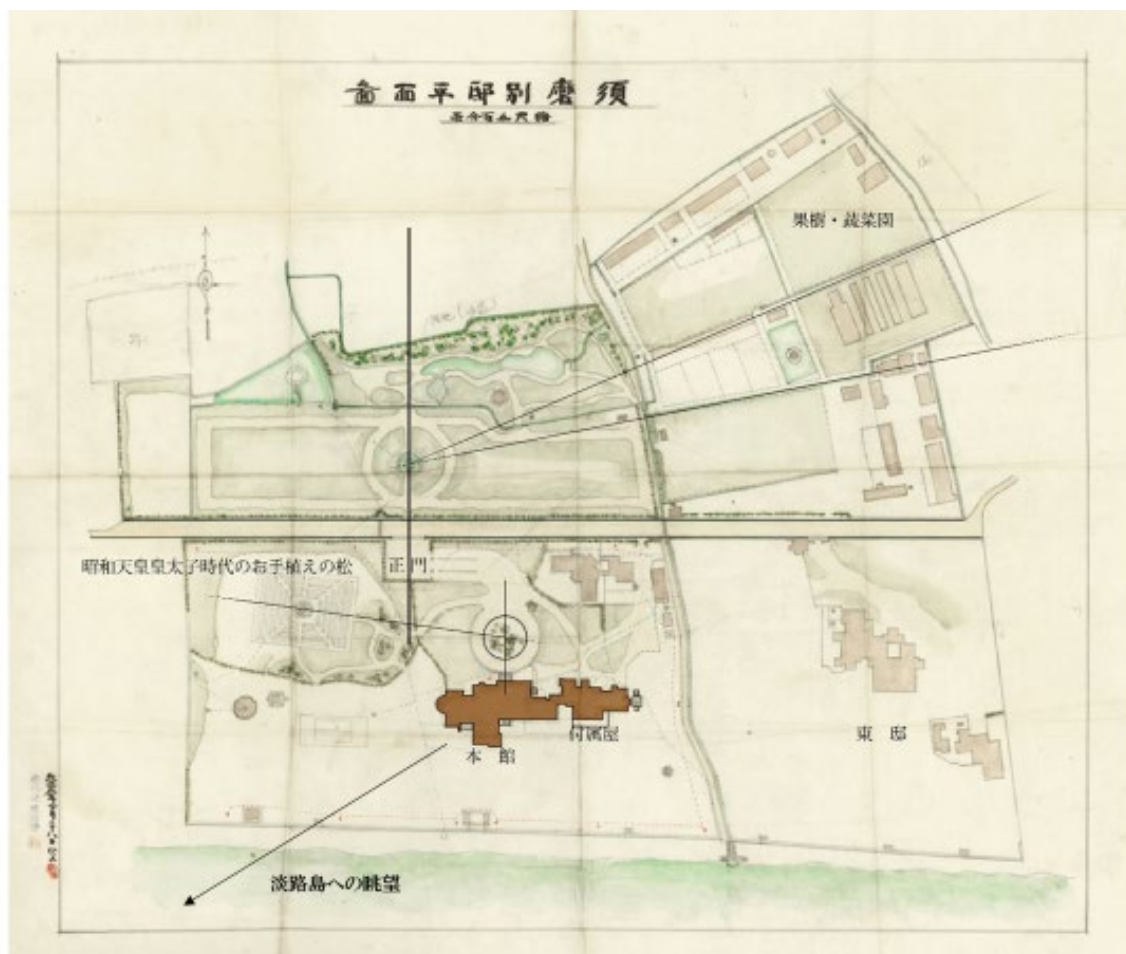
国道北の東ゾーンでは、葡萄や無花果・柑橘類をはじめ、マスクメロン・花キャベツ・レタスなど当時では入手困難な西洋果樹・野菜を栽培する農園が広がっていた。春翠は、園芸とともに蔬果栽培にも熱心であった。また、山羊の発酵乳は子供の健康に良いとされ、山羊や牛などの家畜舎、鶏小屋、水禽などのための池なども設けていた。春翠は、これらの栽培飼育のための専門家も雇い、各地に派遣して研究させている(*1)。北西のブロックには、北側に英国流風景式庭園、その南には従業員運動会も催された芝生の幾何学式庭園が広がっていた。

これら四つのゾーンのうち、東邸と呼ばれる東南部の和風ゾーンを除き、他の三つのゾーンを統合し西洋風の邸宅にふさわしい全体構成とするため、野口が用いたのが西歐的な幾何学手法であった。全体の起点を、北側の幾何学式庭園の円形状に整えられた芝生の中央に位置する池の中心に据えている。この中心を起点とする2本の放射状の線が、果樹・蔬菜園

である農場のランドスケープを骨格づける軸線となっていた。また一方、国道を挟む南側の西邸敷地へは1本の主軸線が南へと延び、その国道との交点に、西邸全体の正門のためのアルコーブが位置していた。このように、北側敷地の幾何学式庭園の円形の中心から放射状に描かれた3本の軸線が、三つの敷地を統合するように全体敷地デザインがなされていたのである。

正門前のアルコーブでは、左に折れ曲がってから正門に入るアプローチとなっている。正門を過ぎ松林を抜けると、円形状の植え込みと園路から構成される広がりある正面玄関前の円形の前庭に出る。前庭の中央を貫く本館の軸線は、全体3敷地を統合する主軸線とは平行しながらも移し替えられていた。

下図は、筆者がこれらの手法を書き込んだ配置図分析であり、これが須磨別邸敷地デザインの1次骨格としての幾何学であった。野口は、西欧における幾何学的アーバン・デザイン手法を巧みに使い、敷地の特性や周辺環境を読み解きながら、軸線や放射線を組み合わせて広大な全体の三つの敷地を統合していたのである。



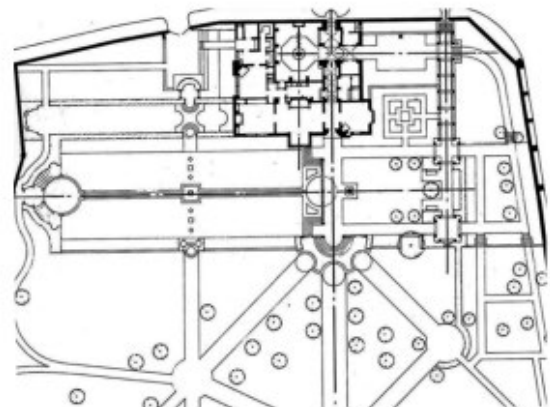
(図4-8) 筆者による軸線分析を書き込んだ須磨別邸配置図

4. 2. 2 西欧における幾何学的なアーバン・デザイン手法

須磨別邸の1次骨格としての敷地デザインにおいて、西欧の幾何学的な設計手法の採用には三つの特徴があった。まず、円形の中心を複数の軸の方向変換に用いていること、次に円の中心から放射する軸線を使っていること、そしてこれらを使って建築を定位していることである。



(上 図4-9) エドモンド・ベーコンによる
パリ市街構造図(部分)
(右上 図4-10) ローマ ポポロ広場
(右下 図4-11) エドイン・ラッチェンス設計
ディーナリー・ガーデン
1902年



上図の(図4-9)は、Edmund N. Bacon 著の“Design of Cities”から、パリの都市構造を分析した図の一部を抜粋したものである。円形広場を都市軸の変換に用いている事例として挙げた。例えば、エッフェル塔からトロカデロ庭園・シャイヨー宮を結ぶ軸線は、円形の11月11日広場で軸線の方向が変換され、北の凱旋門広場につながっている。このように円形広場を軸線の変換に用いることは、オスマン時代の都市計画でパリ市街全域にわたって行われた手法であった。この円形により軸変換する西欧のアーバン・デザインの手法は、古くは古代ローマ時代の皇帝ハドリアヌスによるティヴォリ別荘庭園でも使われていた。

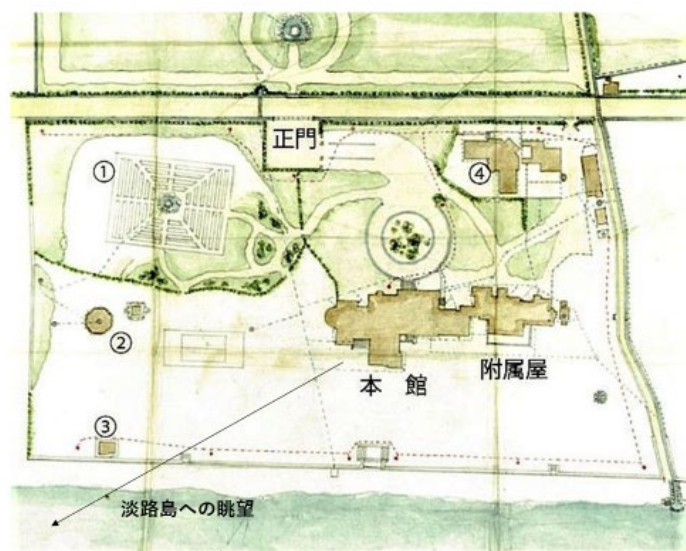
(図4-10)は、ローマの北部のかつての城壁門前にあったポポロ広場である。1820年に完成したバロック的アーバン・デザインであり、ここからはオベリスクを起点として放射状に南方向に3本の主要な街路が延びている。

(図4-11)は、野口と同生まれの英国の建築家エドウィン・ラッチェンス(1869~1944)設計による、1902年に完成したディーナリー・ガーデンの敷地図である。ここに書き込まれている軸線は筆者が記入している。直交するいくつもの軸線により、邸宅建築と庭園が緻密に組み合わされており、特有の秩序を生み出しているデザインである。ここでも、庭園の軸線構成により建築が定位されていた。

野口は、これらの西欧のアーバン・デザイン手法を駆使して、須磨別邸の敷地デザインの1次骨格を形成していた。このような幾何学的な巧みさによるアーバン・デザインは、日本では野口が最初であり、戦後になって丹下健三が、はるかに大胆かつ創造的に代々木や広島で見せた手法であった。

4. 2. 3 敷地全体に散りばめられた「春翠のお気に入り」

当時、温室は欧州貴族の社交場でありステイタス・シンボルでもあったため、須磨から舞子かいわいの別荘の間では、競うように温室がつくられていた。前述したように、園芸に深い関心をよせていた春翠による温室は、関西随一とされ、温室いっぱい育てられた洋蘭は、来客にも注目の的であった。大阪のホテルなどで催された住友招宴の卓上にも、この洋蘭を飾るのが恒例になっていたといわれる>(*2)。この温室は、訪問客が正門を通過して最初の眼に入る位置に据えられていた。正門からのアイ・ストップの位置である。



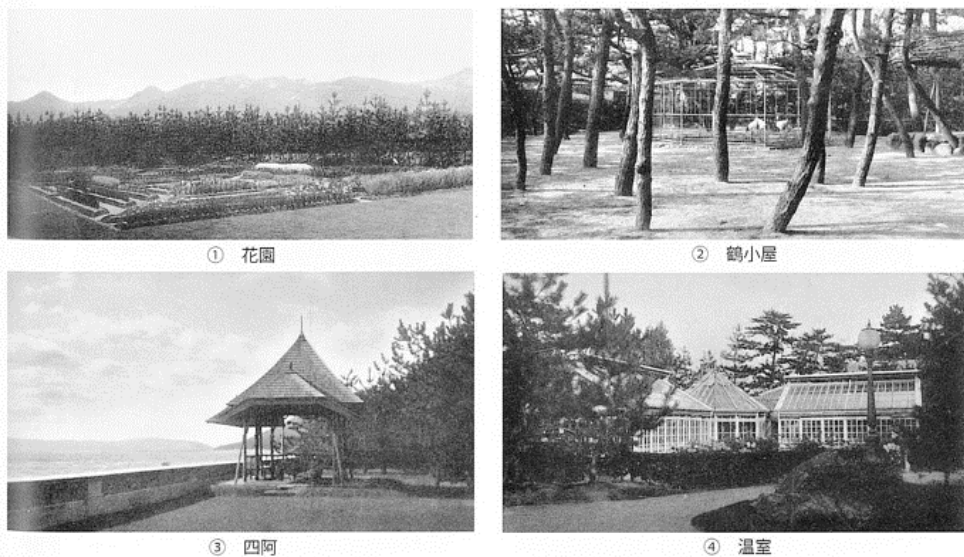
(図4-12) 西南ブロック敷地 施設配置図 ① 花園 ② 鶴小屋 ③ 四阿 ④ 温室

花園にも、スイトピーやマーガレットなど西洋花卉が植えられていた。この花園は、大正8年(1919)に昭和天皇が皇太子時代にお手植えされた松を中心につくられたもので、野口の没後、日高が設計したものである。本館正面の円形の前庭の中心とお手植えの松を直

線で結び、その角度に平行して花園が設計された。日高は、野口の軸線構成による敷地デザインを継承していたのである。また西の端には、春翠が好んだ鶴の檻があり、その産卵や孵化などは、須磨別邸の人々の最大の関心事であったと伝えられている（*3）。

須磨別邸の魅力の最大の特徴は、白砂青松の須磨海岸にある。庭園の海岸沿いの石垣には、所々にベンチが配されていたが、西の端に設けられた四阿は、散策の合間に海岸を見渡しながらか足を休ませ遥かに淡路島の絶景を楽しめる位置にあった。象徴的なデザインが施された庭園から海岸に降りる石造の階段と、四阿そして本館のベランダが形づくる大きな三角形エリアが、庭園で催される園遊会の主会場であった。

このように野口は、大きな敷地の隅々にまで、「場所の意味」を散りばめていたのである。



(図4-13) 前掲の施設配置図中の各施設写真



(図4-14) 須磨別邸復元模型 須磨海岸より望む

註

- (* 1) 公益財団法人泉屋博古館編 『住友春翠 - 美の夢は終わらない』 54～56頁
2016年 公益財団法人泉屋博古館
- (* 2) 前掲書 54頁
- (* 3) 前掲書 54頁

図版・写真

- (図4-8) 住友史料館所蔵の大正9年(1920)作成の須磨別邸配置図に、筆者が軸線分析の書き込みを加えたもの
- (図4-9) Edmund N. Bacon 著 “DESIGN OF CITIES” p.p 192
1967 The Viking Press
- (図4-10) レオナルド・ベネーヴォロ著 佐野敬彦・林寛治訳
『図説 都市世界史 3 近世』 96頁
1983年 相模書房
- (図4-11) David Dunster 編 “Architectural Monographs 6 Edwin Lutyens” p.p 44
1979 Rizzoli International
- (図4-12) 住友史料館所蔵
- (図4-13) 同上
- (図4-14) 泉屋博古館所蔵

4. 3 全体構成にみる日本的な建築手法

4. 3. 1 日本庭園の構成手法から

次頁の(図4-16)は、京都で野口が学んでいた第三高等中学校の近くにある銀閣寺の境内に入る総門である。この総門を入れればすぐに右に折れ、延々と続く銀閣寺垣に沿って境内にアプローチするようになっている。この軸方向に直交するアプローチの手法は、様々な禅宗寺院でも見られ、また日本庭園の構成手法の一つでもあった。西欧の軸線構成によるデザイン手法を用いた事例では、このような手法をみることは珍しく日本特有のものである

と言えよう。野口は、北側からの軸線を受ける正門前のアルコーブから、正門の方向へ直角に曲がるこのアプローチの手法を採っている。

(図4-15)の国道からの写真に見る巧みな風景デザインにも、建物の配置に関して日本的な手法が見られる。整然とした切石の築地と生垣や松林越しに見せる建物の姿は、国道との絶妙の距離感を保っており、わずかに見せつつ直接のアプローチは迂回させるものとしていた。この演出は、日本庭園によく見られる手法である。その風景のなかで、頭部に雅やかな彫刻が施された石造門柱が由緒ありげに佇んでいた。

もう一つ、野口の配置計画に日本の構成手法を見ることができるのが、軸線の移し替えである。前述したように、北側からの主要な軸線は、このアルコーブにて受けとめられただけで、建物玄関を貫く軸線は移し替えられている。この微妙な軸線の移し替えも、西欧の軸線構成手法では見ることのできない、日本の庭園や建築構成に独特のものであった。

野口の配置計画には、西欧的な手法を採りながらも、そのなかに、日本庭園で培われた伝統的な空間構成の手法が織り込まれていたのである。



4. 3. 2 「庭屋一如」について

野口は卒業論文において、「日本では大きな開口部によって室内から外部の環境を眺めることに快適さを感じるものだが、西洋では開口部は光と必要な空気を部屋に取り入れるものである」とし、“the indoor comfort is essentially a more Northern idea, as contrasted with a sort of outdoor enjoyment which is a more Southern idea and Oriental.”と記述していた。

野口は、須磨別邸は洋館でありながら建築と庭の関係は、あたかも日本古来の建築と庭園が一体となって常に視覚的・体験的な交流を促すような建築と庭のあり方、すなわち「庭屋一如」を目指すような建築と庭園の関係をつくり出そうとしていた。「庭屋一如」の典型例としてよく挙げられるのが桂離宮である。桂離宮では、(図4-19)のように古書院から雁行形に連続する中書院・新御殿と庭園の関係に「庭屋一如」が見いだされる。

(図4-18)は須磨別邸の迎賓部の建築と庭園の俯瞰写真である。須磨別邸においてもベランダやテラスを通じて庭園と建築の一体的な関係を見出すことができる。

西洋建築における内外空間の一体化という意味では、野口と同時代のF.L.ライトによるプレリーハウス群が考えられるが、ライトの邸宅建築の場合は、外部テラスが建築的に構築されたものとなっており、その外に広がる自然からは作為的に切り離されるものとなっていた。日本における内外空間の一体化とは、大きく異なる性質のものであった。

須磨別邸の庭園と建物の間には、中間領域として、生活空間の一部としてのテラスやベランダがあった。そして桂離宮においても、広縁や月見台が、庭園と建物との中間領域としての役割を果たしていた。その向こうにある庭園は、意識の上では無限に水平に拡がってもよい空間であり、何ら領域として作為し構築化する必要のない場であった。ここに人間が自然と連続的に一体化している日本人の空間意識の顕れを見ることも可能である。

明治の時代に須磨別邸という洋館の設計において、野口が日本人の持っている内部と外部に関わる空間意識を体現する建築を設計していたことは、決して無意識に行ったことではなく、野口の卒業論文にも記述されていたように、洋風建築を日本の気候と日本人の生活習慣にいかにか適合させるかという努力の顕れでもあったと考えられる。

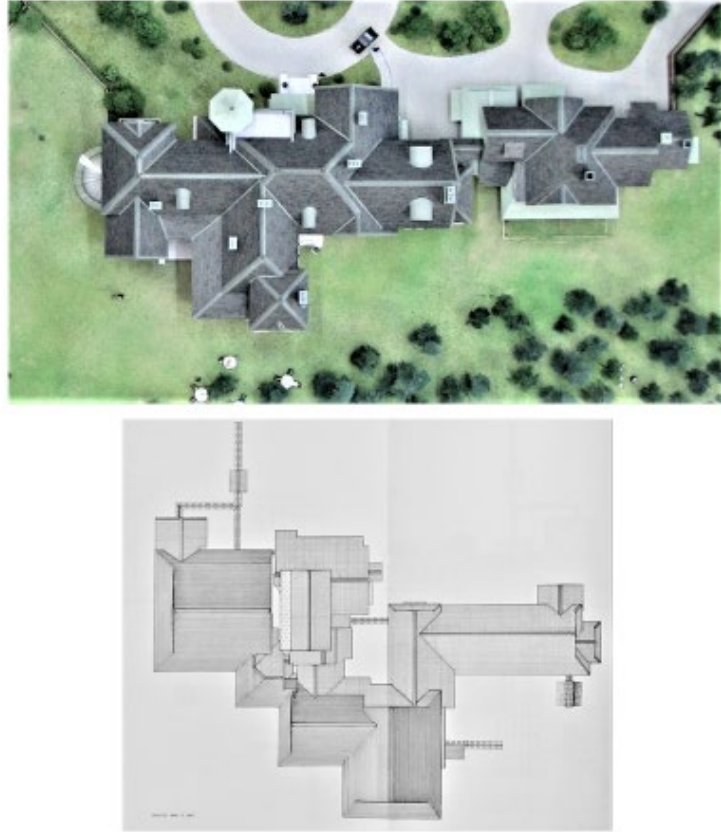


(図4-18) 須磨別邸 建築と庭園



(図4-19) 桂離宮
古書院から雁行型に連続する書院と庭園

4. 3. 3 屋根の構成に見る日本建築の手法



(図4-20) 屋根伏 上：須磨別邸 下：桂離宮

上に須磨別邸と桂離宮の屋根伏図を並べたが、両者には下記の点で共通する特徴がうかがえる。

- (1) 内包する空間の重要度に応じて決められた屋根の大きさと屋根群の連続性
- (2) 主要部の雁行型配置と庭園との連続性
- (3) 内包する空間の機能と屋根材料の選択
- (4) 屋根の棟方向の変化による絵画的な効果

(1) 内包する空間の重要度に応じて決められた屋根の大きさと屋根群の連続性

日本の伝統的建築の外観の佇まいは、庭園と屋根だけで成り立っていると言えよう。そこでは、屋根がそれぞれ包み込む空間の性格に合わせて架けられ、それら分節された屋根群が連続することで全体が構成されていた。重要な空間には特色ある大きな屋根が架けられ、重要度の低い空間には小さな屋根が架けられていた。そしてそれら大小の量感ある屋根群がリズムを成すように屋根全体が構成されていたのである。桂離宮と同じく須磨別邸の屋根

でも、大小様々な量感のある屋根群によってその全体が構成されており、外観の豊穡なイメージが生み出されていた。

須磨別邸では、エントランス軸上に位置している中央部の屋根が最も大きく設計されていた。その中央部は、全体をバランスよく引き締めそれぞれに分節された屋根を統合する役割を果たしている。またその最上部では、ブロンズ製による棟飾りと避雷針により重要度を強調するような意匠が施されていた。屋根群全体にドーマー窓と煙突群が散りばめられており、下から見上げる屋根スカイラインのなかにリズム感あるアクセントの役割を果たしていた。

(2) 主要部の雁行型配置と庭園との連続性

桂離宮では、雁行型平面の先端にある庭園に突き出た月見台のある古書院が最初にできた主要な部屋であった。次に中書院が続き新御殿へと続く。この古書院から新御殿に至る雁行型平面の諸室と呼応するように、庭園が広がっている。一方、臣下控所や旧役所と呼ばれる従者たちの場合は、(図4-20下)のほぼ45度で領域が分けられた右上の部分であった。

須磨別邸でも主要な部屋は、ベランダやテラスを通じて庭園につながる1・2階の南西方向に雁行する位置にあった。古来日本では、先端を主要部とする雁行配置が建築を構成する主な手法の一つであった。野口が子供時代に見上げて育った姫路城も、大天守を先端とする雁行型配置である。桂離宮ではこの先端の位置に月見台のある古書院が置かれているが、野口が須磨別邸で先端に置いたのは後述する四角塔であった。大天守とは比較にならないが、野口には、かつて毎日見上げた姫路城の残像が残っていたのかもしれない。

(3) 内包する空間の機能と屋根材料の選択

桂離宮では前述のように、およそ45度傾斜した線で貴人のゾーンと従者のゾーンに分けられている。貴人のゾーンの屋根は柿葺きであり、従者のゾーンは棧瓦葺きである。

桂離宮は、寛永年間(1624～)から寛文年間(～1673)にかけて八条宮智仁・智忠親王によって造営されたが、寛文3年(1663)には御水尾上皇を迎えている。この時に新御殿と臣下控所など従者ゾーンが増築された。この増築時には臣下控所の屋根は柿葺きであったが、後年、棧瓦は本瓦に替わる簡便な屋根瓦として開発され、従者ゾーンについては棧瓦葺きとなった。

須磨別邸においても、その屋根が覆う下部空間の機能により、緑青銅板葺きと主な屋根材である天然スレート葺きが使い分けられていた。本館では、緑青銅板葺きは主に八角塔と正面玄関ポーチに用いられ、附属屋では、1階の屋根に緑青銅板葺きが用いられていた。桂離宮と同じく、内包する空間の機能により、2種の屋根材料の選択が行われていたのである。

(4) 屋根の棟方向の変化による絵画的な効果

桂離宮では、屋根の妻面が向く方向は、屋根伏図中で縦と横方向に取り混ぜられ、入母屋の棟方向が縦と横に縦横に構成されていた。

須磨別邸でも同様に、いくつもの寄棟屋根の方向が、南北方向にそれぞれ取り混ぜるように構成されていた。須磨別邸と桂離宮の屋根伏が相似している印象は、この屋根の棟方向の変化による絵画的効果によるところが大きい。

もう1点、須磨別邸の屋根に日本建築の設計手法が顕れていたのが、ベランダ屋根である。須磨別邸の海岸に面するベランダ部の屋根は、同じ天然スレート葺きではあるが、緩やかな傾斜角度の屋根に変えられ分節されていた。(図4-22)の横浜三溪園の臨春閣でも、書院の屋根は檜皮葺とされ縁側廊下の屋根は分節され傾斜角度も変えられた柿葺とされている。この手法は多くの数寄屋建築に見られるものである。

欧米の邸宅建築では、ドイツ民家などに見られるように傾斜角度を緩やかに変化させる事例はあっても、屋根の途中でこのように下部の空間の性格に合わせて急に折れ曲げるようなことはしない。ここにも、日本建築の伝統的手法が潜在的に現れているように思われる。



(図4-21) 須磨別邸本館 屋根構成



(図4-22) 横浜三溪園 臨春閣

図版・写真

(図4-15) 写真：住友史料館所蔵
模型写真：泉屋博古館所蔵

(図4-16) 筆者撮影

- (図4-17) 泉屋博古館所蔵模型写真に筆者が書き込み
- (図4-18) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-19) 日本美術全集 第16巻『桂離宮と東照宮 江戸の建築Ⅰ・彫刻』 14頁
1991年 講談社
- (図4-20) 須磨別邸屋根伏模型写真：泉屋博古館所蔵
桂離宮屋根伏図：『新建築 1982年7月臨時増刊一桂離宮一』
図面は、法政大学武者英二研究室作成
- (図4-21) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-22) 『新建築 1978年6月臨時増刊 和風住宅の手法』 21頁

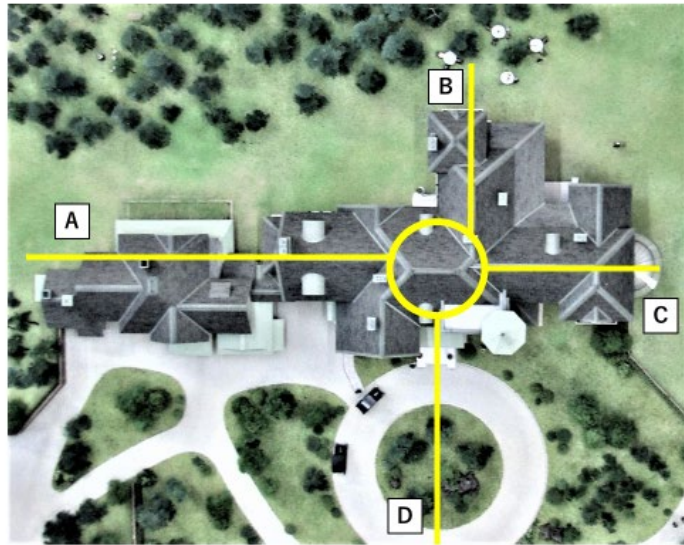
4. 4 風車型平面計画と3つのゾーニングそして3本の塔

西洋的な配置計画の「4. 2. 1 敷地全体に描かれていた1次骨格としての幾何学」にて記した1次骨格を引き継ぎ、須磨別邸では2次骨格として風車型平面計画がなされていた。この風車型の平面計画が成されることにより、全体構成に3つの性質の異なるゾーニングが生み出されていた。またそれぞれのゾーンを象徴するような3本の塔も据えられていた。この節では、須磨別邸の建築デザインを決定づけていたこれらの特徴について記述する。

4. 4. 1 2次骨格としての風車型平面計画

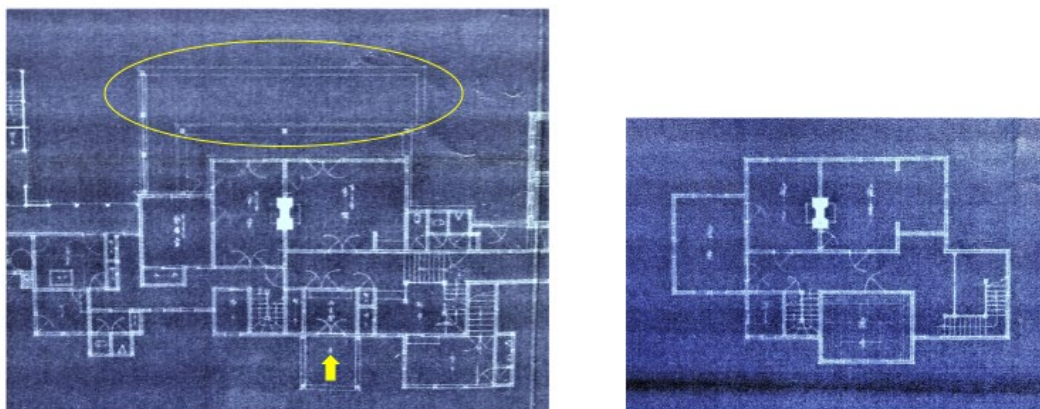
須磨別邸の本館の平面形は、中央に吹抜けのある広間を中心として、まるでその中心から放射する4本の羽根を持つような風車型を形成していた。エントランスから広間に入ると、3方向に翼が広がるようにそれぞれの部屋の性格にふさわしい「場所」が、三つの方向に向けて広がっていたのである。次頁の(図4-23)にて、その平面計画をダイアグラムとして表現している。敷地計画における幾何学的な1次骨格に比べ、平面計画では、2次骨格としてのロータリーエンジンのようなダイアグラムとして理解することができる。

(図4-23)のA軸方向には、春翠の子弟と英国人住み込み家庭教師の住まいと学習の場である附属屋があり、本館1階では執事室や小食堂、2階では春翠の奥方の寝室など家人の具体的な生活の場を構成していた。B軸方向では、春翠の趣味嗜好が込められた1階の居間兼応接室と2階主寝室が須磨海岸に向けて突き出る構成となっており、C軸方向は、1階の迎賓やフォーマルな食事の場である大食堂、2階の来賓用の客室など迎賓のゾーンであった。直交するB軸とC軸によって囲まれるゾーンでは、1・2階とも広いテラスとベランダが設けられ、庭園にも直接降りることのできる心地よい外部空間となっていた。

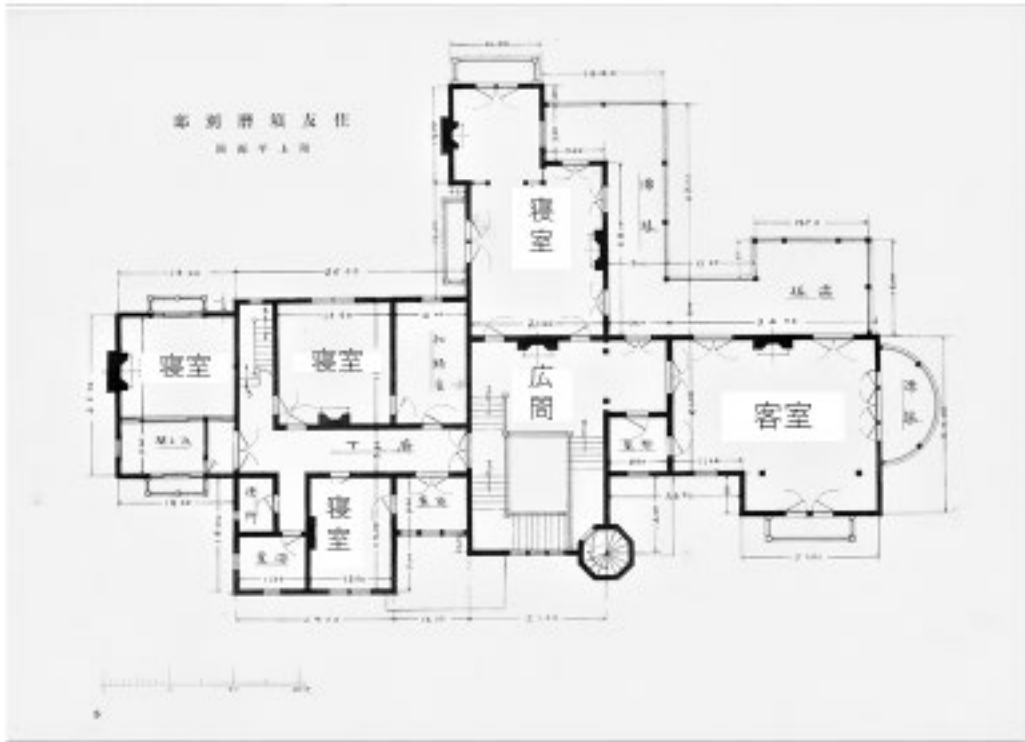


(図4-23) 須磨別邸の風車型平面計画 広間を中心として4方向に軸が延びている

附属屋の平面計画については、資料があまり残されておらず、やや不鮮明な青図から、当時の附属屋を推測するしかない。下の(図4-24)からは、1階の南の海岸側に、子供たちと家庭教師の学習の場やくつろぎの場が配置されていたと思われる。下図の黄色の楕円の位置には、緑陰をつくるパーゴラがあり、外部での学習やくつろぎの場となっていた。2階の南の海岸側には、子供たちや家庭教師の寝室が配置されていたであろう。家族の普段の食事は、本館の小食堂にて、家庭教師とともにフォーマルな装いで英語の会話で行う食事であったと伝えられる。なお厨房は、本館の半地下に、広い厨房や食品庫が設けられていた。



(図4-24) 附属屋平面図 左：1階平面図 下部の矢印は玄関入口を示す 楕円はパーゴラの位置を示す
右：2階平面図



(图 4-25) 須磨別邸本館平面图 上：2階平面图 下：1階平面图

4. 4. 2 外部空間の3つのゾーニングとその場所的意味

本館の平面形を風車型とし、さらに附属屋を東に連続させることで、本館・附属屋の敷地廻りに下記のように大きく意味が異なる3つのゾーンが生み出されていた。下図のⅠ・Ⅱ・Ⅲで示すゾーンである。

- (1) 建物正面玄関前のフォーマルな迎賓ゾーンⅠ
- (2) 春翠の子弟教育のためのプライベート・ゾーンⅡ
- (3) 須磨海岸を眼前にして芝生が広がる、来客接待のための公的もてなしゾーンⅢ



(図4-26) 3つのゾーニング

(1) フォーマルな迎賓ゾーンⅠ

Ⅰの迎賓ゾーンでは、前庭ランドスケープの円形の植え込みが、強い中心軸を示すことにより、このエリア全体を安定感あるものとしていた。この五葉松が植えられた円形植え込みには石組も据えられており、西洋的な空間構成のなかにも和風の趣きを加えている。

須磨別邸のエントランス・ポーチは、この規模の邸宅としては小さく簡素なものであった。しかし優美な意匠が彫り込まれた2本のポーチ柱や階段両側の装飾杯形の植木鉢など、簡素な中にも穏やかな迎賓の佇まいを見ることができる。往々にして、この規模の大邸宅では、

大仰な石造ポーチ等の車寄せが見られるものである。しかし須磨別邸のエントランス・ポーチは住友的な謙虚さが現れた簡素なものであり、その対極にあった。

エントランス・ポーチの右側には、広間階段室の大きなステンドグラスがはめられた壁や「八角塔」があり、前庭とともにそれらは一体となって絵画的な構成となっている。



(図4-27) 須磨別邸 玄関部



(図4-28) 須磨別邸復元模型 ゾーンⅠ

(2) 春翠の子弟教育のためのプライベート・ゾーンⅡ

下図は、松林で巧妙に囲まれた、公的ゾーンとは心理的に隔てられている、Ⅱの子弟教育のためのプライベート・ゾーンである。



(図4-29)
附属室前の家族と家庭教師リチャードソン
右端に春翠の歩く姿が写っている



(図4-30)
附属室の海岸側のパーゴラと、芝生がひろがる
プライベート・ゾーン

附属屋の学習室や居間につながる家庭的な雰囲気のあるパーゴラは、春翠の子弟と家庭教師リチャードソンの屋外授業や談笑・休憩の場となっていた。(図4-23)のB軸の先端に位置している「四角塔」が、このプライベート・ゾーンと、ゾーンⅢとの間の心理的な領域分けの役割を果たしていた。

(3) 須磨海岸を眼前にして芝生が広がる、来客接待のための公的もてなしゾーンⅢ

須磨別邸の訪問客たちをもてなす最大の魅力は、白砂青松の須磨海岸であった。その須磨海岸沿いの園路では、西端に設けられた絶景を眺める四阿、海岸に降りる石造裝飾杯に飾られた石造の腰壁と階段、そしてさらに東の海岸線の景色を楽しむこともできた。その広い庭園エリアの扇形の要の位置にあったのが、本館のテラスとベランダである。1・2階に設けられたこれらのテラスで客人は、ゆったりと談笑を楽しみ、時には階段を下りて広い庭園で行われている様々な催しに赴いたことだろう。

須磨海岸を眼前にして芝生が広がるこの来客接待のゾーンでは、様々な歓迎の催しが繰り広げられた。前述の英国王室のコノート卿アーサー王子の歓迎の宴もその一例である。時には、この庭園で軍楽隊の野外演奏で来客を楽しませたとされる。

ところでⅢのゾーンとゾーンⅡのプライベート・ゾーンの間には、東西に延びる松林が植えられていた。この松林によって二つの領域の区分が行なわれており、来客はこの松林を越えて奥に入ることもなかつただろうし、子供たちも来賓時には、松林を越えて海岸に近づくこともなかつたと思われる。巧妙なランドスケープ・デザインである。

野口は、このように建築とランドスケープを一体化しながら、それぞれの場所に、隅々に至るまで、人々が生活を楽しむ場所としての意味を与えていたのである。



(図4-31) 須磨別邸 海岸側庭園より望む



(図4-32) 須磨別邸 庭園迎賓ゾーン

4. 4. 3 水平性と3本の塔

須磨別邸では、須磨海岸の敷地全体を絵画のキャンバスとするように、「場所の物語」が描かれていた。そこでは、建物平面を四方へ伸びやかに広がる風車型とすることで、敷地に様々な意味を生み出し、そこで繰り広げられる「西洋上流社会の生活様式による、英国流の国際的社交の場と子女教育の場」にふさわしい様々な場所を生み出していた。それぞれの空間は、風光に満ちた須磨海岸の屋外空間にも連続し、その水平に広がる伸びやかさが須磨別邸の建築の特長となっていたのである。

野口は、その水平性のなかに、縦にリズムを刻むように、3方向からの視線を受け止める位置に意匠の異なる3本の塔を建てた。1本は「八角塔」と呼ばれる国道側の塔、そして海岸側には「四角塔」と呼ばれる塔が建てられた。また西の端部では、須磨別邸の花園などの庭園を望む位置に、当時フランスなどで流行していた「マルキーズ」と呼ばれるガラス屋根の庇を持つ塔が建てられた。本論では、この塔を「マルキーズの塔」と呼ぶことにする。

野口は、自然の風景のなかでランドマークとして視線を受けとめる役割を担う塔を意匠的に用いていた。3本の塔は、外部の人々へ邸宅の存在を伝える役割と共に、絵画的な効果を生み出す手法の一つでもあった。



(図4-33) 3本の塔

(1) 八角塔

神戸の人々が「須磨の住友の邸宅」と言えば思い浮かんだのが、下図の門柱とこの八角塔であった。国道から見えるその八角塔の頂部の凝った意匠の姿に、人々はこの邸宅内で繰り広げられる優雅な生活に想像を巡らしたことだろう。

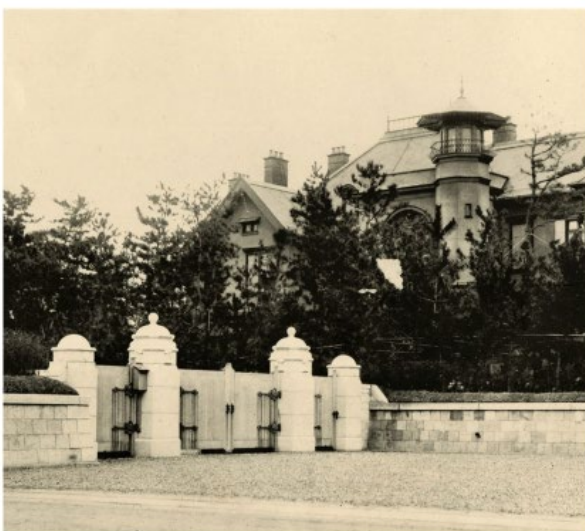
住友の銅を象徴する緑青銅板葺の八角塔の屋根には緩やかな反りを持たせ、国道から見える軒下には東洋的趣味を感じさせる並行化粧垂木を施していた。また八角屋根の頂部にある避雷針の基部には徳利を縦に伸ばしたような銅製装飾を施していた。

この灯台のような頂部には、広間大階段の踊り場に接して設けられた螺旋階段によって登ることができた。この頂部からは、近くには綱敷天神や皇室の武庫離宮のある須磨の高台が、遠くには六甲山系の山並みが海に交わる景観をも見晴らすことができただろう。その見晴らし台の铸铁製と思われる手摺には優美な曲線の膨らみを持たせ、青空を背景に、東洋と西洋が溶け合うような意匠としていた。

神戸に住む人々に向けて須磨別邸全体をこの一点で象徴する、野口入魂の意匠であったと思われる。



(上 図4-34) 八角塔頂部



(右 図4-35) 国道から見える八角塔

(2) マルキーズの塔

第3章の(図3-4)で紹介した須磨別邸での西園寺公望を中心とする春翠の家族の記念写真は、このマルキーズの塔の前の庭園で撮影されている。この塔の上階からは、須磨別邸本館のある西南ブロック敷地の約半分を見晴らすことができ、花園や松林に見え隠れする鶴小屋・海岸沿いの四阿、さらには右手には六甲山系、左手には須磨海岸の大パノラマが眼前に広がっていた。須磨別邸の客室に逗留することもあった西園寺公望のお気に入りの風景でもあっただろう。

パリに長年留学していた西園寺にとって、このマルキーズのガラス屋根庇は懐かしいものであったと思われる。「侯爵夫人」という意味を持つマルキーズと名付けられたガラス屋根の優美な庇は、当時パリで大流行していたものだった。アール・ヌーヴォーのエクトール・ギマール設計メトロ入口キャノピーをはじめ、高級百貨店の入り口や邸宅のエントランス庇等で多く用いられていた。このマルキーズがあるだけで、欧州の香りと家庭的な親しみが醸し出される、須磨別邸に暮らす人々にとってはシンボルのような存在だった。



(左 図4-36) 写真に残るマルキーズの塔

(上 図4-37) 模型で再現された庭園と
マルキーズの塔

(3) 四角塔

須磨浦の海上より撮影された写真が残されていた。その写真からは四角塔が、須磨別邸の存在を示すシンボルとして、船上の人々の眼に焼き付いていたことが分かる。この四角塔は、陸の須磨浦海岸でも、その広がりの中のランドマークとして識別される塔であった。

須磨別邸の庭園内においても、四角塔は、海岸に沿う庭園全体の要となる位置にあった。この塔を境界として、西は来賓を歓迎する公的もてなしのための庭園ゾーン、東は子弟教育のためのプライベート・ゾーンと分けられていたことは前述のとおりである。

四角塔の屋根は、装飾を施された避雷針を頂く宝形であり、他の連続する棟の屋根から独立した塔として象徴性が強調されていた。その海岸に面する2階の窓の上部には、装飾が施された大振り円弧状トランザム・パネルもあり、このように独立するバルコニーを持つ象徴的な窓は、須磨別邸全体の中でもこの四角塔のみであった。海上からの写真でも、この窓の大きさがよく分かる。地中海に面する南欧の国々で見ることのできるような窓の意匠を持つ塔であった。



(上左 図4-38)
復元模型の四角塔



(上右 図4-39)
海岸側庭園と四角塔



(右下 図4-40)
海上より見た須磨別邸

図版・写真

- (図4-23) 泉屋博古館所蔵の模型写真に筆者が分析線を記入
- (図4-24) 住友史料館所蔵
- (図4-25) 住友史料館所蔵 『野口博士建築図集』
- (図4-26) 泉屋博古館所蔵の模型写真に筆者がゾーンの記号を記入
- (図4-27) 住友史料館所蔵 『野口博士建築図集』
- (図4-28) 泉屋博古館所蔵の模型写真
- (図4-29) 住友史料館所蔵
- (図4-30) 泉屋博古館所蔵の模型写真
- (図4-31) 住友史料館所蔵 『野口博士建築図集』
- (図4-32) 泉屋博古館所蔵の模型写真
- (図4-33) 泉屋博古館所蔵の模型写真に筆者が塔名を記入
- (図4-34) 泉屋博古館所蔵の模型写真
- (図4-35) 住友史料館所蔵 『野口博士建築図集』
- (図4-36) 同上

(図4-37) 泉屋博古館所蔵の模型写真

(図4-38) 同上

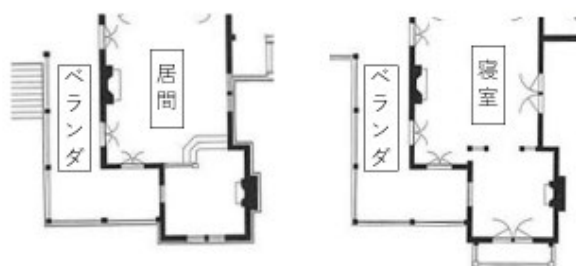
(図4-39) 同上

(図4-40) 住友須磨別邸絵葉書 藤江源治氏旧蔵で現・住友史料館所蔵

4. 5 “Comfort” という空間性能

野口の卒業論文においては、“Comfort”という概念を中心に位置づけていた。須磨別邸でも、卒業論文の野口の意図を具体的に実現するように「居心地のよさ」や「快適性」といった空間的な性能が追求されていた。須磨別邸の全体構成を通じて一貫していたことは、建物の内外を問わずこの性能が追求されていたことである。ここでは、どのようにしてその「居心地のよさ」が設計されていたのかを例を挙げて記述する。まず「四角塔」の内部がどのようになっているか、次に須磨海岸に広がる庭園の要となっていた半外部のテラスやベランダのデザインについて、そして西の翼部に位置していた、須磨別邸で最も主要な部屋である1階の大食堂・2階の客室について述べる。すべて、外観意匠と密接に関係しながら内部空間がデザインされていた。

4. 5. 1 「四角塔」の内部



(図4-41) 左：1階平面図

右：2階平面図

(上左 図4-42)

四角塔 本館2階寝室部外観

(上右 図4-43)

本館2階 寝室 室内写真

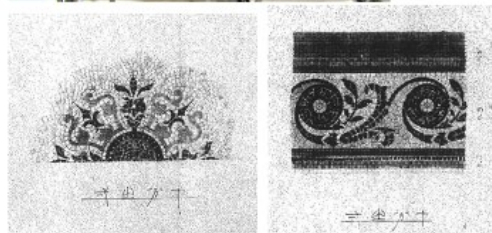
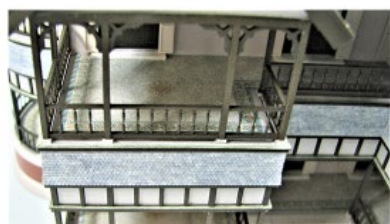
「四角塔」の内部は1・2階とも、野口が卒業論文で言及していた、英国で伝統的にイングルヌックと呼ばれる暖炉を囲む居心地の良いアルコーブ空間であった。前頁図の1・2階平面図にある暖炉がそのイングルヌックの中心で、日本人で言えば「炉端」のような心地よさのイメージを、英国人はこのイングルヌックに対して抱いていた。1階では次節の(図4-52)の写真に示すとおり、居間兼応接室の奥で少し上がるように床レベルに変化を持たせていた。窓からの眺望も広がっていたであろう。春翠の主寝室である2階の(図4-43)の写真奥にある小さくまとまったイングルヌックは、ドレープカーテンの付いた垂れ壁的アーチと小列柱で区切られていた。1・2階の居間・寝室からは直接ベランダに出ることもでき、気が向けば外気に触れて須磨海岸を見渡すこともできた。

4. 5. 2 半屋外空間としてのテラス

須磨海岸に向けて開かれた心地よい2層のベランダとテラス空間には、床に模様のあるモザイク大理石が貼られていた。そのモザイク模様の図面が残されている。このテラスで来客と春翠が、ゆったりとした椅子に腰をかけ須磨海岸を眺めながら様々な会話を弾ませていた姿が想像される。

このテラス部分の屋根は、全体屋根から独立するように切妻面を海岸に向けていた。この場所を強調するような意匠である。またL字型のベランダ部の屋根も、その場所の性格を示すように全体屋根から分節され、その傾斜にも変化が加えられていた。

後年、1階の大食堂に続くテラスにはガラスが張られ、サンルーム的なコンサーバトリーとして、須磨海岸に臨む来客歓待の場となっていた。(図4-31)はその当時に撮影された写真である。



(左上 図4-44) テラス部 模型写真
(左下 図4-45) テラス床モザイク大理石模様



(上 図4-46) 庭園と一体となった
テラスとベランダ

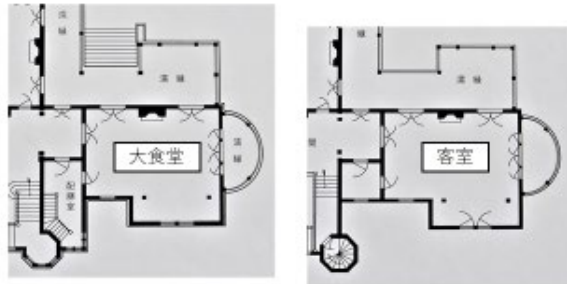
4. 5. 3 1階大食堂と2階客室

1階の大食堂と2階の客室は同形の平面であり、ともに海岸側にテラス、西端部にマルキーズの塔の半円形テラスが屋外空間として連なっていた。ちなみにこの半円形テラスの床もモザイク大理石貼りである。上下階の2つの部屋には同じように、山側に、中央に大きな窓があるアルコーブ空間が取付けられていた。このアルコーブの窓からは六甲山系を眺めることができた。この両側に袖柱が据えられたアルコーブは、それぞれの部屋のなかで特別の領域を感じさせる空間であったと思われる。1階の大食堂の山側アルコーブの壁の両側には大きな窓を挟んで、第3章の(図3-13)で紹介した2枚のモネの油絵が飾られていた。また大食堂の海側では、暖炉を挟んで2か所のドアが屋外のテラス空間に連続していた。

1階の大食堂・2階の客室はともに、海側・山側そして西の庭園への3方向に膨らみのある部屋となっており、空間の持つ豊かさと心地よさが想像できる室形状を備えていたと言えよう。山側の1・2階アルコーブは、外観では国道に面する凸状の縦長の壁となっていた。景観のアクセントとなる大きな窓とバルコニーも2階には設けられ、八角塔やマルキーズの塔と合わせて絵画的な構成であったことが分かる。



(上 図4-48)
西端部外観



(図4-47) 左：1階平面図 右：2階平面図



(右 図4-49)
大食堂 内部

図版・写真

- (図4-41) 公益財団法人泉屋博古館学芸部編集 『住友春翠 -美の夢は終わらない』
52～53頁 平面図より部分掲載
- (図4-42) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-43) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-44) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-45) 住友史料館所蔵
- (図4-46) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-47) 公益財団法人泉屋博古館学芸部編集 『住友春翠 -美の夢は終わらない』
52～53頁 平面図より部分掲載
- (図4-48) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-49) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』

4. 6 英国ルネサンス風を基調とした内装デザイン



(図4-50) 須磨別邸 大食堂

須磨別邸の内装は、英国ルネサンス風もしくはヴィクトリアン様式を基調とした正統的なデザインでまとめられていた。第2章「2.1.4 野口孫市による西洋建築の透写習作」で紹介した(図2-33~35)のような野口の木彫デザイン習作、また(図2-48)で見るドレープ・デザインの習作などから分かるように、野口は内装デザインに関しても密度の高い修練を行っていた。前頁の(図4-50)で示した須磨別邸の大食堂の写真に見られるように、開口部の三方枠や各部羽目板の木部意匠、意匠を凝らした暖炉廻りや天井の構成、そしてドレープ・デザインなどにその修練の跡を見ることができる。



(図4-51) 1階広間より階段・ステンドグラスを見上げる

前頁（図4-51）1階広間の写真には、吹抜け階段の踊り場上部に高さが約4mある大型ステンドグラスが写っている。このステンドグラスは、日本人初のステンドグラス作家であった宇野澤辰雄によるものであった。ドイツの建築家・エンデ&ベックマンは各種の日本人職人を留学させることを政府に提案したが、宇野澤辰雄は、この提案によりドイツに派遣され修業した人物である。帰国後、宇野澤はステンドグラスの製作で日本の第1人者となった。その後、宇野澤の工房からは次世代のステンドグラス作家が育っていたが、住友本店臨時建築部で野口の部下であった木内眞太郎もその一人であった。

須磨別邸全体の室内造作は、木質系の仕上げが基本となっていた。基本となったチーク材が、一部に檜や紅花林（カリン）など古くから日本の高級調度などに用いられた材とともに、白ラックやフレンチ・ポリッシュなどで仕上げられたと記録されている。例えば天井は、彫刻が施されたチーク材の格子の間が、木質パネルや石膏彫刻もしくは刺繍を施した絹織物などで仕上げられていた。すべての床は、後に東宮御所の床の木工事も担当した竹中熊次郎による寄木張りであった。壁には、英国やドイツ製の壁紙を貼り、窓には英国製磨きガラスが用いられた。また絨毯などの敷物・ドレープカーテン・緞帳は、後に高島屋となる飯田呉服店大阪支店が扱っており、輸入家具は杉田幸五郎や小林義雄が扱っていた。竹中・飯田・杉田・小林らの名も、皇室による後の東宮御所の工事にも記録されており、それぞれの分野での第1人者であることが分かる。大理石は、矢橋亮吉・長門大理石・日本攻石などから様々な色味のものが取り寄せられ、吟味が重ねられたという（*1）。

シャンデリアの図面も残されており、英国・ドイツ・日本製のそれぞれから入手していた。



（図4-52） 1階 居間兼応接室

住友家は、明治33年（1900）に別子銅山開山200年を記念して、皇居前に楠正成像を宮内庁に献納した。この製作を東京美術学校彫刻科教授の高村光雲に依頼したが、その光雲の高弟に相原雲楽がいた。相原は、住友本店臨時建築部との縁ができ、須磨別邸や中之島図書館の指物・大工職人の指導と木彫にあっていた。その後、相原は多くの日本各地の近代建築で木彫を手掛けることになる。

（図4-52、53）の写真からは、春翠の幅広い趣味が須磨別邸に溢れていたことが分かる。第3章で紹介したように、須磨別邸に飾られていた洋画は「邸宅美術館」と呼んでもよいほどに充実したものであった。西洋美術に留まらず、日本趣味・中国趣味が取り混ぜられ、不思議な調和が生み出されていた。（図4-52）の居間暖炉の上に架けられていた螺鈿の扁額は、春翠の長兄で明治天皇の侍従長であった徳大寺実則の揮毫によるものである。また、同室の手前には、茶湯窯のかけられた火鉢が写っているが、暖炉や西洋家具との取り合わせに違和感はない。

下の2階客室の写真からは、壁際や部屋の隅に置かれた飾り棚に、おびただしい数の陶磁器や七宝・青銅器が飾られていたことが分かる（*2）。



（図4-53） 2階 客室

註

- (* 1) 公益財団法人泉屋博古館学芸部編集 『住友春翠 - 美の夢は終わらない』 47 頁
2016 年 公益財団法人泉屋博古館
- (* 2) 前掲書 同頁

図版・写真

- (図 4 - 5 0) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵木子文庫 木 189 - 012
- (図 4 - 5 1) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図 4 - 5 2) 同上
- (図 4 - 5 3) 同上

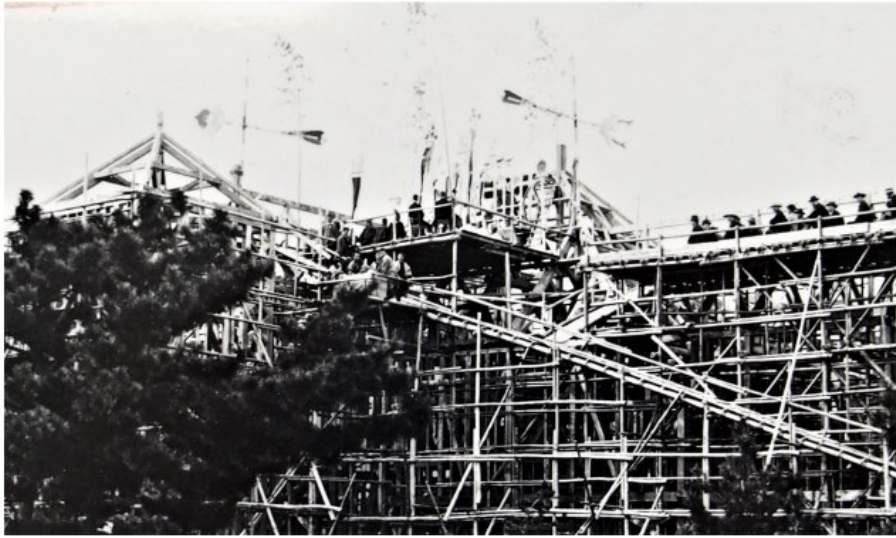
4. 7 須磨別邸の工法と意匠

須磨別邸の設計は、明治 33 年（1900）6 月 1 日に住友本店臨時建築部が発足すると同時に始まった。設計と併行する直営工事であり、同年 9 月には建築工場が現地に開設され、明治 34 年（1901）10 月 1 日に上棟式が行われている。次頁の写真は、その上棟式当日に関係者が足場の上に勢ぞろいした記念写真である。この写真からも分かるように、須磨別邸の構造は木構造であった。

須磨別邸と同時期に設計と建設が行われていた後述する中之島図書館は、鉄骨や組積造など複雑な混構造であった。それにも係わらず、外観の意匠で使われた材料は花崗石に限定され、簡潔な意匠の建築とされていた。須磨別邸では、中之島図書館とは対照的に、その構造は木構造という単純な工法であったにもかかわらず、その外観に使われた材料の種類は比較にならないほど多種多様なものであった。須磨別邸の外観上の特色として、多種の屋根材料や外壁材料を使った巧みなアンサンブルを挙げることができる。一方、須磨別邸内部については、写真と豊富な図面が『野口博士建築図集』に収録されていた。『野口博士建築図集』では、その全 78 頁中の 39 頁が須磨別邸の内部詳細図や展開図にあてられており、この須磨別邸内部の意匠設計にかけられた意気込みが伝わってくる。本節では『野口博士建築図集』に収録された詳細図や展開図を選択して紹介し、その意匠と工法について記述する。

本館と附属屋は、意図的に使われている材料やその意匠において異なるものとされた。

4. 7. 1 で本館について記述し、4. 7. 2 にて附属屋につき記述する。



(図4-54) 明治34年(1901)10月 須磨別邸本館上棟式当日の記念写真
左の宝形屋根が四角塔、奥に広間上部の寄棟の主屋根が見える

4. 7. 1 本館の工法と意匠

前述したように須磨別邸は、木構造という単純な構法でありながら、外観意匠に使われた材料の多様さには瞠目させられるものがあった。モルタル・天然スレート・金属・ガラス・木・煉瓦・石の順で記述する。なお内部意匠の図面についても抜粋して掲載する。

〈モルタル〉

外壁は、須磨別邸では日本で最初に輸入メタルラスを左官下地に用いたモルタル塗りの左官仕上げであった。住友の工事記録帳簿と『建築雑誌』の工法・業者に関する記載からこのことが確認できる(*1)。残された白黒写真からは、少し粗目のテクスチャーも感じられ、砂材の粒径や色調の配合は、日本で最初にモルタル塗を大面積に用いるものだっただけに、熟慮されていたと思われる。また野口は、英国のヴォイジー等が用いたラフキャストの左官塗壁工法を現地で確認していたのではないかと考える。現在でもスコットランド地方の住宅では、このラフキャストが多く用いられている。なお、ドーマー窓や煙突の立ち上がり部も、屋根材に天然スレート色に合わせたモルタルで仕上げられていた。

〈天然スレート〉

主要な屋根材として天然スレートが用いられていたが、2階ベランダ下の帯状の壁にも天然スレートが用いられていた。残された写真から、ベランダ下の天然スレート色は屋根材よりもかなり明るめのものであったことが分かる。天然スレートは、産地により色合い・品質が異なるものであり、2か所から産出された天然スレートを用いていたと思われる。

〈金属〉

八角塔の屋根は銅板葺きであるが、八角塔以外でも、天然スレート屋根の棟押えや谷廻り・ドーマー窓屋根・正面や脇玄関のポーチ屋根・八角塔の中間にある窓廻りそして各所の水切りに、自然発色で緑青となる銅板が用いられていた。銅は、中央主屋根の最高部の棟飾りや避雷針の足元の徳利型台座にも用いられており、これらはブロンズ等他の金属との合金であったものと推測する。また鉄材については、円筒形の煙突頂部、八角塔の手摺子そしてマルキーズの塔のガラス庇柱などに鋳鉄が使われていたと推定する。なお、ステンドグラス内部の線材は鉛であった。

〈ガラス〉

窓のガラスは、すべて英国製の磨きガラスであった。またマルキーズの塔のガラス庇は、半透明状であったと残された写真から推定する。ステンドグラスは、前述のとおり日本最初の本格的ステンドグラス製作者の宇野澤辰雄によるもので、ガラスは金属酸化物を混入させて製作する本格的なものであった。ステンドグラスの図像は、森のなかで西洋中世風の服装の女性3人が、1人が草を摘み2人が見守るものであったと外観・内観写真の拡大分析により推定した(*2)。何らかの図像的意味があったものと思われる。



(図4-55) 本館 各部
左上より時計回り

天然スレート屋根と棟飾り・煙突・ドーマー窓
マルキーズの塔のガラス庇
四角塔とベランダ廻り
緑青銅板葺き屋根八角塔
花崗石と煉瓦の腰壁
ステンドグラス窓

〈木部〉

木部は、外部木製建具・窓両端の中折れ型雨戸・ベランダ柱梁・切妻屋根端部のバージボード・ステンドグラス窓上部など円弧形ペディメント・窓バルコニーやベランダ手摺・1階ベランダ上部日除けガラリ・正面玄関ポーチ柱などに見られる。すべて濃茶色の塗装が施されていたと推定する。なお、窓両端の折れ型雨戸については、残された写真から外壁モルタル色に近い明灰色の塗装と推定し、ベランダ上部日除けガラリもかつての写真からやや濃い明灰色と推定した。

〈煉瓦〉

外壁が地上から立ち上がる腰壁の化粧に用いられていた。イギリス産であり、帳簿には「機械製煉瓦」の記載が残っている。

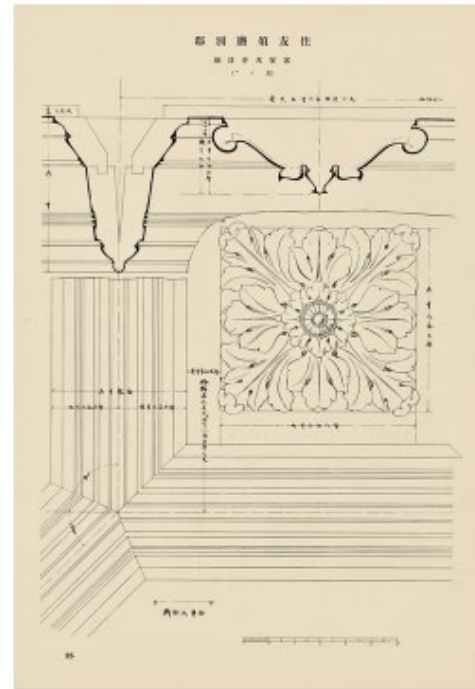
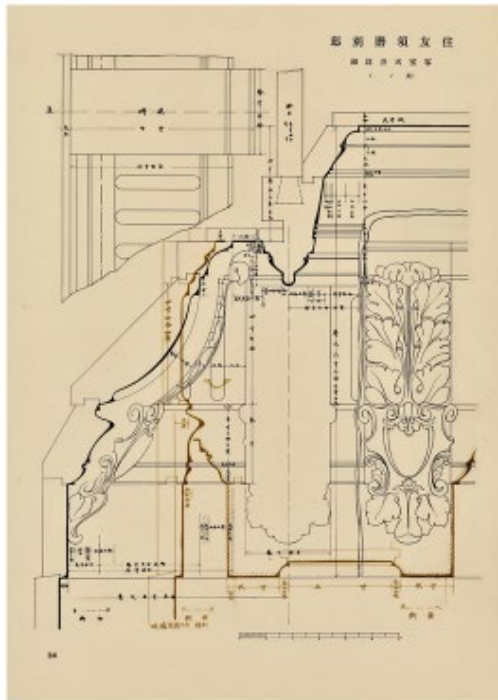
〈石〉

上記の煉瓦腰壁の上端部と下端部、および正面玄関の階段・脇階段廻りに、瀬戸内海北木島産と帳簿に記載のある花崗石が用いられていた。また前述したように、外部テラス・ベランダの床にはモザイク大理石が用いられていた。

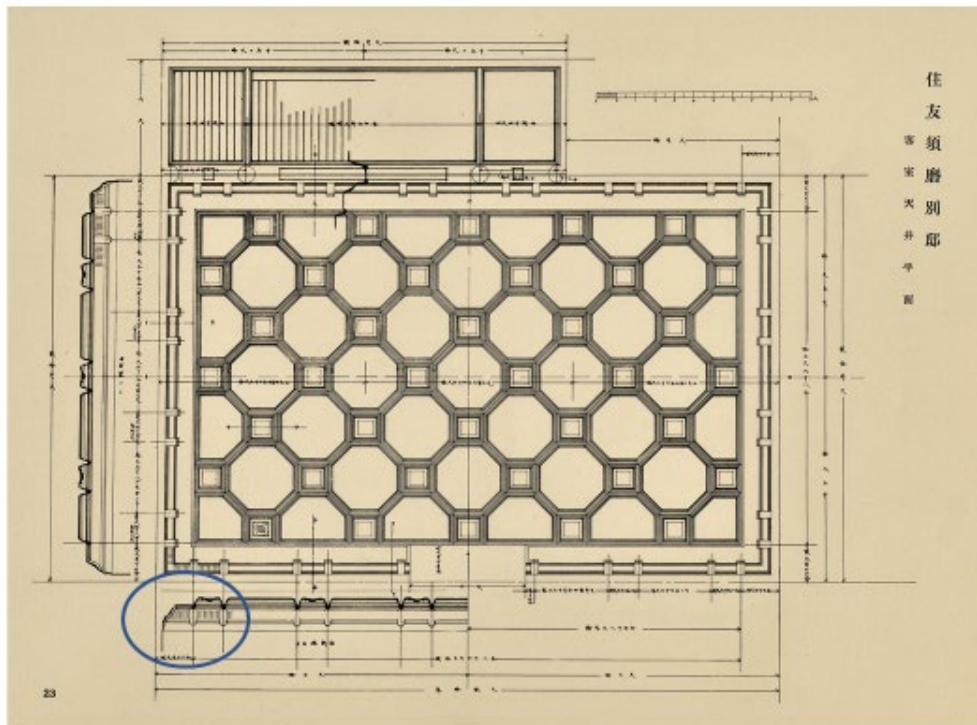
次に内部意匠の図面について紹介する。2階客室の天井意匠に関して残された図面が（図4-56～58）である。また（図4-59～62）では、2階客室の暖炉に関連する詳細図面を揃えた。これらは暖炉詳細図一式の一部であるが、野口の展開図意匠から細部へ、さらにそのまた細部へとおよぶ野口の段階的な意匠設計の緻密な展開に、野口の西洋建築についての膨大な修練を見ることができる。



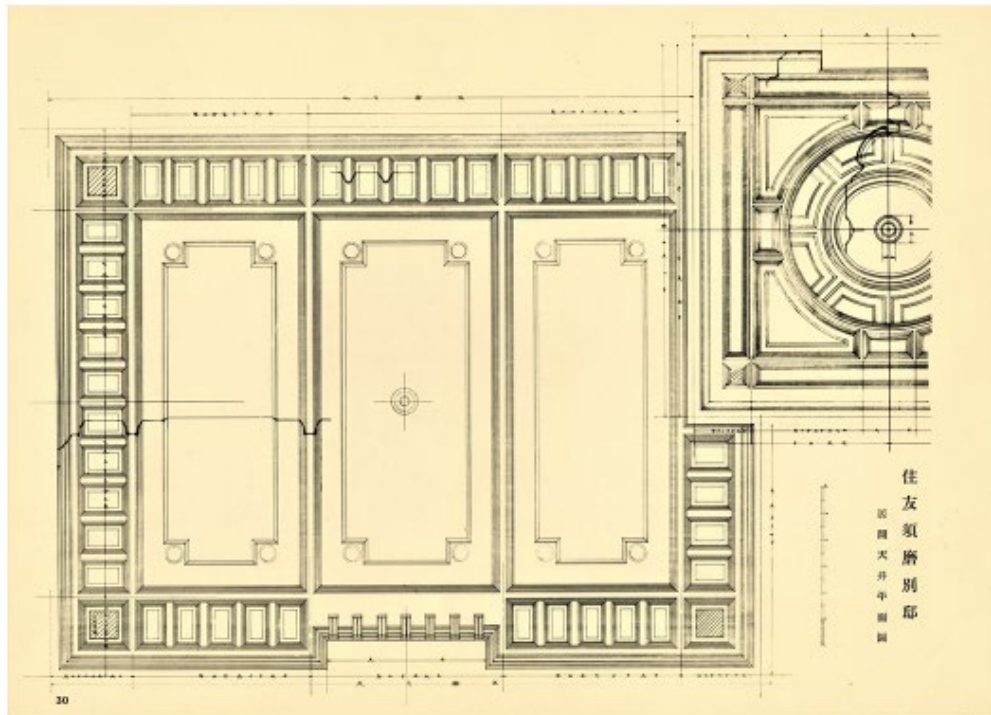
（図4-56） 2階客室 黄色の枠線で囲んだ部分の詳細図・天井伏図を別図に示す



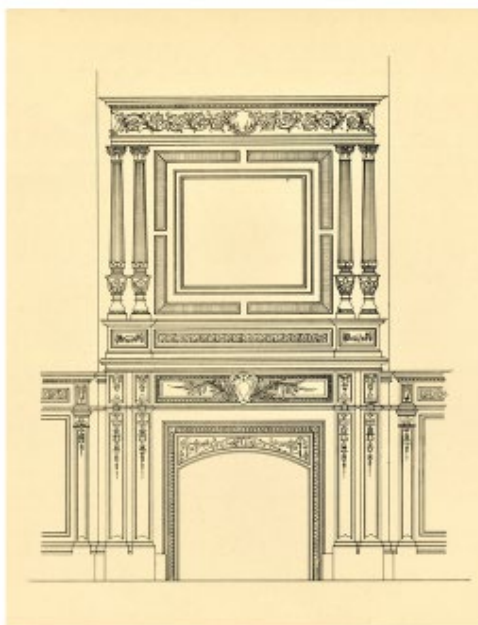
(図4-57) 2階客室 天井詳細 (図4-58)の天井伏図に青楕円で示した箇所の詳細



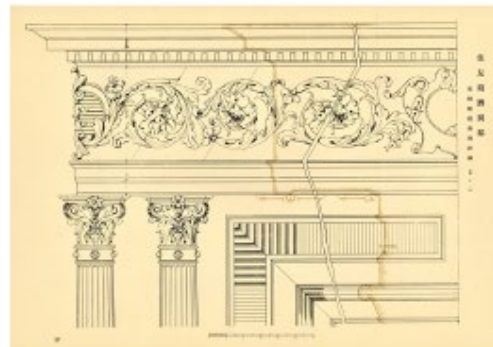
(図4-58) 2階客室 天井伏図 青の楕円で示した箇所の詳細図が(図4-57)



(圖4-59) 1階居間 天井伏圖

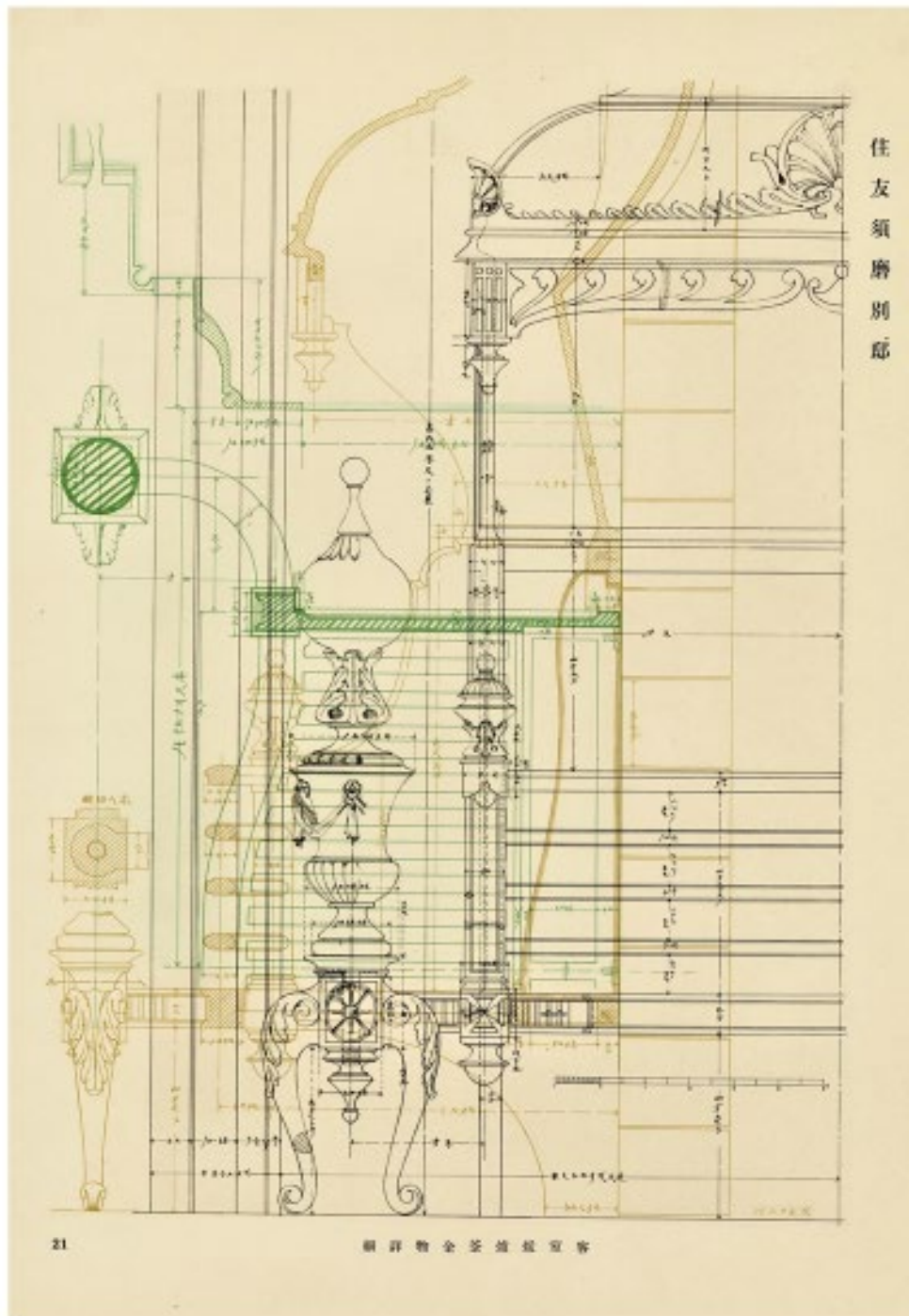


(上 圖4-60)
2階客室 暖炉前飾圖



(右上下 圖4-61)
2階客室 暖炉前飾 詳細圖





(圖4-62) 2階客室 暖炉釜詳細圖

黑色線：展開圖 綠色線：平面詳細圖 茶色線：断面詳細圖

4. 7. 2 附属屋の工法と意匠

附属屋の特徴は、下見板張りペイント塗装という外壁仕上げである。子弟の居住するゾーンは、迎賓などを目的とする本館とは区別し、質素なものとするというのが春翠の考え方であった。この附属屋に使われた下見板張りは、アメリカ人技師が開発の指導をしていた北海道において、明治の初年から使われていたものだった。優れた事例として、ボストン在住の建築家・ペイトマンが作成した図面で明治15年(1882)に建てられた札幌博物場や、明治13年(1880)に開拓使営繕課技師の安達喜幸設計による札幌の迎賓館だった豊平館が挙げられる。野口は、逓信省時代には北海道の仕事をしており、(図4-64)の「札幌博物場庭園」と記された水彩画スケッチも残していた。野口が札幌博物場を見ていたことは確実であろう。また現・NTTの位置にあった野口が設計した札幌電話交換局の工事現場の近接地には豊平館が建っていた。米国東海岸でも野口は、この工法を頻繁に目にしていただと思われる。



(左上 図4-63) 北海道大学農学部植物園
札幌博物場 明治15年(1882)
原案設計：C.J.ペイトマン
実施設計：開拓使工業局営繕課
(右上 図4-64) 野口孫市による
「札幌博物場庭園」と記された水彩画



(左上 図4-65) 豊平館 明治13年(1880)
開拓使営繕課技師・安達喜幸設計



(右上 図4-66) 札幌TV塔から見る現NTT位置(赤色丸)
と豊平館の旧位置(黄色丸)

附属屋の2階の屋根は本館と連続性を保つために天然スレート葺きとしていたが、本館正面の迎賓ゾーン等から見える1階の屋根等は、緑青銅板葺きとしていた。また南側の海岸に面する庭園側には、緑陰をつくり家庭的で穏やかな印象を生むパーゴラも設置されてい

た。なお附属屋正面玄関の上部にある2階突き出し部の意匠だけが、下見板張りではなかった。ハーフティンバー風に木造柱梁を真壁造で外に現し、その中を本館と同様にモルタルで塗り込んでいたのである。当時、モルタル塗りの左官仕上げが、いかに高級仕上げであったか推測できる。



(図4-67) 附属屋 鳥瞰及び各部
左上から時計回り

附属屋鳥瞰 附属屋玄関上部の2階突き出し部
1階南側学習室など居室前の外部廊下 外部廊下に連なるベランダ

註

- (* 1) 住友史料館・泉屋博古館編著 『「住友家須磨別邸復元模型」製作報告書』
本文 36頁 四 資料篇一文献 3頁
2017年 住友史料館・泉屋博古館
- (* 2) 前掲書 39頁

図版・写真

- (図4-54) 住友史料館所蔵
- (図4-55) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-56) 東京都立中央図書館特別文庫室所蔵木子文庫 木189-011
- (図4-57) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-58) 同上
- (図4-59) 同上
- (図4-60) 同上
- (図4-61) 同上
- (図4-62) 同上
- (図4-63) 筆者撮影
- (図4-64) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録1
- (図4-65) 筆者撮影
- (図4-66) 同上
- (図4-67) 泉屋博古館所蔵模型写真

4. 8 野口孫市が設計していた他の洋館邸宅群

須磨別邸において、野口が一貫して求めていたのは、卒業論文でも重要な主題として扱っていた、“Comfort”であった。日本人の生活習慣に根ざした西洋建築のありようを追求していたとも言えるだろう。須磨別邸は、住友家の家長の邸宅であり、住友本店の幹部役員等と規模や質そして建設コストにおいて、比較できないほど抜きん出ていることは事実である。しかし野口が設計した住友本店の幹部役員たちのために設計した住宅においても、野口が求めていたのは、その住み手にとっての“Comfort”であった。須磨別邸に比較すれば規模や建設コストは大きく下まわるものであったが、規模が小さいだけに、野口の考え方が凝縮して現れていたもとと考えられる。本節では、その野口の洋館住宅建築を概観することで、野口が求めていたことを探りたい。

4. 8. 1で、最も保存状態の良い旧・伊庭貞剛邸について詳述する。4. 8. 2では、移設保存された旧・田辺貞吉邸について保存調査報告書をもとに記す。4. 8. 3では、現存するが個人宅であるため調査を控えた鶴崎平三郎邸、および現存していない志立鉄次郎邸について文献より紹介する。

なお、野口が設計した重要な洋館として住友家日暮別邸があるが、これについては第6章で詳述する。また野口は和風の邸宅も設計しているが、これらは「第7章 野口孫市の和風邸宅建築」として別に記す。

4. 8. 1 旧・伊庭貞剛邸「活機園」

第2代住友総理事であった伊庭貞剛（1847～1926）が、明治37年（1904）、琵琶湖南端の滋賀県大津市石山に「活機園」と称し建てた別荘である。

伊庭貞剛は、明治維新後の新政府にて司法省小検事・函館裁判所権少判事を経て大阪上等裁判所の判事へと昇進を続けていたが、常に「公」を理念としていた伊庭にとって、薩長の藩閥政治が横行し明治維新の自由闊達な気風が消えていた官界は自分がいるべき所ではないと悟り判事を辞した。その時に母方の叔父で住友家の総理代人（後の総理事）であった広瀬幸平からの勧めがあり、明治12年（1879）住友に入社することとなった。翌年には大阪本店支配人に就任し明治27年には別子鉱山支配人、明治33年（1900）に住友総理事に就任している。この時期の住友にとって最も困難なことが、別子鉱山の煙害問題であった。その解決のため、伊庭は瀬戸内海の四阪島に製錬所を移転する大事業を貫行した。この四阪島への製錬所移転については、住友家日暮別邸を主題とする第6章で詳述する。

伊庭は、「難事には自らこれに当たり、難事が去れば退いて後継に道を譲る」という思想を貫いており、「事業の進歩発展に最も害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である」として、明治37年（1904）58歳で住友総理事を辞し、石山に活機園を建て隠棲した（*1）。伊庭の高潔な人柄には多くの人が感銘を受けており、野口もその一人であったと推測する。

伊庭は、京都嵯峨野・天竜寺の峩山和尚とも親しく交わっており、禅の精神を背骨とするような生き方を貫いた。その禅では、「自然（じねん）」を真の实在として、人間の浅薄な論理や思慮分別を加えることなく純粹に経験することを大切にしている。

その当時、「和」と「洋」は融合できるものではなく区別して考えるのが、一般通念であった。邸宅建築においても、和館と洋館は別々に建てられ、その間を渡り廊下でつなぐことが一般的に行われていた。辰野金吾設計の旧・松本健次郎邸やコンドル設計の旧・岩崎久彌邸にも、別々に建てられた和館と洋館の構成に当時の常識を窺うことができる。しかし活機園では、「和」と「洋」が一体の邸宅建築として設計され建てられた。現在では当たり前のことであるが、当時では画期的な和洋の建築の在り方であった（*2）。もちろん野口の設計によるものであるが、そこには伊庭の「和」「洋」といった区別にとらわれない自由で伸びやかな発想が背後にあったものと思われる。「和」と「洋」は一本の背骨のような軸線にそって並置され、中央の玄関から左と右に「和」と「洋」が一直線に並べられた。ここでも、野口の須磨別邸の設計と同様、骨格の明確な建築的な思考を見ることができる。重要なことは、その和館と洋館が建築としてだけでなく、建築と庭園がそれぞれ一体のゾーンとして設計されていたことである。次頁の（図4-70）のように、洋館には芝生の広がりある洋風の庭を、そして和館には伊庭が好んだモミジを基調とする和風庭園をそれぞれに連続させていた。

(下・右 図4-68) 1階・2階平面図

(右端 図4-69) 配置図



(図4-70)

左：和館庭園 中：玄関前アプローチ 右：洋館庭園

伊庭貞剛は、現在の滋賀県近江八幡市（旧・近江国蒲生郡）に生まれているが、その育った地の琵琶湖の風光に戻るように、隠棲後の住まいを琵琶湖やそそぎ込む瀬田川の流れを見おろす小高い丘の景勝の地・石山に求めた。100年以上を経た現在でも活機園は、手入れの行き届いた庭園のなかに年月を経た穏やかな風格を感じさせる佇まいで建っている。

全体設計と洋館の設計は野口孫市であり、和館の設計は2代目・八木甚兵衛であった。洋館の意匠は、野口式アーツ・アンド・クラフツとでもよべる独特の邸宅建築である。1階外壁では、かつて別子鉱山の離任に際して職員一同から伊庭に餞別として贈られた土佐の枹材をシングル張りに用いている。また1階の開放されたベランダの柱間上部には、須磨別邸とおなじように水平ルーバーが取り付けられた。ベランダやシングル張は、米国東海岸のシングル・スタイル・ハウスを思わせるものがある。東の琵琶湖にそそぎ込む瀬田川河口を見渡す2階客室のバルコニーでは、伊庭の漢詩など中国的教養を表すように手摺の組子やバルコニーを支える骨太い腕木や持送りに中国風意匠を見せている。また切妻面上部には日本建築の簷子（ささらこ）下見板張りが用いられた。英国・米国・中国そして日本の意匠的要素が、自然に溶け合っ一つになった折衷的な建築である。

2階外壁は須磨別邸と同じく白色のラス下地モルタル仕上げとしている。また2階では、野口が活機園以降の洋館邸宅設計でよく使うようになった、サンルームのようなガラス窓で囲まれたベランダが外観の特徴となっている。屋根は棧瓦葺きであるが、中央屋根の最上部には避雷針付き棟飾りが施され、ドーマー窓があることも須磨別邸と共通していた。

(左 図4-71)

2階客間切妻面の窓とバルコニー、上部に能子下見板張り

(左下 図4-72)

1階書斎 外壁シングル張と窓

(右下 図4-73)

旧・伊庭貞剛邸 活機園



内部意匠については、次頁の(図4-74)で示すとおり2階客室の床は寄木張り、天井は木の吹寄せ格天井である。暖炉のあるアルコーブには、「望湖」の書がかかっている垂れ壁が前面にあり、この暖炉廻りに英国のイングルヌックを思わせるものがある。

(図4-75)の壁上部の窓から光が入る吹抜け階段室では、アカンサスを模した彫り物のある階段親柱や組パネルのような意匠の手摺りをもつ階段が、直線を基調とする端正な印象を与えている。一方、(図4-76)の2階寝室の暖炉前飾りの意匠には緩やかな曲線を入れ、簡素な中にも優雅な表情を与えている。(図4-77)は1階食堂の暖炉上部にある石膏レリーフの装飾である。この装飾には、同時代の英国グラスゴー派・マッキントッシュ特有の植物デザイン模様を思わせるものがある。

1階の食堂や書斎は、前面の明るい芝生の広がる洋風庭園につながっており、2階の客室や寝室の窓からは、湖国の景観を広く望むことができる。住友家須磨別邸が、春翠を主人公として「須磨」の物語をさらに展開したものとすると、活機園は伊庭貞剛を主人公として「湖国」や石山寺など歴史ある地の物語をさらに絵の具を重ねるように紡ぎ上げた建築と言えるだろう。

平成14年(2002)、文部科学省から国の重要文化財に指定された。



(左上 図4-74) 2階客室
 (右上 図4-75) 1階階段室
 (右端 図4-76) 2階寝室暖炉
 (右中 図4-77) 1階食堂暖炉上部
 石膏レリーフ装飾

4. 8. 2 旧・田辺貞吉邸

田辺邸は、緑豊かな六甲山系南麓の緩やかな傾斜地に位置していた。当時は大阪湾を望むこともできる武庫郡住吉村と呼ばれた地であった。現在では神戸市東灘区住吉本町となっている。明治7年(1874)開通の神戸・大阪間の鉄道路線で住吉駅ができたことにより、成功した財界人がこの住吉や御影の利便性と住環境にふさわしい気候・地理環境に着目し、居住地として求めるようになった。著名な財界人の邸宅では、野村徳七郎・岩井勝次郎邸・村山竜平邸・大原孫三郎邸・弘世助三郎邸などが挙げられる(*3)。

田辺貞吉邸は、明治41年(1908)に竣工した。田辺貞吉(1847~1926)は明治維新後、千葉県大属などを経て明治10年(1877)東京府師範学校校長となった人物であった。しかし住友に請われ、明治14年(1881)に住友本店に入社、同15年理事、同18年には本店副支配人となった。明治28年(1895)の尾道会議で住友銀行の設立が決まると、その初代住友銀行本店支配人も兼務している。しかし前述の伊庭貞剛が後進に道を譲るため本店総理事を辞した時、田辺も共に明治37年(1904)住友を辞した。その後、余生を送る邸宅として建てたのが野口の設計による田辺貞吉邸であった。この田辺邸は後に数奇な運命を辿っている。様々な事情により、大正4年(1915)にこの屋敷・

邸宅は住友家に譲られた。大正12年から茶白山本邸の建物が住吉に移設され、昭和12年までこの住吉の旧・田辺邸が大幅に増築され住友本邸として使われていた。



(上 図4-78) 旧・田辺貞吉邸 南側外観
(下 図4-79) 同上 北側外観



(図4-80) 旧・田辺貞吉邸
上：2階平面図 下：1階平面図

戦後は昭和52年(1977)から住友修史室(現・住友史料館)として使われ、平成7年(1995)の阪神淡路大震災後は、洋館のみ京都一乗寺に移転され、武田薬品工業株式会社の京都薬用植物園の展示棟となり現在に至っている。

野口が設計した当初の建物は、洋館の西側に隣接して平屋の和館が存在していた。和洋の建物が横並びになる構成は伊庭邸と同様であるが、玄関はそれぞれ別になっていた。内部では1階のドアでつながっていたが、田辺邸では明治の一般的な和館・洋館の構成が継承されていたと言える。洋館が独立性を持っていただけに、後年さまざまに利用できたのだろう。

2階平面面に「縁側」と書き込みのあるスペースも伊庭邸と同様にガラス張のサンルーム的なものであり外観の特徴ともなっていた。1階外部ベランダの柱間上部の水平ルーバーも同様である。田辺邸では、シングル張が2階外壁に用いられていたが両者ともよく似た内外の構成であった。(図4-81)に示した2階東側客室の暖炉廻りアルコーブは、伊庭邸と同様に英国イングルヌックを思わせるものがあつた。また直線的な意匠を基にした階段、暖炉廻りや木製パネル・家具デザインにも共通するところが多い。

伊庭邸で考え出された邸宅建築の「型」が、田辺貞吉の考え方と住吉の地にあわせて調整や修正が加えられていたと思われる。



(左上 図4-81) 2階東側客室

(左下 図4-83) 食堂飾棚 (中下 図4-84) 階段手摺

(右上 図4-82) 1階食堂

(右下 図4-85) 2階西側客室暖炉

4. 8. 3 鶴崎平三郎邸と志立鉄次郎邸

鶴崎平三郎邸は、明治41年(1908)に竣工した。鶴崎邸を訪れた坂本勝比古は、下記のように記している。

旧鶴崎平三郎邸は、須磨一の谷の高台に位置し、須磨の浦を一望に見渡せる恰好の場所に建っている。この住宅は野口孫市が結核にかかり療養生活を送った須磨療養院の院長宅であり、とくに室内の意匠のなかにみるべきものをもっている。セセッション風の階段親柱、アール・ヌーヴォー風の出入扉のステンドグラスの意匠などは秀逸である。また日本の高温多湿な条件を考え、応接室の天井を割竹を用いた網代風の折上げ天井としている(*4)。

また坂本は、(図4-88)のヴォイジー設計の英国チェスウィックのサンダーソン・ファクトリーのドローイングを引用し、鶴崎邸の塔状のコーナー部のパラペットとの相関にも言及している。確かに野口は、住友関係者の邸宅におけるよりも、さらに自由で先駆的な意匠に取り組んでいたようである。



(左上 図4-86)

鶴崎平三郎邸外観 明治41年(1908)竣工

(右上 図4-87)

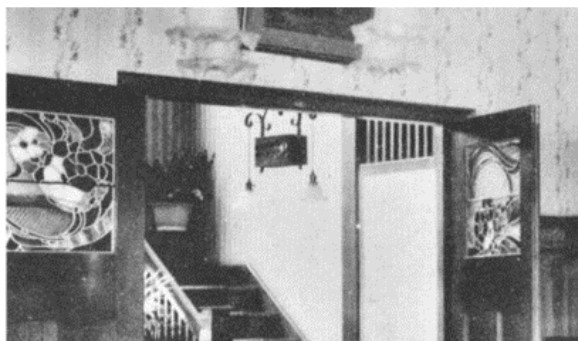
鶴崎平三郎邸 塔状隅部拡大写真

(右下 図4-88)

C.F.A.ヴォイジー設計 サンダーソン・ファクトリー(1902)



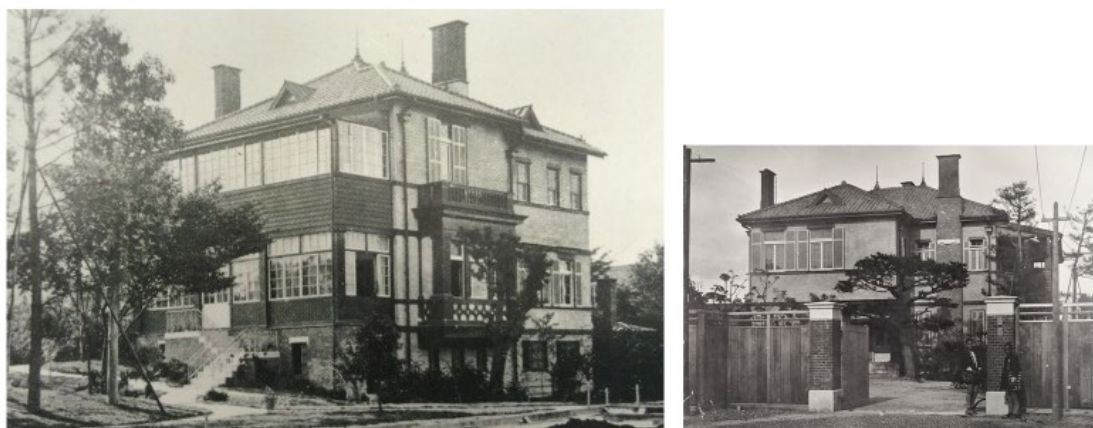
(図-89) 鶴崎平三郎邸 内観



(図-90) 鶴崎平三郎邸

居間扉の上にはめ込まれた
アール・ヌーヴォー風ステンドグラス

下の(図4-91)は、日本銀行より住友に招聘された志立鉄次郎の大阪上本町に建った邸宅である。建設年は不詳であるが、志立の住友入りが明治32年であり、大正2年に志立は日本興業銀行総裁となり住友を去っているため、1900年から1910年の間頃と思われる。志立邸も鶴崎邸と同じく伊庭邸を原点とする邸宅建築から飛翔し、1・2階ともベランダ・サンルームと推測する部屋の全幅に、当時では珍しいガラス窓壁をデザインしていた。(図4-91)のベイウィンドウも、外観のなかでアクセントのある意匠となっていた。



(図4-91) 志立鉄次郎邸 建設年は1900～1910の間頃

註

- (* 1) 末岡照啓著『伊庭貞剛小伝 - 環境対策の先駆者』 14頁
2011年 新居浜市広瀬歴史記念館
- (* 2) 和館・洋館の連続的直線配置の代表的事例としては、後年の大正2年(1913)に竣工した、現・国指定重要文化財の六華園・旧諸戸清六邸(三重県桑名市)が挙げられる。洋館の設計はジュサイア・コンドルであり、和館の設計施工は伊藤末次郎によるものだった。
- (* 3) 坂本勝比古著
『旧田辺貞吉の建築を巡って - 旧田辺邸移築再生保存調査報告書より -』(別刷)
17～21頁 1997年
- (* 4) 坂本勝比古著『日本の建築 明治・大正・昭和 (5)商都のデザイン』 121頁
1980年 三省堂

図版・写真

- (図4-68) 住友活機園作成パンフレット
- (図4-69) 『月刊 文化財』465号
- (図4-70) 筆者撮影
- (図4-71) 同上
- (図4-72) 同上
- (図4-73) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-74) 筆者撮影
- (図4-75) 同上
- (図4-76) 同上
- (図4-77) 同上
- (図4-78) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-79) 同上
- (図4-80) 同上
- (図4-81) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-82) 坂本勝比古著
『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』8頁
- (図4-83) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-84) 『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』9頁
- (図4-85) 同上 8頁
- (図4-86) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-87) 『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』2頁
- (図4-88) 同上 5頁
- (図4-89) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図4-90) 同上
- (図4-91) ベイウインドウ側外観写真
『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』2頁
正面玄関側外観写真
住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号①1-3

4. 9 明治期洋風邸宅建築のなかでの須磨別邸の歴史的位置づけ

この節では、明治期における日本の洋風邸宅建築のなかで、須磨別邸以前と以後に分けて、須磨別邸がどのような建築史的な位置づけにあったかを考察する。概して、須磨別邸以前の洋風邸宅建築は主要部において左右対称を基本とする構成であったのに対し、須磨別邸以後の洋風邸宅建築は左右対称にとらわれず自由な全体構成へと移行しており、須磨別邸は建築史的な過渡期にあった洋風邸宅建築であると思われる。

4. 9. 1 須磨別邸以前もしくは同時代の洋風邸宅建築

横浜や神戸の外国人居留地以外の明治期の洋風邸宅は、明治の半ばまで、西郷従道邸のレスカス等外国人技師によるものか、住友本家の鰻谷洋館を建てた八木甚兵衛のように、日本人大工棟梁が外国人居留地の洋館を学んで建てる洋館が大半を占めていた。

明治10年(1877)のジョサイア・コンドル(1852~1920)の来日以降、コンドル自身が三菱や三井などの財閥関係の邸宅を設計し、またコンドルが教える工部大学校を卒業した辰野金吾や片山東熊などがそれぞれ、渋沢栄一等新興財界人の邸宅や、宮内省内匠寮の長として皇室関係の邸宅などの設計を行っていた。また RIBA の資格を持つ英国人建築家 A.N.ハンセル(1857~1920頃)も、神戸を拠点として設計を行っていた。



(左上 図4-94) A.N.ハンセル設計 旧ハッサム邸
明治35年(1902)

(右上 図4-95) ジョサイア・コンドル設計 旧岩崎久彌邸洋館
明治29年(1896)

(左上 図4-92)
片山東熊・宮内省内匠寮設計
仁風閣
明治40年(1907)

(右上 図4-93)
辰野金吾設計
渋沢栄一郎
明治21年(1888)

前頁に挙げたいずれの例でも、主要立面においてベランダを用いているものの、当時の様式的規範である左右対称を基本とする中心軸を持つ邸宅建築であった。コンドル設計の旧・岩崎久彌邸は、かなりフレキシブルな平面構成となっているが南面の主要立面は左右対称であった。須磨別邸のように、自由な平面計画と絵画的な構成を持つ邸宅建築は、まだ現れていなかった。このような建築的状況のなかで、須磨別邸は画期的な邸宅建築として現れたのである。須磨別邸は、左右が非対称のいわゆるダイナミック・バランスを意図的に目指した、日本では全く異なるタイプの建築であった。藤森照信は、これを「自由様式」と名づけその著書で記述している（*1）。

4. 9. 2 須磨別邸以降の洋風邸宅建築

須磨別邸は明治36年（1903）に完成した。明治36年7月発行の『建築雑誌』第199号でも図面や写真で紹介されたが、須磨別邸の誕生後、少し年月をおいた明治40年を過ぎた頃から、左右非対称の自由な平面を持つ洋館が続々と建てられるようになった。さらに須磨別邸竣工の20～30年後の大正後期から昭和初期にかけては、まさしく花が開いたように様々な「自由様式」の邸宅建築が登場した。英国の新潮流で見られたチューダー風を取り入れたハーフティンバー様式や、昭和初期に世界的な流行をみせるアール・デコ様式も現れている。須磨別邸は、言わばその歴史的展開のピボット軸のような史的位置にあった。



(左上 図4-96) 武田五一設計 芝川又右衛門邸
明治44年（1911）

(右上 図4-97) 辰野金吾設計 旧松本健次郎邸
明治44年（1911）

(左下 図4-98) 鴫飼長三郎設計・伊東忠太顧問
二楽荘 明治42年（1909）

三つのプロジェクトを前頁の(図4-96~98)で挙げた。いずれも須磨別邸竣工から6~7年を経過した明治40年代のものである。一つは「辰野金吾のアール・ヌーヴォー」といわれる北九州市戸畑にある旧・松本健次郎邸であり、他の二つは、野口と同じ第2世代である伊東忠太や武田五一が、設計もしくは関係した阪神間に位置した作品である。旧・松本健次郎邸や二楽荘では、左右対称とはいわぬまでもまだ中央軸線の残影が残っていた。芝川又右衛門邸になってはじめて、須磨別邸後に「自由様式」といえる邸宅建築が現れたといえよう。

明治42年(1909)竣工の二楽荘は、伊東忠太の助言を受けてはいるが、実質的には西本願寺技師の鶴飼長三郎が設計したものである。伊東は昭和9年(1934)に築地別院を印度的建築として設計しているが、その10数年前から鶴飼は、西本願寺の建物に印度的建築を取り入れていた。この二楽荘は、それらの端緒として考えられる(*2)。この建築は、浄土真宗本願寺派第22世法主・大谷光瑞(1876~1948)の別荘として建てられたもので、光瑞は須磨別邸における住友春翠のような存在であった。光瑞は、明治36年(1903)に須磨の高台にある2万6000坪の広大な敷地に月見山別荘を建設したが、明治40年(1907)に宮内省より買い入れの申し入れがあったためこれを宮内省に譲り、新たな別荘を神戸・岡本の六甲山山麓の山林も含む24万6000坪の広大な敷地に建設した。これが二楽荘である。一方、須磨月見山別荘の地は皇室の武庫離宮となった。二楽荘の八角塔は、インドのファーテーブル・シークリーやタージマハル廟などの塔から鶴飼がインスピレーションを得たものであろうが、須磨別邸の八角塔を思わせるものもある。

旧松本健次郎邸は、大阪にあった辰野片岡建築設計事務所の設計によるもので、洋館の設計は辰野金吾である。和館の設計は、安川松本臨時建築部の建築主任であった久保田小三郎による。その久保田は、洋館の現場主任も行ってた。久保田は、かつて住友本店臨時建築部の野口孫市のもとで中之島図書館を現場主任として完成させた人物であった。また日高胖設計の日本初のアール・ヌーヴォーである神本理髪店の現場主任も行ってた。久保田は、旧松本家住宅のプロジェクトにおいて実質上、師の辰野金吾のもとに帰っていたのである(*3)。旧・松本邸の洋館内部は木質系のデザインによるアール・ヌーヴォーであるが、その平面構成には、まだ中央軸のある従来の建築規範の考え方が残っていた。

建築史的潮流のなかでは、野口の京都の第三高等学校や帝国大学工科大学造家学科の3年後輩にあたる武田五一が、野口の「自由様式」の後継者にあたるといえよう。武田は、英国を中心として明治34年(1901)から2年4か月に及ぶ留学をしていた。1年余をすごした英国ではグラスゴー派に色濃く影響を受けているが、パリ・ウィーンなどのアール・ヌーヴォーやゼツェッションにも影響を受けて明治36年(1903)に帰国した。三井や住友とともに長者番付に名を連ねた大阪商人である芝川又右衛門が、武田五一に設計を依頼し、明治44年(1911)に西宮市甲東園に竣工した別荘が(図4-96)の芝川又右衛門邸であった。この芝川邸は、阪神淡路大震災により損傷を受けたため、愛知県犬山市の博物館

明治村に移設・修復され現在に至っている。グラスゴー派やゼツェッションの影響を受けながらも数寄屋など日本の伝統を融合させた洋館である（*4）。

註

- （*1） 藤森照信著『日本の近代建築（下） -大正・昭和篇-』 102～105頁
1993年 岩波新書
- （*2） 長谷川尚人『明治大正昭和初期、西本願寺関連施設研究序説
-二楽荘に於ける鶴飼長三郎の役割-』 23-1～4頁
- （*3） 工学院大学建築学部同窓会誌編集部編著
『工手学校-日本の近代建築を支えた建築家の系譜-工学院大学』 46～51頁
2012年 工学院大学建築学部同窓会
- （*4） 足立裕司著
『武田五一の建築観とアーツ・アンド・クラフツ運動 武田五一研究（6）』
2014年 日本建築学会

図版・写真

- （図4-92） 仁風閣 Wikipedia free media repository
- （図4-93） 藤森照信著『日本の建築明治大正昭和 〈3〉 国家のデザイン』 117頁
1979年 三省堂
- （図4-94） 筆者撮影
- （図4-95） 小野木重勝著『日本の建築明治大正昭和 〈2〉 様式の礎』 7頁
1979年 三省堂
- （図4-96） 博物館明治村所蔵
- （図4-97） 旧松本家住宅 Wikipedia free media repository
- （図4-98） 藤森照信著『日本の近代建築（下） -大正・昭和篇-』 27頁
1993年 岩波新書

4. 10 当時の英国の建築的潮流と米国東海岸からの影響

第1部の「2. 1. 4 野口孫市による西洋建築の透写習作」にて記したように、野口は、西洋の建築手法を自家薬籠中のものとするために大量の西洋建築の透写習作を行っていた。また“The Studio”誌をはじめとする様々な情報媒体により欧米の建築事情を旺盛に吸収していた。そして1年あまりにわたる欧米への建築視察巡遊にも行っていた。

須磨別邸の設計にも、それら野口の西洋建築についての修練が如実に現れていた。本節では、なかでもどのような英国と米国の建築的潮流に野口が影響を受けていたかに着目する。

19世紀後半までの英国では、主流であった新古典様式に並行するように様々な建築様式が生まれていた。なかでもクィーン・アン・リバイバル様式や英国建築のヴァナキュラーな伝統を取り込んだオールド・イングリッシュ様式などに長けたリチャード・ノーマン・ショウ（1831～1912）、そして純粋な幾何学形態で装飾も凹凸もほとんどない白い壁で強調された住宅を数多く設計していた C.F.A.ヴォイジー（1857～1941）などによる建築作品に、野口の須磨別邸設計への影響を見ることができる。両者はともに、英国のアーツ・アンド・クラフツの芸術的潮流のなかで位置づけられていた。

須磨別邸の特徴を三つ挙げるならば、絵画的な外観構成、左官塗壁による白い外壁、そして外部に溢れ出るような自由な平面構成などであろう。ショウなどのオールド・イングリッシュ様式の特徴として「ピクチャレスク」という表現がなされているが、須磨別邸ではこの影響が見られる。白い外壁についてはヴォイジーからの影響が見られ、最後の自由な平面構成については米国東海岸からの影響が考えられる。

須磨別邸建設の本来の目的は、欧米巡遊で西洋上流社会の社交や生活儀礼を見聞した春翠が、「西洋上流社会の生活様式による、英国流の国際的社交の場と子女教育の場が是非とも必要である」と考え本格的な洋館を建てようとしたことにあった。住友は昔から海外の客人との接触も多く、須磨別邸は、海外からの賓客をもてなすことも設計の前提としてあった。当然ながら海外の賓客から見ても「本物」でなければならない。春翠や野口が目指したものは、決して贅を尽くすのではなく、西洋の流儀で須磨の風光と日本文化を背景にホスピタリティを表すことのできる「本物」の建築であった。西園寺公望という国際人を兄に持ち欧米を熟知する類まれな美意識を持つ春翠を満足させる建築でなければならなかった。極めて高い達成すべき水準が設定されていたのである。英国の新潮流にあるデザインであっても、借り物のような模倣はできない。この須磨の地の風土や文化から立ち上がるような洋館でなければならなかった。

須磨別邸の建築は、何々様式として表すことができない。アーツ・アンド・クラフツの影響も見られ、また米国東海岸のいわゆるヴィクトリアン・コロニアルの影響もある。しかも、前節で述べたように、日本的な建築構成の要素も溶け込ませた建築でもあった。この多義性に野口の建築術が現れている。野口が西洋建築の修練で培い自家薬籠中のものとしたさまざまな設計手法を、まるで手品のように融合させて建築にして見せたのである。

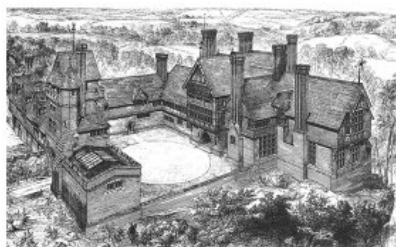
4. 10. 1 英国の建築的潮流から

(1) オールド・イングリッシュ様式とピクチャレスク

下の(図4-99)で示した野口のB.N.Dec,1879の記載のあるドローイングは、第1部の「2. 1. 4 野口孫市による西洋建築の透写習作」で示したものである。この習作では、特に屋根の構成にて大小様々な屋根が数多くの煙突とともに絵画的に複雑に組み合わせられていたことが顕著に示されている。また、奥には宝形の屋根を持つ塔も描かれていた。

(図4-101)は、19世紀後半の代表的な英国の建築家の一人であるリチャード・ノーマン・ショウ(1831~1912)設計のレイズ・ウッドと呼ばれる邸宅である。英国のチューダー様式をハーフティンバーやゲブル屋根を用い自由に構成し直した様式を作り出したもので、オールド・イングリッシュ様式を代表するような建築であった。ショウの邸宅プランニングは、ショウ自身が「最初に一つの部屋を書き、その廻りにさらに部屋を書き足してゆく」とやや冗談めかして語っていたと言われるが(*1)、それはフレキシブルで付加的なものであり、同様に立体を加えてゆくピクチャレスクとよばれる構成となっていた。

ピクチャレスクという考え方は、18世紀末の英国において、絵画を描くような風景式庭園の分野で語られはじめたが、19世紀後半には建築の分野でも一つの美学的概念として使われるようになっていた。(図4-100)で須磨別邸復元模型の俯瞰写真を並べたが、須磨別邸においてもピクチャレスクという特徴が現れていたといえるだろう。



- (左上 図4-99) 野口のオールド・イングリッシュ様式建築
習作ドローイング B.N. Dec 26, 1879の記載
左上に平面図スケッチ
- (右上 図4-100) 住友家須磨別邸復元模型
- (左下 図4-101) リチャード・ノーマン・ショウ設計
レイズ・ウッド 1869年

(2) C. F. A. ヴォイジーと白い壁

須磨別邸の外壁は、モルタル塗による左官仕上げだが、この工法は1890年代に欧米で確立されていた。これは耐久性を高める金網状の下地ラスを貼る工法で、木造住宅に適した外壁仕上げであった。須磨別邸では、日本で最初の輸入メタルラス工法が左官下地に使われており、日本の邸宅建築でこのように大きな壁面をモルタル塗りとしたのは、須磨別邸を嚆矢とする。

ヴォイジー(1857生)は、ウィリアム・モリス(1834~1896)やフィリップ・ウェップ(1831~1915)などの第1世代に続く、英国アーツ・アンド・クラフツの第2世代である。野口は“The Studio”という英国の文献を購読していたが、この文献にはヴォイジーの作品もしばしば紹介されていた。ヴォイジーは、英国中部で採れる良質の石灰岩から作られるモルタルを用い、ラフキャストという左官塗壁工法で住宅建築のシンプルな外壁をデザインしていた。これらは、英国中部のコッテージ風民家の伝統的工法による手作り感を残しながらモダンにデザインされたものであり、“The Studio”を通じて、野口もこの設計手法を熟知していたことと思われる。(図4-104)は、塗壁を施された英国コッテージ風民家を基調とするカントリーハウスの第1部で紹介した野口による習作ドローイングの一部である。

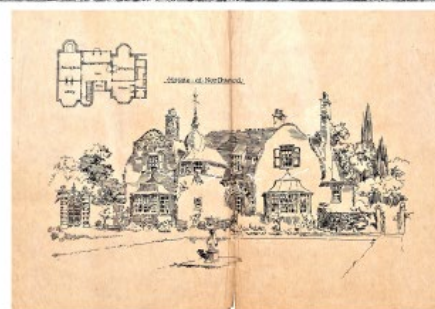
(図4-103)は、スコットランドに近いウィンダーミア湖畔に佇む、ヴォイジーの設計によって1898年に完成したブロードリーズと呼ばれた邸宅である。1925年からは、“Windermere Motor Boat Racing Club”のクラブハウスになっている。春翠は、外遊中にウィンダーミア湖畔で休養をとっているが(*2)、第1部の「2. 1. 5 欧米建築視察巡遊」で述べたように、春翠の経験を理解するため、おそらく野口もウィンダーミア湖周辺を訪れ英国のコッテージ風民家を眼にしていたものと思われる。



(左上 図4-102) 住友家須磨別邸復元模型

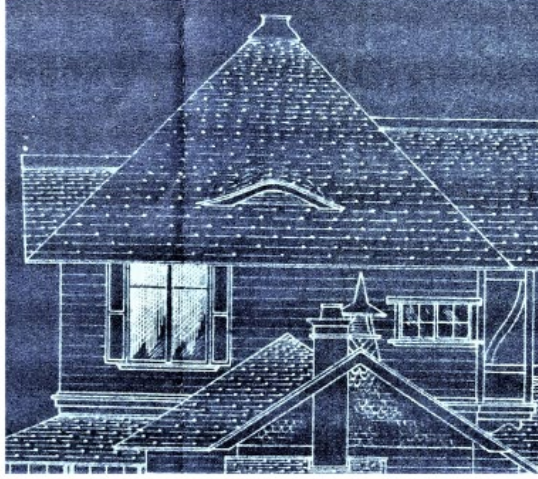


(右上 図4-103) C.F.A.ヴォイジー設計による
ウィンダーミア湖畔に佇む
ブロードレイズ 1898年

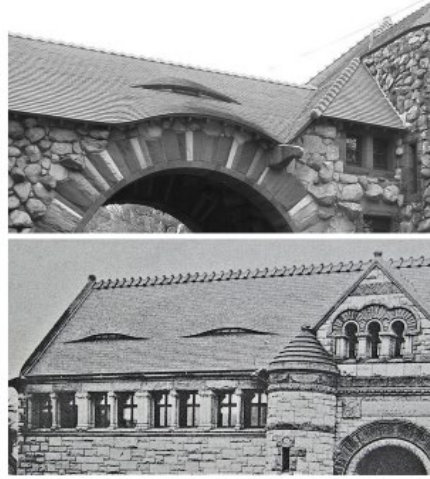


(右下 図4-104) 英国カントリーハウスの
野口による習作ドローイング
左上に平面図スケッチ

4. 10. 2 米国東海岸から



(図4-105) 須磨別邸 附属屋の西端部寄棟屋根に半眼窓が描かれた立面図部分
(最終案は切妻で、半眼窓はなし)



(上 図4-106) H.H.リチャードソン設計
F.L.エイムズ・ゲート・ロッジ 1881年
(下 図4-107) H.H.リチャードソン設計
クレイン・メモリアル図書館 1883年

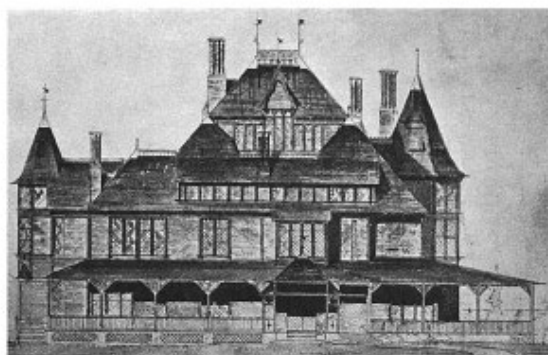
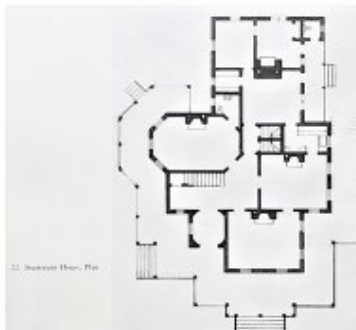
上の(図4-105)の須磨別邸の図面には、附属屋の西端部寄棟の傾斜屋根にデザインされた半分眼を開いたような不思議な形状のドーマー窓が描かれている。この半眼窓は、米国の中西部から東海岸にかけてその時代を代表する活躍を見せたヘンリー・ホブソン・リチャードソン(1838~1886)が時おり用いた独特の窓のデザインであった。内部からの圧力で屋根が膨らみ、窓が現れてくるような印象的なイメージを見る者に残す。しかしなぜ、須磨別邸の図面にこの窓が描かれていたのだろうか。野口は西端部の屋根に何かアクセント・ポイントをつくらうとしたのだろう。だが結局、2階には西端部に部屋が必要になり端部を切妻で納めることになった。従ってこの半眼窓が実現されることはなかった。注目すべき点は、この半眼窓のことではなく野口が明らかにリチャードソンを引用していたことである。

リチャードソンは、R・モリス・ハント(1827~1895)と同様、日本で言えば辰野金吾のように米国の建築家第1世代にあたる建築家であった。パリのエコール・デ・ボザールを卒業しパリでの実務の後、米国帰国後はニューヨークを拠点に、多くの都市で質の高い作品を残した。リチャードソンの代表作の一つにボストンのトリニティ・チャーチ(1877年)が挙げられる。そこではリチャードソニアン・ロマネスクと呼ばれる特有のデザインを見せていた。(図4-107)の写真にも、そのデザインの片鱗を窺うことができる。米国も、日本と同様に建築文化の移入を課題としていたが、リチャードソンはアメリカ様式を作り出したと言ってもよい建築家であった。リチャードソンの事務所では、マッキム・ミ

ード・アンド・ホワイトのマッキムとホワイトも働いており、シカゴのサリバンもリチャードソンには大きな敬意を払っていた。そのサリバンの事務所からはライトが出てきている。

このようリチャードソンの重要性について野口は、建築潮流の主要都市であったシカゴから1887年より発行されていた“The inland architects and news record”などの建築雑誌を通じて、ある程度理解していたものと推測する(*3)。リチャードソンは、リチャードソニアン・ロマネスクとは別に、多くの邸宅も設計していた。その一つが(図4-109)の“F.W.Andrews House”である。この邸宅はロード・アイランド州ニューポートに建てられたものだが、同じ州のミドルタウンに建てられたのが、D.ニュートン設計の“Sturtevant House”であった。この二つの建物は1872年の同年に建てられている。D.ニュートンはロード・アイランド州生え抜きのニューポート初の職業的建築家であった。

両者の邸宅建築に共通するのは、ピクチャレスクな屋根構成と建物周囲を取り巻くように設計されたベランダである。平面構成も、左右対称などの規則にとらわれない自由さを見せている。外壁は下見板張りやシングル貼りで、屋根はおそらく天然スレート葺きであったと思われる。周囲の広大な自然環境に呼応するような建築は、いかにもアメリカ的邸宅であった。なお“Sturtevant House”では、ベランダのスクリーンに楕円形の開口のある東洋的な趣味も認められるが、東洋趣味は、当時のヨーロッパと同様に一種の流行であった。



(上 図4-108) D.ニュートン設計
“Sturtevant House” 1872年

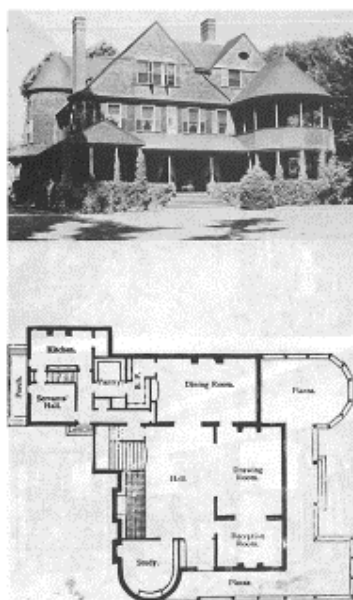
(下 図4-109) H.H.リチャードソン設計
“F.W.Andrews House” 1872年

このようなスタイルを持つ邸宅建築は、当時の米国東海岸で一つの建築的潮流となっていた。この様式は、英国の同時代のリチャード・ノーマン・ショウなどのオールド・イングリッシュ様式等に影響を受けたヴィクトリアン・コロニアル様式とも呼ばれている。須磨別邸にも、この米国東海岸で生まれた邸宅建築の潮流に通じるものが感じられる。その特徴とは、ベランダと一体となったピクチャレスクな建築構成と自由なプランニングである。

米国の建築史家ヴィンセント・スカーリーは、20世紀後半に入ってからこれらの建築的潮流を“The Shingle Style and The Stick Style”と名付け、その建築史的な重要性を指摘した。野口は、米国東海岸を訪れていたが、当時そこで広がっていた邸宅建築のこの潮流についても、敏感に感知していたものと推測する。

シングル・スタイルは、マッキム・ミード・アンド・ホワイトなど米国建築家第2世代に引き継がれ、さらに大きな展開を見せることとなった。野口が米国東海岸を訪れたのは、その第2世代が活躍していた時代である。マッキム・ミード・アンド・ホワイト以外にも、ピーボディ・アンド・スターンズやブルース・プライスなど多くの建築家が、優れたシングル・スタイルの邸宅建築をつくりだしていた。そしてその潮流は、ライトにも繋がったとヴィンセント・スカーリーは述べている(*4)。

須磨別邸とシングル・スタイルの建築は同様に、内部から膨らんでくるような自由さ、ベランダによる開放性とランドスケープとの一体感に共通するところがあった。



(左上 図4-110) マッキム・ミード・アンド・ホワイト設計
アイザック・ベル邸 1883年

(右上 図4-111) ピーボディ・アンド・スターンズ設計
“Kraggyde” 1884年

(右下 図4-112)
マッキム・ミード・アンド・ホワイト設計
ニューポート・カジノ 1881年
日本の影響が見られる

註

- (* 1) 片木篤著『アーツ・アンド・クラフツの建築』 49頁
2006年 SD選書
- (* 2) 住友春翠編纂委員会編『住友春翠』 331頁
1955年 住友春翠編纂委員会
- (* 3) 住友史料館所蔵『野口博士寄贈図書目録』
”The inland architects and news record”の記載では、1892年6月号、
1899年3月号が記録されている。
- (* 4) Vincent J. Scully, Jr. “The Shingle Style and The Stick Style” p.p. 155~164
1955 Yale University Press

図版・写真

- (図4-99) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 資料目録⑧
- (図4-100) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-101) Vincent J. Scully, Jr. “The Shingle Style and The Stick Style” p.p. 116
- (図4-102) 泉屋博古館所蔵模型写真
- (図4-103) Kenneth Frampton ”Modern Architecture A Critical History” p.p. 49
1980 Thames and Hudson Ltd, London
- (図4-104) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 資料目録⑦-6
- (図4-105) 住友史料館所蔵図面
- (図4-106) Wikipedia “Ames Gate Lodge” free media repository
- (図4-107) Henry-Russell Hitchcock ”The Architecture of H.H.Richardson and His Times”
1936 The M.I.T. Press fig. 65
- (図4-108) Vincent J. Scully, Jr. “The Shingle Style and The Stick Style” fig. 21&22
- (図4-109) 前掲書 116頁
- (図4-110) V. スカーリ著・長尾重武訳『アメリカ住宅論』 42頁
1978年 SD選書
- (図4-111) Vincent J. Scully, Jr. “The Shingle Style and The Stick Style” fig. 61
- (図4-112) 前掲書 fig. 115

第5章 中之島図書館 — 場所と幾何学 —

住友家須磨別邸とともに、住友本店臨時建築部設立直後の最初の仕事が、当初は大阪図書館と呼ばれた現・大阪府立中之島図書館であった。この第5章では、この図書館を巡る野口孫市の建築術について考察する。

大阪図書館は明治37年（1904）に開館し、その2年後の明治39年（1906）には大阪府立図書館と改称された。戦後の昭和25年（1950）に設立された天王寺分館が、昭和49年（1974）に大阪府立夕陽丘図書館と改称されたため、大阪府立図書館は大阪府立中之島図書館と改称された。平成8年（1996）には、東大阪市に大阪府立中央図書館が完成し現在に至っている。現代の大阪の人々は、大阪府立中之島図書館を「中之島図書館」の通称で親しんでいるため、この論文では「中之島図書館」の呼称を使用する。

第5章の主要テーマは二つある。一つは、野口が当時の大阪の都市構造のなかで中之島図書館をどのように建築として据えたのかという点である。江戸期から昭和初期までの大阪の主な都市軸は、大阪城・大川・中之島・大阪湾を結ぶ東西軸だった。昭和12年（1937）の御堂筋の完成によって、都市軸が90度回転し南北軸の都市構造に転換している。その都市軸の90度回転につき決定的に重要な布石となったのが、日本銀行大阪支店が現在の位置に移設されたことだった。日本銀行大阪支店の建築設計は野口の恩師である辰野金吾によるが、次の大阪都市構造の変遷への布石となったのが中之島図書館であった。野口は、中之島図書館の建築を日本銀行大阪支店との位置関係から現在のように据えることによって、強い都市的な場所の意味をつくり出していた。野口は当時の大阪の都市的な文脈を読み取り、そこに一つの明確な解答を示していたのだった。

もう一つの本章のテーマが、中之島図書館についての野口の建築的な思考である。須磨別邸については、野口が卒業論文で書き残した“Comfort”という考え方を具体的な建築として実現したものだったが、中之島図書館について野口は、その考え方を表現するような言葉は残さなかった。中之島図書館について野口が書いた文章は、工事仕様書のような技術的な記述に限られていた。従って野口の中之島図書館に関する建築的な思考については、現在残されている中之島図書館の建築そのものから分析的に考察するしか方法はない。ただ、野口が残した言葉のなかに注目すべき手掛かりがあった。それは、野口が亡くなる7か月前の日記に記した「幾何学」についての述懐であった。現在まで誰にも認識されてこなかったが、実は中之島図書館の建築にはある幾何学が隠されていたのである。その幾何学を明らかにすることによって、野口が何を考えながら中之島図書館を設計したのか、その追体験を行うことがもう一つのテーマである。

第5章は、以下の節から構成する。

- 5. 1 中之島図書館の誕生から現在まで
- 5. 2 都市的な意味をつくり出す
- 5. 3 建築的思考としての「場所と幾何学」
- 5. 4 中之島図書館の工法と意匠
- 5. 5 他の西洋古典様式建築群
- (補) 当時の英国・米国に見るパラディアニズム

前述のとおり本章の中心的な主題は5. 2と5. 3である。しかしその前に5. 1として、現代の大阪の人々に親しまれている中之島図書館の誕生から現在までを概観する。また5. 4では、中之島図書館の建築技術的側面について記述する。序章にて建築術とは「建築思考」と「建築技術」から成るとしたが、その後者に焦点を当てるものである。

野口の仕事は大別すると、須磨別邸を筆頭とする住宅建築群と、西洋古典様式に基づく中之島図書館をはじめとする都市建築群に分けられる。都市的な建築には、住友銀行関連の建築群、そして住友が寄贈した中之島図書館をはじめとして住友が誕生に深く関わった心齋橋や大阪倶楽部などの建造物があった。これら都市的建築群のうち中之島図書館以外は現存していないが(*1)、5. 5にて図面や写真に残された他の西洋古典様式による都市的建築群を概観することにより、野口の「建築術」が何であったのかを捉える更なる手掛かりとしたい。

5. 3で考察する野口の幾何学的な建築思考については、幾人かの建築史家よりイタリア・ルネサンスの建築家アンドレア・パラディオの設計によるヴィラ・ロトンダよりの影響が指摘されてきた。18世紀から19世紀の英国や米国において、特に図書館等の「知」に関わる建築物にパラディオの影響が色濃く見られる状況があった。(補)では、当時の英国と米国における「パラディアニズム」と呼ばれるその状況について補足的に記述する。

註

- (*1) 住友銀行尾道支店の一部がかろうじて現存している。現在、この建物の現在の所有者である尾道市によりその復元が企画されている。

5. 1 中之島図書館の誕生から現在まで

5. 1. 1 中之島図書館誕生の背景 — 住友家の寄贈

明治33年(1900)1月6日、住友春翠は住友家本邸に重役一同を集め、大阪府に独力で図書館を寄贈したい旨を伝えた。同時に、府および市と交渉すること、また建設の次第や方法などの研究を命じた。そして同年2月10日付けで春翠は、大阪府知事の菊池侃二宛に下記の書状を送っている(*1)。

我大阪ハ近来商工業ノ発達ト当局者ノ勉励トニ由リテ、顕著ナル進歩ヲナシ、其市政ノ整備ニ於イテハ他ノ二府ニ譲ラザルノミナラズ却ツテ之ヲ凌駕スルモノアルハ世人ノ齊シク認メル所ニ有之候。雖然熟々全般ノ事物ヲ視ルニ市民ノ便益ヲ計リ子弟ノ教育ヲ扶クルノ方法ニ関シテハ尚欠如スル所少カラザル様相覺エ、竊ニ之ヲ遺憾トシ機会モアラバ若干ノ資ヲ投ジテ此種ノ事業ヲ興シ、以テ拙者ノ祖先以来大阪ニ負フタル洪恩ノ万一ニ酬ヒ度平素冀望罷在候。然処、近頃閣下大阪府ノ為メニ子弟教育ノ大計ヲ立テラレ、府民ヲシテ永ク其恵ニ頼ラシムルノ御盛意ニテ図書館設置ノ事モ亦御企画有之候趣側カニ伝承仕リ、御深慮ノ段厚ク感佩ノ至リニ堪エズ。

誠ニ平生ノ素望ヲ達スル好機会ト存候ニ付、乃チ別紙記載ノ要項ニ基キ、図書館建物一式並ニ図書基金トシテ金五万円ヲ大阪府ニ寄附シ、一ハ以テ目下極メテ多端ナル市費ノ一部ヲ補ヒ、一ハ以テ市民ノ為メニ最モ有益ナル御盛挙ヲ賛助仕度奉存候。幸ニ願意御採納被下微志貫徹候得バ拙者ノ本懐不過之候。仍テ前頭寄附ノ件御許可被成下度別紙相添此段奉願候也。

明治三十三年二月十日

大阪市南区鰻谷東之町参拾六番屋敷

住友吉左衛門

大阪府知事 菊池侃二殿 閣下

この文面にある別紙記載には、より詳しい大阪府との取り決めが書かれていた。そのなかには、建築費として約15万円を寄附しその設計者は住友と大阪府の代表者が協議して決めること、図書基金として5万円を寄附すること、そして大阪府が市内の相応しい場所に千坪以上の敷地を用意すること、また完成後の維持管理は府に任せることなどが記載されていた。明治37年に完成した図書館は、延床面積249.82坪、軒高49尺、ドーム屋根最上部までの高さ77尺という規模であり、最終的な工費は20万4千円にのぼっているが、この全額を寄附している(*2)。

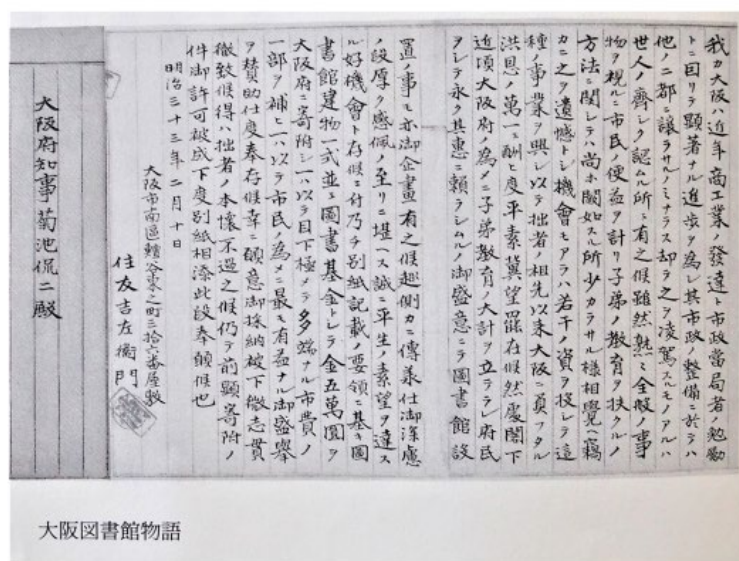
この別紙記載の内容については、当時の帝国図書館長の田中稲城に意見を求めており、

その骨子はほぼ田中稲城の意見に沿うものだった。春翠の書面にあるように、東京と京都では図書館の開設が先行していた。東京では明治5年にできた書籍館を起源とする帝国図書館が明治30年（1897）に設立されており、京都では集書院を前身とする京都府立図書館が明治31年（1898）に開設されていた。大阪府議会では明治27年に建設費1万2千円で図書館新設の議案が提出されたが、僅か2名の差で否決された。しかし大阪府知事の菊池侃二は、明治32年暮れ、府の教育五ヵ年計画を立案し、小学校・中学校・高等女学校新設の問題と併せて再度図書館新設の提案をしていた。春翠は、大阪市民のための便宜を計り子弟の教育のための施設の欠如をつねづね痛感していたが、菊池知事の提案を聞き、春翠は独力で図書館を寄附することを決断するに至った（*3）。

春翠の図書館寄附の背景には、住友が江戸時代の寛永7年（1630）に京都から水運の利のある大坂に本拠を移して以来270年間、その商いを育んできた大坂の地への報恩の念があったことも事実である。大坂では、その「まちづくり」に大坂商人が大きな役割を果たしていた。明治の時代に入ってもその気風は受け継がれ、明治期の大阪経済復興の梃となった大阪株式取引所や大阪商法会議所の設立も、「民」が主体となって設立していた。春翠の大阪への報恩の念に基づく図書館寄贈は、その延長線上にあった。

また春翠のもう一つの背景には、明治30年（1897）の4月から11月にかけて行った欧米巡遊での経験があった。特にシカゴで、実業家マーシャル・フィールドの寄附により1893年のコロブス博で建てられたパレス・オブ・ファインアーツの建築が博物館として保存再生されたことに、成功した実業家のあるべき姿を教えられ、深い感銘を受けたことも図書館寄贈の背景の一つにあった（*4）。

住友よりの寄附採納願いを受けた大阪府議会の記録では、その義挙に感銘を受け「議場に時ならぬ光彩を放ちたる実況に至り候」と記されている。

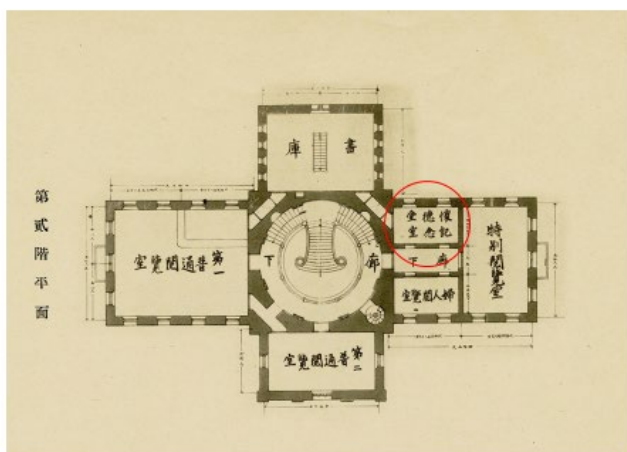


（図5-1）明治33年2月10日付 大阪府知事宛の図書館寄贈に関する春翠の書状

5. 1. 2 近世大坂の懐徳堂に始まる自由な学堂の系譜

「野口博士建築図集」に収められている中之島図書館の3階平面図には、中央ホール右側に「懐徳堂記念室」と書き込まれた部屋がある。明治43年、初代大阪府立図書館長の今井貫一の手により、大阪府教育員会が住友吉左衛門を会頭とする「懐徳堂記念会」を発足させた。その翌年の明治44年（1911）、懐徳堂の旧学主・中井家より歴史的文献資料などの寄託を受け、中之島図書館に「懐徳堂記念室」が設置されたものである（*5）。

懐徳堂は、享保9年（1724）に現在の中央区今橋3丁目に、鴻池など五同志と呼ばれる有力商人が中心となり資金を募り町人たちの手によって建てられ、三宅石庵（1665～1730）を学主として設立された。2年後には、幕府より官許学問所として認められている。その後、五井蘭洲（1697～1762）に引き継がれ、貴賤貧富を論ぜず一個の私人として広く知識を求める自由な学風が確立された。蘭洲の教えを受けた中井竹山（1730～1804）中井履軒（1731～1817）兄弟によって学堂としての懐徳堂の最盛期を迎える。その頃までの江戸では、荻生徂徠（1666～1728）が元禄9年（1696）から柳沢吉保（1659～1714）に儒官として召し抱えられ、元禄・享保期の最も権威ある学者として君臨し、その死後も強い影響力を保っていた。徂徠は、商活動に対し封建社会の基礎を揺るがすものと糾弾していたが、既に進行中の貨幣経済の下、米相場に象徴される経済力を背景にした大坂商人たちは、全国の市場を視野に入れた物資の流通や金融を差配する力を蓄えていた。これら商人や町人を背景とした中井竹山の開かれた学問への姿勢には一貫したものがあり、知の傲慢さも見せる荻生徂徠の学問を強く批判していた。しかしなお幕閣中にも、老中・松平定信などその懐徳堂の学風に共感を寄せる人物もいたことも事実である（*6）。



（図5-2）明治44年（1911）中之島図書館3階に設けられた「懐徳堂記念室」
なお図面表記は、英国式で第貳階と記載



（図5-3）懐徳堂の前身であった
含翠堂における講義の図

一方、弟の中井履軒の知的探求心は、経済学から天文学・医学など広範囲におよび、日食・月食の正確な観察も行った麻田剛立（1734～1799）に協力し人体解剖を行い、克明な記録も残している。杉田玄白の「解体新書」出版の1年前であった。新しい「知」を受け入れる柔軟性に富み、物に備わる「理」を窮めようとする「格物窮理」を目指していた。ここでは、朱子学的な世界観・人間観は大きく変容しており、イタリア・ルネサンスが「神から人へ」の世界観の転換であったように、ここでも「天から人へ」の転換がおきていたと言えよう（*7）。懐徳堂に学んだ最も著名な人物として、山片蟠桃（1748～1821）を挙げることができる。大商家・升屋の番頭として仙台藩の財政立て直しを任せられ見事に成し遂げ、学問の面では「夢の代」を著し、天文・地理・経済・制度・鬼神を否定する無鬼など12章からなる書物を残した。

このように大坂は、合理精神に基づく、常に新しいものに開かれていた都市であった。そのような知的風土のなかから生まれたのが、緒方洪庵（1810～1863）の適塾でもあった。適塾は、西洋の学問への跳躍台となった学堂であり、明治新時代の思想界を主導した福沢諭吉、そして橋本左内や大村益次郎などが学んでいた。

懐徳堂も適塾も、大坂の学問を「民」が支える伝統が生み出した学堂であり、明治の時代になってもこの大阪の「知の伝統」は、図書館を寄贈した住友に引き継がれていた。住友は、懐徳堂の五井蘭洲に、住友家初代・住友政友の「文殊院旨意書」の箱蓋裏書に長文の「識語」執筆を依頼していた。宝暦11年（1761）、住友の家長が政友から数えて5代目の住友友昌の時代、その異母弟にあたり病弱の友昌に替わり住友の家政を任されていた友俊が、懐徳堂での師・五井蘭洲に依頼していたのである（*8）。春翠が明治43年に「懐徳堂記念会」の会頭になったのも、このような背景があったことによる。



（図5-4）文久3年（1863）大坂地図における懐徳堂の位置（赤丸 現・日本生命保険本館）上部に適塾の位置も示されている



（図5-5）御堂筋の日本生命保険本館南外壁に据えられた「懐徳堂旧址の碑」

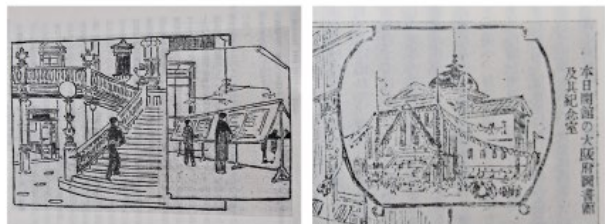
5. 1. 3 時と共に

明治37年2月25日(1904)大阪図書館の開館式が執り行われた。その様子が翌日の「大阪朝日新聞」に下記のように掲載されている(*9)。

昨日午前11時大阪図書館開館式を行い来賓は当地各官衛長官、府市名誉職、住友家関係者、重なる実業家、書肆等約200名に達し他地方よりは東京の田中帝国図書館長、京都の島大学図書館長、清棲和歌山県知事、水島神戸高等商業学校長、小森兵庫県資視学官等を見受けたり、式は階上普通閲覧室に挙げられ今井館長の挨拶に次で軍楽隊君が代の曲を奏し夫より知事の式辞、田中氏の文部大臣祝辞代読、住友氏の祝辞(此時拍手多し)市長の祝辞、祝電の披露、神戸桃木書院長祝辞代読あり、後館長の答辞(拍手)にて11時20分式を終へ、別席にて酒宴の饗あり宴中加太院長の発声によりて図書館長及び住友氏の万歳を三唱し此間絶えず軍楽を奏し・・・

なおこの記事の後には、久保田譲文部大臣の祝辞、住友吉左衛門氏祝辞、今井貫一館長の答辞の原文が紹介されていた。2月26、27日は一般人が館内を縦覧できる日とし、明治37年3月1日に閲覧を開始した。その日の様子について、図書館に残る「閲覧室日誌」には、「此日入館者総計670人内図書ヲ借覧セザリシモノ特別55人普通204人」と記録されている。その後も、閲覧せず図書館を見るために入館する人々が絶えなかったことを「閲覧室日誌」は伝えていた(*10)。

(図5-6) 上右は、明治37年2月25日付「大阪朝日新聞」に紹介された、満艦飾に彩られた大阪図書館開館式当日の様子
上左は「大阪朝日新聞」3月26日付記事よりその日は満艦飾で祝われていた

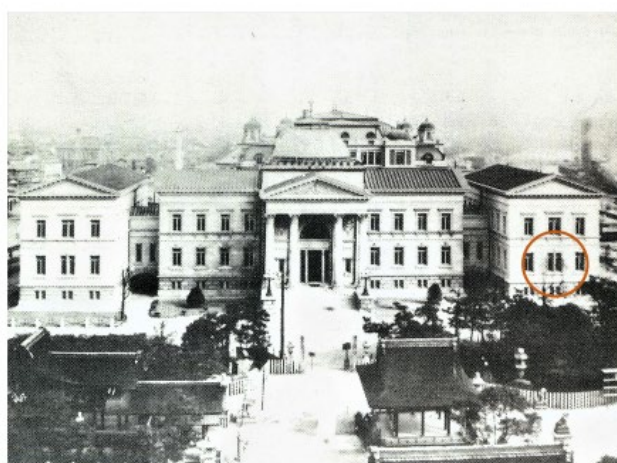


(図5-7) 明治37年2月(1904)竣工の大阪図書館・現大阪府立中之島図書館
左: 中之島公園より望む 中: 閲覧室 右: 無目に「大阪図書館」の掘り込みがある

当時の日本では画期的な出来事であった。市中に聳え立つほとんどの洋風建築は、控訴院や日本銀行のように、一般市民が気軽に立ち寄れる建築ではなく「国家」を象徴する建築だった。しかし中之島図書館は最初から、人々の誰もが入れる本格的な西洋の「文化」を象徴する建築として建てられていた。

開館当初の「大阪図書館」関係者の間には、その利用者数が期待通りの数字に達するか不安があった。しかし開館後の図書館利用者数は年々増加の一途をたどり、2年後の明治39年には「大阪府立図書館」とその名称も改められ、大正期に入る頃には増築の必要性も高まっていた。住友では、春翠のもとで増築も寄贈する検討を続けていたが、大正6年(1917)、大阪府知事に再度の増築寄贈の申し出に至る。しかし野口孫市は大正4年(1915)享年47歳でその輝かしくも短い生涯を終えていた。増築設計の中心となったのは日高胖であった。日高は、十字形平面の南北の両側に二つの翼をのばすように、小さなペディメントを冠する二つの増築棟を設計した。この増築は大正11年(1922)に完成した。両翼が加わることで、この建物はさらに伸びやかさを増し、あたかも当初から計画されていたかのように、現在に至るまで堂々と中之島の水と緑に映え続けている。

日高胖は、野口孫市が設計した図書館外観のほぼすべての意匠を忠実に継承していたが、ただ一点、日高のオリジナルな意匠を付け加えていた。それは両翼棟2階中央部の窓の意匠である。渾身の力を注いだ日高による窓のデザインであった。



(図5-8) 大正11年(1922)南北両翼の増築棟竣工
丸印は、日高胖のオリジナル意匠の窓位置を示す
手前には豊国神社、背後には大阪市中央公会堂が写っている



(図5-9)
ただ一か所、日高胖がオリジナルな
意匠を加えた窓

当初3万冊の蔵書から発足した中之島図書館は、蔵書数の増加が著しく、昭和5年・31年・35年・41年には東側に書庫・講堂・事務室などの増築が続いた。昭和25年（1950）には天王寺分館もでき、蔵書数は合わせて80万冊近くにのぼっている。昭和49年に天王寺分館は改築され大阪府立夕陽丘図書館となり、平成8年（1996）には、東大阪市に190万冊を越す蔵書数を有する大阪府立中央図書館が開館した。夕陽丘図書館は中央図書館の開館にあわせ閉館された。ちなみに現在の中之島図書館の蔵書数は約55万点にのぼっている（*11）。

このような目まぐるしい大阪府の図書館行政変遷のなか、昭和49年（1974）中之島図書館は、国の重要文化財に指定された。しかし、その正面大階段に続く正面玄関は、昭和40年頃から運営上の理由で閉鎖され、約50年の間、大階段下の地上階脇の入り口から出入りが行われていた。

平成27年（2015）、大阪府の英断により正面玄関を開けることの改修工事が行われ、同年4月に正面玄関は半世紀ぶりに開放の運びとなった。人々は大階段をのぼり正面からアプローチすることができるようになった。偶然ではあるものの、この年は野口孫市の没後100年にあたっている。110年間、大阪の人々に愛着を持たれ親しまれてきた中之島図書館では、再び明治のありし日の毅然とした姿のなかに連続する空間のドラマを体験することが可能となったのである。その好意的な反響には大きなものがあった。中央階段のホールでは、室内楽や声楽のミニ・コンサートも行われ、建築を見るために訪れる来館者も再び増えることとなった。一時は閉館も検討された時期もあったが、都市に生きる人々の「文化」の象徴として、また「知を祝祭する殿堂」として再び蘇ったのである。



（図5-10）平成27年（2015）4月 約半世紀の間閉鎖されていた正面玄関が新たに開放された



（図5-11）平成29年5月（2017）に開催された中央ホールでのコンサート

現代の IT を駆使する時代となり、中央図書館と中之島図書館の 2 館体制は、利用者にとってより魅力的なものとなった。利用者が閲覧し読みたい本の多くは東大阪市の中央図書館にある。しかし利用者がインターネットで蔵書を検索し、ネットで予約すればその本はすぐに中央図書館から中之島図書館に送られ、中之島図書館で本の閲覧・貸し出し返却が可能となっている。一方、中之島図書館には、大阪という都市生活に合わせたユニークな位置づけが与えられた。ビジネス関係資料が充実しており、「社史」関係の蔵書も利用者に重宝されている。また、大阪の歴史をはじめとする「古典籍」の充実ぶりにも極めて高いものがある。この中には、住友家より寄贈された洋の東西にわたる貴重本や絵巻なども含まれており、平成 16 年（2004）には、「住友春翠からの贈り物」と題する展覧会が、中之島図書館百周年を記念して開催された。平成 28 年（2016）の秋には、「中之島図書館と野口孫市の建築術」展が開催された。これは、筆者が企画監修し、大阪府立中之島図書館・指定管理者の（株）アスウェルそして日建設計の 3 者が共催して開催したものである。5 週間で 7 千人を超す入場者があった。その大半は一般市民であり、いかに中之島図書館が人々に愛されているかが分かる展覧会であった。現在の中之島図書館では、様々な文化的な催しが開催されており、また土佐堀川に面する 2 階には、お洒落なカフェ・レストランが平成 28 年よりオープンした。中之島図書館は、毎日多くの来館者・来客で賑わっている。

中之島図書館は、水と緑の豊かな都会のオアシス・中之島に立地する、都市生活にふさわしい図書館として見事に生き続けている。



(上 図 5-12) 平成 28 年（2016）に開催された「中之島図書館と野口孫市の建築術」展
中之島図書館で開催されることの意義を最大限に活かした展示が行われた

(左下 図 5-13) 平成 28 年よりオープンしたカフェ・レストラン

註

- (* 1) 小西隆夫著『北浜5丁目十三番地まで 一日建設の系譜』 55～57頁
1991年 創元社
- (* 2) 浅野清著『大阪府立図書館の建築』
大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 36頁
1973年 大阪府立図書館
- (* 3) 松尾一夫著『府立図書館の創立』
大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 3～4頁
1973年 大阪府立図書館
- (* 4) 第3章「3.2 春翠の国際関係への視野」の註 (* 8)
- (* 5) 懐徳堂友の会・(財)懐徳堂記念会編
『懐徳堂 浪華の学問所』 75～76頁
1994年 懐徳堂友の会・(財)懐徳堂記念会
- (* 6) 宮川康子著『自由学問都市大坂』 93頁
2002年 講談社選書メチエ232
- (* 7) 前景書 『自由学問都市大坂』 171～172頁
- (* 8) 宮本又次著『大阪文化論』 70～71頁
1979年 文献出版
- (* 9) 高松敏男著『新聞・雑誌に見る大阪府立図書館 一明治・大正の資料紹介一』
大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 142～144頁
1973年 大阪府立図書館
- (* 10) 松尾一夫著『府立図書館の創立』
前掲大阪府立図書館紀要 8頁
- (* 11) 前掲論文 前掲書 16頁 および
前掲書 『大阪府立図書館略年表』 148～149頁

写真・図版

- (図5-1) 原史料は住友史料館所蔵
小西隆夫著『北浜5丁目十三番地まで 一日建設の系譜』55頁より転写
- (図5-2) 『野口博士建築図集』住友史料館所蔵

- (図5-3) 懐徳堂友の会・(財)懐徳堂記念会編 『懐徳堂 - 浪華の学問所』
表紙より転写
- (図5-4) 梅溪昇著『緒方洪庵と適塾』 口絵より転写
1996年 大阪大学出版会
- (図5-5) 筆者撮影
- (図5-6) 高松敏男著『新聞・雑誌に見る大阪府立図書館 - 明治・大正の資料紹介-』
大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 145頁
1973年 大阪府立図書館
- (図5-7) 「中之島公園より望む」は住友史料館所蔵
「閲覧室」は、住友史料館所蔵『野口博士建築図集』より
「正面玄関見上げ写真」は筆者撮影
- (図5-8) 大阪府立図書館所蔵
- (図5-9) 筆者撮影
- (図5-10) 日建設計撮影
- (図5-11) 中之島図書館の指定管理者(株)アスウェル所蔵
写真の歌手は、朱夏洋子氏
- (図5-12) 日建設計撮影
- (図5-13) 筆者撮影

5. 2 都市的な意味をつくり出す

都市は生命体のように成長するものであり、ある都市の形成過程には、その都市の成長の歴史的な転回点のような出来事が潜んでいる。本節では、まず5. 2. 1において中之島図書館が立地した中之島を中心に、大阪という都市の成り立ちから導かれる中之島の歴史を概観する。続く5. 2. 2では、当時の大阪の都市インフラについて記述する。特に大阪の都市形成史のなかでも特筆すべき出来事であった日本銀行大阪支店は、野口が設計する中之島図書館の建築としての在りようを定める決定的な出来事であった。

最後の5. 2. 3にて、野口が中之島図書館の建築としての据え方によって当時の大阪の人々に発信していた都市的なメッセージについて考察する。野口は、その日本銀行大阪支店に呼応させるように、大阪ではじめての西洋的な都市景観をつくり出していた。野口は、この大阪・中之島という場所に都市的な強い意味を発生させていたのである。

5. 2. 1 大阪そして中之島



(図5-14)
16世紀パリのセーヌ川シテ島
地図の左側が「右岸」



(図5-15)
現代の中之島 東上空より西の大阪湾を望む
左：土佐堀川 右：堂島川 手前：大川

(図5-16)
江戸期大坂
堂島川沿い蔵屋敷の活況



上の(図5-14)は16世紀パリのセーヌ川シテ島の絵地図を示している。古代ローマ時代にセーヌ川南側にできた植民都市以来パリは、河川や運河による水運物流のフランス国土に広がる水路網の最大拠点としての「土地の持つ力」を有していた。イル・ド・フランスと呼ばれる肥沃な農業地を背景に、政治権力の中心都市として栄えてきたのである。セーヌ川の流れは東から西に向かって流れているが、流れ方向の右手が「右岸」と呼ばれ、16世紀のこの絵地図では「右岸」に多くの大型船舶が係留されていた。港湾・市場・貿易・商業そして行政の中心地として、パリではその「土地の持つ力」が顕在化していた。

これと同じことが、江戸期大坂の中之島でも起きていた。大きな内海である瀬戸内海を通じ全国の藩の港とつながる大坂の港そして中之島には、天保年間(1840年代)125藩の蔵屋敷をはじめとし旗本・公家・寺社など大名以外のものも含めると数百の蔵屋敷が集中していたといわれる。物流の集中した地には市場が発生する。享保15年(1730)には幕府が公認した先物取引が堂島米会所で始まり、これが世界で最初の先物取引となった。大坂という都市が、建前としての米本位制を現実の貨幣経済に変換する機能を持っていたのである。全国各藩の蔵屋敷が建ち並ぶ中之島は、「天下の台所」と呼ばれる日本経済の中心地となっており、その「土地の持つ力」を示す象徴的な場所であった。

しかし廃藩置県が行われた明治の時代になり、当然ながら大阪は日本経済の中心地ではあり得なくなっていた。

(1) 江戸期の大阪

現代の大阪は、南北に走る御堂筋を中心軸とした南北軸の都市構造であるが、幕末江戸期

にいたるまでの大坂の都市構造は、東の大坂城と西の港を両極とする東西軸の都市であった。東西に流れる流通動脈・大川の中央には、全国各藩の蔵屋敷が立ち並ぶ中之島が位置し、商家・町民などの民間により掘削された江戸堀や京町堀から長堀や道頓堀に至る数々の堀は、大川から大阪湾にいたる多くの流通支脈を形成していた。これら水運による流通網は、廻船業により瀬戸内海を經由し全国の港に繋がっており、大坂商人達による経済活動の交通インフラとなっていた。また数々の堀に架けられた橋の大半は商家・町民によって建造されたものであり、後述する野口孫市の意匠設計により長堀に架けられた心齋橋もまた住友など大商人たちにより建造されたものであった。江戸期大坂商人達の自らの手で都市を成長させる気風が、明治期の大阪にも継承されていたことが分かる。



(図5-17) 貞享4年(1687)の大坂大絵図 東が上に描かれている

(2) 幕末から明治初期にかけての大阪の衰退

江戸期の大阪は、蔵屋敷が集中していたことによる米の流通拠点としての経済を謳歌していたと一般的には思われるが、実はすでに江戸後期から、大阪経済の相対的な位置は下がり始めていた。それは、関西で培われてきた綿花・菜種油・醤油などの先進的な生産技術が、江戸をはじめとして地方に伝播・普及していたことによる。明治新政府の時代となり大阪経済に大きな打撃を与えたのは、蔵屋敷の廃止だけでなく、各藩への大名貸債券の不良債権化、商家に課せられた莫大な新政府御用金などであった。また金決済に統一するための大阪で慣行となっていた「銀遣い」の廃止による銀の暴落や、新政府による「株仲間」の禁止によ

る不正取引の横行など、明治初期の大阪経済は大きな混乱を招いていた。

このような明治維新による社会変動により、大阪の「隆々たる家筋」といわれた大商家36家のうち26家が没落したと記録されている。

(1) 明治中期から後期にわたる商都・大阪の復活

野口が住友入りし大阪で建築家として活躍する明治の後期は、かつての商都・大阪の経済が復活し、再び躍動を始める時代となっていた。

江戸時代の大阪は、先進的な米相場の先物取引を世界に先駆けて開発するなど市場機能の高い都市であったが、明治期に入り蔵屋敷の消滅とともに米会所は廃止されていた。しかし明治9年(1876)には堂島米会所を再興させることに成功し、また明治11年(1878)には大阪株式取引所・大阪商法会議所が設立されるなど、経済インフラの確立も着実に進んでいた。大商家の大半は没落したものの、かろうじて明治維新時の政治的・経済的混乱を乗り切った住友など旧来の商家や、強い伝統に支えられた道修町の医薬業、新興の海運業や金融業・繊維産業・洋酒製造業・新聞社など当時のベンチャービジネスの勃興などにより、大阪経済はかつての商都・大阪の賑わいを復活させていた。

住友に例をとると、江戸期以来の家業であった銅鉾山業・銅精錬業に加え、明治28年(1895)には銀行業を設立し、倉庫業・林業・重機械工業・肥料製造業・化学工業・電線製造業・重電工業・電子工業・鋳鋼鉄製造業・製薬業・損害保険・生命保険など、次々と新しい時代が必要とする産業を誕生させていた。住友が本拠とした大阪は、明治の後期には経済都市として再び躍動する時代を迎えていたのである。

5. 2. 2 明治～大正期の大阪の都市インフラと日本銀行大阪支店

建築として中之島図書館を考察するうえでも、また大阪の都市形成の歴史のうえでも、日本銀行大阪支店が現位置に移転したことには大きな意味があった。しかし最初にそれらの建築が成立する基盤となった明治～大正期の大阪の都市インフラについて概観したうえで、日本銀行大阪支店について記す。

(1) 明治～大正期の大阪の都市インフラ

明治30年頃の大阪の商業中心は、南の堺に通じ南北に走る堺筋であった。土佐堀通りと堺筋の交点には、江戸期には金相場会所のあった場所に株式取引所が位置し、堺筋には、昭和初期に三井銀行大阪支店・三越・野村証券などが立地していた。東京でいえば、日本橋と兜町が一緒になったような商業地だったといえよう。昭和12年(1937)の御堂筋完成以前は、堺筋が大阪のメインストリートであったことが分かる。

一方、北の梅田に位置した大阪駅は、明治7年(1874)に開業していた。大阪駅は

明治7年（1874）の大阪・神戸間の開通に従い初代の駅舎として現在の位置より少し西に開設され、2代目の駅舎が現在の位置に完成したのは明治32年のことだった。その2年後には、東京から京都・大阪・神戸・尾道・広島を經由して下関まで開通している。

明治41年（1908）には大阪市電の第2期線が開業し、大阪駅から大江橋・淀屋橋を渡り土佐堀通を經由して堺筋を南下し恵美須町に至る南北線が開通した。この市電の開通に相前後して明治44年（1911）には、淀屋橋・大江橋の鉄橋化が実現している。

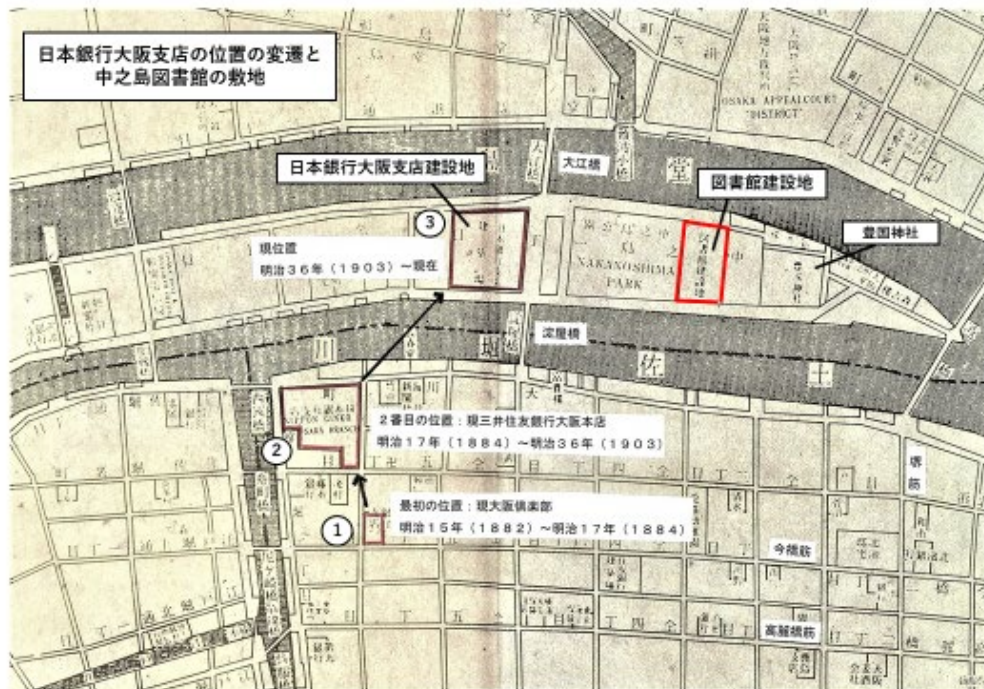
昔からの都市核であった商業地・堺筋ともう一つの都市核になりつつあった大阪駅を結ぶのは、淀屋橋・大江橋を渡るルートしかあり得なかった。土佐堀川と堂島川にはさまれた中之島を經由するルートが、当時の重要な都市経路となっていたのである。後述する日本銀行大阪支店は、まさしくその要所を押える中之島に移設されたのだった。



（図5-18）
大正2年（1913）の大阪市街全図より。
太い黒線は市電を表す。
右下隅の堺筋と大阪駅を結ぶ土佐堀通り～
淀屋橋～大江橋～梅田新道の市電ルートが
大阪の都市インフラ幹線であった。
淀屋橋・大江橋は明治44年（1911）
に鉄橋化されている。

（2）日本銀行大阪支店

日本銀行は明治15年（1882）10月に設立された。日本銀行大阪支店も同年12月に開設されている。その最初の立地は、（図5-19）で示すとおり今橋筋に面する現在の大阪倶楽部の位置①であった。江戸期大坂の都市構造が東西軸を基軸としていた時代、東西のメインストリートは今橋筋と高麗橋筋であり、この土地が当時のプライムロケーションであったことが分かる。その後、日銀業務の拡大に伴い広い土地を求め②の現在の三井住友銀行大阪本店の位置に移った。そしてその地での19年を経て、現在の中島の敷地③への移転となった。この地には明治13年（1880）より内務省司薬場が設けられており、また敷地の一部には明治18年（1885）に五代友厚郎が新築されていた。明治30年（1897）に内務省司薬場は大阪衛生試験所として京橋に移転し、この用地を五代郎の敷地と合わせて日本銀行が取得している（*1）。



(図5-19) 明治33年の地図上に示した日本銀行大阪支店の位置の変遷



(図5-20) 日本銀行大阪支店 設計・辰野金吾
明治36年(1903)竣工
竣工当時の淀屋橋と大江橋は木造だった。

(図5-19)の明治33年の地図では日本銀行大阪支店の前面には、まだ一部の民家が残っていたが前面敷地の大半は中之島公園となっていた。その中之島公園の東に日銀大阪支店竣工の翌年の明治37年(1904)に、中之島図書館が竣工している。

この当時の大阪市役所は、明治45年に堂島浜の木造仮庁舎に移転するまで、大阪湾に近い江之子島にあった。同年の明治45年に大阪市庁舎を建設するための設計競技が行われ、その第一席になった台湾総督府技手の小川陽吉の基本設計をもとに当時の関西建築界の第一人者となっていた片岡安と大阪市庁臨時建築課によって実施設計がなされた。大正10年(1921)に大阪市庁舎が竣工している。さらにその16年後の昭和12年(1937)に、第7代大阪市長となった關一(せきはじめ)により御堂筋が完成した。日本銀行大阪支店の竣工後34年を経て、大阪の都市軸が東西軸から南北軸へ転換したといえるだろう。日本銀行大阪支店の地が、大阪の都市構造が東西軸から南北軸に変わるピボット軸のような役割を果たしており、大阪の都市成長のまさしく歴史的にも位置的にもターニング・ポイントとなっていたのである。



(図5-21) 大正13年(1924)に発行された大阪パノラマ地図(部分)
御堂筋はまだ描かれておらず、北浜・土佐堀通りがメインストリートであったことが分かる。

(図5-19)の明治33年の地図では、現在の大阪市中央公会堂の敷地が豊国神社となっている。(図5-18)の大正2年の地図では、豊国神社は中之島図書館の前面の中之島公園の東端に移設されており、大正元年(1912)に行われた大阪市中央公会堂の設計競技に続き建設工事が着工されていた。大阪市中央公会堂は、岡田信一郎によって基本設計がなされ、辰野金吾と片岡安による実施設計によって大正7年(1918)に完成している。

5. 2. 3 西洋的なアーバン・デザインによって生み出された都市的意味



(図5-22) 日本銀行大阪支店より中之島公園の奥に中之島図書館を望む。
中之島公園には、まだ豊国神社が移設されていないため
大正元年前後に撮影された写真と思われる。

上の(図5-22)の写真に写されている中之島図書館の周辺や、(図5-21)の大正13年大阪パノラマ地図からは、大阪市街地の大半が木造瓦屋根の2階建ての商家や住居で埋め尽くされていたことが分かる。堺筋と道修町交差点に現存する国指定重要文化財・旧小西儀助商店から、当時の木造瓦屋根の商家群による都市風景を推し量ることが可能である。

その木造瓦屋根商家の群れのなかに、いくつかの西洋建築が立ち上がっていた。官庁建築では、大阪湾に近い江之子島に位置していた明治7年竣工の大阪府庁、明治32年竣工の2代目の大阪駅、明治33年に河合浩蔵の設計で中之島より移転して竣工した大阪控訴院、明治25年竣工で佐立七次郎設計の大阪郵便電信局などがあった。そして民間建築では、明治34年に関野貞設計により今橋に竣工した日本生命保険会社、明治32年に野口孫市による設計で道修町に竣工した明治生命保険大阪支店などがあった。しかしこれらの西洋建築は、木造商家群のなかに毅然として点在するだけで、複数の西洋建築によって構成される西洋的な都市景観は未だ大阪には現れていなかった。

野口は、中之島図書館の設計で、日本銀行大阪支店との位置関係から都市的な意味をつくり出すことを意図していたと思われる。その都市的な意味とは、西洋的な都市景観のつくり方から生み出される、当時の日本ではまだ新しい西洋的なアーバン・デザインによるものだ

った。都市は都市生活の器であり、私たちは、都市の中での空間的な経験を自分の意識のなかで位置づけ、都市が自分の身体の延長であるような「親密な場所」にしようとしている。日本の伝統的な都市空間でも、「通り」や「橋」などの都市的な場所が起点となって人々の活気ある都市生活の器を形づくっていた。しかし欧米での広場や公園そして建築群によって生み出される都市景観や都市生活の場は、明治期の大阪の人々にとって体験できるものではなかった。野口は、その西洋的な都市的意味のつくり方を、西洋的都市景観として大阪で初めて実現したのである。

西洋的な都市景観の在りようについては、ケヴィン・リンチがボストンを例に、その著書『都市のイメージ』で記している通りだが、リンチはなかでも“Imageability”を重視し、良好な都市イメージを確立するうえで、“legibility”や“visibility”が重要であると述べていた(*2)。野口がしようとしていたことは、まさしく“legibility”や“visibility”を、大阪・中之島の地で都市景観として実現するものであった。下記の2点から中之島図書館における野口のアーバン・デザイン的な意図を捉えたい。

- (1) 「建築の据え方」から都市的意味をつくり出す。
- (2) 都市生活を営む人々へのメッセージとしての正面玄関

(1) 「建築の据え方」から都市的意味をつくり出す。

住友による図書館寄贈が正式に決定された後、図書館の敷地をどこにするのかという問題があった。大阪府により指定された地について、住友春翠は不満だった。春翠が住友本店の植村支配人に宛てた書簡には、「図書館の件につき西沢書記官と交渉の結果御報下され承領候。然る処、図書館建設の位置については中之嶋公園現形しかと記憶し申さず候えども、今日予定の位置は将来あまり面白からざる位置の様存じ候。小生のかねてより考え候場所は・・・」と述べ、春翠自身の図入りで希望の位置が描かれていた。それは、日本銀行大阪支店の道路を挟んだ真向かい、すなわち現在の大阪市庁舎の位置、もしくはそのすぐ南の土佐堀川に面する敷地であった。しかし結局、大阪府による図書館敷地の選定が動くことはなかった(*3)。

この指定された敷地は、江戸期の蔵屋敷経済により支えられていた中之島の繁栄が消滅したことを典型的に示す荒んだ場所だった。明治初年の中之島には「中之島の牢」と呼ばれる裁判所や処刑場が設置され、昼間でも追いはぎが出るという有様となっていたのだった。明治23年(1890)には裁判所や拘置所は堂島川対岸の若松町に移されたが、明治18年の淀川出水で中之島東端と土佐堀川対岸の北浜を結ぶ栴檀木橋は流され、橋は昭和10年ごろまで再建されなかった。従って中之島の東端は、「中之島山崎の鼻」と呼ばれる不便で人々の寄り付かない場所となっていたのである。

(図5-19)の明治33年の地図では、「図書館建設地」と「中之島公園」の表記があるが、日本銀行大阪支店の前の道路には、まだ民家が残っていたことが示されている。

このような状況の中で、野口は大阪の都市としての将来を見据え、中之島図書館の建築を日本銀行大阪支店と正面から向き合う配置とした。その中心軸を、日本銀行大阪支店の中心軸にほぼ一致させている。中之島公園を挟んで、「経済」を象徴する日本銀行大阪支店と、「文化」を象徴する中之島図書館が向き合って建つ都市景観としたのである。この「経済」と「文化」を象徴する2つの建築が一体となって、大阪の都市イメージを生み出す都市景観となった。まさしく“visible”で“legible”な都市イメージである。



現在の中之島にある日本銀行大阪支店と中之島図書館の中心軸の位置関係を示す。左図は国土地理院の電子国土Webの地図上で調べたもの。中心軸はほぼ一致しているが、両者の中心軸の位置関係には、自然地形に従った区画割りに合わせるため、約2度の方向のずれがある。しかし大きな景観の中では認識できるものではない。なお下図の現・大阪市庁舎については、日本銀行大阪支店と中之島図書館の当時の位置関係を分かり易くするため、薄く表記している。

(図5-23-A) 国土地理院の地図による位置関係



(図5-23-B) 現在の中之島の日本銀行大阪支店と中之島図書館

この強い都市イメージを継承するかたちで、後年には大阪市庁舎が日本銀行大阪支店の前面に位置することとなり、さらにその後、御堂筋が生み出される契機となった。この御堂筋の完成により、大阪の都市軸が江戸期よりの東西軸からキタとミナミの南北軸へ90度回転することが完了したのである。そして現在の中之島には大阪市中央公会堂も加わり、東西に連続する歴史的な都市景観が形成されている。

(2) 都市生活を営む人々へのメッセージとしての正面玄関

中之島図書館の建築に見られる顕著な特徴は、何よりもその大きな正面玄関である。西洋古典建築様式の正統的な規範に則った、ペディメント・列柱・大階段によって構成されている玄関ポルティコは、その中心軸を一致させた西向かいの日本銀行大阪支店の正面玄関と著しい対比を成している。

古代のギリシャ・ローマの時代からイタリア・ルネサンスの時代を経て、20世紀初頭までの欧米では、列柱とペディメントによる象徴性は、ほとんど無意識と言ってもよいくらいに、形式化され普遍化されたアイコンになっていた(*4)。その最も基本的な原形であるギリシャ・アクロポリスの丘に聳え立つパルテノン神殿は、高く掲げられたその姿により人々に崇高な理念の力を呼び覚ます強いメッセージ性を帯びていたのである。そしてイタリア・ルネサンスの時代には、特に列柱についての精緻な理論が組み立てられその美的象徴性が高度に洗練されていた。



(図5-24) 正面玄関のペディメント・列柱・大階段は、大阪で都市生活を営む人々に対し、文化を象徴する「知の殿堂」として、強いメッセージを放っている。



(図5-25) 日本銀行大阪支店の正面玄関

中之島図書館は、本格的にこの列柱とペディメントによる象徴性を体現した明治期の日本のなかでも最も早い時期の例とあってよい(*5)。人々は、大階段の上に毅然として現れた列柱とペディメントの正面玄関の姿に、新しい時代の「文化」を感じ取り「知を祝祭する殿堂」を具体的にイメージすることができた。当時の瓦屋根の木造商家が延々と立ち並ぶ市街のなかに、新しい時代の文化を象徴し聳え立つような知の神殿が立ち現れたのだった。それは(図5-22)の写真からも分かるように、市街の遠方にまで伝わる強い都市的メッセージであった。明治という新時代の都市のランドマークとして力強く「意味」を発信していたのである。前面が中之島公園という水平に拡がる舞台設定であっただけに、高く持ち上げられた列柱とペディメントの姿は、公園と一体となって更にその都市的意味の発信効果をより大きなものとなっていた。

註

(*1) 大阪の都市形成史において重要な意味をもつ日本銀行大阪支店の中之島への移転が、

誰によってどのようにしてなされたのか明確な文献は残されていない。しかしながら下記のいくつかの事実をあわせ考察すると、日本銀行を設立した松方正義（1835～1924）と、大阪株式取引所や大阪商法会議所の設立をはじめ大阪経済の復興に大きな役割を果たした五代友厚（1836～1885）の二人の関わりが推測できる。

- ① 松方と五代は共に薩摩藩士の家に生まれ、薩摩藩士の子弟として共に学ぶ生涯にわたる盟友であった。
- ② 中之島の一部敷地には、明治13年（1880）より内務省大阪司薬場が設けられた。
- ③ 中之島の他の一部敷地に明治18年（1885）五代友厚邸が1月に新築され、五代は同年9月に死去している。
- ④ 明治30年（1897）内務省司薬場が大阪衛生試験所として京橋に移転し、その中之島用地を日本銀行が五代友厚邸とあわせて取得した。
- ⑤ 当時は第2次松方正義内閣であり、松方は大蔵大臣も兼務していた。

以上を総合すると、中之島の現・日本銀行大阪支店の都市的な位置の重要性を五代友厚は見抜いており、五代の死後、松方が五代の遺志を引き継いで日本銀行大阪支店の新たな移転先を中之島に決定したと考えられないだろうか。内務省大阪衛生試験所の移転先や辰野金吾によるその建物の設計は日本銀行が手配していた。五代は本邸が靱にあったにも関わらず（現・大阪科学技術センターの地）、中之島の地も大阪の都市発展を見越して購入していたと思われる。

- (* 2) ケヴィン・リンチ著『都市のイメージ』 12～16頁
2007年新装版 岩波書店 原著“The Image of the City”は1960年
- (* 3) 小西隆夫著『北浜5丁目十三番地まで 一日建設の系譜』 64～66頁
1991年 創元社
- (* 4) 加藤耕一著『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』 196～199頁
2017年 東京大学出版会
- (* 5) 列柱とペディメントによって構成されるポーチコを正面玄関に持つ建築は、19世紀の欧米では枚挙にいとまがない。しかし、日本でペディメントを冠した本格的なポルティコのある建築は、実は少なかった。下記に野口設計の中之島図書館竣工（1904）以前の例を挙げてみる。

□ ウォートルス設計 造幣寮工場玄関（1871）

藤森照信著『近代日本の洋風建築 開化篇』では次のような説明がなされている。「玄関のペディメントの間のびが教えるように、本格的建築様式の教育を受けていないがゆえの限界は遂に万能技術者ウォートルスをしても超え得なかった。」 173頁

□ 片山東熊設計 京都博物館（1895）

ペディメントと列柱はあるが、列柱の間にはアーチが埋め込まれており、ここが正面玄関入口となっている。外部空間としてのポルティコではない。

野口以後の、片山東熊設計の赤坂離宮（1909）も表慶館（1908）も本格的なポルティコとは言えず、唯一昭和になって建てられた長野宇平治設計の大倉精神文化研究所（1931）があるのみである。しかし、これもプレ・ヘレニズム様式という特異なものであった。

図版・写真

(図5-14) レオナルド・ベネーヴォロ著 佐野敬彦・林寛治訳

『図説 都市の世界史（2）中世』 79頁

1983年 相模書房

(図5-15) 日建設計撮影

(図5-16) 国会図書館 近代デジタルライブラリー

(図5-17) 『新撰増補大坂大絵図』 大阪歴史博物館所蔵

(図5-18) 大阪市による『大正2年 大阪市街全図』に筆者書き込み

(図5-19) 日本銀行大阪支店の位置の変遷

下地図は小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』1991年創元社より転載したが、元図は明治33年『大阪市街業種案内地図』。日本銀行大阪支店の位置の変遷については、「にちぎん No32」に掲載された中村茂樹著『日本銀行の支店建物2 日本銀行大阪支店』の内容をもとに筆者が作成した。

(図5-20) 日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵

(図5-21) 出典：『大正13年大阪市パノラマ地図』 デジタルマップス発行

梅田新道から日銀銀行大阪支店の前を經由して土佐堀通に描かれている線は、明治41年（1908）に第2期線として開業し、堺筋を經由して梅田停車場と恵美須町間で運行されていた大阪市電を示している。

(図5-22) 大阪府立図書館所蔵

(図5-23-A) 電子国土 Web による国土地理院地図上に加筆

(図5-23-B) “FACT5 NIKKEN SEKKEI” 「建築の保存と再生」 12頁

(図5-24) 日建設計撮影

(図5-25) 筆者撮影

5. 3 建築的思考としての「場所と幾何学」

野口が亡くなる7ヵ月前の大正4年3月16日に書かれた日記には、「自分ハ学問ハ空駄目だ、・・・」という一文がある。そのなかで幾何学について下記の一文を書き残していた(*1)。

・・・さらば自分の職業に必要なある絵ハどうかと云へハ是亦頗るまづい、..そう云へハ自分ハ学校で一つだけ得意なものがあつた、それハ幾何学だ、幾何でハいつでも中久木先生を困らせたものだ、..建築には幾何の応用が必要である、図ニよつて出来上つたる実物を頭の中に画くのは全く幾何学的頭脳だ、..自分ハ元来天才でない頭を持って、少しでも美しい物を作らうと云ふので..幾何学的頭脳を応用する事を得る地位に在るのは非常な幸福である。

この文章は、自分が博士となったことについて「何だか世間ニ対してすまぬ様の感じも起こらんでハない」という感想のなかで書かれたものだった。「自分の絵は頗るまづい」という記述には野口の残した絵からすると意外な感があるが、彼の「上手な絵」の目線は、8年間ローマ王立美術学校で画法を修めた松岡壽の水準にあつたようだ。野口は帝大工科大学で松岡に絵を習っていた。その松岡に比べて「頗るまづい」と思っていたのだろう。これほどに自分に厳しい野口が、「幾何学が得意」と日記に書き残していたことからすると、よほどに幾何学を得手としていたかが分かる。ただ野口は、自分が設計した建築にどのように幾何学を応用したのかについては何も書き残していなかつた。

ところで野口は、第1部(図2-59)の写真にある通りピラミッドを見るためエジプトに赴いている。しかもクフ王のピラミッドの頂上にまで登っていたのである。伊東忠太がエジプトに行ったのは、1904年であり、野口はその4年前の1900年にエジプトに行っていた。野口は、おそらく日本人建築家で最初にピラミッドを見た人物ではなかつたか。伊東は、アジアからトルコなどの非西洋の建築を巡り、「東洋の建築家としてどうあるべきか?」という命題に突き動かされるようにエジプトに行っている。それでは野口のピラミッドにまで赴いた動機は何だったのか。野口は、原初的な形態であるクフ王のピラミッドを見たいという衝動に駆られてエジプトにまで行ったのではないだろうか。クフ王のピラミッドは、巨大な幾何学によって構成されている。巨大で原初的な形態が、私達に何かを越えるような強い感覚を呼び起こすのはその幾何学の故かもしれない。野口が、砂漠のなかに立つ原初的幾何学形態を是非とも見たいという衝動に駆られていたとすると、彼の建築術の原点を垣間見ることができる。

中之島図書館の建築物そのものや建築図面を分析すると、未だ発見されていなかつた幾何学が隠されていることが判明した。この幾何学を骨格として、中之島図書館は設計されていたのである。その幾何学を明らかにすることから、野口の中の中之島図書館における建築的思

考について考察する。

ただ中之島図書館の設計において幾何学が使われていたものの、野口の目的が幾何学を使うことにあったのではなかった。幾何学はあくまで手段であり、目的としていたのは、そこにどのような「場所」をつくり出すのかという点にあった。前節で、経済の象徴である日本銀行大阪支店に呼応する文化の象徴として、野口は中之島図書館を当時の大阪に新たな都市的意味をつくり出したことを述べた。そのために外観において、野口は都市生活を営む人々へのメッセージを発信できる正面玄関をとしたが、次に野口が成したのが、その図書館の建築としての中身の在りようであった。その在りようも、文化の象徴に相応しい場所ではなくてはならなかった。そこで野口は、新しい時代の文化を実感できる場所として、象徴的な空間経験を訪れた人々が体感できる器を設計したのである。幾何学は、その「経験の器」の骨格として取り入れたものであった。第5章全体のサブタイトルを「場所と幾何学」としたが、「場所」と「幾何学」の在りようがこの節の主要テーマとなる。本節は、以下の項目から構成する。

5. 3. 1 中之島図書館を訪れる人々が体験する建築的経験について
5. 3. 2 「経験の器」の骨格としての幾何学
5. 3. 3 バロック階段について
5. 3. 4 「場所の意味」を確定する西洋古典様式建築の装飾技法
5. 3. 5 中之島図書館における野口の建築的思考

まず5. 3. 1にて、野口が図書館の在りようとしてどのような場所にしようとしていたのか、その目的について考察する。そのためには、現在の中之島図書館を訪れる私達がどのような建築的な経験をしているのか、その場所的意味を体験することが重要となる。野口が提供しようとしていたと思われるその建築的な経験を記述する。

中之島図書館において野口が使っていた幾何学について分析・考察するのが、5. 3. 2のテーマである。「経験の器」としての中之島図書館に、野口が骨格としてどのような幾何学を導入していたのかについて記述する。野口が正面玄関をペディメント・列柱・大階段から成る西洋古典建築様式で設計していたように、全体構成も西洋古典建築様式の手法を採り込み組み上げたものだった。

5. 3. 3では、正面大階段から内部のドーム空間に至るまでの象徴的な空間体験のシークエンスのなかで最も劇的な効果を見せている円形ホール中央のバロック階段について考察する。ここでもイタリア・ルネサンスをはじめとする野口の西洋古典建築についての習熟をみることができる。

中之島図書館を訪れる人々にとって最も身近な建築的意味は、西洋古典様式建築の豊富な装飾群から感じ取られていた。5. 3. 4では装飾について簡潔に記述する。そして最後の5. 3. 4にて、総括的に中之島図書館における野口の建築思考について考察する。

5. 3. 1 中之島図書館を訪れる人々が体験する建築的経験

中之島図書館の「建築の在りよう」として、当時の大阪のなかで建ち始めた他の西洋建築と比較して異なる点があった。中之島図書館は、まだ数少ない公共建築として、一般の人々に開放された建築だったことである。当時の立派な西洋建築は、日本銀行や控訴院のように一般の人々が簡単に入れる建物ではなかった。確かに大阪府庁や大阪停車場のような公共建築もあったが、中之島図書館のように本格的西洋建築で一般の人々が自分の行動の場所として気兼ねなく入り使用することができるのは、実は画期的なことだった。5. 1. 3にて、ある日の「閲覧室日誌」では入館者670人のうち259人が閲覧せずに図書館を見るために入館していたという記録を紹介したが、初めて西洋建築を体験しようとする人々の数が絶えなかったことを伝えている。

現在の中之島図書館を訪れる私達の体験からは、訪れた人々がこの図書館で「上昇する象徴的な空間経験のシークエンス」を体感することが、この建築の主題であったことを読み取ることができる。明治期の人々は、上昇する空間などは体験のしようもない水平の世界に生きていた。その水平の世界のなかに現れた誰もが体感できる象徴性の強い上昇する空間は、「知の殿堂」へと向かう自分の身体経路のドラマとなり、強い「場所性」を生み出すこととなった。自分自身が「知」へと向かう舞台上の主人公となれる場所が出現したのだった。

須磨別邸の「場所の意味」が敷地・建築全体に散りばめられていたこととは対照的に、中之島図書館では「場所の意味」が一本の中央軸線上に集中されていた。人々は正面大階段を昇り列柱の間を抜け、中央ホールの優雅な曲線を描くバロック階段を昇り、半球体に包まれるドーム空間に至るという「経験の器」としての建築だったのである。

(1) 内・外空間における上昇する象徴的空間のリフレイン

この建築の主題は「上昇する象徴的空間」であった。その主題をもとに、2つの変奏曲のように、その主題が外部と内部でリフレインするように連続して現れている。

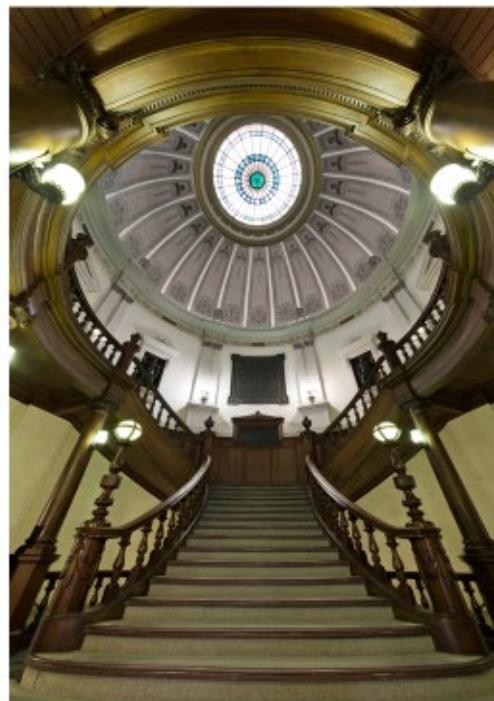
正面玄関の大階段に辿り着いた人は、大階段の両脇にある「智慧のありかを示す灯台」のようなブロンズ彫刻の照明灯に迎えられる。見上げると4本の優雅な列柱とその上の大きな三角形のペディメントが誘うように空に聳えており、階段を昇ればやや拡がった中央の2本の柱の間に、彫刻で縁どられた正面玄関のアーチと正面扉の重厚な三方枠が迎えている。明治の時代であれば、このポルティコで後ろを振り返った人は、手前の中之島公園と遠方にまで瓦屋根の商家の群れが延々と広がっている光景に気づいただろう。外部における「上昇する象徴的空間」の建築的な経験である。

正面玄関のポルティコと前室を経て前に進むと、大きなドームに抱かれた円形ホールが現れる。眼前には、上昇するダイナミックなバロック階段が再び誘うように両手を広げており、その階段の両側には、密実な木材で彫刻された照明灯が行き先を照らしている。上部の円形ホールでは、「知」の所在を示すように、円筒状に湾曲する壁に並べられた8組の双柱

が光を掲げており、階段をゆっくり上ると上部にブロンズ製の銘板がある堂々とした踊り場にたどり着く。その踊り場から後ろを振り返ると、今まで上って来た外部の大階段からバロック階段まで全てを見渡すことができる。そして左右の階段を選んで閲覧室のある最上階に至る。内部における「上昇する象徴的空間」の建築的な経験である。



(図5-26)
象徴的に上昇する外部空間



(図5-27)
象徴的に上昇する内部空間

(2) 象徴的意味が充満したドーム空間

半球形のドーム空間に包まれた円形ホールの中には、様々な象徴的意味を担った銘板や彫刻が各所に配されている。正面バロック階段踊り場の上部には「建館寄附記」としてブロンズ銘板に鑄込まれた住友吉左衛門友純の言葉が掲げられ、ホール空間全体を統べる役割を果たしている。

我が大阪は関西の雄府にして、人口百万、財豊かに物殷（さか）んにして諸学競い興る。而して図書館の設独り焉（これ）を闕く。是に於いて、府庁、建設の議有り。某、自ら揣（はか）らず、図書館一宇および図書財本若干資を献じ、もって微力を効さんことを請う。府議して之を納め、明治三十三年十一月に起工し、三十七年一月に至って成れり。それ、宇内の交通、五洲の貿易経済の術は、商工より急なるは莫し。而して大阪は商工の淵藪と称す。

斯の館に入る者は、仰いで国家の盛運を思い、俯して我が府の富源を察し、之を培い、之を養い、諸学理に参じ、益（ますます）功を将来に収めよ。庶幾（こいねがわ）くは府庁建館の義に負かず、某も亦た余榮有るに与らんことを。

従五位 住友吉左衛門識す。

明治41年（1908）7月に東京美術学校で製作され掲げられた銘板であった（*2）。さらに大正11年（1922）増築完成の折にも、ブロンズ製の銘板がその記念として製作され、明治41年の銘板に下に設置されている。



（左上 図5-28） 矢印で示した銘板は、住友春翠が記した「建館寄附記」
（中下 図5-29） 左右の龕（ニッチ）に収められた「文神像」と「野神像」

（上右 図5-30）
丸印はコーニスに埋め込まれた「八賢人」の銘板位置を示す
（中上 図5-31）
その一人、ダーウィンの銘板

ブロンズ銘板の左右には、大きな龕（ニッチ）が壁面に設けられ、その中に「文神像」と「野神像」のブロンズ彫刻が収められた。のちに「長崎平和祈念男性裸像」を製作した北村西望の作品である（*3）。「知性」と「野性」をそれぞれ表現しているが、「和魂（にぎみたま）」と「荒魂（あらみたま）」は、古代以来、日本人の心魂の2極を成すものとされてきた。

ドーム状の天蓋を頂く大きな円筒形の壁面は、8組の双柱に支えられているかのようにデザインされているが、その双柱の頂部を結ぶコーニスには、8つの銘板が埋め込まれている。ダーウィン・ゲーテ・カント・シェークスピア・アリストテレス・ソクラテス・孔子そして菅原道真の八賢者の銘板である。古今東西の哲学者・科学者・芸術家からこの8人を選んだのは、当時の哲学の第1人物とされた井上哲次郎であった。

これらドーム空間に込められた様々な象徴的な銘板や彫刻は、野口が設計し竣工した当時はなかったものである。しかし空のニッチは既に竣工当初から設置されており、将来これらの象徴群が散りばめられることは、野口が当初から意図していたことだったと思われる。

5. 3. 2 「経験の器」の骨格としての幾何学

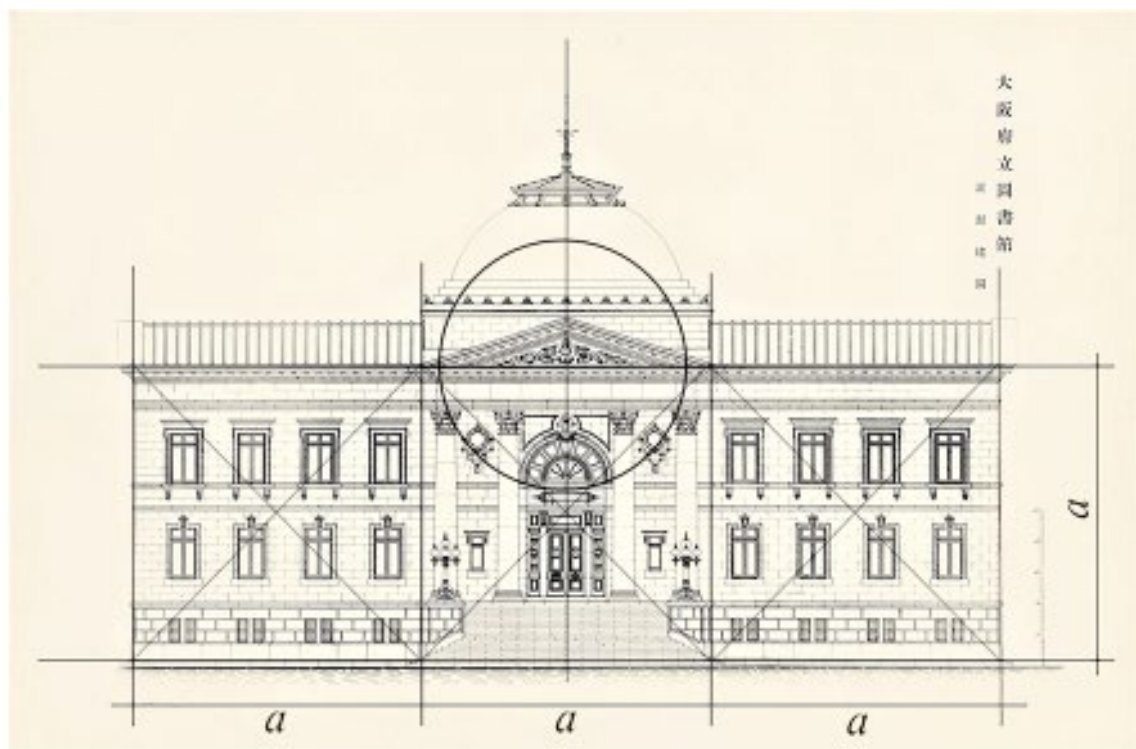
野口は中之島図書館の中央軸を5. 2. 3で述べたように日本銀行大阪支店の軸線と一致させ平行してこの建築を据えたが、その全体構成で野口が採ったのが、立方体を南北に連続して並べるといふ幾何学的な手法だった。この三つの立方体の並置による幾何学的構成が、人々がそれとは気づかぬままに中之島図書館の姿に理知的な印象を受けていた要因だったと思われる。(図5-33)の立面図と(図5-34)の断面図で示すとおり、その幾何学とは一辺 a の寸法を持つ三つの立方体を連結したものだった。(図5-35)の平面図からもその構成を読み取ることができる(*4)。

野口は、日本銀行大阪支店に正面を向けて三つ並んだ立方体にうち、中央の立方体の前面に5. 2. 3の(2)で述べたペディメント・4本の列柱・大階段から成る大きな正面玄関ポルティコを取り付けた。この正面玄関の大ポルティコが都市的意味を発信していたことは前述したが、この構成にも古典建築様式に則った後述する幾何学が込められていた。

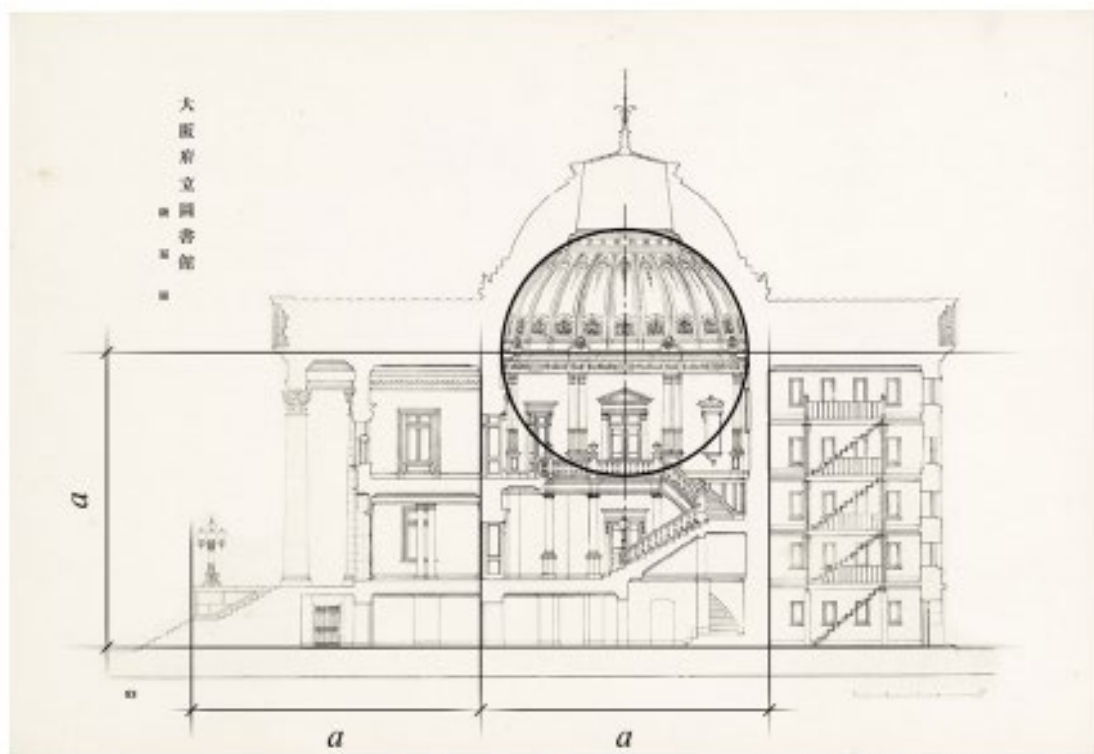
さらに中之島図書館の建築における特筆すべき幾何学が、中央ドーム空間のなかに込められたイマジナリーな内接球であった。半球ドームの内側と3階床レベルに接する仮想の球体である。このドーム空間には、前述したように様々な象徴的意味が散りばめられているが、またこのドーム空間があるからこそ人々は「上昇する象徴的空間」を体験できたのであった。



(図5-32) 中之島図書館 西側正面



(图 5 - 3 3) 西侧正面立面 几何分析图



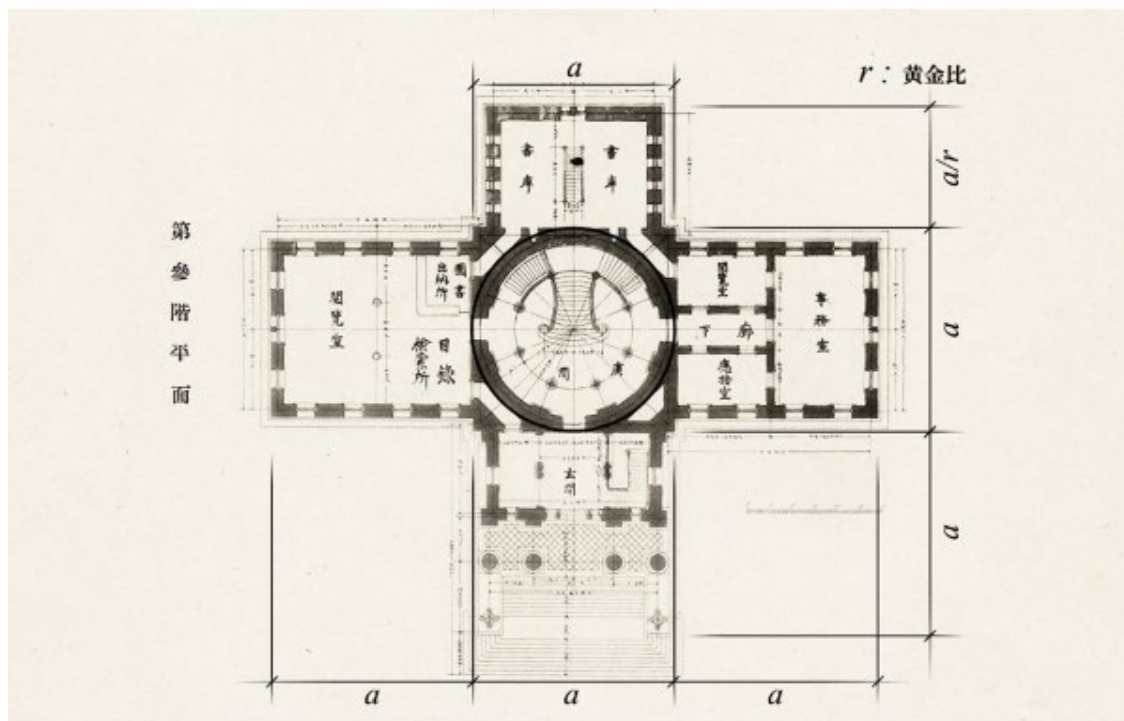
(图 5 - 3 4) 断面图 几何分析图

野口の中之島図書館における幾何学を大きく捉えれば上記のとおりであるが、さらに(1)では、その幾何学のより具体的な内容について考察する。また(2)では、野口の中之島図書館の建築的思考で参考にしたと思われる西洋古典建築2例について記述する。野口がどのような影響を受け西洋古典建築の幾何学を導入していたのかを考察するものである。

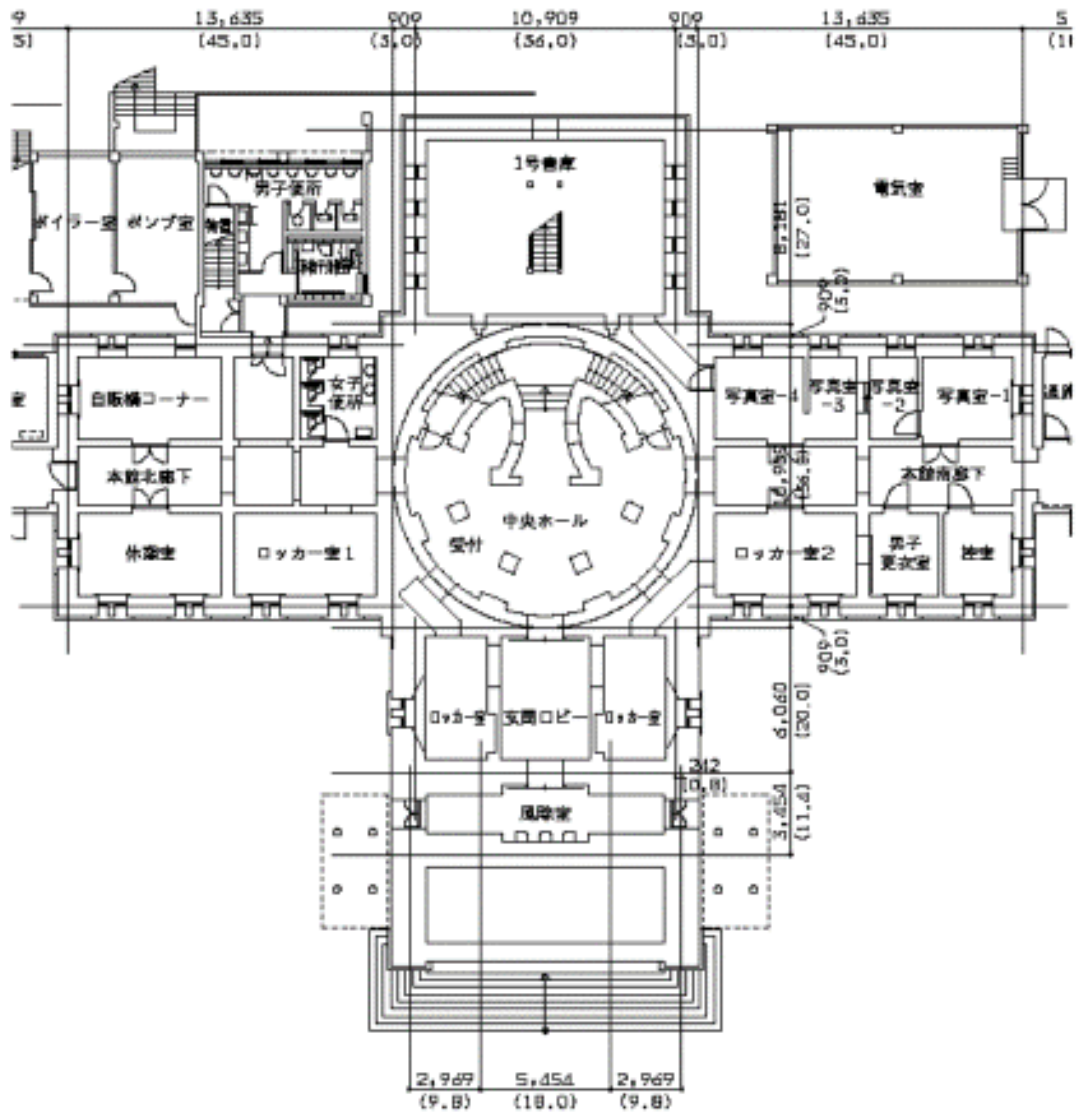
(1) より詳細な幾何学について

中央半球ドームの内接球の中心は、中央立方体の中心軸と高さ a の水平線の交点すなわち中央立方体の上面中央点となっていることを、(図5-34)の断面図で示している。野口は、この内部の水平線の高さすなわち3階の円形ホール内部の円弧壁を飾る双柱群の上端部を水平に繋ぐエンタブラチュアのコーニスの水平レベルと、外観におけるエンタブラチュアのコーニスの水平レベルを一致させていた。内部空間と外部空間を貫いて統合する幾何学を野口が考えていたことを示すものである。ちなみにこのドーム空間の内接球の半径寸法は、19尺2-3/8寸(5829mm)となっていた。(図5-37)の断面矩計図で示すとおりである。

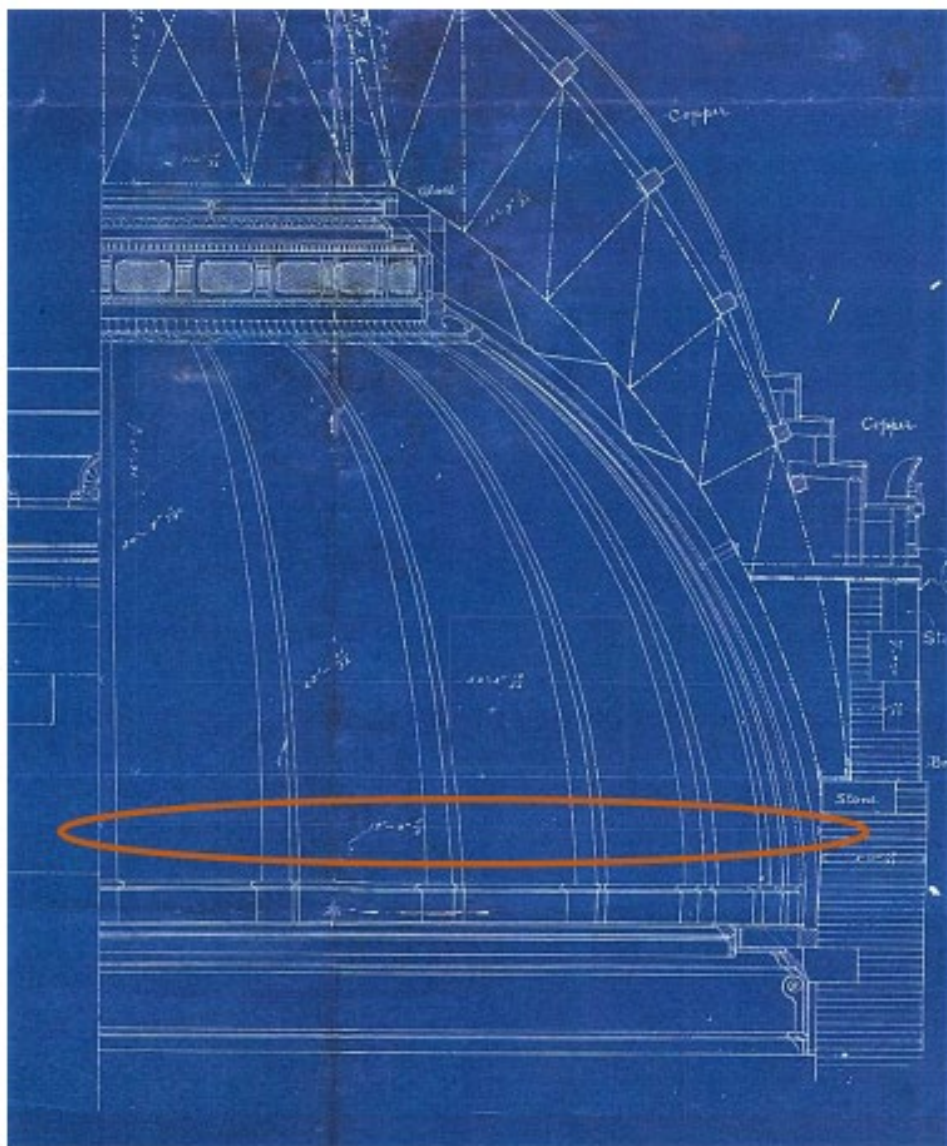
三つ並置された立方体の一辺の具体的な長さは、(図5-36)で示しているように、寸法 a は45尺すなわち13,635mmであった。



(図5-35) 平面図 幾何分析図



(図5-36) 現況1階平面図にて実寸法を示す
 $a=45$ 尺 (13,635mm)であることが
 わかる

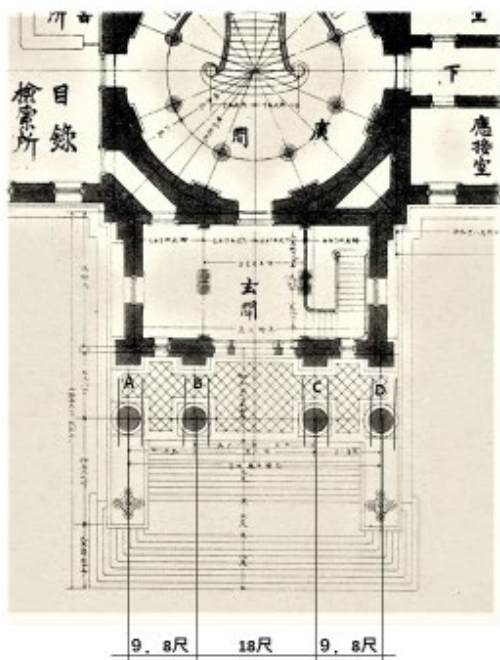


（図5-37） 中之島図書館 中央ドーム部断面細計図

楕円で示した寸法には、中心線から漆喰塗り下地まで
 $19'-6\frac{3}{8}$ と表示されている。リブを含む漆喰厚さを
 4寸と想定すると、内接球半径は $19'-2\frac{3}{8}$ （5829mm）
 となる。

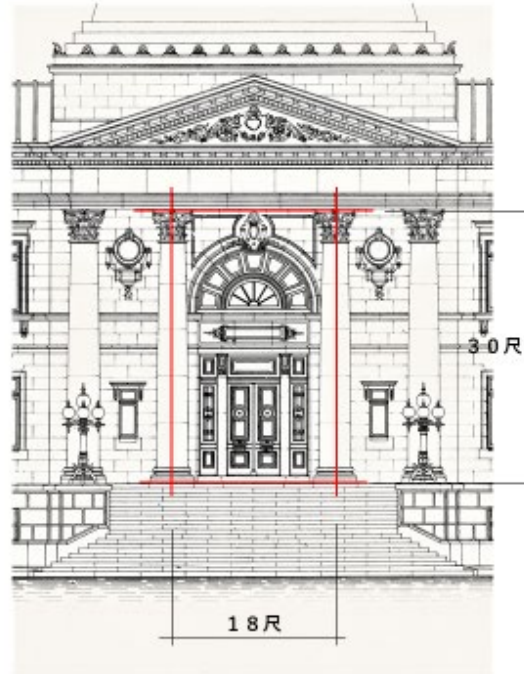
(図5-26)の正面大階段の写真は、正面大階段の両脇に据えられたブロンズ製の彫刻的な照明具がその石造の台座とともに重要な役割を果たしていることを示している。この照明具の石造台座の位置の先端と西面外壁面の距離も、立方体の一辺の長さである a であった。すなわち(図5-35)の平面図にも記したように、石造台座の二つの先端は平面で一辺 a の正方形を描く位置に定められていた。平面図で三つが並列する前にもう一つの正方形が描かれていたのである。一方、東側書庫の東側外壁の平面位置を定める基準は、一辺 a に対する黄金矩形を描く位置に設定されていた。野口は正面の照明具石造台座の位置を決めるうえでも、また書庫の外壁位置を決めるうえでも、何等かの幾何学的根拠を求めて決めていたと考えられる。

西洋古典建築様式では、オーダーと柱割りと呼ばれるデザインの基本がイタリア・ルネサンスの時代から明確にされていた。オーダーとは、第1部の(図2-30)で野口が行っていたイオニア式オーダーの分析習作にみられるような、柱基・柱身・柱頭からなる1本の柱とその上に載るエンタブラチュア各部の構成比を決定するものだった。柱割りとは、柱の根元の径を基準に柱間隔を設定する比例方式のことであった。欧米の建築家は基礎的なそれらの比例関係につき知悉したうえで、かなりの許容度の幅があるなかで寸法や比例関係を決定していた。中之島図書館では、コリント式の柱頭を持ち緩やかなエンタシスを施された4本の列柱が、この西洋古典様式による建築構成上、最も重要な位置づけにある。



A: 3.6尺 B: 3.5尺 C: 3.5尺 D: 3.6尺

(図5-38) 正面列柱の柱割り



(図5-39) 正面2本の柱が構成する黄金矩形

中之島図書館でまず決められたのが、正面2本の柱が構成する比例関係であったと思われる。(図5-38, 39)にみられるように、正面中央の2本の柱間隔は、柱芯の寸法間隔で18尺としていた。この寸法は、『野口博士建築図集』の平面図にも書き込まれ、またその後の補修工事などの図面でも表記されている基本的な寸法である。一方(図5-39)で示している柱高さ30尺という寸法は、様々な図面で直接的に寸法を表示する箇所は見つけられなかったものの、確認可能な基準となる表記寸法と図面表記の比例関係から2種の方法で導き出した数字である。柱高さは、30尺にほぼ間違いないと断定した。

正面の2本の柱に囲まれる(図5-39)に書き込んだ赤線矩形は $30:18=5:3$ であり、正確な黄金矩形縦横比の 1.618 に対して 1.67 の縦横比となっている。通常西洋古典建築の柱割りは柱の根元の径の外面と柱間の内面の寸法で表現されるものだが、野口は柱芯寸法を重視していたようだ。

中之島図書館における柱径と柱間の比例関係を明らかにするために、(図5-38)にA・B・C・Dで示した柱の根元の柱廻り寸法を実測したが、意外な事実が明らかになった。柱廻り実測寸法は、A:3435mm、B:3342mm、C:3335mm、D:3445mmであった。従ってそれぞれの柱径を円周率で割り柱径を尺寸表記に直すと、A:3尺6寸、B:3尺5寸、C:3尺5寸、D:3尺6寸となる。すなわち4本の列柱の両端のAとDの柱径が1寸だけBとCの柱径よりも大きかったのである。これは意図的になされていたと考えられる。その意図とは、4本の列柱の両端の柱径をわずかながら太くすることによって、4本の列柱全体における秩序ある安定感を少しでも高めようとしていたことにあると思われる。言わばエンタシスと同じように、安定感ある視覚効果を上げる一つの方法として両端の柱径寸法を少しだけ太くしていたのである。

この正面列柱の柱径寸法の微妙な調整と、前記の正面2本の柱が黄金矩形を構成していたことは、相互に関連する一対の措置として正面列柱の全体構成を緊張感ある美的効果を高めるために、野口が成していたことであつたと考える。

(2) ヴィラ・ロトンダと古代ローマのパンテオン

野口は、中之島図書館による都市景観のつくり方やその設計において、西洋建築の手法を徹底して採り入れる姿勢を貫いていた。正統的な西洋古典建築様式に則った建築としていたことから明らかである。

中之島図書館の「場所と幾何学」の関係について、設計のインスピレーションの原型となったと推測できる建築的なモデルが、パラディオ設計によるヴィラ・ロトンダと古代ローマのパンテオンであった。野口自身はこの二つの建築について言及はしていないが、ヴィラ・ロトンダについては、幾人かの主要な建築史家はその影響を中之島図書館に見ることを指摘しており(*5)、古代ローマのパンテオンについては、ドームに内接する球体幾何学という顕著な特徴を中之島図書館に見ることができる。

(2) - 1 ヴィラ・ロトンダ

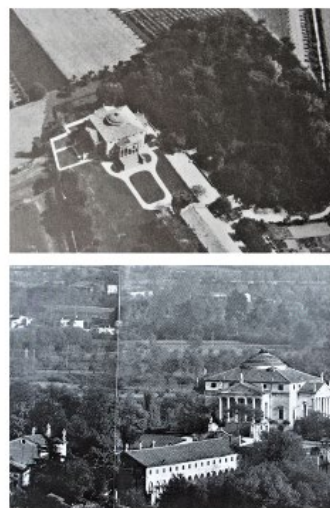
ヴィラ・ロトンダは、イタリアのヴェネツィアから約60km西方にある都市・ヴィチェンツァ郊外の農園や葡萄畑が美しく広がる緩やかな丘陵の上に建っている。アンドレア・パラデーディオ(1508~1580)に設計を依頼し建てたのは、ヴィチェンツァの名門貴族であった。ヴィラ・ロトンダは最初から純粋に貴族たちの人文主義的な交わり場として建設されている。ヴィラ・ロトンダの計画・着工は、早ければ1566年末、遅くとも1568年頃にはなされていたようだ(*6)。ヴィラ・ロトンダの最大の特徴は、まずその立地にある。パラデーディオ自身が『建築四書』のなかで次のように述べている(*7)。

敷地は、考え得るかぎり美しく快適な場所である。というのは、きわめて登りやすい小さな丘の上にあり、一方の側は、船が通えるバッキリオーネ川によってうるおされ、他の側は、きわめて美しい丘陵地に囲まれて、まるでひじょうに大きな劇場のような形になっており、また一面は耕されていて、きわめて良質の果物と、きわめてみごとなブドウの樹で充満している。ある方向では視界が限られ、また他の方位では地平線まで見渡るといふ、きわめて美しい眺望をあらゆる側から楽しめるので、四方の正面すべてにロτζィアがつくられている。

ヴィラ・ロトンダは、周辺に美しい田園が広がるゆるやかな丘陵の上に、自身が主人公となり中心から世界を眺める人文主義者の交わり場として、建築されたのであった。



(図5-40) アンドレア・パラデーディオ設計 ヴィラ・ロトンダ
着工は1567年頃と考えられている。

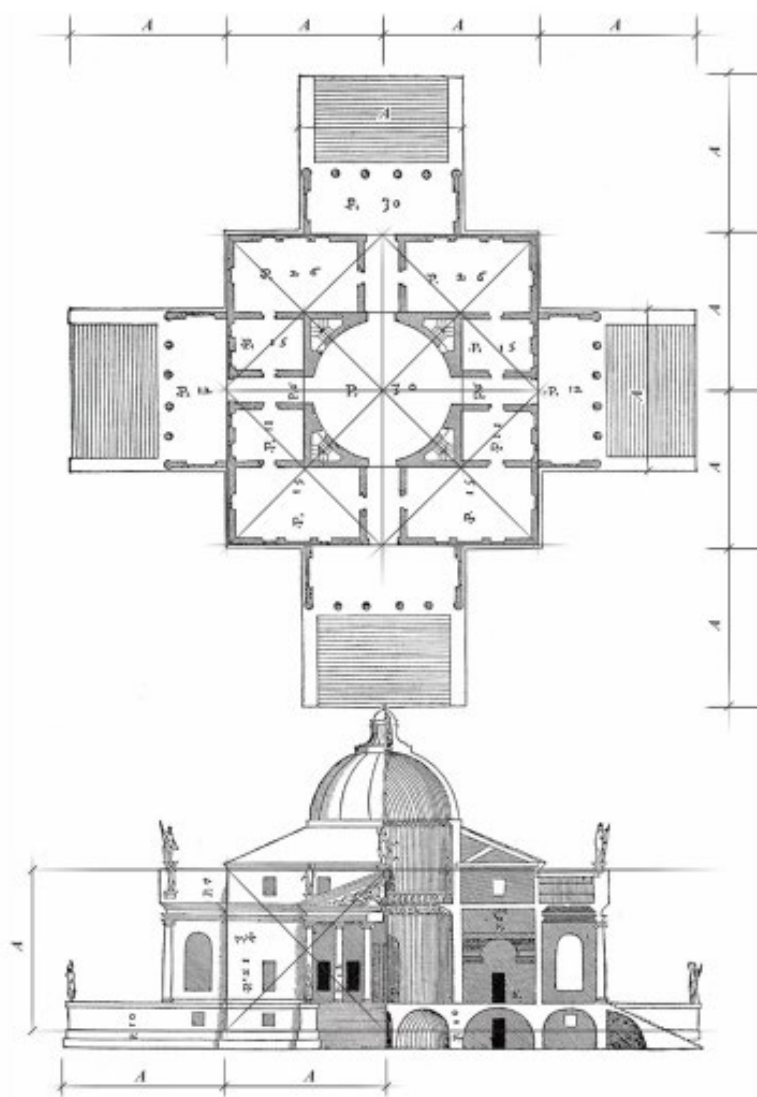


(図5-41) 上空より見たヴィラ・ロトンダ
(図5-42) 丘の上からのヴィラ・ロトンダ

その幾何学的な最大の特徴は、(図5-43)に示すとおり、一辺Aの長さの四つの立方体が整然と並置されていることにあった。平面図では四つの正方形の中央に、人文主義者たちの集いの場であった円形広間が描かれているが、この円形広間を包む正方形も一辺の長

さはAであった。ヴィラ・ロトンダは立方体の組み合わせで幾何学的に構成されていたのである。中央の半球ドームはこの原案においても中之島図書館の仮想内接球のような処理はなされていない。現在に残っているヴィラ・ロトンダは、弟子のスカモッティにより完成されたが、天井の丸みはもう少し抑えられている。

ヴィラ・ロトンダの最大の特徴は、通常は正面玄関にしか設置されない大階段・ペディメント・列柱から成るポルティコが四方に取り付けられていることにある。これら四方向の大階段の先端も一辺Aの正方形の幾何学で位置づけられていた。



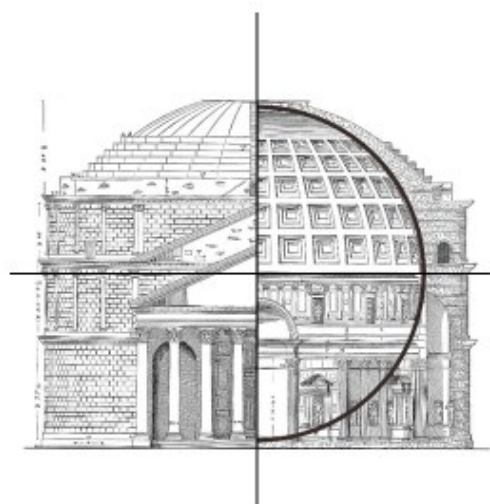
(図5-43)

『建築四書』に掲載されているヴィラ・ロトンダの平面図・断面図・立面図
立方体の幾何学についての寸法分析線は、筆者によるもの

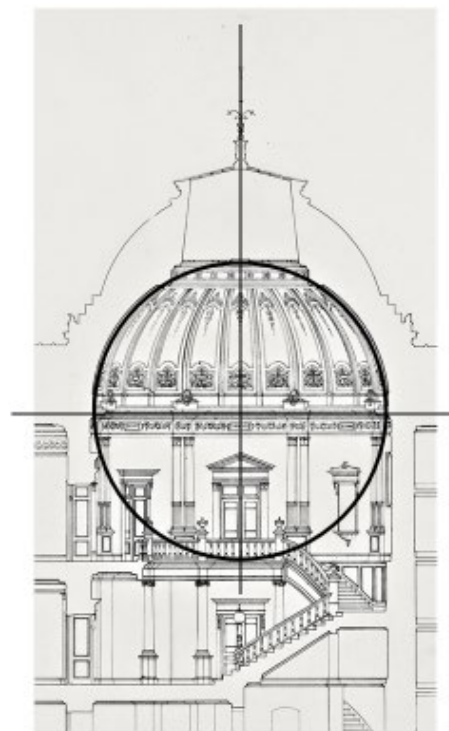
(図5-43)の平面図・断面図・立面図は、パラディオの著作である『建築四書』から採ったものである。17世紀末から19世紀初頭の欧米で、この『建築四書』は様々な言語に翻訳され、大きな影響力を見せていた。辰野金吾もパラディオについて言及した記録が残っているが(*8)、当時の日本においても『建築四書』は基本的な図書であったと思われる。野口の中之島図書館では三つの立方体を並置し、その中央の立方体の正面に大階段・ペディメント・列柱から成る大きなポルティコを取り付けているが、その幾何学のインスピレーションの源泉はヴィラ・ロトンダにあったことを推測させる。また中之島図書館の大階段の両脇を固めている2基の照明灯の石造台座の先端の平面位置も、一辺長さ a の正方形で位置づけられているが、野口がヴィラ・ロトンダを参照したことを窺わせる手法であった。

当時の欧米では、17世紀末から19世紀後半にかけて英国や米国東海岸で、パラディアニズムと呼ばれるパラディオを再び見直す一つの潮流があった。特に大学や図書館など「知の殿堂」となるべき建造物には、このパラディアニズムが採り入れられていた。その強い幾何学的特性によって「知の殿堂」としての象徴性を生み出すパラディオの設計手法は、当時の欧米の建築界にも大きな影響を与えていたのである。この欧米のパラディアニズムについては、欧米建築視察巡遊をしていた野口も感得していたことと思われるため、最後の(補)にて「当時の英国・米国に見るパラディアニズム」として別に捕捉記述する。

(2) - 2 古代ローマのパンテオン



(図5-44) 古代ローマ時代のパンテオン



(図5-45) 中之島図書館ドーム部

古代ローマ時代のパンテオンを建造したのは、古代ローマ時代の建築文化が最も円熟した時期の皇帝ハドリアヌス（76～138）であった。ハドリアヌスは、若年の頃からその軍事的才能を示し、皇帝在位以降は古代ローマ五賢帝の一人に数えられる政治家であった。芸術的才能にも溢れ、詩人かつ画家であり建築家でもあったと言われている。ハドリアヌスが皇帝に着いたのが117年であり、その翌年から119年の間にパンテオンの建設が始まった。完成したのは125年から128年の間であると推定されている。

古代ローマ時代のパンテオンを実測調査したパラディオは、『建築四書』において下記のように記述していた（*9）。

この神殿は、「パンテオン（万神殿）」と呼ばれたが、それは、ユピテル以下のすべての神々に対して奉獻されたからである。またあるいは、おそらく（他の人々が主張するように）この建物が「世界」の形をしているため、すなわち円堂であるためであって、床面から採光用の天窓までの高さが、直径、すなわち一方の壁から他方の壁までの距離に等しい。

この記述に従ってパラディオが別々に掲載した立面図と断面図を筆者が合成し、断面図にパラディオの言葉による記述を描き込み図示したのが（図5-44）である。パンテオンの断面図から分かるように、内部空間の上段のエンタブラチュアのコーニスの高さと同様にドーム垂直中心線の交点を中心とし、ドームと床面に内接する想像上の内接球の円を描くことができる。すなわちこのパンテオンには、完全な球体の幾何学が隠されていた。天窓の大きく開いた円形の穴からは、自然光が降り注いでおり、パンテオンの空間内に充満する光を現在でも体験することができる。時間とともに刻々と変わる太陽光は「宇宙」を感じさせるものである。

前述したように、中之島図書館のイマジナリーな内接球の中心の高さ位置は、パンテオンと同じくエンタブラチュアのコーニスの高さに一致させていた。また『野口博士建築図集』に収められた断面図には天空光を採り入れるトップライトが描かれていた。野口がローマに赴いていたのは確かであるが、パンテオンを訪れた記録は残されていない。しかし、これらの事実からは、野口がパンテオンをインスピレーションの源泉として中之島図書館の内部空間のクライマックスである半球ドームの設計を行ったことは明らかであると考えられる。パンテオンが神々のための神殿であったように、野口は中之島図書館のドーム空間に前述した様々な象徴的意味が込められるように設計していた。ここでもその場所に相応しい幾何学が選ばれていたのである。

5. 3. 3 バロック階段について

5. 3. 1にて中之島図書館で人々が体験する円形の玄関ホールでの建築的経験を述べたが、上昇する象徴性を内部空間において実現していたのが正面から舞台に上がるように踊り場に昇り円形壁面に沿って湾曲しながら二手に分かれて昇るバロック階段だった。

この中央の踊り場から左右の2方向に分かれるバロック的な階段形式は、様々な種類のあるバロック階段のなかでも特に「皇帝の階段 “Imperial staircase”」と呼ばれ、西洋建築のなかでも定石のように欧米の宮殿などで使われていた。パリのオペラ座の大階段も典型的な皇帝階段である。この皇帝階段は、常に何かに向けて身体経路をドラマ化するものだった。宮殿の場合は「権威」に向けて、そしてオペラ座の場合は総合芸術の壮大な結晶である「オペラという劇的なもの」に向けてであった。中之島図書館においては、円形ホールのバロック階段に「知の在りかに向けて身体経路をドラマ化する」という意味が込められていたと思われる。野口が意図した「人々が体験する建築的経験」のシークエンスのなかでも最大のポイントであった。

野口は西洋古典建築の設計手法を駆使し中之島図書館を設計していたが、イタリア・ルネサンスの古典建築で、同じような建築的効果を見せる図書館の事例があった。フィレンツェにあるミケランジェロ設計のサン・ロレンツォ聖堂に附属するラウレンティアーナ図書館の階段である。両者は、同じように図書館であること以外に、玄関ホールのレベルから上階の閲覧室レベルに人々を導く劇的な階段であること、そして階段室全体が玄関ホールとなっている点において共通する特徴を備えていた。

野口がラウレンティアーナ図書館を参考としていたことの直接的な確証はないが、野口のインスピレーションの源泉を探るという意味で興味深いものがある。

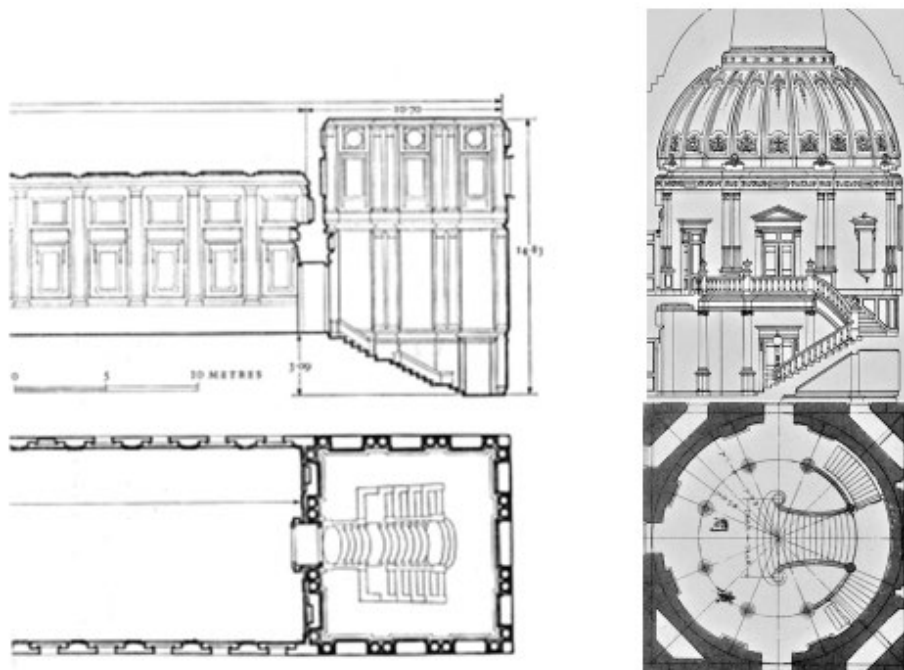


(図5-46) ラウレンティアーナ図書館
玄関ホールと階段



(図5-47) 竣工当時の中之島図書館
中央ホールと階段

下の(図5-48)は、同じ縮尺によってラウレンティアーナ図書館と中之島図書館の平面図と断面図を並べたものである。正方形と円形の違いはあるにしても、また多少中之島図書館の方が若干大きいものの、階段の大きさと内部空間平面の広がり関係には近いものがある。また、平面の広さに対する垂直方向の気積のプロポーションにも、両者は相通じるものがあるといえるだろう。これは単なる偶然の一致ではないのではないだろうか。



(図5-48)
 平面図と断面図を同一縮尺で並置した
 ラウレンティアーナ図書館(左)と中之島図書館(右)

さらに気になる一致点がある。双柱と壁龕である。ラウレンティアーナ図書館玄関ホールの特徴は、12組の双柱であった。中之島図書館の上階のシリンダー状壁面にも、8組の双柱が、中空に円を描くエンタブラチュアを支えるように付け柱として据えられている。ともに下から見上げると、上空に立つ一対の柱たちが階段を昇る私達を見下ろすように立ち並んでいるのである。

ラウレンティアーナ図書館の双柱の間の壁龕は、彫りの深い彫刻的な装飾が施され中空に浮かぶように並べられている。中之島図書館の正面左右の双柱の間にも、彫刻的な装飾が施された左右一対の壁龕が、壁のなかに浮かぶように配置されている。ラウレンティアーナ図書館では、彫刻的な壁龕の中には何も入っておらず奥の壁で塞がれているのみであった。一方、中之島図書館の一対の壁龕も、竣工した当時は、大正11年(1922)に北村西望作の「文神像」と「野神像」が据えられるまで、何も据えられていなかった。(図5-47)

の明治の竣工時の写真に見られるように、ラウレンティアーナ図書館と同じく何もない壁龕であった。野口の大正4年の死後7年を経過して、やっと2体の神像が設置された。野口は、将来に何の像が据えられることはイメージしていたであろうが、何も据えられていなくとも気にしていなかったのではないだろうか。



(図5-49)
ラウレンティアーナ図書館 双柱と壁龕



(図5-50)
中之島図書館 双柱と壁龕

野口がフィレンツェを訪れていたことは確かである。ミケランジェロ設計のラウレンティアーナ図書館は、いわば「古典」となっており、パラディオを熟知するほどに研究熱心な野口が、この図書館について知らなかったはずはない。また、もし春翠から図書館寄贈の思いについて欧米建築視察巡遊前の野口が内々聞かされていたならば、フィレンツェを訪れていた野口は、ラウレンティアーナ図書館を必ず訪れていたと思われる。空間をドラマ化するような階の違いを上下に繋ぐ階段の設計手法について、野口はラウレンティアーナ図書館からインスピレーションを得ていたのではないだろうか。

5. 3. 4 「場所の意味」を確定する西洋古典様式建築の装飾技法

現代の私たちが失ったものの一つに装飾がある。しかし野口が生きた時代は、それぞれの装飾がその背景とする世界観をまだかろうじて担うことができた時代だった。当時の建築家たちにとって、様式の選択は世界観を選択することでもあった。古典様式やゴシック様式

やロマネスク様式などの様々な建築様式は、それぞれの世界観をまだその背景に担っており、どの世界観でその建築を成立させるかが最初の課題だった。ギリシャ・ローマを起源とする古典様式が選択された中之島図書館では、古典様式に準拠した柱頭や柱脚そしてペディメントやアーチの繰り型などの装飾技法によってその古典的な世界観が作り出されていた。例えば4本の列柱とペディメントのような古典様式建築に由来する構成の装飾技法が、その世界観に由来する「知の殿堂」の理念として場所の意味が具体的に確定されていたのである。それらの装飾の持つ意味的な力が、野口が意図した「場所の意義」を最終的にその場に確定する最終的な一手となった。

様々な装飾は、建築様式と不可分の関係にある。装飾は、建築様式の持つ理念を具体的な「もの」に実現する重要な手法としての宝庫だった。野口は、膨大な量の装飾技法に関する習作ドローイングを残していたことは第1部にてその一部を紹介した。装飾技法に関する習作ドローイングが、量的には建築的習作ドローイングのほぼ半数を占めていた。野口が西洋建築の装飾法を自家薬籠中のものとしたのは、その強化トレーニングのような装飾技法の習作にあったのである。

野口は、その「装飾技法の道具庫」のなかから、それぞれの建築が実現すべき「場所性」にふさわしい装飾法を選んで「あるべきように」展開していた。そしてどの装飾においても、的確なプロポーションと美しい彫刻的形態を伴うものであったことは特筆に値する。



(図5-51)
2階窓廻りの意匠装飾

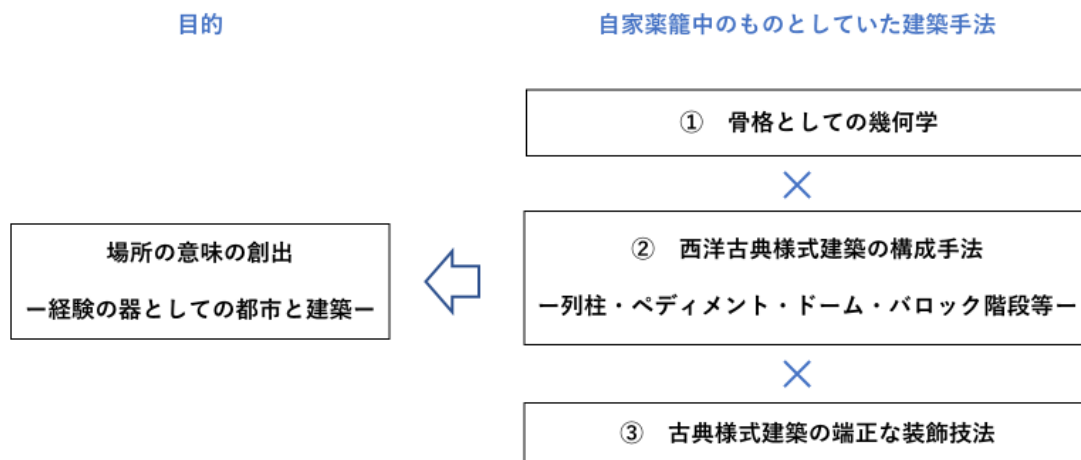


(図5-52)
正面玄関の柱頭と玄関扉上部のアーチ
意匠装飾



(図5-53)
バロック階段手摺親柱の
木彫意匠装飾

5. 3. 5 中之島図書館における野口の建築思考



(図5-54) 中之島図書館における野口孫市の建築的思考

本節で述べてきた中之島図書館における野口の建築的思考を総括すると上記のダイアグラムのようになる。ここでは、野口が中之島図書館で実現しようとした目的を左に、その目的を実現するための手段としての建築手法を右に明記している。右の3項目は、野口の西洋建築についての徹底的な学習と修練によって習熟の域に達していた自家菜籠中の建築手法だった。

野口が目指した目的は、「経済」の象徴である日本銀行大阪支店に向き合う、「知の殿堂」に相応しい図書館としての建築の在り方であった。新しい時代の大阪の都市イメージを日本銀行大阪支店と共につくり出し、また図書館を訪れる人々が体験する感動をつくり出すことが、野口の目的とするところだったと思われる。

私たちは物理的な空間を「経験」することによって、その空間に意味を感じ取り、自分にとっての親密な場所を組み立てている。明治の人々が都市や建築で、豊かな体験を通じて具体的に自分達の場所をイメージできるよう、野口はその生活の舞台となる建築を目指していたと考える。これは人々が場所の意味の豊かさを体感できる「器」としての建築をつくることだったといえるだろう。このことは、現在に残された中之島図書館を訪れることで容易に想像することができる。そしてその場所的な意味を発信するためには、象徴性が不可欠であった。この象徴性は上記のダイアグラムの右の3項目から生み出されていた。

野口は、①の幾何学という抽象的なモデルをまず組立てることによって、それぞれの意味を持つ場所を全体として秩序立て、それぞれに具体化するための基本骨格を形成していた。この幾何学モデルは、全体を構造付ける強力なツールであるとともに、その幾何学自体の存在が、理念としての象徴性を発信する源となっていたと考える。人々は幾何学の存在を意識

のうえで明確に認識することはできないが、眼に見えない理念的なものとして象徴的に感知することは可能である。骨格としての幾何学は、眼に見えない補助線のように全体を構造付けていた。

野口は西洋建築の徹底した学習によって様々な西洋古典様式建築の構成手法について豊富な武器庫のような蓄積を備えていたが、その中からその場に相応しい切り札を次々と繰り出すように、②の中之島図書館の建築構成に相応しい列柱やペディメント、ドーム空間にバロック階段といった西洋古典様式建築の構成手法を自由に組み立てていた。もし建築史家たちが指摘するようにパラディオ設計のヴィラ・ロトンダが中之島図書館の発想の原点にあったとしても、当時の欧米の建築家たちがヴィラ・ロトンダの中央の円形ホールを神聖視していたような扱いを野口は中之島図書館で行ってはいない。野口は、その神聖な中央円形ホールの中にバロック階段を据えたのである。パラディオを崇拜する欧米の建築家には禁じ手のような措置であったろう。野口は、この中央円形ホールとバロック階段を組み合わせることによって、内部空間に上昇するような象徴性を生み出していた。このように野口が西洋古典様式建築の様々な構成手法を自由闊達に組み立てていたことが、中之島図書館の建築が種々の象徴性を生み出す源となった。

③の古典様式建築の豊穡な装飾技法については、前項で「場所の意味」を確定する野口の建築的思考の最後の一手が装飾にあったと述べたとおりである。

(図5-54)のダイアグラムで示したような野口の中之島図書館における建築思考は、野口の膨大な量にのぼる西洋建築の学習によって可能となった。しかし学習だけでは、創造への跳躍とはならない。野口の創造的な跳躍力にこそ、野口の建築的思考の最も根源的な特質があったと考える。その特質とは、それぞれの建築手法が連鎖的に掛け合わされることによって相乗効果的な創造的エネルギーが生み出されていたことだった。ダイアグラムでいえば、①×②×③としている。左向きの大きな矢印に、その創造的な跳躍力が表れている。

註

- (* 1) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 資料目録⑩5
- (* 2) 現在の中之島図書館中央ホールに常設展示されている説明パネルより。
なお引用は書き下し文であるが、原文は漢文。
- (* 3) 仲野憲弘記『二つの彫像』
大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 154頁
1973年 大阪府立図書館

- (* 4) 與謝野久作成講演資料『住友ゆかりの建築に見る「進取と継承」のこころ』
 與謝野が最初に一水会 80 周年記念講演で、中之島図書館立面の三つの並置する
 正方形構成について指摘していた。
 2011 年
- (* 5) 鈴木博之著『ジェントルマンの文化 建築から見た英国』 106 頁
 1982 年 日本経済新聞社
 福田晴虔著『パラディアニズム、あるいは日本から見たパラディオへの距離』
 1981 年 SD 第 196 号「特集＝アンドレア・パラディオ」99～100 頁
 藤森照信著『日本の近代建築（下）－大正・昭和篇－』 60～64 頁
 1993 年 岩波新書
 石田潤一郎著『関西の近代建築 ウォートルスから村野藤吾まで』 38～39 頁
 1996 年 中央公論美術出版
- (* 6) 福田晴虔著『パラディオ ー世界の建築家』 151 頁
 1979 年 鹿島出版会
- (* 7) アンドレア・パラディオ著 桐敷真次郎編著
 『パラディオ「建築四書」注解』 163 頁
 1997 年 中央公論美術出版
- (* 8) 藤森照信著『近代日本の洋風建築 開化篇』 270 頁
 2017 年 筑摩書房
 辰野金吾は、明治 16 年に英国留学から帰国後ほぼすぐに処女作の「銀行集会所」
 の設計に取り掛かった。明治 18 年（1885）に竣工しているが、その完成式典に
 おいて次のように述べていた。
 終わりに臨み一言以て此結構を述んに先づ外構は彼伊国造家学士パラテヨ氏の
 新式を模範とす、氏は紀元一千五百十八年より一千五百六十年迄、乃ち四十二
 年間其英名を轟かせり、今尚ほ仰て近代造家学士の泰斗とす、・・・
 辰野金吾は、この「銀行集会所」の設計において、あきらかにパラディオを「模
 範」としていることを表明していた。
- (* 9) アンドレア・パラディオ著 桐敷真次郎編著
 『パラディオ「建築四書」注解』 396 頁
 1997 年 中央公論美術出版

図版・写真

- (図 5 - 2 6) 筆者撮影
 (図 5 - 2 7) 日建設計撮影
 (図 5 - 2 8) 筆者撮影

- (図5-29) 大阪府立図書館紀要 第9号 創立70周年記念特集号 154頁
- (図5-30) 日建設計撮影
- (図5-31) 筆者撮影
- (図5-32) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-33) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』の立面図に筆者加筆
- (図5-34) 同上 断面図に筆者加筆
- (図5-35) 同上 平面図に筆者加筆
- (図5-36) 日建設計作成
- (図5-37) 東京都立中央図書館 木子文庫所蔵の断面矩計図に筆者加筆
- (図5-38) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』の平面図の一部に筆者加筆
- (図5-39) 同上 立面図の一部に筆者加筆
- (図5-40) 日建設計社長・亀井忠夫氏撮影
- (図5-41) 長尾重武著『パラディオへの招待』 95頁より
1994年 鹿島出版会
- (図5-42) 平山忠治撮影『バウマイスター・ゲーテ ―ゲーテと建築術―』158頁より
1980年 平山忠治著・発行
- (図5-43) アンドレア・パラディオ著 桐敷真次郎編著
『パラディオ「建築四書」注解』162頁掲載図面に筆者が加筆
- (図5-44) 同上書 立面図402頁・断面図407頁に筆者が加筆
- (図5-45) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』の断面図の一部に筆者加筆
- (図5-46) Christian Norberg-Schulz 著 “Meaning in Western Architecture” 138頁
- (図5-47) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-48) ラルレンティアーナ図書館の図面は、ジェームス・S・アッカーマン著
『ミケランジェロの建築』 76～77頁
中之島図書館の図面は、住友史料館所蔵『野口博士建築図集』より
- (図5-49) Christian Norberg-Schulz 著 “Meaning in Western Architecture” 138頁
- (図5-50) 筆者撮影
- (図5-51) 同上
- (図5-52) 同上
- (図5-53) 同上
- (図5-54) 筆者作成

5. 4 中之島図書館の工法と意匠



(図5-55)
中之島図書館 工事現場写真

右端の人物が野口孫市、
左から2番目が現場主任の
久保田小三郎

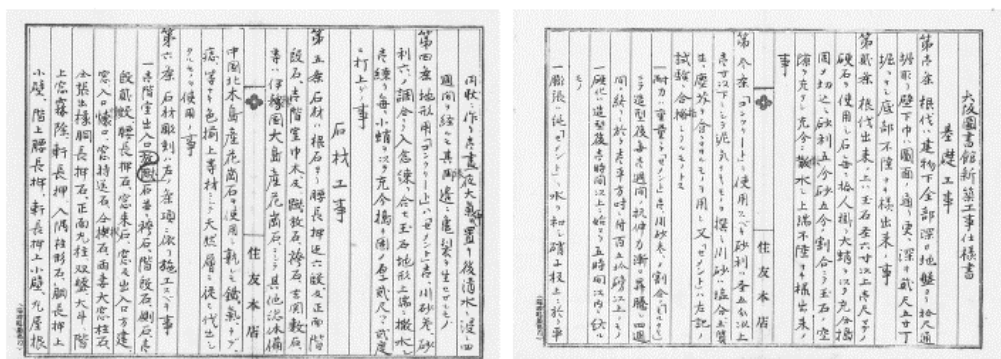
この第2部で述べている建築術とは「建築思考」と「建築技術」から成りたっているとしている。「建築思考」については前節で記述した。本節では、もう一つの「建築技術」について下記のような項目で記述する。

- 5. 4. 1 中之島図書館新築工事仕様書
- 5. 4. 2 石・煉瓦・鉄・木などによる混構造
- 5. 4. 3 明治期の鉄骨構造
- 5. 4. 4 石による外壁ディテールと意匠
- 5. 4. 5 工人たちとの協働

5. 4. 1 中之島図書館新築工事仕様書

住友本店臨時建築部をはじめ、当時の官庁や財閥などの西洋様式の重要建築において、工事が直営方式で行われていたことは、第1部で述べたとおりである。ある重要プロジェクトが発生した場合、発注者のなかに臨時建築部が設置され、その担当部局が設計業務を行い、工事段階ではその部局が各工事区分に従い発注する方式であった。主要資材を吟味のうえ調達・支給し、各請負者の間を調整し、施工を監督して工事を遂行し完成させるのもその担当部局であった。他事例では、長野宇平治が率いていた日本銀行臨時建築部、後年の事例で

は国会議事堂のための大蔵省臨時議院建築局などが挙げられる。西洋建築のための建設技術が、当時の施工業者では未熟であった時代、この直営方式は必然的な方式であった。



(図5-56)

竣工当時は大阪図書館と呼ばれた、中之島図書館の新築工事仕様書

中之島図書館の地鎮祭は、明治33年（1900）11月27日に行われた。住友本店臨時建築部が発足した同年6月から6か月弱しか経っていないため、設計を先行させながら順次可能な工事を段階的に進める設計と施工の進め方であったと思われる。

住友史料館には、中之島図書館の工事のために住友本店臨時建築部が作成した「大阪図書館新築工事仕様書」が残されている（*1）。そこでは完璧なまでに工事を遂行しようとする意図が込められた記述がなされていた。例えば基礎工事「第一条 根伐は建物下全部、深さ地盤より十尺通掘取り壁下巾は、図面の通り更に深さ二尺五寸丁掘をなし底部不陸なき様出来の事」と始まる仕様書では、玉石や切込み砂利の仕様や締固め方法・コンクリートに使用する川砂利に関する仕様・コンクリートの硬化試験等々こと細かく記されている。基礎工事に続く石材工事では、第5条で正面階段石などに伊予国大島産花崗石を使い、その他総体は備中国北木島産花崗石を使うこと、また第6条では石材彫刻がなされるべき箇所を列举したのち、図面および模型に倣うとしたうえで、見え掛り・合口・その他などの箇所に小叩き玄能摺りなど細かく石材仕上げを指示していた。また第9条では、石材の接合につき「総て石材一本に付、鉄太柄径六分長四寸二本ずつ石下端に硫黄を以て植込み置き、据え付けの際モルタルを以て下石に埋込み、猶堅合口には鯨一本ずつ硫黄又は純セメントを以て埋め込みの事」と記されていた。煉瓦工事では、第10条で「根積には東京形焼過ぎ上等煉瓦石、其他壁積には同形並焼上等煉瓦石使用の事」と記述され、第12条で、「煉瓦石積方は、横二分五厘縦三分目地に引通し克く英式積みとし、敷ト口注ト口充分になし空目地なき様積立べく、猶接手は段逃げになし三尺以上の段違いを生ぜざる様注意の事」と記述されている。このほか大工工事・銅鉄工事・叩及び敷瓦工事・暖房工事・衛生工事・電気工事・左

官工事・硝子工事・塗師工事・外部工事・装飾工事の各工事でも念入りの工事仕様書が、計131条にわたり綿密に記されていた。また工事仕様書とは別に、維持管理・清掃のための24条から成る注意書、さらに暖房器に関する注意書15条、便所に関する注意書4条も記されていた。いかに竣工後の維持管理が重要であるかを喚起している点に注目すべきものがある。

5. 4. 2 石・煉瓦・鉄・木材などによる混構造

中之島図書館は戦後になっても補修や改修が継続されてきたが、構造改修で最も近年のものが、平成25年3月より平成26年12月末まで工事が行われた耐震補強工事である。この耐震構造補強工事の主な要点は二点あり、徹底した地盤改良と屋根小屋組み下部の水平構面に補強鉄骨を全面的に巡らすことであった。しかし、その明治の竣工時以来の基本的な構造形式は継続されてきた。その構造的特徴とは、典型的な混構造ということにある。

垂直荷重を受けるのは、石造と煉瓦造からなる組積造である。屋根は木造トラスの小屋組みであり、床梁は鉄骨造で組積造にアンカーされ、床組みは根太を鉄骨梁の上に載せる木造であった。次ページ(図5-57)の一般部矩計図に示されているように、組積造は壁厚さ約80cm内外の石造と煉瓦造からなる複合壁である。この石造部は随所で鉄骨により補強されていた。例えば工事仕様書の銅鉄工事の第38条では「正面石柱楯石中真へは鉄梁を架け渡し、ボルトにて楯石を取付け、出入口上及び側窓上特に図面記入の箇所は、鉄楯を置き渡すべきに付H形及びコ形鉄又は鋼鉄を以て図面の通り堅固に製作取付けの事」とある。

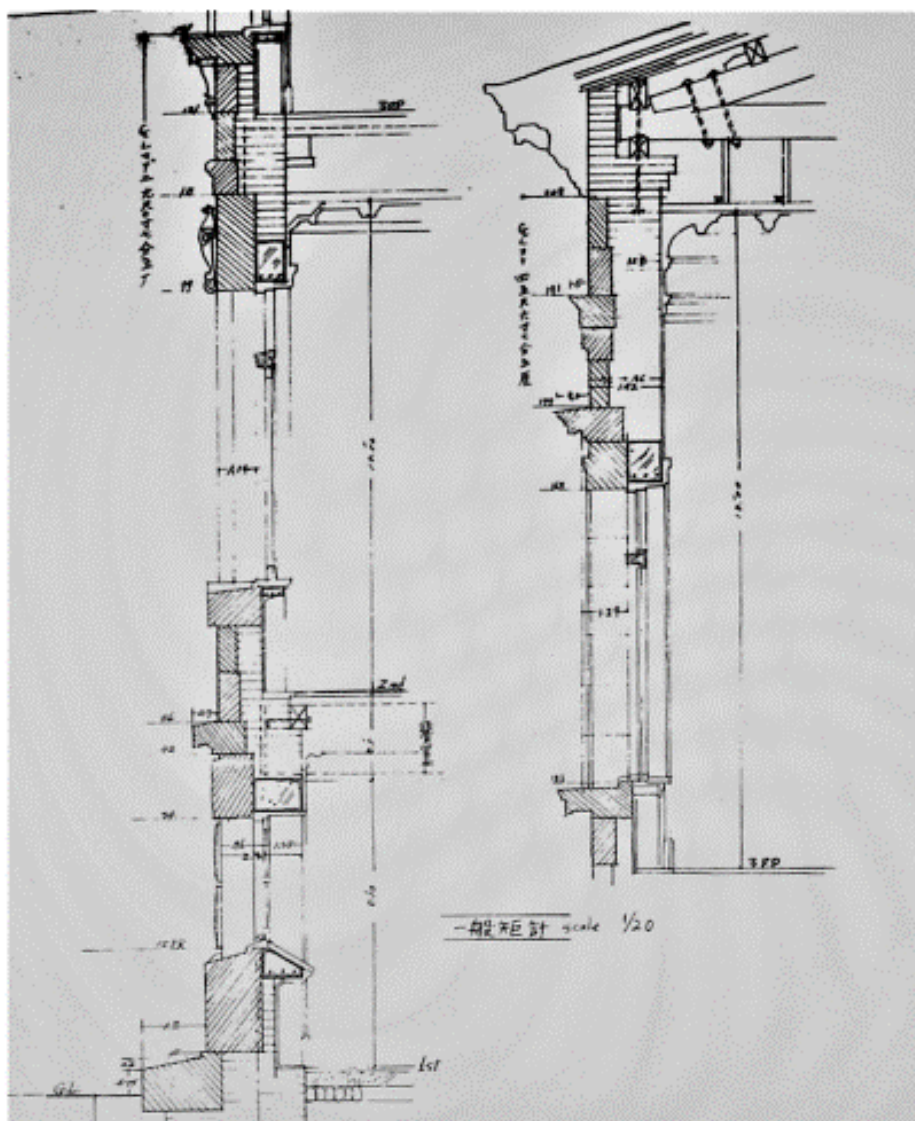
また一般室の床梁については、第35条で「寸法図面記入の通り英国製H字形鋼梁を使用し、必要箇所はボルト及び短冊鉄物にて煉瓦壁、又は他の鉄骨へ繫付け図面の通り配置の事」と記されているように鉄骨梁である。この鉄骨造の床梁の上に、工事仕様書の大工工事第27条「二階、三階各室床根太掛及び根太は、松赤身勝挽立材にて寸法仕口共図面の通り、根太掛は下端に、コールターを塗抹し壁中に植込あるボルトに締付、根太は鉄梁上に置き渡しボルトにて堅固に締付の事」と書かれていたように木造床が組まれていた。書庫および中央円形ホールの床は、鉄骨梁のうえに亜鉛引波形鉄板を渡しその上にコンクリートを流し込み床としていた。ただし夫々のコンクリートの調合も同一ではなく、書庫では骨材に川砂を使用し強度を保ち、円形ホールでは川砂に加え石炭滓も加え軽量化を図っている。

木造小屋組みトラスの用材は、詳しく工事仕様書で指示されており、小屋組み用材は基本的に松挽立材赤身勝を使用することが書かれているが、特に敷桁は檜挽立材、椀は松挽立材、野地板は杉板など、用材の性質を熟知したうえで使い分けられていた。なお竣工以来、小屋組みトラスの用材は、補修工事で部材の取り替えも都度行われてきた。最も近年の耐震補強工事でも、部材の取り替えや補強がなされている。

造作工事では、中央円形ホールの階段部について「第62条 広間大階段軸組は松挽立材にて、其他は塩地及びチークの無節上等材を以て見え掛り鉋削りの上絵様線形仕口共、図面

及び模型に倣い手際能く製作の上堅固に取付の事」と記されている。なお銅鉄工事の第34条には、「二階広間柱は瓦斯管を以て、図面の通り堅固に製作取付の事」とあるため、木造柱の芯材に瓦斯管を使用していることがうかがえる。

このように中之島図書館は、明治期の遂行可能なあらゆる工法を駆使して、建設工事が行われていた。すべての工法に卓越した技術が必要であったことは言うまでもない。



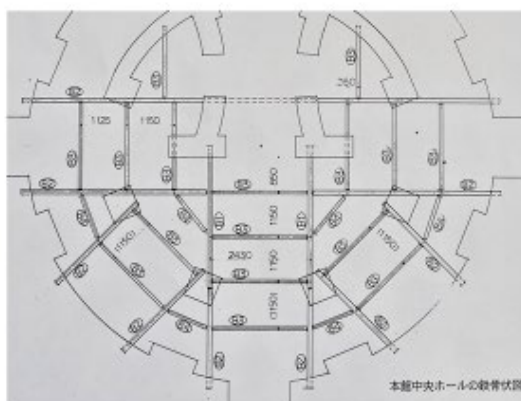
(図5-57)

大阪府営繕部建築課により昭和26年度に作成された
補強工事用図面の一般矩計図
矩計図の外壁外側には、煉瓦積みの段数が記入されている

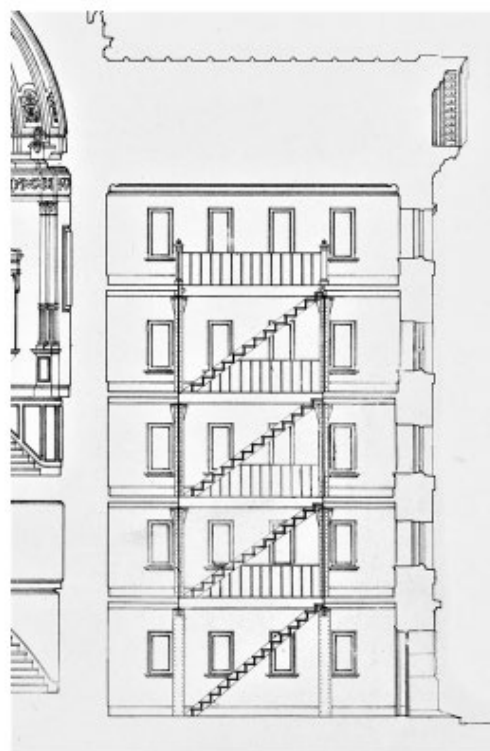
5. 4. 3 明治期の鉄骨構造

5層からなる書庫は、鉄骨構造であった。その書庫の鉄材には DORMAN LONG & Co.L. MIDDLES BROUGH ENGLAND と英国の製造会社銘が鑄込まれている。Dorman Long社は、1875年創業の鉄鋼メーカーであり現存する会社である(*2)。現在では、建設機械や建設・土木エンジニアリング会社となっており、1932年に完成したオーストラリアのシドニー・ハーバー・ブリッジの工事ではコンストラクション・エンジニアリングを行っていた。1900年当時、鉄鋼メーカーであった Dorman Long 社は部材ハンドブックを発行しており、現在その1895年版と1906年版をホームページで見ることができる。この部材ハンドブックは、現代において我々が使う部材ハンドブックと基本的にほぼ同様のものであり、野口をはじめとする住友本店臨時建築部の技術者たちは、この部材ハンドブック参照しながら設計図を作成し部材ごとの詳細をまとめ鉄骨部材発注を行っていたものと思われる。日本では1901年に官営八幡製鉄所が操業を開始していたが、技術的に未熟であったため、当時の主な建築の鉄骨工事は英国の鉄鋼メーカーに発注されていた。

英国では1856年にベッセマーが転炉法を発明し、鋼材の工業生産ができるようになっていた。しかし、1889年のパリ大博覧会のために完成したエッフェル塔では錬鉄が使われ、同博覧会の機械館では鋼材が使われていたように、19世紀後半は錬鉄と鋼鉄はまだ混在する過渡期であった。



(上 図5-58)
中央ホール床梁鉄骨伏図



(右 図5-59)
5階建ての鉄骨造書庫部の断面図

中之島図書館の鉄骨工事でも、鑄鉄・錬鉄・鋼鉄が使い分けられていた。(図5-59)の中央ホールの床梁鉄骨では、他の一般部の床鉄骨梁と同じく鋼材が使われていたが、書庫の手摺の親柱は鑄鉄、手摺子は錬鉄が仕様書に書き込まれている。また小屋組み用諸金物や石積みや煉瓦積に使用する鉄太柄には錬鉄が使われていた。なお書庫の鉄骨造の接合方法はリベット工法であったが、現在でも見ることのできるリベット頭部の職人仕事は見事なものである。

鉄骨造の歴史は、製鉄技術・接合技術・力学理論の三本柱が組み合わさり発展するものである。欧米において発展過程の只中にあった19世紀後半の鉄骨造技術は、20世紀初頭に入り、ある程度の完成の域に達していた。明治の日本人技術者にとり、江戸期には馴染みのなかった組積造と鉄骨造が特に学ぶべき建築構造技術だったが、西欧で確立しつつあった鉄骨造の技術習得は必須であった。中之島図書館において、その鉄骨構造技術の高度の習得を見せているのが、中央のドーム部である。

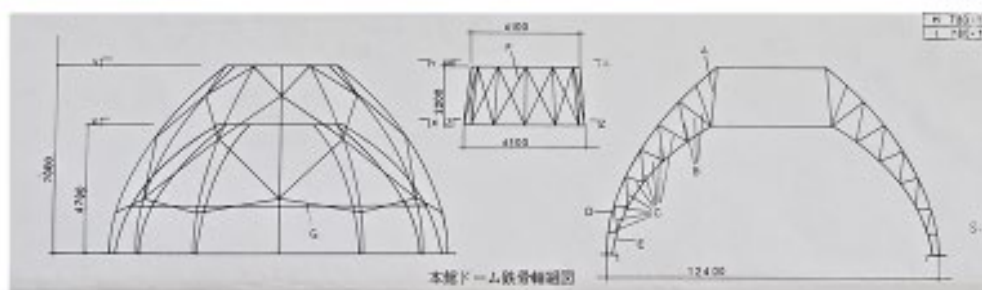
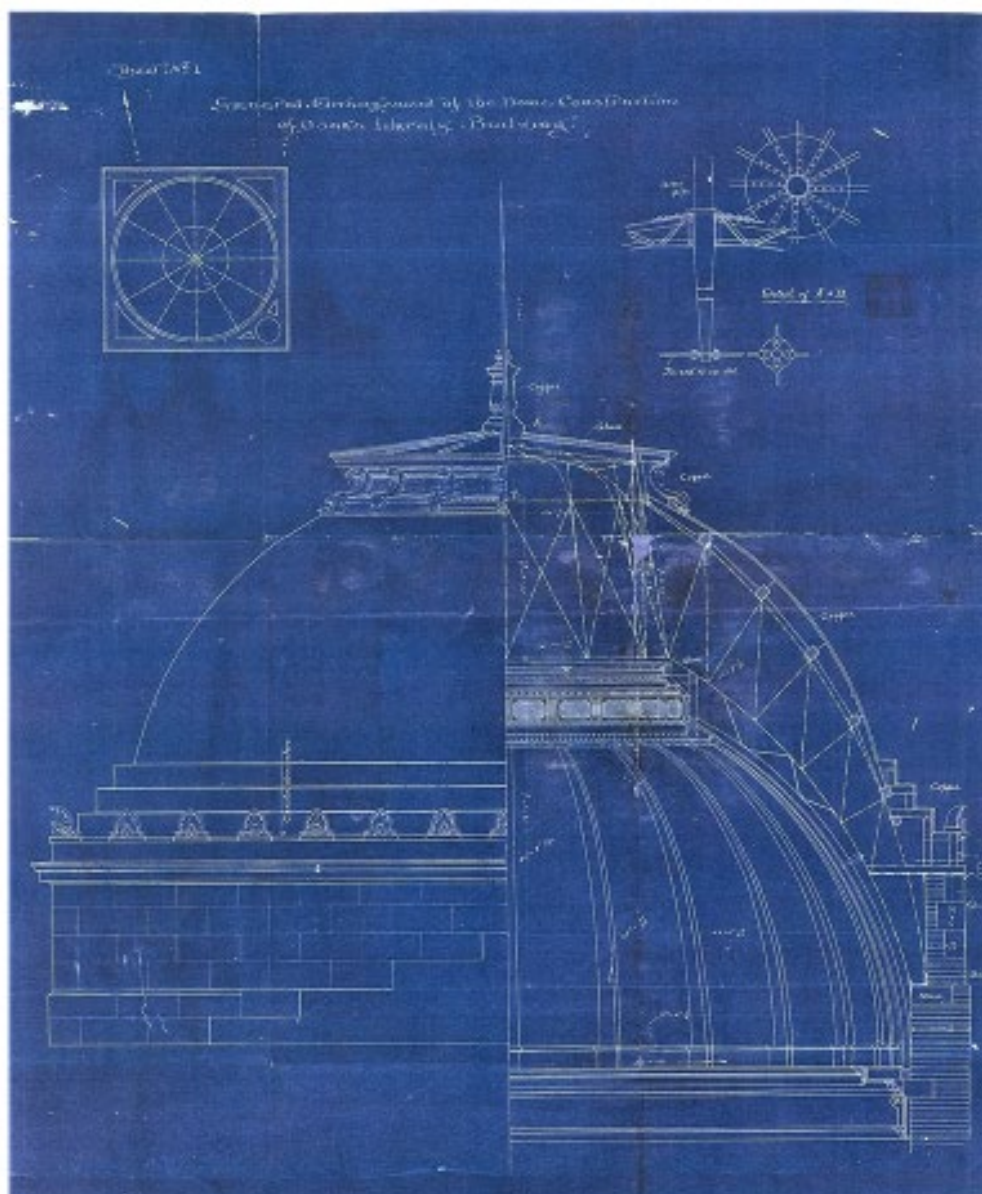
この中央ドーム部は、二層吹き抜け空間を覆う鉄骨構造のドームとして日本で現存する最古のものである。同様の鉄骨ドームの事例として東京国立博物館・表慶館や東京駅があるが、それぞれ明治42年・大正3年と中之島図書館より後に完成している。また中之島図書館が竣工する以前の日本銀行本店や大阪支店の中央貴賓室も鉄骨ドームに覆われていたが、これらは最上階の特別室に用いられたもので、二層吹き抜けホールの空間を覆うものではなかった。このタイプの日本最古の鉄骨ドーム構造としては、ジョサイア・コンドル設計のニコライ堂があるが、現在見るドームは関東大震災で損壊しその後昭和に入って再建されたものである。

次頁(図5-61)の鉄骨軸組図にみられるとおり、円弧状トラスの上弦材と下弦材が構成するそれぞれの曲面において面剛性を高めるため複雑な軸組構成となっている。基本的には、アングル部材を組み合わせたアングルトラス構法である。このトラスの下部に取り付けられた船底木骨のような木構造に木舞下地が組まれ、そこに左官による漆喰塗りで仕上げがなされた。



なお次頁図や『野口博士建築図集』に収められた断面図では、天窓がガラスとなっているが、左の大正9年(1920)に製作された木製模型では、頂部は屋根であり低い円筒形の側面から採光する方式となっている。これが建設当初の姿であると思われる。ガラスのシーリング材料技術が未成熟でパテ材と呼ばれた時代、太陽光による充填材の経年劣化を避けることはできず、漏水を防ぐため、野口は原設計通りの天窓を断念したものと推測する。

(図5-60) 大正9年に製作された木製模型



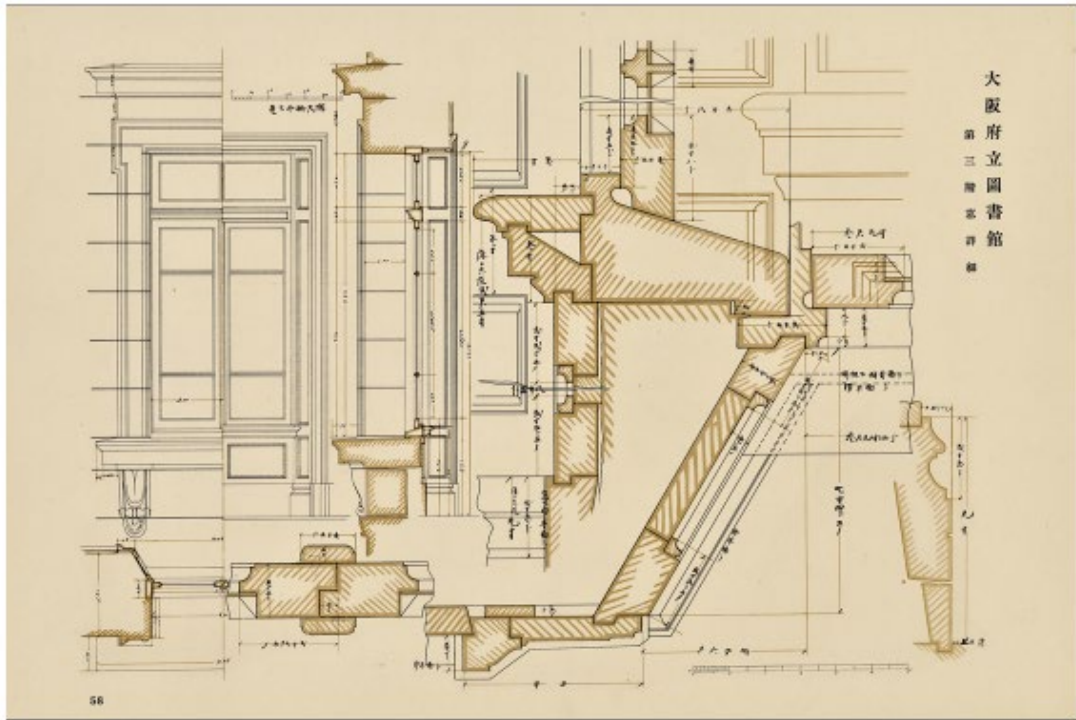
(図 5 - 6 1) ドーム部断面矩計図および鉄骨軸組図

5. 4. 4 石による外壁ディテールと意匠

大阪図書館新築工事仕様書の石材工事の記述では、「第5条 石材は根石より腰長押迄六段、及び正面階段石、一階室巾木、及び蹴放石、袴石、玄関敷石等は伊予国大島産花崗石にして、其他総体備中国北木島産花崗石を使用し、孰れも鉄気、なで、痣等なき色揃上等材にして、天然層に従い伐出したるものを使用の事」とされている。下の(図5-62、63)は、図面に描かれた石彫とその図面に基づき施工された現在の同箇所を並置したものである。施工においては図面からすぐに石工が彫り出すのではなく、まず模型が作成され図面と模型に倣って石工が彫刻するよう工事仕様書では指示されていた。石材彫刻の仕上げは、小叩き・玄能摺り・江戸切上々小叩き・五分通り上小叩き・縮緬叩き仕上げそして野面積み等部所ごとに丁寧に記されていた。次項で中之島図書館の棟札の裏に書かれた職人の名について述べるが、石工職名は筆頭に書かれている。



次頁(図5-64)は3階窓廻りの内外のディテール図を示している。(図5-57)の一般矩計図と合わせると、石・煉瓦・木製建具・内部窓廻り詳細などの取り合いがよく理解できる。木製建具は、檜無節上等材を用い真鍮製上等蝶番などの金物を使用するよう工事仕様書には記されていた。この詳細図は、内部の窓廻り造作工事の意匠に重点が置かれ描かれているが、奥行のある窓廻りを、塩地を使った袖羽目鏡板や線型を施された檜の額縁などにより格調ある室内意匠とする意図が表現されていた。



(図5-64) 3階窓廻り内外詳細図

中之島図書館の外観意匠の特徴は、その簡潔さにある。次頁(図5-65)では、中之島の東西に並んで建っている日本銀行大阪支店と大阪市中央公会堂の窓を、中之島図書館の2階の窓と比較するために三つ並置した。特に、中之島図書館の14年後に建てられた岡田信一郎の基本設計で辰野金吾・片岡安の実施設計による大阪市中央公会堂のゼツェションの影響を受けた装飾的な窓と比較すると、中之島図書館外観の簡潔さがよく理解できる。

この窓は、「周囲五分通り上小叩き、其他は縮緬叩き仕上げ」と工事仕様書に記された平滑な仕上げがなされた北木島産花崗石の外壁面に、簡潔な穴のように穿たれたものである。窓の三方の周囲には、深い目地が彫り込まれているが、この三方枠の目地矩形は、黄金比を成している。そして緩やかな円弧の膨らみを持っている石材による三方枠は、その円弧の起点を深目地を挟んだ平滑な花崗石の壁面と同面としている。まるで現代彫刻を見るような「モダンな簡潔さ」をもつ印象的な窓である。しかも通常豊穡なまでの装飾が施されるキーストンには、ここではごく控えめで清楚に彫刻された石が据えられているだけである。この窓には、後年のモダニズムの息吹きが漂っていると言えるかもしれない。



日本銀行大阪支店の窓
(1903年)
辰野金吾等設計



(図5-65)
中之島図書館2階の窓
(1904年)
黄金矩形の深目地が印象的で全体に緊張感がある



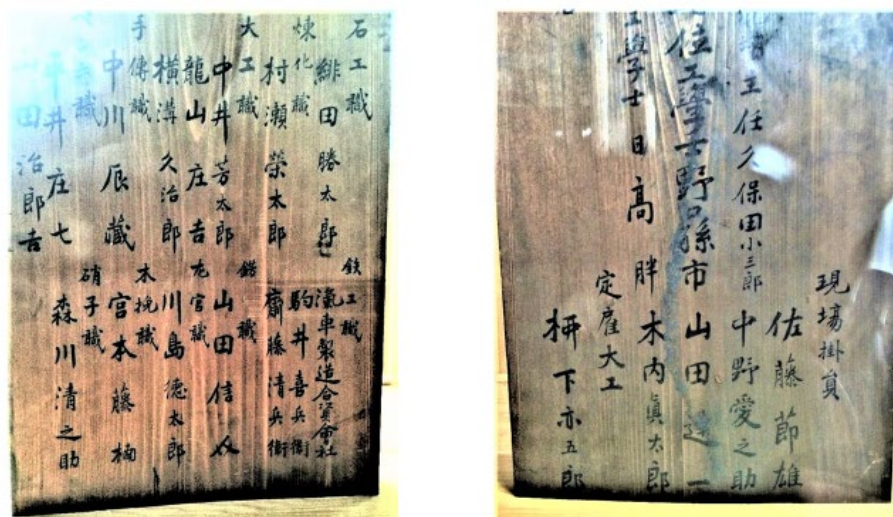
大阪市中央公会堂の窓
(1918年)
岡田信一郎設計

5. 4. 5 工人たちとの協働

古来、日本での建設工事において地鎮祭と上棟式は重要な神事であった。上棟式では、その後の工事の無事を祈念し「棟札」を納めたが、通常の棟札は「奉上棟」から始まる祭神名と施主名そして設計者と主な工事請負人の名が簡単に記されるものである。しかし中之島図書館の棟札の場合、表裏に設計者と工事関係者の名前が丹念に書き込まれていた。表下部に、設計者の野口孫市を中心に左に日高胖、右に現場主任の久保田小三郎の名が記され、その下に臨時建築部の現場掛員4名と定雇大工の名が記されていた。そして棟札の裏には、この工事に関わる石工・煉瓦・大工・鉄工・鋳・左官・木挽・硝子・ペンキ・手傳の各職方たちの名前が丁寧に書き込まれていた。通常、大工や左官の名前を数人記載することはあっても、ここまでの職方の名前を列記した棟札は珍しい。現在この棟札は、中之島図書館のエントランス前室にあるガラスケースに入れて展示されており、誰でも見ることができる。

この建設工事全体の統括者は野口であり、この棟札は野口の指示の下に製作されたものであることは確実であろう。この棟札には、野口の信念が現れていたと考えられるのではないか。その信念とは、設計者と工人たちの協働によってはじめて建築が完成するという、英国のウィリアム・モリスに始まるアーツ・アンド・クラフツ運動にも通じる思想である。当時の英国で大きな潮流となっていたアーツ・アンド・クラフツ運動の考え方は、「すべての職人は芸術家であり、その職人仕事は労働の喜びの表現である」というものであった(*3)。ウィリアム・モリスはこの思想に基づき壁紙・家具・ステンドグラス・更紗木綿などのデザインと製作を工人たちとともに進めていた。第4章の須磨別邸について前述したように、意

匠面で野口がアーツ・アンド・クラフツに影響を受けていたことは明らかである。しかし、意匠面にとどまらず、「ものづくり」の姿勢にも共感するところがあったのではないだろうか。



(図5-66) 中之島図書館の棟札

表の右写真には、野口孫市を中心に住友本店臨時建築部の面々の名前が記載されている
裏の左写真には、石工・煉瓦・大工・鉄工・鋳・左官・木挽・硝子・ペンキ・手傳の各職方の名前が記載されている

野口孫市は、臨時建築部の面々とともに、工人たちの集団とも緊密に連携していたと考えられる。この棟札に記載された職人のうち4名は須磨別邸の工事記録にも名前が挙がっていた。大工の中井芳太郎、建具・指物大工の龍山庄吉、銅工や金属工芸の鋳職人である山田信介、そしてペンキ職人の平井庄七である。この棟札に名前記載はないが、東京美術学校彫刻科教授の高村光雲の高弟であり、臨時建築部のプロジェクトの木彫を指導していた相原雲楽も連携していた一人であったと思われる。

なお、この棟札で興味深いものに鉄工職がある。鉄工職の筆頭に汽車製造合資と記載されているが、これは日本最初の蒸気機関車の鉄道車両メーカーであった。先端技術であった鉄工技術は、汽車製造の分野でまず蓄積されていたのである。現在この汽車製造合資は、川崎重工業の鉄道車両部門に継承されている。また次に駒井喜兵衛とあるが、彼は旧・駒井鉄工の創業者で、現在の駒井ハルテックの源流の一人であった。

住友本店臨時建築部は直営方式で工事を進めていたため、その統括者である野口孫市は、単なる設計者ではあり得なかった。人々がその建築を体験する有りようをイメージすることから設計を進め、工事遂行そして竣工、さらには維持管理までを視野に入れなければならない総合的な職能と人格を必要とした建築家だったのである。

註

- (* 1) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』 78～104頁
1991年 創元社
- (* 2) Dorman Long Technology ホームページ
“Historical Information”
2017年 8月閲覧
- (* 3) 片木篤著『アーツ・アンド・クラフツの建築』 23頁
2006年 SD選書241

図版・写真

- (図5-55) 濱田信義氏寄贈により住友史料館所蔵
- (図5-56) 住友史料館所蔵
- (図5-57) 昭和26年(1951)大阪府立中之島図書館 補強工事
大阪府建築部営繕課 作成
図面番号 26-124-10
- (図5-58) 金多潔、(財)建築研究協会編
『大阪府立中之島図書館建物の現況調査』 289頁
昭和62年(1987)9月 大阪府
- (図5-59) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-60) 筆者撮影
- (図5-61) 中央ドーム部断面矩計図 東京都立中央図書館 木子文庫所蔵
同上軸組図 前掲書『大阪府立中之島図書館建物の現況調査』 284頁
- (図5-62) 図面は住友史料館所蔵『野口博士建築図集』 写真は日建設計撮影
- (図5-63) 同上
- (図5-64) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-65) 筆者撮影
- (図5-66) 同上

5. 5 他の西洋古典様式建築群

野口が中之島図書館で目的としたことが二つあった。一つは都市的な意味をつくり出すことであり、もう一つは建築的な場所の意味をつくり出すことであった。野口は中之島図書館以外に多くの古典様式に準拠する建築を設計していたが、この二つの目的は常に変わることなく貫かれていた。しかし本節では、他の古典様式建築群を概観することから更なる野口の建築術の特質を浮き彫りにする。

本節では、5. 5. 1 住友総本店仮建物、5. 5. 2 住友銀行の支店建築群、5. 5. 3 心齋橋そして5. 5. 4 大阪倶楽部をとり上げるが、これらの建築からは中之島図書館で野口が見せなかった特質を見ることができる。それは、過剰なまでの豊穡さであった。

中之島図書館の内部はドーム空間とバロック階段によって豊穡なイメージを来館者に伝えているが、外観は力強く簡潔なものであった。本節で述べる他の古典様式建築群では、中之島図書館のように充実した大きな内部空間を必要としなかったこともあると思われるが、それらの外観において過剰なまでの豊穡さを与えていた。特に最後の大阪倶楽部は、その極点にまで達していた建築であった。

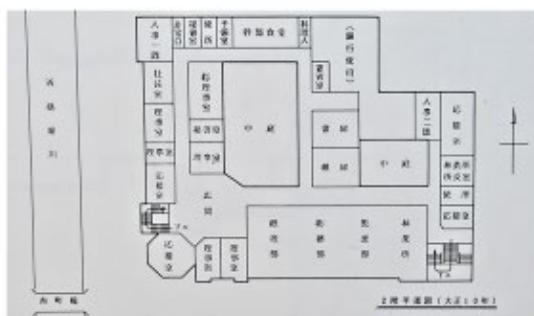
5. 5. 1 住友総本店仮建物

明治28年(1895)5月に尾道会議で、住友銀行設立が決定されたことは、第1部で述べたとおりである。その年の11月には、住友本店が移転していた玉江町一丁目(現・中之島五丁目)にて住友銀行が開業した。しかし住友各事業の発展によりこの本店の場所では直ちに手狭になり、本店と銀行本店が入居できる新築建物のための敷地を探し今橋四丁目に557坪の土地を入手した。しかし事業の進展が急であったため、同じ今橋四丁目にあった当時大阪では最大の貸ビルであった日本生命保険会社の建物に、まず明治34年に銀行本店が移り、翌年には本店がその建物に移転入居することとなった。しかしなお事業の進展は加速度を増していた。そこで今橋四丁目の土地ではなく、改めてより大きな土地を入手することとなった。その時に、様々な経緯を経て明治38年に入手したのが、明治36年に中之島に移転した日本銀行大阪支店の跡地1840坪であった。さらに隣接する土地を買入れ、総面積は2806坪・9276㎡とし、北は土佐堀通りに接し西は西横堀川に面する大きな一面の土地を得るに至った(*1)。

住友本店臨時建築部の設立の本来の目的は、住友本店・銀行本店のための建物を設計・建設することにあった。野口率いる臨時建築部が、この入手した土地の南半分1100坪を敷地として、いずれ本格的な恒久的建物を建てるまでの「仮建物」として設計・建設したのが住友総本店仮建物であった。その設計は明治38年2月に始まり、その年末に着工し、明治41年(1908)に竣工している。なお住友本店はこの翌年、住友銀行本店との混同を避けるため、その名称を住友総本店と改称していた。

この建築の特徴は、それが「仮建物であること」にある。この建物の記録としては、建坪640坪（2116㎡）で木造2階建ての洋館としか記録には残されていない。一見するとルネサンス風の石造建築のように見えるが、外壁は木構造の架構の中に煉瓦を積み上げ、その表面にラス下地を施し、巧みにモルタル・スタッコ仕上げによって石割目地や軒蛇腹・胴蛇腹などの装飾を左官が彫刻するように施した外壁であった。随所にポイントで本石も使っていたであろうが、見事なまでの「仮建物」であった。平面構成は、中央に採光と換気のための中庭をもつ当時の典型的なオフィス平面の型とされており、2階の西横堀川に面する眺望のよい西面には、家長室や理事室などが配置されていた。

ただ「仮建物」とはいえ本店としての風格を有する建築でなければならず、野口は、その意匠に渾身の創意を込めていたものと思われる。

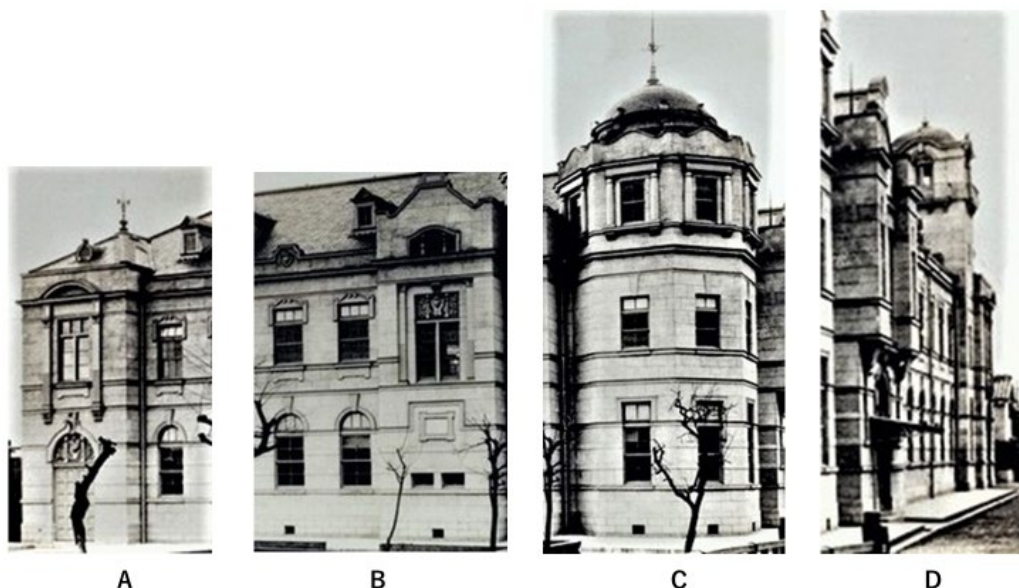


(図5-67) 住友総本店仮建物
明治41年(1908)竣工
左上：外観 右上：鳥瞰位置図 左：平面図
(上中 図5-68)
住友総本店仮建物を移築後の関西大学本館
昭和2年(1927)

次頁(図5-69)は、住友総本店仮建物の外観立面を四つの部位に分解し拡大したものである。中之島図書館の外壁では、存在感のある花崗石という材料を使うことができたため、装飾的な要素はできるだけ排除し簡素な外壁仕上げとすることができた。しかし、この住友総本店仮建物の場合は、石材の持つ存在感には頼れないモルタル・スタッコによる彫刻的な左官仕上げであったため、その外観意匠は絵画的で豊穡なものとなっている。

下図 D の奥に鐘塔のような物見塔が見えるが、この塔は住友総本店の位置を市街地に対し象徴的に示すランドマークになっており都市的な意味が込められていた。また西横堀川に面したもう一つのランドマークとなっていた下図 C のドーム屋根のある八角塔には、応接室が収められ 3 階にはドーム天井のある特別貴賓室が設けられていたと思われる。日本銀行本店や大阪支店の特別貴賓室もこのようなドーム状の屋根・天井をもつものであった。この八角塔の壁最上部のパラペットの先端は波型となっており、独特の形状となっている。そして下図 A と B の西立面の両端部は全く異なる意匠となっており、その間の 2 階一般窓の上部の装飾も独創的なものであった。石ではあり得ないユニークなその装飾形状は、左官仕上げには相応しいものであったろう。塔とドーマー窓のあるスカイラインの豊穡さや全体の絵画的な意匠には、帝国大学工科大学の卒業設計（図 2 - 6, 7）や大学院時代に設計した明治生命保険大阪支店（図 2 - 106）を思わせるものがある。中之島図書館では見せなかった野口のもう一つの才能が現れていた。古典様式建築の要素を分解した上で、独創を加え組立て直した外観意匠であった。しかし全体としての秩序感は全く失われておらず、逆に不思議な統一感がある。

後年、この総本店仮建物は、長谷部鋭吉・竹腰健造たちの設計による住友ビルディング第 1 期工事の完了後、第 2 期工事に取り掛かるため取り壊しの予定であった。しかし大正 11 年に大学令により大学に昇格した関西大学から、吹田市千里山の大学本館として使いたいという要望を受けたため、住友より寄贈され昭和 2 年（1927）に移設工事が完了した。



(図 5 - 69) 住友総本店仮建物の外観意匠の分解

5. 5. 2 住友銀行の支店建築

住友銀行本店は、明治34年から仮建物が完成する明治41年まで、今橋四丁目の日本生命保険会社の貸ビルに入居していたが、銀行事業が急速な立ち上がりを見せたため、日本各地に住友銀行支店の建設が必要となった。最初の支店は明治32年の新居浜支店、次いで明治33年の東京支店である。しかしこれらは臨時建築部の創設前であり、野口たちの仕事ではない。ちなみに東京支店は、その事業規模の拡大に伴い大正6年に日本橋に新しい東京支店が完成することになる。本項ではとり上げていないが、野口が生前に設計に着手し没後に日高が完成したものである。

野口をはじめとする臨時建築部は、中之島図書館と須磨別邸の建設と併行して、多くの住友銀行支店の設計と建設に携わっていた。最初の支店は、第1部の(図2-113)で紹介した明治36年1月に完成した神戸支店であった。同年11月には中之島支店が完成、12月には川口支店が完成している。そして中之島図書館が竣工する明治37年には、尾道(2月)・門司(5月)・京都(7月)と続けて支店が完成した。明治38年1月には船場支店、明治42年の6月には博多支店が完成した。なお明治45年の4月には呉支店が完成しているが、これは日高胖が設計したことが分かっている(*2)。

ここでは、なかでも重要な位置付けにあった尾道支店、『野口博士建築図集』で紹介されている門司支店・博多支店、そして日本で最初期に内装にアール・ヌーヴォーを導入したといわれる川口支店について述べる。

(1) 尾道支店

明治28年(1895)5月、後年「尾道会議」と呼ばれる住友家第1回重役会議が尾道において開かれ、この会議で住友銀行の設立が決議された。尾道は、交通の要衝の地であるとともに、住友銀行に由緒の深い重要な地であった。尾道支店が立地する久保町は、住吉浜に接する江戸期からの商業的な中心地であり、他の金融機関もここに立地していたため「銀行浜」と呼ばれていた。後に広島銀行となる第66銀行もこの地に創設されている。

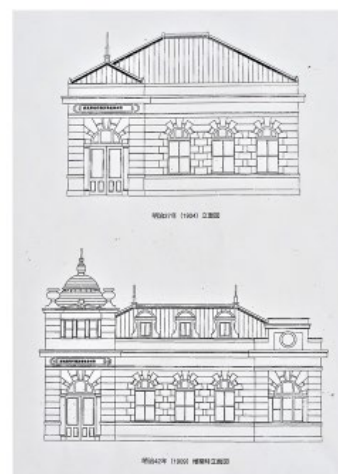
この重要な尾道支店の設計には、小規模ではあるが他の支店建築には見られない独特の意匠が込められていた。最初に明治37年(1904)、3連の重厚なアーチ窓と立派な門型の枠に嵌め込まれた格調ある玄関による構成の木造平屋建ての支店が建てられ、さらにその5年後の明治42年(1909)、西翼が増築され、同時に屋根もドームやドーマー窓を持つ華やかなものに改められた。(図5-70)に示すとおりである。

この尾道支店の意匠の特徴は、ルスティカ・アーチにある。ルスティカとは粗面仕上げのことであるが、特に尾道支店のような特徴あるアーチは、英国18世紀前半の建築家のジェームス・ギブスがよく用いたので、英国では“Gibbs surround”と呼ばれている。このアーチの意匠は既に古代ローマ時代にあったものだが、イタリア・マニエリスムの時代に多用されるようになった。16世紀のマニエリスムの建築家であるジュリオ・ロマーノが頻繁にこの

アーチを用いている。セルリオの建築書にも”rusticated doorway”と紹介があった。野口は、このイタリア・マニエリスムの特徴であるルスティカ・アーチを尾道支店の意匠の基本モチーフとしたのである。この尾道支店は、一つの建築の主要テーマとしてルスティカ・アーチを用いた日本でも数少ない事例である。辰野金吾設計の東京駅や野口・日高の設計による日本橋の住友銀行東京支店でも部分的な要素として使われているが、このように全面的な主要モチーフとして使用された他の事例は極めて少ない。また明治42年の屋上に増築された意匠にも、野口の特徴がよく現れていた。ルスティカ・アーチなどの彫刻的な造形は、すべて左官のモルタル・スタッコ仕上げによるものであった。



(図5-70)
住友銀行尾道支店
明治42年(1909)頃の外観写真



(図5-71)
上：明治37年(1904)立面図
下：明治42年(1909)立面図



(図5-72) ルスティカ粗面仕上げ “Gibbs surround”の事例

左：セルリオの1537年の著作にある”rusticated doorway”の事例
中：ジェイムス・ギブス設計のWimpole Hallの事例 1713年～1730年頃
下：ジュリオ・ロマーノ設計のジュリオ・ロマーノの家 1540年代

現在この建物は、尾道市の所有となっており、屋根パラペットより上部の意匠は取り壊され単純な屋根となっているが、4連のルスティカ・アーチ窓と玄関廻りは残されている。尾道市では、この建築を明治42年当時の華やかな姿に復元し、尾道市の観光拠点の一つとして再び活用することが検討されている。

(2) 門司支店・博多支店

門司港は、明治22年に石炭などを扱う国の特別輸出港に指定されるなど神戸港・横浜港と並ぶ日本の三大港の一つであり、門司は重要な国際貿易拠点であった。現在の門司港レトロ地区にある旧門司税関や JR 門司港駅などに当時の活況をうかがうことができる。一方、博多は明治40年代に入り急速に都市として成長し、明治43年ごろには九州最大の人口を擁する都市となっていた。住友銀行は、明治37年にまず門司支店を、そして明治42年に博多支店を開業している。両支店とも、尾道支店と同様に、構造は木造で外壁はモルタル・スタッコ仕上げであったと思われる。

門司支店では屋根は寄棟瓦葺きとなっており、その最上部には避雷針と一体となった棟飾り金物が高く持ち上げられた金属製の煙突とともに、遠方からでもそれと分かるスカイラインを構成していた。また2階の窓は、この当時では珍しい横連窓であり、その方立には古典様式による幾本もの短い柱が用いられていた。従来の様式建築では到底あり得ない意匠である。屋根や2階の横連窓の意匠は、港町である門司の遠方からの視線を意識したものであったのだろう。博多支店の特徴は、その付け柱の平坦さにある。まるで厚紙を重ね合わせ貼り付けただけのようなグラフィックなものであった。後の武田五一による京都府立図書館の外観立面を思わせる平坦な意匠であり、そこにはモダンな都会性を感じさせるものがあつた。



(図5-73)
住友銀行門司支店
明治37年(1904)竣工



(図5-74)
住友銀行博多支店
明治42年(1909)竣工

(3) 川口支店

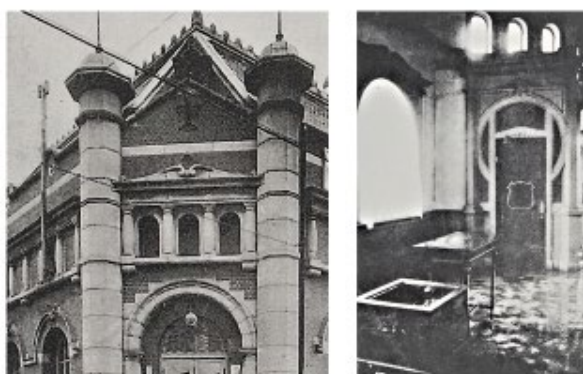
大阪の土佐堀川と堂島川が、中之島の西で合流するところから再び安治川と木津川とに分かれそれぞれが大阪湾に流れ込む川筋となっている。慶応12年(1868)、この四本の川筋の交点に設けられたのが、川口居留地と呼ばれる外国人居留地と港であった。外国人居留地は、明治32年(1899)に廃止になるまで継続されたが、この川口の木津川を挟んだ東岸には、明治7年(1874)に大阪府庁舎が建てられ、大正15年(1926)に現在の大手前に移転するまで、この江之子島と呼ばれる場所が大阪の行政中心であった。大阪市庁舎もまた、明治45年(1912)に堂島浜に移転するまで江之子島にあった。

川口は、大阪で最初の税関や電信局が設置され最初の洋食屋やカフェができるなど、大阪の西洋文化への開かれた窓として、文明開化そして近代化を象徴する地区となっており、この重要な川口に、明治36年(1903)に建てられたのが住友銀行川口支店であった。川口には洋館が建ち並び、煉瓦造の建物も多くあったため、この川口支店は煉瓦造で建てられていたと思われる。外観写真からも煉瓦造であったことがうかがえる。

門司支店より先に設計され竣工しており、両者に共通する遠方からの視線を考慮した外観意匠は、まず川口支店で考えられたものだろう。エンタシスのある短柱が連続する2階の横連窓の意匠も共通している。川口ではより強いスカイラインを得るために、正面の左右に2本の異国情の塔を建てていた。また道路に面する1階側面の石を用いた連続アーチの意匠は、独創的ではあるがロマネスク様式を基調とする趣きあるものとなっていた。



(図5-75) 川口居留地(赤丸)と大阪府庁
の位置を示す地図



(図5-76)

下左：住友銀行川口支店
明治36年(1903)
竣工
上中：中央正面上部の意匠
下右：地上部の外観意匠
上右：アール・ヌーヴォー風
川口支店客溜りの内装

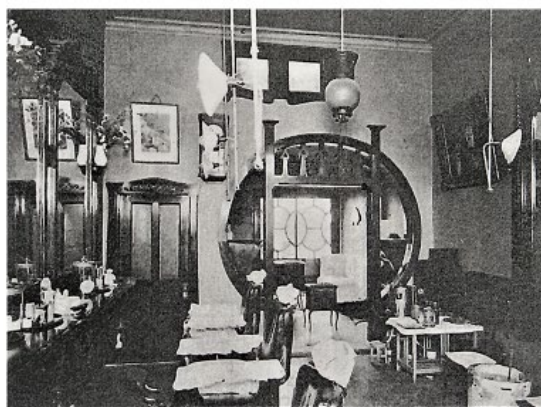


この川口支店は、日本でアール・ヌーヴォーを建築に用いた最初期の建物といわれる。前頁の(図5-76)の中央正面上部の写真の下部にわずかに写っている正面玄関の欄間と、室内客溜り木造間仕切りにアール・ヌーヴォー風の意匠が見られた。

この川口支店は野口孫市と日高胖の合作であるが、日高はこの頃、北浜で大阪の名士を顧客としていた高級理髪店の「神本理髪店」から店舗の設計を依頼されていた。日高は、この理髪店をアール・ヌーヴォー様式でまとめ、明治36年(1903)9月に完成させている。この工事の監理業務は、近くの中之島図書館工事の現場主任であった久保田小三郎が引き受けていた。久保田小三郎は、明治38年(1905)中ノ島図書館竣工の翌年に住友本店臨時建築部を退職し、旧鴻池本店を1909年に自ら設計監理し完成させていた。その後ふたたび恩師・辰野金吾のもとに実質上戻り、建築主任として辰野のアール・ヌーヴォーの大作である松本健次郎邸を明治44年(1911)に完成させている(*3)。

日本でアール・ヌーヴォーといわれる場合は、英国のグラスゴー派やアーツ・アンド・クラフツ、ウィーンのゼツェッションなどを含めた欧州の芸術の新潮流全体を指される場合が多い。川口支店や神本理髪店などは、辰野の松本健次郎邸を含め、日本人的感性を採り入れた上でのグラスゴー派やゼツェッションの影響が強く、フランス文化圏等のオルタやギマール等の狭義のアール・ヌーヴォーとは異なっていた。

野口は、欧州でこの芸術の新潮流に出会い、この川口支店の内装において日本で最初にその新潮流を試みた建築家であった。建築史家の足立裕司は、住友本店臨時建築部を日本におけるアール・ヌーヴォーの源流として位置付けている(*4)。ちなみに、日本のアール・ヌーヴォーの最初期のもう一つの重要な事例は、武田五一設計で明治38年(1905)に竣工した福島行信邸であった。



(図5-77) 日高胖設計 神本理髪店 明治36年(1903)

5. 5. 3 心齋橋

古代ローマ以来、ヨーロッパの主要都市において、都市内の川に架かる橋は、都市美観を形成する重要な要素として多くの建築家が意匠設計を行ってきた。イタリア16世紀ルネサンスの建築家のパラディオも、実現はしなかったが橋の設計を行っている(*4)。また現在のパリのアレキサンドル3世橋は、1900年のパリ万国博覧会のために架けられたバロック的の重厚感のある華麗な橋である。一方、日本の明治期に都市美観を重視して建造された石造橋には、明治20年(1887)の皇居の眼鏡橋と呼ばれる正門石橋、明治44年(1911)妻木頼黄の意匠設計により完成された日本橋、そして大阪長堀川に架けられた明治42年(1909)に完成した心齋橋があった。すべて2連アーチの石造橋だった。

東京の日本橋に先駆けて完成した心齋橋の意匠設計は、野口によるものである。中央の柱脚には短く圧縮されたようなコンポジット式円柱2本が、長堀川中央で力強い象徴性を放っていた。また手摺の欄干は通常、アレキサンドル3世橋や日本橋のように下膨れの彫刻的な手摺子を並べるのが通常であるが、心齋橋では、ゴシック建築の石造トレサリーに用いられるクワットレフォイルと呼ばれる四つ葉クローバー形の石造トレサリーが横に連続する手摺欄干とされていた。野口らしい画期的な用法である。全体に爽やかで洗練された均衡感ある心齋橋の意匠は、妻木頼黄が意匠設計した東京日本橋の重厚感ある橋の意匠と好対照を成していた。



(上 図5-78)

ヨーロッパのゴシック建築に見られる
四つ葉クローバー形の意匠が入ったトレサリー
野口孫市の習作ドローイング

(左上下 図5-79)

野口孫市の意匠設計による心齋橋
明治42年(1909)完成

左上：長堀川に架かる心齋橋の全体像

左下：手摺のトレサリーと洗練されたガス灯意匠
詳細写真

また両橋のブロンズ製ガス灯台座についても、日本橋のバロック彫刻のような重厚さに比べ、心齋橋のガス灯台座では、軽やかなヨーロッパの新潮流を思わせる造型意匠を見せていた。当時の心齋橋界隈は、大阪のなかでもモダンな文化の華やかな地域となっていたが、まさしくその都会的に洗練された文化に相応しい都市景観を形成する橋だったのである。

当時の大阪のビジネスの南北中心軸の通りは第1部で述べたように堺筋であった。しかし芝居小屋の並んでいた道頓堀から続く心齋橋界隈は、心齋橋大丸が享保11年(1726)に開業していたように、町衆や旦那衆の粋な文化を担う地域となっていた。下の(図5-80)は、まだ御堂筋ができる前の大正13年(1924)の大阪パノラマ地図である。現在の御堂筋にあたる位置に橋はなく、心齋橋は、長堀川と西横堀川の交差する川筋に4本の橋が架かる大阪名所の四ツ橋に続く、水都大阪の都市景観を代表する橋となっていた。長堀川の東端は東横堀川に突き当たるが、この地にあったのが、下図の黄色の丸印で示した住友本邸のある鰻谷であった。

元和8年(1622)に長堀川を開削した四名の商人のなかの岡田心齋が、船場と島之内の町の人々の往来のため南北に橋を架けたのが橋の名前に由来になったように、江戸期から、大阪の堀や橋は大阪商人たちによって造られていた。明治期になってもこの精神は継承され、明治42年の心齋橋の架け替えにあたり、大阪の地への恩義を感じていた住友春翠は多大の寄附を行っていた。住友にとって心齋橋は、その江戸期以来の大阪の拠点であった鰻谷へ至る長堀川の水上交通のゲートに相当する橋だったのである。

しかし100年後の現在、長堀川は埋め立てられ長堀通りとなり、地下には市営の大駐車場がつくられている。心齋橋の往時の面影はない。ただ欄干の一部と4基のガス灯が、幅広の横断歩道の中央に残されているのみである。



(図5-80) 大正13年(1924)発行の大阪パノラマ地図

緑丸：水都大阪を象徴する四ツ橋 赤丸：長堀川に架かる心齋橋 黄丸：鰻谷の住友本邸

5. 5. 4 大阪倶楽部

明治43年(1910)野口孫市は結核を発病し、1年半ほど鶴崎平太郎が営む須磨浦病院にて保養を続けていた。鶴崎は関西で結核の名医として知られていたが、野口は以前に鶴崎邸を設計している。復帰後、野口は住友銀行東京支店・住友家茶白山本邸・大阪中央電気倶楽部そして大阪倶楽部を次々に手掛けた。東京支店や茶白山本邸は日高とともに設計し、大阪倶楽部は長谷部鋭吉(1885~1960)と設計を行っていた。長谷部は、明治42年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、住友本店臨時建築部に入っている。

明治44年、大阪を代表する財界人である住友春翠と藤田伝三郎が男爵位を得た。このことを契機に、大阪財界人の間で紳士的な社交の場を作ろうと大正元年(1912)に設立されたのが、大阪倶楽部であった。5. 2. 2で述べたように、日本銀行大阪支店が現・三井住友銀行大阪本店が建っている敷地に移転した跡地に、大阪倶楽部が建てられることとなった。この今橋筋は、当時の大阪の東西のメイン・ストリートだった。設計を担当した野口以下臨時建築部の面々の意気込みには、並々ならぬものがあっただろう。そしてこの大阪倶楽部の建築には、野口のある究極の一面が現れていた。

建築史家でバロック建築に詳しい渡部貞清は、「ルネサンスすなわち古典様式の危険は硬化であり、マニエリスムの危険は解体である。」と述べていた(*5)。大阪倶楽部の外観意匠は、解体の一手手前まで及んでいた万華鏡のようなものであった。側面のなかほどにはロマネスク・アーチがあり、その上部の切り立った三角屋根の妻面の下部には、古典様式からは逸脱するエンタシスを強調した5本の短柱が強い表現を持たせるように並んでいた。建物の角には、八角塔が宙に浮くように据えられ、正面の最上部には象徴的なパラディアン・アーチが急勾配の三角破風の中に収められていた。洞穴のような1階正面玄関の入口では、四角い短柱が両脇を固めている。入館者はこの中に入って真っすぐ進むのではなく、すぐ左に折れて玄関に入るようになっていた。まるで迷宮のようである。しかしその構成は巧緻をきわめており、あたかも数百年の時を経て増築を重ねてきたような自然さと過剰なまでの豊穡さを湛えていた。野口孫市の大胆な折衷主義的特質が現れた作品であった。明治の時代にあって、ある意味「前衛的」ともいえる建築だったのかもしれない。

倶楽部建築では、明治18年に竣工した辰野金吾設計の「銀行集会所」があったが、明治の時代ではまだ先例の少ないものだった。大正・昭和になってからは、大正2年竣工のコンドル設計の三井倶楽部や、昭和6年竣工の渡辺節設計の綿業会館などの名作が生まれているが、明治の時代、野口は辰野と同様に英国の倶楽部建築を参考にしていたと思われる。当時の欧米の倶楽部建築は、各室の用途に合わせて部屋の意匠に特徴を持たせるものだった。大阪倶楽部でも、各室の意匠にはそれぞれ独特の個性を与えていた。最も重要な部屋である大食堂では、切妻屋根の大きな木構造の小屋組みを大胆に見せ、照明器具とともに意匠的な華やかさと落ち着きを併せ持つものとしていた。あたかもヨーロッパ中世の修道院の“refectory”の趣きを感じさせるものである(*6)。使われているトーネットのデザインによ

る籐椅子も“refectory”に相応しい。撞球室では、天井を格天井としているが全体に簡素な仕上げとしている。撞球台の凝った意匠を際立たせるものだった。注目すべきは、この写真の奥に一段床レベルが上がった撞球室を見渡せるバーが設けられていたことである。このバーで、会員諸氏は、他の会員たちによる撞球を見ながら様々な会話を弾ませていたことだろう。囲碁室では、ソファに座り心地の良さそうなものを使っているが、天井意匠は照明器具の意匠とともに欧州の新潮流芸術の雰囲気あるものとしていた。

大阪倶楽部の建築全体からは、野口が、古典様式的な規範や堅苦しい格調よりも、その建築を使う人々が心地よく快適に集うことのできる倶楽部建築を目指していたことが伝わってくる。“Comfort”を旨とした野口らしい仕事である。

この大阪倶楽部は大正3年(1914)に完成し会員諸氏に愛されたが、残念なことに大正11年(1922)に出火のため焼失した。その後、安井武雄の設計により大正13年(1924)に再度建設され、現在に至っている。この建築も安井武雄の初期の代表作の一つとなる名作である。

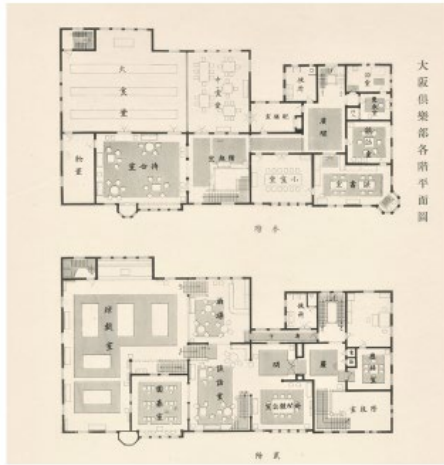
なお次頁に、野口が大阪倶楽部と同時期に設計し同時期に完成している大阪中央電気倶楽部の写真も参考として添付した。外観も内部もオーソドックスな倶楽部建築であり、野口の作風の中広さを示している。



(図5-81)
大阪倶楽部 大正3年(1914)竣工



(図5-82)
大阪倶楽部 大食堂



(上 図5-83) 大阪俱樂部平面圖
上：3階平面圖 下：2階平面圖

(図5-84) 右上：撞球室 右下：囲碁室



(図5-85) 大阪中央電気俱樂部 大正3年(1914)竣工
左：外觀 右：撞球室

註

(*1) 小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』 22~25頁
1991年 創元社

- (* 2) 坂本勝比古著「日建設計の100年 –その栄光と波乱の半世紀を探る–」
『建築と社会』2000年8月号所収 67頁
2000年 日本建築協会
- (* 3) 工学院大学建築学部同窓会誌編集部編著
『工手学校–日本の近代建築を支えた建築家の系譜–工学院大学』46～51頁
2012年 工学院大学建築学部同窓会
- (* 4) パラーディオはリアルト橋計画案を『建築四書』の第三書に掲載していた。現在のヴェネツィアのリアルト橋とは異なるものである。
- (* 5) 渡部貞清著『バロック建築』
「大系世界の美術16 バロック美術」 66頁
1972年 学習研究社
- (* 6) 修道院の“refectory”とは、単なる大きな食堂という意味ではなく、そこでは宗教的な精神性を込めてともに食事するという重要な意味が込められていた。本来、倶楽部という組織はその共有する理念のもとに人々が集まるものである。野口は、単なる大食堂ではなく“refectory”のようなイメージでこの設計を行ったのではないだろうか。

図版・写真

- (図5-67) 住友総本店仮建物外観写真：住友史料館所蔵
同上 平面図：小西隆夫著『北浜五丁目十三番地まで』 口絵3頁
パノラマ地図：『大正13年大阪市パノラマ地図』デジタルマップス発行
- (図5-68) 関西大学所蔵
- (図5-69) 住友史料館所蔵写真を拡大分解
- (図5-70) 住友史料館所蔵
- (図5-71) 『広島県の近代化遺産 –広島県近代化遺産(建造物等)総合調査報告書–』
1998年 広島県教育委員会発行 105頁
図面は、西川龍也作成
- (図5-72) セルリオの著書： Wikipedia Commons, the free media repository
ジェームス・ギブス事例： 同上
ジウリオ・ロマーノの家：「大系世界の美術14 ルネサンス美術 イタリア
16世紀」 260頁 1972年 学習研究社
- (図5-73) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-74) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』

- (図5-75) 「旧大阪府庁舎」略史
- (図5-76) 住友銀行川口支店 全体外観写真：『建築雑誌』明治37年6月号
 同上 部分写真： 藤井恵介・角田真弓編『明治大正昭和建築写真聚覧』
 180頁 日本水産株式会社（旧川口支店）部分拡大
 住友銀行川口支店 室内写真：『建築雑誌』明治37年6月号
- (図5-77) 藤井恵介・角田真弓編『明治大正昭和建築写真聚覧』 180頁
- (図5-78) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 資料目録⑧
- (図5-79) 心齋橋全景： 『大大阪橋梁選集』第2輯
 武田五一他編 1930年 創世社出版部
 心齋橋部分： 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-80) パノラマ地図：『大正13年大阪市パノラマ地図』デジタルマップス発行
- (図5-81) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図5-82) 同上
- (図5-83) 同上
- (図5-84) 同上
- (図5-85) 同上

(補) 当時の英国・米国に見るパラディアニズム

建築史家の鈴木博之は、その著書『ジェントルマンの文化 建築から見た英国』で、中之島図書館とヴィラ・ロトンダの関係について次のように言及していた(*1)。

ロトンダをはなれてここまでやってきたわれわれは、もっと身近にまでパッラーディオのヴィラ・ロトンダが影を落としていることに気づかなければならない。大阪の中之島に建つ大阪府立図書館がそれである。この図書館は住友家の寄附によって建設されたもので、設計にはその頃住友にいた建築家・野口孫市があたった。作られたのは1904年のことである。

また、建築史家の藤森照信はその著書『日本の近代建築(下) -大正・昭和篇-』で下記のように述べている(*2)。

最初に明快にアメリカンボザールを見せてくれていたのは、野口孫市の大阪図書館である。野口は、住友家が大阪市に寄贈する図書館の調査のためアメリカへ視察に行くが、ちょうどその頃、アメリカ東部は図書館ラッシュに当り、ボストン公共図書館、コロンビア大学図書館が完成したばかりで、ニューヨーク大学図書館が完成に近づ

いていた。いずれもマッキム・ミード&ホワイトの設計になり、アメリカンボザールの代表作として名高い。野口がどの図書館に引かれたかの記録はないが、帰国後のデザインと比べると建設途上のニューヨーク大学図書館だったと見てまちがいない。アメリカ建国の父にして建築家のジェファーソンの手になるヴァージニア大学図書館を手本にしたことで知られる。

このマッキム・ミード&ホワイトが手本としたジェファーソン設計のヴァージニア大学図書館は、ジェファーソン自身が、パラディオ設計のヴィラ・ロトンダを手本としたことを語っていた。

18世紀初頭から19世紀末までの英国と米国では、建築史的解釈を新たな創意へと飛翔させようとするパラディアニズムと呼ばれる思潮があった。英国では、産業革命直前の既に複雑化した社会構造を背景とする成熟した文化的状況のなかで、イタリア・ルネサンスが持つ理想主義的な精神を体現するパラディオの建築が、新鮮な驚きとともに人々の心を捉えていた。一方、米国は独立を果たし、これから新しい国土と時代を切り拓く理想に燃える時代だった。パラディオの建築は、その理想を体現するのに相応しい建築モデルであった。このような時代背景を持つ英国と米国において、パラディオの建築、特にヴィラ・ロトンダは大きな影響を与えていた。両国でのパラディオへの入れ込みようは、「関心」を越えて「信仰」に近いものがあった。

特にパラディオ著の『建築四書』の存在が大きい。『建築四書』の最初の英訳は、1720年になされたが、丁度150年の時を越え、アルプスを越え英国にもたらされていた。この『建築四書』は絶大な力を発揮し、建築が時と場所を越えて飛翔していたのである。その原因として、パラディオの建築がもつ理想主義的なイメージに加え、いつの時代にもどのような建築にも適用できそうな斬新な建築手法があった。

野口は19世紀のほぼ最後の年に英国と米国東海岸を巡遊していた。また文献による学習もあり、当時の欧米のパラディアニズムについて野口は十分な知識を蓄えていたはずである。事実5. 3. 2の(2) - 1で述べたように、中之島図書館ではヴィラ・ロトンダの幾何学からインスピレーションを得ていたことも十分に考えられる。

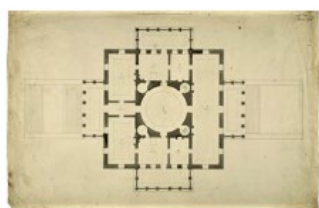
しかし、野口にとっても中之島図書館は英国・米国の建築家たちの仕事と同じように「理想」を体現すべき建築であったが、野口はその手法の持つ効用だけを借り受けただけに過ぎなかった。ヴィラ・ロトンダを全体として「信仰」するような精神は持っていなかったのである。米国の19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍した、マッキム・ミード・アンド・ホワイトにもヴィラ・ロトンダの影響は見られるが、野口と同じように、もはや「信仰」するような精神をその作品には見ることはできない。彼らは、成長し続ける米国社会に適合すべくその形式を大型化・複雑化し拡大展開していた。しかしその米国東海岸における図書館でのモデルの使い方は、ロトンダを中心的な閲覧室ホールとする因習的な形式に過ぎなかった。一方、野口はロトンダに多様な意味を持たせていたのである。

(補-1) 英国のパラディアニズム

欧州では、英国以外にも多くの国でパラディオの影響を残していた。イタリアはもちろんのこと、17世紀にはオランダが持続的にパラディアニズムの国となり、17世紀末から19世紀初頭にかけては、ドイツがそれを引き継ぐ形になった。さらにフランスやベルギーさらには東欧の国々にもその影響が見られた(*3)。ドイツへの影響の例では、ゲーテ(1749~1832)が1786年から1788年にかけてイタリアを旅行し、ヴィラ・ロトンダ訪問の感動を、後に『イタリア紀行』で記していることにも表れている(*4)。しかしここでは、パラディアニズムが最も顕著であった英国の事例を見ることにする。

英国での文学の祖をシェイクスピア(1564~1616)とするならば、英国での建築家の祖をイニゴ・ジョーンズ(1573~1652)とすることができるだろう。ジョーンズの1613年から1614年にかけての2度目のイタリア旅行では、『建築四書』を携行しパラディオの建築や古代ローマ建築を多く見て歩いていた。17世紀後期からジョーンズの建築家としての名声が高まるにつれ、建築家イニゴ・ジョーンズとパラディオの名は強く結びついて英国の人々に記憶されることとなった(*5)。

その百年後にイタリアを旅行し、パラディオ主義と呼ばれる派の中心となったのが、バーリントン伯爵リチャード・ボイル(1694~1753)であった。彼は貴族的自由を最大限に行き、自ら建築の設計に手を染めると同時に、何人かの芸術家を自己の庇護のもとに育成した。そのうちの一人が、建築家コリン・キャンベルである。下図は、ある貴族のために、1723年に建てられたコリン・キャンベル設計による別荘である。一見して分かるとおりヴィラ・ロトンダからの直接的な翻訳であった(*6)。



(上 図5-86) ミアワース平面図

(下 図5-87) ミアワース

コリン・キャンベル設計 1723年



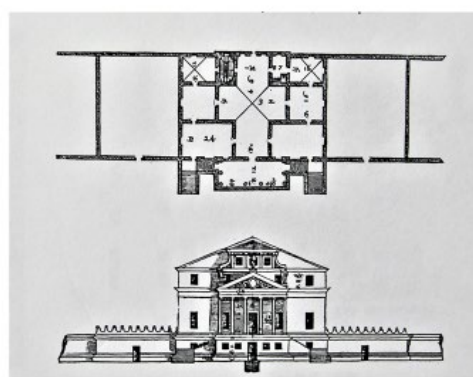
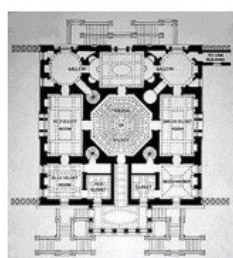
(上 図5-88) ミアワース立面図

(下 図5-89) ミアワース断面図



一方、バーリントン伯爵は、彼自身のためにロトンダを建てていた。1725年にロンドン郊外に、彼自らが建築家ウィリアム・ケントの協力を得て設計したチズウィック・ハウスである。明らかにヴィラ・ロトンダの影響がみられる。しかしここでは、前後の大階段のデザインにはパラディオ設計の1558年から1560年にかけて建設されたヴィラ・フォスカリの影響も見られ、またロトンダを八角形としその高窓には古代ローマの大浴場でよく見られたディオクレティアヌス窓と呼ばれるモチーフを用いていた。パラディオ設計のヴィラ・フォスカリの庭園側の立面では、この窓を主要なモチーフとして使っている。またチズウィック・ハウスの両側面と背面には、三連窓であるパラディアン窓も見られる。明らかにパラディオへのオマージュに満ちた建築であった(*7)。

その後、英国ではロバート・アダム(1728~1792)設計によるエジンバラのレジスター・ハウスや、ウィリアム・チャンバース(1723~1796)設計のサマーセット・ハウスなど、ミアワースやチズウィック・ハウスほどの直接的ではないにせよ、多くの建築にパラディオの影響が及んでいた。また英国の新古典主義建築を代表する建築家ジョン・ソーン(1753~1837)の建築では、もはやパラディオ直接というよりもパラディオを源流とする新古典様式の手法がふんだんかつ精緻に用いられるようになっていた。イングランド銀行の1794年から1787年にかけて建設されたロトンダと呼ばれるパンテオンを思わせるホールもその一つである。このロトンダ廻りにはイングランド銀行の主要な部屋が配置されており、ロトンダそのものは、頂上から採光する直径・高さとも57フィート(17.4m)のまさしくパンテオンのような大きなドーム空間であった(*8)。



(上 図5-90)

ヴィラ・フォスカリ
パラディオ設計 1558~60年

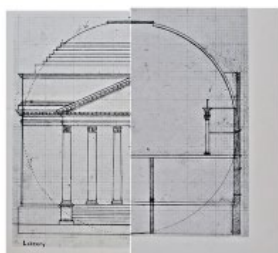
(左上 図5-91) チズウィック・ハウス平面図

(左下 図5-92) チズウィック・ハウス
バーリントン卿設計 1726年

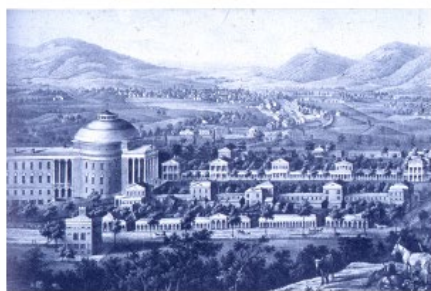
(補-2) 米国のパラディアニズム

1776年7月4日、アメリカ独立宣言が高らかに発せられた。その独立宣言の主な起草者こそ、後に1801年から'09年まで第3代アメリカ大統領を務めたトーマス・ジェファソン(1743~1826年)である。ジェファソンは、ヴァージニア入植者の由緒ある家系に生まれ、ウィリアムズバーグにある名門大学で、哲学や数学を修め、パラディオの『建築四書』も熟読していたというルネサンス的教養人であった。その人文主義に根ざした啓蒙的政治家としての生涯は、現在に至るまでアメリカ人の衆目の一致する尊敬を集めている。ジェファソンは1784年から'89年までの5年間で駐フランス公使としてパリに滞在したが、その間フランスの新古典主義建築にも傾倒していた。5種の『建築四書』の版本を所蔵し、小型本のフランス語版を建築視察時には常に携帯していたといわれている(*9)。1768年からは、ヴァージニア州シャーロットツビルの広大な自分の敷地にモンティチェロと呼ばれる自邸を自らの設計で建設を始めている。このモンティチェロもパラディオのヴィラ・ロトンダを原型としたものであった。現在この邸宅は、ヴァージニア大学と共に世界遺産に指定されている。

大統領退任後のジェファソンが、教育に情熱を注ぎ設立したのがヴァージニア大学であった。そのキャンパス設計および建築の設計もジェファソン自身が行っていた。キャンパス計画は、“The Lawn”と呼ばれる大きな芝生のゾーンをU字型のコロネードが取り囲む配置計画となっている。コロネードには教室が並び、間隔をおいて設けられたパビリオンの上階には教授の住居が建てられていた。U字型キャンパス配置計画の全体中心を成していたのが、ヴィラ・ロトンダを原型とした図書館であった。理想的な大学像である。



(左上 図5-93)
ワシントンにあるジェファソンの彫像
(左下 図5-94)
モンティチェロ
1768年より建設開始



(図5-95) 1825年開校 ヴァージニア大学
上の図面は1821年に描かれたもので火災再建後の現況とは異なる

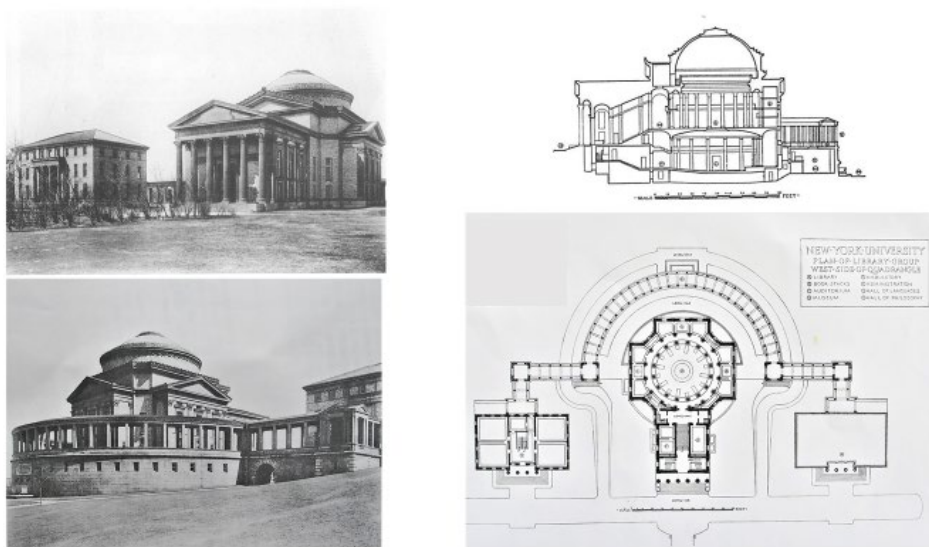
(図5-96)
“The Lawn”より図書館正面を望む

前頁(図5-95)の立断面図では、図書館の設計においてパンテオンのような球体幾何学がイメージの源泉にあったことが示されており、ジェファースンの理想主義的な傾向をよく表していた。ジェファースンは自筆で、「ロトンダはパンテオンの比例に基づき、大学図書館の用途に適合するよう縮小されるべきである。その直径を77フィート(23.5m)とする。」と図面の裏に記していた(*10)。

しかし、ジェファースンの死後約70年を経た1895年、大きな火災が発生し図書館は全焼した。その再建の設計を行ったのが、マッキム・ミード・アンド・ホワイトのスタンフォード・ホワイトであった。ホワイトは創建当初2層であった図書館を1層とし、大きなロトンダ空間とした。現在に見るロトンダである。

当時の世界で最大規模の組織的建築設計事務所となっていたマッキム・ミード・アンド・ホワイトは、19世紀の末頃いくつもの図書館を設計していた。前述のヴァージニア大学に加え、ニューヨーク大学図書館(1896年)・コロンビア大学図書館(1893年)・ボストン公共図書館(1898年)などが挙げられる。

下図のニューヨーク大学図書館(現存せず)は、その建物配置構成において壮大なイメージを伴うものであった。中央の本館の右に哲学館、左に言語学館を従え、本館を中心として、それらの背面を半円弧状の歩廊が全体を統一するように巡っていた。またエントランスホールから本館の中心である閲覧室のロトンダ空間へは、「知の神殿」に向かうように一直線の大階段が象徴的にポルティコから立ち昇っていた。古代ローマ帝国を描くハリウッド映画を連想させるような、「アメリカ的壮大さ」が表現されていた。

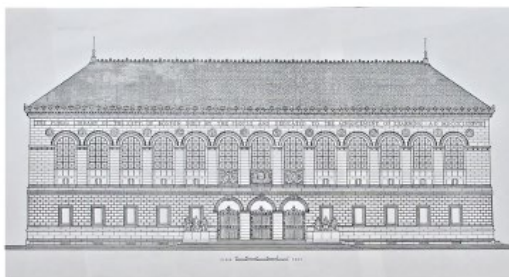
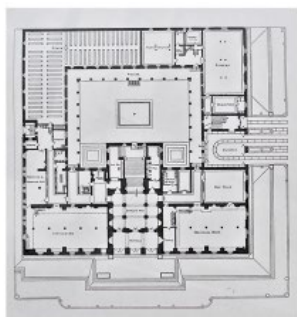


(図5-97) ニューヨーク大学図書館 1896年

コロンビア大学図書館では閲覧室を、ロトンダ空間に替わり四隅を少し欠いた大きな矩形の空間としている。そしてドーム状の天井の高窓には、古代ローマの浴場風のモチーフを用いていた。ニューヨーク大学図書館もコロンビア大学図書館も、もはやパラディオのヴィラ・ロトンダの面影は少なく、マッキム・ミード・アンド・ホワイトの「のびのびとした分かり易さ、悪く言うと大味で芸術的深みに欠けるが、装飾を加える時はこれでもかとはばかりに刻み込む（*11）」性格がよく現れたものであった。

再建後のヴァージニア大学そしてニューヨーク大学・コロンビア大学の図書館は、ヴィラ・ロトンダが下敷きになっていることは確かである。しかし、ボストン図書館では全く異なる図書館の形式が考え出されていた。ヨーロッパの中世修道院を思わせる中庭の周囲を巡るように、図書館書室が構成されているのである。そしてエントランスホールから続く大階段室は、その中庭に張り出すように光を採り入れながら配置されており、その階段室にはバロック階段の一種である「皇帝の階段」が組み込まれていた。

1899年に建築巡遊をしていた野口は、ヴィラ・ロトンダの直接的な影響のある英国のパラディアンイズムの建築や、ジェファースンのヴァージニア大学は見えてはいないだろう。しかし、マッキム・ミード・アンド・ホワイト設計によるこれらの図書館は見ていたと思われる。特にボストン図書館の「皇帝の階段」には、直接的なインスピレーションを得ていたかもしれない。しかし、野口の中之島図書館に最も近いと思われるのは、ジェファースンのヴァージニア大学図書館である。そこには、ルネサンスの人文主義に通じる「理念」がまだ潜んでいた。マッキム・ミード・アンド・ホワイト設計によるこれらの図書館には、もはやその理念は見受けられない。あまりにも大型化した新古典様式建築手法に熟練した精緻さは、人文主義的な「理念」ではなく“Grandeur（壮麗さ）”を求めていたのである。



(左4枚 図5-98)
ボストン公共図書館 1898年

(右2枚 図5-99)
コロンビア大学図書館 1893年

ジェファースンの創建時の図書館では、ドーム空間の中心を人間の眼の高さに近いものとしていた。人間が世界の中心近くにいるべき空間モデルであった。1894年にここで開催された“commencement ball”と呼ばれる卒業式当日のダンス・パーティの絵が残されているが、人々の生き生きとした姿が伝わってくる。しかし火災後の再建のための設計で、スタンフォード・ホワイトは人間の視線を下げ、下から壮大なドーム空間を見上げる演出とした。その結果、人間はその壮大さを見上げるだけの存在に過ぎなくなっていた。

野口の中之島図書館の設計思想もジェファースンと同様に、壮麗さを目指したマックム・ミード・アンド・ホワイトの建築ではなく、人を主人公にしようとする建築であったと思われる。確かにマックム・ミード・アンド・ホワイトの建築は、大規模化する社会経済を背景に、多彩な手法や技に満ち溢れていた。野口には、眩いばかりであったろう。しかし、それが「何のための」手法の豊穡さであったのかと言えば、19世紀末から20世紀初頭にかけての「偉大なるアメリカ」像の確立に向けた壮麗な建築群を大量に生み出すことにあった。一方、野口は、経済規模も技術も全く比較にならない日本という東洋の国で、やっと地に足の着いた近代化を歩み始めた時代を生きた建築家であった。「手法」には常に「何のための」という問いが潜んでいる。ジェファースンの建築が「新しい国・アメリカのヒューマニズム」のための素朴なものであったのと同じように、野口の場合も「明治期の啓蒙精神」のための素朴さと力強さを備える建築だったのではないだろうか。

註

- (* 1) 鈴木博之著『ジェントルマンの文化 建築から見た英国』 106頁
1982年 日本経済新聞社
- (* 2) 藤森照信著『日本の近代建築 (下) -大正・昭和篇-』 60～61頁
1993年 岩波新書
- (* 3) 桐敷真次郎著『付録Ⅱ パラーディオの建築と「建築四書」』
アンドレア・パラーディオ著 桐敷真次郎編著
『パラーディオ「建築四書」注解』所収 498頁
1997年 中央公論美術出版
- (* 4) 平山忠治著『ゲートと建築術』 113～160頁
1980年 平山忠治
- (* 5) 前掲書の『付録Ⅱ パラーディオの建築と「建築四書」』 498頁
- (* 6) 鈴木博之著『ジェントルマンの文化 建築から見た英国』 99～102頁
1982年 日本経済新聞社
- (* 7) 前掲書 102～105頁

- (* 8) Commissioning Editor: David Dunster
 “Architectural Monographs JHON SOANE” p.p 61
 1983 Dr. Andreas Papadakis
- (* 9) 前掲書の『付録II パラーディオの建築と「建築四書」』 498頁
- (* 10) William B. O’Neal “PICTORIAL HISTORY of the University of Virginia”
 p.p 31~32
 1968 THE UNIVERSITY PRESS OF VIRGINIA
- (* 11) 藤森照信著『日本の近代建築 (下) -大正・昭和篇-』 60頁
 1993年 岩波新書

図版・写真

- (図5-86) ミアワース平面図 Architectural.com
- (図5-87) ミアワース外観写真 Historic England Reference Number:CC001343
- (図5-88) ミアワース立面図 Writeopinions.com
- (図5-89) ミアワース断面図 Pinterest.com
- (図5-90) アンドレア・パラーディオ著 桐敷真次郎編著
 『パラーディオ「建築四書」注解』内 198頁
 1997年 中央公論美術出版
- (図5-91) Wikipedia Commons, the free media repository
- (図5-92) General Editor: John Julius Norwich
 “GREAT ARCHITECTURE OF THE WORLD” p.p 192
 1981 BONANZA BOOKS
- (図5-93) 筆者撮影
- (図5-94) 筆者撮影
- (図5-95) William B. O’Neal “PICTORIAL HISTORY of the University of Virginia”
 1968 THE UNIVERSITY PRESS OF VIRGINIA p.p 56 より
 筆者が平面図と断面図を合成し作成
- (図5-96) 筆者撮影
- (図5-97) Richard Guy Wilson
 ” THE ARCHITECTURE OF McKIM, MEAD & WHITE in Photographs,
 Plans and Elevations” p.p 74,76
- (図5-98) 平面図・立面図は前掲書 101～102頁 写真は筆者撮影
- (図5-99) 前掲書 外観写真 48頁 平面図 50頁

第6章 日暮別邸 —簡素であること—

住友は、別子銅山がある新居浜の銅製錬所が排出する亜硫酸ガスによって農作物が枯れるという煙害問題を解決するため、銅製錬所を新居浜沖合約20kmの無人島である四阪島に移転するという重大な決断を下した。この住友の命運が賭かった製錬所の移転は、明治30年(1897)に四阪島製錬所の建設工事が着手され、明治38年(1905)に操業が開始されている。そして住友春翠が四阪島に滞在する拠点となったのが、正式には住友別子鉱業所接待館と呼ばれ、通称では日暮別邸と呼ばれた建物であった。

日暮別邸は、近代工業の島に建てられるという事情から「簡素であること」を宿命づけられた建築であった。実質的には住友家の別邸でありながら、内装等で贅を尽くした須磨別邸とは対極に位置すべき「簡素であること」を旨としなければならない建築として設計された。また、孤島の険しい斜面という厳しい条件も克服しなければならない敷地に建つ建築でもあった。「簡素であること」と「敷地条件の厳しさ」が、野口を否応なく建築思考の純度を上げざるを得ない状況に追い込んでいたのである。

前章で装飾とはある建築様式の世界観を示す強力な武器であることを述べたが、「簡素であること」という命題は、野口が徹底して学習した西洋建築の様式的な装飾技法が使えないということであった。また四阪島という孤島の海に面する険しい傾斜面に位置するという敷地条件は、海上の船に乗っている来訪者からの遠い視線を、様式的な装飾ではなく建築全体の構成として受け止めるという、いわば近代彫刻のような視線の受け止め方を要求するものでもあった。

日暮別邸における野口の建築術は、中之島図書館や須磨別邸とは大きく異なるものとして現れている。本章では、その日暮別邸におけるもう一つの野口の建築術の特質を、以下の節構成から浮き彫りにしたい。

6. 1 日暮別邸の設計者の特定について
6. 2 近代工業の島に建つが故の「簡素であること」という命題
6. 3 「簡素であること」と「厳しい敷地条件」に導かれた建築
6. 4 日暮別邸の外観における工法と意匠
6. 5 日暮別邸の内部意匠
6. 6 日暮別邸の設計に顕著に現れていた「編集的折衷」について
6. 7 野口孫市とマッキントッシュ

本章での中心的なテーマは、6. 3の野口の建築的思考にある。そしてその命題の背景について記述するのが6. 2である。しかし現在に至るまで、日暮別邸の設計が野口によるも

のであるという確証はなされていなかった。最初に日暮別邸の設計者を野口に特定することを本章特有の課題とする。6. 1にて、まず日暮別邸の設計者が野口であることの特定方法について記述を行う。

6. 4では、建築術を成すもう一つの「建築技術」に光を当てる。そして6. 5ではより非装飾的なものを目指していた日暮別邸の内部意匠について記述する。6. 6は、日暮別邸の野口の建築術のまとめとして、「設計手法の編集的折衷」という野口の建築術の特質について考察するものである。

野口が残した水彩画や日暮別邸の装飾デザインから、様式的な装飾技法の使用を制限されていたという状況のなかで、野口は英国モダニズムの潮流の一つとなっていたグラスゴー派のマッキントッシュに強い関心を抱いていたと推測できる。6. 7では、日暮別邸におけるマッキントッシュの影響について概観する。

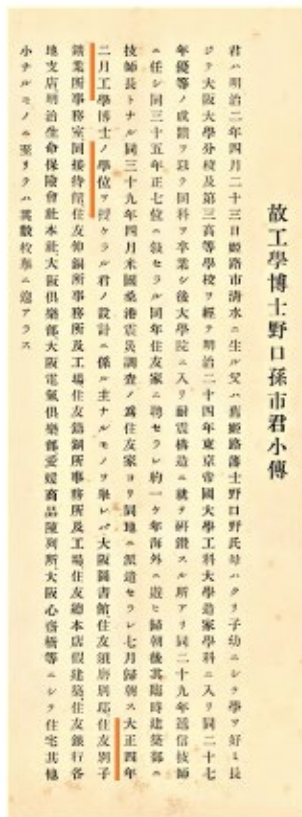
6. 1 日暮別邸の設計者の特定について

日本の近代建築の設計者の特定において、一般に用いられるのは棟札もしくは設計図面である。両者が存在しない場合、信用に足る文献があれば設計者を特定する有力な根拠となる。また副次的な方法として、その時代における建築家の顕著な設計上の特徴と、対象とする建築の特徴とが一致する場合、場合によっては特定材料とすることができる。

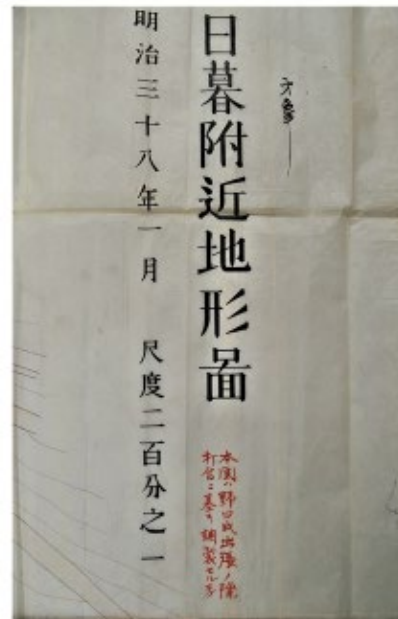
日暮別邸の場合、棟札や設計図面は残されていなかった。しかし『野口博士建築図集』に収録された日高胖による野口孫市への追悼文「故工学博士野口孫市君小伝」のなかに、別子鉱業所の接待館が野口の設計によるものであることが、次頁の(図6-1, 2)に示す通り下記のように明記されていた(*1)。

君ノ設計ニ係ル主ナルモノヲ挙レバ大阪図書館住友須磨別邸住友別子鉱業所事務室
同接待館住友伸銅所事務所及工場住友鑄鋼所事務所及工場住友総本店仮建築住友銀
行各地支店明治生命保険会社大阪倶楽部大阪電気倶楽部愛媛商品陳列所大阪心齋橋
等ニシテ住宅其他小ナルモノニ至リテハ其数枚挙ニ違アラス

ただ、この別子鉱業所の接待館という場合、新居浜の惣開(そうびらき)にも接待館があり、四阪島の接待館もしくは惣開の接待館のいずれかであるかは、この記述からは直ちに判断できない。しかし惣開の接待所が明治22年に竣工しており、野口の住友入社が明治33年であることから、この文章に記述された接待館とは四阪島の接待館すなわち日暮別邸であり、日暮別邸が野口の設計によるものであると判断する。この日高による野口への追悼文を〈特定根拠①〉とし、以下本章の中で、日暮別邸の設計者が野口であると思われる有力な特定根拠に番号を振る。



故工學博士野口孫市君小傳
 礦業所事務室、同接待館、住友伸銅
 地支店、明治生命保險會社本社、大

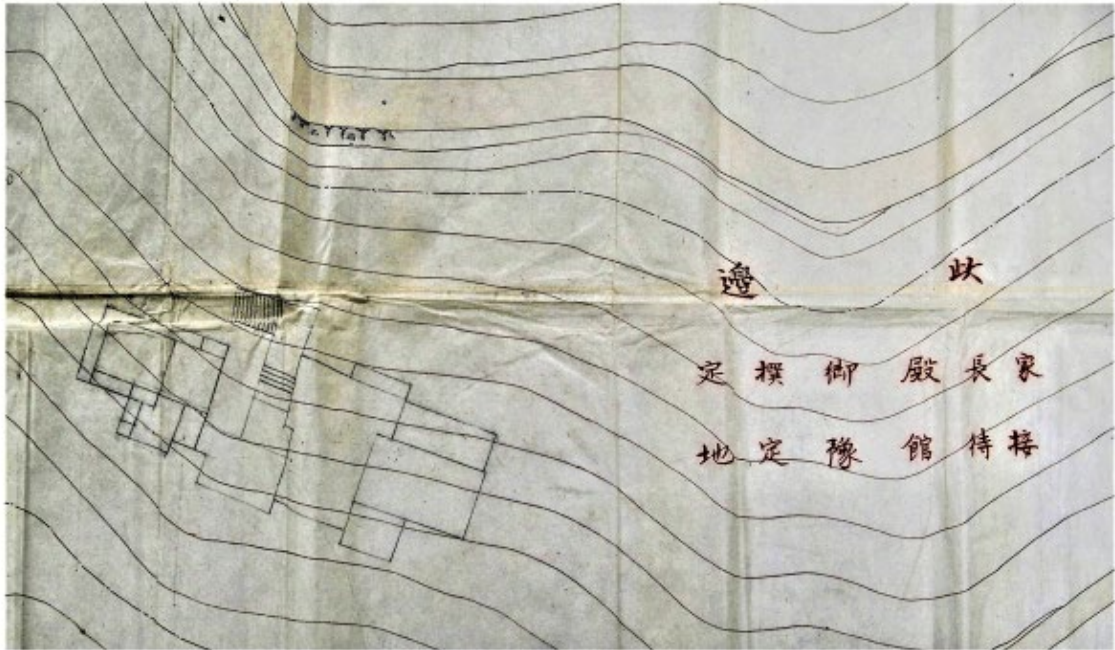


(左 図6-1) 大正9年8月日付の日高胖による『故工學博士野口孫市君小傳』冒頭部分
 (中 図6-2) 同上 当該部分拡大
 (右 図6-3) 野口作成と見られる「日暮附近地形圖」

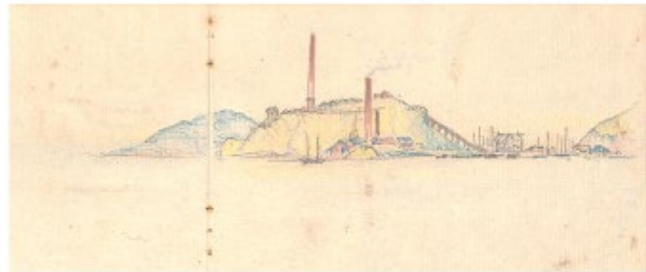
明治38年(1905)2月以降、住友本店別子鉱業所土木課建築係が建築工事を進めていたが、それに先立ち同年1月、住友本店は野口を四阪島製錬所に出張させ、日暮別邸の

「日暮附近地形図」を作成させた。この図面タイトルが上の(図6-3)である。図には「此辺家長殿御撰定 接待館予定地」と朱で記入されている(*2)。その左に、次頁(図6-4)の日暮別邸の平面計画コンセプトを示すスケッチが描かれていた。この平面図スケッチの定規を当てて鉛筆で引かれた画線のタッチは、他の野口自身が描いたと判明している図面の鉛筆画線タッチとほぼ同じであるため、この平面図スケッチは野口自身が描いたものと判定する。この敷地場所の具体的選定も野口が行ったと考えられ、また平面図スケッチも既にこの時点で、ほぼ完全に設計の骨子を示すものとなっていたため、日暮別邸が野口の設計によるものであるとの特定根拠の一つとする。〈特定根拠②〉

(図6-5)は野口が描いた海上から望む新居浜の水彩画スケッチである。日付は明治38年1月13日とあるため、(図6-3、4)で紹介した「日暮附近地形図」を作成するために四阪島に出張した折に描かれたものと思われる。



(図6-4) 明治38年(1905)1月 野口作成と見られる「日暮附近地形図」の部分拡大図

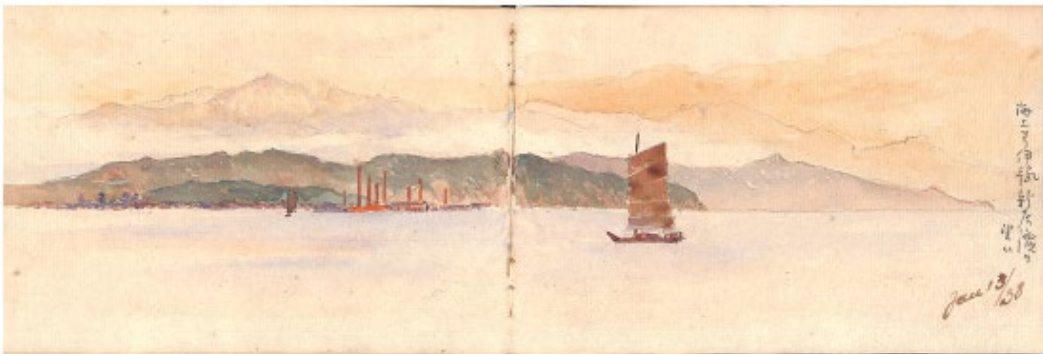


野口孫市によるスケッチ

(下 図6-5) 海上より新居浜を望む 明治38年1月13日
遠方に別子の山々が描かれている

(上 図6-6) 海上より四阪島製錬所を望む

(左 図6-7) 四阪島製錬所 煙突など



註

- (* 1) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
(* 2) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 ―近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書―』 302頁
2015年 愛媛県教育委員会

図版・写真

- (図6-1, 2) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
(図6-3, 4) 同上 「日暮附近地形図」
(図6-5) 住友史料館 尾形久美子氏寄贈 資料目録 2
(図6-6) 同上
(図6-7) 同上

6. 2 近代工業の島にあるが故の「簡素であること」という命題

この節では、「簡素であること」という命題の背景について記述する。そこには近代工業のための島であるという背景と住友の厳しい考え方が顕れていた。

6. 2. 1にて四阪島の製錬所移転に至った背景と経緯について記述し、6. 2. 2にて四阪島の全体計画を紹介し、「簡素であること」が日暮別邸の大命題であったことの必然性を記す。

6. 2. 1 四阪島への製錬所移転

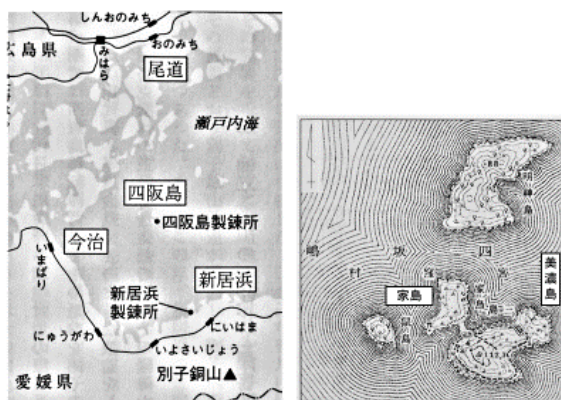
(1) 四阪島への製錬所移転の背景と経緯

別子鉱山は元禄4年(1691)に開坑した。しかし明治維新の頃には、坑道が深くなり湧き水にも悩まされ製錬燃料の薪炭の確保も遠くなり、産銅高は落ち込んでいた。初代住友総理人であった広瀬幸平は、明治7年(1874)1月フランス人技師ルイ・ラロックを招聘し、ラロックに別子近代化のバイブルとなった「別子鉱山目論見書」を同年11月に完成させている。しかしラロックの契約は1年であったため、1年後にはラロックを帰国させ、計画書の実行を日本人技術者の手で実行することとした。住友は、ラロックの通訳として雇用した塩野門之助(1853~1933)をフランスに留学させている。塩野は、3年をサンテチェヌヌ鉱山学校で学び2年をフランスの鉱山にて実地の修行を行ない、5年後の明治14年(1881)フランスから帰国した。翌年、別子鉱山技師長に就任し新居浜の惣開

(そうびらき) 製錬所の建設を一任された塩野は、将来の他鉱山の鉱石も購入する買鉱製錬も視野に入れ将来計画を広瀬に提出した。しかし買鉱をよしとしない広瀬には提案が受け入れられず、塩野は明治20年に住友を辞し栃木県の足尾鉱山に転職することになった(*1)。

明治21年(1888)惣開製錬所・山根製錬所が新居浜の平野部で操業を開始すると早くも煙害問題が持ち上がった。製錬所の煙突から出る亜硫酸ガスによって、農作物に影響が出たのである。それ以降住友の、農民代表による訴訟や損害賠償など別子鉱山煙害問題との長い苦難の歴史が始まった。明治27年7月には、広瀬の甥の大阪本店支配人・伊庭貞剛が別子支配人として赴任し、同年11月に広瀬が辞任した後は、住友の経営は全て伊庭に一任され、別子在勤のまま事実上の総理人の業務を代行することとなった。伊庭は、まず山根製錬所を廃止し、明治28年(1895)惣開製錬所の全面移転を検討するため塩野門之助を高待遇で再び雇い入れた(*2)。

伊庭貞剛は明治27年(1894)、煙害問題を根本的に解決するため製錬所を新居浜沖20kmの瀬戸内海に浮かぶ四阪島に移転することを上申した。しかし、退職しながらも広瀬幸平の「莫大な移転費用をかけるより、その費用は損害補償に充てるべき」との強い反対意見が出るなど、四阪島への製錬所移転の決断に至るまでには多くの議論があったのも事実であった。確かに、水の出ない無人島に、工場や港湾設備を建設し、社宅・学校・病院など社会資本を整備することは、無謀なことだったかもしれない。しかし結局、住友春翠を家長とする住友家は伊庭貞剛の上申を裁許し、明治30年(1897)より四阪島への製錬所移転工事が開始された。明治38年(1905)より四阪島製錬所にて操業が開始している。



(左 図6-8) 明治30年代の新居浜惣開製錬所

(右 図6-10) 四阪島地図

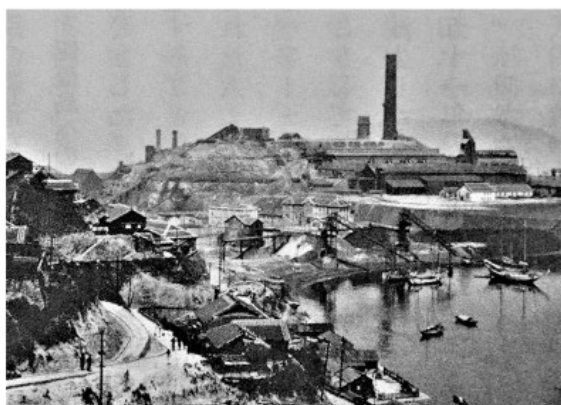
(中 図6-9) 四阪島の位置

明治31年陸地測量部地図より

ところが、四阪島製錬所が稼働すると煙害問題は解決するはずであったが、予想に反して製錬所の煙は20kmの海を越え東予一帯に広がるという事態となった。住友では、製錬所

の大煙突を6本煙突に改造したりするなど、様々な試行錯誤を繰り返しながら、ようやく昭和4年（1929）のペテルゼン式脱硫法で亜硫酸ガスの脱硫の成功に至る。更に昭和14年（1939）には、「煙害を根絶することが、住友の終始一貫せる方針」として、世界に類を見ないアンモニア中和法によって微量の亜硫酸ガスまで吸収し、煙害を根絶することに成功した。半世紀近くの年月が、別子鉱山の煙害問題の解決のために費やされたのである。しかし昭和元年（1926）、15代住友吉左衛門友純すなわち春翠は煙害問題の解決を見ることなく1月に逝去していた。

現在では、別子の山は青々とした木々に覆いつくされているが、四阪島に製錬所が移転される前は、別子の山々は製錬燃料の供給のために伐採され尽くされ禿山となり荒れ果てていた。四阪島への製錬所移転後、別子の山林は毎年100万本から200万本の植林が行われ、現在の姿となった。この構想も伊庭により、四阪島への製錬所移転と同時に上申されていたのである。



(左上 図6-11) 新居浜港から銅鉱石を製錬所のある四阪島に運搬するための「曳かれ船」
 (左下 図6-12) 別子鉱山東平から見る矢印の位置の四阪島
 手前は新居浜の町
 (右 図6-13) 昭和初期の四阪島製錬所

(2) 四阪島の日本産業史における意義

明治33年（1900）3月23日、足尾銅毒事件を追及する田中正造は、第15回帝国議会において別子銅山を引き合いに出し次のように述べていた（*3）。

「伊予ノ国ノ別子銅山ハ、第一鉱業主は住友デアル、ソレ故社会ノ事理人情ヲ知ッテ居ル者デ、己ガ金ヲ儲ケサヘスレバ宜イモノダト云ウヤフナ、サフ云ウ間違ノ考ヲ持タナイ」田中正造は、伊庭貞剛が断行した四阪島製錬所の移転を高く評価していたのである。現代において、「持続可能性」が重要課題となり、企業が社会的責任を持って環境問題などに取り組むべきことが提唱されているが、住友は既に明治時代からこの困難な課題に取り組んでいた。

企業が社会的責任を持って環境問題に取り組むことは重要なこととしても、現代でも変

わらない課題は、それらの取り組みを事業化することによって始めて継続的に「持続可能性」の課題を企業活動に取り組むことができるということにある。住友では、明治時代以来、環境問題への取り組みを事業化することで、現代日本を代表する様々な企業群を生み出していた。

四阪島製錬所における脱硫技術の研究過程から、大正2年（1913）に住友肥料製造所が設立され新たな産業が創出された。住友肥料製造所は現在、住友化学となっている。別子鉱山が電気の時代に入り水力発電所を建設しているが、明治37年（1904）には、東洋一の落差597mを持つ端出場（はでば）水力発電所が完成した。更に、四阪島での電力需要を賄うため、大正8年（1919）には土佐吉野川水力電気を設立、昭和9年（1934）には四国中央電力と改称し、後に住友共同電力となった。四阪島製錬所のための動力は、当時の世界最長送電用海底ケーブルによって水力発電所から送られる電力であった。この海底ケーブルは当時の住友伸銅所で製造されており、住友伸銅所は住友電線製造所を経て現在の住友電工に至っている。四阪島への動力供給の課題が技術の進歩を促したのである。

また前述の、荒れ果てた別子の山々に行われた植林は、住友総本店林業課によってなされており、それが現在の住友林業の源流となっている。

6. 2. 2 四阪島の全体計画と「簡素であること」という命題の必然性

（1）にて、塩野門之助による製錬所移転のための四阪島全体計画についてその概略を述べ、（2）で住友春翠と日暮別邸について述べる。「簡素であること」がいかに日暮別邸にとって重要な命題であったかを記述するものである。

（1）四阪島の全体計画

四阪島の建設にあたり全体構想を練り上げたのは、再び住友に戻って来た塩野門之助であった。その全体計画を二つの視点から記述する。「二つの島を合体する」ということ、そしてもう一つは「働く人々のために」ということである。

四阪島は、家島・美濃島・明神島・鼠島・梶島の5島で構成されるが、このうち近接しており適度の大きさを持っていた家島と美濃島が、その間を埋め立てられ陸続きとされた。家島には製錬所、美濃島には社宅や学校が建設された。家島の製錬所工場群を建設するための造成残土が、両島間の埋め立てに利用されたのだった。一方、美濃島では元からあった地形に沿って人々が居住するエリアが形成され、緑の植生を活かす居住環境とされた。2つの島に個別の機能を持たせ且つ合体するという塩野門之助の全体構想であった。

別子銅山は住宅・学校はもちろんのこと病院や劇場まで備わった山上の都市であったが、四阪島の開発においても同じような思想が貫かれていた。「働く人々のためにどうあるべきか」という現代ではQuality of Lifeと呼ばれる考え方である。明治34年（1901）には私立の住友四阪島尋常小学校が設置され、大正9年（1920）には生徒数1,000人を

数えた。島の人口は、大正時代に最大5,500人を超え、昭和30年代においても4,000人近くに上っていた。工場に最も近い位置には病院が設置され、美濃島の高台には大山祇神社が祀られた。また中学校・保育園・グラウンドのほか駐在所や葬祭場まで備わった島であった。

四阪島製錬所の全体構想を託された塩野門之助は、日が暮れるのも忘れて美濃島の小高い丘に座し、煙害に影響を及ぼす風向きや燧灘（ひうちなだ）と呼ばれる海域の潮の流れを見つめ全体構想を練ったと伝わっている。その丘が「日暮らしの丘」と呼ばれるようになった。正式には住友別子鉱業所接待館と呼ばれた建物が日暮別邸と呼ばれるようになったのは、この「日暮らしの丘」という名に由来する。塩野は、明治24年に起きた足尾の山林荒廃による大水害で妻子を失っていた。翌年の伊庭貞剛宛の手紙では別子鉱山への帰還を懇願していたが、日暮らしの丘に佇む塩野の胸中には様々に去来するものがあっただろう。別子鉱山においても明治32年8月、台風の襲来により別子大水害が発生し、山内で513名の死者と別子鉱山の大半の施設を失う大災害が発生している。春翠は、ただちに別子鉱山に急行して死者を弔い、遺族や負傷者を慰めるため手許金から2万円あまりを拠出した。また罹災した地域住民に多額の米穀を支給している（*4）。鉱山の燃料確保のための森林伐採による大水害の危険性は常に存在していたのであった。



(図6-14) 別子銅山記念館に展示されている四阪島全体模型 赤丸の位置が日暮別邸

(2) 住友春翠と日暮別邸

春翠は、四阪島の工事期間中も足しげく現場を視察し、製錬所の稼働後も四阪島を訪れ製錬作業を視察していた。その拠点として建てられたのが、明治39年(1906)に竣工した日暮別邸だった。亜硫酸ガスがたなびく四阪島に住友家別邸を建設することは、家長自らが住友の命運を賭けた製錬所現場の島に立つことを意味していた。他の財閥では考え

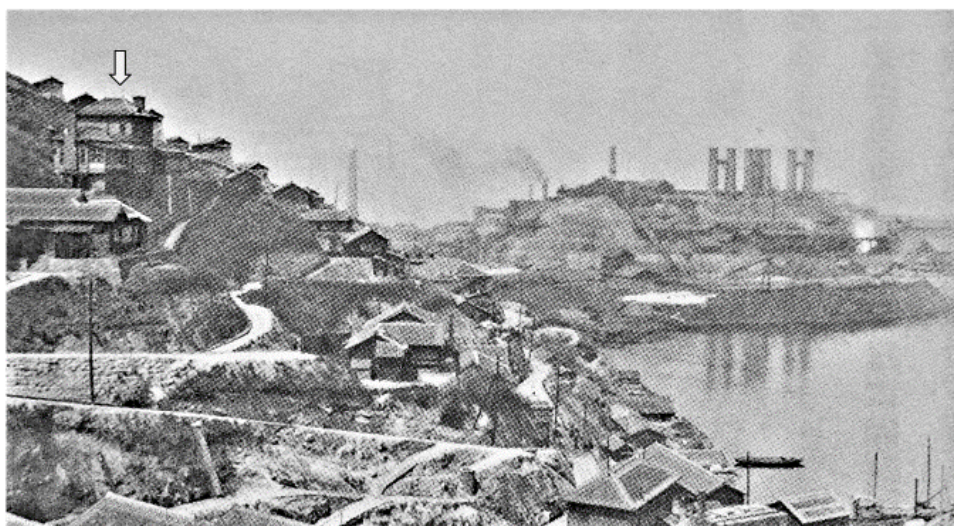
られないことだっただろう。日暮別邸の建築においては、贅を排した簡素さが求められたのは当然のことであった。

「時代の進運を察知し、世の進歩に遅れざるよう事業の興廃を行うこと」

「如何なる場合も、浮利に趨って軽率に進めてはならぬ」

「信用を重んじ、確實を旨とすべし」

上記の文は、明治24年(1891)に改正された住友家家法からの抜粋である。四阪島に製錬所を移すという決断は、まさしく住友家家法の実行したものであった。そして日暮別邸は、その象徴的存在であった。住友家の別邸としては、風光明媚な須磨海岸を望む須磨別邸や京都東山の麓に佇む鹿ヶ谷の有芳園などがある。しかしこの日暮別邸は、他の別邸とは建設主旨が全く異なる「簡素であること」が大命題となる建築であった。



(図6-15) 四阪島製錬所を望む、矢印の位置に建てられた日暮別邸 明治39年(1906)竣工

註

- (* 1) 末岡照啓著
「近代日本の環境問題と別子鉱山の煙害克服 - 四阪島移転と尾道会見・煙害補償協議会の意義 -」
『住友史料館報 第48号』所収 138～139頁
2017年 住友史料館
- (* 2) 前掲書 145～146頁

- (* 3) 前掲書 2 1 7 頁
(* 4) 末岡照啓著「実業家としての住友春翠」
公益財団法人泉屋博古館学芸部編『住友春翠 ー美の夢は終わらない』所収 1 1 頁
2 0 1 6 年 公益財団法人泉屋博古館

図版・写真

- (図 6 - 8) 住友史料館所蔵
(図 6 - 9) 『住友史料館報 第 4 8 号』 1 3 7 頁
(図 6 - 1 0) 同上 1 4 6 頁
(図 6 - 1 1) 住友史料館所蔵
(図 6 - 1 2) 筆者撮影
(図 6 - 1 3) 住友史料館所蔵
(図 6 - 1 4) 別子銅山記念館所蔵模型写真
(図 6 - 1 5) 住友史料館所蔵

6. 3 「簡素であること」と「厳しい敷地条件」に導かれた建築

本章の序で述べたように、野口を否応なく建築思考の純度を上げざるを得ない状況に追い込んでいた設計条件が、前節で述べた「簡素であること」と「厳しい敷地条件」すなわち四阪島という場所の持つ厳しい力であった。本章では、この二つの設計条件から野口がどのようにしてその条件を満たす建築を導き出していたのかを考察する。本節は以下の項目から構成する。

- 6. 3. 1 厳しい土地の持つ力から立ち上がった建築
- 6. 3. 2 燧灘を望む等高線に沿った平面計画とその骨格
- 6. 3. 3 動的な立体構成

6. 3. 1 では、野口がこの土地の持つ力をいかに読み込み、どのように建築をその中に据えたのかについて記述する。6. 3. 2 では、その場所の力から生み出された平面計画について述べ、さらにその平面計画の骨格について考察する。6. 3. 3 では、その外観が遠方からの視線を受け止める相互貫入的な立体構成となっていたことについて記す。

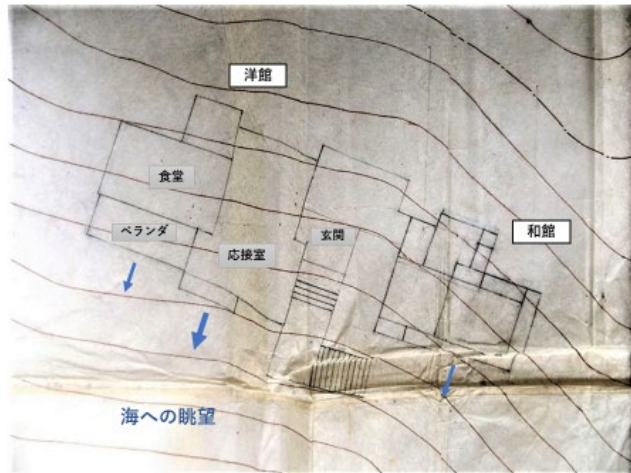
6. 3. 1 厳しい土地の持つ力から立ち上がった建築



(図6-16) 日暮別邸 2016年 住友金属鉱山(株)所蔵航空写真

本章の6. 1で、住友本店は、明治38年(1905)1月に野口を四阪島製錬所に出張させ日暮別邸の「日暮附近地形図」を作成させたと記した。「四阪島のどこに日暮別邸を建てるべきか?」という課題は、前述の日暮別邸建設に至る経緯を考えると、重要な意味を持つ。塩野が全体構想を練ったという「日暮らしの丘」とは、美濃島から製錬所の家島を望む丘のエリア全体のことであり、ある特定の場所ではなかった。そのエリアのどの場所に日暮別邸を建てるかを特定することが、野口に託された最初の課題だった。

敷地の特定には、敷地が本来持っている潜在的可能性を見出す能力が必要とされる。日暮別邸が建つ敷地には、四阪島の中でも絶妙の位置が選択された。春翠の製錬所視察の宿泊所であり接待館であった日暮別邸は、家島を正面に望むのではなく、眼前に広がる燧灘(ひうちなだ)と合わせて大きな視界が得られる地点に建てられた。急斜面に位置するため決して建設し易い敷地ではなかったが、船で新居浜から四阪島にアプローチする海上からは、最初に眼に入る象徴的な位置であった。この敷地の特定については、「土地の持つ力」を引き出す建築家・野口孫市の能力が如何なく発揮されていたといえよう。野口はこの周辺の地形について別子鉱業所土木課に測量図を作成させ、その図上に「このような建築がつくり出せる」と平面図スケッチを描いた。それが次頁の(図6-17)であった。



(上 図6-17) 野口孫市による敷地図の平面スケッチ

(左 図6-18) 平地から見上げた日暮別邸

等高線に沿って、横一文字の建築となっている。野口が伊庭貞剛邸の設計で編み出した、中央玄関を挟んで左右に洋館と和館を一直線に並べる平面型である。和館は後に増築されたが、竣工当時の和館と洋館の面積的な比率は、スケッチとはいえ既に正確なものだった。応接室や食堂のサンルームのように室内化されたベランダと和館の縁側からは、燧灘への眺望と家島の製錬所への眺望がほぼ7：3の割合で広がっている。既にこの平面スケッチを描いた時点で、「地形の持つ力」に触発された平面計画のコンセプトが確実に生み出されていたと考えられる。〈特定根拠②〉

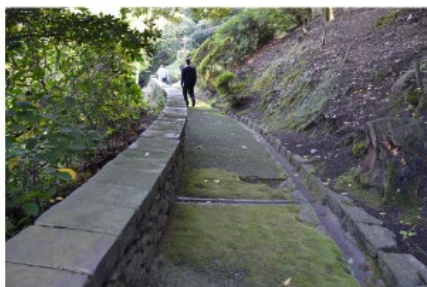
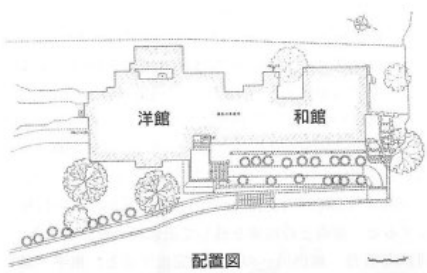
伊庭の後任の総理事であった鈴木馬左也をはじめとする住友本店の役員が、野口に敷地選定の上申を求め、測量図の上に描かれた野口の構想をもとに春翠の賛意を得て、図に「此辺 家長殿御撰定 接待館予定地」と朱で記入し敷地を決定した。

「場所の持つ厳しい力」に触発された日暮別邸の建築的な特徴が(図6-19)の竣工ときに撮影された写真に現れている。それは、日暮別邸が城郭のように巧みに築かれた石垣の上に据えられ、まるで大地から迫ってきたような迫力を持つ建築であった。日暮別邸の足元の煉瓦壁には、鉾山の鉾滓からつくられた「カラミ煉瓦」が使われていた。その色と大振りのサイズそして質感で強い表情を生み出すカラミ煉瓦は、まさしく大地から生まれた素材だった。この城郭のような日暮別邸の姿からは、野口には少年時代に毎日見上げた姫路城の石垣の残影があったのかもしれないとの思いがよぎる。



(図6-19) 別子銅山記念館所蔵 竣工当時の写真

日暮別邸は、急斜面の丘の中腹上部に位置しているため、平地部から昇らなければならない。その昇路アプローチのランドスケープ・デザインが秀逸だった。ある所は緩やかにカーブする大きな階段でゆったりと昇らせ、ある所では折り返しのある更に緩やかなスロープで上へ導いている。階段の段石と手摺には、カラミ煉瓦が用いられており、そのいぶし銀のような密実なテクスチャが、端正さと柔らかさをあわせ持つ豊かな印象を昇る人々に与えている。まるで自然の山道をカラミ煉瓦で造形化したようである。この土地が持つ力から野口が生み出した造形であるといえるだろう。



(左上 図6-20) 日暮別邸 ランドスケープ・デザイン図
 (右上・中上 図6-21) 同 エントランス・アプローチ
 (右下 図6-22) 同 カラミ煉瓦による地階外壁
 (左下 図6-23) 同 アプローチの小道

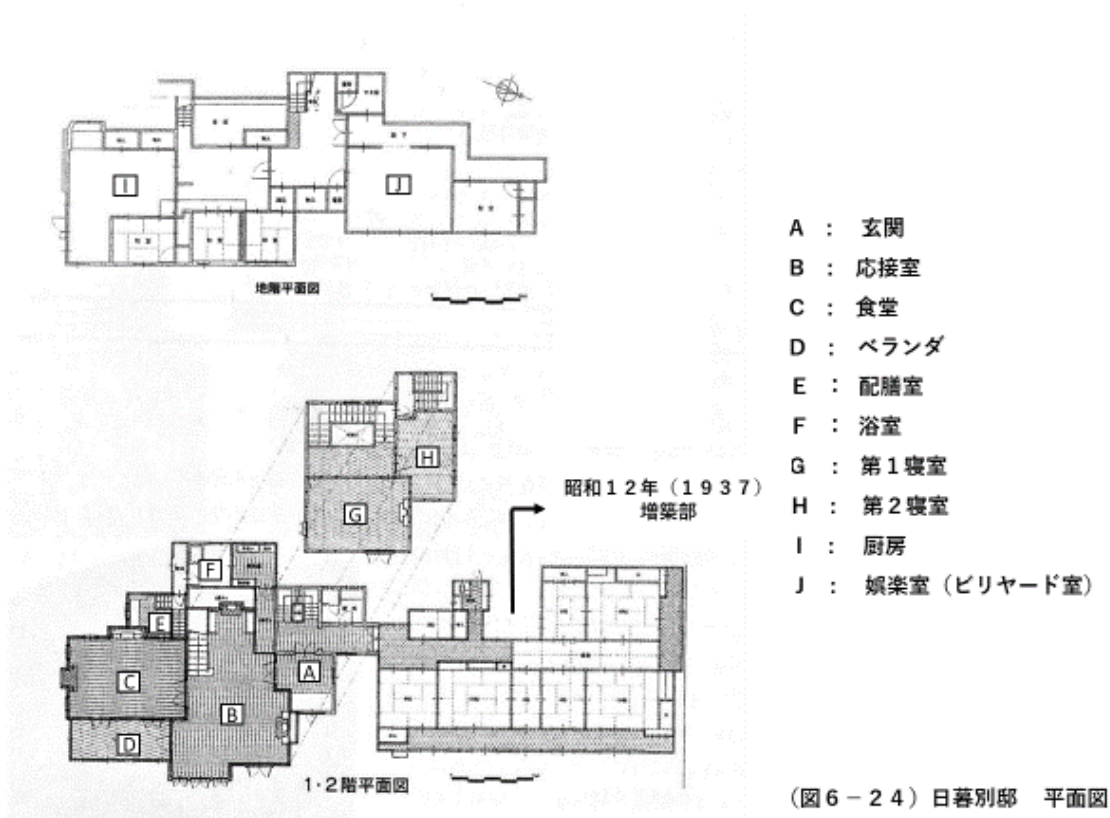
6. 3. 2 燧灘を望む等高線に沿った平面計画とその骨格

平成25年3月に愛媛県教育委員会が作成した『愛媛県の近代化遺産 ―近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書―』によると、日暮別邸は明治38年2月に着工され、明治39年(1906)11月に落成、木造2階建て地階鍛煉瓦造、床面積は地階を除き洋館部187㎡・和館部178㎡と記録されている(*1)。この報告書では、住友本店別子鉱業所土木課建築係の設計・施工と記されていた。しかし本論では、設計者は野口孫市以外あり得ないことを列挙し設計者を野口に特定することを目的の一つとしている。

日暮別邸の平面計画の特徴は、等高線に沿って一直線に並べられた、玄関を中央とする洋館・和館の配置にある。野口は、四阪島に出張した明治38年1月の前年に、伊庭貞剛邸を完成させていた。日暮別邸は、野口が伊庭邸の設計で創り出したこの平面型を等高線に合わせて応用したものだった。伊庭邸では和洋の館にそれぞれ和洋の庭園が配されていたが、日暮別邸の場合は、燧灘への眺望が直線配置の各室から望めることに特徴があった。

日暮別邸の食堂の海側には、全面ガラス窓で室内化されたベランダが設けられている。伊庭邸でも2階客間には同様のベランダがあり、また明治41年に完成した田辺貞吉邸でも同様のベランダが2階客間に設けられていた。この主要室につながる室内化されたベランダに、野口が洋館邸宅を設計する場合の傾向を見ることができる。〈特定根拠③〉

なお地階にビリヤード室があったのは、この時代の邸宅の一つの傾向を表していた。

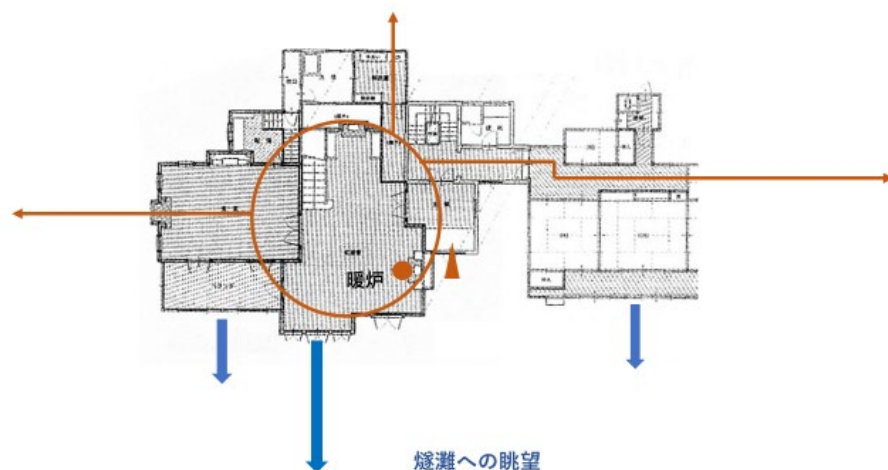


第4章の「4. 9. 1 須磨別邸以前もしくは同時代の洋風邸宅建築」で述べたように、この時代の洋館では、中央軸線のある対称性を基とする平面計画がこの時代の一般的な構成法となっていた。そのような時代にあつて、須磨別邸の自由な平面構成は画期的だつたと思われる。その従来の規範にとらわれず内部の合理性にのみ基づいてつくられる自由なプランニングをさらに厳しい敷地条件の下で展開したのが日暮別邸であつた。〈特定根拠④〉

下記(図6-25)の日暮別邸の平面ダイアグラムは、須磨別邸の平面ダイアグラム(図4-23)と伊庭貞剛邸の平面ダイアグラム(図4-68)を重ね合わせたようなものとなっている。須磨別邸と同様、ロータリーエンジンを思わせる中央部がここでは応接室となつてゐた。そして臍とでもいふべき位置にあるのが暖炉であつた。この暖炉の煙突は次項で述べる相互貫入的な立体構成の機軸的役割を果たしてゐ、この暖炉が日暮別邸を象徴すると言つても過言ではない。日暮別邸では、伊庭邸で創り出された洋館・和館の直線配置における和館ゾーンでの「軸線の折れ」も共通してゐた。

日暮別邸の平面計画の最大の特徴は、燧灘への眺望である。特に応接室に設けられた室内側からみればアルコーブのような見晴らしのためのベイ・ウィンドウは、外観上も重要なポイントとして扱われてゐた。また食堂のベランダの水平に伸びるガラス面も同様である。日暮別邸では、内部の自由で合理的なプランニングが外観を構成するモチーフとなつてゐた。

1906年の時代に、後年のモダニズムを予感させるものだつたといえるかもしれない。この地の持つ「海に臨む急斜面という土地の持つ力」が、下図の平面計画の骨格を野口に生み出させたのであつた。

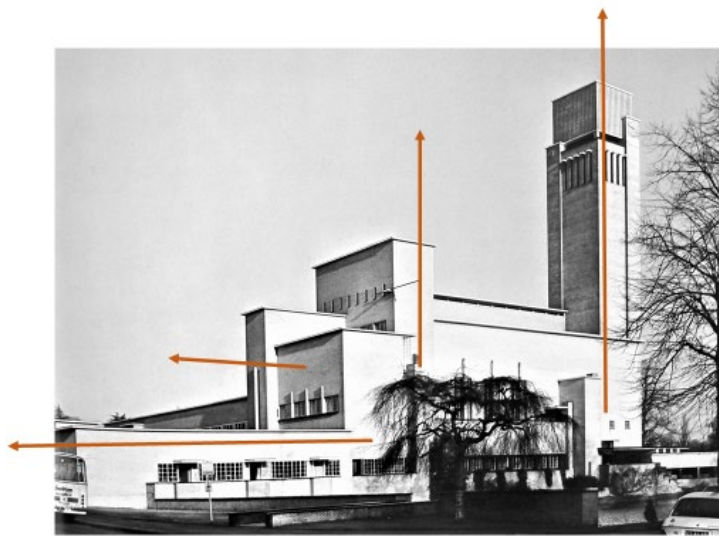


(図6-25) 日暮別邸の平面計画の骨格

6. 3. 3 動的な立体構成



(図6-26) 1906年 野口孫市設計 日暮別邸の相互貫入的立体構成



(図6-27) 1930年 W. M. デュドック設計 ヒルフェルスム市庁舎

上の(図6-27)は、オランダ構成主義をリートフェルトとともに代表する建築家W.M. デュドック(1884~1974)の設計による1930年に完成したヒルフェルスム市庁舎である。ここに見られる立体の量塊分節やそれらを組み合わせる相互貫入させるように動的に垂直・水平方向へ構成する手法は、1906年に完成した日暮別邸の建築構成(図6-26)にも見ることができる。

日暮別邸では、中央の暖炉の煙突が全体の動的構成の軸となり、応接室のベイ・ウィンドウの大きなガラス面が海への方向を示唆していた。また食堂のベランダでも横長のガラス

窓が水平方向の動きを示しており、和館の屋根も反対の水平方向への動きを示していた。この量塊の分節と動的構成の建築が成立するためには、立体構成と平面構成を同時に考える自由な平面プランニングが必須であった。城壁のような石の塊の上に据えられていた日暮別邸は、彫刻台に乗るオブジェのようにその立体構成的な効果が強調されていた。実現された日暮別邸の建築構成は、この時代では他に例を見ない、海からの視線を受け止める近代彫刻のように動的な形態とされていたのである。〈特定根拠⑤〉

日暮別邸は、ヒルフェルスム市庁舎に24年先駆けていた。ヨーロッパでの構成主義的な建築では、1929年にミース設計によるバルセロナ・パヴィリオンができていますが、1906年頃のヨーロッパでは、まだこのように明確な構成主義の建築は現れていない。ただ米国においては、野口とほぼ同時代のF.L.ライトが、1909年に完成したロビー邸に代表されるような立体構成を見せていた。

この動的な立体構成は、野口自らが考え出したものであったと思われる。野口の先見性がここに現れている。野口の海外情報収集力は抜きん出たものだったが、その中で先行潮流として知ったということはあるまいだろう。英国のマッキントッシュもヴォイジーも自由な平面計画と立体構成は行っていたが、これほど意図的な後年の構成主義を思わせる立体構成は見せていなかった。

註

- (*1) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 ―近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書―』 302頁
2015年 愛媛県教育委員会

図版・写真

- (図6-16) 住友金属鉱山株式会社所蔵
(図6-17) 筆者撮影
(図6-18) 住友史料館所蔵の図面に筆者が書き込み
(図6-19) 別子銅山記念館所蔵
(図6-20) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 ―近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書―』303頁
(図6-21) 筆者撮影
(図6-22) 同上
(図6-23) 同上

- (図6-24) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 一近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書一』303頁
- (図6-25) 同上図面に筆者書き込み
- (図6-26) 別子銅山記念館所蔵写真に筆者書き込み
- (図6-27) 阿部公正他筆『大系 世界の美術20 現代美術』 14頁
上記写真に筆者書き込み
1974年 学研

6. 4 日暮別邸の外観における工法と意匠

四阪島の丘の中腹上部に位置する日暮別邸は、その存在そのものが重要な意味を持っていた。外観とは「存在の意味を示すシンボル」である。ここでは、野口がどのように、四阪島・日暮別邸の存在意味をシンボルとして表し設計していたかについて記述する。次の四つの点から日暮別邸の外観の意匠と工法について述べる。

6. 4. 1 洋館の屋根
6. 4. 2 ベイ・ウィンドウ
6. 4. 3 洋館外壁の下見板張り
6. 4. 4 ガラス・ウォール
6. 4. 5 日暮別邸の設計と施工の体制

6. 4. 1 洋館の屋根

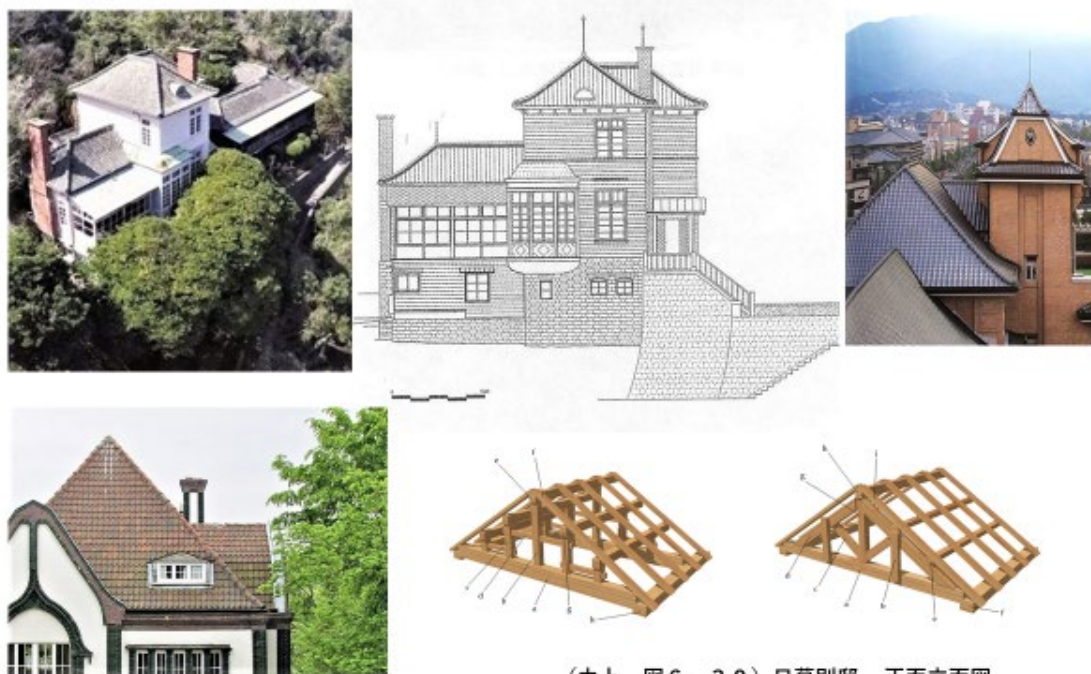
日暮別邸を最初に眼にするのは海上からである。四阪島のなかで日暮別邸は、新居浜港からやって来る船上の人々に最初のメッセージを送る位置にあった。なかでも、最初に見えるのは洋館の屋根である。野口はこの屋根の意匠に、創意を込めてドイツ屋根のような「そり」を持たせて設計していた。

野口が住友へ寄贈した図書目録の洋書のなかで、英語に次いで多くあったのがドイツ語の書籍と建築雑誌であった。そのなかには、“Ideen von Olbrich”（「オルブリッヒの理念」）という本があった。オルブリッヒは言うまでもなくペーター・ベーレンス（1868～1940）と同様、ムテジウスが主導するドイツ工作連盟にも加入しているユージェントシュティールの建築家である。当時のヨーロッパ知識人の注目を集め1901年に開村した「ダルムシュタットの芸術家村」の中心人物でもあった。その「ダルムシュタットの芸術家村」に自ら設計し1901年に自邸を建てたのがペーター・ベーレンスだった。（図6-29）にその屋根部分の拡大写真を示しているが、ドーマー窓のある屋根の先端下部で緩やかな曲線が施され屋根勾配に「そり」を持たせていた。ドイツ民家に時折みられる屋根意匠である。

ムテジウスが1910年に完成した邸宅建築でも同様の意匠が用いられていた。日本では、若い時期にドイツの影響を強く受けていた吉田鉄郎の設計による旧・京都中央電話局上京分局の屋根でこの手法が用いられている。(図6-31)で示すとおりである。その竣工は、日暮別邸の18年後の1924年だった。

野口は、吉田よりもはるかに早い時代に、日暮別邸の屋根にドイツ的な香りのするこの屋根意匠をドーマー窓とともに用いていたのである。日本人建築家としては、ほぼ最初の事例であったと思われる。この時代にこの意匠をとり入れることができたのは、野口以外には考えられない。〈特定根拠⑥〉

日暮別邸の洋館の小屋組には和風の小屋組が用いられていた(*1)。洋館に和風の小屋組が用いられているのは意外であるが、和風の小屋組は屋根に自由な「そり」を持たせるには最適の工法である。日本の伝統的建築物に見られる屋根の自由な「そり・むくり」は和風の小屋組であるからこそできた屋根の意匠であった。野口は、洋館であるにもかかわらず和風の小屋組を用いたのである。ここにも野口の「自在さ」が現れている。



(左上 図6-28) 日暮別邸の屋根

(左下 図6-29) ダルムシュタット芸術家村にある
ペーター・ペーレンス設計の自邸(1901)

(中上 図6-30) 日暮別邸 正面立面図

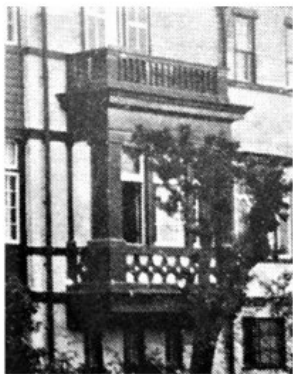
(右上 図6-31) 1924年竣工の吉田鉄郎設計
旧・京都中央電話局上京分局

(右下 図6-32) 左：和式小屋組 右：洋式小屋組

6. 4. 2 ベイ・ウィンドウ

海からの視線で屋根の次に眼がゆくのは、大きなベイ・ウィンドウである。ベイ・ウィンドウを主要立面の重要ポイントとして大きく扱うのは、下の(図6-34)の志立鉄次郎邸でも同様だった。志立邸の建設年は不明であるが、志立が住友を辞す以前であろうから、日暮別邸の方が先だったことは確実と思われる。野口は、日暮別邸で考え出したこの手法を志立邸で応用したのだろう。両者のベイ・ウィンドウの外観下部には、同じようなハーフ・ティンバー様式の木組による装飾パターンが共通して見られる。〈特定根拠⑦〉ベイ・ウィンドウは西洋建築の歴史のなかで、平滑な大きな壁面に象徴的アクセント・モチーフとして用いられる例が多い。

日暮別邸のベイ・ウィンドウの曲線を描く屋根は緑青銅板葺きとなっており、ベイ・ウィンドウ下部は漆喰プラスター・スタッコ仕上げで丁寧に曲面を塗り上げられている。このベイ・ウィンドウの特徴は、1・2階の外壁面からはみ出してかみ合うように取り付けられていることである。その立面上のアクセント性をより強調したものになっている。ただその室内側には、2階の隅柱が下りてきておらず、構造的には2階柱を岡立ちにするなどかなり工夫が凝らされたものとなっていた。このベイ・ウィンドウにかけた野口の意気込みが伝わってくるような意匠・構造デザインである。前項の和風小屋組みといい、このベイ・ウィンドウの構造処理といい、単純そうな形であるが構造的には巧みな工夫が加えられていた。



(図6-33) 日暮別邸
ベイ・ウィンドウ廻り立面図



(左上 図6-34)
志立鉄次郎邸 ベイ・ウィンドウ
(左下 図6-35)
日暮別邸 ベイ・ウィンドウ下部装飾
(右上 図6-36)
応接室 ベイ・ウィンドウ内部

6. 4. 3 外壁の下見板張り

日暮別邸の「簡素であること」という命題を表していたのが下見板張りペイント塗装の外装である。須磨別邸の本館では、当時高級仕上げであった輸入メタルラス下地モルタル左官

仕上げだったが、附属屋では外壁に下見板張りペイント塗装が用いられていた。それは、春翠の子弟と家庭教師が居住する附属屋は、迎賓などを目的とする本館に比べ簡素であるべしという意図からだった。同じように「簡素であること」を命題とする日暮別邸でも下見板張りが用いられた。

第1部で述べたように野口は、札幌の電話交換局の現場近くにあった国家の迎賓施設である豊平館を頻繁に目にしていたはずである。下見板張りの技術は、最初は米国技術者の指導のもとで北海道から始まり、日本中に広がっていた。明治13年の時点で開拓使営繕課の技術レベルはかなり高い水準に達していたことを豊平館は示している。日暮別邸の軒下部の持ち送りのリズミカルな装飾は、豊平館でも同様に見ることができる。国家的迎賓施設である豊平館では、さらに切妻面すなわちgableに豊かな装飾が施されていた。

日暮別邸ができる明治30年代には、日本中に下見板張りが普及し、施工する住友本店別子鉱業所土木課建築係にとってもなじみのある工法となっていた。そのため、野口も安心して設計ができたと思われる。

なお日暮別邸の下見板張りの上のペイントは、周辺の緑や他の施設群のなかで映える、微妙に赤みがかった色で塗装されていた。豊平館ではスカイブルーが用いられており、この時代、特に北海道の重要建物の下見板張りには、それぞれ微妙で特徴的な色合いが用いられることが多かった。



(図6-37)
札幌 豊平館
明治13年(1880)
開拓使工業局営繕課
安達喜寿設計



(左 図6-38) 日暮別邸 1906年
(右 図6-39) 須磨別邸 附属屋 1903年

6. 4. 4 ガラス・ウォール

この明治30年代後半の洋風建築では、縦長の様式的な窓が一般的であった。野口は、伊庭邸2階客室前の室内化したベランダの立面に、ガラス面を横方向に大きく用いることを考え出している。これを日暮別邸ではさらに発展させ、食堂前のベランダやベイ・ウィンド

ウでこのガラス・ウォールを構成的に用いている。動的な立体構成の一要素としてもガラス・ウォールは有効に使われていた。野口はその後、志立邸においてさらにこの手法を発展させ、また明治41年に完成した田辺貞吉邸においても確立した手法として同様のデザインを見せていた。この時代にガラス・ウォールを一つの重要なデザイン要素として扱うのは、野口のデザイン手法であったといえるだろう。伊庭邸・日暮別邸・田辺邸で共通していたのは、主要室に連続した見晴らしのよいベランダの外壁に用いていることだった。室内側で開放的で快適な空間にするとともに、立面でも水平方向の動きを示唆する重要なデザイン要素とすることができた。この水平方向のガラス意匠の隣には常に垂直方向のデザイン・モチーフが組み合わされている。伊庭邸・田辺邸では切妻屋根のある垂直方向に安定した立面と組み合わせており、日暮別邸や志立邸では、ベイ・ウィンドウのアクセント・ポイントと組み合わせた立面構成としていた。〈特定根拠⑧〉

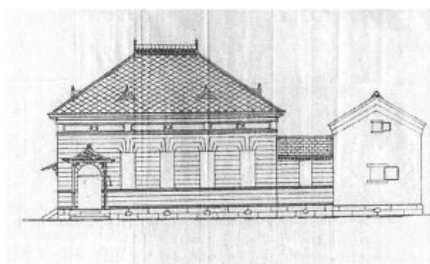
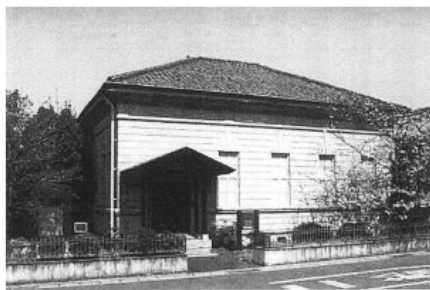


(左上 図6-40) 日暮別邸 1906年
(右上 図6-42) 志立鉄次郎邸

(左下 図6-41) 日暮別邸ベランダ内部
(右下 図6-43) 伊庭貞剛邸 1904年

6. 4. 5 日暮別邸の設計と施工の体制

日暮別邸の施工は住友本店別子鉱業所土木課建築係によりなされた(*2)。別子鉱業所土木課は、(図6-46)の東平(とおなる)選鉱場をはじめ明治45年に完成した西洋中世の教会のような素朴な力強さのある旧端出場(はでば)水力発電所など多くの優れた土木構造物や建造物を設計施工しており、その設計施工能力には高いものがあつた。日暮別邸が工事困難な急斜面に石垣を築きその上に建設され110年以上にもわたり厳しい風雨に晒されながらも今日まで建ち続けてきたことに、住友本店別子鉱業所土木課建築係の高い土木建築技術が示されている。野口はこの万全の施工体制があつたからこそ自由な設計ができたと思われる。



(左上下 図6-45) 旧住友銀行新居浜支店
設計：長瀬兵馬 施工：住友本店別子鉱業所土木課建築係
明治34年(1901)

(右上 図6-46) 東平(とうなる)選鉱場
設計施工：住友本店別子鉱業所設計部臨時建築部・土木課
明治37年(1904)

野口が設計を主導したとしても実際に配下で図面を書き工事現場で監理業務を行った担当者があるはずである。その人物を長瀬兵馬と推定する。長瀬兵馬は慶応元年(1865)高知県香美郡(現・南国市)に生まれ、三菱合資会社営繕課主任であつた叔父のもとでコンドルが洋館を設計した三菱深川別邸の工事に大工として携わつていた。和館もあつたため、長瀬がどちらの建物を担当したかは不明であるが、その後明治27年には三菱合資会社若松支店、明治28年に筑豊工業組合事務所を完成させ、明治31年(1898)4月に住友に入社し、上の(図6-45)の住友銀行新居浜支店を設計し明治34年に竣工させた。これらは明らかに洋館であるため、長瀬は洋館の建築的素養を三菱深川別邸で学んだと推測する。その後明治35年(1902)に住友本店臨時建築部所属となり前章の(図5-76)で紹介した住友銀行川口支店を野口の下で担当し明治36年に完成させている。その後の長瀬について判明しているのは、明治39年11月に住友を退社したことである(*3)。

日暮別邸は明治38年1月から設計が開始され、明治39年11月に竣工した。住友銀行新居浜支店の施工は日暮別邸と同じく住友本店別子鉱業所土木課建築係によってなされていたため、野口は別子の状況を熟知する長瀬を設計・現場担当にあてたと考える。長瀬は日暮別邸が完成すると同時に住友を退社した。現在に残る旧・住友銀行新居浜支店（現・住友化学歴史資料館）を一見しても長瀬の高い技量をうかがうことができる。野口は良き部下に恵まれ、日暮別邸を完成したのであろう。

註

- (* 1) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 一近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書一』 302頁
2015年 愛媛県教育委員会
- (* 2) 前掲書 303頁
- (* 3) 前掲書 301頁

図版・写真

- (図6-28) 住友金属鉱山株式会社所蔵
- (図6-29) Wikipedia 「ペーター・ペーレンス」 free media repository
- (図6-30) 『愛媛県の近代化遺産 一近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書一』 303頁
- (図6-31) 鈴木博之・増田彰久・小澤英明・オフィスビル総合研究所著
『都市の記憶』 201頁
2002年 白揚社
- (図6-32) Wikipedia 「木造軸組構法」 free media repository
- (図6-33) 『愛媛県の近代化遺産 一近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書一』 303頁
- (図6-34) 『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移築再生保存調査報告書より－』 2頁
- (図6-35) 筆者撮影
- (図6-36) 同上
- (図6-37) 同上
- (図6-38) 同上
- (図6-39) 公益財団法人泉屋博古館所蔵模型写真

- (図 6 - 4 0) 住友金属鉱山株式会社所蔵
- (図 6 - 4 1) 筆者撮影
- (図 6 - 4 2) 『旧田辺貞吉の建築を巡って - 旧田辺邸移築再生保存調査報告書より -』 2 頁
- (図 6 - 4 3) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図 6 - 4 4) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 20
1980 Rizzoli
- (図 6 - 4 5) 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 - 近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書 -』 3 0 1 頁
2 0 1 5 年 愛媛県教育委員会
- (図 6 - 4 6) 筆者撮影

6. 5 日暮別邸の内部意匠

日暮別邸の設計の重要な命題が「簡素であること」だった。日暮別邸では、同じ住友家別邸でありながら須磨別邸の贅を尽くした様式的な内部意匠とは全く異なるものでなければならなかった。伊庭貞剛邸も須磨別邸に比べればはるかに簡素なものだったが、「簡素であること」とは、日暮別邸はさらにその極限にまで設計者を追い込むような命題であった。

本来、装飾には豊かな意味が込められている。様式的な装飾は、それまでの西洋文明のなかで築き上げられた共通の文化的規範として、人々のライフスタイルの精神的な在りどころになっていた。様式的な贅を尽くす装飾を用いないとしても、装飾を削ぎ落すことでその豊かな意味まで削ぎ落すことになれば、建築が本来持つべき豊かな場所性を失い味気ないものになってしまう。新たな装飾性への模索が不可欠だった。この節では、内部意匠の観点から空間の豊かさを追求しようとした野口の試みに着目する。すなわち新たな装飾性への模索である。

野口が、日暮別邸の内部意匠設計で、その新たな装飾性への模索の手がかりとしたのが英国のアーツ・アンド・クラフツの新しい潮流であり特にグラスゴー派と呼ばれるマッキントッシュであったと考えられる。グラスゴーは、英国産業革命の母体の一つとなった都市であり、合理的な思考をもとに重工業が躍進していた都市であった。そこではマッキントッシュを育んだ近代という社会的背景が生まれていた。四阪島も鉱工業の小さな都市であり、同じような近代の社会的背景が生まれていた。

以上の観点から次の項目について、野口が何を考えて内部意匠の設計をしていたのかについて考察する。なお日暮別邸が野口の設計であることを示す特徴も、内部意匠には色濃く現れていた。〈特定根拠〉番号で示す。

- 6. 5. 1 日暮別邸の核としての応接室と暖炉
- 6. 5. 2 階段デザインとマッキントッシュ
- 6. 5. 3 イングルスック
- 6. 5. 4 食堂入口扉枠頂部および食堂暖炉デザインとマッキントッシュ
- 6. 5. 5 食堂の家具デザインとマッキントッシュ
- 6. 5. 5 天井デザイン

6. 5. 1 日暮別邸の核としての応接室と暖炉

日暮別邸のすべての部屋への起点となっているのが応接室である。玄関・食堂・ベランダそして2階へ上る吹抜けの階段室に、(図6-25)で示したロータリーエンジンのような中央部の位置を占め各方向の空間に連続しながら各室につながっている。また(図6-36)で示したように、ベイ・ウィンドウから四阪島製錬所と燧灘への眺望が開けているため、四方に視線が広がる伸びやかな空間となっている。

応接室の伸びやかさの中で重心となっているのが、暖炉の存在である。暖炉は、西洋建築の長い歴史を通じて、その部屋の格式やその部屋に込められた意味を象徴的に表す役割を担ってきた。須磨別邸の英国ルネサンス風マントルピースの意匠は「須磨別邸とは何か」という存在意義を雄弁に示す存在だった。この日暮別邸の応接室の暖炉マントルピースの意匠も、「日暮別邸とは何か」ということを雄弁に物語っている。それは、当時の米国富裕層が別荘として山中に建てたロッジに見るような“Stone Fireplace”だった。彼らは大都市内に構えたアメリカン・ボザール風邸宅の様式的なマントルピースとは正反対の、野性的で簡素な力強さを示すこのマントルピース・デザインを別荘に好んで用いた。野口は、簡素さが求められた日暮別邸で、この“Stone Fireplace”のマントルピース・デザインを選んだのである。



(左 図6-47) 日暮別邸 応接室
階段踊り場より俯瞰

(右 図6-48) 同 暖炉マントルピースと
玄関を望む

壁の羽目板張の鏡板には杉皮を用いている。西洋建築での鏡板にはマホガニーやローズウッドなど高級木材を用いるのが常識であるが、ここでは和風建築の外壁などでよく用いられる杉皮が使われた。日光市が記念公園として公開しているレーモンドが設計し1927年に建てられた中禅寺湖畔のイタリア大使館別荘でも、壁と天井には杉皮が用いられ暖炉は“Stone Fireplace”となっている。この建築は日暮別邸の21年後であるが、西洋人近代建築家であるレーモンドの材料選択眼を、野口はすでに日暮別邸で発揮していたのである。

〈特定根拠⑨〉

なお天井やマントルピースに取り付けられた照明器具の簡素な意匠も、須磨別邸の凝った意匠とは正反対の、大振りで大膽さのなかに優雅さを感じるものとなっている。

6. 5. 2 階段デザインとマッキントッシュ



(上 図6-49) 須磨別邸
広間および階段室
(右 図6-50) 日暮別邸 階段室



(上 図6-51)
マッキントッシュ設計
グラスゴー美術学校 階段室
1899年

上の(図6-49)で示した1903年に完成した須磨別邸の階段室と、ほぼ同年代の1906年に完成した(図6-50)の日暮別邸の階段室を比較することで、共通点と相違点から日暮別邸で行った野口のデザインの考え方を辿ることができる。

共通点は、階段室がそれぞれの建物の最も主要とする中央部に連続していること、階段室を吹抜けとし上部から採光していること、そしてコの字型に廻りながら上昇していることだった。相違する点は、須磨別邸が大きなステンドグラスから採光し階段手摺の親柱や手摺子が凝った意匠の木彫であるのに対し、日暮別邸ではただのガラス窓から採光し、階段手摺の親柱も手摺子もシンプルな意匠となっている点であった。この装飾が削ぎ落された日暮別邸の階段室には、野口の原形的な「階段室のあるべき様」が現れているといえるだろう。

その原形的な階段のコンセプトは、1899年に完成したマッキントッシュ設計のグラスゴー美術学校の最も主要な中央階段にも同様に現れていた。日暮別邸の野口の設計した階段には、マッキントッシュの階段に通じるものがある。それは、細かなピッチで並ぶシン

プルな手摺子デザインに加え、特に手摺子親柱のデザインから感じられる。その床から緩やかなカーブを描いて立ち上がる姿や下の(図6-55)で示す親柱頂部のデザインは、マッキントッシュが設計で頻繁に用いた特有の曲線の使い方を思い浮かばせる。その一例として、マッキントッシュ設計により1899年に完成した Queen Cross Church の装飾例を(図6-56)に示した。

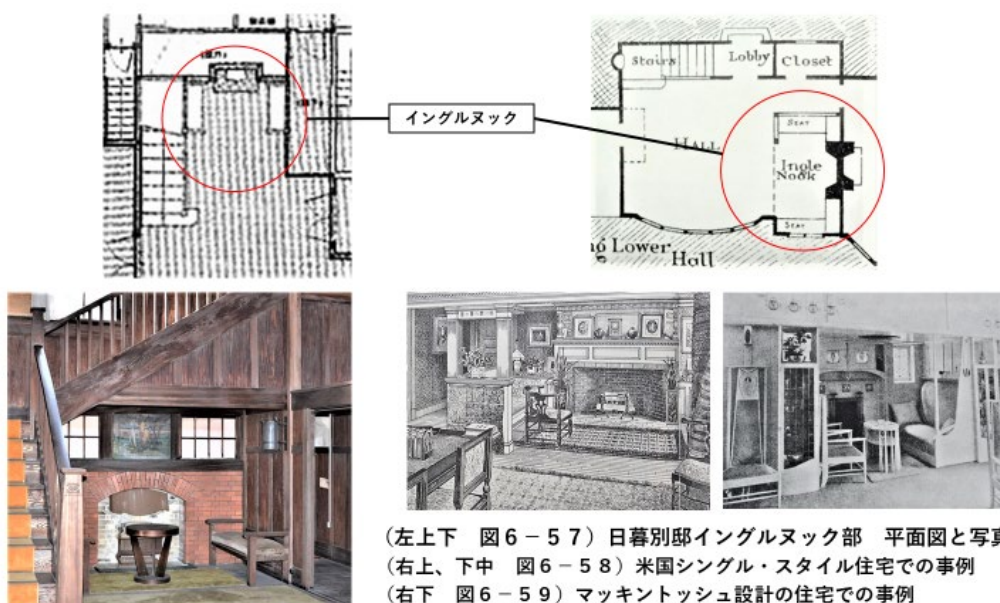
野口の原形質的な「階段室のあるべき様」は、伊庭貞剛邸も田辺貞吉邸も同じように現れていた。野口の階段デザインの特徴といえるだろう。〈特定根拠⑩〉



(左端 図6-52) 伊庭貞剛邸の階段
 (左から2番目 図6-53) 田辺貞吉邸の階段
 (右から2番目 図6-54) 日暮別邸の階段
 (右上 図6-55) 日暮別邸の階段手摺親柱の装飾

(右下 図6-56) マッキントッシュ設計
 Queen Cross Church(1899)に見られる装飾

6. 5. 3 イングルヌック



(左上下 図6-57) 日暮別邸イングルヌック部 平面図と写真
 (右上、下中 図6-58) 米国シングル・スタイル住宅での事例
 (右下 図6-59) マッキントッシュ設計の住宅での事例

野口は卒業論文では、“inglenook”という言葉は使っていないが、明らかに“inglenook”の空間をイメージした“Fire place in a recess is admired by English and windows are often introduced in the side of the recess, this is said to be combination of a fire place with a bay window and of course have more home-like character than fire place or bay window alone.”という記述が見られた。日本の伝統的民家では囲炉裏端が「居心地のよい場所」となってきたが、英国では、伝統的にイングルヌックと呼ばれる暖炉を囲む小さなアルコーブ空間が「居心地のよい場所」とされてきた。イングルヌックは、その住宅の主要となる大きな空間に連続して設けられる。日本では、大正期の後半から昭和初期にその居心地のよさが見出され、文人など知識人の邸宅で採り入れられた事例はあるが、明治期では珍しい(*1)。

日暮別邸では、英国の住宅の伝統であるイングルヌックが、(図6-57)に示すように採り入れられていた。暖炉の上には油絵がはめ込まれている。階段の下にこのようにイングルヌックを取る方式は英国でも頻繁に行われており、日暮別邸のイングルヌックは典型的なものであった。(図6-58)の事例は、マサチューセッツ州にある“Shingleside”と名付けられたA.リトル設計の1881年に完成した邸宅のイングルヌックである。米国東海岸でも、英国の伝統の香りがする居心地のよいイングルヌックは、しばしば採り入れられていた。また(図6-59)の事例は、マッキントッシュが重要な施主の一人のために設計した1907年完成と推定されている“Warndorfer Music Salon”のイングルヌックである。

第4章の記述のなかで、須磨別邸2階寢室のイングルヌックや伊庭貞剛邸・田辺貞吉邸のイングルヌック風の暖炉アルコーブについて触れたが、下の(図6-60~62)はそれらのイングルヌックを並べたものである。英国由来のイングルヌックも野口の邸宅設計の特徴の一つだった。〈特定根拠①〉



(左 図6-60) 須磨別邸
明治36年 1903年



(中 図6-61) 伊庭貞剛邸
明治37年 1904年

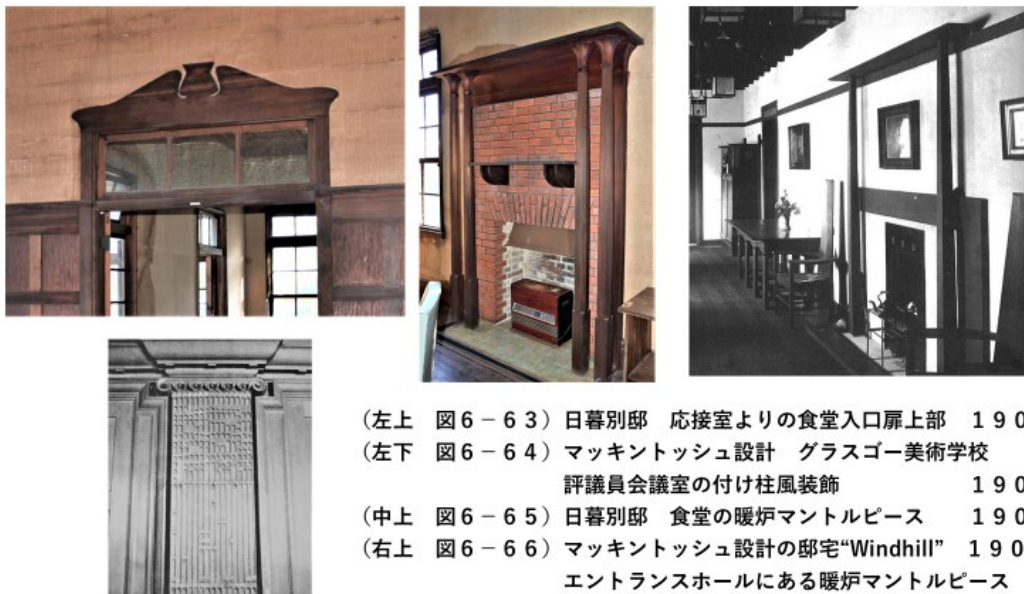


(右 図6-62) 田辺貞吉邸
明治41年 1908年

6. 5. 4 食堂入口扉枠頂部および食堂暖炉デザインとマッキントッシュ

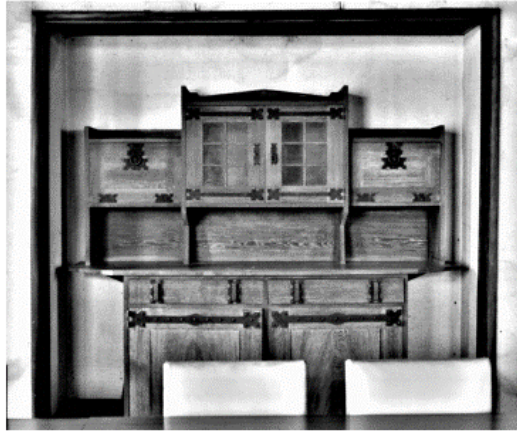
下の(図6-63)は、応接室から食堂に入る入口扉上部のブローケン・ペディメントのような装飾である。このブローケン・ペディメントにはレリーフ彫刻等は施されておらず、一枚の厚板を平面的に切り抜いただけのものとしている。この古典様式のモチーフをグラフィカルに平面化した装飾は、70年後の米国のロバート・ヴェンチューリを想起させるものがある。共に、古典様式の装飾の持つ記号性のみを純化し、インパクトのある装飾表現としたものだった。マッキントッシュは、野口ほど古典様式の記号性のみを取り出した装飾表現は行っていないが、(図6-64)で示すグラスゴー美術学校の評議員会議室の壁の付け柱では、イオニア式柱頭を平板化したグラフィカルなレリーフとして装飾化していた。三者ともに、同じような合目的性もしくは抽象性に裏打ちされた造型精神から発露したものだったと思われる。〈特定根拠⑫〉

日暮別邸で、応接室と並びメインの部屋となっているのが食堂である。須磨別邸の大食堂の写真は第4章の(図4-49)で示したが、その暖炉マンテルピースでは凝った古典様式の装飾が施されていた。一方(図6-65)の食堂暖炉マンテルピースは、野口のそれまでの暖炉マンテルピースに見られない画期的なデザインとしていた。(図6-66)でマッキントッシュの暖炉マンテルピース・デザインの事例を示しているが、このようなマンテルピース・デザインはヴォイジーも行っていた。野口は全く同時代の英国の新潮流デザインによるマンテルピース・デザインを行っていたのである。〈特定根拠⑬〉



(左上 図6-63) 日暮別邸 応接室よりの食堂入口扉上部 1906年
 (左下 図6-64) マッキントッシュ設計 グラスゴー美術学校
 評議員会議室の付け柱風装飾 1909年
 (中上 図6-65) 日暮別邸 食堂の暖炉マンテルピース 1906年
 (右上 図6-66) マッキントッシュ設計の邸宅“Windhill” 1901年
 エントランスホールにある暖炉マンテルピース

6. 5. 5 食堂の家具デザインとマッキントッシュ



(図6-67)
日暮別邸の食堂 飾り棚 1906年



(図6-68)
マッキントッシュ設計の“Windhill”にある
“Kimono”と名付けられた飾り棚 1901年

上の(図6-68)はマッキントッシュ設計の“Kimono”(着物)と名付けられた飾り棚である。“Windhill”の邸宅で施主の子供のための玩具を収納するための飾り棚としてデザインされた。まるで衣紋掛けに架かった日本の着物のようなデザインだった。

(図6-67)の日暮別邸食堂の飾り棚のデザインは、この“Kimono”に触発された可能性が高い。野口がどのようにして“Kimono”のデザインを知ったのかは不明であるが、ここには明らかな引用が認められるだろう。日暮別邸食堂の飾り棚は、田辺貞吉邸の食堂飾り棚と同様に壁のニッチに嵌め込まれた家具であるが、第4章(図4-83)に示したとおり田辺邸では食堂飾り棚がニッチのなかに造作されていた。一方、日暮別邸ではニッチのなかに置き家具としてデザインされていた。ただ家具金物は、田辺邸と日暮別邸で共通するものが使われている。〈特定根拠⑭〉

6. 5. 5 天井デザイン

次頁の(図6-69)は日暮別邸の食堂の天井デザインを示し、(図6-70)は伊庭貞剛邸の2階客室の天井デザインを示している。いずれも木組の吹き寄せ格天井である。伊庭邸では天井格子高さの見込み寸法が比較的深いものとなっており、日暮別邸では見込み深さが浅いものとなっている。日暮別邸全体に共通するデザインの考え方からすれば、見込深さ寸法の違いは当然のことであつたろう。いずれも野口がよく使う天井デザインだった。なお田辺邸の食堂では、折り上げ格天井が用いられていたが、こちらは木組みを見せるのではなく漆喰プラスターで塗り込む仕上げとしていた。第4章(図4-82)に示したとおりである。その格子間はプラスターによるレリーフ装飾が施されていた。

野口はどのプロジェクトでも天井デザインを重視して設計していた。須磨別邸の豪華な天井デザインから、田辺邸・伊庭邸の順で簡素になっているが、日暮別邸の天井が最も簡素なものとなっている。そこに日暮別邸の「簡素であること」という命題が現れていたといえるだろう。〈特定根拠⑮〉



(図6-69) 日暮別邸 食堂の天井意匠



(図6-70) 伊庭貞剛邸 2階客室の天井意匠

註

(* 1) イングルヌックは、大正期に入り知識人により自邸等に導入されたが、下記のその事例を記す。

- ① 建築家・西村伊作自邸（現・西村伊作記念館）
設計者：西村伊作 竣工年：大正3年（1914）
所在地：和歌山県新宮市
- ② 大山崎山荘 加賀正太郎別荘
設計監修：加賀正太郎
イングルヌックのある第1期工事の竣工：大正6年（1917）
所在地：京都府大山崎町
- ③ 元・清田龍之介邸のちに文人の山本有三邸となった。現・三鷹市山本有三記念館
設計者：不明
竣工年：大正15年（1926）
所在地：東京都三鷹市

図版・写真

- (図6-47) 筆者撮影
- (図6-48) 同上
- (図6-49) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図6-50) 筆者撮影
- (図6-51) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 26
1980 Rizzoli
- (図6-52) 筆者撮影
- (図6-53) 坂本勝比古著 増田彰久撮影
『日本の建築 明治・大正・昭和 (5)商都のデザイン』 巻頭写真②
1980年 三省堂
- (図6-54) 筆者撮影
- (図6-55) 同上
- (図6-56) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 31
1980 Rizzoli
- (図6-57) 平面図： 愛媛県教育委員会編
『愛媛県の近代化遺産 —近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書—』 303頁
2015年 愛媛県教育委員会
写真： 筆者撮影
- (図6-58) Vincent J. Scully, Jr. “The Shingle Style and The Stick Style” fig.73
1955 Yale University Press
- (図6-59) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 67
- (図6-60) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図6-61) 筆者撮影
- (図6-62) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図6-63) 筆者撮影
- (図6-64) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 28
- (図6-65) 筆者撮影
- (図6-66) Edited by Jackie Cooper “MACKINTOSH ARCHITECTURE” p.p. 35
- (図6-67) 筆者撮影
- (図6-68) 鈴木博之監修『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』 119頁
1985年 社団法人国際芸術文化振興会
- (図6-69) 筆者撮影
- (図6-70) 同上

6. 6 日暮別邸の設計に顕著に現れていた「編集的折衷」について

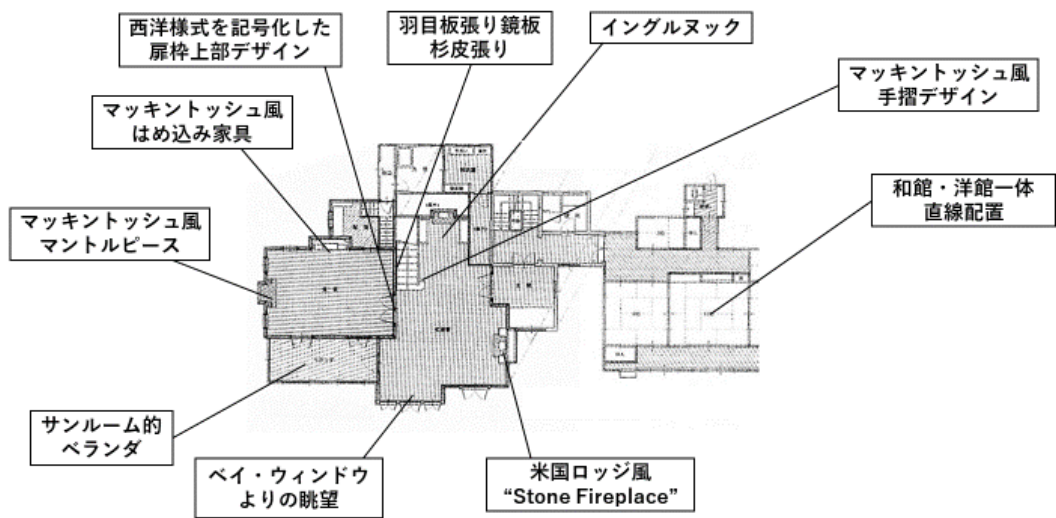
西洋では様々な建築様式があったが、各様式は様々なデザイン要素をまとめた総体として統御する建築的な統辞法といえる。中之島図書館で野口は西洋古典様式的設計手法を再構成し組み立て直していたが、使ったデザイン・ボキャブラリーは西洋古典建築に由来するものだった。須磨別邸では、外観デザインでは様々な手法を取り混ぜていたが、内部の空間設計は英国ルネサンス風もしくはヴィクトリアン様式を基調とする正統的な様式でまとめられていた。

「簡素であること」という命題を課せられた日暮別邸では、野口はその設計にあたり自家薬籠中のものとしていた西洋建築様式を自ら封印せざるを得なかった。野口は、統辞法としての様式に準拠せず、それぞれの場所や部分があるべきように在り、全体を統御できる方法を日暮別邸の設計で自らつくり出さねばならなかった。その結果、現れたのが“Eclecticism”であった。この“Eclecticism”は、日本語で「折衷主義」と訳されてきたが、その「衷（まごころ）」と「折（おる）」との二つの漢字で構成され訳されてきたため、「背反する二つの間を採る妥協的な方法」と誤解されるニュアンスを含んできた。しかし本来の“Eclecticism”とは、単一の思考様式や既定の前提条件にとらわれず、複数の理論や様式・考え方に立脚し着想を得ようとする方法意識であって、その方法によってある課題に向けて全体を統御する創造的思考様式のことである。そのため野口の設計に現れるいわゆる「折衷」についてはあえて「編集的折衷」と名付けている。

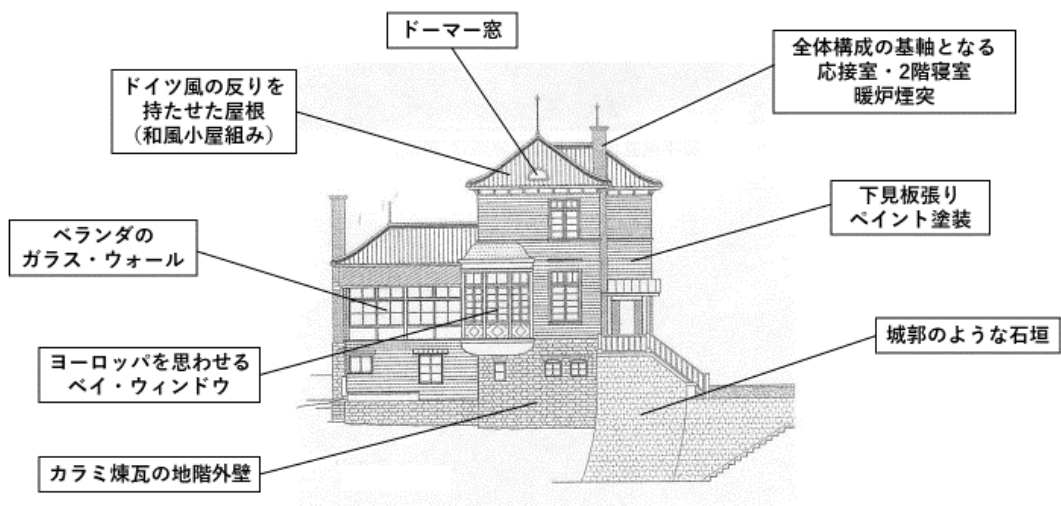
前節まで述べてきたことは、日暮別邸におけるデザイン要素の個々の具体的記述であるが、(図6-71)および(図6-72)で平面図と立面図に様々な建築思考を書き込み、野口が何を選択しどのように設計を編集していたのかをまとめて図化してみた。

和館の扱いや杉皮張りそして城郭のような石垣は日本、イングルヌックは英国、なかでも階段デザインや家具デザインにはマッキントッシュ、応接室の暖炉マントルピースや外壁の下見板張りは米国、洋館の屋根にはドイツ、そしてヨーロッパ各地で近代ゴシックやチューダー様式などでよく用いられたベイ・ウィンドウはヨーロッパの香りをも漂わせていた。さらに別子鉾山の象徴ともいべきカラミ煉瓦が地階外壁やランドスケープ・デザインに用いられている。またガラスを一つのヴォリュームとして扱うことも試みられている。さらには、応接室から食堂への扉枠上部には後年のロバート・ヴェンチャーリを想起させる古典様式のグラフィックな記号化まで行っていた。まさしく建築的な選択と編集であった。その編集の実現には、洋館屋根にドイツ風の反りを持たせるため和風小屋組みを採用し、ベイ・ウィンドウ内部に柱が下りてくることを避けるために2階寝室隅柱を丘立ちにして荷重を分散するアクロバットのなこまで行っていた。野口としては、実現すべき「全体イメージ」があったからこそ行ったことであった。

この「全体イメージ」こそ、様式における統辞法に替わるものであった。そしてその核となったのが“Eclectic”な方法意識であったと思われる。当然ながら何々様式と呼べるものではない。野口は必要に迫られてこの建築的方法を採ったのである。



(図6-71) 日暮別邸 平面図にみる"Eclecticism"



(図6-72) 立面図にみる"Eclecticism"

図版

(図6-71) 『愛媛県の近代化遺産 —近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書—』 303頁
上記図面に筆者書き込み

(図6-72) 同上

6. 7 野口孫市とマッキントッシュ

下図は一見すると一人のアーティストが描いた4点の作品のように見えるが、じつは野口とマッキントッシュによるものである。野口の鉛筆画の線はマッキントッシュによるステンドグラス的なガラス装飾板の線の動きを思わせ、野口とマッキントッシュの水彩画の色の取り合わせには似通ったものを感じられる。野口の水彩画の本来のタッチは、第1部で紹介したように奥行き感のある絵画的なものだったが、この水彩画では、野口は敢えてグラフィカルな表現を試みている。野口は、ヨーロッパのアール・ヌーヴォーやグラスゴー派の画法で描いてみたのだろう。

前節で述べたように、日暮別邸の内部設計では、マッキントッシュの影響を受けたデザインが随所に見られた。しかしなぜマッキントッシュだったのだろうか。野口孫市（1869～1915）とC.R.マッキントッシュ（1868～1928）は全くの同時代人である。両者とも、近代的な生活様式や工業技術が古典主義的な時代から大きく離陸しようとしていた時代に生きていた。野口は明治という出遅れた近代のなかにあったが、野口の欧米近代文明への触覚は当時の日本人建築家たちのなかでは際立っていたと思われる。日暮別邸という厳しい設計条件のなかで模索していた野口は、マッキントッシュのデザインに「近代」という恰好のモデルを見出したのだろう。野口の多くの作品群のなかでマッキントッシュを思わせるデザインは、伊庭邸や鶴崎邸にも見られるが、日暮別邸では特に顕著に現れていたと言ってよい。日暮別邸の「簡素であること」という厳しい命題が、野口をしてマッキントッシュのデザインに目を向けさせたものと思われる。

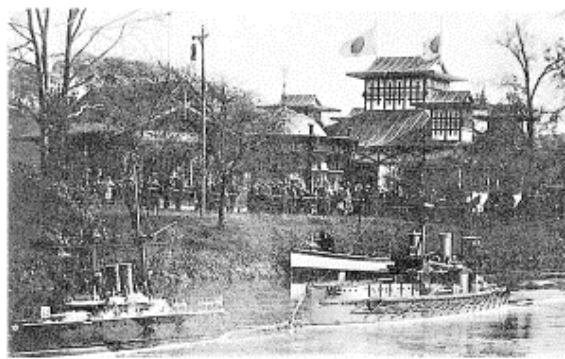


(左 図6-73) マッキントッシュのデザインによる
鉛枠のガラス装飾板 1900年
(中上 図6-74) 野口孫市の鉛筆画
(右上 図6-75) 野口孫市の水彩画
(右下 図6-76) マッキントッシュの水彩画
“The Harvest Moon” 1892年

グラスゴーは、工業と芸術が盛んな都市だった。また明治初年から日本との関係も深く、特に日本工業界においては英国のなかでロンドンにならぶ重要都市と認識されていた。

J・ワット（1736～1819）はグラスゴーに生まれ、蒸気機関車のG・スティブソン（1781～1848）はイングランド北方のニュー・カッスル近郊に生まれている。グラスゴーはこのような産業革命を生み出した地域の中心都市であった。造船業や蒸気機関車の製造では世界最高水準にあり、スクリュース式の外洋航海船はグラスゴーを流れるクライド河で誕生している。都市近郊の鉄道網は当時の世界最長であり、市内の地下鉄は英国ではロンドンに次いで1896年に開通した（*1）。長州藩から派遣された山尾庸三が慶応2年（1866）から2年間グラスゴーの造船所とグラスゴー大学で造船技術を学んでいた。帰国後は工部大学校の前身である工部寮をつくり、教師陣もグラスゴー大学出身者を中心に招聘している（*2）。1872年には伊藤博文など岩倉使節団がグラスゴーを訪れており、政府調達軍艦や、商行船舶・蒸気車両もグラスゴーから輸入していた。

グラスゴー近代産業の発展を担った事業家たちに支えられ、またヨーロッパ中に広がっていた日本美術への関心にも触発され、マッキントッシュの前の世代であるE. W. ゴッドウィン（1833～1886）などの建築家達は（図6-79、80）に示すように日本的なコンセプトの家具も製作していた。日本美術を愛していたマッキントッシュは一度も日本を訪れることはなかったが、それだけに芸術的な憧れから彼自身のイマジネーションを発展させ独自のデザインを生み出す源泉の一つになっていた（*3）。日本人である野口がマッキントッシュのデザインに親近感を覚えたのも当然のことだったと言えるだろう。



（左上 図6-77）
マッキントッシュ設計
ヒルハウスの照明器具 1904年

（右上 図6-78）
1911年のグラスゴー国際博覧会
日本館



（左下 図6-79）
ゴッドウィン+ウィスラー設計
バタフライキャビネット 1878年
（右下 図6-80）ゴッドウィン設計
食器棚 1877年頃

実は、野口とマッキントッシュには同じ「先生」がいた。この時代に新しく発明された写真製版技術が雑誌というかたちで社会に大きく影響を及ぼし始めていたが、建築やデザインの分野では英国のアーツ・アンド・クラフツ運動の大きな推進力になった“The Studio”誌がその最初の例だった(*4)。“The Studio”誌で頻繁に紹介されていた建築家の一人が、C.F.A.ヴォイジー(1857~1941)であった。マッキントッシュも熱心な“The Studio”誌の購読者であり、マッキントッシュがヴォイジーから影響を受けていたことも指摘されている(*5)。野口の住友への寄贈図書リストのなかにも多数の“The Studio”誌の vol.と no.数が記載されていた。野口の書籍リストには“The Studio”誌の Year Book やコンペティション特集も多く記載されており、この美術デザイン誌が野口の重要な情報源であったことは間違いない(*6)。

註

- (* 1) 木村博昭著
「日本の影響 1900年、日本とグラスゴーそして、マッキントッシュ」
鈴木博之監修『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』所収 16~17頁
1985年 社団法人国際芸術文化振興会
- (* 2) 柏原宏紀著 『明治の技術官僚 近代日本をつくった長州五傑』 41頁
2018年 中公新書
- (* 3) 木村博昭著
「日本の影響 1900年、日本とグラスゴーそして、マッキントッシュ」
前掲書『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』所収 19頁
- (* 4) アンディー・マクミラン執筆「マッキントッシュと近代建築」
前掲書『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』所収 104頁
- (* 5) Kenneth Frampton “Modern Architecture” p.p.49 p.p.77
1980 Oxford University Press
- (* 6) 住友史料館所蔵『野口博士寄贈図書目録』
野口孫市の孫・濱田信義氏より昭和47年(1982)住友本家修史室(現・住友史料館)に寄贈されたもの。住友総本店の罫紙にペン書きされていた。

図版・写真

- (図6-73) 鈴木博之監修『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』 96頁
- (図6-74) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈 資料目録 ⑦ 31
- (図6-75) 住友史料館所蔵 尾形久美子氏寄贈 資料目録 39
- (図6-76) 鈴木博之監修『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』 34頁

- | | | |
|---------|---------------------------------|------|
| (図6-77) | 鈴木博之監修『チャールズ・レニー・マッキントッシュ』 | 26頁 |
| (図6-78) | 前掲書 | 17頁 |
| (図6-79) | 前掲書 | 19頁 |
| (図6-80) | 『大系 世界の美術19 近代美術**』
1973年 学研 | 119頁 |



海上より見た四阪島

第7章 野口孫市の和風住宅建築

工科大学造家学科で学んだ野口は、西洋建築についての学習と研鑽を重ねていた。大学院卒業後に入社した逓信省での仕事や、住友本店臨時建築部での仕事のほぼ全てが西洋建築であった。また住友家須磨別邸や伊庭貞剛邸などの洋風住宅建築も設計している。しかし、野口自身が設計した自邸が和風住宅であったように、数は少なかったが和風の住宅建築も設計していた。

住宅建築は、そこに住む人の人生の舞台であり「精神生活のありか」でもある。伊庭貞剛邸や田辺貞吉邸は、和館と洋館が合体された住宅であり、住友家須磨別邸の敷地には、東邸と呼ばれる住友が須磨の土地を入手し最初に建てた和館があった。明治期から大正・昭和初期にかけて「和館」の存在は、その住宅に住む人々にとってなくてはならない「精神生活のありか」であったことを示している。

本章では、野口の設計した和風の住宅建築から、野口の建築術の特徴を下記の3点より明らかにすることを目的としている。

- ① 「場所の性格」をつくり易い日本建築の平面構成
- ② 和風の住宅建築にとり込まれた「洋」
- ③ 大工棟梁等の職人とのコラボレーション

日本建築は、飴細工のように平面構成を自在に展開できる特徴を持っている。平安時代の寝殿造りから中近世の禅宗寺院そして近世の大名屋敷や内裏の御殿などに至るまで、あらゆる方向に自在に伸び得るこの平面構成の方法は、その建物における個々の場所の意味を自由多彩に平面展開できるものだった。江戸期から明治期にかけての邸宅建築において、平面的に場所の意味を展開し構成する日本建築の手法は、伝統的な設計手法として定着していた。このそれぞれの意味を持つ場所を一つの建築として自在にまとめることのできる構成手法は、野口の和風による住宅建築においても、いかに発揮されていた。この野口の特質は、前章まで述べてきたとおり洋風住宅建築でも同様に発揮されていたが、本章では野口が設計した和風住宅建築からその具体的内容を探る。

和館の野口自邸や平田讓衛邸の書斎は、「洋」の要素が組み込まれたものだった。現在では当然のように、このような和洋折衷が行われている。しかし明治期の「和」と「洋」が画然と分けて意識されていた時代、「和」と「洋」を一室のなかに合体する試みは画期的なものだったと言ってよい。後年、武田五一や藤井厚二などの建築家たちを経て和洋折衷は更なる発展を見せることとなるが、その先駆的な事例として、野口の和館のなかにとり入れられ

た「洋」について考察する。野口は、単なる室内の構成だけではなく、住友家茶白山本邸では更に大胆な試みも見せていた。

和風建築の技法は、日本で伝統的に確立された建築術として共有されていた。この伝統的な建築文化のなかで、野口は自由な意匠や創意を發揮できたのである。この建築術を言い替えるならば、その時代において共有されていた建築に関する思考様式といってもよい。野口の和風建築について考察する場合、伝統的な建築術や卓越した作庭術を持っていた二人の明治後期を代表する職人を挙げるのが欠かせない。大工棟梁・二代目八木甚兵衛と庭師・七代目小川治兵衛である。特に八木は、和風の建築術を野口と共有する相方として呼吸が合っていた職人であった。これら職人と野口のコラボレーションにも着目する。

本章は以上の観点を基礎として、下記の節から構成する。

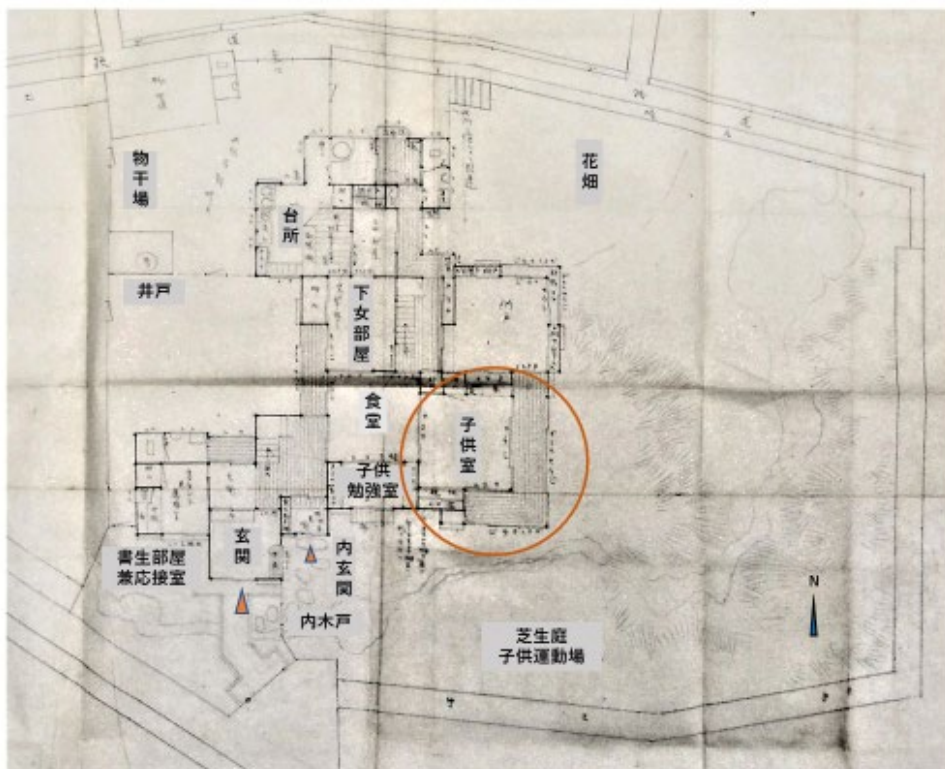
- 7. 1 野口孫市自邸
- 7. 2 平田讓衛邸
- 7. 3 住友家茶白山本邸
- 7. 4 八木甚兵衛と小川治兵衛

7. 1 野口孫市自邸

野口は、自分の家族が住むべき地を武庫郡住吉村に定めた。「4. 8. 2 旧・田辺貞吉邸」で述べたように、大阪湾を望み六甲山麓の緩やかな日当たりのよい南面の傾斜地に恵まれた住吉は、住環境にふさわしい気候・地理環境に加え、鉄道の住吉駅があることによって利便性にも恵まれた理想的な住宅地として富裕層に脚光を浴びていた。住友銀行本店・初代支配人であった田辺もこの住吉に野口の設計で、明治41年に居を構えている。

野口は自邸を、自らの設計により明治43年(1910)にこの住吉の地に完成した。伊庭貞剛邸が明治37年、日暮別邸が明治39年、鶴崎平三郎邸が明治41年に完成しているが、野口はそれらの邸宅を設計した経験を踏まえて自邸の設計にあたったと思われる。

野口は、自分たちの家族が生活するうえで理想とする住宅のためには、自分たちの文化的基盤である和風による建築が最もふさわしいと考えたのであろう。和風建築は、飴細工のように自由に平面をつくり出せる様式であり、生活様式すなわち“Way of Life”の基盤となるのが平面プランである。野口は和風住宅のプランニングでこそ「どのような生活を理想とするか」という生活像をつくり出しやすかったのだと思われる。また日本建築には「木割」という定式化した建築術も確立していた。その上で意匠を凝らすこともでき、野口にとっては日本建築による住宅には西洋建築よりも「心地よい自由」が備わっていたはずである。



(図7-1) 野口孫市自邸 配置図

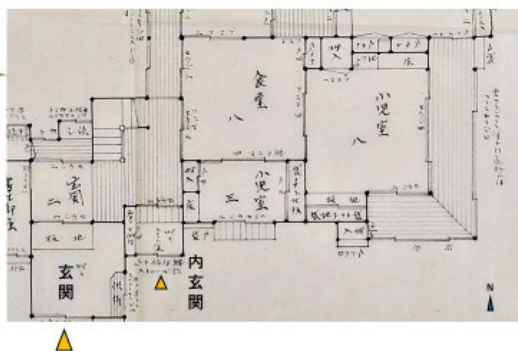
上の(図7-1)の配置図から分かりますとおり、敷地の西半分には建物を配置し、敷地東の南半分は、野口が「子供運動場」と名付けたように子供たちが伸び伸びと走り回れる芝生の庭としていた。一方、北半分は花畑であった。建物の西北部分には、井戸や物干し場などのバックヤードを設け台所等との行き来のし易い位置関係をつくっている。表門をくぐって、表玄関に行くまでの右手には内木戸があり、家族は内木戸から直接プライベートな庭に入れるようになっていた。この内木戸は、長女・房子へ送った第1部(図1-33)の写真の背景に写っていたが、家族が抱いているこの住まいへの親しみやすさを表していたようだ。

次頁(図7-2)は伊庭貞剛邸の和館部1階平面図である。玄関から左方向に進むと2室の座敷とその奥に居間が配置されている。座敷や居間は和風の庭に南面しており、典型的な和風の住宅平面だった。より格式張った住宅では、奥の書院に向けて次の間など室のヒエラルキーが設けられている場合も多かった。しかし野口は自邸の設計で、このような典型例にとらわれることなく、(図7-3)のように、この住宅で最も価値の高い1階東南部に子供室を配していた。本来ならば接客のための書院座敷が配される位置である。また東南の庭は、来客を迎える座敷と一体になる格式ある庭園であるべき場所であったが、子供運動場の芝生の庭にしていた。野口が、子供たちの生活を大切に考えていたことがうかがえる。子供室のL字型の縁側の中は1間ほどのゆったりとしたもので、広く明るい縁側で遊ぶ子供たちの姿が浮かんでくる。実現した自邸では、(図7-4、5)の写真にあるとおり、子供室の

縁側の外に腰を掛けられる程度の中の濡れ縁が設置されていた。子供室の西隣には更に子供勉強室も別に設けられていた。子供室廊下の北の突き当りの子供たちの寝室になっていた納戸への扉には、この家唯一のステンドグラスがはめ込まれていた。この2室の子供室に囲まれるように配置されていたのが食堂だった。2室の子供室の食堂への襖は開け放たれていたと思われる。また台所に通じるこの食堂の西にある廊下障子からも光が入るようになっていた。階段室上部の窓から採られた光も食堂に注ぎ込んでいただろう。食堂は、中央に位置しながらも明るく、子供たちへの視線が行き届く家族生活全体の核となるような部屋であった。(図7-5)の写真は孫市が撮影したものと推測するが、ローアングルで写された芝生と子供たちの写真からは、父・孫市の暖かい視線を感じることができる。



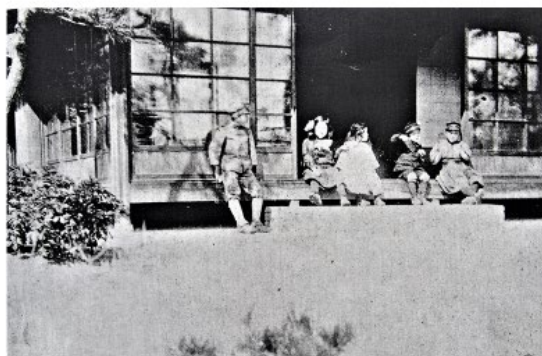
(図7-2) 伊庭貞剛邸 和館部1階平面図



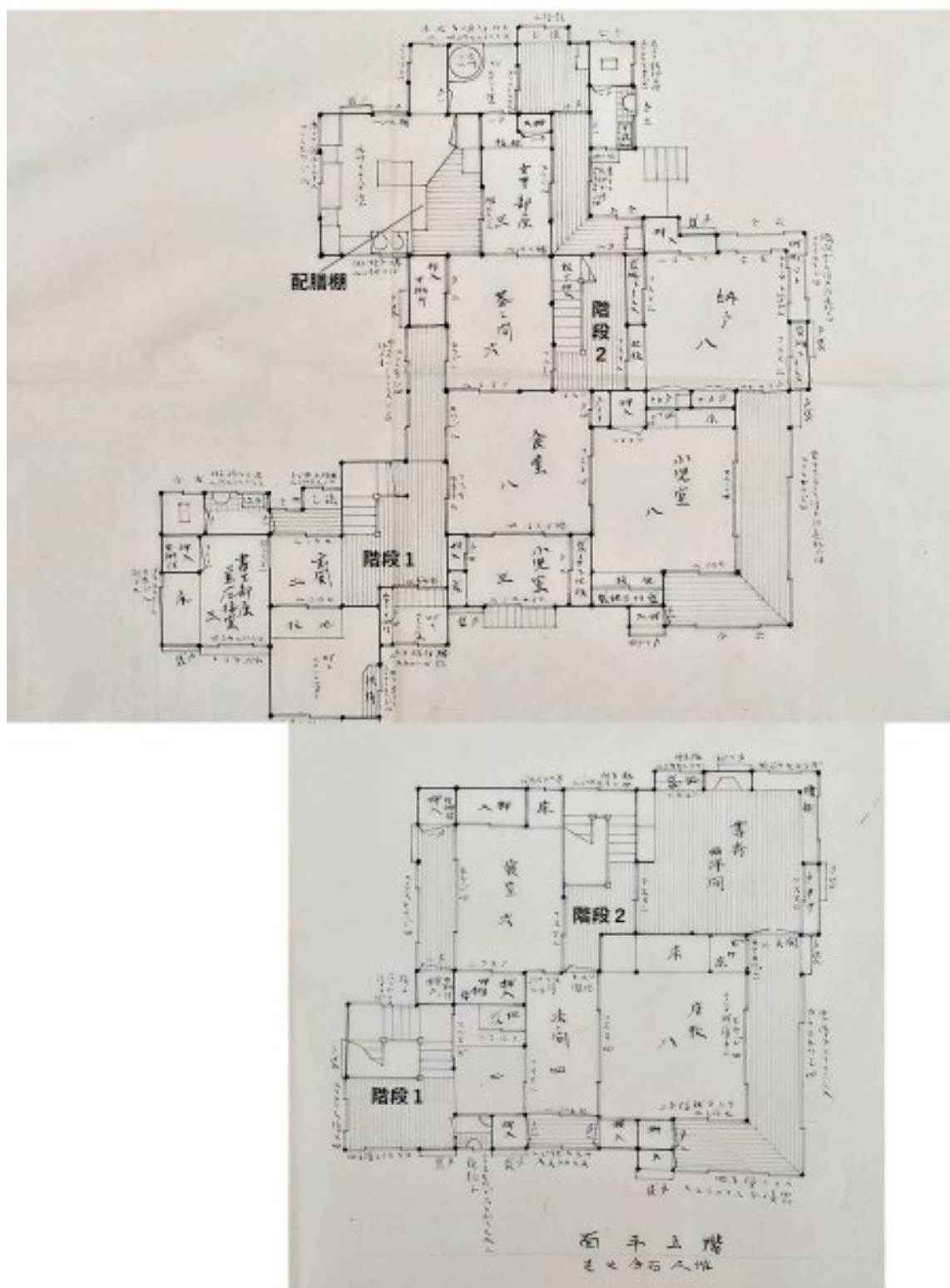
(図7-3) 野口孫市自筆 自邸東南部の一部拡大



(図7-4) 野口孫市邸 東南部外観



(図7-5) 子供室前の芝生庭に面する縁側に集う子供たち 左の良子の弟と思われる兵隊姿の若者に、当時の政治状況がうかがえる



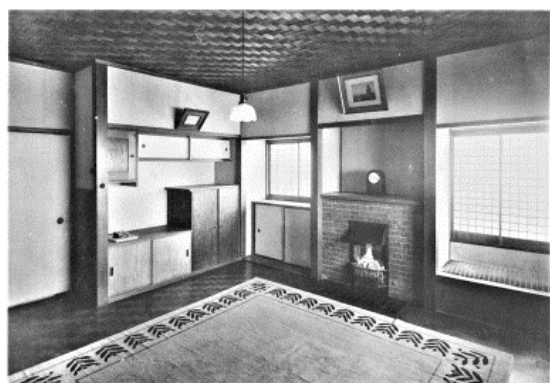
(図7-6) 野口孫市自筆による野口駅平面図 上：1階平面図 下：2階平面図

一方、2階は（図7-6）の平面図で示すとおり大人のゾーンだった。1階玄関から吹抜けの階段1により2階に至るが、この階段室も日暮別邸・伊庭邸・田辺邸と同様に、上部の窓から採光される明るい階段だった。簡単な来客は玄関脇の書生部屋兼応接室で対応されたが、重要な来客は2階の8畳の座敷に通されただろう。この座敷にもゆったりとしたサソルームのような縁側が設けられていた。このガラス窓越しの遠くには、微かに輝く大阪湾も望めたかもしれない。

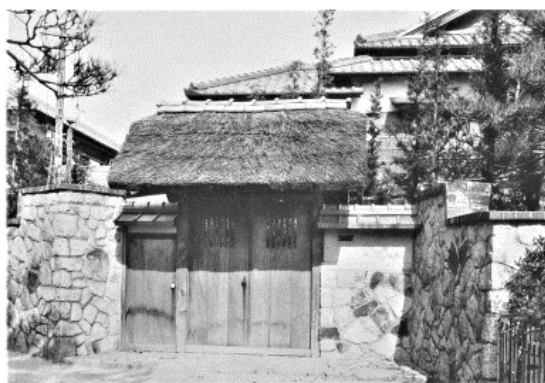
この座敷の前室の次の間に続けて、野口夫妻の寝室と野口の西洋間である書斎が配されていた。この夫妻のゾーンと1階を結ぶもう一つの階段2も、階段1と同様に2階の窓から光が落ちる明るい階段だった。この階段は、主に孫市夫妻が使用するものだっただろう。座敷の縁側からは野口の書斎に両開きの扉で入ることもでき、来客によっては野口の書斎に招き入れられたと推測する。

この（図7-7）で紹介している西洋間の書斎には、煉瓦積みのシンプルなマントルピースのある暖炉が設けられ、寄せ木貼りの床のうえには中央に大きなカーペットが敷かれていた。天井は網代で一面に仕上げられており部屋全体に統一感を与えていた。壁には和風床の違い棚風の収納棚、L字型に折れ曲がる障子窓際にはクッション付き腰掛も造り付けられている。長押風の水平材は西洋間全体を巡っており、和風と洋風の意匠が一体化されていた。

野口としては、この和風を取り込んだ西洋間は自然に生まれた発想であったと思われるが、この書斎には、後の武田五一や20年ほど後に現れる堀口捨己や藤井厚二による和洋のさらなる統合や、その後の吉田五十八や谷口吉郎による新和風の前触れを見ることもできるかもしれない。



（図7-7） 野口孫市邸 西洋間書斎



（図7-8） 野口孫市邸 茅葺の門と石壁

前頁の(図7-8)は野口邸の門と石垣の写真である。この茅葺屋根の門と粗面に組み上げられた石垣には、そこに住む人となりをおぼせるものがある。英国のアーツ・アンド・クラフツの日本版といってもよいぐらいの職人の手仕事が見えるモダンで親しみやすい風情が漂っていた。野口の人柄そのものが現れていると言ってもよいだろう。

住友史料館には、下記の野口の自邸に関するメモが残されていた。詳細にわたる彼の自邸の考え方の一端がうかがえて興味深いものがある(*1)。

食堂は食事の外、談話室にも使用し妻君の事務室にも使用す。此部屋は周圍に戸棚を置き長火鉢を置き、茲では止を得ざるの外寝ぬ積り。茶の間は下女部屋に使用す乃ち下女の寝室及夜の仕事部屋とす。以前の設計の如く食堂より遠き時は夜間茲に隠れ込み、監督上不便なりとの事により茲に変更す。食物は此室には置かぬ筈(中略)台所、配膳台は料理方と受取方の取引台にて下は両面ガラス障子をはめ込み中に棚を釣り食器を入れる。大根が煮えたらば此台の上に載せ両側から小皿を出して盛り分る計画。配膳台と戸棚の間の敷台は七輪を置き。物の多煮焚する場所とす。

女中部屋は女中の理髪、更衣等に用ひ兼て寝室に用ひ、女中病氣の時なれば茲に置り、此他出入の者の食事をなす事も此室なり。

納戸は兼て寝室に用ふ。夫婦の者の更衣等は此室にてなす。衣類は勿論統て茲に蔵する事。折曲りの窓は肘掛にて其下は物入に使用す。第一小児室は小供の遊戯及寝室に用ふ。小供の衣類、おもちゃ等皆此室に蔵す。西側戸たなは下は明放しとし小供のおもちゃ棚を並ぶる事。第二小児室は小供の寝室にも用ひ又勉強室にも用ふ。茲も南側の戸棚下は小供のおもちゃ棚を並ぶる為下半部は明放しとす。

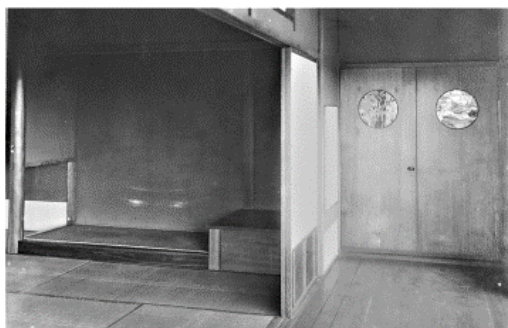
(原文はカナ書き)

第1部で野口の「具体的なもの」に精神的基盤を置く人物像について記したが、このメモのなかでも自邸設計の「理念的なこと」には一言も触れず、淡々と「具体的な生活像」のディテールを書き連ねていた。「具体性の人」野口らしい記述である。この「具体性」こそ、野口の建築術の重要な側面であった。

「食堂は談話室にも使用し、妻君の事務室にも使用す。ここでは長火鉢を置くつもり」など、食堂を家族のいわゆる茶の間や居間のように考えていたことが読み取れる。食堂に長火鉢を置くことは、湯を沸かしたり餅を焼いたりする実用のほかに、家の中心に「火」を据える日本の伝統的な習慣をおぼせそこに象徴的な意味合いも感じ取れる。煮えた大根を例に説明する「両面から使える配膳台」はまるで戦後のモダンリビングの雑誌に出てきそうな生活の工夫である。「食堂にはやむを得ない場合以外は寝室としない」なども「食寝分離」が思い起こされ、食堂と子供室からなる1階の家族全体の生活と2階の夫婦寝室や書斎などからも、和館でありながらも既に戦後のモダンリビングの生活様式が現れているといつてもよい。下女の病氣の時を思いやる心遣いや、「出入りの者」へもきめ細かな対応も考えていた。それにもまして子供室のきめ細かな使い方の記述には、いかに子供室を大切に考えてい

たかをうかがうことができる。また来客の接遇を重視した当時の住宅の考え方を反映し、2階の次の間から入る座敷には、床に琵琶床も設えた正式の座敷としていた。簡単な来客対応のための書生部屋兼応接室も当時の時代を反映している。住み込みの書生は置いていなかったようだが、部下や大工との簡単な打ち合わせはここで行っていたのだろう。

野口一家の“Way of Life”が、如実に表れた和風の住宅であった。和風建築特有の、室構成の平面的連続性と、庭や玄関・内玄関そしてサービスヤードなど外部空間との連続性が、和風の生活様式を基本とする「心地よさ“Comfort”」という空間性能として現れていた。



(図7-9) 1階東南部
子供室・縁側・納戸への扉



(図7-10) 子供室から子供寝室にも使用されていた納戸へ
通じる扉に施されたステンドグラス

註

(* 1) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥4-6

図版・写真

(図7-1) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥4-3

(図7-2) 住友活機園作成パンフレット

(図7-3) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥4-1

(図7-4) 同上 目録番号⑨1

(図7-5) 筆者蔵 尾形久美子氏より寄贈

(図7-6) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥4-1、2

(図7-7) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』

(図7-8) 同上

(図7-9) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑨8

(図7-10) 同上

7. 2 平田讓衛邸

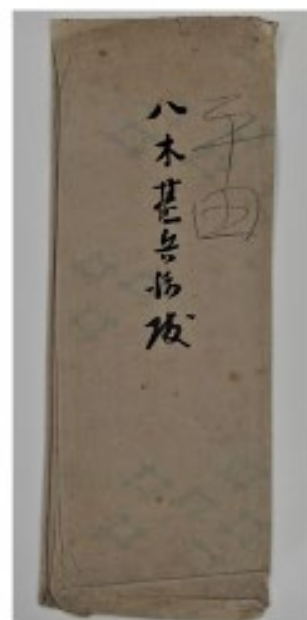
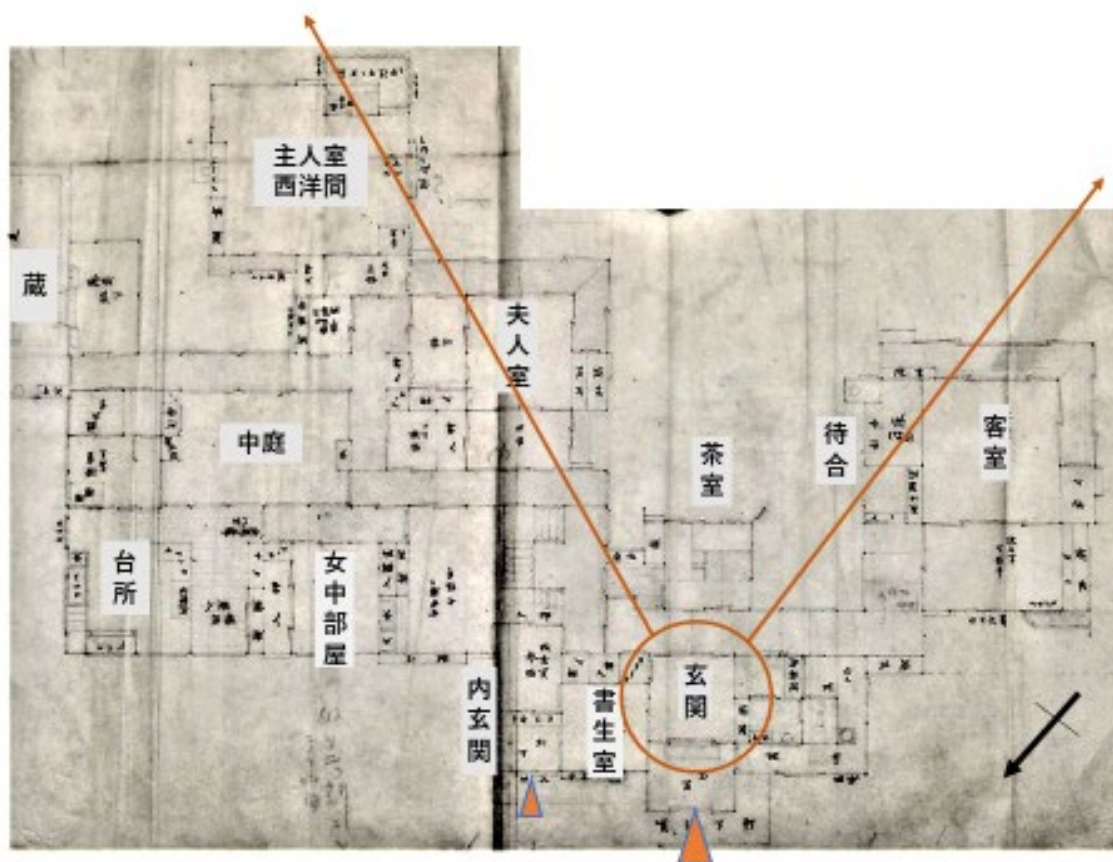
平田讓衛は、明治21年(1988)に帝国大学法科と卒業し法学士となっている。帝国大学に入る前は慶応義塾の英語科にて数年学んでおり、帝大法科では特に英国法を専攻していた。学習院では春翠に法律を教えている。明治36年に著された『大阪人物評論』では、大阪弁護士会の三傑の一人として記されており、住友春翠や村山竜平などととも大阪を代表する「人物」の一人とみなされていた(*1)。大阪弁護士会の評伝でも、平田は学識と志があり品位と経験豊かな近畿200人余りの弁護士中でも傑出していた弁護士であったと記録されている。住友本店第3代総理事の鈴木馬左也が中心となっていた大阪倶楽部の設立企画者の一人としても、大阪財界の主要メンバーとともに名を連ねており(*2)、住友家法律顧問の弁護士であった。

大正5年(1916)に完成した平田讓衛邸は、設計を野口孫市が行い、2代目八木甚兵衛が施工している。野口と八木は大正4年の同年に逝去したが、住友本店臨時建築部にいた八木の子息・元蔵が3代目八木甚兵衛を襲名し平田邸を完成した。(図7-13)は、野口から八木甚兵衛宛てた封書の写真である。和紙に描かれた自筆による設計図面一式が、丁寧に折りたたまれ、この封書の中に収められていた。

野口と八木は、この平田邸までに伊庭貞剛邸「活機園」、住友家茶白山本邸などで共に仕事をしてきた。また田辺貞吉邸の和館は八木によるものであるが、伊庭邸と同様に、おそらく田辺邸の和館の工事にも八木は携わっていたと思われる。野口と八木の間には、これらの仕事を通じていわゆる「阿吽の呼吸」が醸成されていたことが推測できる。野口による設計図面への書き込みも、その強い信頼関係をうかがうことのできる簡潔なものだった。

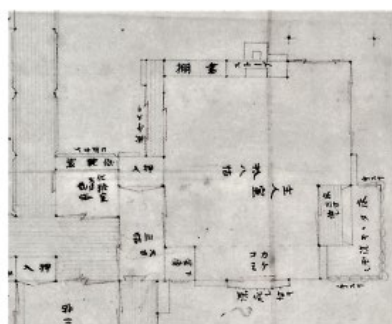
平田讓衛邸の最も顕著な特徴は、(図7-11)の1階平面図とダイアグラムに示したとおり「逆八の字型雁行配置平面」にある。平田は社会的に重要な人物であっただけに、その邸宅における接客も大切な機能だった。玄関に入って斜め右方向に、接客のための客室が独立するように設けられている。7畳半の次の間から入る12畳半の客室の床は、奥行きのある三畳台目の書院付き畳床であり、この和室の南側にはL字型の広い縁が設けられていた。おそらく南側の庭園は手入れの行き届いた本格的な日本庭園が続いていたと思われる。この客室から庭園に出て露地や待合を経て玄関突き当りにある茶室に至ることができた。

一方、玄関から斜め左方向に広がっていたのが日常の居室ゾーンだった。夫人室や西洋間の主人室が雁行配置で連なっていた。玄関から見ると、客室ゾーンと居室ゾーンがあたかも逆八の字を描き、斜めの左右2方向に両腕を拡げるように配置されていたのである。須磨別邸では風車型の平面を成していたが、同じような意図で、平田邸では逆八の字型雁行配置としていた。なお台所や女中部屋などのサービス部門は、中庭を設けて光を採りながらゾーンが分けられている。この主要部分を雁行配置とし、中庭を介してサービス部門を配置する平面の考え方は桂離宮を思わせるものがある。よく練られた平面は、おのずと似たものになるのであろうか。



- (上 図7-11) 平田謙衛郎 1階平面図
 (下左 図7-12) 同上 2階平面図
 (下右 図7-13) 野口より八木甚兵衛宛図面封書

下の（図7-14, 15）は18畳の西洋間書斎の主人室である。野口自邸の西洋間書斎で見た、西洋間に和風の意匠を組み込む試みを更に発展させている。天井は野口邸と同じく網代であるが、網代の目がさらに細くなっており天井全体の広がり感がより高められている。また天井の照明器具もデザインされたものだった。ストーブのマントルピースには、日暮別邸の応接室の暖炉マントルピースのような“Stone Fireplace”の趣きを持ち込んでいた。床の寄せ木張上のカーペットは、中央部ではなく人がいる場所に部分敷とされている。また家具も「活機園」にある野口がデザインした家具と共通する意匠が感じられ、野口自身がデザインしたものと思われる。平面図の右上コーナーには造り付け家具が描かれていないが、実際は写真のように窓際の腰掛がL字型に造り付けられていた。その窓ガラスの上部の欄間部分にはステンドグラスがはめられている。このように洋風と和風が共存する意匠は、臨時建築部の2代目技師長・日高胖が数年後に設計する有芳園の洋室意匠にも引き継がれた。



（図7-14） 主人室平面図

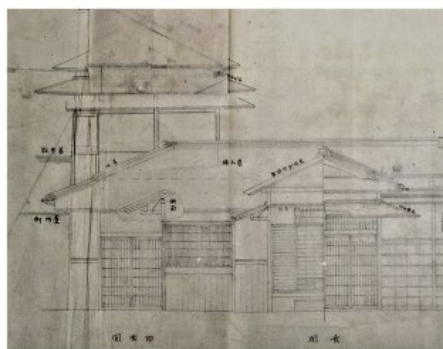


（図7-15） 西洋間の書斎である主人室

（図7-16～19）の立面図や外観写真からは、入母屋や寄棟の大小様々な屋根がバランスよく全体に配置されているのが分かる。玄関や客室そして茶室などの表向きの部屋には入母屋の屋根を架け、主人室や夫人室上部家族用客室などの平田家の人々の居室には大らかな屋根勾配の寄棟屋根でまとめていた。

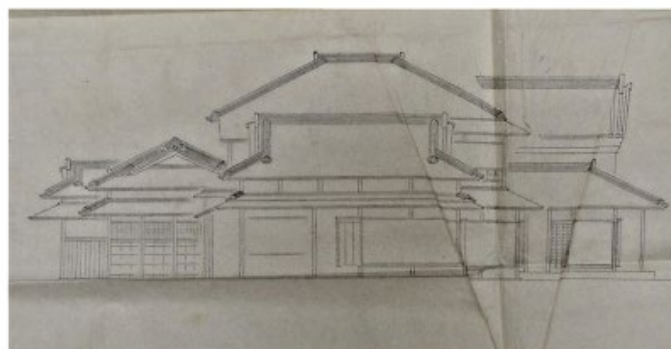
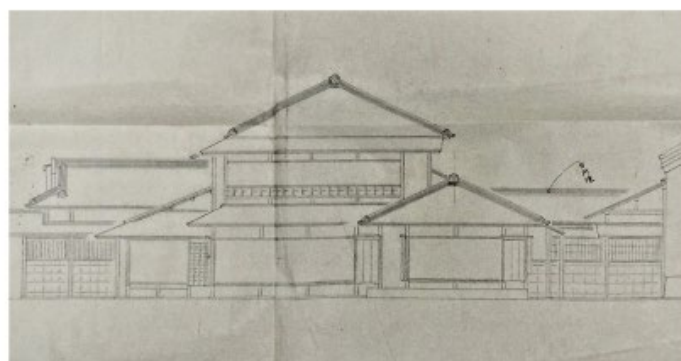
野口の和風建築の屋根についての特徴の一つに、二重庇を効果的に使っていることがある。平田邸では1階の客室や夫人室の天井高を8尺9寸（2.697m）主人室では9尺（2.727m）の通常の和室より高くとっている。内部空間の天井をゆったりとした高さで取ると、軒高が高くなり外観上好ましくないものになりがちとなる。しかし二重庇をつけることで軒高を適切な高さまで低くすることができ、全体との調和を保つことができた。（図7-19）の立面図や（図7-17）の玄関廻りの外観写真に、そして野口自邸では（図7-8）

の2階の屋根、(図7-38)の茶白山本邸の大玄関車寄せなどにその事例が見られる。なお(図7-20, 21)は、和風建築で外観意匠を決定づける重要な役割を持つ屋根伏形状についての図面である。野口が特に心を砕いて作成したものと思われる。



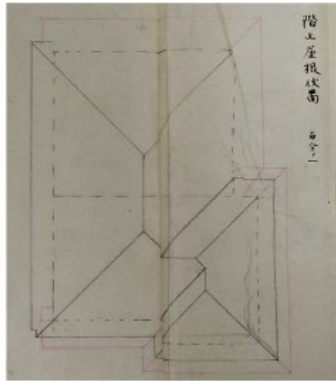
(図7-16) 玄関部分立面詳細図

(図7-17) 平田讓衛邸 玄関

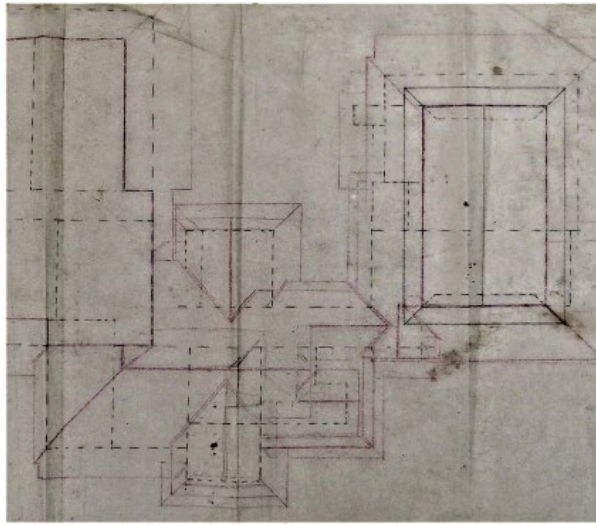


(上 図7-18) 南東側立面

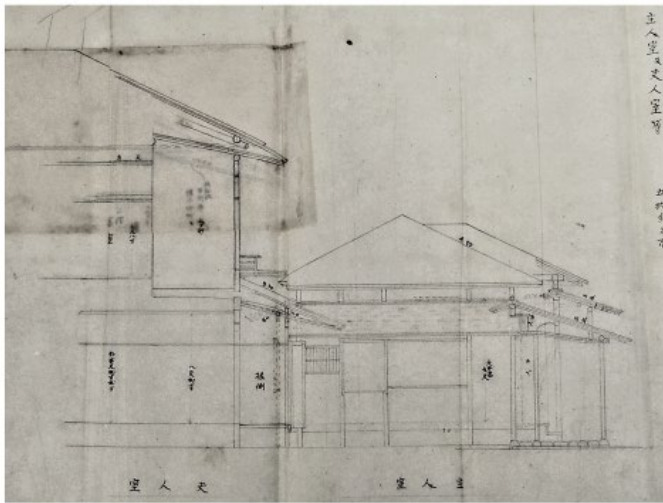
(下 図7-19) 南西側立面



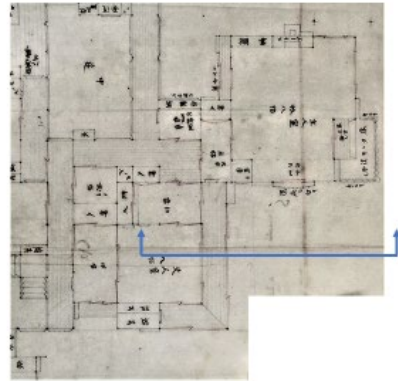
(図7-20) 2階屋根伏図



(図7-21) 1階屋根伏図



(図7-22) 右平面図に示した断面位置の
断面詳細図および立面図



(図7-23) 左の断面詳細図の断面位置を示す

(図7-22)は縮尺50分の1の断面詳細図である。この縮尺の断面詳細図は数多く描かれていたが、縮尺20分の1の矩計図などは描いていない。野口は、名匠・八木甚兵衛にはこれで設計内容が充分伝わり正確に施工できると確信していたのであろう。しかし各断面詳細図の屋根勾配については「5寸」や「4寸」など細かく記入されており、この図面書き込み表記だけで屋根形状の全体像が掴めるものとなっていた。また野口は、主要な床の展開図等も描いていない。八木甚兵衛の技量を信頼していたことが良く分かる。まるで名作曲家と名演奏家の関係を見るようである。

註

- (* 1) 奥村梅臯著『大阪人物評論』 26～29頁
1903年 小谷書店
- (* 2) 大阪倶楽部ホームページ「大阪倶楽部沿革」

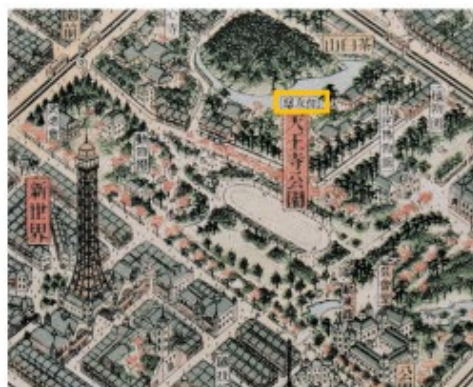
図版・写真

- (図7-11) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥1-1
- (図7-12) 同上
- (図7-13) 同上 目録番号⑥1-0
- (図7-14) 同上 目録番号⑥1-1
- (図7-15) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図7-16) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥1-2
- (図7-17) 住友史料館所蔵『野口博士建築図集』
- (図7-18) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥1-11
- (図7-19) 同上 目録番号⑥1-12
- (図7-20) 同上 目録番号⑥1-8
- (図7-21) 同上
- (図7-22) 同上 目録番号⑥1-6
- (図7-23) 同上 目録番号⑥1-1

7. 3 住友家茶臼山本邸

春翠は、明治28年(1895)に天王寺の茶臼山に接する一面の土地を購入した。このあたりは(図7-25)に描かれたとおり、まだ大阪市域外で田畑や荒地・竹林ばかりで住宅も皆無であったといわれる。しかし当時大阪湾を望む高台にあるこの地は、隣地の黄檗宗・雲水寺が幕末から明治にかけて文人たちの書画会の会場となるなど、文雅の集いの地となっていた。豊かな自然と文化の香りに惹かれて、春翠は明治40年まで多くの土地所有者と交渉し、譲り受けては開墾を進めている。春翠は、敷地の北側にある真田幸村の「茶臼山(天王寺口)の戦い」で知られる茶臼山古墳を明治35年に岩崎久彌から譲り受け、邸宅とは区域を分けることで公開の便も図った。茶臼山周辺は大阪市民の郊外の行楽地として親しまれていたが、住友も取得した地で明治30年頃から園遊会や従業員運動会などを催していた。明治36年(1903)には、高台下の隣接地が第5回内国勸業博覧会場となった。春翠はその2年前から勸業博協賛会の顧問、のちに会長に推され、勸業博覧会時は皇太子・皇太子妃など皇族・貴賓のホスト役として貢献していた(*1)。しかし後年、この内国勸業博覧会場跡が下町的な雑踏に満ちた「新世界」となることについては、当時の春翠に知る由もなかった。

1万6千坪の敷地に、日本家屋・洋館・附属家・土蔵を合わせて1,106坪の大邸宅を建て、大正4年(1915)に住友本邸を鰻谷から茶臼山に移した。



(上 図7-24) 現在の大阪市立美術館と慶沢園
右上に茶臼山古墳が写っている

(上 図7-26) 大正13年の大阪パノラマ地図
(下 図7-27) 大正2年(1913)

(下 図7-25) 明治15年『大阪名所独案内』の茶臼山 『大阪新名所新世界写真帖』白円が建設中の住友邸

本邸造営に向けて動き出したのは明治40年(1907)であった。まず敷地東部の築庭に庭師・小川治兵衛を用いて着手し、明治43年頃に築庭が完成した。明治44年7月に住友総本店茶白山建築事務取扱所が設置され建築事業が開始された。この技師長は野口であったが、野口は明治43年から肺を患い約一年半須磨で療養を続けていた。復帰後の野口は、配置計画など基本的な設計の筋道をつけるまでで、本格的な設計実務の指揮を日高胖に委ねていた。



(図7-28) 住友家茶白山本邸 配置平面図

上の(図7-28)の茶白山本邸の配置図からは、中央に迎賓の間である書院、南側に洋館、そして北側に生活の場である居住棟の日本間が、玄関から三本の矢が延びるような巧みさで配置されていることが読み取れる。そして庭については、書院・洋館・居住棟のそれぞれにふさわしい庭が個別に形成され、全体の回遊式庭園につなげられていた。和風建築に特有の、建築や庭を分節させながら連続させる手法で全体構成されたものである。

この玄関から三本の矢が三方向に延びるような平面構成は、洋館である須磨別邸と同様だった。そして第4章の「4.4.2 外部空間の3つのゾーニングとその場所的意味」で述べたのと同様に、和館の茶白山本邸においても、上図のIで正面玄関前のフォーマルな迎賓ゾーン、IIで春翠一家の生活のプライベートゾーン、そしてIIIで来客接待のための公的もてなしゾーンといった3つのゾーニングが、須磨別邸と同じく風車型平面計画によって実現されていた。

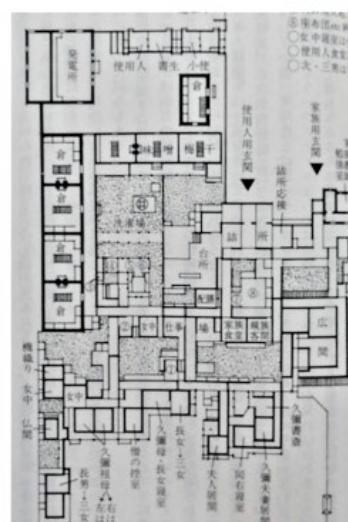


(図7-29) 大正8年頃に描かれた 住友家茶白山本邸平面図
 書院・住居棟完成 大正4年(1915)
 洋館完成 大正7年(1928)

前頁の(図7-29)は、茶白山本邸の平面図である。下図の(図7-30)の内裏の女院御所御殿平面や、(図7-31)の大名屋敷の考え方を汲む岩崎久彌邸の和館部の平面と同様に、茶白山本邸の平面も、いくつもの中庭を囲みながら折れ曲がって連なる廊下に諸室が配置されることで全体が構成されていた。典型的な江戸期以来の日本の伝統的大邸宅の造りであった。内玄関より北のゾーンには、春翠夫妻の居間や御子達居間などの室名の記入が見られる。台所は北西部に位置していたが、大玄関から書院に向かう長い廊下には配膳室が設けられ地下廊下で台所につながっていた。この配膳室から書院に料理が運ばれていたが、同じく洋館にも地下廊下から上がる階段が設けられており、厨房からの地下廊下は洋館の配膳室にもつながっていた。かなりの規模の地下廊下が張り巡らされていたと思われる。地下廊下は、電気配線にも用いられ配管メンテナンスにも注意が行き届いていたといわれる(*2)。



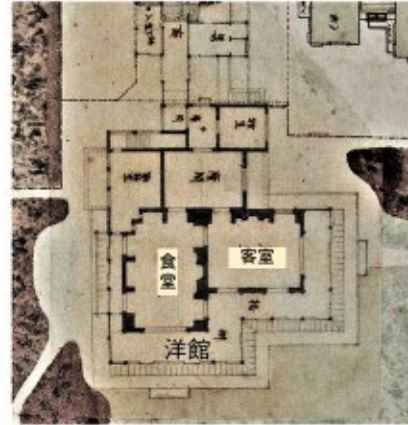
(図7-30) 女院御所御殿絵図(宝永度)
大工頭中井家関係資料より



(図7-31) 岩崎久彌邸 和館部平面図

野口は平面計画の大きな考え方を指示するに留め、細かい詰めを日高に委ねていた。住友家の古くからの出入りの大工棟梁である八木甚兵衛も、設計時点から深く関わっており、日高と八木の二人が春翠の微細にわたる意を受け、具体的な設計から工事に至るまでの総指揮をとっていた。明治45年(1912)3月に地鎮祭が行われ、大正4年(1915)の末に、書院・住居部が完成した。洋館が完成したのは、野口の逝去後の大正7年(1918)のことであった。

この茶白山本邸のもう一つの特徴は、洋館が書院風の造りの和館に包まれていたことである。次頁の(図7-32)は、洋館部南側外観である。およそ洋館であるとは思えない。しかし内部は(図7-34、35)の通り、大理石の暖炉を持つ重厚で本格的な英国ルネサンス式の内装だった。床は寄木張で、壁にはチーク材に木彫を施した羽目板や建具がみられ、天井は洋風の格天井だった。暖炉は瓦斯式とし、換気のみを行い煙突は不要としていた。



(上 図7-32) 洋館部南側外観

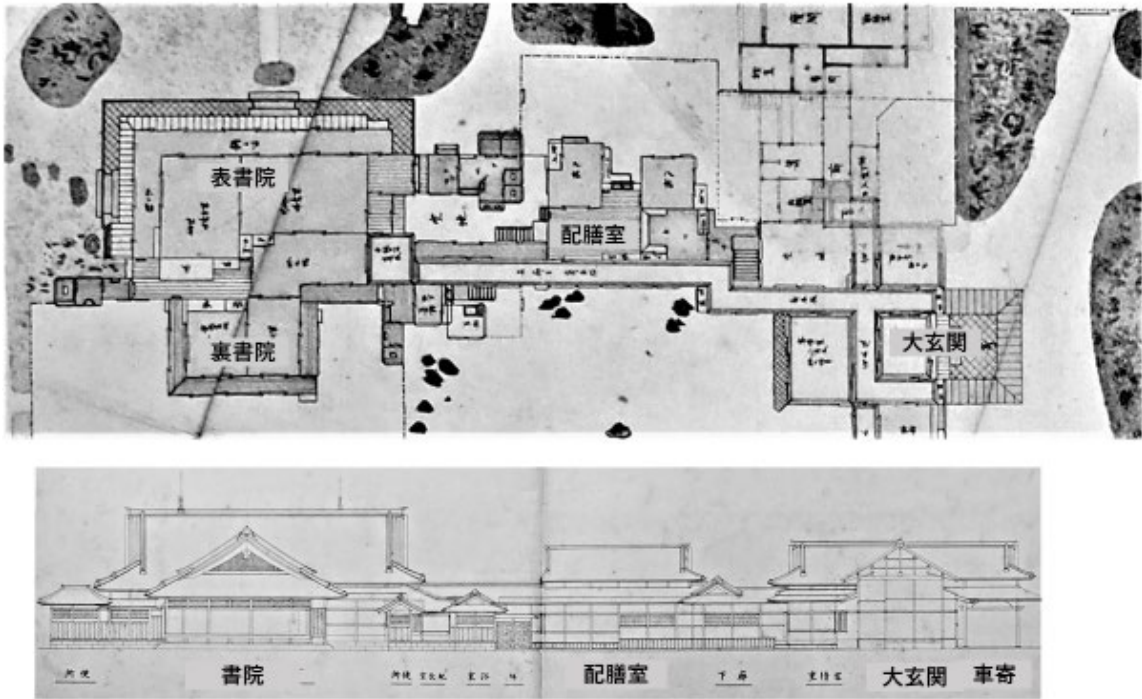
(上 図7-33) 洋館部平面図

(下 図7-34) 洋館 客室

(下 図7-35) 洋館 食堂

洋館の平面図を見ると、見かけだけの洋館内装だけでなく構造も煉瓦造としていたと思われる。煉瓦造に木構造の混構造としていたのだろう。この洋館を書院風の和館で包み込んだ意図が、日本庭園と日本建築だけによる違和感のない和風景観の統一にあったのは明らかである。確かに小川治兵衛の作庭による本格的な日本庭園に、洋館の外観は似合わない。

この考えは、確証はないが野口の発案によるものと推測する。和と洋の意匠的な合体は、野口の大きな関心事の一つであった。野口の和洋の統合については意欲的な姿勢が見られ、伊庭貞剛邸において日本でほぼ最初の和洋一体型の邸宅を編み出し、自邸や平田邸の西洋間でも日本的意匠を取り込んでいたことにも表れていた。これらに照らし合わせ、この洋館を和風の書院で包み込む考えは野口の発案によるものであったと推測するものである。ただ見事に実行に移したのは、日高と八木であった。大正2年(1913)に本玄関と書院が洋館工事との兼ね合いから計画変更されているが、この時期に洋館を書院風の和館で包み込む方向に変更されたと思われる。



(上 図7-36) 大玄関から書院までの部分平面図 (下 図7-37) 大玄関から書院までの立面図

第4章の「4. 3. 3 屋根の構成に見る日本建築の手法」で下記のように述べた。

日本の伝統的建築の外観の佇まいは、庭園と屋根だけで成り立っていると言えよう。そこでは、屋根がそれぞれ包み込む空間の性格に合わせて架けられ、それら分節された屋根群が連続することで全体が構成されていた。重要な空間には特色ある大きな屋根が架けられ、重要度の低い空間には小さな屋根が架けられていた。そしてそれら大小の量感ある屋根群がリズムを成すように屋根全体が構成されていたのである。

上の図で、茶白山本邸の大玄関から書院までの平面図とその立面図を示した。茶白山本邸においても、重要度の高い書院には大きな入母屋屋根を、次に重要な大玄関には次に大きな入母屋屋根を、そして重要度の低い配膳室の屋根は小さなものとされていた。書院部は表書院と裏書院によって、さらに複雑な屋根を構成していた。これらの屋根は、独立しながらもリズムカルに連続し、さらに他の屋根群とシンフォニーを成すように全体が構成されていた。その屋根群の廻りには大小の庭園が組み合わされており、まさしく茶白山本邸の外観の佇まいも、庭園と屋根だけで成り立っていたといっても過言ではない。このことから、伝統的な日本の建築物において建築術が確立されていたことが分かる。その確立された建築術のうえで、野口や日高そして八木は、一つのまとまりある集団的個性として自由な意匠の創造性を発揮できたのである。これが日本の伝統的建築文化だった。住友家茶白山本邸は、

明治後期から大正初期にかけて、日本の近代和風建築の代表的な作品だったと評価されている(*3)。



(図7-38) 車寄と大玄関



(図7-39) 表書院 南側外観

「人生唯一の失敗は茶白山に屋敷を建てたことだ」と大正12年(1923)に、春翠は子息に漏らしていた。春翠は大正10年に、大阪市にこの地を美術館建設用地として寄附する決意をしていた。高台下の新世界の雑踏化が進み静穏な生活に支障をきたすようになっていたからである。なによりも見下ろす位置にある天王寺公園で労働者集会在頻繁に開かれるようになり、高台の住友邸が財閥批判の具体的対象となりがちだったことに春翠は耐えられなかった。住友家茶白山本邸は大阪市に寄贈され、昭和2年この地に大阪市立美術館の建設が開始されることとなった。



(図7-40)
慶沢園と名付けられた旧・住友邸の庭園は現在、大阪市の管理により無料で一般公開されている



(図7-41)
昭和11年(1936)に完成した大阪市立美術館この正面玄関が住友家茶白山本邸の大玄関のあたりであった 設計は大阪市建築課による

註

- (* 1) 実方葉子著「茶白山本邸」
公益財団法人泉屋博古館学芸部編集『住友春翠 - 美の夢は終わらない』所収
98～99頁
2016年 公益財団法人泉屋博古館
- (* 2) 前掲書 106頁
- (* 3) 矢ヶ崎善太郎著
『住友茶白山本邸から移築された清涼寺澄泉閣について - 八木甚兵衛の和風建築
に関する研究』 801頁
平成17年度日本建築学会近畿支部研究報告書 9015

図版・写真

- (図7-24) 筆者撮影
- (図7-25) 公益財団法人泉屋博古館学芸部編集『住友春翠 - 美の夢は終わらない』
98頁
- (図7-26) 『大正13年大阪市パノラマ地図』デジタルマップス発行
- (図7-27) 公益財団法人泉屋博古館学芸部編集『住友春翠 - 美の夢は終わらない』
99頁
- (図7-28) 住友史料館所蔵配置図に筆者書き込み
- (図7-29) 公益財団法人泉屋博古館所蔵 大正8年頃「茶白山邸平面図」に筆者書き込み
- (図7-30) 谷直樹他編集・執筆
『特別展 世界遺産をつくった大工棟梁 中井大和守の建築指図』 19頁
2016年 大阪市住まいのミュージアム (大阪くらしの今昔館)
- (図7-31) 藤森照信著『日本の近代建築 (上) - 幕末・明治篇 -』 187頁
1993年 岩波新書
- (図7-32) 住友史料館所蔵
- (図7-33) 公益財団法人泉屋博古館所蔵 大正8年頃「茶白山邸平面図」
- (図7-34) 公益財団法人泉屋博古館所蔵
- (図7-35) 同上
- (図7-36) 同上
- (図7-37) 同上
- (図7-38) 住友史料館所蔵
- (図7-39) 同上
- (図7-40) 筆者撮影
- (図7-41) 同上

7. 4 八木甚兵衛と小川治兵衛

野口の和風建築について述べる場合、伝統的建築の建築術や卓越した作庭術を持っていた二人の明治期を代表する職人を挙げることは欠かせない。大工棟梁・二代目八木甚兵衛と庭師・七代目小川治兵衛である。

日本で伝統的に確立された建築術があったからこそ、野口や日高そして八木は、一つのまとまりある集团的個性として自由な意匠の創意を発揮することができたのである。この建築術を言い替えるならば、その時代において共有されていた建築に関する思考様式といってもよい。すなわち日本の伝統的建築文化だった。

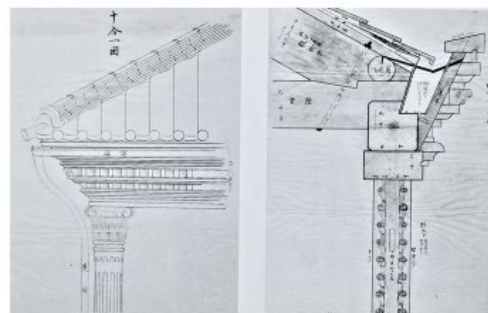
7. 4. 1 大工棟梁・二代目八木甚兵衛

八木家は、大阪四天王寺の大工岡野一統 12 軒のうち「古妻家」の出で、八木を称したといわれる(*1)。明治12年(1879)、既に68歳になっていた初代八木甚兵衛(1812~1884)は、大阪鰻谷にあった住友本邸のなかに洋館を建設することを広瀬幸平から依頼された。当時の大阪の洋館は、造幣局と第一銀行の2棟があるのみで、洋館の住宅もまだ建っていない時代だった。

初代八木甚兵衛は、外国雑誌によって外観や細部を参考にするとともに、徒歩で神戸まで赴き居留地の商館を見学しながら洋館を設計し建てた。宮大工であった八木は寺社建築から装飾の手掛かりを得たといわれている。長堀川に架かる橋からの風景は、鰻谷界隈のランドマークとして絵にも描かれており、造幣局の泉布館とともに大阪を代表する洋館となっていた。



(上 図7-42) 大阪鰻谷の住友本邸洋館
明治12年(1879)竣工



(上右 図7-43) 住友本邸洋館 軒まわり詳細図

(右 図7-44) 長堀川と東横堀川の交点にあった
鰻谷の住友本邸



二代目八木甚兵衛は、初代の子で本名を安次郎といった。没年は大正4年（1915）と分かっているが生年は分かっていない。ただ1882年に息子の三代目となる元蔵が生まれていることや、その翌年に住友の新居浜口屋接待館の新築工事を任されていることから、生年は1850年より少し前であったと推測される。野口よりも20歳ほど年長であった。安次郎は、明治17年（1884）初代の死に伴い二代目八木甚兵衛を襲名した。

二代目八木甚兵衛は、明治22年（1889）に広瀬幸平の新居浜邸において、別の場所に明治10年に建てられていた母屋を移築し更に新座敷を増築し全体を竣工させている。和館に避雷針を設置し、茶の間に暖炉を組み込み洋風便器を用いるなど当時の住宅としては様々な新しい試みも行っていった。（図7-46）の新座敷の楕形欄間は、裏千家の宗旦の好みと伝えられる茶室で用いられたものを本歌としたものであるが（*2）、広瀬幸平邸全体に行きわたる端正で清新な意匠に見事に取り込まれており、八木甚兵衛の高い技量をうかがうことができる。

野口や日高と共に成した仕事は、明治37年竣工の伊庭貞剛邸「活機園」の和館、大正5年に竣工した平田讓衛邸、大正4年に完成した住友家茶白山本邸の和館、そして大正2年に着工し大正9年に完成した住友有芳園が知られている。二代目八木甚兵衛は大正4年に逝去したが、子息の三代目が二代目の死後八木甚兵衛を襲名しそれぞれの建物を完成していた。ちなみに三代目となる元蔵は、第一高等学校を卒業し工手学校を経て住友本店臨時建築部に入社していた。



（上左 図7-45）新居浜広瀬幸平邸 明治22年（1889）竣工
 （下左 図7-47）広瀬邸門 （下中 図7-48）広瀬邸母屋
 （上右 図7-46）広瀬邸新座敷の欄間
 （下右 図6-49）広瀬邸新座敷主室

下の(図7-51)の清風荘は西園寺公望京都別邸である。もともと徳大寺家の別邸清風館だったもので、天保3年(1831)公望・春翠の祖父にあたる徳大寺実堅が創建した別邸であった。この屋敷を明治40年(1907)に住友家が買い受け、さらに付近の土地を加えて拡張し大正2年(1913)に新たな屋敷を完成した。この庭園は後述する庭師・七代目小川治兵衛が作庭し、屋敷の設計施工は二代目八木甚兵衛によるものだった。2012年に国の重要文化財に指定されている。昭和19年(1944)に、住友家より西園寺公望がその設立に尽力した京都大学に寄付され現在に至る。

二代目八木甚兵衛は、岩崎家深川別邸の和館を建てた東京の柏木貨一郎(1841~1898)や、明治29年(1896)に竣工の岩崎久彌邸・和館の設計施工をした岡本春道と並ぶ、明治後期を代表する関西の大工棟梁であった(*3)。



(図7-50) 伊庭貞剛邸「活機園」 和館部座敷
明治37年(1904)竣工



(図7-51) 清風荘
大正2年(1913)竣工

7. 4. 2 庭師・七代目小川治兵衛

『庭師 小川治兵衛とその時代』を著した鈴木博之は、そのなかで日本の近代化と庭園の関係について下記のように記していた(*4)。

話を飛躍させるなら、近代がもたらしたものが西洋建築といういかにも地に足の着かない「空間」であったのに対し、庭園には「場所」があったのだとも言えよう。そこには動かすことのできない確固たる場所があった。そのことが庭園に佇む人々に、安心と誇りと慰めをもたらしてくれるのである。

無隣庵の庭園は、近代化への道を歩みはじめた日本が、新しい日本のアイデンティティの表現として、はじめて示し得た成果であった。無隣庵の庭園は西欧の摂取では

なく、また、伝統への回帰でもない。それは日本の近代化を推し進める権力者たちが自己を投影できる、はじめての表現だったのである。(中略)

小川治兵衛による無隣庵庭園は、日本が近代化を自覚的に推進してゆくことになる1894～95(明治27～28)年の造型を、庭園の世界において実現したものであり、造園の歴史を超えた大きな国家的なスケールでの時代精神の表現となるのである。山県有朋が明治体制というべき国家組織の設計者であるように、彼が所有した無隣庵庭園は近代化を選択した明治期日本の時代の表現であった。



(図7-52) 山県有朋京都別邸・無隣庵庭園
明治29年(1896)完成
明治35年(1902)東部分庭拡張



(図7-53) 西園寺公望京都別邸・清風荘庭園
大正2年(1913)完成

幼名・山本源之助であった小川治兵衛(1860～1933)は、山城国乙訓郡新神足村に生まれた。18歳での小川家・美津との結婚により婿養子として入籍し、明治12年(1879)には小川家の家督を相続している。七代目となった小川治兵衛は、代々「植治」と屋号で呼ばれる植木屋の小川家を引き継いだ。

小川治兵衛の原点は、山県有朋の京都別邸である無隣庵の庭園にあった。日清戦争を乗り越えた日本は、それまでの西欧文化修得の段階を終え、主体的な試みを行える水準にまで成長していた。その時に政財界の人々の「和魂」の支えになったのが茶道の世界だった。しかし山県は、茶道より大きな庭園の世界に足を踏み入れていた。山県は小川治兵衛を使って自らの庭園の構想を実現していたのである。室町時代以来の日本庭園は「石を立てる」という言葉に表れているとおり、象徴的意味世界の「定石」が支配していた。しかし山県は、そのような従来の規範にとらわれず、京都疎水の水を「流れ」として取り入れ東山を借景とする雄大な構想で庭園をつくりだした。それが無隣庵庭園であった。石は立てずに伏せ、水を静止した池ではなく流れとして用い、ツツジやサツキを低く刈り込み、苔は用いずに芝生で広がりを生み出した。その庭は、屋内から眺めるだけではない園遊会にふさわしい近代の庭園となった。すなわち室町時代以来の象徴主義庭園から、英国の自然主義庭園にも通じる広が

りある近代庭園が生み出されたのである。そしてこの無隣庵庭園が小川治兵衛の作庭手法の原点となった。

南禅寺・鹿ヶ谷界限では、近代日本の政財界の重鎮たちによる別荘づくりが次々と営まれたが、その庭園群を作庭したのが小川治兵衛だった。なかでも明治38年完成の対龍山荘、大正9年完成の住友の有芳園、昭和3年完成の野村徳七の碧雲荘などが代表的な庭園である。平安神宮や円山公園の庭園、関東では三井家・岩崎家・細川家の庭園も手掛けていた。

住友での最初の作庭は前述の住友家茶臼山本邸の庭園だったが、その後、旧・田辺貞吉邸から住友家本邸となった住吉邸庭園、東京麻布別邸、須磨別邸東邸庭園、そして前述の有芳園の作庭を行っている。また、住友家が建設した西園寺公望の清風荘・東京の駿河台本邸・静岡興津の坐漁荘の庭園も小川治兵衛の作庭によるものであった。

小川治兵衛は約1万坪ある平安神宮神苑の作庭を行っていた。春翠は明治28年（1895）の遷都千百年記念祭協賛会の評議員となり平安神宮の造営に関わるようになっていたが、この大庭園の作庭の出来栄を見た春翠が、平安神宮神苑の規模を上回る住友家茶臼山本邸の慶沢園の作庭に小川治兵衛を選んだものと思われる。この植治の人柄は「円転滑脱」で人当りの良い人物でもあったといわれ、庭園築造にかかる前年の10月に春翠は小川治兵衛を連れて金沢兼六園を訪れていた。春翠は岡山後樂園も訪れており、慶沢園の構想を考えるうえで大名庭園を参考にしていたといわれる（*5）。慶沢園は、数ある小川治兵衛の作庭のなかでも最大の庭園であった。



（上 図7-54） 野村徳七別邸・碧雲荘庭園
昭和3年（1928）完成



（右上 図7-55） 上図黄色丸印の永観堂多宝塔 （右下 図7-56） 碧雲荘庭園 東端部にある滝

註

- (* 1) 矢ヶ崎善太郎著
『住友茶臼山本邸から移築された清涼寺澄泉閣について — 八木甚兵衛の和風建築に
関する研究』 804頁
平成17年度日本建築学会近畿支部研究報告書 9015
- (* 2) 前掲書 804頁
- (* 3) 鈴木博之著『建築の遺伝子』 139頁
2007年 王国社
- (* 4) 鈴木博之著『庭師 小川治兵衛とその時代』 74～77頁
2013年 東京大学出版会
- (* 5) 前掲書 103～105頁

図版・写真

- (図 7 - 4 2) 住友史料館所蔵
- (図 7 - 4 3) 同上
- (図 7 - 4 4) 同上
- (図 7 - 4 5) 新居浜市広瀬歴史記念館所蔵
- (図 7 - 4 6) 筆者撮影
- (図 7 - 4 7) 同上
- (図 7 - 4 8) 同上
- (図 7 - 4 9) 同上
- (図 7 - 5 0) 同上
- (図 7 - 5 1) 京都大学ホームページ「清風荘」
- (図 7 - 5 2) Wikipedia free media repository
- (図 7 - 5 3) 京都大学ホームページ「清風荘」
- (図 7 - 5 4) 筆者撮影
- (図 7 - 5 5) 同上
- (図 7 - 5 6) 同上

結章

本研究において、第1部では、「野口孫市の人とその時代」と題し野口孫市という「人」に焦点を当て野口がその建築術を駆使するに至った人間的な素地やその生きた時代を浮き彫りにすることに主眼を置いた。そして第2部では、具体的な作品事例を選び、野口の建築術そのものについて記述・分析し考察してきた。

野口は、教職にあった伊東忠太や武田五一と異なり、建築論的な文章をその卒業論文以外に残していない。あくまで住友本店臨時建築部の初代技師長として「実践を旨とする」建築家であった。そのため野口について建築家研究として取り組むことは、自分の作品について述べた文章がないという点で、および「住友の建築家」という特殊な立場であった点で、やや研究しづらい建築家であった。しかしこのような困難さのなかで、1980年代から1990年代にかけて、序章で記述した坂本勝比古先生の研究に代表される野口に関する既往研究が成されていた。

ところが2014年、野口の遺族の二人に野口に関する多くの資料が残されていることが判明した。これらの新資料が住友史料館に寄贈されたことを契機として、この野口孫市研究は始まっている。その遺族に残された多量の資料のなかでは、野口による膨大な量の西洋建築の透写習作や水彩による風景画スケッチ群が大きな比重を占めていたが、これらの資料のなかでも野口は建築論的な文章を残していなかった。従って建築家・野口孫市を研究するには、基本的に野口の建築作品や図面および習作スケッチなどから、野口の設計意図を読み解くという方法を採らざるを得なかった。従来野口孫市に関する編年の記述を主とした既往研究との主な違いは下記の5点にある。

1. 新たに見つかった多量の西洋建築の透写習作や水彩による風景画スケッチ群の紹介と考察。
2. 数少ない野口による建築論文のなかで、“Comfort”を重要なキーワードとしていた卒業論文を位置づけたこと。
3. 作品分析において、特に「幾何学的な骨組みや思考モデルなど図式的思考」の抽出を行ったこと。
4. 作品分析を行う対象を少数の代表作に限定したうえで出来るかぎり詳しくその作品が成立した背景や条件の理解に務め、そのことにより「野口がつくり出そうとした場所の意味構造」すなわち野口の設計意図を分析的に理解しようとしたこと。
5. 野口の「設計すること」という営為を推論的に追体験することを目的としたこと。

特に既往研究との違いを要約するならば、この野口孫市研究の目的が、野口の設計意図や方法そしてその特質など、「野口孫市の建築術は何であったのか」という問題設定にある。すなわち、野口の設計行為を追体験し、その意図や方法など「つくる営み」を明らかにすることを目的とした研究であったと言えよう。

この結章では、下記の6節から構成し、その問題設定に対するまとめとしたい。

- 8. 1 野口孫市の建築術の追体験
- 8. 2 「西洋」と「日本」
- 8. 3 モダニズムへの胎動
- 8. 4 歴史的な振り子のなかで
- 8. 5 野口孫市の逝去、そして住友本店臨時建築部から日建設計へ
- 補一 1 野口孫市の作品一覧
- 補一 2 野口孫市年表

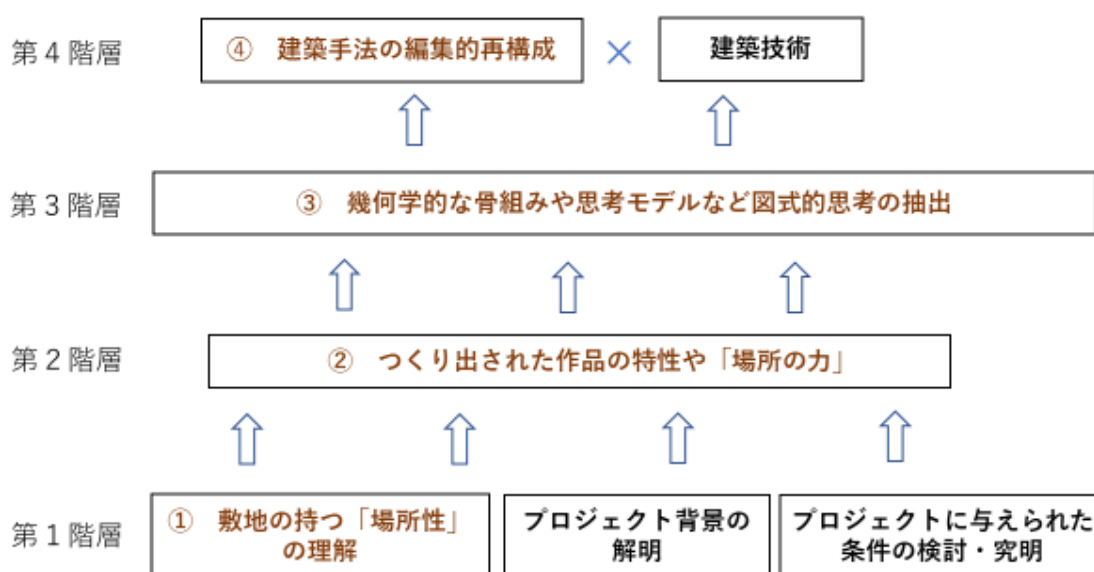
結章の中心的な節は、8. 1である。「野口孫市の建築術とは何であったか」という問題設定に対する仮説への方法として、「野口孫市の建築術を追体験する」ことを各章では旨としてきた。本章では、各章で記してきた野口の建築術を全体として設計プロセスの追体験としてまとめ、その意義は何であったのかを分析考察する。建築史研究における追体験の重要性については序章と第2部の序文で述べたとおりである。建築を作る主体を基軸にして建築家研究を行なうことを本論文の立脚点としてきた。野口孫市の建築術を追体験しその主体の「つくるという営為」を明らかにすることで、野口が生きた時代に顕著にみられた特有の建築的課題を照らし出すことが可能になると考える。そしてその照射のための方法として、本章では設計プロセス全体の追体験を行う。

8. 2、8. 3、8. 4は、野口の建築術に現れていた特質やその歴史的な位置づけである。この特質や位置づけを、視野を拓き日本の近代建築史全体のなかで考察する。8. 5では、その対象とする歴史的照射範囲を限定し、野口の死後その建築術がどのように後世に継承され住友本店臨時建築部の後裔である現在の日建設計に至っているかについて概観する。最後に参考として、野口孫市の作品一覧と年表を作成した。

8. 1 野口孫市の建築術の追体験

8. 1. 1 設計プロセスから辿る野口孫市の建築術

野口孫市の建築術の全体像を理解するため、第4章から第7章までの全プロジェクトを見渡し、全設計プロセスを4つの階層（レイヤー）に分解して下記のモデルを作成した。そこから野口孫市の建築術を浮き彫りにしようと意図したものである。



(図8-1) 野口孫市の建築術の追体験

上記のモデルは、第1階層から第4階層まで順次、建築術が地層を重ねるように展開されることを表現している。このような設計のプロセスモデルは、現代の私たちが設計する場合においても変わるものではなく、現代における設計プロセスにおいても、第1階層のプロジェクトの与条件を理解し敷地条件を読み取ること、第2階層のプロジェクトの目的を明確にすること、第3階層の典型的な建築思考、そして第4階層の建築手法の組み合わせを行っている。これらの建築的思考を、建築技術を駆使し設計図書として具体化し、その設計図書に基づいて施工がなされているのである。しかし当然ながら、それぞれの時代や社会の在りようで、このモデルで照らし出される内容は異なってくる。ここでは、この設計プロセスモデルを野口に当てはめてみることで、野口が生きた時代と野口の建築術の特性を浮き彫りにしたい。

これまでの日本近代建築史のなかで、野口の建築は西洋様式建築に習熟した巧みな事例として取り扱われることが多かった。しかしそれはこのモデルでいえば、第4階層の西洋建築手法の習熟に相当するだけで、野口の建築術の全体像を掴むためには、十分な理解ではないと考える。すなわち野口の建築術の全体像を理解するためには、第1階層から第3階層までの設計プロセスについても、野口は何をしようとしていたのかを詳しく見る必要があると考えるものである。

確かに野口の建築には、第4階層で扱うところの当時の西洋建築についての様式的な習熟度や当時の建築技術の応用について高いものがあつた。しかし、野口が「実践を旨とする」建築家としてその設計する建築の本来の目的としたのは、第2階層の「② つくり出された作品の特性や場所の力」にあつたのではないかと考える。施主である住友春翠を始めとして、その建築を使う人々の利便性や快適性、更にはつくり出された意味世界の深さといった「場所の持つ力」をつくり出すことこそ、実践的建築家に最も要求されることだつたはずだからである。第4階層の西洋建築の様式的な習熟は、第2階層でつくり出される「場所の持つ力」を美的もしくは技術的に補強する手段であつた。また第3階層は、第2階層の意味的世界と第4階層の建築手法の編集的再構成の橋渡しをする重要な役割を担つていた。意味的世界を建築手法や建築技術を用いて構築する上で、その基本となる骨組みをまず組み立てる必要があつたからである。本研究では、野口がそれぞれのプロジェクトにあたり、幾何学的な骨組みなど図式的思考を組立てていたことを分析的に抽出した。第2階層で構想される「場所の意味」を建築として具体的につくり出すために、野口はすぐに既存の建築様式を当てはめたのではなく、またすぐに当時の建築技術を応用したのでもなく、その前にこの第3階層の設計プロセスを行つていたことに野口の建築術の特徴があつた。野口はその骨組みのうゑに、第4階層の建築様式的な手法を取捨選択し更に自在に編集的に再構成してつたのである。野口は、西洋建築についての習熟力を背景に、その様式技法や建築装飾のディテールに至るまで綿密に組み立てており、また当時の建築の先端技術であつた構造技法や工事仕様書などを使って設計し建設してつたと言えるだろう。

第2階層を充実するうゑで、その手段として第3階層・第4階層があり、第2階層の基礎として第1階層があつたと考える。この研究中で第2階層にあたる各プロジェクトの記述で明らかにしようとしたのは、野口がどのような場所の意味をつくり出そうとしてつたのかということだつた。ただ、野口は言葉ではその設計意図について語つてはつない。従つて野口の建築を理解するためには、全設計プロセスを追体験するように辿り、その上で第2階層について考察する必要があると考へた。例えば第1階層のその建築が成立した条件を理解することは、第2階層の意味的世界を浮かび上がらせるためには、この研究に必須のことであつた。建築は、それが成立する「場」があつてはじめて成り立つものだからである。第2階層の野口による「つくり出された作品の特性や場所の力」は、当時のプロジェクトを取り巻く状況を十分に理解すれば、その野口の意図はかなり見えてきたと考へる。

建築を設計することとは、野口に限らずそこに何らかの「意味的世界」をつくり出すことである。野口の建築術においては、第3階層の幾何学的な図式的思考、そして野口が西洋建築の徹底的な学習と研鑽によって自家薬籠中のものとしていた第4階層の建築手法群の編集的再構成が、その第2階層を強力に補強する特徴として際立っていた。

なお野口の資質からこの第2階層に対する志向を補足的に記述するならば、野口の水彩による風景画に見られる「ある場所の持つ特性を野口固有の観点や感性から写し取る方法的態度」を挙げておきたい。野口の水彩画には、野口というフィルターを通して明らかにされたその場所の特性が込められていた。「風景画を描くこと」とは、その場所に対する画家の意味世界の切り取り方を如実に表すものだからである。またもう一点野口の資質について挙げるならば、野口の卒業論文において“Comfort”を重要なキーワードとしていたことにも見ることができる。野口の主な関心は「使い手」にとっての快適性・意味性であり、少なくとも自己表現としての建築ではなかった。このことは、野口が中之島図書館と須磨別邸という全く異なる建築の設計を同時に進めていたことにも表れている。この「使い手」を主軸に置こうとする設計の方法的態度は、住友本店臨時建築部の技師長であるが故の「実践を旨とする」建築家の宿命でもあった。

この野口の建築術を分析するための設計プロセスモデルのなかに、各階層のなかで茶色の文字で表示した項目がある。これらの項目に①～④の番号をふったが、この4項目について、野口の建築術を追体験し野口の建築術の全体像が何であったかを要約的に理解するため、その各階層の事例的な内容を各章のプロジェクトから簡潔に記す。

① 第1階層：敷地の持つ「場所性」の理解

ある場所の持つ自然地形や、その場所に人々が住んできた歴史から形成されるのが「場所性」である。「場所性」を波のエネルギーに例えるなら、その場所の波長を読み取りその波長に「建築の持つ」力の波長を同期させることで、より大きな「場所のエネルギー」を生むことが建築術の極意であると言えるだろう。これは現代においても変わることはなく、その最初になされるべきことが、敷地の持つ「場所性」を読み取ることであった。しかし明治の時代にあっては、その時代特有のものが潜んでおり、野口のそれぞれのプロジェクトの敷地では下記のような「場所性」が現れていた。野口にとっての最初の課題は、まずこれを感じ得ることだったはずである。野口の代表作品として採り上げた須磨別邸・中之島図書館・日暮別邸では、特にその「敷地が持つ場所性」という意味で夫々の性格が全く異なるものであった。須磨別邸は自然や歴史豊かなの景勝の地、中之島図書館は都市の中心市街地、日暮別邸は瀬戸内海に浮かぶ近代工業の島だった。

野口の建築作品では、それぞれの「敷地が持つ場所性」から、まるでその土地に合った植物がその土から立ち上がってくるように、全く異なる建築が立ち上がっていたのである。この「敷地の持つ場所性」に注目することは、野口の建築作品を理解しその実践的な建築術が

何であったのかを掴むためにも基本的なことであった。財閥としての住友がその時代の状況に対応するため様々な建築を必要としたことから、住友の建築家であった野口は、様々な異なる敷地を持つ特性と否応なく向きあわざるを得ないという課題を常に背負っていた。それが野口特有の建築を生み出す土壌となっていたのである。

須磨別邸

敷地は、六甲山系を背に明石海峡を挟んで淡路島を見渡すように山と海に挟まれた地にある。古来の物語に満ちた白砂青松の須磨海岸である。須磨は、古来の日本文化に彩られた場所ではあったが、同時に明治期には神戸に居留した外国商人たちの別荘地としても注目され、また皇室をはじめとする日本の富裕層の別荘地としても脚光を浴びていた。言わば、日本の歴史や文化を背景としながらも、西洋人たちによっても「発見」された別荘地でもあった。すなわち日本の伝統文化と西洋人から見たリゾート地としての両方の性格を兼ね備えた2重の意味を持つ場所だったのである。

中之島図書館

敷地は、恩師・辰野金吾の設計が設計する中之島の日本銀行大阪支店に対し公園を挟んで向き合う場所にある。中之島をはじめとする当時の大阪商業市街地は、2階建ての木造商家が延々と広がる江戸期以来の都市構造を引き継いでいた。その江戸期以来の木造商家群が広がる伝統的市街地のなかで、この敷地には西洋的都市景観が生まれる潜在的な力が、日本銀行大阪支店が誕生することにより発生していたといえるだろう。野口は、その力を最大限に引き出す役割を担った。東京では、三菱による一丁ロンドン等の西洋的都市景観が現れていたが、大阪ではまだ西洋的都市景観は現れておらず、その可能性を秘めた場所だった。



日暮別邸

敷地は、住友の命運を賭けて銅製錬所を移設した瀬戸内海の孤島・四阪島の山の中腹にある急傾斜地にある。四阪島は、明治期に急速に進展する鉱工業の近代化を象徴的に示す場所であった。四阪島という場所そのものが、近代工業を担う宿命的な課題が込められた場所であったと言えるだろう。その課題に導かれるように建てられた日暮別邸は、「近代という場所性」と格闘した建築となった。野口は、この四阪島の「日暮の丘」と呼ばれる山の中腹の急傾斜を敷地として自ら選び取っている。

茶白山本邸

野口の和風建築は、様々な場所に建っていたが、なかでも「その敷地の持つ場所性」が最も顕著だったのが、住友家茶白山本邸だった。茶白山本邸の敷地は、上町台地の西端に位置している。大阪湾に沈む夕陽を丘の上から観想する仏教的な修行の場としていた夕陽丘という古くからの地名があったように、大阪では上町台地の西端は特別の場所の意味を持つところであった。そのことにより、この場所は幕末から明治初期にかけて、文人たちによる集いの地となっていた。後年、大正期になって、高台下に新世界の雑踏化が進むことは、建設当初の住友春翠には知る由もなかった。



② 第2階層：つくり出された作品の特性や場所の力

第5章の「5. 3. 5 中之島図書館における野口の建築思考」で下記のように述べた。

私たちは物理的な空間を「経験」することによって、その空間に意味を感じ取り、自分にとっての親密な場所を組み立てている。明治の人々が都市や建築で、豊かな体験を通じて具体的に自分達の場所をイメージできるよう、野口はその生活の舞台とな

る建築を目指していたと考える。これは人々が場所の意味の豊かさを体感できる「器」としての建築をつくることだったといえるだろう。

人々が場所の意味の豊かさを体感できる「器」としての建築とは中之島図書館に限られたことでなく、野口の作品においては、どのプロジェクトでもその建築がつくり出す「場所」がどのような意味や価値を持つものであるべきかという問題設定が常に明確になされていた。野口は、第1階層で述べたような様々に異なるプロジェクトを取り巻く状況を踏まえ夫々に異なる固有の「場所の意味」をつくり出していたが、これが第2階層の「つくり出された作品の特性や場所の力」である。この「あるべき様につくり出された場所の意味」こそが、野口が夫々の作品で具体的に実現しようとしていたことであり、すなわちそれが、『場所の意味の豊かさを体感できる「器」としての建築』であった。

施主である住友春翠やその建築を使用する「使い手」は、無意識的にはあったとしても、そこでつくり出される「場所の意味世界」に自分のその時の「在りよう」を委ねることになる。この使い手から託された「場所の意味世界をつくり出すこと」こそ、実践的建築家としての野口に課せられた主要な命題であった。

須磨別邸

野口は、卒業論文で“Comfort”ということ重視していたが、野口は、須磨別邸で卒業論文の内容を具体的な建築に実現しようとしたと思われる。日本の気候と日本人の生活習慣に相応しい洋館を実現しようとするものであった。敷地全体や邸宅内部において、野口は様々な場所的な意味を散りばめていたが、なかでも建物周辺の敷地を3つにゾーニングすることで、それぞれに建築とランドスケープが一体となった3つの場所の意味を新たにつくり出していたことに顕著に現れている。

- ①：建物正面玄関前に広がるフォーマルな迎賓ゾーン
- ②：春翠の子弟の教育のためのプライベート・ゾーン
- ③：須磨海岸を眼前に芝生が広がる、来客接待のための公的もてなしゾーン



中之島図書館

大阪ではじめての西洋的な都市景観による「都市イメージ」をつくり出し、この都市に暮らす人々に「知の殿堂ができた」という都市的メッセージを発信していた。また建築の内部では、「知の殿堂」の主人公である来館者本人に「上昇する象徴的な空間」を体感させていた。この中之島図書館の内外で生み出された西洋的な場所の意味とは、明治という時代の「あるべき姿」を図書館として体現し、「その時代の社会理念」を建築にしようとしたものであった。大阪に暮らす人々にとって外から見上げるだけの存在である日本銀行大阪支店とは違い、誰でもが入れ「上昇する象徴的な空間」を自ら体験できる中之島図書館は、その社会的存在としての意味に大きなものがあつたはずである。野口は、このことを意識してこの建築を設計していたのではないか。中之島図書館には、大阪で暮らす人々に対する都市的メッセージと建築的メッセージの両方が込められていた。



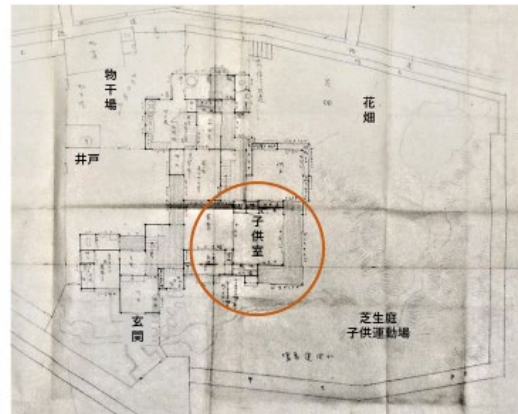
日暮別邸

船で新居浜からやってくる海上からの最初の視線を受け止め、燧灘と四阪島全体に「住友春翠はここにいる」というメッセージを発信していた建築である。その洋館と和館から成る日暮別邸からは、燧灘と製錬所を見渡すことができ、また製錬所の各所からも見ることができる「簡素であること」を旨とした建築となっていた。その簡潔な建築としての在りようは、四阪島が明治の近代工業の島であることを象徴する意味をも放っていたのである。

野口孫市自邸

この当時の通常の和風邸宅では、東南の最も貴重な場所を接客のための書院などとするものだった。しかし野口はこの最も良い場所を子供達の部屋としていたのである。子供達の生活を第一義的に考える和風建築と庭による構成としていた。子供室の外に広がる庭は芝

生庭とされ、「子供運動場」と自筆の図面に書き込んでいる。またその北側には「花畑」とも書き込んでいた。野口の自分達家族の生活に対する考え方が、如実に「場所の意味」として表現された建築だった。



③ 第3階層：幾何学的な骨組みや思考モデルなどの図式的思考の抽出

野口は、幾何学という抽象的なモデルをまず組立てることによって、それぞれの意味を持つ場所を全体として秩序立て、それぞれを具体化するための基本骨格を形成していた。野口はこの幾何学モデルを、全体の場所のそれぞれの意味を構造付ける強力なツールとしていたのである。この骨組みには、必ずしも幾何学的図形によるものだけではなく、軸線構成や立体幾何学なども駆使され、その建築の原型が形成されていた。図式的な建築思考ともいえるだろう。このように野口が、第2階層の「場所の意味」を組み立てること言い換えれば「その場所の意味群」を配列することのために、幾何学的骨組みや思考モデルといった図式的思考をしていたことを第3階層として主に図面や復元模型などから抽出した。

第1階層の「敷地の場所性の理解」や第2階層の「場所の意味群を新たに作り出すこと」は、その内容がどうであれ建築設計において一般的に行うことである。第1階層・第2階層の前記の考察では、野口に見られるその時代における具体的な在りようを記述してきたが、この第3階層に、野口の建築術の当時では顕著な特徴が現れていたことを指摘したい。「野口孫市の建築術」の最も大きな特徴がここにあったのである。

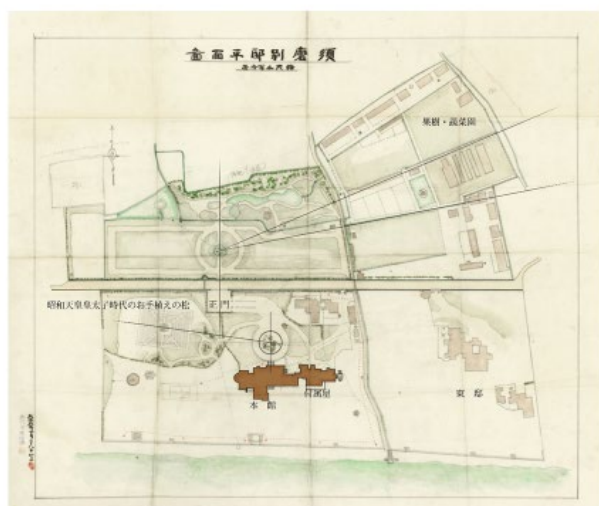
モダニズム以降の自由な幾何学に慣れ親しんでいる我々から見れば、取り立てて強調することはないかもしれないが、当時の左右対称という単純な幾何学に基づいて断片的な建築様式手法を器用に組み合わせることが当時の一般的な建築思考であったことを考えると、この野口の「自由な図式的思考」は画期的なことであったと考える。

須磨別邸

約4haの西洋式庭園・果樹蔬菜園と洋館からなる敷地全体に、1次骨格と呼ぶところの西洋的アーバンデザインによる軸線構成を骨組みとして敷地全体計画が行われていた。この幾何学は、全体に散らばった要素を構造づけるものであり、放射状など複数の軸線構成や、なかでも円の中心を軸線の方角転換に用いていること、軸線を使って建築を敷地の中に定位していることに特徴があった。

建築そのものについては、2次骨格と本研究では呼んでいる風車型を思わせる図式的思考が抽出できる。中央の大きな屋根を中心に、四方に風車が広がるようなダイアグラムを見て取ることができるものである。

また、3本の塔がこの建築の持つ水平性の中に、垂直のリズムを刻んでいた。それぞれの塔は各方向からの視線を受け止める役割を果たしており、正面の国道から見える八角塔、海からの視線のランドマークとなる四角塔、そして西側の庭園全体から見える須磨別邸の住友の人々の象徴であったマルキーズの塔といったように的確に配置されていた。



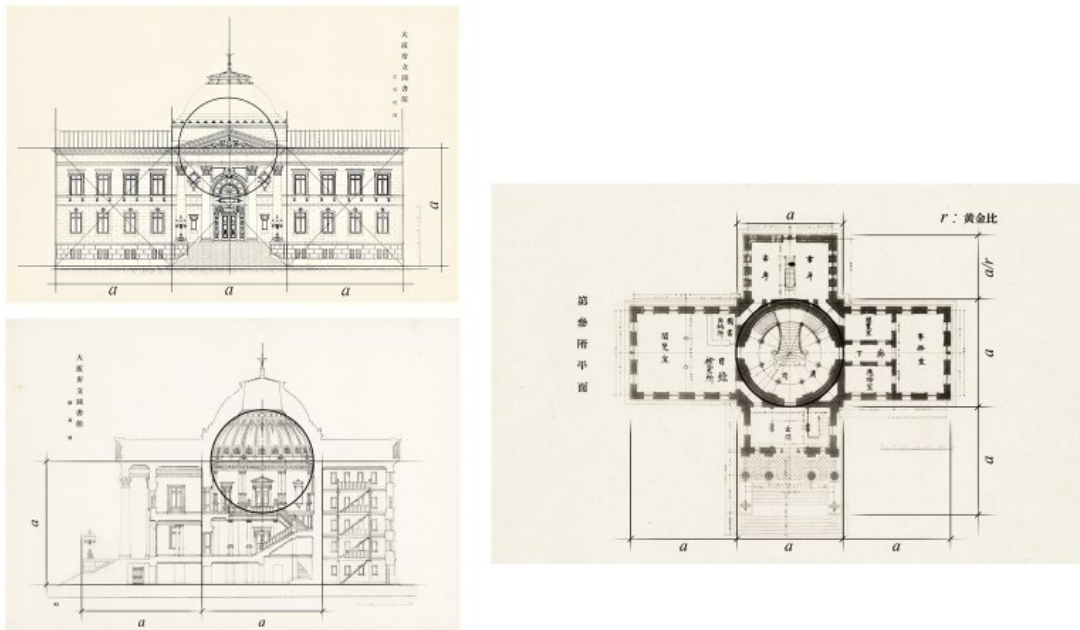
中之島図書館

日本銀行大阪支店に対し向き合って平行するような建築構成とされていた。一辺の長さ a の3つの立方体が横に並列して配置されている構成である。図書館の正面中央軸を、日本銀行大阪支店の正面中央軸に完全に一致させ、公園を挟んで「経済」を象徴する日本銀行大阪支店と「文化」を象徴する中之島図書館が向き合う西洋的都市景観を形成していた。

3つの立方体のうち中央の立方体の上部には、仮想の球体が浮かべられている。この球体は、その中心を中央の立方体の上面の中央に据え、ドームの内面と3階の床面に接する内接円を描けるものである。古代ローマのパテオンと同様、その中心の高さは内部のエンタ

ブラチュアのコーニスの高さに一致させている。また設計当初の図面では中央に自然光の入るトップライトが描かれていた。これらのことから、野口が古代ローマのパンテオンを意識していたことは明らかと考える。

なお寸法 a は、中央3つの立方体の辺長であるだけでなく、正面大階段の左右にある照明灯の台座の先端位置を決める寸法にも使われていた。このことを、平面図および断面図の分析から明らかにした。野口がこの証明灯に重要な建築的意味付けを行っていたことを裏付けるものである。なお、この a の寸法は、45尺（13,635mm）であった。

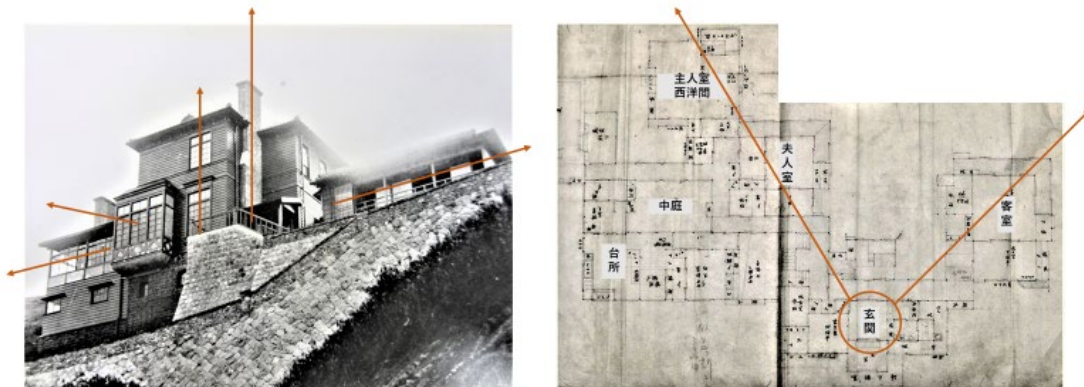


日暮別邸

海に向かう等高線に並行して、直線状に洋館と和館が一体となって配置されていた。平面計画では、応接室を核とする須磨別邸と同じような風車型を思わせる図式的な思考を見取ることができる。また外観は、石垣の上に据えられた近代彫刻のような相互貫入的な立体構成がなされていた。本論中では、同じように相互貫入的な立体構成を見せていたオランダ構成主義のデュドック設計によるヒルフェルスム市庁舎と比較したが、日暮別邸の竣工は1906年、ヒルフェルスム市庁舎の竣工は1930年であることを考えると、野口の先進性をここに見ることができるかもしれない。

平田讓衛邸

来客ゾーンと生活ゾーンが、玄関を起点に逆八の字型を描くように、庭園を挟んで分離される平面計画がなされていた。また主人室や夫人室は雁行するように配置されていた。一方、台所や女中室は中庭を挟んだ奥にゾーニングされており、ここでも野口の図式的思考を見取ることができる。



これら野口が使っていた幾何学で特筆すべき点は、その建築に合わせて最もふさわしい幾何学が選ばれていたことである。野口は、中之島図書館と須磨別邸では全く異なる幾何学を使っていた。中之島図書館では中央軸に凝縮するような自立完結する立体幾何学を使っていたが、それに対して須磨別邸で使われた幾何学は、関係する様々に広がった諸要素を全体として秩序づける拡散的な平面幾何学だった。この幾何学の使い方は、日暮別邸や茶白山本邸・伊庭貞剛邸の平面計画においても見ることができる。さらに日暮別邸では、彫刻的で動的な立体構成という幾何学まで導入していた。野口の建築術においては、実際には見ることのできない重要な特質がこの幾何学に隠されていたのである。

④ 第4階層：建築手法の編集的再構成

第1部の「2. 1. 4 野口孫市による西洋建築の透写習作」で紹介したとおり、野口は西洋建築の膨大な量にのぼる学習や研鑽を行っており、それらは各種の建築様式の習作、建築要素の習作、様々な装飾技法など多岐にわたっていた。また1年あまりにわたる欧米の建築視察巡遊も行っていた。野口は、これらの学習を通じ、西洋建築のあらゆる手法を自家薬籠中のものとしていたのである。その西洋の建築手法の武器庫の中から、それぞれのプロジェクトにおいてその状況に最も相応しい手法が選び出され、第2階層で作り出した新たな場所の意味世界の文脈と第3階層で考え出された図式的骨格を下敷きとして、自在に建築手法の再構成が行われていた。そこでは豊富な装飾技法も駆使されており、それらの技法はディテールの隅々に至るまで精度が貫かれていた。時には慣れ親しんだ日本の伝統的な建築手法をその編集的再構成に採り入れていたことにも注目すべき点がある。野口は、手持ちのカードを切るように、最適の建築手法を繰り出していたのである。

須磨別邸

内部は英国ルネサンス様式を基調とし、外観はヴィクトリアン・コロニアル様式を基調としながら多彩なデザイン要素が組み合わされていた。左下の写真は食堂だが、天井のデザイン・入口扉三方枠・照明器具やドレープデザインなどに、野口の習熟した装飾技法を見ることができる。また右下の写真は外観意匠を建築的エレメントに分解したものが、多岐にわたる建築材料のデザイン手法が巧みに組み合わされていることが分かる。

なお須磨別邸で特筆されるべきことには、第4章で言及したとおり、洋館である須磨別邸に屋根の構成や庭園と建築の関係などにおいて日本の伝統的建築手法が自在に組み込まれていたことも挙げられる。



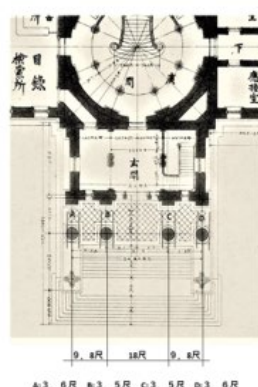
中之島図書館

様々な建築手法が、西洋建築様式の規範に則って自在に組み込まれていた。なかでも、中之島図書館の存在を遠くにまでメッセージとして送っていたペディメント・列柱・大階段から成る正面玄関ポルティコが重要である。中之島図書館の正面玄関の構成で、まず決められたのが次頁の右図の赤で示す正面2本の柱が構成する矩形の比例関係であったことを第5章で明らかにした。この矩形の幅と高さの比例関係は、幅は正確に18尺であり高さは30尺で、丁度3：5の比例関係となっていた。これはフィボナッチ数列に乗る比例関係であり黄金比に近づく矩形である。

次頁図中央の平面図は、4本の正面列柱の根元の位置での柱径を示している。これは筆者による現地での実測から割り出したものだが、中央2本の柱の径が3尺5寸であるのに対し両側2本の柱の径は3尺6寸となっていた。1寸だけ両側の柱径が太かったのである。この1寸の柱径の違いは誰も認識できるものでないが、正面の2本の柱による黄金矩形と一体の措置とすることで、いわばエンタシスと同じように、少しでも正面玄関に安定

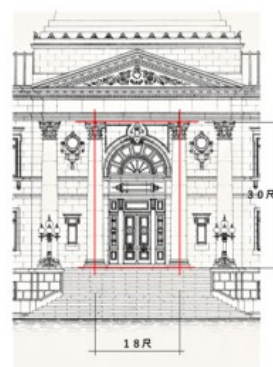
感を与えようとする視覚効果を野口は意図していたと考える。このように野口は、西洋様式建築の正統的な手法を規範としながらも、そこに独自の精緻な工夫を織り込んでいたのである。

なお内部では、日本で最初期の鉄骨ドーム構造による空間のなかに据えられたバロック階段も「上昇する象徴的な空間」を体現しており、野口の自在な建築手法の編集的再構成の技量を示している。



A3. 6尺 B3. 5尺 C3. 5尺 D3. 6尺

(図5-38) 正面列柱の柱割り



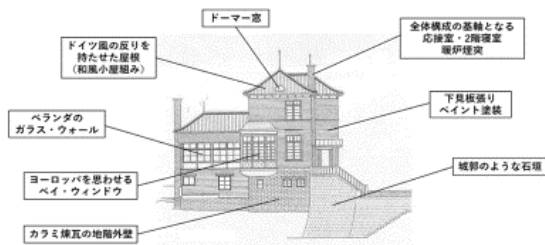
(図5-39) 正面2本の柱が構成する黄金矩形

日暮別邸

外観では、ドイツ屋根風の「そり」、チューダー様式やジャコビアン様式でよく使われていたベイ・ウィンドウ、城壁のような石垣、別子鉾山の象徴とも言うべきカラミ煉瓦の地下外壁、アメリカのコロニアル風の下見板張り等、様々な建築的要素が折衷的に組み合わせられデザインされていた。また内部では、英国のイングルヌックやマッキントッシュ風のデザインなど、様々な建築手法の編集的構成を見ることができる。

平田讓衛邸

次頁の右図に示す平田邸の書斎では和洋折衷をみせているが、これは日本の住宅での最も初期の和洋折衷の事例であると思われる。天井は網代で一面に仕上げられ、壁面には長押風の水平材を巡らせる一方で、暖炉や造り付けの家具、床の寄木張りの上にカーペットを部分敷とし窓上部の欄間にはステンドグラスを入れるなど西洋風のデザイン要素を組み込んでいた。この傾向は後の時代では一般的な手法となるが、野口の設計による平田邸はその先駆となっていたと考えられる。



(図6-72) 立面図にみる“Eclecticism”



8. 1. 2 「使い手」の視点から

以上、4つの階層に分けた設計プロセスモデルから野口の建築術を辿る試みを行ったが、この設計プロセスモデルは、あくまで建築の「つくり手」から見たロジックであった。建築という存在が生まれその働きが発現する現象には大きく二つの側面がある。その建築を作り出す「送り手」と、その建築を使用する「受け手」の二者の存在である。建築が生まれその働きが実現する現象において「受け手」がいるのは当然のことで、前述したように実践的な建築家としての野口は建築を使う人々が体験する快適性や意味性を重視していた。

それでは、野口が生み出した建築における「受け手」側の経験はどうであったか。野口の建築術の全体像を浮き彫りにするためには、野口が重視していたその建築を体験する人々の「建築的経験」を簡単にでも見る必要がある。「受け手」は、このプロセスモデルの逆を辿って、第2階層の「その建築がつくり出そうとした意味」に気づいてゆくものとする。

「受け手」の目にまず入るのは床や柱・壁などの建築的要素や建築装飾などだが、このプロセスモデルでは第4階層に相当する認識である。そのうちに「受け手」は「ああ、この建築はこうなっているんだ。」と第3階層の全体の骨組みを理解し、無意識的ではあるが、そこでつくり出された第2階層の「場所の意味世界」に自分のその時の「在りよう」を委ねることになる。

中之島図書館で言うならば、人々はそこに「明治の新時代の社会のあるべき姿」に自分を重ね、須磨別邸で言うならば、住友家の人々が国際的な視野と須磨の景観の中で「あるべき生活様式」を経験し住友家の人間としての矜持を養っていたことである。四阪島で言えば日暮別邸が、四阪島で働く人々にとって島全体の象徴となり、その風景全体の中に明確な刻印

を印していたことである。さらに和風住宅について言えば、そこに住む人々が「和」という身になじむ生活様式の心地よさを体感していたことであった。

野口の建築の評価は、「西洋様式建築の習熟」として語られることが多い。しかしそれは野口の建築術の設計プロセスの中の第4階層にのみに相当するものであり、野口の建築術の全体像を捉えた評価ではない。本論文で目指したものは、第4階層の建築形態の精緻さや当時の建築技術のなかでの秀逸さを分析することのみではなく、その建築がどのようにつくり出され、どのように人々に経験されたかにあった。その建築的経験の総体から野口の建築術として分析しようと試みたものである。野口の建築家人生は、「この建築としての価値は、いかにあるべきか？」という命題を、それぞれ具体的な建築において真摯に実現しようとした軌跡だった。言い換えれば、建築を設計するうえで、「その建築を使う人を想うこと」に対する心の容量が大きかったと言えるかもしれない。野口は、このことを言葉では語っていないが、あたかも寡黙な料理人が客をもてなすことに全力を注ぐように、野口はあくまで実践を旨とする建築家であった。

現代の我々がもし野口から学ぶことがあるとすれば、それは「その建築を使う人々を想う心の容量」かもしれない。情報化された現代社会の顕著な特性として、日本国中で均質的な社会構造が普遍化し、人々の存在基盤である「場所性」が希薄になっていく状況が挙げられる。いわゆる「没場所性(*1)」と呼ばれる現象である。このような現状にあって、野口が目指していた「場所の持つ豊かな意味をつくり出すこと」は、我々にとり困難なことではあるが決して忘れてはならないことであろう。

8. 1. 3 野口孫市の多元的な思考法

野口の建築術を追体験することから見えてくるのは、野口の自由な多元的な思考法である。一般的に建築家について言えることは、その年齢を経るに従って作風に展開がみられるものだが、野口の場合は、その短い建築家としての生涯のなかで、同時期に様々な作風を見せていたことに特徴があった。須磨別邸・中之島図書館・日暮別邸の竣工年は、この順でいえば明治36年(1903)・明治37年(1904)・明治39年(1906)である。須磨別邸と中之島図書館は、全く同時期に設計と建設が進められていた。また明治38年1月には野口は日暮別邸の基本構想を固めていたことが判明しているため、中之島図書館の完成後あまり日を置かない明治37年の後半に日暮別邸の構想は始まっていたと思われる。ほぼ同時期に、様々な異なる設計の考え方が進められていたのである。

前項で、野口の建築術の追体験を、設計プロセスを辿ることによって考察する試みを行ったが、そこから見えてきたのは、西洋建築や日本建築の規範にとらわれない自由で多元的な思考法であった。図書館に古代ローマのパンテオンを組み込み、ヴィクトリアン・コロニアル様式の洋館に日本の建築手法を忍び込ませる自在さには、瞠目するような多元的で自由な思考法を見ることができる。また第3階層の幾何学の選択にしても、全く異なる幾何学を

それぞれのプロジェクトにふさわしいように自在に選択しており、第4階層の建築手法群の編集的再構成でも、野口が膨大な学習をした西洋建築や慣れ親しんだ日本建築のあらゆる手法のなかから、自在に切り札のカードを繰り出すように設計していた。特に、竣工年では10年の経過があるものの、簡潔な外観の中之島図書館と大阪倶楽部の多彩な要素を組み合わせた複雑な外観の差にも野口の自由で多元的な思考法を見ることができるだろう。

野口の多元的な思考法は、江戸時代の固定的な儒教的思考体系から振り子が反動的に振れるように現れた、明治の文明開化の時代を席捲した「自由思想」にあったのではないかと考える。いうまでもなく福沢諭吉に代表される思想である。第1部の「1.4 東洋的な知的鍛錬の遺風と西洋の実践的自由思想」で述べたように、野口の父・野口野は福沢諭吉の思想に強く感化され明治の兵庫県の教育関係の重職に就いた人物だった。また野口の岳父・久保田讓も福沢諭吉に感化され慶応大学を卒業し文部大臣になった人物だった。この時代の教育関係者には慶応大学出身者が多くみられ、福沢の自由思想がいかに教育における精神的な軸となっていたかが分かる。野口の実父の蔵書には、福沢の書物の写本が多く含まれていたと記録されており(第1章1.4 註*3)、野口もその自由思想の影響を受けていたのではないかと推測するものである。

しかし思考法は、単純に書物から得られた思想によってのみ血肉化できるものでもない。野口の場合は、膨大な量にのぼる日本各地を描いた水彩画や西洋建築の習作スケッチに示されるとおり、鋭い観察力とそれを自在に絵筆に顕すことのできる能力、そしてそれらを素地とする多元的な認識法や思考法が、生来備わった資質として開花していたのではないかと考える。

註

- (1) エドワード・レルフ著『場所の現象学 没場所性を越えて』 187頁
ちくま学芸文庫 1999年 原著は1975年

8.2 「西洋」と「日本」

野口の多元的な思考のなかでも特に野口自身が意識していたのが、「西洋」と「日本」という課題であった。野口は英語で書いた卒業論文のタイトルを“An Essay on the Future Domestic Architecture of Japan”としていた。このタイトルのとおり野口は、西洋建築が溢れるように日本に流れ込み始めていた時代のなかで、全く異なる建築様式を持っている日本の建築が将来どのようにあるべきかという課題に常に向き合っていたのである。生活様式の大きな違いを越えて、日本の気候風土や生活習慣に合う建築をどのように生み出すかという自らへの問いでもあった。

また卒業論文の“Beauty”の項で、野口は東洋と西洋の両者が統合された新しい建築様式が遠い将来において生まれることもあり得るとしていた。しかし一方で、その困難さも指摘していた。真に日本的な性格を反映する洋式建築は、日本人建築家によってしか成し得ないものであり、それは西洋建築のデザイン要素を取捨選択するような操作ではなく、全く新たな方法で達成されるであろうことも示唆している。西洋と東洋の統合が、野口の重要な関心事であったことが分かる。

第2部で詳しく述べた野口孫市の建築術には、日本人でありながら自然に身についたような西洋的な素地を思わせるところがあったが、それらは野口の膨大な西洋建築についての学習・研鑽の賜物だった。その一方で、第1部の「2. 2 日本への視線」で紹介したように、日本の伝統的な「造り」から学び、あたかも日本の風景から何かを学び取ろうとするかのように日本各地の風景を水彩画や鉛筆画に描いていた。野口は、「西洋」と「日本」にそれぞれしっかりとその両足を立脚していたのである。

その「西洋」と「日本」の双方に立脚して、日本人にふさわしい建築的環境をつくり出すとしていた野口の試みは、例えば以下のように、その仕事の随所に顕れていた。

- ① 洋館と和館は渡り廊下で繋ぐだけの別々の存在と考えられていた時代に、伊庭貞剛邸や日暮別邸では、洋館と和館を合体し連続させ直線的に配置していた。特に伊庭貞剛邸では、建築のみならず洋風庭園と和風庭園もそれぞれ洋館と和館に組み合わせていた。
- ② 須磨別邸では、「庭屋一如」の考え方や屋根の構成方法をはじめとして、様々な日本建築の手法が組み込まれていた。
- ③ 住友家茶臼山本邸では洋館を書院風の和館で包み込んでおり、日本庭園の景観に溶け込むことのできる洋館のあり方を求めていた。
- ④ 和館である野口の自邸や平田讓衛邸の書斎は、「和」のなかに「洋」のデザイン要素を組み込んだものであり、日本での住宅における和洋折衷の先駆けをみることができる。
- ⑤ 日暮別邸の洋館部の内装腰板の鏡板には、通常ならばローズウッドやマホガニー等を使うところを、和館の平田讓衛邸の外装でも使っていた「杉皮」を使っている。

野口が行っていた「洋」と「和」を組み合わせる試みは、以上に留まるものではなく、いわゆる「和洋折衷」への志向は材料の使い方や工法などにおいても随所に見ることができる。

この「西洋」と「日本」という問題は、欧米の建築家ではない日本人建築家である野口にとって、宿命的に向き合わねばならない課題であった。しかし別の見方をすれば、欧米の建築家が「西洋」という一つの中心からしか展開できないのに対し、野口は「西洋」と「日本」という二つの複数中心から展開することができるという、結果的に「方法としての豊かさ」に恵まれていたと言えるかもしれない。思考の複数の立脚点を持つことができる豊かさである。これはあたかも楕円が二つの焦点からその図形が描けることにも喩えられる。野口の一つの焦点は徹底的に学習した「西洋」であり、もう一つの焦点は「日本」という確固たる立脚点であった。

このことは、現代の日本人建築家にも同様に言えることである。しかし「西洋」という立脚点が現代以上に明確に意識されていた明治の時代、この「西洋」が持つ際立った重みには現代の我々が想像する以上のものがあったと思われる。そしてその「西洋」の重さに拮抗するような「日本」についての認識にもまた我々が想像する以上の切実さがあったことと思われる。この「西洋」と「日本」という問題設定は、野口に多元的な思考を迫る強力な原動力を与えていたと推測することが可能ではないだろうか。

前項で設計プロセスから辿った野口のそれぞれの階層の建築術には、明治の後期に顕著に見られた精神文化的状況が色濃く現れていた。どの時代や地域においても文化は、財力と外界からの刺激そしてその文化の担い手の資質や技能があつてはじめて新しい文化が醸成されるものである。しかし何よりも重要なことは、それらの基盤の上にすべてを咀嚼し内面化する過程が必ず必要なことであつた。野口の建築術は、住友家に裏打ちされた財力、西洋文明という外界からの刺激そして野口の卓越した西洋建築様式を摂取する能力の三つの必要条件に加え、江戸期以来の日本文化を胎内に引き継いでいる野口が外来の建築的文明を咀嚼し内面化する過程において現れてきたものであつた。

序章において、野口と同時代の産業・科学・文学・教育・芸術・思想科学など様々な分野で、西洋文明の単なる習熟を超えた独特の輝きを放っていた人々の事例を挙げたが、これらの各分野においても外界からの刺激としての西洋文明を日本の伝統的精神文化のなかで内面化する過程で現れた現象だつたと言えるのではないだろうか。明治後期とは、日本人のなかに西洋文明が根を張って受胎し独自の成長を始める特徴的な時代であつたと考えることができる。

日本の近代建築史を研究する意義は、当時の日本人建築家たちが西洋文明を咀嚼し内面化し更に独自の展開を見せたことに光を当てることにあつたと考える。野口に限らず、伊東忠太や武田五一が注目されるのもこのような観点からだろう。建築の完成度の高さでいえば欧米諸国はもちろんのこと、上海の事例を見ても黄浦江沿い外灘バンド地区のパーマー・アンド・ターナー設計による旧・香港上海銀行（1923）は西洋建築としての精緻さ・規模において当時の日本の西洋建築を凌駕するものであつた。またインド総督府を設計したエドウィン・ラッチェンスは、野口と同年生まれの当時の英国を代表する建築家の一人であつたが、インドの建築的要素も取り込んだ見事な西洋様式建築をつくり出していた。ベトナムでもフランス人建築家が活躍していた。アメリカでは、マッキム・ミード・アンド・ホワイトが大規模なアメリカン・ボザール建築を華麗に展開していた。

これら野口と同時代の欧米建築と比較すれば、この当時の日本の近代建築は完成度の高さにおいて、およそ比較にならない程の差がある。重要なのは、その建築の出来栄ではなく、その西洋文明を内面化し独自の展開を見せたことであつた。この建築における内面化が日本で起きたことによって、歴史的な時間経過により現在における日本の現代建築の独自性が培養されたものとする。しかし現代社会は経済・情報・文化がいわゆるグローバル化し自分が何者かを問うことが希薄化されている時代にある。野口が「西洋」と「日本」とい

うことに真摯に向き合ったように、現代の我々も「自分達は何者か？」という問いかけが自身に向けてなされるべき時代にあることを野口から示唆を受けているようにも思われる。

8. 3 モダニズムへの胎動

米国で1830年代より人々に親しまれ信頼されてきた辞書である“Merriam-Webster”の“modern”の欄には、語源について下記のような記述がある。

Origin and Etymology of modern

Late Latin *modernus*, from Latin *modo* just now, from *modus* measure

すなわち“modern”の語源には、本来「現在」および「手段・方法」という意味が込められていた。すなわち文章化するならば「当代と向き合う手段・方法」ということになる。

近現代建築史における“modern”という言葉の使われ方は、それぞれの時代の建築思潮として様々な現れ方をしてきた。例えばニコラウス・ペブスナーがその著書『モダン・デザインの源泉』で記していた1850年頃を起点するアーツ・アンド・クラフツやアール・ヌーヴォーなどのモダン・ムーブメントがある。この時代のモダン・ムーブメントは、従来の西洋古典様式建築等の規範からその時代の建築デザインが自由に飛翔していることを明らかにする建築思潮だった。野口はこの時代に生きていた。そして明らかにモダニズムとして考えられるようになったのが、第1次大戦後のヨーロッパでの建築思潮である。この時代になると古典様式からの離陸は既に自明のこととなり、鉄・コンクリート・ガラスなどの材料・工法による新技術を駆使した、バウハウスやデ・ステイルそしてコルビュジエやミースなどによって代表される時代であった。米国では、1932年のニューヨーク・MOMAの展覧会で刊行されたフィリップ・ジョンソンとヘンリー＝ラッセル・ヒッチコック著『インターナショナル・スタイル — 1922年以降の建築』によってこのヨーロッパのモダニズムが「インターナショナル・スタイル」と名付けられていた。日本のモダニズムは、吉田鉄郎・堀口捨己・山田守・石本喜久治・森田慶一などによる大正9年（1920）の「分離派建築会宣言と作品」を源流とすることが一般的である。これらのモダニズムは、いずれも「その時代といかに向き合うか」という方法的な意識によって、建築思潮として顕在化していたものであった。すなわちどのような時代であっても“modern”は存在していたといえるだろう（*1）。そして現代においても、その名称は異なるものの「現代という時代に向き合う方法」への模索は続けられている。

建築におけるモダニズムの背景には、20世紀の前半から大きな展開を見せた鉄・コンクリート・ガラスなどの建築材料や鉄筋コンクリート造や鉄骨造などの構造方式などの技術革新が挙げられるが、野口の生きていた時代はそれ以前であり、モダニズムの技術的背景は当てはまらない。しかしモダニズムの建築家達が向き合っていたその時代にふさわしい建築を生み出そうとする思潮と同様のものが野口にはあった。野口も日本の明治という時代

に正面から向き合っていたのである。野口は、それぞれのプロジェクトで、その建築があるべき姿を見出し、その理念を体現できる骨格を見出し、その骨格に様々な建築手法を編集するように再構成し肉付けを行っていた。より具体的に述べれば、次のような点が挙げられる。

須磨別邸では、その風車型プランニングによって様々な場所の意味をつくり出しその場所の意味群を構造化していた。日暮別邸では、「簡素であること」という命題を受けて装飾をその時代の限度にまで切り詰めていた。また後のヨーロッパで起こる構成主義を思わせるような動的立体構成も日暮別邸の外観では見せていた。和風住宅建築においても、茶白山本邸のプランニングは須磨別邸と同様の自由なプランニングによる場所の意味の構造化を生み出しており、野口自邸や平田讓衛邸でも同様に、場所の意味を自由に配置し構造化するプランニングを見せていた。また一方、中之島図書館の正面左右のほぼ壁と窓だけによる力強く簡潔な壁面構成には、野口と同時代のアドルフ・ロース（1870～1933）にも通じる簡潔な厳しさも感じられる。

野口は、その時代が可能としていた建築技術を駆使して施工しそれら建築群を実現していたのである。その建築術は、まさしく「時代と向き合う」方法そのものであり、“modern”であることの源泉だった。野口の建築術には、後の時代のモダニズムへと通底するひそかな胎動が込められていたと考える。

註

- (* 1) 建築史家の加藤耕一はその著書『ゴシック様式成立史論』で、ゴシック様式の誕生に大きな役割を果たしたサン＝ドニ大修道院の大修道院長・シュジェール自身が、新しい聖堂を“opus modernum”と呼んでいたことを指摘し、“modern”の概念がゴシック様式の成立期にも適用できることを述べている。

加藤耕一著『ゴシック様式成立史論』 4頁

2012年 中央公論美術出版

8. 4 歴史的な振り子のなかで

明治に始まる日本の近代建築史のなかで、第1世代とされるのがジョサイア・コンドルから最初に建築教育を受けた辰野金吾・曾禰達蔵・片山東熊・妻木頼黄たちだった。彼らは、青年期に明治維新の動乱と急激な文明開化を経験しており、その後日本が西洋文明の移入に懸命であった時代にコンドルから西洋建築を学んでいた。もし明治時代を前期と後期に大きく分けるとするならば、西洋文明全体の摂取を第一義的に大きな課題としていたのが明治前期とすることができる。彼らはその時代の日本人建築家たちであり、彼らの価値観は西洋建築を正統な規範とすることにあつた。その彼らが日本人建築家第1世代である。

コンドルが工部省との契約終了で工部大学校教授を退官し、明治16年に英国留学から帰国していた辰野金吾が交代するように教授に就任したのが、明治17年(1884)であった。その後の工科大学造家学科(明治32年から建築学科)の卒業生は、その多くが大学時代に辰野の薫陶を受けている。しかしその辰野たちの薫陶を最も直接的に受けていたのが、第2世代の建築家たちだった。この第2世代の建築家については前期と後期に分けて考えたい。

第2世代前期の建築家たちは、第1世代の次の時代を生き残った人々だった。「我々は何者か」「我々はどうあるべきか」という時代的な問いかけを自らに投げかける世代であった。その時代を取り巻く潮流のなかで、彼らは様々な方面に華々しく拡散するような輝きを放ち、単なる西洋文明の様式建築の移入に満足することなく、西洋文明を近代日本自身の血肉化することを試みた最初の世代となった。第1世代が正統的な西洋建築文明を懸命に移入することにあっただのに対し、この世代は、その正統的な第1世代から振り子が振れるように、時代の先駆的精神に駆られていたと考える。

その後の日本の近代化によって社会規模の大型化を迎えた時代の建築家たちを第2世代後期の人々とするができる。彼らは、西洋様式建築の習熟も達成し、その近代社会が必要とする大型の建築を次々と生み出す世代であったと言えるだろう。中條精一郎・岡田信一郎・桜井小太郎そして日高胖などがこの世代に該当する。規模は大きく異なるが、米国でも同じような時代の進展により、マッキム・ミード・アンド・ホワイトを代表とするアメリカン・ボザールと呼ばれる建築様式で社会の大型化に応える大量の大型建築を生み出す時代を少し前に迎えていた。日本の第2世代後期の建築家たちには、この先行する米国の動向と並行するものがある。辰野金吾や曾禰達蔵のような西洋建築第1世代の建築家たちの正統的な嫡流でもあった。

第3世代の建築家たちが迎えた時代は、世界的に大きな建築的潮流の変化があった時代だった。正統的な古典様式建築から、社会や技術の進展に伴う新時代の建築のあり方を目指すモダニズムへの潮流の変化である。第3世代の建築家達にとっては、以前の世代が生み出していた習熟を見せる大型の様式建築にはもはや満足できず、世界の新潮流と歩調を合わせ、再び振り子が振れるように先駆的精神に駆られ次々と日本近代建築の名作を生み出す時代を迎えていた。安井武雄・渡辺節・堀口捨己そして長谷部鋭吉などをこの世代の建築家として挙げるができる。分離派と呼ばれる建築家たちも第3世代の建築家である。そして次の第4世代の村野藤吾などは、第3世代に薫陶を受けていたものの、もはや上記の歴史の振り子のようなものを超えた新しい時代の社会の中で活躍を始めた建築家たちだった。

このほぼ約半世紀にわたる各時代の建築家世代による歴史的展開のなかで、二つの精神的な在りかの間を振り子のように振幅する精神のダイナミズムがあったのではないかと考える。その一つとは、西洋文明を移入し学習・研鑽を重ねることで習熟の域に達する正統的な精神であり、もう一つは正統的なものに満足することなく「我々はどうあるべきか」と自問する時代に駆られた精神である。その振り子の最初の振幅が大きければ大きいほど、後の

振り子運動は活性化する。第2世代前期の建築家たちは、日本近代建築史のうえで、最初に振り子が大きく振れた世代だったと言えるのではないだろうか。そのなかに野口がいた。

野口の日本近代建築史上の重要な点は、野口が明治後期の時点で既にモダニズムに向かうエネルギーのようなものを胎蔵していたことにある。多元的な思考法の底流にあったのは、人々に意義のある場所の性格や意味を生み出し、建築的思考モデルとしての原型的な「型」を見出し全体の骨格を組み立て、あらゆる建築手法を採り入れ編集し再構成し肉付けすることであった。野口の場合、後年の鉄・ガラス・コンクリートなどの自由な材料や構法などの技術革新によるものではなかったが、前節で述べたようにその思考様式にはモダニズムへの胎動を見ることができる。

8. 5 野口孫市の逝去から住友本店臨時建築部を経て日建設計へ

8. 5. 1 野口孫市の逝去

野口は、明治43年から結核に罹り1年半ほど鶴崎平三郎の須磨浦寮病院に入院していた。その後完治したと思われていたが、大正3年の冬に住友銀行東京支店の現場を見回った後の帰阪の車中で感冒に罹り、以前に罹った肺炎が再発した。

野口の孫の濱田信義氏が住友史料館に寄贈された資料のなかに、関係者により「野口孫市療養・臨終日記」と名付けられた大正3年12月5日に始まる日記がある。その書き出しは、「須磨ヲ出る時にハ右たけ悪かったが、左の方も大分犯されて居る事が近頃漸く解った。聞けば此春から左のわるい・・・」と始まっている(*1)。その日記は大正4年8月ごろまで断片的に続いていたが、臨終の10月頃の日記は、妻の良子が野口の病状を記録する日記に変わっている。大正4年(1915)の亡くなる5日前の10月21日、東京の病院にいた野口はどうしても須磨に行きたいと妻・良子に言いだした。家族は何とか思いとどまらせようとしたが、野口の意志は固く周囲はやむなく医者同行で須磨に行くことを決めた。しかし24日には、病状はさらに悪化し須磨行きを野口は断念するに至る。死んでもよいから須磨に行きたいと言っていた野口は、その2日後の10月26日午後1時半に息をひきとった。野口は、大正4年(1915)10月26日、東京芝区北里研究所附属養生園にて、享年47歳で亡くなった。満年齢でいえば46歳であった。良子は、すぐに辰野金吾に知らせ辰野は直ちに病院に来ており、その様子を良子は下記のように記している。

大正四年十月二十六日の午後一時半であった

其時天ハ開けて、日光ハ空しく椽を照らしていた

床の間ニハ寒山拾得の幅、菊の懸崖か一鉢

(中略)

辰野先生直ニ来られて泣いた泣いた

あなたを博士ニ推センする事の遅かったのハ私の罪でした、どうぞ許して下さいと

さなから生きている人二いふ様に、一同感動した

野口は、大正4年の2月に工学博士の学位を授与されていたが、その年の晩夏に「秋風や博士も墓の飾りかな」の句を残している。下記は、辰野金吾による追悼の辞である(*2)。

工学博士野口孫市君逝く。嗚呼悲い哉。

顧るに余が君を知りしは明治二十四年東京帝国大学工科大学建築科に於て当時教鞭を把りしに際して学生としての君を見出ししにはじまる。爾来二十五年間余は君の人格技倆に就ては殆ど知らざるなしと信ず。

君資性剛直明晰の頭脳に加ふるに不屈の勉勵を以てす其の趣く所知るべし即優秀の成績を以て帝国大学の門を出づるや職を逋信省に奉ず後幾許もなく住友家に聘せられて其の臨時建築部に入り深く男爵の知遇を得て技師長として今日に至る。

此間君常に周匝の工夫と不撓の忍耐とを以て研究の歩武を進め遂に建築界に野口式とも言ふ可き一種独特の風を樹つ。案ずるに君由来独創に富む而も其の独創たるや煥発して人目を眩惑する如きものに非ず、静かに味ひて津々趣味を生じせしむ点に他の追隨を許さざるものあるなり。加之君が才能は限られたるものに非ず。深くして且つ博く或は實際的方面に、或は美術的方面に、往くとして可ならざるなし。而して其の事に当るや慎重の態度を以て一点一線と雖も苟もせず。其の粒々の苦心恰も古の名工が彫心鏤骨に通へるものあるを見て余は夙に君が大成の日をトし欣然たるものありき。此の一種の名人氣質は君が研究に終始して其の計画に独特の風格を添えたるは、盖偶然に非ざるを知るなり。

斯の如く君が琢磨の努力は歳と共に独創の成果を生みしに不拘、君が健康は又歳と共に害はれたたるが如し。

旺盛の氣力を包むに蒲柳の質を以てす。余は竊かに君の為に危みし事一再に止まらず而も余は君が克く病痼と戦つて第二の生命たる研究に余念なきを見て壮なりと思へり。曩日君が病篤しと聞き君を北里病院に訪ひし時余は君が健康のいたく衰へたるを目撃して心痛めり。故に将来の発展の為徐かに静養せん事を勧め全快を待つて再び君が活動の日を見んと約して袂を分かちたるに未だ旬日を出でずして君が訃に接す。嗚呼悲い哉。

想ふに天君の藉すに猶ほ十年の壽を以てせば君が事業は錦上更に花を添ふるものありしならんも定業は移す可らず今や幽明境を隔てて相對す。

謹んで靈前に立ちて短かりしとは云へ充実せる君が生涯を想ひ滿腔の敬意を表せんとす。在天の靈冀くは饗けよ。

大正四年十月三十日

友人工学博士 辰野金吾

8. 5. 2 住友本店臨時建築部から日建設計へ

野口の逝去後、住友本店臨時建築部の技師長の職は、住友本店臨時建築部の創設の時から野口のパートナーのように並走していた日高胖に引き継がれた。その日高もまた、野口を追悼して作成された『野口博士建築図集』の序文の一部で、野口について次のように記していた。

其の居常質素簡潔を尚び居家恰も禪堂の觀あり、齊整古樸の氣室に溢る。その身を持つること此の如くなりしと共に又情に篤く後進を撫育し、しばしばその急を拯(すく)い家に余財なく養痾の資も亦頗る菲薄なりしは同人のひそかに感傷に堪えざる所なりしも、君は平然として意に介する所なかりしが如きは古名匠に愧じざるものと云うべし。

この日高の記述にも、仕事は厳しいが人情味のあった野口への強い敬慕の念があらわれている。しかしそれ以上にこの文章は、野口の人物像を的確に表現したものだ。 (図8-2) は、野口と住友本店臨時建築部員の5名が撮影された須磨別邸の現場での集合写真であるが、野口を中心とした一同の自由な気風と引き締まった緊張感が伝わってくる。この写真にも建築部員の野口への真摯な敬慕と信頼の念があらわれていた。

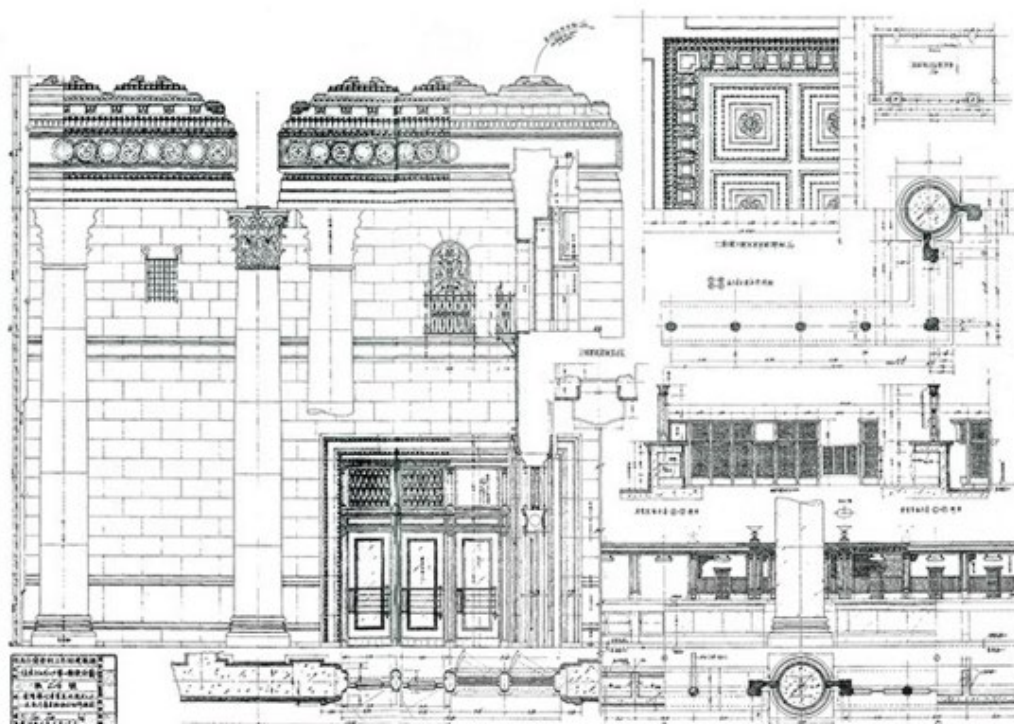


(図8-2) 住友家須磨別邸の工事現場における、左から3人目の野口孫市と5名の住友本店臨時建築部員

野口の没後、住友本店臨時建築部の技師長を引き継いだ日高胖は、野口とともに手がけた住友家茶白山本邸や住友銀行東京支店を完成させ、大正11年(1922)に中之島図書館の増築を見事に成し遂げた。また多くの住友銀行の支店を日本各地で本格的な様式建築として完成し、さらに庭師・小川治兵衛と大工棟梁・八木甚兵衛と共に携わった京都鹿ヶ谷の有芳園という名作も後世に残している。

住友本店臨時建築部設立の本来の目的であった住友本店・銀行本店すなわち住友ビルデ

イングの設計が始まったのは、野口没後5年を経た大正9年（1920）のことだった。日高胖を全設計の監督及び校査者とし、実質的には長谷部鋭吉と竹腰健造の二人がその中心となっている。長谷部鋭吉は明治42年に入社し、大阪倶楽部の設計を担当するなど、6年あまり野口の薫陶を受けていた。竹腰健造の入社は、英国から帰国した大正6年のことであり野口の没後であった。住友ビルディングは、大正15年竣工の第一期工事に続き、第二期工事が昭和5年（1930）に竣工した。野口が亡くなった15年後、水都・大阪の土佐堀川と西横堀川が交わる地に東洋的とも言える簡潔な外観の全容を現したのである。



（図8-3）住友ビルディング〈現・三井住友銀行大阪本店〉昭和5年（1930） 営業室詳細図

次頁の写真のとおり、黄金比を用いたと思われる緻密なプロポーションの北立面そして東西立面の三方には、両脇にイオニア式の柱が配された彫りの深いエントランスが気品をもって人々を迎えている。また内部のバンキング・ホールでは31本のコリント式の列柱が堂々と並び、銀行事業の永続性を現在にいたるまで象徴し続けている。住友本店臨時建築部創設の本来の目的であった住友ビルディングが、その創設後30年、野口の没後15年にして完成したのであった。



玄関部外壁のディテール

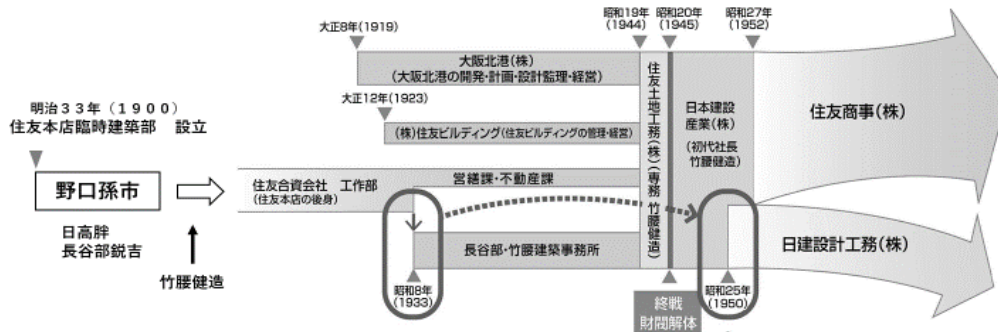
昭和5年当時の外観

新築時の営業室

〈図8-4〉 住友ビルディング〈現・三井住友銀行大阪本店〉 外観および内観写真

住友本店臨時建築部はその後、住友総本店営繕課（*3）、住友合資会社工作部、長谷部・竹腰建築事務所（*4）、住友土地工務（*5）、日本建設産業（*6）、日建設計工務（*7）、日建設計と幾度もその名称を変えながら、日本の近代化の歴史と歩調を合わせるように、各時代の社会が必要とした価値を建築や都市のなかに実現してきた。「その時代に向き合っ、人々が生きる場すなわち経験の器としての建築や都市を豊かにデザインする」という野口孫市の遺伝子は、100年の時を越え現在の日建設計にも世界的な拡がりをもって脈々と引き継がれている。

現在の日建設計は、2016年からいわば合言葉のように、自分たちが行っている仕事の意義を“Experience, Integrated”と要約してきた。自分たちがつくっているのは、都市や建築といった物的なものではなく、そこで生きる人々の良き経験であると考えたものである。現代の彼らは、現代社会の特徴である「場所性が失われやすい均質性」に直面しながらも、少しでもそこに「場所性」をつくり出そうとしていることを、あらためて自分達自身に確認しようとしていると言えるだろう。またこれは、野口孫市の建築術の理念を現代に継承しようとしているものとも言えるだろう。現代社会にあって、野口の「場所の持つ豊かな意味をつくり出す」という理念を継承することは簡単なことではないが、野口の末裔にあたる彼らもその遺伝子を引き継ごうとしているのである。



(図8-5) 野口孫市から日建設計工務の設立まで

註

- (* 1) 住友史料館 濱田信義氏寄贈 資料目録⑩-5
- (* 2) 『建築雑誌』第347号掲載 46～47頁
大正4年(1915) 日本建築学会
- (* 3) 林和久著『日建設計 115年の生命誌』 22頁
2015年 日建設計

住友本店は明治42年1月1日から、住友銀行本店との混同を避けるため、その名称を住友総本店と改めた。その後も住友各種事業の目覚ましい発展により様々な建築の需要も増え、明治44年(1911)臨時建築部は、住友総本店営繕課に改組され「臨時」ではなく常置の設計監理部門となるに至った。

- (* 4) 前掲書 54～57頁
昭和4年(1929)10月24日、ニューヨーク証券取引所で株価が大暴落し、これを端緒に世界各国を金融大恐慌が襲うこととなった。住友も深刻な経営的打撃を受け人員整理を進めざるを得ず、この時に住友合資会社工作部となっていた設計監理部門においても、長谷部と竹腰が部員の解雇を進めざるを得なかった。しかし、最盛期140名ほどいた工作部員が30名ほどに減った昭和8年(1933)、これ以上部員の離散を見るに忍びないとして、長谷部と竹腰は、自らも住友を離れ建築事務所を部員とともに設立し活路を開く決意をした。長谷部・竹腰建築事務所の設立である。荒れ狂う不況の嵐の中への果敢な船出だった。

(* 5) 前掲書 76～77頁

第2次大戦も末期となっていた昭和19年(1944)、国から財閥や企業の同種事業を統合・整理させる企業整備令が発令された。住友本社は、この発令に従って不動産関連事業を一元化するため、大恐慌の危機を乗り越え250名の所員を擁する建築設計事務所となっていた長谷部・竹腰建築事務所に、住友復帰を要請し他の不動産関連会社とともに住友土地工務を発足させた。この住友土地工務の専務取締役には竹腰健造が就任している。

(* 6) 前掲書 78頁

昭和20年(1945)の終戦直後、財閥はGHQにより解体され、住友土地工務は商社機能と不動産関連業務・設計監理部門を持つ日本建設産業となった。この初代社長には竹腰健造が就任している。

(* 7) 前掲書 79～85頁

戦後の日本建築設計監理協会(日本建築家協会の前身)が会員の資材販売を禁止した。そのため、商社部門と建築設計監理部門が同一の企業内に留まることに無理が生じ、日本建設産業の建築設計監理部門は昭和25年(1950)に独立することとなった。これが日建設計工務である。戦前の大恐慌時に長谷部・竹腰建築事務所が設立した状況と同じように、長谷部と竹腰の薫陶を受けた人々がリーダーとなり再び戦後の不況の嵐の中に船出した。その後、日建設計工務は昭和45年(1970)にその名称を日建設計と改称し現在に至る。

図版・写真

(図8-1) 筆者作成

(図8-2) 住友史料館所蔵 濱田信義氏寄贈資料目録①3-6

(図8-3) 日建設計所蔵

(図8-4) 同上

(図8-5) 筆者作成

補—1 野口孫市の作品一覧

公共的建造物

① 現・大阪府立中之島図書館

竣工時名称・大阪図書館 明治39年より大阪府立図書館

通称・中之島図書館

竣工：明治37年（1904） 日高胖による増築竣工：大正11年（1922）

場所：大阪市中之島

現存する。昭和49年（1974）に国より重要文化財指定。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の48～64番に外観および内部写真、平立断面図、各部詳細図
『大阪府立中之島図書館 補強工事』（昭和26年）大阪府建築部営繕課作成
『大阪府立中之島図書館の建物の現況調査』（昭和62年）

金多潔および（財）建築研究協会編集

『重要文化財（建造物）大阪府立中之島図書館本館ほか2棟 耐震工事』

（平成24年）（公財）文化財建造物保存技術協会作成

『中之島図書館 改修工事平面図』（平成27年） 日建設計作成

中央ドーム部断面矩計図は、東京都立中央図書館 木子文庫所蔵

② 大阪心齋橋

竣工：明治42年（1909）

場所：大阪市長堀

現存しない。現在は埋め立てられた長堀通に手摺欄干とガス灯の一部が移設保存。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の67番に竣工当時の写真

③ 愛媛県商品陳列所

竣工：大正3年（1914）

場所：愛媛県松山市

現存しない。跡地は、現・愛媛県庁舎第一別館の敷地となっている。

参照資料：三宅拓也著『近代日本〈陳列所〉研究』2015年 思文閣 290頁

小さく外観写真の紹介あり。1階は陳列所、2階は県の公会堂として各種の催事に用いられた。

住友本店関係建物

④ 住友銀行神戸支店

竣工：明治36年（1903）

場所：神戸市

現存しない。

参照資料：住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑪3-5

⑤ 住友銀行川口支店

竣工：明治36年（1903）

場所：大阪市川口

現存しない。

参照資料：『建築雑誌』明治37年6月号

藤井恵介・角田真弓編『明治大正昭和建築写真聚覧』

1936年・2012年 文生書院

⑥ 住友銀行門司支店

竣工：明治37年（1904）

場所：北九州市門司区

現存しない。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の65番に外観写真

⑦ 住友銀行尾道支店

竣工：明治37年（1904） 増築 明治42年（1909）

場所：広島県尾道市

2階ドーム及びドーマー窓を除き、ほぼ現存する。現在は尾道市所有。

参照資料：住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑪3-3

住友史料館所蔵資料

『広島県の近代化遺産 -広島県近代化遺産（建造物等）総合調査報告書-』

1998年 広島県教育委員会発行

⑧ 住友総本店仮建物

竣工：明治41年（1908）

場所：大阪市北浜

現存しない。現・三井住友銀行大阪本店位置。住友銀行より関西大学に寄贈され吹田市千里山に移築されたが、移築建物も現存していない。

参照資料：住友史料館所蔵資料

⑨ 住友銀行博多支店

竣工：明治42年（1909）

場所：福岡市博多

現存しない。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の66番に外観写真

⑩ 住友別子工業所 事務室

竣工：明治38年（1905）

場所：愛媛県今治市四阪島

現存しない。美濃島と家島の間を埋め立てた中州に建てられたが、明治42年に美濃島に移転、その後大正12年に家島に移転、その後焼失。現在の中州にある事務室はその後に建てられたもの。

参照資料：『明治38年別子鋳業所実際報告書』

⑪ 住友鑄鋼所 事務所および工場

竣工：明治40年（1907）

場所：大阪市港区島屋

現存しない。

参照資料：『明治40年鑄鋼場実際報告書』

『住友金属工業六十年史』 81頁に事務所外観写真

⑫ 住友伸銅所 事務所および工場

竣工：明治41年（1908）

場所：大阪市西区安治川

現存しない。

参照資料：『明治41年伸銅所実際報告書』

『住友金属工業六十年史』 22頁に事務所外観写真

住宅建築

⑬ 住友家須磨別邸

竣工：明治36年（1903）

場所：神戸市須磨区

現存しない。第2次大戦の空襲により焼失。2015年に（公財）泉屋博古館によって縮尺100分の1復元模型が製作され、京都鹿ヶ谷の泉屋博古館に常設展示されている。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の1～47番に外観および内部写真、平立断面図、各部詳細図

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑩2-1～4

⑭ 伊庭貞剛邸

現・住友活機園

竣工：明治37年（1904）

場所：滋賀県大津市石山

現存する。平成14年（2002）国より重要文化財指定。現在は住友林業（株）が所有し、住友不動産（株）によって管理運営されている。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集の70番に外観および内部写真、洋館部1・2階平面図

住友グループ広報委員会作成ホームページ『住友活機園』

⑮ 住友別子鉱業所接待館

通称・日暮別邸

竣工：明治39年（1906）

場所：愛媛県今治市四阪島

現存する。四阪島から新居浜市に洋館部のみを移設し保存する工事が、所有者の住友金属鉱山（株）によって行われ、日暮別邸記念館として2018年11月より一般公開されている。四阪島の歴史を留める記念館として、銅の製錬と煙害問題克服の歴史に焦点を当てた展示が行われている。

参照資料：住友金属鉱山（株）、別子銅山記念館所蔵資料

住友史料館所蔵資料

『愛媛県の近代化遺産 ―近代化えひめ歴史遺産総合調査報告書―』

2015年 愛媛県教育委員会

⑩ 旧・田辺貞吉邸

現・武田薬品工業（株）京都薬用植物園展示棟

竣工：明治41年（1908）

場所：兵庫県神戸市東灘区住吉（住吉村反高林）

現存する。大正4年（1915）に田辺貞吉より住友家に譲られ、大幅に増築され昭和12年まで住友本邸として使われた。昭和52年から平成7年まで住友修史室（現・住友史料館）として使われていたが、平成7年の阪神淡路大震災後、洋館のみ京都一乗寺の武田薬品工業（株）京都薬用植物園に移築され現在に至る。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集68番に外観および内部写真、洋館部1・2階平面図

坂本勝比古著『旧田辺貞吉の建築を巡って－旧田辺邸移設再生保存調査報告書より－』 1997年

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑩1-1～2

⑪ 鶴崎平三郎邸

竣工：明治41年（1908）

場所：神戸市須磨区

現存する。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集71番に外観および内部写真

⑫ 志立鉄次郎邸

竣工：明治33年～明治43年の間

場所：大阪市上本町

現存しない。

参照資料：住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑩1-3～4

⑬ 野口孫市自邸

竣工：明治43年（1910）

場所：兵庫県神戸市東灘区住吉（住吉村雨ノ神）

現存しない。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集77番に外観および内部写真

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥4-1～7

敷地配置図、1・2階平面図、自邸に関するメモ書き

⑳ 平田讓衛邸

竣工：大正5年（1916）

場所：兵庫県神戸市東灘区住吉（住吉村雨ノ神）

現存しない。野口孫市と2代目八木甚兵衛の逝去後、3代目八木甚兵衛が完成。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集77番に外観および内部写真

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥1-1～12

平立断面図、50分の1各部平面詳細図、屋根伏図、2階伏図

㉑ 住友家茶白山本邸

竣工：住居部・書院部は大正4年（1915）洋館部は大正7年（1918）

場所：大阪市天王寺

現存しない。現・大阪市立美術館の位置。庭園の慶沢園のみが大阪市により一般開放されている。

参照資料：（公財）泉屋博古館所蔵資料

住友史料館所蔵資料

倶楽部建築

㉒ 観音林倶楽部

竣工：明治43年（1910）

場所：兵庫県神戸市東灘区住吉（住吉村観音林）

現存しない。当時の武庫郡住吉村から観音林一帯で高級宅地開発が行われ、その社交クラブとして建てられた。昭和24年に観音林倶楽部は（財）住吉学園に譲渡された。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集71番に外観および内部写真

『財団法人 住吉学園史』 昭和43年 （財）住吉学園

観音林倶楽部の沿革および昭和24年当時の1・2階平面図と外観写真

㉓ 大阪倶楽部

竣工：大正3年（1914）

場所：大阪市今橋

現存しない。火災による焼失後、大正13年に安井武雄の設計で現・大阪倶楽部が再建。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集72～74番に外観および内部写真、各階平面図

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑥2-5 各階平面図

②④ 大阪中央電気倶楽部

竣工：大正3年（1914）

場所：大阪市北区堂島浜

現存しない。現・中央電気倶楽部は、昭和5年に竣工した葛野壮一郎の設計による建物。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集75番に外観および内部写真

住友入社以前

②⑤ 札幌電話交換局

竣工：明治31年（1898）

場所：札幌市

現存する。現在は愛知県犬山市にある博物館明治村に移設保存されている。昭和43年（1968）に国より重要文化財指定。

参照資料：『郵政百年史資料二十七巻 建築史料集』 昭和46年

住友史料館 尾形久美子氏寄贈資料 目録番号1 北海道水彩スケッチ

住友史料館 濱田信義氏寄贈資料 目録番号⑧ 軒蛇腹習作スケッチ

②⑥ 明治生命保険大阪支店

竣工：明治32年（1899）

場所：大阪市道修町

現存しない。

参照資料：日高胖編『野口博士建築図集』（大正9年） 住友史料館所蔵

図集67番に外観写真

住友史料館 尾形久美子氏寄贈資料 目録番号1 自画像とスケッチ

補—2 野口孫市 年表

- 明治2年（1869） ・ 4月23日、播磨国姫路に生まれる。野口家は代々、姫路藩砲術師範の家柄。父は野口野（いやし）、母は姫路藩儒学者・秋元三郎兵衛の次女・くり。
・ 孫市の3歳上の姉・野口幽香（ゆか）は、近代日本の幼児
- 明治7年（1874） 5歳 ・ 父・野は、砲術の火薬等の技術を買われ生野鉾山に職を得た。野口一家は鉾山技術の指導に日本に来ていたフランス人技師のムーセ家と親交を結び、孫市と幽香の姉弟はレスカス設計と伝わるムーセ邸で毎日のように遊んでいた。
- 明治15年（1882） 13歳 ・ 父・野は、明治8年に生野鉾山を退職し兵庫県より学区取締や明石郡書記に任命されていたが、この年、兵庫県学務課専務を申付けられ、野口一家は神戸下山手通6丁目に住むこととなった。
・ 孫市は、後年の兵庫県立神戸高校の前身であり神戸一中の元となった神戸尋常中学に通っていた。神戸について当時の英字新聞で、「東洋における居留地として最も良く設計された美しい街である。」と紹介されている。神戸は日本人と外国人が共に住む「雑居地」があることに、日本の他の居留地と異なる特徴があり、野口は日本の中の小さな西洋で中学時代を送っていた。
- 明治19年（1886） 17歳 ・ 大阪の第三高等中学校に入学。中学校令発令により、第三高等中学校は、明治22年に京都へ移転。京都に移転された第三高等中学校は後年の第三高等学校となる。
・ 父・野逝去。
- 明治21年（1888） 19歳 ・ 母・くり逝去

- 明治24年（1891）
22歳
- ・東京の帝国大学工科大学造家学科に入学。
 - ・住友家による奨学貸費生に選定される。
 - ・10月28日、7000人を超す犠牲者を出した濃尾地震が発生。ただちに現場に赴き建物被害を構造的視点から調査し記録を残す。
- 明治26年（1893）
24歳
- ・片山東熊を筆頭とする宮内省内匠寮設計による帝国京都博物館の工事現場の場所付雇として2か月働く。
- 明治27年（1894）
25歳
- ・卒業設計“Design for a Casino”を製作。
 - ・卒業論文“An Essay on the Future Domestic Architecture of Japan”を完成。
 - ・帝国大学工科大学造家学科を卒業。同期生は、大澤三之助・矢橋賢吉・遠藤於菟。2年上級に伊東忠太、1年上級に長野宇平治・塚本靖、1年下級に関野貞、2年下級に鈴木禎次、3年下級に武田五一・片岡安がいた。
 - ・野口は大学院に進学し、大学院では耐震構造を研究。
 - ・10月22日に庄内地震が発生。ただちに現場に赴き、綿密な調査の上「庄内地震被害調査報告」を作成。
 - ・久保田讓の娘・良子と結婚。久保田は当時文部省会計局長であり、後の文部大臣。
 - ・明治生命保険大阪支店を設計。その工事段階での監理業務は山口半六が引き受けている。
- 明治28年（1895）
- ・尾道において第1回住友家重役会議が開催され、住友本店臨時建築部の設立の目的である「住友本店・銀行本店の建設」が決議される。
- 明治29年（1896）
27歳
- ・帝国大学工科大学大学院を卒業し、逓信省に入る。
- 明治31年（1898）
29歳
- ・札幌電話交換局竣工

- | | |
|--------------------|--|
| 明治32年(1899)
30歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・住友本店に招かれ逓信省を辞す。 ・住友本店より、1年あまりに及ぶ欧米の建築事情調査に派遣され出立する。 ・明治生命保険大阪支店竣工 |
| 明治33年(1900)
31歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・欧米建築視察巡遊より帰国。直ちに住友本店臨時建築部が創設され、その初代技師長に就任。 |
| 明治36年(1903)
34歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・住友家須磨別邸竣工 ・住友銀行神戸支店竣工 ・住友銀行川口支店竣工 |
| 明治37年(1904)
35歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・大阪図書館(現・大阪府立中之島図書館)竣工 ・伊庭貞剛邸竣工 ・住友銀行門司支店竣工 |
| 明治39年(1906)
37歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・日暮別邸竣工 ・サンフランシスコ震災調査のため渡米。 |
| 明治41年(1908)
39歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・住友総本店仮建物竣工 ・田辺貞吉邸竣工 ・鶴崎平三郎邸竣工 |
| 明治42年(1909)
40歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・住友銀行博多支店竣工 ・大阪心齋橋竣工 |
| 明治43年(1910)
41歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・武庫郡住吉村に野口自邸竣工 ・肺を患い須磨に一年半療養する。 |
| 明治44年(1911)
42歳 | <ul style="list-style-type: none"> ・住友本店臨時建築部は、「臨時」ではなく常置の住友総本店営繕課として改組される。 |

大正3年（1914）

45歳

- ・大阪倶楽部竣工
- ・大阪中央電気倶楽部竣工
- ・東京よりの帰阪の途次、肺炎再発

大正4年（1915）

46歳

- ・住友家茶臼山本邸 書院・住居部竣工
（洋館部竣工は大正7年）
- ・工学博士号を授与される。
- ・東京の北里研究所付属養生園にて逝去。
享年47歳

野口孫市関係資料（尾形久美子氏より受領分 No. 290）

番号	文書名
1	[スケッチブック] (黒田原・黒田原豊原間車中之真景・仙台客車・泉州堺・江州草津・四日市海岸・伊勢津停車場・桑名城跡・桑名魚棚町・桑名停車場荷揚場・かまくら・品川・函館電話交換局敷地・室蘭眺望・由仁・札幌郊外・札幌博物場庭園など) 明治30年など
2	[スケッチブック] (湯ノ田温泉場・気車中所見・野崎・猪苗代湖ト山縣・猪苗代湖辺戸ノロ・若松天主台ヨリ眺望・若松遠望・本宮・高松城・明治村近傍・宮川丸上等室所見・山門・筑後川上流隈町・大明神岩近傍・海上ヨリ伊予新居浜ヲ望ム・四坂しま・桃山病院内ヨリ北方ヲ望ム・桃山病院ニ於テなど) 明治31年・明治38年など
3	[スケッチブック] (人物など、明治45年の漢詩など書もあり)
4	[スケッチブック] (須磨・淡路島など) 明治44年5月～7月など
5	[スケッチブック] (大和国三輪神社・奈良唐招提寺倉庫・木津川・彦根ステーション停車中車窓ヨリ同城眺望之図・江州三上山・吉田山ノ一部・吉田神社・唐招提寺屋根瓦・吉野山如意輪堂・美術の起・鷹取峠麓・秋之停車場官舎ヨリ知章ノ墓遠望・京都吉田山北薬苑・須磨のわひ住み・保津川・須磨・新式茶道具など) 明治21年など
6	[野口孫市書簡] (誕生日祝)
7	[野口孫市書簡] (花の真盛り) 大正2年4月13日
8	[野口孫市書簡] (保津川下り) 明治41年5月10日
9	[野口孫市書簡] (野口孫市家族写真)
10	[野口孫市書簡] (近況) 大正4年6月28日
11	[スケッチ] (第三師団司令部)
12	[スケッチ] (名古屋城内渡り櫓)
13	[スケッチ] (第三師団司令部・名古屋郵便局車置場)
14	[スケッチ] (名古屋城内火薬庫)
15	[スケッチ] (名古屋城櫓・建物入り口)
16	[スケッチ] (第三師団司令部)
17	[スケッチ] (名古屋城櫓)
18	[スケッチ] (司令部内部)
19	[スケッチ] (第三師団司令部・司令部内烟突落下)
20	[スケッチ] (司令部)
21	[スケッチ] (尾張紡績会社工場)
22	[スケッチ] (尾張紡績会社工場)
23	[スケッチ] (愛知県尋常師範学校内)
24	[スケッチ] (名古屋尋常中学校文庫破損・名古屋紡績会社工場)
25	[スケッチ] (楼上ヨリ倉庫破損ヲ望ム)
26	[スケッチ] (岐阜火災之図)
27	[スケッチ] (倒壊家屋)
28	[スケッチ] (相州浦賀港二枚ノ一) 明治27年12月24日
29	[スケッチ] (浦賀二枚ノ二) 明治27年12月24日
30	[スケッチ] (麓の家)
31	[スケッチ] (紅葉の山並み)
32	[スケッチ] (犬)
33	[スケッチ] (針葉樹林)
34	[スケッチ] (豆州吉浜) 明治26年12月
35	[スケッチ] (沖合)
36	[スケッチ] (谷の道)
37	[スケッチ] (土手より望む)
38	[スケッチ] (谷川の紅葉)
39	[スケッチ] (山村)
40	[スケッチ] (有馬瀧道など) 大正1年8月7日
41	[スケッチ] (砂漠)
42	[スケッチ] (森の木)
43	[スケッチ] (海の波) 明治27年8月10日
44	[スケッチ] (大森辺の海上) 明治25年12月

番号	文書名
45	[スケッチ] (山間の小道)
46	[スケッチ] (伊吹山麓夜景) 明治26年10月24日
47	[スケッチ] (岸に寄せる波)
48	[スケッチ] (山・川) 明治24年10月
49	[スケッチ] (於東京金富町久保田邸食堂、為房子、静物) 明治43年9月23日
50	[スケッチ] (山間の川を望む)
51	[スケッチ] (豆州江の浦) 明治26年12月
52	[スケッチ] (富士山)
53	[スケッチ] (紅葉の滝)
54	[スケッチ] (破船)
55	[スケッチ] (教会塔カ)
56	[スケッチ] (木橋)
57	[スケッチ] (洋館)
58	[スケッチ] (城がしま)
59	[スケッチ] (城か島)
60	[スケッチ] (ON THE LOOK-OUT FROM THE PYRAMIDS OF EGYPT)
61	[スケッチ] (縁側の女性3人) 明治27年8月8日
62	[スケッチ] (パリの凱旋門)
63	[スケッチ] (小滝) 大正1年8月8日
64	[スケッチ] (海岸へ出る道)
65	[スケッチ] (寺院カ)
66	[スケッチ] (武州金沢) 明治29年5月10日
67	[スケッチ] (横須賀辺海上) 12月25日
68	[スケッチ] (灯台) 明治25年9月5日
69	[スケッチ] (海越しの富士) 明治27年7月29日
70	[スケッチ] (城島夕陽)
71	[スケッチ] (豆州吉浜ヨリ真鶴等眺望) 明治26年12月
72	[スケッチ] (根室海岸) 明治29年8月21日
73	[スケッチ] (祇園州官軍戦死墓・桜島内黒神温泉)
74	[スケッチ] (愛宕山下り路) 大正2年8月26日
75	[スケッチ] (有馬にて) 大正2年8月22日
76	[スケッチ] (有馬ヨリ六甲山上り口) 大正2年8月24日
77	[和歌] (有馬愛宕山腹にて、あたご山つゆふみわけてなかむれはかなたの山にかすみたなびく) 大正2年8月24日
78	[スケッチ] (彼岸詣、炎天ニ曝サレテ野口孫市工場監督之図) 明治26年9月
79	[スケッチ] (建築現場カ)
80	[スケッチ] (月瀬桃香野)
81	[スケッチ] (不動瀧)
82	[スケッチ] (日光裏見滝帰途) 明治29年11月1日
83	[スケッチ] (石段の山道)
84	[スケッチ] (灯台)
85	[スケッチ] (入り江)
86	[スケッチ] (川釣りをする子供) 明治30年8月26日
87	[スケッチ] (酒田ヨリ鳥海山ヲ望ム)
88	[スケッチ] (名古屋城ノ本丸)
89	[スケッチ] (愛知県尋常師範学校烟突落下・師範校廿年建築寄宿舍平面図)
90	『衣喰住之内家職幼絵解図』
91	[和歌短冊] (わかちこか一年能生るによめる、世にいてしこそ縁みえぬまでをひ立にけりやとの姫まつ) 良子
92	[和歌短冊] (高みね敬子の生るをことほきてよめる、老まつの梢にすくふひなつるのよはひやいかにかしかるらむ) 良子
93	[和歌短冊] (待雪、冬かれて梢さひしき庭のおもはゆきより外にまつものもなし) 良子
94	[和歌短冊] (梅盛、咲のこるつほみもけさはみえぬかな今さかりなる庭のうめか枝) 良子
95	[和歌短冊] (都霞、ほのかにも霞のうちのみゆるかな都大路のはるのしら雲) 良子

番号	文書名
96	[和歌短冊] (庭早梅、ふく風のけさにほへるは春またてそのふのうめの花やさきけむ) 良子
97	[和歌短冊] (早春風、のとかにもふきそめにけりのき近きうめか香さそふ春の朝かせ) 良子
98	[和歌短冊] (松上鶴、朝つく日さしそふやまの山松にたかく聞ゆるあし田鶴の声) 良子
99	[和歌短冊] (梅留鶯、ひとしほにうるはしきかな咲みちしうめにこすたふ鶯のこゑ) 良子
100	[和歌短冊] (浦秋風、すゝみせし都の人もあとたえて秋かせ寒し浦の夕くれ) 良子
101	[和歌短冊] (旅宿灯、さひしくもふけ行くよはのともし火にふるさとしのふ旅やかたかな)
102	[和歌短冊] (海上霞、春霞うな原とほくたちこめてほのかにみゆるあまのつり舟) 良子
103	[和歌短冊] (春霞うは原とほくたちこめてほのかにみゆるあまのつり舟) 良子
104	[和歌短冊] (山茶花の色うつくしく咲にけり日かけのとけき庭のしはふに) 良子
105	[和歌短冊] (山茶花の色うつくしく咲にけり日かけのとけき庭のしはふに) 良子
106	[和歌短冊] (あけぬれはまつ車井の音すなりくむにやあらん年の若水) 良子
107	[和歌短冊] (ほととぎす人伝にのみきゝつるをけさめつらしく初音鳴なり) 良子
108	[和歌短冊] (大君の恵の露にうるほひてきみかよはひや千代をへぬらむ) 良子
109	[和歌短冊] (起きいてゝつまと明れはのとかにもふる春雨にうめかをるなり) 良子
110	[和歌短冊] (千代をへむ君のよはひと諸共にかさね重ねし今日のことほき) 良子
111	[和歌短冊] (新玉のとしは帰りに空高くのほる朝日のかけののとけさ) 良子
112	[和歌短冊] (ふく風にほのにほひけり梅の花さくるあたりやいつこなるらん) 良子
113	[和歌短冊] (人よりもさきにくみけりめてたくもとし立かへるけさの若水) 良子
114	[和歌短冊] (しけりあふ若葉かくれの月かけもすゝしくみゆる夏は来にけり) 良子
115	[和歌短冊] (すこやかにはやふたとせを過にけりちきりひさしき庭の小まつは) 明治33年6
116	[和歌短冊] (御園のきく、大君のめくみの露やかかりけむけたかくみゆる御園生の菊)
117	[和歌短冊] (御園の紅葉、ふりはへてうつくしきかなあまつ日の光ににほふ園のみち葉)
118	[和歌短冊] (ほととぎす、日もかへぬ都あつまのほととぎすいつれの空かはつ音なりけん)
119	[和歌短冊] (明治天皇御製、白玉を光なしもおもふかなみかきたらさることを忘れて)
120	[中島歌子和歌短冊] (首夏水、わか門のをかはのしみつとふ人のうらやむ夏に成にけるか)
121	[中島歌子和歌短冊] (手折てもやかてしほるゝはななれとたゝに過うき野路の萩原)
122	[折り本] (古今集仮名序写、且僧正遍昭〜ふるきうたみつ)

計122点

野口孫市関係資料（濱田信義氏より受領分 No. 293）

番号	文書名
①	[卒業証書](工科大学造家学科) 明治27年7月10日
②	学位記(工学博士) 大正4年2月9日
③ 1	[写真](野口孫市)
③ 2	[写真](野口孫市)
③ 3	[写真](野口孫市、和装、住友家の家紋入り羽織を着用)
③ 4	[写真](野口孫市)
③ 5	[写真](野口孫市夫婦)
③ 6	[写真](野口孫市)
③ 7	[写真](野口孫市、『野口博士建築図集』に使用写真)
③ 8	[写真](野口孫市)
③ 9	[写真](野口孫市、3-8の写真を引き伸ばしトリミングしたもの)
③ 10	[写真](野口孫市他1名)
③ 11	[写真](野口孫市墓地)
④	[ガラス乾板](野口孫市写真、3-7の原板)
⑤	『野口博士建築図集』 大正9年10月25日
⑥ 1-0	[一括封筒]
⑥ 1-1	[住吉平田讓衛邸平面図](1/100)
⑥ 1-2	[住吉平田讓衛邸立面図](客室及玄関内玄関等之正面、1/50)
⑥ 1-3	[住吉平田讓衛邸立面図](客室及廊下等、1/50)
⑥ 1-4	[住吉平田讓衛邸立面図](主人室正面、1/50)
⑥ 1-5	[住吉平田讓衛邸立面図](玄関及階段等、1/50)
⑥ 1-6	[住吉平田讓衛邸立面図](主人室及夫人室等、1/50)
⑥ 1-7	[住吉平田讓衛邸立面図](茶之間其他、1/50)
⑥ 1-8	[住吉平田讓衛邸屋根伏図](1/100)
⑥ 1-9	[住吉平田讓衛邸二階伏図]
⑥ 1-10	[住吉平田讓衛邸二階伏図]
⑥ 1-11	[住吉平田讓衛邸立面図]
⑥ 1-12	[住吉平田讓衛邸立面図]
⑥ 2-1	大阪倶楽部平面図(地中階、1/100)
⑥ 2-2	大阪倶楽部平面図(一階、1/100)
⑥ 2-3	大阪倶楽部平面図(二階、1/100)
⑥ 2-4	大阪倶楽部平面図(三階、1/100)
⑥ 2-5	大阪倶楽部平面図(四階、1/100)
⑥ 3-1	[京都博物館平面図](1/100) 明治26年9月22日
⑥ 3-2	[京都博物館彫刻及古器物室小屋組図](1/50)
⑥ 4-1	[住吉野口孫市邸平面図](階下、1/100)
⑥ 4-2	[住吉野口孫市邸平面図](階上、1/100)
⑥ 4-3	[住吉野口孫市邸平面図](敷地全体)
⑥ 4-4	[住吉野口孫市邸平面図](二階)
⑥ 4-5	[住吉野口孫市邸平面図](二階)
⑥ 4-6	[住吉野口孫市邸各室使用方法メモ]
⑥ 4-7	[住吉野口孫市邸平面図](一階、案)
⑥ 5-1	雨天体操場妻入口矩形図(1/20)
⑥ 5-2	[教室廊下側窓詳細図](1/20)
⑥ 5-3	[アメリカ議会下院平面図(Plan of House of Representatives U.S.America)](空調関)
⑥ 5-4	川口支店建築工事月報(第拾参号) 明治36年4月
⑥ 5-5	[折れ線グラフ]
⑥ 5-6	[図面解説書](英文、空調関係)
⑦ 1	[デザイン画](建物正面玄関装飾)
⑦ 2	[デザイン画](建物内壁装飾)
⑦ 3	[デザイン画](通風調節装置)
⑦ 4	[デザイン画](建築パース・平面図、House at Northwood)
⑦ 5	[デザイン画](建築パース)

番号	文書名
⑦ 6	[デザイン画](建物立面・平面)
⑦ 7	[デザイン画](建物立面、BNDC Design for a Round House)
⑦ 8	[デザイン画](内壁装飾)
⑦ 9	[デザイン画](壁掛け装飾)
⑦ 10	[デザイン画](内観パース、OXFORD CATHEDRAL)
⑦ 11	[デザイン画](建築パース、Pasmore Edwards Public Library,Bow.E)
⑦ 12	[デザイン画](花)
⑦ 13	[デザイン画](鳳凰)
⑦ 14	[デザイン画](建物立面)
⑦ 15	[デザイン画](装飾模様)
⑦ 16	[デザイン画](建物立面、下書き)
⑦ 17	[デザイン画](仏画)
⑦ 18	[デザイン画](装飾アルファベット)
⑦ 19	[デザイン画](装飾アルファベット)
⑦ 20	[デザイン画](装飾)
⑦ 21	[デザイン画](建物立面)
⑦ 22	[デザイン画](装飾アルファベットなど)
⑦ 23	[デザイン画](装飾アルファベット、鳥など)
⑦ 24	[デザイン画](馬車)
⑦ 25	[デザイン画](装飾)
⑦ 26	[デザイン画](塔立面)
⑦ 27	[デザイン画](装飾模様)
⑦ 28	[デザイン画](装飾)
⑦ 29	[デザイン画](騎士)
⑦ 30	[デザイン画](内壁装飾)
⑦ 31	[デザイン画](花)
⑦ 32	[デザイン画](広告カ、Aspinall's)
⑦ 33	[デザイン画](装飾)
⑦ 34	[デザイン画](装飾)
⑦ 35	[デザイン画](装飾)
⑦ 36	[デザイン画](猟犬)
⑦ 37	[デザイン画](建物壁面装飾、下書き)
⑦ 38	[デザイン画](装飾)
⑦ 39	[デザイン画](メダル)
⑦ 40	[デザイン画](装飾)
⑦ 41	[デザイン画](装飾)
⑦ 42	[デザイン画](コーナー装飾など)
⑦ 43	[門立面図]
⑦ 44	[蕃垣寸法図]
⑦ 45	[鳥居寸法図]
⑦ 46	[神社垣配置平面寸法図]
⑦ 47	[デザイン画](建物立面、下書き)
⑦ 48	[フロッタージュ](本の装飾カ、ELEMENTARY PRINCIPLES OF CARPENTRYなど)
⑦ 49	[デザイン画](扉装飾)
⑦ 50	[デザイン画](柱装飾)
⑦ 51	[デザイン画](建築パース、SPRINGBURN PUBLIC HALLS FOR THE CORPORATION OF THE CITY OF GLSGOW)
⑦ 52	[デザイン画](芝離宮階上広間々仕切持足正寸)
⑦ 53	[デザイン画綴](建物内装)
⑧	[デザイン画貼付ノート]
⑨ 1	[写真](住吉野口孫市邸外観) 大正5年3月
⑨ 2	[写真](住吉野口孫市邸門前よりの外観) 大正5年3月
⑨ 3	[写真](住吉野口孫市邸玄関) 大正5年3月
⑨ 4	[写真](住吉野口孫市邸二階書斎) 大正5年3月

番号	文書名
⑨ 5	[写真] (住吉野口孫市邸二階寢室) 大正5年3月
⑨ 6	[写真] (住吉野口孫市邸二階座敷より次ノ間方向) 大正5年3月
⑨ 7	[写真] (住吉野口孫市邸一階書生部屋兼応接室) 大正5年3月
⑨ 8	[写真] (住吉野口孫市邸一階小児室) 大正5年3月
⑩ 1	[写真] (大阪府立図書館建設現場)
⑩ 2	[写真] (住友銀行船場支店建設現場)
⑩ 3-1	[写真] (大阪倶楽部二階球戯室)
⑩ 3-2	[写真] (大阪倶楽部二階囲碁室)
⑩ 4	[写真] (大阪倶楽部外観)
⑪ 1-1	[写真] (住吉田辺貞吉邸門前よりの外観)
⑪ 1-2	[写真] (住吉田辺貞吉邸南側外観)
⑪ 1-3	[写真] (大阪上本町志立鉄次郎邸門前よりの外観)
⑪ 1-4	[写真] (大阪上本町志立鉄次郎邸外観)
⑪ 2-1	[写真] (住友須磨別邸門前よりの外観)
⑪ 2-2	[写真] (住友須磨別邸本館正面玄関)
⑪ 2-3	[写真] (住友須磨別邸本館北西側外観)
⑪ 2-4	[写真] (住友須磨別邸本館南側外観)
⑪ 3-1	[集合写真] (大阪府立図書館正面階段にて)
⑪ 3-2	[写真] (住友別子鉱業所・伸銅場製産品展示場、第五回内国勸業博覧会カ)
⑪ 3-3	[写真] (住友銀行尾道支店)
⑪ 3-4	[写真] (建設現場、住友須磨別邸カ)
⑪ 3-5	[写真] (住友神戸支店)
⑪ 3-6	[写真] (建設現場、住友須磨別邸カ)
⑫	[集合写真] (住友本店臨時建築部)
⑬ 1	[建築物写真貼付ノート]
⑬ 2-1	[集合写真] (船中カ)
⑬ 2-2	[集合写真] (船中カ)
⑬ 2-3	[集合写真] (船中カ)
⑬ 2-4	[集合写真] (船中カ)
⑬ 3-0	[一括包紙] (「浜田二人へ／孫市撮影の写真」)
⑬ 3-1	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-2	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-3	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-4	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-5	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-6	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-7	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-8	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-9	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-10	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-11	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-12	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-13	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-14	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-15	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-16	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-17	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-18	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-19	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-20	[写真] (ナイアガラの滝)
⑬ 3-21	[写真] (波)
⑬ 3-22	[写真] (海岸の風景)
⑬ 3-23	[写真] (海岸に寄せる波)
⑬ 3-24	[写真] (岩礁を打つ波)
⑬ 3-25	[写真] (島影)

番号	文書名
⑬ 3-26	[写真] (島影)
⑬ 3-27	[写真] (島影)
⑬ 3-28	[写真] (大西洋)
⑬ 3-29	[写真] (雲間より洋上に差す陽光)
⑬ 3-30	[写真] (雲間より洋上に差す陽光)
⑬ 3-31	[写真] (洋上の雲)
⑬ 3-32	[写真] (洋上の雲)
⑬ 3-33	[写真] (洋上の雲)
⑬ 3-34	[写真] (海面に映る陽光)
⑬ 3-35	[写真] (船より望む洋上)
⑬ 3-36	[写真] (洋上)
⑬ 3-37	[写真] (ピラミッド)
⑬ 3-38	[写真] (ピラミッド)
⑬ 3-39	[写真] (ピラミッド頂上にて野口孫市など)
⑬ 3-40	[写真] (スフィンクス前にて野口孫市など)
⑬ 3-41	[写真] (ニューヨーク建物室内にて野口孫市など)
⑬ 3-42	[写真] (ニューヨークのホテル室内にて野口孫市) 明治32年5月11日
⑬ 3-43	[写真] (洋上より望む都市、ニューヨークカ)
⑬ 3-44	[写真] (ボストンバンカーヒル記念塔にて野口孫市など)
⑬ 3-45	[写真] (岸辺の風景)
⑬ 3-46	[写真] (洋上より望む工場地帯)
⑬ 3-47	[写真] (小船上にて野口孫市など)
⑬ 3-48	[写真] (船中にて野口孫市)
⑬ 3-49	[写真] (住吉野口孫市邸外観)
⑬ 3-50	[写真] (海水浴場にて野口孫市家族)
⑬ 3-51	[写真] (水辺にて野口孫市家族など)
⑬ 3-52	[写真] (野口孫市邸にて家族)
⑬ 3-53	[写真] (野口孫市邸にて家族)
⑬ 3-54	[写真] (野口孫市子息)
⑬ 3-55	[写真] (野口次郎)
⑬ 3-56	[写真] (林中にて野口太郎カ)
⑬ 3-57	[写真] (古城カ)
⑬ 4	[写真] (建設中のソルトレイクシティタバナクル)
⑬ 5	[写真] (ソルトレイクシティタバナクルのオルガン)
⑬ 6	[写真] (ヴェネツィアドゥカーレ宮上院ホール前王座の広間)
⑬ 7	[写真] (ヴェネツィアサンタマリアグロリオーサ・ディ・フラーリ教会のアントニオカーノーヴァ記念碑)
⑬ 8	[写真] (ヴェネツィアサンマルコ広場鐘楼回廊のブロンズ門)
⑬ 9	[写真] (ヴェネツィアサンジョルジュ・マッジョーレ教会聖歌隊の肘掛け椅子)
⑬ 10	[写真] (バチカンサン・ピエトロ大聖堂シクストゥス四世墓碑)
⑬ 11	[写真] (ヴェネツィアドゥカーレ宮中庭の井戸)
⑬ 12	[写真] (フィレンツェサンジョヴァンニ洗礼堂天国の扉)
⑬ 13	[写真] (フィレンツェサンタマリアデルフィオーレ大聖堂ファサードカ)
⑬ 14	[写真] (バチカンシステイナ礼拝堂天井画)
⑬ 15	[写真] (バチカンシステイナ礼拝堂「最後の審判」)
⑭ 1	[スケッチ] (日光東照宮上神庫)
⑭ 2	[スケッチ] (根室金刀比羅社内) 明治29年8月25日
⑭ 3	[スケッチ] (山道を薪を背負って歩く男)
⑭ 4	[スケッチ] (須磨浦)
⑭ 5	[スケッチ] (日光山寂光瀧) 明治29年5月3日
⑭ 6	[スケッチ] (六甲山頂) 大正2年8月24日
⑭ 7	[スケッチ] (日光赤糺山) 明治29年11月3日
⑭ 8	[スケッチ] (陸前作並之雪景) 明治28年11月15日
⑭ 9	[スケッチ] (高野山嶽ノ弁天ヨリ金剛山及紀ノ川ヲ望ム) 明治40年5月19日
⑭ 10	[スケッチ] (宇治万碧楼上)

番号	文書名
⑭ 11	[スケッチ] (御室仁和寺)
⑭ 12	[スケッチ] (漁村) 明治27年8月2日
⑭ 13	[スケッチ] (民家の軒先) 明治27年8月23日
⑭ 14	[スケッチ] (木陰に立つ帽子をかぶった人物) 明治29年7月31日
⑭ 15	[スケッチ] (林上を舞う鳥の群) 明治29年8月24日
⑭ 16	[スケッチ] (テント小屋) 明治27年8月3日
⑭ 17	[スケッチ] (海越しに見る夕暮れの富士)
⑭ 18	[スケッチ] (海辺の家)
⑭ 19	[スケッチ] (風車) 明治25年10月5日
⑭ 20	[スケッチ] (雪景の山裾)
⑭ 21	[スケッチ] (木の間に見える家)
⑭ 22	[スケッチ] (山裾の鳥居)
⑭ 23	[スケッチ] (海辺の祠)
⑭ 24	[スケッチ] (田園の家)
⑭ 25	[スケッチ] (海を望む田園風景、須磨力)
⑭ 26	[スケッチ] (馬上の騎士)
⑭ 27	[スケッチ] (水辺の風景)
⑭ 28	[スケッチ] (林中の小橋)
⑭ 29	[スケッチ] (小鳥)
⑭ 30	[スケッチ] (西洋の女性)
⑭ 31	[スケッチ] (カモ)
⑭ 32	[スケッチ] (ソテツ)
⑭ 33	[スケッチ] (農村の小道)
⑭ 34	[スケッチ] (山中の紅葉)
⑭ 35	[スケッチ] (書物を持つ男性)
⑭ 36	[スケッチ] (草むら)
⑭ 37	[スケッチ] (木の間に見える家)
⑭ 38	[スケッチ] (丘の上の五人)
⑭ 39	[スケッチ] (小川) 明治30年8月24日
⑭ 40	[スケッチ] (森)
⑭ 41	[スケッチ] (山中の小道)
⑭ 42	[スケッチ] (農家の軒先) 明治27年7月
⑭ 43	[スケッチ] (林道)
⑭ 44	[スケッチ] (民家の軒先)
⑭ 45	[スケッチ] (農家の風景)
⑭ 46	[スケッチ] (鎌倉より葉山をのぞむ)
⑭ 47	[スケッチ] (西洋の女性)
⑭ 48	[スケッチ] (西洋の男性)
⑭ 49	[スケッチ] (井戸から水を運ぶ和服の女性)
⑭ 50	[スケッチ] (犬)
⑭ 51	[スケッチ] (犬)
⑮ 1	[スケッチブック] (羽前国本合海・羽前国飽海郡大川渡(最上川)・宇都宮停車場・十二叟・大久保ヨリ帰途・新宿停車場まへ・麴町区ヨリ堀ヲ隔テ、四谷区ノ方ヲ望ム・信濃町近傍の夕景・弁慶橋・閑院宮表門(赤坂見付)・鶴沼・鶴沼水浴所并江ノ島・鶴沼蜂須賀侯別邸・江のしま・鶴沼館楼上・海中より江のしまを望む・東天白・片瀬ノ浜・鶴沼夕陽・浜松停車場・白河・最上川より月山を望む) 明治27年～明治28年
⑮ 2	[スケッチブック] (花・風景など) 明治27年～明治28年
⑯ 1	[野口孫市日記] 明治27年～明治29年
⑯ 2	[野口孫市メモ帳] (学生時代のスケッチ、旅日記など) 明治22年～明治24年
⑯ 3	[野口孫市アメリカ出張日記] (震災調査) 明治39年4月～7月
⑯ 4	[メモ帳] (レシビ)
⑯ 5	[野口孫市療養・臨終日記] 大正3年～大正4年
⑯ 6	[野口孫市講義ノート] (鈴木宗泰先生口授動物学)
⑯ 7	[野口孫市講義ノート] (鈴木宗泰先生口授植物学)

番号	文書名
⑩ 8-1	[名刺](工科大学々生野口孫市)
⑩ 8-2	[名刺](工学士野口孫市)
⑩ 8-3	[名刺](兵庫県武庫郡住吉村九十番地工学士野口孫市)
⑩ 8-4	[名刺](兵庫県武庫郡住吉村九十番地工学博士野口孫市)
⑩ 8-5	[名刺](工学博士野口孫市)
⑩ 8-6	[名刺](震災予防調査会嘱託大学院学生工学士野口孫市)
⑩ 8-7	[名刺](住友本店野口孫市)
⑩ 8-8	[名刺](住友本店臨時建築部工学士野口孫市)
⑩ 8-9	[名刺](野口孫市)
⑩ 8-10	[名刺](謹賀新年明治三十七年元旦／大阪市東区森ノ宮西ノ町一〇五野口孫市)
⑩ 8-11	[名刺](謹賀新年／兵庫県武庫郡住吉村九十番地野口孫市)
⑩ 8-12	[名刺](Osaka Japan Magoichi Noguchi Architekt、筆記体)
⑩ 8-13	[名刺](M.NOGUCHI. ARCHITECT、ブロック体)
⑩ 8-14	[名刺](M.Noguchi. Architect、筆記体)
⑩ 8-15	[名刺銅原版](M.Noguchi. Architect、筆記体)
⑪	[野口孫市俳句](秋風や博士も墓の飾かな)
⑫ 1	『Academy Architecture and Annual Architectural Review』Ⅲ (Vol.7・8・9) 明治28年～明治29年
⑫ 2	『Academy Architecture and Architectural Review』Ⅵ (Vol.16・17・18) 明治32年～明治33年
⑫ 3	『Academy Architecture and Architectural Review』Ⅷ (Vol.22・23・24) 明治35年～明治36年
⑫ 4	『Academy Architecture and Architectural Review』Ⅸ (Vol.25・26・27) 明治37年～明治38年
⑫ 5	『Academy Architecture and Architectural Review』Ⅹ (Vol.28・29・30) 明治38年～明治39年
⑫ 6-1	『建築書院編輯局撮影 日本家屋写真叢書 床棚百種』上巻 明治44年4月18日
⑫ 6-2	『建築書院編輯局撮影 日本家屋写真叢書 床棚百種』下巻 明治44年4月18日
⑫ 6-3	『建築書院編輯局撮影 日本家屋写真叢書 門と玄関百種』全 明治44年4月18日
⑬ 1	『LESSON IN FIGURE PAINTING IN WATER COLOURS』
⑬ 2	[織物デザイン帳]
⑬ 3	[雑誌切抜]([「卷三第十七図鳥類応用図案」])
⑬ 4	[雑誌切抜一括]([「Awards in "The Studio" Prize Competitions」])
⑬ 5	[雑誌切抜一括]([「"The Studio" Prize Competitions」])
⑬ 6	[パーチキルビ株式会社製品案内]

計321点

謝辞

昔、大阪大学の学部学生だった頃にお世話になったある学生シンクタンクで、当時東京大学工学部博士課程におられた鈴木博之先生に知遇を得た。その数十年後の2012年、日建設計内で近代建築史的な観点から社史を講義することになった時、東京大学退官後に青山学院大学教授でおられた鈴木博之先生をお訪ねし、その講義原稿について御指導を仰いだ。先生からは「これは是非、本にすべき」という有り難い御助言を得、そこで2015年に上梓したのが「日建設計 115年の生命誌」だった。残念ながら鈴木博之先生は2014年に他界されたが、鈴木博之先生の建築を超える大きな歴史観に本研究は多大な影響を受けている。

「日建設計 115年の生命誌」は、野口孫市に始まる歴史を記すものであったが、日建設計の115年の歴史全体を記述する書物であるため冒頭の野口孫市に多くの頁を割くことはできなかった。上梓を終え改めて野口孫市について調べ始めた時、お声掛け頂いたのが、泉屋博古館による住友家須磨別邸復元模型製作監修の一員に加えてくださることだった。

この監修チームの筆頭を務められた神戸芸術工科大学名誉教授の坂本勝比古先生には、野口孫市について多大なご指導を頂いた。野口孫市は住友の建築家であったため、建築史研究者が野口について調べるためには、住友の歴史に精通することが求められる。坂本勝比古先生は、その住友の歴史にも精通されたうえで、建築家・野口孫市の全体像に近代建築史上初めて光を当てられた。その坂本先生の御研究が本研究の出発点になっており、その学恩には限りないものがある。

本文中で言及したように、野口孫市の長女・房の孫にあたる尾形久美子様、三女・好の子息にあたる濱田信義様より、野口のスケッチブックや日記・写真など貴重な資料が住友史料館に寄贈されたことで本研究が可能となった。特に濱田様は、東京大学工学部建築学科の吉武泰水研究室で学ばれた後、日建設計に入社され建築防災に携わっておられた。この分野では日本の第一人者の一人にもなられている。東京大学大学院で鈴木成文先生に師事した筆者にとっては、2重・3重の先輩にあたる方である。

また住友史料館の末岡照啓副館長をはじめとする研究者の方々、そして泉屋博古館の学芸員研究者の方々のご支援・ご指導にも深く感謝申し上げたい。住友に関するこの二つの歴史研究機関は、泉屋博古館の美術館・博物館機能とともに、住友関連各社のみならず日本の歴史文化研究にとって極めて貴重な存在であると考えている。この二つの研究機関の存在があっただけで本研究が可能となった。

この野口孫市についての論文を執筆することを考えた直接の契機は、神戸芸術工科大学の花田佳明教授であった。花田教授の日建設計時代には同僚として親しくさせて頂いていたが、後に建築教育界に進まれた。2008年に執筆された『建築家・松村正恒に関する研

究 『八幡浜市役所における活動を中心にして』の博士論文を読ませていただき、この論文から研究の視点や研究方法についての多くの示唆を頂戴している。花田先生よりその人脈を通じてご紹介いただいたのが、東京大学大学院工学系研究科建築学専攻の加藤耕一教授であった。加藤先生による、サントリー学芸賞を受賞された『時がつくる建築 リノベーションの西洋建築史』や『ゴシック様式成立史論』をはじめとする著作を通じ、建築の長い歴史的時間のなかでの在り様や、構築術的な「追体験による理解」で建築史を実証的に導き出される研究方法に、本研究は大きな影響を受けている。論文主査として丁寧なご指導をいただいたこと、加藤耕一先生に心より篤く御礼申し上げたい。また論文副査の神戸大学名誉教授の足立裕司先生、東京大学大学院教授の村松伸先生、加藤道夫先生そして千葉学先生からも誠に貴重な御助言を賜り感謝に堪えない。

さらに日建設計の亀井忠夫社長以下役職員の方々の暖かい応援が筆者の論文執筆の精神的な支えとなった。特に、2016年の秋に筆者が企画し中之島図書館で開催した「中之島図書館と野口孫市の建築術」展において、共に協働した日建設計の「チーム孫市」諸氏に改めて感謝の念を申し上げ本論文の締めくくりとしたい。

2019年3月吉日

林 和久